松播暦（時代不詳）といふ人の諸作は巧妙なものである。

二〇二　箏唄　箏は中古の遺製であるが、足利の末に九州地方から再び興つたから、筑紫箏とも稱する。慶長期の三味線の名手八橋檢校が箏をも巧にして、三味線の組唄に倣つて、新に十三曲の組唄を創定したのが、近世の箏唄の初である。その形式は全く三味線の組と同樣に、意味の關係のない小唄六首乃至七首を列ねたものであるが、元來箏は、三味線に比すれば、稍高尙な社會に行はれた爲か、その唄は主として七五の今樣調で、三味の組に比しては、やゝ上品な古風なものである。三味の組は元祿頃に既に流行後れであつたが、箏は上品なる丈に自ら保守的で、今日でもなほ古十三曲が謠はれてゐる。しかし三味と同樣に何等かの統一を求めようとする傾向は、勿論箏唄の間にも存してゐて、元祿期の北島、生田、牧野、倉橋などの檢校の作つた、所謂る中古新曲には、なるべく意味の關係のある歌詞を連ねようとした形迹が著明であつて、近世後期の初に出來たものに至つては、「四季戀」、「四季富士」、「雪月花」、「二長」（鶴龜）の樣に、宛も三味の長唄に似た統一が出來たが、なほ組唄と稱してゐる。

但し、三味の方は組唄時代から七と五とが雜然としたる小唄から出來てゐたので、これを連ねた長唄も、亦七と五とが種種に錯綜した長篇となつたが、箏の方は、最初の組唄の各段が、多く七五四句の今樣調であつたから、後に意味の連絡がある樣になつても、やはり、七五四句を一段とした、分段のある長篇となつた。西洋のスタンザに似た形を存するものは、明治の新體詩以往には、唯箏の新曲あるのみである。

かく、三味線の唄と箏唄とは、當初別樣の發達をなしたものであるが、八橋檢校を初め、箏の名人は多く三味線にも通じてゐたので、三味線の唄はやがて箏にも用ゐられた。だから近世後期になつて出版せられた三味線唄の書には、多く琴曲といふ名が冠せられてゐる。それとともに、次に說かんとする芝居唄や、その他一時の戲作で、三味や箏の宗家を以つて任じてゐる檢校の家の作でない歌曲が澤山に起つて來たので、それ等のものは如何に長いものでも、皆「端唄もの」と稱して長唄とはいはなかつた。そこで長唄とは、宗家の本手物といふ意味に變じて、端唄はこれの對稱となつた。

二〇三　芝居唄の起原　芝居は古は所謂る歌舞伎であつた。慶長期に流行したお國歌舞伎も、小唄を謠ひつゝ舞ふのが主要な藝であつて、滑稽的の物眞似は唯その餘興に過ぎなかつた。當時の歌舞伎唄は、かの念佛踊の遺態として、多少宗敎がゝつたものも混じてゐたが、大體からいふと、普通の小唄と同樣のものであつた。その後若衆歌舞伎があつても、亦歌舞を主としてゐた。かの歌舞伎事始の十六番の舞の唱歌や、降つては寶永の『松の落葉』の踊百番などが、當時の歌謠で、全然抒情的な單純なものである。但し、當初歌舞伎では鼓や笛などを用ゐて、三味線を用ゐなかつたから、三味線の唄とは別途の發達をなしてゐたのである。

二〇四　江戸長唄　然るに、寬永の頃、江戸に下つて猿若座を開いた猿若勘十郎の弟に杵屋勘五郎といふものがあつて、その孫の喜三郎が、寬永十年頃江戸の芝居に三味線の囃子を用ゐ、初めて非常の高評であつたので、爾來芝居にも三味線を用ゐることが流行して、こゝに「杵屋もの」或は江戸長唄といふ一種の三味線唄が、その基礎を得たのである。この三味線を劇場に應用するといふ工夫は、確に遙か以前から操り芝居に三味線が用ゐられてゐたのに倣つたものであらう。これより以後、貞享、元祿の交には、上方の劇場にも、岸野二郎三などを初め、三味線の名家が輩出して、多く作曲をもなしたのであつたが、芝居唄といふと、江戸の杵屋一派が最も勢力があつて、一般に江戸長唄といはれてゐる。

この江戸長唄の大體の構造を見ると、これ亦一種の組唄に類したものが多くて、各種の歌舞を引き續けて演ぜさせるといふ趣向が普通である。今一つの特色は、元來歌舞伎の狂言は、その名の示すが如く、滑稽劇から起つたものであるが爲に、その長唄にも滑稽諧謔が極めて多いことである。今日にも謠はれる草摺引などが、この前期の江戸長唄の代表として見ることが出來よう。

近世後期（元文―慶應）

二〇五　田舍節の流行と小唄の墮落　小唄の形式には投節以後甚しい變遷を認めないが、江戸幕府の基礎が鞏固になつて、交通の便が開けるに從つて、各種の田舍節が江戸を初め都會の地に流行したことは、稍著しい事實である。元祿期にも既に加賀節、長崎節、「下總ほそり」、薩摩節の類も多少行はれたが、後期になつては、ことに各種の田舍節が流行して、就中伊豫節、追分節、潮來節等が、立派な都會の流行唄となつた。

各種の流行唄の中で最も普通に行はれたものは、上方では「よしこの節」江戸では都々一節であらう。「よしこの」は、恐くは謠ふ時の囃子言葉で、その節はやはり投節の名殘であらう。都々一は潮來節から轉化したもので、これ亦太鼓の囃子から來た名稱であらうといはれてゐる、天保時代の都々一坊扇歌の時から、ことに流行し初めたものである。

前期の投節には、なほ多少見るべきものがあつた。それは當時の蕩兒の間にも、稍文字もあり、趣味もあるものゝ作が多かつた爲であらう。後期に至つては、やや文字があつて、所謂る通人を以つて居るものは、流行小唄などを幼稚なりとして、專門家の藝であつた一中、河東、長唄の類に熱中した。從つて小唄の類は一般に墮落してゐる。極めて野卑な趣味或は實感に切なるを尙んで、しかも、拙劣な緣語やひつかけ詞などを濫用してゐるから、天眞爛熳といふ、俗謠唯一の趣味さへも見ることが出來ない。かの子供の手毬唄にすら、「新造禿は例の土器」と謠ふに至つては、殆んど呆れざるを得ないのである。

二〇六　上方唄と箏唄　箏や三味の本曲には、元祿以後さしたる變遷もない。それ等のものは專ら上方に流行したものであるので、文藝の中心が江戸に遷るとともに、所謂上方唄と稱せられて、なほ年々に新らしい曲は出來たが注目すべき變遷はない。その歌曲を集めたものは極めて多いが、『歌曲時習考』が最も多く集めてあるといふ點で、參考になるものである。

箏には、寶暦時代の安村、三橋兩檢校、明和安永の久村、石塚兩檢校の新曲が、組唄の漸く統一せられて來た變遷を示してゐる。爾來組唄の新作は全く絕えて遂に後れて山田、生田の二流には、別に新曲が出來たが、それは全く組唄の派を離れて、上方唄の長唄を稍上品な語で作つた樣なものである。

二〇七　江戸長唄の變遷　前期の後を受けて、演劇が發達するとゝもに、江戸長唄も頗る發達した、今日長唄として謠はれてゐるものは、十の八九は寶暦以後の作曲である。後期には菊之丞、富十郎、などの所作事の名人が輩出したので、寶暦から天明頃までは長唄も亦從つて發達した。「道成寺」や「石橋」等はこの時の名曲である。然るに又忽にして一般の演劇

脚本の傾向と同樣に唯古いものゝみを反覆改作することが、普通になつて、果ては「道成寺」の舞妓を男性にする、「草摺引」の朝比奈三郎を遊女少將に變ずる、「石橋」の地口で「假獅子」を作るといふ風の小細工ばかりで、眞に意味のある名作は出なくなつたが、それにも拘らず、その流行は日毎に廣くなつて、劇塲以外にも謠はれるに至つた。近世の末になつて、劇塲以外の流行が漸く中流以上の社會に及ぶとゝもに、かの滑稽的で、且つ野卑な廓詞の多いのを忌んで、漸次謠曲めいた上品なものを喜ぶといふ傾向が出來て、「勸進帳」や「老松」の樣なものが出來る、終には全く謠曲の文句その儘の「鶴龜」や「橋辨慶」が謠はれるといふ樣になつた。こゝに長唄は上品にはなつたがその特色たる、美しく華やかな、夢の樣な變化の間に恍惚たらしむるといふ趣は全く失はれた。

長唄に三味線が用ゐられた頃に、又操りを專門にしてゐた淨瑠璃が劇塲に應用せられるに至つた。

二〇八　長唄と端物淨瑠璃

元來、江戸長唄は歌舞伎の名殘で、專ら抒情叙景の唄であるから、會話などはない、若しあれば、舞臺の役者に述べさせるのである。だから例へば「勸進帳」の如きものは、長唄のみでは、何の事とも解からない。淨瑠璃は操りにかけるものがあるから、勿論會話が多い。兩者は元來別種のものであつたのである。然るに、淨瑠璃節の一節の歌めいた部分のみを謠ふことが、元祿頃から漸く流行して來たと共に、操り淨瑠璃では義太夫節のみが盛大を極めた結果、他の派の淨瑠璃語りは、お座敷淨瑠璃といふ一段物の素語りや、或は單に唄の樣な一筋を語ることを普通とするに至つた。そこで、元祿の『松の葉』を初め三味線唄の書物にも多く淨瑠璃といふ一項を設けて、半太夫、永閑、土佐、若山、式部等の淨瑠璃の一節を掲げてゐる。これが既に淨瑠璃が、語り物でなくて歌謠の一種と認められた證據で、爾來江戸に行はれた淨瑠璃は多く歌謠に類してゐて、劇塲にも長唄の代りに淨瑠璃を用ゐることが多かつた。後吉住といふ長唄の一派が唄淨瑠璃を初めるに至つて、淨瑠璃と長唄とは殆んど區別のつかぬものとなつた。今日長唄に名高い「賤機帶」は、もと常盤津淨瑠璃、河東淨瑠璃に有名な「助六」も、その初は長唄であつたのもその爲で、大薩摩といふ淨瑠璃節が、杵屋の兼業であるのもその爲である。

この種類の淨瑠璃即ち唄がゝつた端物淨瑠璃では、河東節と常磐津及びその分派が最も盛んであつた。

河東節は江戸半太夫の弟子十寸見（マスミ）河東から出て、純然たる江戸趣味であるが上に、江戸の通人社會に最も流行して、その歌曲も竹婦人呉丈を初め、俳人や戯作者の筆に成つたものがあつて、頗る上品で、誦するに足るものが多い。河東の集には『十寸見要集』、『十山集』『鶯萬葉集』『鶯幸葉集』等の類が尠からず出版せられた。

河東に次いでは一中節と土佐節とが通人間にもて囃されたから、土佐の端物の寄本『大竹集』や、一中の『都羽二重柏子扇』にも、見るべきものが往々ある。一中は京都で起つた流義ではあるが、後江戸に行はれた。土佐は前期には江戸の操芝居に行はれてゐたものだが、後にはこれ亦唄めいたものゝみが行はれた。

常磐津節は一中の流派から出てゐて、その元祖の頃から、演劇に用ゐられ來つた。從つてその分派の、富本、清元も亦江戸長唄とゝもに演劇や酒席などに用ゐられ、漸次唄めいた形のものが多くなつた。これ等にも往々名家の作がある。

二〇九　「めりやす」と歌澤

劇塲で用ゐる獨吟の短かい唄を「めりやす」と稱して、それが後期の初期から劇塲以外にも頗る流行した。亦一種の端唄とも稱すべきもので、江戸長唄の簡單なものである。

近世の末に、又別に、歌澤といふ一派が出て、在來の「めりやす」及び古今の歌詞を多く蒐輯して、新に曲譜を作つた。その開祖は歌澤笹丸、同芝金といつて實は幕府の御家人であつた人と、疊職の虎右衞門といふものとの三人であつて、安政年間にその節が大に流行した。今日、普通に端歌と稱するものは、多くこの歌澤節から出たものであつて、上方の端歌とは全く別稱のものである。

「めりやす」や所謂端歌には、偶々面白いものも混じてはゐるが大體から見ると、天保以後の頽落を明に代表してゐるもので、元祿頃の歌謠はよしや遊廓の痴情を謠つてゐても、なほ熱烈な戀愛や、濶達な風俗の小氣味のよい面影があつたが、この時代のものになると、輕薄な才子の女色を弄んでゐる、厭ふべき風俗が歴々として見える。「よしやわざくれ、色となり戀となる」といふのが元祿の調子で、「柳々でその日を暮す」といふのが、天保の粋人である。

參考書目

通史――三上參次、高津鍬三郎二氏　日本文學史（二卷）

芳賀矢一氏　國文學史十講。國文學歷代選序論。

藤岡作太郎氏　國文學全史（平安朝編既出）。國文學史講話。

大和田建樹氏　日本大文學史。

永井一孝氏　日本文學史（早稻田大學講義錄）

林森太郎氏　同（帝國百科全書）

此外は大抵中學程度の教科用書か、片々たる小著に過ぎない。

特別史――水谷不倒氏編　列傳體小說史

佐々政一氏　連俳小史

大町桂月、武島羽衣、鹽井雨江、三氏　國文學大綱（契沖、眞淵、宣長、既出）

藤井乙男氏　近松門左衞門（近代文學叢書）

沼波瓊音氏　蕉風（同）

西洋人の著書には

Aston, *A History of Japanese Literature* (1899, Goss *Literature of the World* の中に收む。（芝野六助氏の邦譯あり）

赤堀又次郎氏　日本文學者年表（平安朝末期まで）

七　明治時代の文學

序論――思潮概觀

二一〇　緒言

未だ半世紀にも滿たぬ新日本の思想史を回觀して、先づ感ぜられる一事は、それがいかにも多事怱忙を極めて居るといふ事である。

世界史上、吾人の駭心驚目に値ひする文明新興の壯觀偉績は必ずしも少なくない。たゞ最近約半世紀期間の我が國の塲合に於ける如く、しかく短小の年時を以て、しかも能くしかく長大期間の努力に相當すべき複雜多端の人文史的內容を閱歷せるは、全く類例比倫を絕せる文明新興の一大新形式と謂はねばならぬ。所謂明治思想史は、即ち斯くの如き新日本文明發達の自覺史に外ならぬ。

明治思想發程當時の理想的代表を、吾人は畏れ多くもこれを五事の御誓文に於いて仰ぎ認め奉らざるを得ない。明治元年三月今上天皇陛下には億兆臣民に向つて五事の聖詔を下したまはる。

一、廣く會議を興し萬機公論に決すべし。

一、上下心を一にし盛に經綸を行ふべし。

一、官民一途、庶民に至るまで各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。

一、舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。

一、智識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

畏れ多くも「舊來の陋習を破り」と宣したまひ、「智識を世界に求め」と宣したまふ。こゝにこそ明治思想發程當時の理想的代表は仰ぎ認め奉られる。綸言はいとも畏こし。吾人は乃ち去つて直ちに明治思想初期以來の大勢を見よう。

福澤諭吉

二一一　福澤諭吉　新日本文明創業期に於ける最大盡力者の一人は言ふまでもなく福澤諭吉氏である。氏に依つて時代思想が作られたりと言へば固より過言である。併しながら、氏は實に時代の眞要求を體現せる先覺者であつて、氏に依つて時代思想が最も多く發達助成せしめられたりと言ふは決して過言でない。蓋し新日本文明創業期に於ける最先要務は何であるかといふに、取りも直さず「舊來の陋習を破り」「智識を世界に求め」るにある。而して福澤諭吉氏こそはこの大任を全ふすべき命世の才であつたかの如く思はれる。「天は人の上に人を造らず。人の下に人を造らず」といふ文句を劈頭に措ける『學問之スヽメ』は明治四年より發行しはじめて、國內に流布せること三百四十萬冊の多數に達したといふでないか。而して劈頭に措かれたる件の文句はすでに人權思想覺醒の精神を滿藏して居るではないか。或ひは『楠權論』に於いて、楠正成が湊川にて死したるは、權兵衛が褌にて首をくゝれると同じ事なりと論じたる如き、或ひは「忠臣二君に仕へ甲州武士が德川其他に仕へて働きたるも、亦天理人道に戾りたるに非ず。年若き寡婦が落髮して尼寺に入り、亡夫の菩提を弔ふも天理人道なり、再緣して子を生み、よく其子を敎育するも天理人道なり。今の世に兄弟同胞が夫婦たらば、天理人道に戾るならんと雖も、アダムとイブの子供等は誰と緣組したるや。又日本書紀に仁德天皇八田の皇女を皇后とすとあり、然るに皇女は天皇の妹なり。今より思へば不思議なれども、其時代には矢張り天理人道に基きし也」と危言せる如き、或ひはすでに慶應二年に發行せられたる『西洋事情』が廣く朝野の人士に讀まれ、明治政府の新政令にしてこの書の中より胚胎したるもの少なからずと云ふが如き、或ひは明治六年に於いて夙くすでに漢字の節減を唱導し、「今より次第に漢字を廢するの用意專一なるべし、其用意とは文章を書くに、むづかしき漢字をば成るべく用ゐざるよう心掛くることなり。むづかしき字をさへ用ひざれば、漢字の數は二千か三千にて澤山なるべし」と說き、みづから又通俗平明なる實用的文體を工夫せる如き、殆ど、あらゆる舊來の陋習は彼れに依つて破られ、あらゆる新智識は彼れに依つて世界に求められたかの如き觀さへある。

福澤氏の盡力は、經濟政治法律敎育乃至普通道德等、即ち主として實際的文明の輸入建設にむかつた。而して是れ將た新日本文明創業の初期に於いて最も必要缺くべからざるの態度であつた。蓋し、始めて先進異色の西洋文明に包圍せられたる明治當初の日本は、自己保存の急務として、何はさて措き西洋文明に對する保護色を準備せねばならぬ實情にあつた。而してその保護色の準備は、先づ實生活に最も近切な外部的物質的及び常識道德的方面から着手せねばならぬ。殊に舊日本人の最短所たる產業主義的實利的興味及び個人主義的權利的觀念の發達を計らねばならぬ。斯くして福澤氏の態度は俄かに西洋文明に取り圍まれたる新日本をして先づ生存上の適者たらしむる爲めの必須當然の態度であつた。因みに、福澤氏の敎說を以てミル、ベンザム等英國功利論者の說に負ふところありと見るは妨げないが、しかも氏の敎說の中心生命は實に氏獨自の主張信念乃至人生觀に根據して居ることを見そこねてはならぬ。若し夫れ氏が人物の眞價に至つては、生前に於いて充分に評價せらるべく餘りに偉大であつた。却つて最近時に及んで稍々として識者の新たなる注意を喚起し來たらんとしてゐる。明治思想史上に於ける福澤諭吉氏の位置は、未だ容易に過去史中に葬り去らるべきものでない。

二一二　新島襄　併しながら、新日本文明創業期に於ける福澤氏の事業功績は、要するに實際的方面のみの啓導敎化に限られて居つたことを免れない。しかも、精神的文明の輸入建設は、また久しく閑却せらるゝを許さぬ新日本創業時代の已み難き一面の要求であつた。「人はパンのみにて活くるものにあらず」といふ基督敎主義を奉じて明治八年京都に同志社英學校を興こしたる新島襄氏こそは、まさしくこの要求を代表して起てるものであつた。明治思想史上の一大勢力たる基督敎的精神は、氏に培はれたるところ極めて大である。實際的文明方面に結果影響せる福澤氏の力の莫大なるが如く、精神的文明方面に結果影響せる新島氏の力には甚深なるものがある。文藝的乃至哲學的方面の如きも、氏によつて振興せられし基督敎的精神に感化せられたること少々でない。範圍の廣狹こそあれ福澤氏と新島氏とは、共に思想界精神界の人として、創業期新日本文明の全野を兩分しておのがじゝその經營に任せる二大先覺者たるの觀がある。

福澤新島兩氏が實際的心靈的兩極端を代表して、革新家的本領を發揮せる傍らに或ひはスマイルス氏の『西國立志編』『西洋品行論』等を譯述し、或ひは明治六年同人社を興こして直接に後進を敎育し、また或ひは『文學雜誌』を發行し、穩健中正なる學者的態度を以て、新思想新道德の普及に盡力せる中村正直氏があつた。

尙ほ明治三年に尺振八氏が興こせる共立學舍、明治元年に村上英俊氏が起こせる達理堂の如き、前者は英語敎授に兼ねてイギリス思想を鼓吹し、後者は佛語敎授に兼ねてフランス思想を鼓吹せる功が少なくなかつた。

二一三　自由民權主義　若し夫れ明治十五年に公けにせられたる中江篤介氏のルッソーの『民約譯解』、明治十六年に公けにせられたる馬場辰猪氏の『天賦人權論』等に大聲呼號せられたる自由民權主義的佛國思想に至つては夙くすでに明治の當初より胚胎し來たれるものであつて、明治七年に於ける板垣退助、副島種臣、後藤象次郞、江藤新平四參議の民選議院設立の建白、及びこれら諸氏を中心とせる愛國公黨の組織の如き、即ちその顯著なる發現に外ならぬ。愛國公黨の本誓中に「我輩の斯の政府を視ること、斯の人民の爲めに設くる所の政府と看做すより外なかるべし、而して吾黨の目的は唯々斯の人民の通權義理を保全主張し、以て斯の人民をして自主自由獨立不羈の人民たるを得せしむるにあるのみ」とあるが如き、以て徵となすに足る。

二一四　國家主義　而してこの自由民權主義を奉ずるフランス派に反抗せる者は、國家主義を奉ずるドイツ派の學者であつた。加藤弘之氏はその代表者である。氏は後には進化論的立脚地をも併せ採つて自由平等主義を排擊した。『人權新說』の一著は、氏の斯くの如き態度を明示してゐる。ドイツ流の國家主義を奉ずる加藤弘之氏が官學派の代表者であるといふ事も見逃すべからざる一事項である。又自由民權主義反對者には、森有禮、海江田信義、西周等の人々もあつた。而して中江、加藤氏等に代表せらるゝフランス派思想、ドイツ派思想は、福澤、新島氏等に代表せらるゝ英米派思想とは異なつて、主として政治法律方面に直接關係を有し

て居つた事は注意すべきことである。

二一五　歐化主義の四大思潮と其反動　以上叙述論評し來たれる四通りの思潮、即ち福澤氏に代表せらるゝ實利主義的思潮、新島氏に代表せらるゝ基督敎主義的思潮、板垣氏に代表せらるゝ自由民權主義的思潮、加藤氏に代表せらるゝ國家主義的思潮は、取りも直さず新日本文明創業當初に於ける代表的四大思潮に外ならぬものである。而してこれら四大思潮が其相互の間に旗色品質の顯著なる差別乃至反對をもつて居るにも拘はらず、尙は且つ要するに英米佛獨等の思潮をそれ〲に範とせる西洋的思潮乃至歐化主義的思潮たる點に於いて歸一大同して居ることは最も注意すべきところである。而してこの間に國學神道派、西村茂樹氏の弘道會、佛敎徒乃至その他一般守舊派の保守主義的反對運動がなかつたではないが、滔々たる歐化主義的思潮の大勢に比べては、言ふにも足らぬ微弱なものであつた。

斯くの如くにして、一代を擧げて歐化主義の急潮に棹し、明治十六年には假名專用說を主張する「かなのくわい」の興こるあり、その翌年には羅馬字採用論者より成れる羅馬字會の興るあり、又或ひは鹿鳴館に迹りに舞踏會の催ふさるゝあり、束髮洋裝の流行するゝあり、本邦古美術品の捨て賣りせらるゝあり、歐化的精神を滿載せる德富蘇峰氏の『將來の日本』『新日本の青年』が天下青年の響きを返へし來たるあり、明治二十年には平民主義の大旆の下に蘇峰氏はじめ民友社一派の主張機關雜誌『國民の友』が滿帆の歐化的風勢を孕んで現はれ出づるあり、山野河海悉く歐化主義の洪濤纖波を揚ぐるに忙はしいと言つた樣な勢ひであつた。

二一六　國粹保存主義　形勢斯くの如くなれば、反動的現象はまた必ず起こらざるを得ない。明治二十一年に三宅雄次郎、志賀重昂等の諸氏が政敎社を組織して、雜誌『日本人』を機關として國粹保存主義を唱導したのは、即ちその代表的現象と見るべきものであつた。明治十九年より二十年に亙れる井上馨氏の自昇自屈的なる條約改正談判が國民の排外思想の昂騰に遇うて挫折せしめられたるが如き、或ひは明治十八年（十二月）新たに文部大臣に任ぜられたる森有禮氏が國家主義的敎育方針を立てたるが如き、すでに稍々として歐化的大勢に對する反動的機運の動き來れることを示せるものであつた。但だ併しながら所謂歐化的大勢なるものが尙ほ甚だ沒批評的沒自覺的のものたるを免れざりし如く、その反動現象たる所謂國粹保存主義等もまた批評的自覺的態度を去ること頗る遠いものであつた。眞に反動的現象たる以上幾ばくの積極的意義をも藏せざるものであつた。

併しながら、兎も角も彼我文明の對存を意識して、我が國固有の文明をも認識評價せんとしたる點に於て、從來の歐化的大勢に比して、一步を批評的自覺的境域に進め得たものと謂はれる。

二一七　敎育勅語　若し夫れ明治二十二年に於ける帝國憲法の發布に至つては、從來の歐化的經驗を總取して、これを統ぶるに國民的自覺の大精神を以てせるもの、明治思想の發展は茲にその一期を劃したものと謂つてよい。更らに明治二十三年に於ける敎育勅語の發布に至つては、吾人はそこに國民的自覺のいよいよ旺盛なる發動を窺ふことが出來る。斯くして、その代表的現象としては明治二十五年に及んで井上哲次郎氏の論文「敎育と宗敎との衝突」が現はれた。その要領は下の如きものであつた。曰く、一、耶蘇敎は國家の差別を認めず、其の說く所の道德は純然たる出世間の道德なり。是を勅語が忠君愛國を以て國民最高

の德と爲せるに比すれば、全く兩立し難きものなり。二、耶蘇敎は既に出世間の事を主とすれば、常に重きを未來に置き、現世は僅に未來世界の門戶に過ぎずとなす。是れ勅語の精神が全然現世的なると相容れざるなり。三、耶蘇敎說く所の愛は無差別的博愛なり、然るに勅語示す所の愛は差別的の博愛なり。是を以て二者互に衝突するを免れず。四、耶蘇敎の缺點として特に著しきは忠孝を言はざる事なり、啻に言はざるのみならず、往々是に反する敎旨あり。是れ勅語が示す所の克忠克孝の敎と容れざるなりと。これに對する基督敎徒の辯駁の中『國民の友』誌上に現はれた高橋五郎氏の長論文「僞哲學者の大僻論」は最も代表的なものであつた。しかも、海內の敎育者は一齊に井上氏の響きを返へした。これよりして國家主義的敎育論が勃々の勢ひを得來たれるに反比例して、基督敎界は萎微として振はなくなつて來た。世界主義乃至歐化主義の代はりに、國家主義乃至國民的自覺心が、漸く時代の支配思潮たらんとする形勢である。

二一八　日本主義　斯くの如き時代的傾向であつたところへ、偶〻二十七八年の日清戰役が起こつた。すでに發動增進し來たれる國民的意識は、こゝに一大振盪を與へられた。先づその結果として現はれた一現象が明治三十年井上哲次郎、木村鷹太郎、高山林次郎等の諸氏によつて唱導せられた所謂「日本主義」である。併しながら所謂日本主義そのものはその聲容の大なりし如くにその生命內容の深厚長大なものではなかつた。たゞ日清戰役に結果影響せられたる國民的自覺の直接發表たるところにその歷史的意義をもつて居る。

二一九　個人主義的自覺　日清戰役は、明治思想の發展に取つて新たなる一大進轉を促がした力であつた。日清戰役が原因機會となつて、その後我が社會は、所謂物質的方面に於いても、また所謂精神的方面に於いても、各般の機能が著しく活潑になつて來た。思想界全般上に就いて言へば、廣義に謂はゆる個人主義的自覺の機運が動き出して來た。これには西洋文明の一段深か入りした研究紹介が與かつて最も力ある事は疑はれない。從來は要するに未だ西洋文明の意志的乃至知識的方面即ち法政經濟的乃至科學的方面の研究紹介の域を出でなかつたのが、日清戰役になつては、西洋文明の感情的內生活的方面即ち文藝方的面の研究紹介がさかんに着手せられて來た。これに依つて西洋文明の外形皮相ならぬ生命心髓が次第に會得せられて來た。謂はゞ西洋人の人生觀そのもの乃至氣分そのものが色讀心證せられて來た。而して廣義に謂はゆる個人主義的自覺はその必至當然の結果である。三十三四年頃に於ける高山林次郎氏のニーチェ思想宣傳の如きも少なくともその一面に於いてはこの個人主義的自覺の機運の代表的發現のひとつとして算ふべきものである。而して三十七八年の日露戰爭に到るまでの思想界の大勢は、主張的及び研究的の各特殊方面に於いて、緩急醇駁さま〴〵の度合ひと色合ひとを以て、この廣義に謂はゆる個人主義的自覺の機運が著々として步を進め來たつたといふに盡きてゐる。少なくともその大勢の中心生命はこれに外ならなかつたと謂うて差支へない。

二二〇　最近思潮　若し夫れ三十七八年に於ける日露戰役に至つては、明治思想空前の大動力大助勢を提供したものであつて、その結果影響のはたらき及ぶところ、廣さに於いて我が文明の全幅に亙れるは言ふまでもなく、深さに於いてまた實に我が民族性上の根本情調を變改し來たらんとして居る。文藝方面に於ける

所謂自然主義的傾向は、即ちその未熟なる豫表兆象に外ならぬものであつて、思想界全野の上に、乃至推し擴げて言へば文明全般の上に、新日本創業以來、乃至推し延べて言へば建國以來未だ嘗て經驗せざる底の深拔壯大なる革新的運動が惹き起こされんとして居る。而して是れ將た廣義に謂はゆる個人主義的自覺の發達といふこと以外乃至以上のなにものにてもあらぬと謂ふことが出來る。たゞ日露戰役後の思想界は、即がて吾人が生息する現在の思想界に外ならぬが故に、而して凡そ現在の思想界なるものは、即がてまた偏へに希望抱負に生きてゐる思想界に外ならざるべきが故に、吾人はいまこゝにこれに就いて多く記述すべき自由をもたぬ。

最後に吾人は、東京大學（今の東京帝國大學にして明治十年の設立にかゝるもの）及び東京專門學校文學部（今の早稻田大學文學科にして明治二十二年坪內雄藏氏創設にかゝるもの）が、前者は科學哲學を以て、後者は文學を以て、明治思想の發達進步に寄與貢獻し來たれることの甚深莫大なることを特記し置く。

（白松南山）

初期の文學

一　新文明の曙光

三一　ルネィサンスと佛國革命

歐洲大陸の歷史を繙いて其の思想界に遺した大革命の色相を見る時は、政治文藝宗敎道德等のあらゆる方面に亙つて根本的の改革を來たしたイタリーのルネィサンスと、フランスの革命とが最も濃厚である。是等の革命は我等の若い胸に常に新しい響を傳へる。もと是等の革命たるや當に當時の思想界を動かしたのみならず、歷史的に不朽なる一脈の生命を遺したものであつた。慘ましい一面の犧牲はあつたものゝ、其の偉大なる結果は永久普遍に鼓動を傳へて恐らくは滅絕の期もあるまいと思はるゝ。我が明治の維新は素より舞臺が狹少であつた上に、殊に部分的たるの嫌はあつたが、一面の解釋を以てすればルネィサンス及佛國革命の二大試練と時を同うして經驗したものでは無からうか。玆に幾分かの類似を可能とすれば、かのルネィサンスが後のクラシシズムの文學を產み、佛國革命が後のローマンティシズムの文學を興した事に考へて、我が維新の大革命が、果して間接に將た直接に、クラシシズムの如き、ローマンティシズムの如き大文學を產出するの力があつたか何うか。此の一段の考察は多少の興味を豫想して吾人に望むものである。

ルネィサンス（Renaissance）は文藝復興若しくは學藝復興の如く譯せられる。併し其の「新生（ニユーバース）」は精神界物質界のあらゆる部面に亙つた運動であつたが、最も著しい特色は所謂新學問（New learning）である、一種の啓蒙的新文化である。人間が精神的に覺醒し改造せられた結果の新文明である。明治の初年あらゆる舊物を破壞して新文明を建設するに當つて先づ取入れた英國思想は、殊に敎育政治の方面に大なる貢獻をなしたもので、思想の內質から云へばイタリーを輸入したのでは無かつたが、併し其の「新學問」を發見し得た點に於て、當時は日本のルネィサンスと云つて差支ない。續いて西南戰爭の前後、急進的改革論者が輩出して盛に自由思想を鼓吹した內亂時代には、日本人の憧憬は一にフランスに聚つて、殊に佛國革命當時の偉人に向つた。即ち此の政治的過渡の內亂時代を以て、日本のフレンチ、レヴォリューシャンとするも敢て不可は無いだらう。此の小規模の二大革命を同時に經驗した維新の大革命は、果して如何に燦爛たる文學を產出したか。吾人は大體に於て準備期若しくは搖籃期と稱するの外に、著しき文學的革命の無かつたのを憾みとする。革命は時を延して明治十八年に起つたのである。本稿に於て初期と稱したのは即ち十八年以前を總稱したのである。

三二　新日本の建設

新文明の曙光は先づ新日本建設の基礎を開き、又同時に其建設を待つて初めて大なる光輝を發した、新日本の建設は維新前數年間の外交史に依つて開かれた。かの米艦渡來と露兵北侵とは、相前後して日本の內政外交に影響し、其れに對する折衝禦侮の間に國論は尊王佐幕開國鎖國等、一言すれば進取保守の二類に分れて、擾々紛々、國民は其の歸一する處を知らなかつた。勿論其の狼狽と擾亂とは我等の想像以上にあつたので、兒戲に類した防禦の手段、國威の虛勢を張るに汲々とした見苦しさは素より、初め鎖國を主張した幕府（政府）が、途中より寧ろ露國の勢力を藉りて英米を排斥せんとして、手段上の開國黨に豹變したが爲めに、主客轉倒して國論益々混迷を極めたるが如き、後代より見れば一種滑稽の觀はあるものゝ、當時に在つては懸命の大事件、もとより眞面目に狼狽したのである。かゝる退守的消極的開國黨に加へて、民間には積極的開國論者橫井小楠出でゝ輿論を刺戟し、當局には井伊直弼出でゝ亂麻を斷つ底の開國を敢てするに至り、昨の攘夷黨は一變して討幕黨となり、其の間に薩長の勢力を扶植すると共に、遂に王政復古の一段落に達した。即ち明治元年三月には、新たに創業垂統の大綱を示された五事の誓文と、億兆安撫國威宣布の勅文を發布せられ、其の十月、都を東京に遷さるゝに至つて、初めて新日本の基礎は確定したのである。

維新の革命は實に急轉直下の勢であつた。素より如何なる犧牲をも拂ふべき覺悟であつたが、而かし流血悽慘の悲劇を見る事少かつたのは、當時先づ著實穩健の英國的むしろ米國的の實際思想を迎へた爲で、其實際的常識哲學の鼓吹は主として三田の聖人福澤諭吉に依つてせられた。日本の新文明を啓いた一人として福澤諭吉は實に偉大なる文明批評家であつた。氏が後年『福澤全集緒言』の內に著譯書の由來を說いた一文は當時の日本を知ると共に諭吉其人の功業を知るの便がある。其の一節に「日本が舊物破壞新物輸入の大活劇を演じたるは即ち開國四十年のことにして其間の筋書と爲り臺帳と爲り、全國民をして自由改進の舞臺に新樣の舞を舞はしめたるもの多き中に就て、余が著譯書も亦自ら其一部分を占めたりと云ふも敢て妨しからず」と云つたのは決して誇大の言では無い。氏が安政六年初めて米國に渡航し、文久元年に歐洲を歷遊し次いで慶應二年再び米國に見聞するや、歸來其の實際知識を傾倒して『華英通語』『西洋事情』『雷銃操法』『窮理圖解』『世界國盡し』『學問之スヽメ』『文字の敎』『文明論の概略』『民權論』『品行論』等の著譯を公にし、傍ら慶應義塾を開いて新學問の普及に盡力した。然らば諭吉の代表したる

三三　當時の新學問

は何か。一言すれば常識道德の鼓吹、英國的功利主義の輸入であつた。思ふに是れ新日本國家の建設に必要なる第一のステップでは無かつたか。維新の革命が先づ初めに物質文明の整理を要求したのは時勢の然らしめた所で、米艦渡來と露兵北侵との爲めに、島國に蟄居した井蛙的眼光は、俄然碧海の廣漠なるに眩して、彼に對する我、外國に對する自國の位置を知つた、即ち國家的意識を得るに至つた。即ち先づ現

チヨン髷と散髪

在に處して物質的構造の完美を計らねばならぬ、單に名目を整へ、制度を組織するの一方に汲々として、唯だ當面の政治と敎育との二事業に着眼を定めてゐた。從つて、文學美術宗敎倫理など、實際智識に不急なる感情空理の學を排斥し、風俗習慣を一新して凡て舊物を破壞せんとしたのである。一言せば封建制度に對する自由革命である。故に武士道の如きは全く其の權威を失ひ、佛敎神學は共に其の信仰を人心に保つ事が出來なかつた。殊に舊文學舊美術に對する呪咀的破壞の結果、日本の美術が瓦礫の如くに取扱はれて、國寶の多くが外國に散逸した一事は實に寒心すべきほどである。唯だ一に民衆は眼前の秩序を定めんとした、現在主義である、實際主義である、物質主義である。一方文藝的方面に於て、價値判斷なき破壞の行はれたのも自然の理である。斯くの如き時勢に當つて、諭吉の實利功利の說が迎合せられ、氏自からもまた一代の傾向を察して、新文明の指導者たるを得たのは當然の事と云はねばならぬ。

乍併、諭吉は、政治、經濟、軍事、商工の學即ち人間科學に就ての概念を當代に授けたゞけであつて、常識哲學の如きも未だ當代の自覺的根柢を作るには至らなかつた。所謂「人間普通の實學」としての科學的知識を與へ、人間平等の理を說き國家獨立の意義を明にした點はあつたが、未だ個人の人格を養成するの遑がなかつた。其の『學問之スヽメ』に說く所は、即ち常識道德を掲示したもので、人間の同等と國家の同等を說き、一身の獨立は即ち一國の獨立する所以を敎へ、兩者の統一は個人として其の分に安んずるに在りと云ふた主眼は、人間が社會の一員として立つ可き實踐道德の一面を示したゞけで、氏に至つては個人的意識と國家的意識とは同一不二のものであつた。其の平等主義は後年民友社一派の經世的デモクラシーと相照合すべきものであるが、氏の主たる功績は文明批評家たると共に又偉大なる社會敎育者たるにあつたのである。

二二四　精神的敎育者

當時は新學問の時代である、英國的常識道德と、米國的實利科學とを以てしたる我が維新々文明のルネィサンスである。即ち政府に於ても、諸種の訓令を續發して、國民としての分を守らしめ、祭政一致の制度を復して新政府の綱要を定め、小學校、中學校等先づ東京府下に建てられ、昌平校を復興し、一度び閉校したる開成所の學制を改革して從前の蘭學を廢して英佛獨三國の學術を輸入する等、唯一に社會經營の事業を專として世界の大勢と雁行せんとし、物質的生活の改善充實を計るを以て目的とした。この時に當つて民間には慶應義塾の外に、東京小石川なる中村正直の同人社を初め、尺振八及び鳴門次郎吉の英學塾、福地源一郎の佛學塾、村上英俊、箕作秋坪、田中録之助諸氏の英佛塾等の私學塾、及び京都に於ける新島襄の同志社があつた。何れも有爲の靑年子弟を薫育して、時代の要求に應ずべき人材を作つたのであるが、特に中村正直と新島襄の二氏は、個人道德、人格、敎育に着眼した精神的敎育者として、諭吉とともに最も重要な地位を占むべき人である。

二　戯作者の文學

二二五　新舊文明の衝突

凡そ思想界の根本的革命は常に新舊思想の消長を以て形式とする。維新當初の社會的動搖も亦此の兩者の衝突である。殊にチョン髷と散髮と、社袴と洋服と、表面の風俗を異にせる泰西の新文明が初めて我が社會に浸入して來た爲めに到る處諸種の滑稽の演せられたのは云ふ迄もない。而かも未だ之を以て思想上の煩悶となす程に個人の意識も確立してゐない、世は一意に政治、敎育に着眼し、社會改善を專心の事業としてゐたのである。從つて未だ餘裕ある文學美術の鑑賞に傾向しなかつたのは素より當然の事で、唯だ疲勞困憊を極めた忙中の閑を窺んで、卑俗な慰藉を之に求むるに過ぎなかつた。即ち當時の文學は低級文學の、殊に德川期の俗文學の繼承を以ても尙ほ社會の滿足を買ひ得たのである。德川文學の內にも特に化政度の人情本、讀本、滑稽物の摸倣は、時代とは重大なる關係を有せずして奄々の氣息を保つてゐたに過ぎぬ、其の間に、稍々新味を以て獨步の觀のあつたのは

二二六　假名垣魯文

の洒落文學であつた。明治文學の前期は批評のない時代で、從つて讀書社會は絕對的に作者に盲從するに過ぎなかつた。勸懲主義もしくは情事中心なる前期俗文學の繼承摸倣に過ぎなかつた彼等戲作者流が、當時の唯一の文學として滿足せられゐたのは、當時讀者社會より何等の要求をも提出する事が出來ない狀態に在つたからとも言へる。而かも其の多くは時勢と何等の關係もない、滔々として皆馬琴、春水、三馬、一九等の作を摸したものに過ぎなかつた。唯だひとり魯文の洒落文學は其の取材の方面に於て時代的影響を見る事が出來る。而して『西洋膝栗毛』は其の代表作である。

魯文は明治以前『滑稽富士詣』を以て文名を認められてゐた。明治初年の頃には草双紙などの合作をして辛うじて命脈を繫いでゐたのであるが、時代の急轉と共に、機を察するに敏なる氏は、明治三年、『西洋膝栗毛』を出版し、新舊文明の衝突より來たる社會の滑稽的現象を捉へて輕佻な時勢の一部を諷し、頑迷な守舊の野暮人を罵つた。魯文は暫く橫濱に住つて、早くから西洋文明に觸るゝの機會もあり、且つ洋行した友人の直話なども聞いて、兎に角戲作者中の文明通、當時のハイカラであつたので、福澤諭吉の『西洋事情』第一編の出た後、それ等を材料として『新膝栗毛』を書いたものである。元より全體の調子は、一九の『膝栗毛』に倣つたもので、云はゞ明治式の洒落本、中本、と云ふに過ぎぬ。却つて『西洋膝栗毛』の文學的價値は、江戸文學の一進步として見るべきものであらう。思ふに元祿前後より德川期の俗文學が江戸に移るに及んで、當時新開の江戸には都鄙人士の集合より來る滑稽的材料多く、且つ江戸人士の嗜好も自ら洒落や滑稽に傾いてゐたので、黄表紙より洒落本、中本といふ風に追々滑稽文學が發達して來た。其の初め、洒落本の取材方面は主として柳巷花街の情事に在つた爲めに例の寬政二年の洒落本禁制となり、後に一九、三馬が洒落本を復活した中本には、從來の花柳界より轉じて廣く日本全國、及び實際社會に材料を求むるに至つた。それが魯文に至つて、取材の方面は更に擴大して世界的となつた、即ち花柳通は世間通となり、更に轉じて世界通となつたのである。『西洋膝栗毛』は此の意味に於て前代文學と關した歷史的發達の跡を示してゐる。而かも僅かに材料の方面に於ける進步で、敢て魯文の創作力の優秀を證するものでもない、其の諷刺といふも、有目的の深刻な諷刺ではなく、單に讀者の噴飯を目的とした機智と戲謔の連發を以て人氣を博したに過ぎぬ。尙ほ諭吉の『窮理圖解』の字音を眞似た『胡瓜圖解』及び『安愚樂（アグラ）鍋』などが重な作である。

二二七　其他の俗文學

魯文は此等の小說を以て一代の流行兒となつた、猫々道人假名垣魯文の名は一作出づる毎に都鄙に喧傳せられ、商家の子弟など競うて

[illegible]

門人たらん事を欲して何垣何文と稱するを以て自ら誇りとしたほどであつた。其の滑稽趣味は續いて當時の文學雜誌に移植せられ、服部誠一の『東京新誌』（明治九年創刊）、成島柳北の『花月新誌』（明治十年）、野村文夫の『團々珍聞』、笠亭仙果の『月とスッポン』、魯文の『魯文珍報』など、皆滿紙洒落と風流とを以て埋めたものである。服部誠一は又一方の雄で、其の『東京新繁昌記』の如きは皮相文明の缺陷を諷刺し詼謔したもので、時好に投じて大なる成功を收めた。何々繁昌記と題した摸擬作の陸續出版せられたのは之が人氣を分け前せんとしたものである。是等の滑稽物と相並んで、八九年の頃一時に流布したものは、馬琴の讀本より出でた松村操（春輔）の實錄物で、皆維新前後の內亂を材料とした戰爭小說めいたものであつたが文學的價値は殆どないものと云つて可い。其の他梅亭金鵞、條野採菊（山々亭有人）及び萬亭應賀の諸氏は魯文と共に第一流の作者とせられる。併し何れも俗文學の餘喘を保つものに過ぎぬ。此等は化政度文學の內、所謂人情本、合卷物氣質本を摸倣したもので、出版の方法も年二回、正月と盆とに發行した。明治元年正月、合卷物として、魯文の『俗名綴八犬傳』採菊の『柳蔭月朝妻』『鍍黄（ウグ）顯（ヒス）八幡不知』及び種彥の『白縫物語』續篇其他應賀の『釋迦八相倭文庫』續篇、『忠實大議論』『馬鹿につける大妙藥』など皆此の種の草双紙である。後に明治八年、草双紙の畫家落合芳幾が『平假名繪入新聞』を發刊するや、『繪入朝野』『繪入自由』等、所謂繪入新聞の流行となり、婦女童幼を讀者とする各新聞皆當時の戯作者を召致して小說を分載せしめたので、合卷物は一轉して「つゞきもの」となつた。小說の內容も幾分の進步を示して、從來の人情を寫す外に、當時の社會を描かんとした寫實的の風を生じた。作者としては、高畠藍泉（三世種彥）、染崎延房（二世春水）、條野採菊、古川魁雷、伊東專藏、須藤南翠、渡邊義方の諸氏が重なものである。併し、唯だ作意の變化と事件の複雜とを事として、作品として種彥、春水、馬琴等に及ばざるは勿論作者としての見識に至つても亦甚しき墮落であつた。

明治五年四月敎導職に對して政府より三條の敎則を發した、一、敬神愛國の旨を體し、二、天道人道を明かにし、三、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむといふのであつたが、同年七月魯文採菊の兩氏が敎部省の命に依つて自己の意見を建白した文に、

今般著作業道原因委細、次第付可申上旨、御諭示に付、則奉建言候。抑戯作の儀は、虛を主とし實を客とし、或は事跡名籍を假用し、或は歷史を換骨奪胎し、支那の羅貫中李笠翁等の小說、我源氏狹衣其他何物語と唱ふるもの則是なり。……方今之を以て業と仕る者、僅に私共兩人其他兩三名のみ。これ無他、知見日に開け、月に進み、稗史の妄語たるをいやしむ所以と奉存候。……素より戯作は識者に示すに非ず、不識者を導くものに候。尙依然として守株仕候へは、迂遠に陷り曖昧に流るゝのみならず、其弊ついに人を過つに至るべし。依て爾後從來の作風と一變し、乍恐敎則三條の御趣意にもとづき、著作可仕と商議決定仕候。就ては下劣賤業の私共に御座候得共、歌舞伎作者とは自然有別儀に御座候間、右可然御含被成下度候、云々

とある。敎則三條は時の敎導職、俳優及び其の作者に示されたものであつたが、戯作者は自己の辯護かた〴〵に此の奉答文を草したのである。德川時代には戯作者には尙ほ一片の俠骨があつた、明治初年の戯作者は其れに對して甚しき墮落と

云はねばならぬ。斯の如き作者の淺薄なる小說を以て敎育せられ慰藉せられてゐた當時の人心が、如何に荒廢してゐたかは察するに餘りあると思ふ。

二二八　當時の諸文體　福澤諭吉は文明批評家、社會敎育者としてのみならず又文體革新者として文學史上特に多大の功績ある者と云はねばならぬ。維新以前の文體は、文字の爲めに文字を喜びし和文と、調の爲めに調を喜びし漢文及び漢文直譯體と、格式の爲めに格式を喜びし書簡文と、今一つ、戯作者の輕妙と洒落を盡したる小說文と、大凡四五種のものであらう。併し何れも文字形式を主として自己の內容を如何にして發表すべきやとの苦心はなかつた。型に入れる思想傾向を型に入れる文字に移すまでに過ぎなかつた。一種の文章ずれのした文章であつた。之に對して諭吉は、白石鳩巢等和漢學者の折衷文體より、尙ほ一層平明暢達なる普通文體を創始した。其の主旨は『文字の敎』に在る、即ち漢字を制限し、自由平易なる表白、從つて文體を口語に近づかしめ、婦女童幼にも僞らざる自己の思想を傳へ得らるゝやうにする事、之が最後の目的である。徹頭徹尾、氏の實利實學の主義より、達意を旨としたる一種平民的文體は、殊に『學問のスヽメ』に至つて暢達と淡雅とを併せ得るに至り、後年坪內逍遙氏の圓轉滑脫なる文章と相對して盡きざる妙味がある。『世界國盡し』は又平易なる七五調を用ひ、歌唱の間に世界の大勢を會得せしめんとしたもの、是れ亦、後年大和田建樹氏の『鐵道唱歌』と共に唱歌史上の二異彩である。史家の認むる如く、當時の習慣を破つて言文一致の先驅となり、後年の漢字制限、ローマ字採用、「かなの會」などの導火線となつた事は、批評家としての卓見と云はねばならぬ。之に對して中村正直の飜譯文は、一種謹直な漢文直譯體である。當時に至つては未だ此の文體が一般的のものと認められ、政論を中心とした新聞には重に之を採用した。後に歐文直譯體に出づるに及んで、以上三體の調和したる普通文と、言文一致體と、更に雅俗折衷文とが文章界の大勢となつた。

『江湖新聞』の福地櫻痴（源一郞）は當時能文の士とせられた。諭吉の文體と正直の文體との中間を往くものであるが、併し其文章は一體に限られて居なかつた。尙新聞の『藻鹽草』及松村操の馬琴調、魯文、採菊其他繪入新聞の軟文に見えたる春水調、一九調など、一言して俗文調と稱すべきものが、小說界と俗間とに通じた文體であつた。附言せば服部誠一、成島柳北などの漢文的戯文體もある、併し之は唯だ一方の存在たるに止るであらう。

三、政治文學

二二九　新文明の後期　判然と明治初年の新文明を初期後期と劃し得るものでないが、表面に現はれた活動を以て見れば、新文明の曙光は先づ敎育に現はれ、後期は一に政治的活動に在つたものと云へる。從つて初期の小說は魯文一派の戯作小說を初め、軟派の新聞雜誌に見えたる諷世嘲俗の言議皆一種ダイダクティックの調子を帶びて居る。後期になつては新文明は全く政治的色彩を以て掩はれた。社會の現象はもとより、當期の文學は悉く政治文學である。時代が既に熱烈なる政治的革命もしくは動搖の時代であつた、即ち日本のフランス革命の時代である。從つて擧世悉く政治に熱中し他を顧みる遑がない、文學が政治の奴隸となつたのも亦已みがたき必勢であつた。

極端なる西洋主義、歐化主義は、質の善惡を擇ばず悉く彼に範あるものは之を取つて自家のものとせざる可からずとまで心醉した。殊に封建制度の抑壓に對

する自由主義、——漠然たる國家的意識と個人的意識の結合したまゝの革命思想は、社會現象の上に見たる新舊の衝突を超えて、更に政治上に民權自由の論となつた。諭吉の政治學紹介、加藤弘之氏の『眞政大意』正直の譯したミルの『自由論』などを以て政治的概念を得ると共に、何禮之の譯したるモンテスキューの『萬法精理』及び中江兆民の譯したるルーソーの『民約譯解』など、根底的にフランス的急進革命の動機となり、征韓論を中心とした各地の內亂、急進黨、自由黨の運動、各新聞雜誌の政論など、一時は全く政治的渦中の世となつた。乍併たゞ是れ盲目的革命である、封建三百年の壓塞に對する一時の反動的機運として、英米思想より移つて佛國思想を採り入れた結果である。自由民權論、民選議院論、女權擴張論、廢止論、廢帝論、國會開設の建白など、猛烈な勢を以て論議せられ、無賴の壯士輩の如き亦慷慨の志士とせらるゝの有樣であつた。當時の名士にして政事を論じた者は多くは

二三〇　新聞雜誌 に關係してゐた。維新後新聞雜誌の變遷については別項『新聞雜誌變遷史』に其一斑を紹介せられてあるが、前期の戲作小說の流れが多く『東京繪入』『俗名論』『讀賣』『有喜世新聞』に傳はれるに對して政論は、『東京日日』『郵便報知』『朝野』『每日』『曙』の如き所謂大新聞に現はれ、雜誌には『明六雜誌』（明治八年廢刊）『近事評論』『扶桑雜誌』『文明新誌』（八九年頃の出版）など、皆時事の評論を以て名高いものである。明六社は當代の名士學者を網羅して、其の言議むしろ穩健であつたが、文章家として表はれた福地櫻痴、成島柳北、栗本鋤雲、小野梓、馬場辰猪、古澤滋、末松謙澄、藤田茂吉、矢野文雄、末廣重恭の諸氏は時として激越なる論議を試み、當局者より保安條例、出版條例の如きを以て、發行停止、罰金、下獄の壓迫を加へられ、帝都の外に放逐せらるゝの厄に逢つた。時勢が既に政治的革命時代である、當期の文學が遂に政治的臭味を脫し得ざりしは亦已むを得ない結果であらう。斯かる政治小說は凡そ三種に分たれる、其の一は「つゞきもの」として現はれた飜案物、其の二は主として英國の歷史小說の飜譯物、其の三は淺薄なる創作物である。

二三一　飜案物、飜譯物 明治の小說中、當期のものほど社會の實際活動と密接したものは少い。後年の社會小說の要求の如きも作としては格別の物は見えないのであるが、實際社會の活動と密接の關係があつたのは却つて明治前期の政治小說である。之は時勢が單純であつた事と、作者が多く政治界の名士であつた事が主なる原因であらう。それで自由黨の機關であつた『繪入自由新聞』や又『自由の燈』などには、作者の續き物と同じ體裁で、革命小說が表はれた。宮崎夢柳、小室案外堂諸氏の革命小說、虛無小說、花笠文京の强盜小說の如きは、最も時勢と直接の關係あるものと云はねばならぬ。題名すらも『鬼啾々』『夢戀々』『西洋血汐の荒波』と云ふ類ひのもので、盛に自由民權の思想を寓した傾向的、煽動的のものが廣く讀書社會に喜ばれた。之と共に一方には政府が語學奬勵の結果、殊に英語學が盛になり、スコット、ディッケンス等の英國脈の小說が明治十年前後より一部の人々に讀まれるやうになつて、當時の飜譯小說は主としてスコットをはじめ、リットン、ディスラエリ、（ビーコンスフォールド侯）の政治小說、歷史小說に限られてゐた。明治十七年に出た織田純一郎氏の『花柳春話』をはじめ、坪內逍遙氏の『慨世士傳』、關直彥氏の『春鶯囀』、牛山鶴堂の『梅蕾餘薰』、尾崎學堂氏の『經世偉勳』、服部誠一の『二十世紀』など、皆其れである、就中譯文として上乘なるものは藤田鳴鶴の『繫思譚』で、此等の飜譯流行は政治小說以外に在つて、外山博士等の『新體詩抄』（十五年）、逍遙氏の『該撒奇談』（十六年）などを出した。

二三二　政治小說 以上の飜譯は多く時勢の政治的要求に應じたものであつたが、又一方には明治小說の缺陷を滿さんが爲めのものである。當時維新以外の內亂も西南戰爭を以て一段落を告げ、政論も十四年の議會開設の詔勅を以て幾分か緩和さるゝに至つたので、世人も其一部分は『近時評論』一派の過激論よりも、泰西の政治書類の飜譯を耽讀するやうになつた。河津祐之の『佛國革命史』、尾崎行雄氏の『權利提綱』の如き好評書が出づると共に、政界の名は、一方に正面より革命の鼓吹者として立つは徒らに當局者の迫害抑壓に機會を與ふるに過ぎざるを以て、むしろ形を文學に藉りて其の政見を發表せんとしたのである。飜譯者は其の第一軍として現はれた、之が創作として現はれたのは明治二十年の前後、既に此の文學史では後期とすべき時代に這入つてからの事である、明治十八年の坪內逍遙氏の『小說神髓』と翌年の『書生氣質』とは既に小說界の新氣運を示してゐたのであつた。

乍併、國會の開設が事實となるには未だ數年を要した、幾分かは落付を示したものゝ未だ政治的革命の事業は完成したのでは無い。即ち小說界は逍遙氏の寫實小說と平行して尙政治小說に興味を持つてゐたのである。年代は既に後期に屬すとは云へ、此理由を以て創作的なる政治小說の一斑を茲に述ぶるを至當とする。

二三の史家は明治十七年に出た藤田鳴鶴の『文明東漸史』を以て所謂政治小說の創作せられた始めであると云ふ。併し之は決して小說で無い。渡邊華山、高野長英の事蹟を記した著者の文明史論であつて、敍述の方法が多量の同情を加味してゐるといふ丈のもの、併し又一方から云へば、斯の如き書物をさへも小說の一種であると云はねばならぬ程に當期の文學が貧弱であつたと云ふ反證的事實となるかも知れない。併しリットンの『花柳春話』の如き人情を織り込んだ小說に倣つて、純粹に小說と云はるべき政治小說は、作中の人物の如きも、多くは愛國の志士に配するに窈窕たる佳人を以てした一律の趣向以外に出づる事が無い。柴東海散士の『佳人の奇遇』『世路日記』、末廣鐵腸の『雪中梅』『花間鶯』、須藤南翠氏の『綠簑談』『新粧の佳人』、依田百川（學海）氏の『俠美人』など、多くは此の形式のものである。『雪中梅』は明治十九年七月の出版で、序文によれば「當時深く世態に感憤する處あり、情話に託して政治上の有樣を描出する」を以て目的とした。同じ頃の久松狷堂（義典）作『雪月花』亦「小說の體を假用して二三の人物を作爲し、詳に代議の利弊を寫出し、來るべき國會に於て世人の深く戒愼すべき條件を明示」せんとするに在つた、即ち政治家が政見經綸を發表せん爲めのものに過ぎないので、云はゞ壯士小說、演說小說である。尙ほ學堂氏の『新日本』、義典の『南溟偉蹟』、『商海狂瀾』、鳴鶴の『濟民偉業錄』などの經世小說、商業小說の外に、鐵腸の『二十三年未來記』などの未來小說等、純粹の文學的產物としては幼稚淺薄のものに過ぎない。末松謙澄氏譯『谷間の姬百合』、中江兆民の『三醉人經綸問答』を愛讀した社會の好尙は尙ほ此等の政治小說を以て滿足したのである。蘇峰氏は政治小說を以て「俗物の共進會」とし、人物は皆「純然たる政治世界の丹次郎」なりと云ひ、更に「演說小說、壯士小說、慷慨小說、沐猴冠小說」だとまで罵つたが、文學的價値は極めて低いとは云

へ、一括して新文明の開拓に多少の關係を有した點は認めねばならぬ。

四、脚本作者

前期の文學で小說の外に見るべきものは脚本である。廣く演藝界の潮流を見れば、維新當時の盛況は寧ろ當初の俗文學以上に一般的のものであつた。維新の擾亂が稍沈靜するに當つて社會上流の紳士顯官が演藝に多少の注意を拂ふやうになり、俳優脚本家の側に於ても、舊來の婦女幼童を觀客とせし夢幻劇以外に、何等か新思想新要求に應ずべきものを出さうとしてゐた。當時此の潮勢を察して巧みに時尙に投合したものは、

二三三　河竹默阿彌 である。彼は河竹默阿彌、斯波晉輔など多くの稱呼を有てゐた、其はじめ彼は三代目尾上菊五郎と結んで世話物劇を創作した四代目鶴屋南北の跡を受けて、初代市川小團次に依つて世話物劇を專一として維新以前既に隨一の脚本家であつた。彼作家としての生命は嘉永安政の頃から明治二十四五年まで續いたので、前期の傑作は別書の梗概にも述べてある『村井長庵巧破傘（タクミノヤレガサ）』で、又當時に名附けられた白浪作者の特色を表はしてゐる。後小團次の死するや、守田座の改名したる新富座を根據とする團十郎、宗十郎、菊五郎、左團次杯の名優の爲に各種の脚本を作し、殊に維新後、時尙の變化するに從つて、團十郎の爲に時代的の活歷物を作り同時に菊五郎及左團次の爲に寫實的の世話物を供給し、以て當時唯一の立作者と稱せらるゝに至つた。

氏の作意の根本は勸懲的の者多く、江戸趣味を加味し、殊に佛敎的因果風の觀念を以て貫いたものが有名である。『村井長庵』をはじめ『松浦佐用姬石魂錄』『新累解脫物語』『網模樣燈籠菊桐』など、何れも此の類型に在るもの、其他六十種ほどの作中には逍遙氏の所謂「三題噺風」もしくは「寄木細工流」のものが少くない。

默阿彌が明治以後の作には、『霜夜鐘十字辻筮』『古代形新染浴衣』、又は維新事件を筋に取つた『夢物語芦生容畫』、及び白浪作者の面目を極端に露はした『島衛（シマチドリ）月白浪』などがある。概して云へば、舞臺の効果を主として變化を多樣にした丈のあて物に過ぎなかつたが、好く社會の好尙と俳優の適否を察して書き下した爲めに、一般的の興味を以て長く歡迎されたのである。

五、社會批評家其他

二三四　社會批評家 とは英語のエッセイストを假譯したもの、或は文明批評家と云つても可い。前期の文學には文藝批評もしくは哲學的の人生批評などは無かつたので、言論界では實際的な社會批評家あるのみである。福澤諭吉は前にも言つた通り偉大なる文明批評家として、特に英米的思想を普及せしめた人であるが、當時の新聞記者の如きは多く一種の社會批評家と云つて可い。福地櫻痴、成島柳北、栗本鋤雲の諸氏、『朝野新聞』の末廣鐵腸、尾崎學堂、犬養木堂、『報知新聞』の矢野龍溪、藤田鳴鶴、箕浦勝人、『日々新聞』の末松謙澄、朝比奈知泉、又『毎日新聞』の島田沼南、肥塚龍の諸氏は皆言論界の雄である。併し、多くは單に諷刺家、政論家などに過ぎないのが多いが、經濟雜誌社を經營した田口鼎軒、『天賦人權論』の著者馬場辰猪の如きは、稍ゝ社會批評家たるに近い。要するに諭吉を除いては直ちに後期の初頭に當つて又偉大なる文明批評家を得たが、其れまでは唯だ政治的渦中に在つて言論界に活動した人々を以て缺陷を補つてゐる。各個の活動は、既に別所に書いてあるから茲には繰返さない。

二三五　國學、漢學、和歌、俳句 其

他前期の文學的產物として擧ぐべきは和漢の舊派詩文であるが、是等は後期より特に存在を明かにしたものか、又後期と關聯して一言すべきほどのものと思ふが故に茲に省略する。

要するに明治二十年の頃迄は或る一部の社會を除いては文學に對する鑑賞を發す程に人間の餘裕が無かつた、のみならず彼等の眼界は一に現在主義に跼蹐して、社會の實利と密接の關係なき而かも精神的養料たる文學を以て、一個の事業せめては一個の娛樂と見るほどの理解が無かつたのである。

（服部嘉香）

注意

明治文學後期、即ち明治二十年期より四十年期に至る文學の發展は別項日本現代文學の條に補說した。

支那文學

上代―中世（宋以前）

序論

二三六　支那文學の特質 漢人種は、何處から今の支那本部に來たのであるか、其の文明の源泉は、何處に發したのであるかの問題は、他の古物學、比較言語學等の助を假つて、之れを決せなくてはならぬが、今此では多く言ふ必要がない。唯支那文學は、漢人種が黃河流域を占有した後に起つたことを言へば、それで事足るのである。

學術思想の起源及びその發達が歷史上の情勢と常に密接の關係をなすのは、もとより當然で、何國の文學でも、其の社會の事情を離れて孤行するものはない。支那のも矢張りそれで、その人種が初め支那の西北部を占有して、黃河流域に發展するまでには、種々な困難と障礙とに遭遇した。殊に西北地方の氣候は嚴寒で、地味は磽瘠であるから、其の自然の情勢は、日常の生活問題の爲めに、屑々勞苦して、其他に及ぶの暇がなかつた。そこで其の思想も、事々物々、實際から着想したので、專ら經驗を重じて、尊祖保守の慣習を生じた。その祭天の古俗も、矢張り、其の自然の情形が、灝倖であつたから、天を祭りて稷禾の繁茂を祈つたのである。要は同一根源の思想から出た。記に「萬物本乎天、人本乎祖」と云つてあるは、即ちそれである。

君主に對する思想も、粗ゝ同樣で、君主は天の命を受けて君主となり、君主は天に代つて人民を治むと云ふのである。而してその天の命を受け、天に代るの標準は、德の有無、即ち民望を得ると否とに歸したのであるが、君位世襲の習慣が起つてから、遂に君主專制の政體を形成した。それでも歷代の史實は、その革命思想、即ち天の命を受け、天に代るの思想が、遺傳性となつて居る事を證據立てゝ居る。

三代以前、即ち支那上代の思想は、右の次第であつたので、孔子が理想とした三代の文物は、それ等思想の融合せられたので、その思想の發動せるのが、即ち儒敎主義である。されば所謂儒敎主義なるものが、實際的、保守的であつて、秩序階級を重んじ、力行勉强を主とし、天を畏れ祖を尊び、政法を論じ排外を言ふ

のは、皆此の古代思想の遺傳せられたのである。之れに反して、老莊諸子が、無爲を說き、自然を說き、平等を崇ひ、虛想に耽り、謙弱を言ひ、哲理を講じて、殆んど出世間的態度を取つたのは、儒敎家等が終身栖々として、世事に勤勞憂念したのとは、自らその根本思想に於て異つて居た。何れの世でも、高士學人がないことはない。時勢の面白からぬ時に於ては、山阿水涯に肥遯して、世を超へ俗を離れて、其理想に向つて勇往直進して、其の高志を恣にするのが高士學人の常である。老莊諸子の學術思想も、亦それ等の根源から出たのである。此種の思想が、春秋戰國の衰亂時代に興つたのは、畢竟時勢の烘爐に鼓盪せられて、此の一種の高士學者を鑄造したので、後世より天國視する三代の盛時に於ても、尙ほ許由、巢父、卞隨、務光、伯夷、叔齊の徒が、各々其の理想を行つたのと同樣で、世を拗ね者の骨頭は、いつもこんなものである。

然るに又南方地方の情形は、氣候暖和で、土地は饒腴であるので、日常の計に汲々たらずとも、飽食暖衣することが出來て、北人の世事に憂勤するのを視て、馬鹿らしき感がする。初めには世を輕んじ、次で世を玩び、又世を厭ふやうになるのは、順序であらう。況んや北人傳來の學術思想は、南方荊楚の地方に普及せず。北人より南人を視れば、野蠻の感がする。南人が北方の學術思想に對して、不滿の意を懷いたも無理ならぬことである。恰も好し老莊の學術思想は、南方の情勢嗜好に適合した。そこで孔子が楚に往つた時に、接輿に歌はれ、丈人に揶揄され、長沮桀溺に笑はれたのである。孔子は聖人であつたけれども、世を遁れて、高蹈せる隱君子等には、協はなかつた。それは南北學術思想の異同に起源したよりも、地方情勢の異同に由つたのである。何となれば老子は陳の苦縣の人で、其の地は、今の河南省歸德府鹿邑縣の東方七十淸里に當る。莊子も宋の蒙の人であつた。其の地は、今の河南歸德府の南二十五淸里に當れば、老莊共に北人で、亦同鄕人であつた。列子も鄭人で、其の地は、今の河南省開封府中牟縣の西北七淸里に當れば、亦黃河流域の人であつた。されば、道家は、決して南方に起つた學派でないことが、知らるゝであらう。

實際的なる儒敎、哲理的なる道敎を主として、他のあらゆる學術思想は融會せられて、更らにより豐富なる思想を附與されたのが、漢魏六朝以來の文學界で、文學の發達は、此の際から更らに一大長足をなしたのである。換言すれば、戰國以前は後世の文學に向つて、多大の材料を寄與したのであるが、それを使用して種々なる形式に工作したのは、漢魏以來である。漢魏の辭賦、唐宋の詩文、金元の戲曲の如き、卽ちその一二である。されど儒敎主義の感化は、歷代の君主が、治國の方便として之を崇尙普及せしめた結果、その辭賦たり、詩文たり、詞曲たるに拘らず、いづれにもその影響を受けて居る。儒敎主敎の是非は、別問題として、只支那文學が、天地の秘奧を披き、人心の微細を穿ち、天堂地獄、善神惡魔を掀飜し、風雷を鼓盪し、獅象を驅逐する底の大構想、大傑作を有せないのは、種々の原因あるであらうが、少くとも儒敎主義積漸の拘束も、その一に居るのであるまいか。

且つ其の文學者は多くは專制政府の官吏であつて、その官吏に登庸さるゝには、歷代概ね選擧法があつた。殊に唐宋以來は、一種の試驗法を用ゐたので、苟くも官吏希望者である以上は、是非ともその拘束の下にこの關門を通過せざるを得ず。其の間に於て、已に一種の官吏的性質が

養成されて、其の地位を得るのである。而して其の學術思想が、一方に於て文學に發現するのであれば、其の文學の多くが、儒敎主義の影響以外に、又一種の官吏的臭味を帶有して居る。且つ專制王朝の常として、その布告命令から、頌德記功の作に至るまで、務めて莊重謹嚴な文辭を用ゐた。その影響は、多く誇張的文學を出すことになつた。支那の多くの文學者が、文章を以て遊戲の代用として、その錦心繡腸を搾つて、技巧を競ふのも、亦それ等の關係に由るのである。

之れを要するに、殆んど三千年前から今に至るまで、接續して、一種の象形文字を使用して、その思想感情を現はし、又それに由つて、その國民の心性生活を窺ふことが出來る支那文學は、世界文學中の一異彩と云はねばならぬ。

一　春秋以前の文學

二三七　書契の起源　何れの國に於ても、太古の紀年は、頗る茫漠で、殆んど其の精確を認むることが困難である。支那も同樣であるが、その傳說に據れば、約三千年前に出でた君主、黃帝の史官に、蒼頡と云ふ者があつたが、始めて文字を構成した。その形狀の詳なることは、殆んど今では分らないが、多くは象形文字であつたらしい。支那に於ける書契の起源は此の時代であつたであらう。その頃は已に人文の發達も見えて、衣服、家屋、耕作、互市等の事も起つたと云へば、其の必要に應じて、思想感情を傳播さするに適當な記號文字の發明なくてはならぬ。蒼頡の文字は、恰もその必要の爲めに制作せられたのであらう。

文字の數はもとより一時一代に、多數の製造があつたではない、次第に增加せられたのである事は、字の意義が孳生を意味して居るのでも明白である。周初に及んでは、文字を知ることが、敎育の一つとなつて來た。それに據れば、文字の構成に、象形、會意、指事、轉注、假借、形聲の六法あつたことが『周禮』の鄭注に見えて居る。爾來時代と共に其の數は增加され、其の體は變遷したが、要するに文字構造の基礎は、物形に象つたのであれば、或る意味から云へば、繪畫と同一の性質を備へたものが多い。此の見地から觀察すれば、支那文學は、亦一種の繪畫の聯結せられたる大繪畫であると云つてもよい。

二三八　逸詩及び古典　各國の文學、概して韻文まづ起つて、散文これに次いで發達するのが順序であるが、支那現存の古代典籍を以て其の信を稽へば、殆んどこれに反するのである。それのみではない、何れの國でも、口碑は太古の傳說を保存せるのに、支那では已に早き以前に於て、その傳說の多くを失つた。されば現に帝王世紀に載する所の「擊壤歌」、尙書大傳の「卿雲歌」の如きも、唐虞時代の作と稱すれども、その用字は古色を帶有して居ない。或は唐虞時代に此種の意味に於ける歌謠があつたのを、後人が文字を塡充した結果、餘り之れを平易に失つたのであるかも知れない。要するに其の信を認むるには、頗る困難である。

上古歌謠の今に存して、確實なのは詩の『商頌』五篇である。皆殷代の作で、四言句から組立てらる。詩の一書は、殷周時代の詩を編成したもので、その編修者は、孔子である。もと三百十一篇であつたのが、現存するものは三百五篇で、內六篇は失はれたのである。古代には采詩の官があつて、地方の歌謠を采輯して、その民俗を察した。孔子の時に采輯し置かれた詩の數は、頗る多かつたのを、孔子がその敎育の目的に適合するもの三百十一詩を、特に編成して後世に遺こしたの

で、即ち今の『毛詩』がそれである。

『毛詩』の『商頌』よりも古き時代の散文に、『二典』『三謨』『禹貢』等の文がある、いづれも尙書の篇目で、夏史の筆に成つたのである。尙書も孔子が編纂した書籍で、尙書とは上代の典籍の意である。孔子がそれを編纂した目的は、その布告命令を以て、後世の法とせんが爲めで、其篇數はもと百篇あつたのが、秦火の際に、殆んど其の半を亡失して、大に其の內容の混亂を來したが、矢張りそれにも係らず、上代の政風を察し、又その文辭を窺ふには、この書以外に據るべきものがないから、最も珍重するの價値がある。

詩書の外では『易』『禮』『春秋』等、いづれも儒家の經典であつて、以上の五書を合せて、五經と稱するのであるが、文學上より觀れば、易禮の文辭は簡古雅奧な處があるが、春秋の一書は、孔子が一大苦心を以て筆削したのである割合に、文學上には大なる價値を認むることが出來ない。尤も孔子の意も、別に一種の主張を有したので、文學上の筆削を加へたのでないことは勿論である。『春秋』に三傳あつて、その意義を發揮したのであるが、下章に於て別に叙述するであらう。

二　春秋戰國の文學

二三九　總論　「周監十二代、郁々乎文哉」と孔子が讃嘆した制度典章も、年經れば頽廢し、周末の衰亂は、最早禮義三百威儀三千の昔に返す由もなく、その中央集權は解體し、その門閥制度は打破されて、世はまさに群雄割據、生存競爭劇甚の時代となつた。而して其の社會變動の影響は直ちに言論の自由となり、思想の活動となつて、是迄貴族上流の社會に獨占せられてゐた學術は、民間人士の手に移つて、講學の風が盛んに行はれた。而して當時戰役交涉等の事件の爲め、列國間に於ける交通頻繁であつたから、それ等學術の傳播も速かであつた。

且つ列國對峙して、互ひにその生存を競つたのであるから、智力藝能ある士は、最も珍重せられた。そこで苟も志を當世に得たいと思つた者は、誰れも學術を研磨して、列國に登用を求めたのである。列國間に生存競爭が劇しかつたやうに、思想學術界に於ても、その競爭は劇甚であつた。周末の學術思想界に、流派の別を生じたのは、辯難攻擊、競爭軋轢の結果である。而して文學の發達は、實にその間から興つた。

戰國時代は、實に支那の思想言論界に於て、最も活動を極め、又最も自由を極めた時代であつたが、その發端は、實に春秋時代からである。春秋時代では、如何に周室が衰微したといつても、矢張り名義上の君主であつて、齊桓晉文の力を以てしても、それを廢して自ら代るの勇氣を有しなかつた。矢張り禮を尊び信を重んずる風も行はれた。會同聘享の事もあつた。宴會に詩を賦して志を示せるが如き、辭令を婉曲にして、折衝禦侮を計りしが如き、殆んど當時普通の情景であつた、そこで其の文學は溫厚和雅であつて、從容安詳の態度が現はれて居る。憂世惻怛の言は多かつたが、沈痛悲憤、激越蒼涼の文は少ない、何處にか三代揖讓の風が遺つて居た。

それが戰國の時代となつては、倫理も禮義もあつたものでない、親を殺し、君主を殺し、人の財寶を奪ひ、人の國を滅すことを何とも思はず。社會の情形が已に此の如き次第であれば、その言語文辭の上に發露せるものも、風雨亂飛して、變幻極りなき光景を呈して居る。人事の複雜したゞけ、その思想文辭も變化があつて異彩を放つて居る、されば周末文學のその盛を致したのは、戰國爭亂の賜

ものと云つも好い。秦が天下を一統してから、政略上より起見した、所謂焚書坑儒の事件が起つた。續いて漢楚の爭となつて、多くの文籍が燒滅せられた。此際に於て三代先秦の書籍の流亡したのは數多であつて、先秦時代に發達した文學も、頓に一大挫折を受けたのである。

二四〇　諸子の流別　周末は諸子全盛時代でこれを諸子時代と云つても好い。諸子とは清儒が云つたやうに、六經以外に自家の說を立つるものゝ總稱で、その流派も頗る多かつたが、何れも當時の社會の情形に由つて起見したので、純然たる文學として之れを視るには、稍々不恰好であるが、單にその文辭の上より之れを評論すれば、最もその技倆の非凡なるを認めねばならぬ。殊に後世起つた古文辭の一派は、全くこの先秦の文辭を標本としたので、周末諸子の影響といつても好い。

前にも云つたやうに、周末諸家の思想言論は、春秋時代に發端したのであるが、その重なるは。儒、道、墨、法、名、兵、雜等の諸家、及び賦家である。中に就きても儒道の二家は、最もその重なるもので、爾餘諸子は、少くとも二家より派別せられなかつたのはない。普通に文學史家が云ふやうに、當時南北地方情態の異同からして、その思想に相異の點があつた。北人がその土地の苦寒磽瘠と戰つて、辛うじて生存を謀つたのは、事々物々實際を尙んで、實驗を重んじ、それが祖先崇拜となり、保守排外の情念となり、天を畏れ法を守る精神となつた。儒家の思想は即ちそれで、儒學が北方から興つて、齊魯の鄕に盛行したのも、その爲めである。之れに反して、南方は氣候溫暖で、日常の生活に於て、さまでの困難を見ざるより、自然に實際社會に屑々とせず、禮法を輕んじ、世を玩び俗を輕んずるの風があり、且つその文化の發達も、北方中原地方よりも後れて遲かつたので、彼等よりつねに野蠻として取扱はれ、勢ひ北方の學術思想に對しては、不滿を抱きて、之れを破壞排擊せんとする傾向があつた。南方思想なるものは、これに過ぎない。道家の說が、適々南方思想と合する所があるから、姑らくこれを南方思想と視ても差支ないが、若し單に地方の關係から云つたならば、老莊諸子は、決して南人ではなかつた。

二四一　道家と儒家——孔老及び其後繼者　道家の開山は老子で、儒家の先師は孔子である。孔子は治國平天下の理想を懷いて、他迄變亂の世を變じて治平とせんとしたが、老子は無爲謙弱を主義とした。老子の說は『老子道德經』に由つて其思想を了解することが出來る。傳ふる所では、その自撰に係るといへど、信疑相半ばす。只其の文辭は簡古で含蓄がある。孔子の言行錄である『論語』の文が溫潤で含蓄あるのと、異曲同工と云はねばならぬ。孔子は『詩、書、易、禮、春秋』等に手を着けて、それ等を整頓したが、自ら文を屬して著したものはない。『春秋』はその作に係るといへど、孔子は魯史の文に由つて、筆削を加へて、その主義を寓したに過ぎない。文學者としての孔子の地位は、認むるに困難である。只前述のやうに、古典を整頓して、後に遺こした功績は、大なるものである。

孔子の門人で、重なる人が七十餘人あつたが、その著作は幾らもない、數傳の後に、荀況と孟軻があつて、いづれも著作をなした。即ち『荀子』と『孟子』の二書である。荀子の文は雅麗ではあるが少し冗長蕪雜の處が見ゆる、孟子の文は、簡潔明快であるが、溫雅な點は缺けて居る。若し儒家としての學力から云へば、孟子は荀子に及ばないが、才氣煥麗なのは荀子遙かに孟子の下風に立つのである。兩

人とも戰國の際に於ける儒家中の錚々たるもので、文學上の地位から云つても、矢張り一流の階級に安置せらるべきものである。

道家では列禦寇と莊周が、戰國道家の鉅子である。列禦寇の事蹟は十分には知らない、其の書に『列子』があるが、それも、自撰ではあるまいといふ說が多い。莊周には『莊子』がある。莊子も自ら著作した文辭と、門人若しくは後人の著作したのが、混雜して居るやうである。いづれも老子の主旨を敷衍推廣したので、孔門で荀孟の二子あつた樣に、老子の敎旨に光輝を添えた。

二四二　墨家と法家　墨家の開祖は墨翟で、其の書に『墨子』がある。文辭は他の諸子の文の縱橫なるに比すれば、頗る平易であるが、其の弊は繁重雜沓である。法家では管仲の書に『管子』商鞅に『商子』韓非に『韓非子』がある。管仲は孔子より先きに出た人で、齊の政治家である。商鞅は衞の庶公子で秦に仕へた人である。管商二子の書は、ともに自撰ではあるまいが、文辭は戰國時代特有の剽勁の氣がある。韓非子の文は、非の自撰で、文氣跌宕、波瀾起伏して、章句起結の法、みな森嚴を極めて居る。戰國遂意の文で規則嚴重であるのは、韓非の文が第一であらう。唯だ其の缺點は、千篇一律で、變化に乏しい事である。古人も此點については頗る惜んで居る。

二四三　名家と兵家　名家の學は、名に徇て實を責むるを主とするので、法家に近い。公孫龍、尹文等が即ちそれである。公孫龍の書は、現存するものが六篇ある。其文は博辯雄贍で、最も戰國人の口吻を想見するに足るものがある。兵家では孫武に『孫子』吳起に『吳子』尉繚に『尉繚子』がある。孫子の文は峻潔で議論に曲折がある。頼山陽は評して「莊妙於用虛、左妙於用實、兼之者孫子之論兵也」と云つた戰國有數の文字である。

二四四　雜家――呂氏春秋　雜家とは上記諸家の間に出入して、特別の家法なきもので、鄧折、愼到、鶡冠、鬼谷等の如き、即ちそれである。其書はいづれも其人の自撰に係るや否や、信疑相半するも、文辭は共に十分把玩するの價値がある。其他にも尙ほ數人あつたが秦の呂不韋が、多くの賓客を集めて、其手を假つて、儒墨名法九流諸家と融會して『呂氏春秋』を作つたのは、實に雜家の大觀で、後世類書の根原と云つても好い。

二四五　賦家――屈原　玆に又純文學の作品として、特記せざるべからざる一家がある、それは賦家である。賦家は屈原、字は平と云つた、楚の同姓から始まつた。平は博聞强記で、辭令に巧みに、且つ忠愛の人であつたが、時勢を憂ひ、國家の沈淪せんとするを歎き、又た其の身の過ちなくして排斥せられたるを悲しむの極、遂に水死した。其の楚人であつて、用語に楚の方言を雜へたので、其賦を『楚辭』ともいふ。其の『離騷』『九歌』『天問』『九章』『遠游』『卜居』『漁父』等の作、いづれも多くは寓言を用て比興し、又譬諭を設けて思ふ所を露はしたが、其の詞は溫雅で、文采の美を極めた。而して忠貞の志、惓々の思が、紙上に迸つて、大に人の同情を惹いたのである。平の弟子に宋玉といふがあつた。これも楚人で、『九辨』『招魂』等の諸篇を作つたが、皆その師を悲んで作つたものである。楚辭は此の師弟兩人の間から起つたが、漢代になつて、賈誼、淮南、劉向等が、各々倣つた。それを王逸が集めて章句を作つたのが、今の『楚辭』の通行本である。

これを要するに、周末諸子の學術は、春秋時代に端を發して、戰國に至つて、全く流派の別を成した。而して當初に於ける南北思想の區別、劃然として居たものも、交通來往の頻繁であつたと、學說傳播の速かであつたのとで、戰國の末頃になつては、殆んど融合して、亦六王畢つて四海一となるの觀を呈した。前にも云つたやうに、戰國諸子は、屈宋諸人を除いては、いづれも純然たる文學者とは云はれないが、單にその文章を以てこれを評すれば、老、墨、孟、荀、列、莊、商、韓諸子の如き、亦皆千古の文豪であつたと云はざるを得ない。

二四六　歷史文學春秋三傳　前章『春秋』に三傳ある事を云つた。三傳とは、左氏、穀梁、公羊の三傳である。『左氏傳』は普通に左丘明の撰述とせられてある。丘明は孔子に親炙した一人で、孔子が一種の意見を立てゝ春秋を筆削したが、その大義のある所は、容易に窺ふことが困難である。それで左氏は春秋筆削の跡につき、その本事を敍述して、大義を發揮せんとしたのであるが、敍事簡潔明晰なるが上に、其の辭令婉雅なことゝ云つたら、誠に敍事文の妙を極めて居ると云つて好い。丘明の意は、春秋の大義を發揮するが目的であつたらうが、結果は史傳となつて居る。而してその文辭の巧妙なる處から、吾人は歷史文學として、それを歡迎するのである。『穀梁傳』は穀梁俶が撰じたもので、文辭は左氏だけないが、その勁健な點は、何處までも先秦の特色が見える。『公羊傳』は漢代の公羊壽が撰したものである。左穀の外に

二四七　國語、國策　の二書がある。『國語』は「春秋の外傳」と云はれて、之も左氏が筆定したのであらうとの說がある。『左傳』は多く事件の始終本末を敍するに力を用ゐたが、『國語』は重もに個人の言語を記したのである。文辭も穩雅ではあるが、左氏の俊爽なるには及ばない。『國策』は筆述者の名は知れないが、當時の健筆家が、諸國の記錄に據つて抄錄したのであらう。今の通行本は漢代に劉向が校定したのである。其文辭は、峥嶸にして奇氣に富んで、筆勢縱橫を極めて居るが、其弊は餘り縱橫に過ぎた事で、時としては當時の速記錄であるかの樣な感がする。蘇老泉父子が、時勢を揣摩するの文は『國策』に原本したのであらう。

『晏子春秋』も一種の傳記體の書であるが其文辭は質直で、其の意は、時君を忠諫するのが多い。漢代に於ける『韓詩外傳』『新序』『說苑』等の書とやゝ其の趣を同うするのである。

三　漢代の文學

二四八　總論　漢代とは史家が普通に稱する前後兩漢で、其の間約四百餘年間、前漢は高祖が創業の君主で、後漢は光武が中興の君主である。此の二大英主が施設した政策は、疑ひもなくその時代精神の要部を形成した。而して後世子孫は、それを繼承して歲月を經過した間に、種々なる變遷と情弊とを生じたに違いないが、文學の趨向も、それに伴つて變遷推移したのである。

春秋戰國の際は、獨り政治界の活動のみでなく、文學技術に於ても、あらゆる方面の活動を見たが、已に秦の統一となり、楚漢の起仆となつた頃には、策士も豪傑も氣力消磨して、時世の平和を希望した。漢初の情況は、正さにそれであつた。それに一方では、久しく戰禍に苦んだ學者等も、徐々頭を擡げ來つて、古學說を唱道し初めたが、先づ最初は此等の學者の手を假りて、法律制度を拵えた位で、まだ中々興學立敎の事におよぶ暇がないばかりでなく、戰亂、殊に秦火の後を承けたので、圖書は散亡し、學者も十分存在せなかつた。漢興つて後、十二年目に、始めて秦代より行はれた挾書の律を除いた位で、それからやう〳〵普通人民も書籍を手にするやうになつた。孝文

孝景の頃になつて、人民生活の程度もやゝ平常に復し挾書律が廢せられた後の思想界も、やゝ活氣を生じて來たが、その頃尤も流行したのは黃老刑名の學で、漢家の政策は、その學術を必要としたからである。孝武の世となつて、人民の生活程度は益々高まり、驕奢の風も次第に生じたが、學術の興起するに最も適當の時期であつたのに、孝武も學術を奬勵し、其の當局大臣中にも、儒學を好んだものがあつたのと、誇大的雄主の孝武は、此の時機を用ゐて、黃老思想に由つて立てられた消極政策を一變して、積極なる儒教主義を皷吹したのとで、端なく儒教復興の氣運を成した。

そこで公孫弘、董仲舒等の儒者が、重用せられた。董の意見では、當時行はれた黃老、其他の思想を黜けて、儒學一統の天下を出現せしめんとするのであつた。それを孝武は採用したがその意では統一ある堅固の國家を建立せんとする方便としたのである。兩者の意が一致して、遂に漢代儒學の基礎が築かれたが、異學禁制の結果は、外來の刺戟物がなくなつたので、比較、撰擇、競爭等がなく、次第に活動の氣勢を失ふやうになつた。漢代に於て、根柢深き、思想雄大な著述が少かつたのは、その爲めであらう。併し又一方に於て、漢儒は兀々として、秦火焚矩後に於ける散亡書籍の拾收に對して、周到なる注意を拂つたのと、その傳來を重んじたので、その注疏訓詁は、たとひ繁瑣の嫌なきでもないが、大に後世の爲めには利益を與へた。所謂漢唐注疏の學、又近くは淸朝考据の學が、興つたのは漢儒が周到なる注意とその傳來を重んじた結果である。

然るに純文學の方面では、周代の詩歌、楚辭の兩派は、各自分流して、時日を經過した間に、その姿體風神もやう〱變形して、此の時代に至つて、周代通行の四言詩は五言となり、楚辭の一體は辭賦となつた。漢家の帝王が、土木の好みを盡し、驕奢の生活を營み初めた頃には、その臺池園囿珍禽奇木の情形を寫して、その精神上の慾望を滿たすべき必要が興つた。鋪叙敷陳は辭賦の本色ではあつたが、儒學思想の復興は、多少これを妨ぐる點がある。そこで多くの辭賦家も、方便として辭賦中に儒學思想を加味した。揚雄が百を勸めて一を諷すと云つたのは、即ち此間の消息を窺ふべきものである。漢家は又大に國家の擴張を企てゝ、西域に交通を開き、北方種族との交涉、戰役を起したので、行人征旅、生別離苦の感は、自らその間に起らざるを得ない。それがやがて五言詩の興起を促したのである。雄篇大作の辭賦は、文學者の專業となつたが、短篇なる五言詩は、必らずしもさうでもない。當事者の感想は、武人たり婦女子たるを擇ばず、その素樸なる口角から發吟せられたのである。

散文では、先秦時代の辯士說客に由つて遺こされた議論體の文が、頗る多く積收せられあり、又三代以下の史料も、久しく整理せられなかつたから、此の時代で、纏めて秩序を立つるの必要があつた、司馬遷の史筆の如きは、其の必要の爲めに出で來たのである。それと同時に、先秦時代の實用的文學は、此時代では直に史料となり、又文材詩料ともなつた。そこで漢代散文は叙事體に於て、多く發達したのみならず。辭賦の鋪叙敷陳は、即ち一種の敍事詩の流である。又議論體にても多くの叙事を夾雜した。西漢論文家の作を見れば、直に首肯することが出來よう。

そこで兩漢の文學を比較するに、その散文であると詩賦であるとを論ぜず、西漢は撲實で莊重で、簡勁な處があるのに、東漢は典麗なる點はあるが、やゝ綺靡に傾いて居る、そのうへ文氣も甚だ卑弱で、概して云へば大に劣つて居る。要するにそれは時代が降つて、政治の頽弛、人心の萎靡、風俗の輕薄等、種々なる社會上の現象に由つて、その異同を爲したのである。

二四九　漢代の韻文――樂府　漢代の韻文に、古詩、樂府及び辭賦の三つがある、古詩と樂府との源は、上代の三百篇である。三百篇の作は、その體に於ては、風雅頌と分れても、其の時代ではいづれも均しく管絃に被らせて詠歌することが出來たのであるが、秦漢を經て、時代の幕は古今の區別をなしたのと、樂譜失亡との爲めに、今では樂章たるに適せず、そこで武帝の時に天地宗廟の祭祀に用ふべき樂章を、當時の文士たる司馬相如以下數十人に命じて新作せしめ、李延年といふ樂律に達せしものを協律都尉として律呂を論じ八音の調に合ふやうに其の譜をつけさせた、それが樂府の興つた始めである。是から詩と樂府とは、全然區別されて、詩は重もに意義を尙び、樂府は節奏を主として、句法も長短定りなかつた、其の題目に歌、行、吟、操、辭、曲といふもの、多くは樂府の體であるが後にはそれも單に意義を主とする詩と同樣で、殆んど擇ぶ所なきやうになつた。

二五〇　五言詩――古詩十九首　古詩の體、詩三百篇中では、句法長短一定して居らぬが、まづ四言が通體であつたと云つても宜いが、漢詩は五言が通體で、五言詩は漢代の創作と云つても宜い。而して蘇武、李陵の贈答の作が、その始りであると傳へ言はれて居るが、恐らくはそれより以前から、次第に發達し來つて、適々兩人の名に由つて遺つたのが、創始のやうになつたのであらう。然かし後世で五言の模範であるやうに云つて愛誦さるゝのが、右の贈答の作及び古詩十九首とである。十九首は一人で一時に作つたのではない。逐臣棄妻の手で作つたもの、朋友闊絕の感想、死生新故の際、その他種々の寄托に由つて出來たのであらう、その內では枚乘が作つたものもあり、傅毅もその「孤竹篇」を作つたとの說あれども確證を得ない。要するに此の新體詩は、武帝頃の文學流行に連れて出來た新產物と云はねばならぬ。

二五一　七言詩――柏梁聯句　既に五言詩が興つたが、新を喜び奇を追ふは、人心の常であれば、早晚五言以外の新詩を生ぜざるを得ず、殊に武帝は雄主で、文學の嗜好もあつたので、其の元封三年に柏梁臺を落成してから、群臣と席上聯句の樂みをなした。其の詩が七言體であつて、帝はまづ「日月星辰和四時」の首句を作つた。是れが七言の創始と云はれて居る。尤も七言體の詩は、その以前にもある。高祖の「大風歌」項羽の「垓下歌」の如きは、即ちそれであるが、それは楚風の系統に屬するやうである。故に姑らく「柏梁聯句」を七言の權輿としてもよからう。が、只漢代の通行詩は五言で、其の氣運は未だ七言たるに適當せなかつたやうである。

二五二　漢代韻文の名作　漢詩樂府の重なるものを列擧すれば、古詩では「古詩十九首」「蘇李贈答」を初めとして、韋孟の「諷諫詩」（四言）「柏梁聯句」（七言）王昭君の「怨詩」（四言）及び秦嘉の「留別贈婦詩」蔡琰の「悲憤詩」等最も記せざるべからざるものである。樂府體では、唐山夫人の「安世房中歌」を首として、卓文君の「白頭吟」班婕妤の「怨歌行」蘇伯玉妻の「盤中」蔡邕の「飮馬長城窟行」及び漢代特製の樂府歌辭である「練時日」「靑陽」「朱明」以下の諸篇である。其他「廬江小吏妻」「羽林郞」「陌上桑」諸篇、無名氏の作に係るもの、亦此體に屬する。要するに樂府は、叙事詩の一體とも稱すべき者が多い。「廬江小吏」

諸篇は、即ちそれである。尙ほ別に楚辭の系統を帶びたものがある。高祖の「大風」項羽の「垓下」を首として、武帝の「秋風辭」烏孫公主の「悲愁」張衡の「四愁」等は、即ちそれである。殊に「四愁」は唐代杜子美の七歌の原本する所である。

以上云つた所を概言すれば、漢代詩樂の發達は、自らその獨得の長を有するので、辭賦の盛と共に當代の一大光輝と云はねばならぬ。

二五三　辭賦　辭賦は本と楚辭より一變したものであるが、重もに侈麗宏衍を以て其の特色となつた。當代に於て楊雄は、已に「詩人之賦、麗以則、辭人之賦、麗以淫」と評した、楚辭の賦體と、漢賦と、自ら其間に一大區別が出來たのである。故に余は特に辭賦といふ名稱を創始して、漢代賦家に被らせた。漢代辭賦家の山斗は、司馬相如であつたが、相如以前にては、陸賈賈誼、最も出群であつた。相如と相前後しては、枚乘、枚皐、東方朔等、最も一時に鳴り響いたが、その後には王褒、劉向、楊雄、班固、張衡、蔡邕の徒が、漢代辭賦家の錚々たるものであつた。殊に後漢では張蔡の名は、衆人の中から特絕して、張蔡と並稱せられた。

二五四　漢代の散文――史記と治安策　散文では叙事議論の二體に區別されて、各自にその長を發揮した。叙事體では司馬遷、議論體では賈誼、此の兩人は漢代に於る散文界の二大星であつた。いづれも共に武帝時代の人で、遷の史筆は、その『史記』に由つて遺憾なく揮灑せられ、誼の策論は『治安策』に傾倒せられて居る。

『史記』は、支那に於ける史書の創始と稱すべきもので、其の體裁は紀、傳、表、志に區別されたが、遷の史筆は必らずしも史實もの眞を得ると否とに由つて束縛せられなかつた。極端に云つたならば、文筆が主で、史實はそれに附屬したやうである。故に史籍として史記を觀んよりも寧ろ文學書としてその文を把弄するが宜い位である。其の文は雄健で規模濶大で、氣象は崢嶸として、特にその神韻に富み、跌宕抑揚の妙あるに至つては、漢代の絕品である。杜甫の沈欝は、詩を以て行つたもの、司馬遷は文を以て行つたのである。此點より『史記』を觀れば、一種の詩思が文中に充滿して居るのである。「刺客傳」「伯夷傳」「孟荀傳」「項羽本紀」「貨殖傳」諸篇の如きは、最もその出色である。

賈誼は少年の時から才名があつたが、性質は忠直で一種の神經質の人であつた。死んだ時が三十三で、其の雄篇大作は、多くは少壯時代のに係る。『治安策』『過秦論』は、最も人口に膾炙するものである。其の文は、立論雄偉で、語句は勁俊である。議論を發する毎に、先づ叙事を以てして、千里到頭に積水を決するが如く結論をなした。漢代論文家中で、第一の雄深、第一の樸茂、第一の識力を具備したと云つて宜い。

二五五　兩漢の散文家　誼と幾んど同時であつたが、幾らか後れて、鼂錯といへる論文家があつた。識力も十分有したが、其文は誼の深雄樸茂なるのとは趣を異にした。尙書の學を修めた人であつて其文は規律森嚴で、字句の精熟したのは、其の特長であつた、錯の文も策論に特長を有した。『貴粟論』の如き、其の一である。

其の他の論文家では、西漢にて陸賈、孔鮒、董仲舒、劉安、楊雄、東漢にて王充、王符、應劭、仲長統、桓寬、荀悅、徐幹等あつて、各々述作したが、陸賈の『新語』董仲舒の『春秋繁露』劉安の『淮南鴻烈』王充の『論衡』應劭の『風俗通義』等は、子類の文として最も有名である。

史家では司馬遷の後に、後漢に班固が出た。即ち『漢書』の作者であるが、史としての體例は、史記に比して、整頓せられた痕迹が、十分認めらるゝも、筆力は遠く遷の下風にあつて、その藩籬に接することが六かしい。其の他西漢にて劉向の著作に係る『列女傳』『新序』『說苑』韓嬰の『韓詩外傳』等も、亦いづれも叙事文の一體として把弄するの價値がある。

上記二體の外に、詔勅、上書及び書牘の體に係るものがある。武帝時代は、漢代文學の全盛時代であつたので、其の詔勅に於ても、謹嚴古奧、殆んど古代の誓誥の遺則を認むべきがある。上書は既記の賈鼂の徒を初めとして、鄒陽の『獄中上書』枚乘の『諫吳王書』司馬相如の『諫獵書』劉向の『封事』諸葛亮の『出師表』等の如き、書牘は司馬遷の『報任安書』の如き、楊惲の『答孫會宗書』の如き、前者は大書牘の祖で、後者は小書牘の祖と評して宜いのである。

漢代散文を概言すれば、兩漢を通じて其の體例に於ては、未だ唐宋の各自その體裁をなして、後世の序記題跋あるが如き地位に到達しなかつたが、其文の一意疏宕、胸中に存在するものを直叙露出して、一篇の文となせし點は、亦大に稱せざるべからざることである。且つ東漢の文が、縱令ひ卑弱に傾いたとの譏評があるにもせよ。諸作家各々一種有物の言を成して、自ら後世の空言敗陳の徒と、その趣を異にしたのは、亦漢儒の遺風が、その文に影響を及ぼしたものではあるまいか。漢代文學の質實樸茂であつたことは、あらゆる方面に發現して居ると云つても宜い。

四　六朝文學

二五六　總論　歷史上では通例吳晉宋齊梁陳を六朝といひ、又文學上にも漢魏六朝と連稱すれども、こゝには便宜の爲め、魏晉南北朝を通じて隋末まで、約四百餘年間の文學を、六朝文學と稱するのである。且つ魏の文學は、已に兩漢の文學と其趣を異にして、早くも六朝靡儷の源を開いたからこれを六朝の初めに置いたので、文學上より見れば、餘り多くの不都合あるでもなく、却つてそれが相應するやうである。

漢末の變亂で社會の道德は大に頹敗して、周漢以來傳承された儒教主義も、當時の社會を救拯することが出來ず。それに佛老の教旨は、漢代以來、浸々として潤漬したのと、禍亂の影響とは、人に厭世の思想を起こさせた。特に漢末に於ける異黨虐待の結果は、人をして儒教主義に由つて名節廉恥を重んずるは、只悲慘の死を買うばかりである、それよりも佛老の幽玄虛無を守つて、險惡な社會の殘害に遠ざかつた方が利益であるとの觀念を起こさせた。それが間もなく一時の流行になつた清談の根源である。而して此の清談即ち似て非なる老莊思想の結晶は最も六朝前半期の文學に影響した。而して後半期に及んでは、亡國滅家、榮枯消長の變遷が、最も劇しかつたので、遊宴荒怠、一時の安息を貪るの風は、上下一般に充滿したと同時に、佛教厭世の思想は、益々人心を支配するやうになつた。そこで此際の文學は、淫靡柔弱の篇什と罪障懺悔、未來托生の諷誦文の類が多かつた。然るに其間に於て特に記せざるべからざるは、印度佛教の輸入と共に、その音韻の學も輸入されて、學者の注意を惹き、程なく四聲音韻の規則が成り立ちて、その詩に適用せらるゝやうになつたことである。

何れの國でも、上代の詩歌は、質樸なる人民の口から出たので、まるで音韻の關係のないではないが、頗る寬容である。支那でも矢張り三百篇を初めとして、漢魏の古詩、いづれもさうであつたが、爰に至つて其の詩は聲韻の拘束を受くるや

うになつた。已に聲韻の拘束あれば、早晩其字句を制限し、形式を一定したる新詩を生ずるは當然である。そこで五言八句、七言八句等の詩が漸く興つて、終に隋唐律詩の根源となつた。

前に云つたやうに、六朝時代は、德義頽敗の世ではあつたが、文學の方面に於ては、時主の嗜好と奢靡の習俗とよりして、特にその發達を助成した。健全なる文學は、莊重典雅で眞摯篤實の社會と相伴つて興起すべきは、當然ではあるが時としては、社會の風潮が淫靡奢靡に流るゝ際に、却つてその欲望を充たすの具となることが少からぬ。六朝の文學は、幾んどそれであつた。併し文學は必らずしも、善を主とする道德の伴侶でなくてはならぬといふ理由はない、六朝文學には、六朝文學としての特長がある。たとひ其の文學は纖巧に流れたとしても、理想としては彩華爛熳なる詞藻の一路に向つて、直往前進したことは否認することが出來ない。隋の李愕が「競一韻之奇、爭一字之巧、連篇累牘、不出月露之形、積案盈箱、惟是風雪之狀、世俗以是相高、朝廷據茲擢士」と云つたのは、まさに能く六朝文學の實狀を評し盡したのである。然り一韻一字の奇巧を競爭した位であれば、その詞藻音調が、流麗妖豔を極めて一代特殊の文學を形成したことは、頗る稱讃するの價値がある。

漢代は辭賦全盛の時期で、大小の作家が輩出して、各々その技倆を鳴らした。詞彩の源泉もそれ等諸家の爲めに、殆んど汲み竭くされたので、其の作品も大抵は陳腐相因るの嫌を免れなかつた。此の際に當つて、一家の新機軸を出して、世の耳目を驚動せんとするには、是非とも特殊の工夫がなくてはならぬ。されば其の文に四六駢儷の體を生じ、詩に纖巧綺麗の什を出すやうになつたも、まことに怪むに足りない。寧ろそれは諸家が希望した當然の結果であると云はねばならぬ。故に李太白も建安より以來は、綺麗も珍とするの價値がないと云つたのである。

六朝文學の發達は、大抵右のやうな情形であつたが、時代の趨向は、その詩史に於てともに未だ十分なる形式を具ふるに至らなかつた。それを唐代に至り、其の豫備されたる材料に由つて、やがて種々なる形式に完成した。李杜の詩、韓柳の文に於けるは、即ち其の一である。されば唐代文學の發展は、六朝文學の蓄積があつたから出來たと云つてよい。單に靡麗であると云つて、六朝文學の價値を減却することは出來ない。

二五七　六朝の詩——魏の三曹及び建安七子　六朝文學の中心は詩である、風雅楚騷の體が、一變して漢詩となつて、詩界に一新紀元を開いたが、未だ詞采絢爛の域に達せなかつた。魏晉六朝の詩は次第に其の領域を開拓して、漢詩がまだ到達せずに殘して置いた詞采を附加へたと同時に本色であつた質實を失つた。それも各時代に由つて互ひに異同はあるが、要するに詞華の一路に向つて馳せた結果は、次第に質實なる古風に遠ざかつたのである。

魏には曹操を錐頭として、多くの詩家が在つた。彼は三國第一流の豪傑で、政治上には隨分譎詐な行動をなしたが、その詩才は實に儕芥たるものであつた。短歌行の一篇、最もその大較を見ることが出來る、彼れ三國に生ると雖も、その音響は、矢張り漢代の遺風がある。

曹氏父子の多才は、魏詩の盛を助けた。操の二子子桓（文帝）子建（陳思王植）並びに詩を善くし、子建の才氣最も父兄に超越した。世これを三曹と云つた。子桓の詩は優柔和美で、乃父の悲壯雄傑であつたとは、全然似寄もつかない「燕歌行」は

最も傑作である。子建の詩は、高華宏雄で、殆んど天才であつた。乃兄の和厚なるに比すれば、男女の區別あるやうである。沈德潛は「使才而不矜才、用博而不逞博……故應爲一大宗」と評した、「雜詩」諸篇、「七哀詩」等の作、最も其の詩風が見らるゝ。

三曹の下に於ては、所謂鄴下の七子、いづれも當時の作手であつた。七子とは孔融、陳琳、王粲、徐幹、玩瑀、應瑒、劉楨であつたが、その時代が漢末建安の頃であつたから、又これを建安の七子ともいふのである。七子の中にて、孔徐二子は純然たる漢臣で、鄴下の才とするは稍ゝ穩當を缺くも、今姑らく古來の稱呼に從ふこととするが、その特に詩名があつたのは、王劉の二人である。王は才氣少きも皮肉に富んだ。劉は骨力あれども風華に乏しかつた。いづれも佳篇少からず。粲の「七哀」、楨の「贈從弟」諸篇、特に觀るべき作であるが、三曹の上に出でんには、尙ほ多少の不足を免れない。

二五八　西晉の詩人　晉代は清談家の時代と云つてもよい。清談家の多かつた割合には、傑出した詩人は少かつた。先づ初めに阮籍、嵇康の二人が出たが、二人ともに清談家の山斗であつた。康の詩は籍に及ばない。籍が「詠懷」數篇は、晉代に在つて、自ら別調に屬すべき作で、其の原本する所は、「離騷」である。二家の後には張華、傅玄あり。前者は華整で、後者は古樸、並びにその特色であつた。特に玄は樂府に工みであつたので、晉室宗廟郊祀の樂府は、その作に係るのが多いといふ。陸機、陸雲、潘岳、張載、張協等も、一時の作者であつたが、陸機最も特出した。而して六朝排偶の風を盛ならしめたのは機からである。時に左思、字は太冲と云つた作家があつた。胸憶高曠で、筆力も十分で、その頃の作者の上に特出した、「咏史」數篇は、千秋の絕唱と評せられた名作である。

二五九　東晉の詩人——陶淵明　東晉では劉琨、郭璞の二家最も有名で、琨の詩の悲壯と、璞の詩の超逸とは、ともに優劣し難い程度であつた。最後に一人あつたのが、陶潛、字は淵明、その人物思想ともに高趣に富んで居る。名家の後であつたが、晉末に生れて、社會頽敗の實狀を目擊し、浮世を大觀して寂寞の地に隱居した。酒を愛したが貧困で十分飮めなかつた。しかし貧困に對しては頗る無頓着であつた。そこで其詩も恬淡清遠で、樂天安命の思想、蕭散自足の態度が、自ら發露してをる。而して其間に於て、一往勇進の氣象も隱約に見える。それもその筈、此老の素志は、決して隱居して世外の人となる筈ではなかつたが、時代の風潮と國家の興亡とは、遂に東籬叢菊の邊で、葛巾で濁酒を漉して飮み且つ詩を作つて、其の情を寄託するの已むを得ざるに至らしめたのである。「詠荊軻詩」は、言外に於て其の志氣の如何に果英なりしかを想見し得るのである。「飮酒」諸篇は、此老が悠然として物情を陶冶し、これと同化せるの情が見られる。其の他にては「歸田園」、「移居」、諸篇の如き、最も傑作である。要するに其の詩の高古で自然より出でたるが如きは、その人物の當時に特絕したからである。蘇東坡が淵明の詩を評して「質而實綺、癯而實腴」と云ひ、又「所貴於枯淡者、謂外枯而中膏、而實美」と云つたのは、是非の議論もあれどまづ不當ではない。沈德潛は「清遠閒放是其本色、而其中自有一段淵深朴茂」と評した、最も適評である。

晉代詩人の重なるものは、大略上記の通りである。中に就きても阮籍、陸機、左思、陶潛の四家は傑出して居る。四家の詩品、互ひに相似ざるも、晉代の詩は四家に由つて變化せられた。又此の時代

に於て、古樂府の更定せられたことは、特に知らねばならぬ。朝廷宗廟の樂、多くは從來漢魏の樂章を因襲したのであるが、此時代にその曲調を更定し、又或は新作したのもあれば、樂府の體裁は此の時代に於て一變した。

二六〇 宋の詩人——顏謝 魏晉の詩界は、右やうの次第であつたが、宋に至つて益々變化を重ねた。沈德潛が「詩至宋、性情漸隱、聲色大開、詩運一轉關也」と評論したやうに、人巧愈々勝れて性靈漸く遠く、古詩の終點で律の起點と云つても好い。謝靈運、鮑照の兩家が、最も傑出する。靈運字は康樂、その詩は淸新ではあるが、最も彫琢苦心の結果たるを免れない。顏延之は同時の詩人で、世に顏謝と並び稱せられたが、彫鏤が甚しい。然かし「五君詠」、「秋胡詩」諸篇は聯璧と云はねばならぬ。鮑照、字は明遠、最も樂府に長じた。「代東門行」、「代放歌行」、「擬行路難」諸篇は、その集中の傑作である。その他、謝瞻、謝惠連、謝莊、諸人の詩も、好詩もないではないが、比較的下品である。

二六一 齊の詩人——謝朓 齊詩は艶の一字を以て、槪括することが出來る。宋詩已に麗を以て晋詩と趣を異にしたるが、此に至つて色澤の美なること、更に宋詩の上に出た。一代の大家としては、謝朓、字は玄暉、只一人あつたに過ぎない。其の詩は淸俊で、秀色滴らんとする趣がある。唐の李太白は最も玄暉を崇拜した。玄暉の外には、王融があつたが、玄暉の對手とは云へない。

二六二 梁の詩人 梁詩は齊詩に比すれば、最も妖艶である。梁代作者の多くは、艶情を歌ふを以て娛みとした。而して專ら句々琢くことを尙んだが、風格は益々卑くなつた。然し武帝、簡文帝を初め沈約、江淹、任昉、范雲、柳惲、何遜、庾肩吾等の諸人があつた。縱令ひ其の時代の詩が、妖艶であつたにしても、一般文學の盛であつたことは、幾んど六朝第一と云つてもよからう。その先頭に立つて、大に文壇に呼號したのが武帝である。武帝の詩は、興國の君主だけあつて、渾厚の處がある。簡文帝は好んで艶詩を作つた。一時流行となつた宮體詩といふのは、即ちそれである。沈約の詩は、その規模稍古體を存して居る。江淹、何遜、いづれも辭藻の美、諸人の上に出づ。此の三家は、殆んど鼎立の姿であつた。范雲、任昉の二人も、當時の作手ではあつたが、幾らか劣つて居る。

二六三 陳の詩人 陳詩は梁詩に比べて格力ともに卑くなつたが、作家としては、陰鏗、徐陵、江總、張正見等があつた。後主は亡國の主ではあつたが、詩思に富んで居た。前代に於て、庾肩吾が已に巧思を開いてから、江張の二人が、其の流を汲んだので、後代詩律の變は、此等諸人の間から導かれた。要するに梁陳の際から、彫琢されたる佳句が、次第に多くなつて來て、律詩の氣運は、已に其の間に於て準備された。而して隋唐に至つて初めて具體的に出で來つたのである。

二六四 北朝の詩人——庾信 北朝は一概に詞氣貞剛で、「北朝詞人、時流淸艶」と沈德潛が云つた通りである。その大家としては、周に庾信、字は子山があつた。子山の詩は才華富麗であると同時に、風骨蒼勁の處もある。陳隋淫靡の際にあつては、一異彩を放つて居る。李太白が謝朓を崇拜したやうに、杜子美は子山を崇拜した。

梁陳の際には、無名氏の歌謠に好きものがある。「橫吹曲」諸詞、「木蘭詩」の如きは、其の一である。「橫吹」諸詞は、北方武人の詞で、柔靡の音を脫して何處にか漢魏の遺響がある。

二六五 隋の詩人 隋は煬帝、楊素、盧思道諸人の詩、均しく觀るべきものがある。且つ時代の進運は、將さに一大轉化を見んとしつゝあつて、自ら詩運復活の先兆が輝いた。惜いことには隋朝一統の業が、大成せざるに早くも破亡を現したので、唐代になつてから始めて詩運の復興を見たのである。要するに六朝にて下した種子が、漸次萌芽したので、陳隋靡々の間に於て、一陽來復の兆は、十分伏在したのである。

二六六 六朝散文の特色——魏晉の文人 秦漢質實の古文は、六朝に至つて、幾んどその影を隱して、駢儷體のみ益々流行を極めた。尤もその間に於て、多少古文の徑路に旁つた作家も、絕無ではなかつたが時代の感化は、それ等の人までも儷體の範圍に沈漬せしめた。

六朝詞人は、大抵詩文ともに秀でた人が多かつた。それ故已に擧げた詩家と重出するのが多い。まづ魏では陳思王が第一で、六朝文壇の始祖と云つても好い。「求自試表」、「與楊德祖書」の如きは、最も傑作である。王粲、劉楨の徒も可なりの作家であつたが、陳思とは比較にならぬ。外には同時に禰衡、孔融、徐幹などいふ文士があつたが、いづれも漢末人として取扱ふが、その人等の本志であつたであらう。

晉初の文は阮籍、稽康の兩人で、古人が「嵇辭淸峻、阮旨遙深」と評したのはまづ適當であらう。籍は前にも云つたやうに、淸談の親玉であつたので、その思想より著はした文が、「達莊」、「通易」諸篇である。「大人先生傳」も同一の源泉より出でたものであるが、其の文一萬二千四百餘言で、その放縱雄奇なことは、其の人の面目を見るやうである。康の「養生論」も面白い。何れも其文を讀んで、その人物及びその時代の精神が窺はれる。二家に繼いでは潘岳、左思、陸機ともに能文の譽があつた、此時代は最も儷體全盛の際であつたので、中にも機は其中心となつに居た。然るに一方には、全然儷風を帶有せぬではないが、古文の命脈に旁つて作られた文もあつた。王羲之の「蘭亭序」、李密の「陳情表」の如きは、即ち其一である。最後に又別に一畦徑を開いて、孤行した作家があつた。それは陶潜である。その文では「桃花源記」、「五柳先生傳」、「歸去來辭」等、最も有名である。「自祭文」は奇作である。要するに陶文は著想高古であるも、其筆力は軟弱である。陶は詩が本色で、文は次乘と云はねばならぬ。

二六七 南北朝の散文 南朝の文、宋では謝康樂、顏延之、謝の「辨宗論」及び「佛經諸賛銘」、顏の「庭誥文」、最も觀るべきものである。漢魏以來、印度佛敎の思想が、次第に侵入したので、此頃に至つては、士大夫と云はるゝ人の間に、其の趣味を把捉するものが多くなつて、終にその文學に一種の佛敎文學の基を形成した。上記の謝靈運の「經賛」の如き、又竟陵王蕭子良の「淨住子」の如きは、即ちそれである。

齊では王融の「曲水詩序」、巧麗の作である。唐初の王勃が「滕王閣」序は、融が此の序を摸倣したものゝやうである。孔稚珪の「北山移文」、筆路淸麗、字句修潔で、儷體の妙、殆んど此に止るといつても宜からう。無論齊代第一の文たるに相違ない。

梁では沈約、任昉が第一で、約の文では、史筆及び諷誦文の類が、特別の作であらう。昉は詩よりも文に長じた。約に比すれば、遙か上である。梁は詩に於ては、最も妖艶を極めたが、文は多くは靡弱で、齊文に比すれば、時代の接近するに似ず劣つて居る。

陳では徐陵が名家であつた。「九錫文」は傑作である。その他の文も佳構が多い。

陵の文は、錯裁巧密で、新意があるから、一文出づる毎に、相傳寫して一時に流布したと傳へられる。その文を見て當時の嗜好が分かる。

南朝の文は、皆靡麗の範圍を出でない。殊に齊梁の際は、其の極點に達して居る。若し古文の系統に屬するものを求めんには、兩晋以下では殆んど駄目である。詩文ともに晋と南朝との間に於て、古今の界をなしたと云つて宜い。

北朝では、周の庾信が第一の文名を負つたが、其の詩に比すれば、文は劣つて居る。小品文には好處が見える。

詩文は煬帝の詔書に雅健なるがある「再伐高麗詔」の雄偉宏麗なるは、まづ傑作第一であらう。盧思道の「北齊後周興亡論」、「勞生論」、いづれも佳構である。

二六八　史子類及び詩文批評類　尙六朝の文に於て、特記せざる可らざるは、著書の文即ち史子類及び詩文批評類の著書の文である。史書では後漢、三國、宋、齊、魏等の正史がある。縱令ひ純文學の範圍で論ずる譯のものでないにしても、その史筆は佳構と云はねばならぬ。子類では魏の劉邵の『人物志』、晋の傅玄の『傅子』、葛洪の『抱朴子』、梁の孝元帝の『金樓子』等は、此の時代の好著である。又地理類にて後魏の酈道元が『水經注』がある。酈注文流暢で、明媚愛すべき點がある。爾來文家の山水紀行文は、その筆意を眞似たのが少くない。宋の陸游の『入蜀記』、范成大の『吳船錄』の如き、即ちその一である。

詩文批評類の書は、六朝から初まつた。まづ撰集では梁の昭明太子の『文選』、陳の徐陵の『玉臺新詠』の二書があるが、詩三百篇の撰集以後、始めて此種の書が出たのである。批評類では、梁の劉勰の『文心彫龍』鍾嶸の『詩品』がある。ともに批評文學の嚆矢である。上記の『文選』『玉臺新詠』と共に、六朝文學の發展を窺ふべき好材料である。

五　唐代の文學

二六九　總論　南北偏安の六朝時代に於て、播種せられた文學は、天下一統の新王朝である唐代に至つて、大いにその美花を開いた。支那文學の盛をいふもの、誰も前にて先秦、後にて唐宋を並稱するに躊躇せぬが、中に就きても、唐代は盛中の最盛時代と云はねばならぬ。

唐代文學に於て特別の發達をなせしは、韻文即ち詩歌であるが、尙ほその他の學術も氣運につれて興起した。王家がその政權を持續したのは、約三百年であるが、開國の初めに當り、太宗は頗る意を文學に注ぎ、前代の遺老碩儒を徵集して、一代文運の基礎を立てた。其意蓋學術の助を藉りて、政治を休明にし、王家政權の保續を永遠にせんと欲する、一種の政略より出でたること勿論なるも、其身も亦深く文學の嗜好を有したるが故に、十分奬勵をも加へた。君主專制國の常として、王家の嗜好は、やがて臣民の嗜好となり、上下相競うて、文學を以て太平を粉飾するの具と爲した。是の時に當り、杜如晦、房玄齡、魏徵等の如き、開國の功臣として、德業勳名、已に一世を蓋ふのみならず、尙又文學上に於ても、有力なる地位を占領した。爾餘の名流才士等、其の周邊にあつて、互ひに相賡和應酬したが、唐代の文學は、まづ此際に起源したのである。

然れども天下纔かに平定して、四海始めて混一せし際なれば、文學の風、依然として、六朝の故態を存して、彫繪靡麗を尙んでゐたが、時日の推移は、俗尙の變遷を促し、謳歌太平の樂は、文學の爛熟を來たし、開國より約百年、開元天寶の際に及びては、文化最も盛んにして、韻

文は多く雄渾正大を尙び、散文は雅訓切實を旨とし、大小の作家、彬々として輩出して、各〻其の妙才を發揮した。明月の中天を渡るは束の間である。花開いて夜半に風起るが如く、天寶の亂は不意の中に起つた。さばかり咲き初めたる文學の美花は、此の一擧の爲めに、大なる打擊を被つたが、花飛びて天際に散漫し、鳥啼いて樹頭を怨み、暮風蕭索、慘雨零丁を極めたるの光景に至つては、又別に一段の風趣を添へたのである。

歡樂の後に悲哀あり、繁華過去つて懷舊起る。亂後の文學は漸く懷舊悲哀の音多く、荏苒して終に一朝の最後を送つたが、小說及び復古文の多くは、此の中葉以後に起つた。此時代に於ける文士學者の思想は、單に支那古來の儒教主義に支配されたるにあらず、六朝以來扶植されたる印度佛教の思想は、浸々として冥々の裏に一代の人心を薰化し、殊に佛敎經文の改譯は、唐初より繼續せられて數年を經過したるのみならず、佛徒中に高德偉人輩出してその敎義を弘布したので、學者文士の思想に一大變動を與へた、否其の思想を豐富ならしめたのである。唐代小說に因果應報の說話多きと、詩歌文章の上に佛敎文字の散見するもの少からざるとは、これが爲めではあるまいか。

之を要するに唐代文學の特長は、韻文の發達である。時に盛衰なしとせざるも、韻文の發達は一代を通じて、空前絕後の觀を爲した。王家の好尙は、疑もなく一代の嗜好を促進したのであるも、亦一には詩歌を以て士を取るの試法させしことが、發達の原因をなしたであらう。淸朝の勅撰に成る『全唐詩』九百卷を按ずるに、採收詩歌四萬八千九百餘首、作者二千二百餘人、上は王侯縉紳より、下は山村水廓の田夫野嫗、嘯林哭空の靈鬼妖怪に至るまで、詩を能くせざるはなく花に啼く鶯、水に住む蛙の聲も物の數かは、亦以て唐代詩運の隆盛が、如何に魔神の春風を鼓動して、千木萬草を一時に花咲かせたるが如くなりしかを知ることが出來よう。今下文に於て、更らに其間の消息を敘せむ。

二七〇　唐詩の變遷　唐代韻文の發達が、殆んど前に古人なく、後に來者なきの盛觀を呈した事は已にこれを概說したが、今更らに一代詩運の變遷を敘せむとするに當り先づ便宜の爲め、後世批評家が別次した初唐、盛唐、中唐、晚唐等の名目を採用しよう。唐初より玄宗開元の初めに至る凡百餘年間を初唐と爲し、開元より、代宗太曆の初めに至る凡五十餘年間を盛唐と爲し、太曆より文宗の太和年間に至る、凡七十餘年間を中唐と稱し、又それより唐末に至る凡八十餘年間を晚唐と稱するのであるが、もとが便宜のため立てたる名稱なれば、實際初唐から盛唐に亙つて生存した詩人もあり、中唐から晚唐に入つたのもあつて、其間に劃然たる區別を立つることは、甚だ困難である。且つ唐詩に初盛中晚を分つは、不都合であるとの議論もあることなれば、便宜のためその名稱を襲用するまでゞある。

二七一　初唐四傑の七言詩　唐詩の淵源は矢張り六朝である。凡一代の思想が繼續的に變遷するとすれば、唐初の詩風が、前代を踏襲して、その餘風に沿ひ、靡麗綺繪を事としたのも無理ならぬことである。魏徵、虞世南等諸人の詩、希微玄澹の音多きも、先づ當時の詩體は、初唐四傑を以て、その代表と爲ねばならぬ。四傑とは王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王の四人である。孰れも雄麗恢宏の辭を驅つて盛んに七言古體を作つたが、その體制は、多くは四語一轉し、その格調を云はば、恰も馬琴時代の七五調に於けるが如し。諸家の作、盛んに洛陽繁華の景物を

鋪叙し、王侯貴人の樓臺亭榭を描き、富豪冶游の狀態を寫して、連韻數百言の長篇を成すのがある。此種の作を出すに腐心したのは、當時の一流行であつた。その原因は、江南繁華の夢、現に心目に恍惚として、好詩料を供給せるに、これを歌はむとする辭賦の體は、已に漢魏以來數多の辭人文士に由つて、幾んど餘蘊なきまで、其の思槳を搾つて、揮灑せられたのであれば、更らに屋上に屋を架しても其の巧を見はすの餘地がない。是に於てか別にその體制を按出せざるべからず、七言長篇の作は、即ちこの要求に應じて生出したのである。故に換言すれば、初唐に創意された七言長篇は、漢魏の賦體が、其の面目を一變したもので、盧照隣の「長安古意」、駱賓王の「帝京篇」の如き即ち此れである。當時何人が先づ此種の作を創出せしやを知るべからざるも、盧駱の外に於て、尙ほ劉希夷の「白頭翁」「公子行」、張若虛の「春江花月夜」の如きものがありて、亦此體に屬する。

七言體の詩は、已に源を漢の「柏梁臺」に發したるも、時代の嗜好はこれを歡迎せず、六朝陳隋の際に至つて、五言詩稍ゝ陳腐の感を爲せしが、一方においては、律詩の聲調、漸く開けたると同時に、又他方にに於ては七言體の發達を促し、遂に初唐諸家をして先づ其の地位に據有せしめたのであるが、諸家が六朝艶麗の餘習を仰いで、その辭を出すに當時の新體である七言を以てしたのは、詩學の進化に於て必らず經由すべき方途なりしに相違なきもこれに對して反動を生じたことも、亦當然の結果である。

二七二　五言古の復興――陳子昂　初唐の詩が六朝艶麗の餘風を承けて、益々その靡華を揚げんとするに當り、陳子昂、字は伯玉といふ詩人出で、雅正の作、久しく世に見はれずして靡麗の音のみ流行するを嘆じ、力めてこれを一掃せんと欲し、復古の志を懷いて、述作する所あり「感遇」三十八首を出すに及びて、世人の注目を惹き、初唐詩風の變、此に兆したのである。張九齡、字は子壽といふ人も、賢相の位望に據り好んで古風を作つた。作る所の「感遇」十二首は、直ちに子昂の後に接して、復古の實を擧げたのである。故に沈德潛が二家の詩を評して、「唐初五言古、漸趨於律、風格未遒、陳正字起衰、而詩品始正、張曲江繼續、而詩品乃醇」と云つたのは、實に的確な批評である。二家の詩源は、阮籍より出づ。籍の「詠懷」八十二首は、即ちそれである。

二家の後に於ては、李白の「古風」五十九首、亦同じ系統に屬す、故に唐代古風の復古を云ふもの、必らず三家を並稱する。

二七三　律詩の發達――初唐諸家　然れども詩運の進化は、浸々として前進して已まず。既に六朝の際に胚胎した律詩は、唐朝開國の氣運に伴ひ、亦一大轉進を爲した。而して此の一大轉進の局に當つて、律詩の完成に與つたのが、沈佺期、宋之問である。沈宋兩人の人格性情は、倶に言ふに足らず。且つ其の詩家としての技倆も大家と稱する程に至らぬが、兎に角律詩が齊梁の際より、次第に規則立ちて、進化しつゝありしものを、更に工力を加へて、其の聲韻を研究し、其の體制を齊整したるの功に至つては、これを兩人の功に歸せざるを得ず。尤も律詩の完成が、全く兩人の手にのみ限られたのではない、同時に幾多の協同贊成者がなくては、新詩の發達を速成することは能はざるは無論である。陳子昂、杜審言の如き、即ちそれ等である。子昂は唐代五古の復古に於て開山の地位に在ると同時に、其の律詩に於けるも、亦緊要の地位を佔有した。只其詩風が浮薄でなく、堅厚なので、自ら沈宋と撰を異にするも、

律詩を完成した上に於ては、沈宋の半席を申受くるの資格がある。方虛谷が子昂の近體を評して、「不但感遇爲古調之祖、其律詩亦近體之祖也」と云つたのは適評である。近體とは、漢魏の古體を區別せんが爲めに設けたる名稱であつて、五七の律絕二體を云ふのである。

以上の諸人は、初唐の詩變に於て、最も關係を有するものであるが、尙ほその外に於て李嶠、崔融、蘇味道、蘇頲、張說等の諸人の如きも、亦當時の作家である。之れを要するに初唐は、纔かに唐代詩界の風氣を開きたるに止りて、未だ彩華絢爛の境に至らぬ。花に三分の開花を見る所ありとすれば、初唐の詩趣は、まさに三分の開花に比せねばならぬ。

二七四　盛唐の詩人――李白　唐代文學の中堅は詩であるが、其の最盛を極めたる時期は、玄宗の開元天寶の際より、代宗の太曆の初めに至る、凡五十餘年間で、所謂盛唐と稱する時期である。此の時期に於て輩出したる大小の作家は、幾んど數へきれぬ程で、山阿水涯、無名の村婆野老も、詩を能くせぬものなく、春風萬里、百花繚亂の趣があつた。其間に於て最も名聲を馳せたのが、李白、杜甫の兩大家である。

李白は字を太白と云ふ。名門の後ではあるが、その父祖は或る事件の爲めに流落したので、太白は蜀で生れた。固より天才の人ではあつたが、夙に蜀地山川の感化をその心神に受けたに相違ない。されば其の志氣宏放で任俠を尙び、頗る功名心に富んだが、時運の非なる、遂に其の抱負を伸ぶるの機會に接せず。不平欝勃の餘、酒を藉つてその志氣を銷磨せんとし、酒氣橫溢の際に當り、筆を呵して、高懷飄逸の辭を吐噏し、以て纔かに其の興を遣つたのである。此時代の風習として、多くの時人は、一意詩思を練磨して、王家の採取に合格し、それに因つて榮譽利達の業をなさんとしたのに、太白の逸才は、自ら求めざるに、早くも玄宗に聞知せられて、特殊の優遇を受けたが、瓢逸の天才は、宮廷禮法の場に局促し難きのみならず。宮中の細小等、いかでか此の天才を包容すべき、太白は遂に再び江湖に放浪して、假寢の節に傚つたのである。大象は兎徑に遊ばず。そこで太白の高懷飄逸は、何處までも發揮された。賀知章は太白を評して、「謫仙人」と云つた。此の謫仙人は、酒を飲んで詩を作つた。酒一斗に詩百篇、李白の天才はまづそこらである。

二七五　李白の詩　其の詩の飄逸であつて、筆勢の天矯たる處は、恰も其の人の性行と一致して居る。されば樂府歌行、七言長古に於て、最も其の長を擅にし、「蜀道難」「遠別離」「夢遊天姥吟」「懷舊遊寄譙參軍作」「襄陽歌」「烏夜啼」等の如き、いづれも妙選であつて、太白以外、能くその一言半句を落け得るものあるべからず。太白の面目は、全く此等の諸作に存するのである。「古風」五十九篇は、沈德潛が「不矜才、不使氣、原本阮公、風格俊上」と評したやうに、他の縱橫馳騁せるに似ず、最も其の步武整肅で意を風雅に致したる情形が見える。

絕句は唐代の創體である。固より突然唐代で始まつたのではない。六朝以來、十分始まるべき素地は拵らへられてあつた。即ち古樂府の遺體とも稱すべきであるが、唐代になつて、完成せられたのである。唐代の絕句は、猶ほ我都々一、流行唄の類で、酒樓宴席、多くは此の新作の絕句を歌つたのである。李白は歌行長篇の作者として、當時の第一流であつたが、短篇である七言絕句に於ても、實に唐三百年間の第一人であつた。「朝辭白帝」「洞庭西望」「楊花落盡」「黃鶴樓」等の諸篇の如きは、寔に七絕の神品である。

律詩は餘り多く作らなかつたやうであるが「鳳凰臺」の如きは、夙に人口に膾炙して、妙品と稱せられた。要するに太白は天才太だ高く、性情飄逸放曠であつたのが、直ちに其作の上に於て發露されて、靈活入神の妙を極めたのである。これを人工と云はむよりも、天來と云つたが至當であるかも知れぬ。

二七六　杜甫　杜甫は字を子美と云つて、初唐の詩家、杜審言の孫である。李白と同時代の人で、互ひに知合ひの間柄であつたが、子美の性行は、太白の放曠なるとは正反對で、至極眞面目の人であつた。其處で其詩も太白の飄逸なるに似ず、沈欝雄渾を以て、其の長を見はした。子美の作も、歌行長篇に於て、特出の技倆を發揮して居る。「自京赴奉先縣詠懷五百字」及び「北征」の二篇は、子美が本領を見るべきものとして、古來より嘖々せらるゝ者である。玆に特に注意せねばならぬことは、子美は詩人として最も轗軻不遇の生活を爲した一人であるが、其間に於ても、一飯君恩を忘れぬといふ、忠厚の性情を懷いたのである。君主專制國であり、又温柔敦厚を以て詩の趣旨と爲し、詩を以て一種の教育の具と心得た支那の社會に於て、子美の思想と性情とが、後世から歡迎を受くるやうになつたのは、無理ならぬ次第である。

子美が壯强の時期は、恰も天寶祿山の禍亂時代であつたゆゑ、滿目亂離、憂愁の感慨は、多くその詩歌に發露された。「春望」「月夜」「三吏」「三別」等の作の如きは、最もその憂思悲緒を極むるものである。その困苦貧窮の狀は、山に登つて薪を採り、林に入つて橡栗を拾つた位で、「寓同谷縣七歌」の如きは、その情形を目覩するの感じがする。然れども斯かる境遇中に居ても、一片疏宕の氣は、何處までも屈すべからざる處があつた。其處で其詩の雄渾沈欝なる本源も想見され、又其身の世途に坎壈した理由も分明する。

子美は太白が七絕に特技を有したやうに、七律に於て特出したが、絕句はその長所とは云へぬ。殊にその晚年の律詩は神品である。古人も夔州以後の詩は、老去つて漸く詩律に細かであると批評して居る。「秋興」「詠懷」「古跡」「諸將」等の作は、即ちその最も著名なものである。要するに李杜の二家は、その性行經歷に於て異り、又その詩風に於ても、大に相似ざるも、其作の神妙なるは、所謂異曲同工であつて、唐代詩壇の雙星として、永く光輝を放つものである。

二七七　盛唐諸家　酣陽四月の春の盛りに咲き出づる花は、獨り櫻や牡丹の名花に限られざるが如く、盛唐の詩界は、李杜以外に無數の詩人を出した。實に盛唐は花の春の四月であつた。王維、王昌齡、崔顥、孟浩然、儲光羲、李頎、高適、岑參、賈至、王之渙、常建、崔曙等は其內での最も傑出した名家である。王維の律詩に於ける、高適、岑參、孟浩然等の古詩に於ける、王昌齡、王之渙等の絕句に於けるは、當時の妙選であつた。諸家が詩界に雄飛した頃の逸事逸聞は、隨分面白き風流韻事に富んで居るが、姑らく省略するとして、諸家の妙作を擧げむに、王之渙の「黃河遠上」、王昌齡の「奉帚平明」「西宮夜靜」、王維の「渭城」と「雨中春望」との如き、又崔顥の「黃鶴樓」、崔曙の「望仙臺」の如き、いづれも律絕の妙品とする、盛唐の作家、多くは天來の音あり。長篇短吟、幾んど苦吟の痕を見ず。方外閨秀にも亦名什多きも、今此には都べて省略して一々擧げない。

二七八　中唐の詩人　盛唐諸家の詩は、已に美の極點に達して、內容外形、ともに幾んど間然する所がない。違つた形の詩體を創出せば、いざ知らず。在來の形では盛唐諸家の上に出ることは、容

易ならぬ業である。中唐詩人の地位たる、亦難いかなである。ところが物極れば必らず變ずとは、よく言つたもので、中唐諸家は、盛唐に天來の想多きを思ひ、寧ろ着想の上に於て一段の巧思を加へ、又文字の上に於て刻鏤彫彩を施して、勝を制せんと欲したやうである。然るに其弊は、彫刻太ゝ過ぎて自然に遠く、作品に雄渾の氣象乏しく、風韻も亦大に劣るやうになつた。此の時に當つて先づ其才華を恣にしたのが、劉長卿である。長卿の七律は最も工絕秀絕との批評がある位で、匠工苦心の痕は、僅かに認められる。長卿と肩を並べて錢劉と稱せられたのが即ち錢起である。錢起を筆頭として、司空曙、韓翃、吉中孚、苗發、崔峒、盧綸、李端、夏侯審、耿煒の十人を、大曆の十子と云ふのであるが、錢起の清贍なるを除ては、司、韓、盧、李の作が、稍ゝ秀出して居るに過ぎぬ。郎士元も當期の作家であつて、亦錢郎とも並稱せられた。韋應物、柳子厚の詩は、ともに陶淵明より出たのであるが、柳は淸峭簡澹で古雅の處があり時として騷意を帶ぶる處がある。韋は閑雅平淡で風韻がある。世に韋柳と並稱するは、その詩源が同じくして、亦相似る點があるからである。韋の「幽居」、柳の「南磵」、いづれもその本色が見られる。其の間に特立して、風骨崚嶒たる詩を作つたのが、韓愈である。愈は古文の大家であると同時に、詩に於ても大家である、その學問才氣あるに任かせて、盛んに橫矯奇險の辭を行つて、それで李杜の上に出ようとした。其詩は雅頌に原本する。「元和聖德」「南山」「石鼓」等の作は、その集中の雄篇である。劉禹錫もその頃の作家で、風格勝れた詩を作つた。白居易と酬和したのが多いから、劉白と稱せられて居る。其七律で「西塞山懷古」七絕で「石頭城」「烏衣巷」等の如き、最も妙品である。居易は即ち我王朝時代の文學に大影響を及した香山居士白樂天である。樂天の詩は、最も平易で人の通曉し易きを旨とした。此點に於ては、韓愈が險怪で近づくべからざる字句を使用したのとは正反對である。其の得意の作として自ら許すのが『新樂府』五十篇、九千二百五十二言であるが、人口に膾炙して、最もその才情を見るべきものは、「長恨歌」「琵琶行」である。樂天と並稱せられたのが元稹で、その「連昌宮辭」は長恨歌とともに名高い作であるが、實は及ばぬのである。古の批評家が白俗元輕と云つたのは、まるで當らぬでもない。孟郊、賈島はともに韓愈の親友で、いづれも一種異つた詩を作つたが、餘り多く當時の嗜好に適せなかつた。蘇東坡は郊寒島瘦と批評したが、それは少し酷である。惡口家の口にかゝつては仕方がない。李賀も險怪な詩を作つて、鬼才と稱せられた位であるが、二十七で死んだ。

二七九　晚唐諸家　晚唐の詩は、多くは柔靡で、專ら其意を好くすることを主として、聲格に多くの注意を拂はなかつた。それも已むを得ぬことで、盛中諸家が已に工力を用ひ盡した後を承けたのと、又一には政度不振の影響とに由つて、振拔することが出來なかつたのである。此の時代に於て、最も特出した作家が、杜牧、李商隱、溫庭筠である。杜牧は風流詩人で、逸話も多いが、其詩は拗峭を以て故らに柔靡を矯めんとした痕が見ゆる。絕句には神韻饒きものがある、「秦淮」「江南春」の如き最も佳作である。庭筠は艷曲に工で、特に七言に長ず。商隱の近體は頓挫沈着なるがあるが、動もすれば徵引多きに過ぐるの弊あつて、獺祭魚の譏がある。世に溫李の稱あるは、其の艷麗の處が相似るからである。七律に佳作が多い。七絕にも多い。「常娥」「賈生」「夜雨」「漢宮」等は、其の重もなるものであ

る。三家の外にて、許渾、司空圖、李群玉、鄭谷、羅隱、杜荀鶴、皮日休、韓偓等は、最も特出せしものである。殊に偓の喜んで香奩體の詩を作つたのは、後世に影響を及したことが少くない。鄭谷の「楊子江頭」許渾の「日暮酒醒」の如き、亦晩唐七絶の傑作である。

二八〇　唐代の散文——復古文　漢代辭賦の發達に伴ひ、魏晉六朝の際に至つて、一種の駢儷文が發生したことは、已に前章に記述した通りであるが、唐初の散文も亦矢張り六朝に沿つて、その文體を因襲したのであるから、駢儷の範圍を脱することが出來なかつた。此際の文壇は四傑の獨壇であつたが、玄宗登極の初めになつては、稍ゝ浮華な文を厭うて理致を索め雄渾を旨とするやうになつた。唐史氏が記載したやうに「燕許擅其宗」は、此時期であつたが、矢張り四六駢儷の調を脱することは出來なかつた。大曆貞元の頃に至つて、韓愈出でゝ古文を唱道し、また柳宗元、李翺、孫樵、皇甫湜の徒が相和して之れを助けたので、唐文復古の氣運が興つた。後世から文は八代の衰を起したと云つたのは、即ちこのことである。然れども復古文の勢力は、未だ全く一代を風靡したとはいへぬ。只一派同志の間に流行したに過ぎなかつたのである。それ故に古文辭復古の際に當つても、陸贄の如きは、斷々乎として、達意を主とする上書奏議に、駢儷體を用ゐたのである。

二八一　韓愈　字を退之といふ。其古文復古唱道の動機は果して那邊に存したか明了でないが、少くとも愈が孟軻を崇拜して、その文章を嗜好したのが根源であつたやうだ。而してその文辭に力を用ゐたことは、「學之二十餘年矣、始者非三代兩漢之書不敢觀……惟陳言之務去、戛々乎其難哉」と自ら言つたのでも知られる。然り儷體流行の際に突然崛起して、久しく人の顧みなかつた古文を復興せんとすることであれば、たゞ陳言を去ることに力めたのは、一見識を具へたものと云はねばならぬが、「上窺姚姒、下逮百家、怪々奇々、不主故常、無所不有、無所不妙、大而化之、故而新之、臭腐而神奇之」と云つた鼻の高さには、少々驚かざるを得ず。しかし空言徒談の人でなかつたから、亦大に鼻の高い所を買つてやらねばならぬ。其文で有名なのが「論佛骨表」であるが、論旨は愚にもつかぬ見解で、殆んど取るに足らざるも、敢言直語した處は、忠質と云はざるを得ず。然るに潮州貶謫後の「謝上表」に至つては、意氣沮喪して、窮愁自ら堪へざるの情が見えて感心が出來ぬ。「鱷魚文」も文章としては面白い。墓志銘諸作に至つては、後世から模範を取る所で、最も體を具へて居る。要するに後世文章の體例題目は、退之より始まつたと云つても差支ない。退之が文の長所は、蒼勁雄拔に在れども、往々に佶屈聱牙に失するものは、其の弊處と云はねばならぬ。

二八二　柳宗元　柳宗元は字を子厚と云ふ。その文の長所は、氣格雄俊なるに在る。而してその議論の精密高古なるは、退之の上に出づ。退之もその文を評して雄深雅健と云つた位である。その文の原本せし所は、重もに『穀梁』、『國語』である。大作では「封建論」「封弟辯」「守原議」小品では游記諸作、最も一家專長の作と云つても誰も異論はあるまい。李翺の文は、韓愈に得た所少からぬが、其の學は禪家に近い、故に理致精邃の作がある。「復性書」の如きは、即ち其の一で、宋儒性理の説は、此伏叢中から出たとの説がある位である。尙此外にて古文專家でないが、李華、元結、皮日休、獨孤及、杜牧、權德輿等の如きも、著名な作家であつた。佛敎家の文章に、佳作多きも、もと文を以て主とせしにあらず。要は其道を敷衍したものであれば、今こゝには擧げぬ。韻文に於て寒山拾得の作を省略したのも、同樣の見地からである。

二八三　唐代の小説　同じくこれを小説と云へども、近世文學に於て云ふ小説とは、その實質を異にするのである。唐代の小説は、矢張り漢代小説と大差なく、重もに物語、隨筆の類で、異聞雜事を記述したものが多い。その現存するもの、凡百六七十種に上るが、其内で間ゝ史實の旁參にもなり、或は後代の戲曲、又は我國文學上に影響を與へたのもある。そこで今その二三を列擧するも、無用ではあるまい。

『開元天寶遺事』『明皇雜錄』『開元傳信錄』『楊太眞外傳』『梅妃傳』『長恨歌傳』等の如き、いづれも玄宗の全盛時代を想見することが出來る。史外の史と云つてもよい。殊に『長恨歌傳』は、白樂天の歌の來歷を記述したので、長恨歌研究者が是非とも一讀を要する價値がある。其他上記の諸書は、皆玄宗掖庭の遺聞を叙したので、趣味津々として容易に盡きぬ。清朝傳奇の『長生殿』は、疑もなく此等の諸書を合して、作り出されたのである。『會眞記』は、元稹の作であるが、元劇の『西廂記』は、全くそれを粉本として脚色したのだ。張文成の『游仙窟』は、早く我邦に渡來して、已に王朝時代に愛翫されたのであるが、後世の淫書は、多くは此種の作に倣つたのであらう。それから李義山の『雜纂』は、淸少納言に眞似られて『枕の艸紙』となり、李泌の『枕中記』は、謠曲作者に飜譯せられて、「邯鄲」の一曲となつた。

此等は眞の一例に過ぎぬが、若し仔細に考量して、一々其影響した所を擧げやうならば、幾らでも其の例に乏しくない。

六　宋代の文學

二八四　總論　唐後宋前、五十餘年の間は、歷史上に謂ふ所の五代で、文學は最も衰微した時代である。猶ほ我室町時代と同樣で、戰爭簒奪が、當時の社會の實情であつた。尤も此の際に於ても、全然文學絶滅に至つたのではない。山河水濱には、世事に遠かつて、兀々として机上の塵を拂つた學者文士もあつたに相違ない。其の頃の君主にも、興學の志を懷いて、書籍の板行を成した人もある位であつたが、何を云つても爭亂の時代で、その結果を收むることが出來なかつたのは、殘念の次第である。宋朝は右の五代を承けて、天下を渾一したが、中葉以後は甚だ振はず。北人の爲めに壓迫せられて、南方に遷都し、終にそこにも居かねて、舟の中で滅亡したのであつたが、その政權を執つた時期は、南北を通じて約三百二十年である。宋主は前代の政治に鑑みる所があつて、大に文臣を重用し、地方官の如きも重もに文事に秀でたものを採用したので、一代の文學の淵源は、少くとも此際から開けたものと視做さねばならぬ。爾來君主中にも篤學者多く、上の好む所、下は固よりで、涵育の結果は、多くの文學者を出した。そのうへ宋代では時勢の必要上、論策を以て官吏を試用したので、散文家の輩出は、韻文以上であつた。丁度唐代の試驗法は、詩に重きを置いたから、多くの詩人を得たのと同樣である。且又五代風俗の頽敗は、德育の缺乏より來たものと思つて、大に節義名敎を奬勵したから、廉恥を重んじ、名節を尙ぶ風習が、一般に興つて來た。

それに一方に於ては、六朝以來印度佛敎の感化は、次第に上下の人心に及び、知らず識らずの間に、當時の思想界は、一大變動を來した。漢唐以來、一尊を立て、道德學術の中心とした儒敎も、それが爲め鼎の輕重を問はるゝやうになつたの

で、儒學者等も今は晏然として居られず、見正破邪の爲めには、彼徒の敎義を窺つた上にて、適當な方法も見出すべしと思惟し、相率ゐて佛敎の研究を企てたが、其の中に入つて見れば、理致深遠で、復た返り難き妙處も認められる。此に於てか其の關鍵を假りて、儒敎の藏庫を開闢せんと思つたのが、即ち宋儒の性理學である。

性理學の興起は、思想界の豐富を來たしたに相違ないが、其の弊は、專ら哲理的講論と、靜坐默思とに耽つたので、その文學上に及ぼした影響は、餘り偉大であつたとは云へぬ。尤も理致を主とする所の散文には、直接間接に思想の豐富を附け加へたことは無論であるが、その談理的風習は、疑もなく言外の餘情を尙ぶ韻文の發達を妨げた。而してその議論を好み、理義を爭つた影響は、只社會の各方面に黨派心を誘起させたことの外には、何の好結果をも起こさなかつた。見よ學界に諸派の學案多かつたこと、政界に起仆の劇しかつたこと、社會に統一が缺けたことを、而して宋の王家が贏ち得たのは、只滅亡の一つであつた。

右の如く宋は性理學流行極盛の時代ではあつたが、人々皆この學を好んで、其研究に心力を注いだのではない。同時代にても、その習氣を嫌つた學者も大分あつた。而して此に注意すべきは、それ等の多くが、宋代有數の文學者であつたのみならず、一方に於ては、「道理貫心肝、忠義塡骨髓」の氣節家であつたことである。されば宋代社會の世道人心は、文學者に由つて維持されたものが多いと云つてもよい。思ふに王家が文治政策を執つて、文雅を推奬した趣旨も、此邊に存したのであらう。

二八五　宋初の散文

北宋建國の初の文界は、五代衰颯の餘風を承けて纎儷雕獱であつた、唐代に於て韓愈柳宗元等の文豪が、一時に崛起して文界の刷新を謀つたけれども、未だ一代の文運を指導する程の勢力は有たなかつた。それに唐祚も漸く衰へて、五代暗黑の時代となつたので、文界の荒廢は、荊榛滿目、前路を塞ぐといふ有樣であつた。宋興つて後、柳開まづ偶儷の體を變じて古文を作つたが、才力いまだ其志に伴はなかつた結果、稍々艱澁に近かつた。穆脩出でゝ韓柳を表章したので、同好者も次第に其の數を增し、尹洙又出でゝ、柳穆二家の後を繼ぎ、古峭勁潔の文を作つて、五代以來の浮靡の習氣を一洗したので、文園の雜草も、初めて削芟せられたが、更にこれを植うるに如何なる良種を以てすべきかは、歐陽脩を待つて定まつた。

二八六　歐陽修

字は永叔、その生れた時代は眞宗の中年で、男盛りは仁宗極治の世であつた。其頃は宋興つて恰も百年内外、四方事なく、天下太平で、文學の發達には最好の時期であつた。そこに永叔は前賢の緖餘を承けて、文壇の先頭に立ち、殊にその性格が和樂で古を好んだのであつたから、その文は、雍容和雅紆餘曲折の妙を盡し、當時の治化と相待つて、典雅の範を垂れた。約言すれば宋代の文學は、その散體であると韻文たるとを論ぜず、永叔に至つて初めて方途を得たのである。これより幾多の文學者も、彬々として蹶出したのであるから、永叔の地位は、前を承けて後を開いたものと云はねばならぬ。

永叔の文は、もと韓愈から出たが、その變化の工力は、愈が勁直を變じて豐厚となした、書序の作は、最もその長所で、『蘇氏文集』『梅聖兪詩集』『釋秘演集』等の序は、殊に其の紆餘曲折、徘徊俯仰、限りなきの神韻を極めたものである。史筆も亦稱道するの價値がある。『五代史』及び『新唐書』の紀志表等は、均しくその手撰に係る。その文、簡にして明達で、識見文章、ともに高く、十分に一唱三嘆の妙味がある。

二八七　三蘇の文章

歐陽脩已に宋代の文苑に一株の佳花を放つてより、その藩籬に傍つて發生した數種の名花は、やがて芬芳をその苑裏に捲き散らした。それを三蘇王曾の諸家と爲す。

三蘇とは蘇軾、字は子瞻、號は東坡を中心として、父の洵、字は明允、號は老泉、弟の轍、字は子由、號は潁濱を並稱したので、世人は又老泉を老蘇、潁濱を小蘇と云つて、大蘇の號を東坡に被らせた。東坡の文才は殆んど天才で、宋代の第一流であつた。文界の地位より云つたならば、父としての明允も、其子を壓することは出來ない。まして弟の子由は其兄に忠順ならざるべからざるは勿論である。

蘇氏一家の學はもと縱橫を雜へたのであるが、其の力を得た所は、均しく先秦の古書である。老泉は最も孟子の文を崇尙したが、その譬喩に巧みな處は、亦孟子に似て居る。而して古勁簡至、字句を鍛錬した處は、二子も及ぶことが出來ない。此老もと蜀の僻境に成長して、賢師友の助けを假つたでもなく、獨り古書に對して、一意それを師友として、一家の文を出したのであるから、意氣縱橫、筆勢矯々として、曾つて媚附の態を有たなかつた。二子は其家法を繼承して、更にその氣局を開展した。

二八八　蘇東坡

の人格は高潔、襟懷は平坦で、最も兄弟交友の誼に厚く、大節氣慨に富んだので、事に臨みて、敢えて說論直言するを憚からず。苟も己を枉げて世俗に迎合するが如きことは、その決してなし得ぬ所であつた。それ等の性情は、直ちにその文章に發露して、一氣直往、光芒陸離の文を成したのである。東坡自ら其文を評して「吾文如萬斛泉源、不擇地皆可出、在平地滔々汨々、雖一日千里無難、及其與山石曲折、隨物賦形、而不可知也、所可知者、常行於所當行、常止於不可不止、如是而已矣、其他雖工、吾亦不能知也」と云つた。其文の妙處は、幾んどその自評に言盡されて居る。要するに、其の才力の大なると、胸中に百萬の書卷を蓄へたとに由つて、圓轉滑脫、喜笑怒罵、皆その文辭を成したのであらう。

然れども其の遭際は、多くは逆境であつた。當路の勢家は、東坡の才氣を惡んで、或る時はこれを死地に擠さんとしたこともある。幸に宥免せられて南荒萬里の外に貶謫せられたが、厄窮困苦、米鹽日常の供給にすら事缺きたるも、その志氣の曠達なると、得力の深厚なるとは、曾てその志を沮喪することなきのみならず、却つて此際から雄渾雅健の文を作るやうになつた。賴襄が「東坡少時之文、有過流宕、而乏勁拔者、至海外文學、如健鶻擊空、老氣橫秋」と評したのは眞に適評で「范增論」の如きは其の一例である。

その金石の大作としては、「司馬温公」「韓文公」の二碑と、「表忠觀」とを推さざるを得ず、特に「表忠觀」の銘辭に至つては、絢爛として人の目を奪はむとす。東坡の學、亦佛氏に出入したので佛語佛理を打て、自家の文章を作つたのもある。「勝相院經藏記」の如きは、即ちそれである。小品文中には寸鐵殺人の機を具したのが少くない。要するに大家の技倆は、小大兼ね到らざるなく、大題目に對して、大文字を出し、小題目に逢つては小做して、曾て差過しない。卷舒自由、出入手に在る所が、自ら大家の面目であらう。

二八九　蘇潁濱

の人格は東坡とは頗る趣を異にし、深沈恬澹である。そこで其の文に發現せるのが、渟蓄淵涵の妙味を

具へた上に、法度整齊して、語句の鍛錬を積んで居る。「上韓樞密書」は、年十九の時の作であるが、氣象の雄偉なるは、獅子食牛の概あるものである。論策は一家の家法だけあつて、委曲明暢の作に乏しくない。「隋唐」「三國」「六國」等の諸論の如きは、即ちそれである。之れを要するに蘇家の二子、ともに乃翁の家法を繼承して、文を作つたが、性格の相同じからざるより、自ら文辭に別様の趣を成したのである。然れども二子均しく各節を砥礪して、識力卓拔の文を作つた所は、慥かに乃翁の衣鉢を分繼したものと云はねばならぬ。

二九〇 曾王及び其他の諸家 曾鞏、字は子固、其文は典雅餘りあつて、精彩足らざる故、人に倦怠を起こさするも、其の學術は、頗る醇正であつたので、『戰國策』『列女傳』『陳書目錄』等の序の如きは、頗る其の學術の本原を窺ふことが出來る。「道山亭記」も亦その集中の出色文字である。王安石、字は介甫、頗る不人望な政治家であつたが、文學者としての地位は、決して卑くからぬ。其文は峭潔を以て勝れて居る「慈谿縣學記」「孔給事墓志」の如き、傑作である。「上仁宗皇帝言事書」は集中の一大雄篇であつて、規模整齊せる處に、最も大家の技倆が認められる。併し介甫の長所は、その文の拗折轉化する所にあるので「讀孟嘗君傳」の如きが、即ち其例である。

唐宋八家の稱が、朱右に由つて唱出せられてから以來、八家の外には文章家なきやうに思はれたが、その實決して然うでない。八家とは唐の韓柳、宋の三蘇と曾王とを並稱したのであるが、右の外に於て、范仲淹、司馬光、李覯等あり。尚ほ其名甚々顯はれざる人で、能文の倫に乏しからず。范司兩公は當時の宰相で、文學を以て特出した人ではないが、其の文の美は、自ら、當時の人々に膾炙したのである。范の「岳陽樓記」、「嚴子陵祠堂記」の如き、即ちそれである。司馬の史論に於ける、最もその識力が窺はれる。李の「袁州々學記」に至つては、筆力雄健で、氣力あり光餤ある傑作として、これを稱道するの價値がある。

二九一 南宋の散文 文章の盛衰も、一代社會の盛衰と、相表裏して、その影響を見はすのであれば、宋室南渡の衰運は、やがて南宋文運の衰弱となつたのも、無理ならぬ次第である。

北宋時代の文は、作家の各優劣があつたに拘らず、通じて雄偉疏宕の文に富んだ。南宋は、衰颯の氣勢を現はしたけれども、悲壯慷慨の文は、北宋全治の日に現はれずして、却つて南宋否運の際に多かつた。王十朋、呂祖謙、陳亮、朱熹、葉適等の諸家は、いづれも南宋の作家であつた。十朋は理致を尙んで、浮虚靡麗の詞を避けたが、その文の好き處は、典雅な點であらう。祖謙の文は、博辯宏肆で、筆々活動して才思極りなきやうである。其の人もと博く群書を涉獵して、學術に根柢があつたから、自ら然るを致したのであらう。祖謙は東萊と號して、『東萊博議』を著はした人である。葉適は水心と號する博學雄才の人であつて、其の文は峻潔醇雅で、自ら典則がある。朱熹は道學家であつたが、其の作る所の文は質實で、亦文學の才をも具へたのである。他の道學家等が、口頭の俗語を羅列して、禪家の語錄に比擬し、能事これにて足れりとするに比すれば、雲泥の差違がある。陳亮の文は雄驁で、もと蘇家の文を學んだのであるが、粗氣橫生、未だその藩籬を窺ふことが出來なかつたのである。大抵諸家は同時代に出でたが、當時仍は北宋人の典型存在したので、文に根源する所があつたやうだ。

南宋の末年は、社稷存亡の際であつたが、それでも文天祥、謝枋得の兩家があつた。兩家ともに節義の士で、詩文は餘事に過ぎなかつたが、均しく悲壯慷慨の辭章を遺こした。

二九二 宋初の詩——歐陽修 宋詩の發達は、恰も文界と同様の經過をなした。國初に於ける詩界の不振は、文苑のそれのやうに、五代の餘風を承けて、纖佻薄弱の弊に陷つたのを、楊億まづその體を一變せむと思つて、隨分力を出したので、劉筠、錢惟演の二人が、それに倣つて詩を作つた。而して三人で新詩を作り初めて、互ひに唱和した。それを集めたのが、『西崑酬唱集』と題せられたので、時人はその體を稱して、西崑體と云つた。この人たちが崇拜したのは、晩唐の李商隱であつたが、只詞華の妍美にのみ注意したので、やうやく其の本眞を失つて、攻擊者が出た。三人に續いて蘇舜欽、梅堯臣の兩家が出た。梅は古淡を旨とし、蘇は豪放を喜んだが、相共に新意を出して、詩を作つた。而して西崑體の弊を矯正したので、久しく流行した五代以來の鄙蕪の氣も、幾んど一掃せられた。恰かも文界に於ける穆脩、尹洙の地位に居たのである。二家已に舊弊を一掃せしも、神明變化の功は、尙ほ後人に待たざるを得ず。

そこで歐蘇の二家は、其の後を承けて、宋詩の大成を遂げたのである。

二九三 詩人としての歐陽脩 は文人としての如く當時の指導者たるべきものであつた。脩と梅堯臣とは年輩で云へば、堯臣より少きこと、僅かに五歳で、堯臣の死後十二年生存した。此十二年間が脩の爲めには、最も光輝ある時期であつた、其詩は杜子美、韓退之を崇宗した。七古は長所である。「廬山高」は脩が自負した作で、その同志間の嘆賞は、甚しきものであつた。「春日西湖」、「晉祠」、「日本刀歌」等の如き、最も著名な作である。「明妃曲」二篇も得意の作で、その前篇の如きは李白杜甫と雖も、得作るまじと自負した。脩の詩は、自ら機軸を出して、決して前人の思想を踏襲しなかつた。杜韓を學んで、杜韓の面貌を眞似ない處が、大家の技倆と評せねばなるまい。

二九四 蘇軾及び其門流 蘇軾が宋末文學に於ける地位は、詩界文界ともに歐陽脩の後を襲いだのである。才力の雄大であつたことは、もとより遠く歐陽の上に出でた。一代の文宗で、又一代の詩宗であつた。その詩は雋絶雅健で、骨力風韻、並び勝れた。まるでその人格性行と一致して居る。その筆力の超曠なると、才思の橫溢せることは、李韓の長處を併有したやうである。

前にも云つたやうに蘇氏一家の學は、いづれも力を先秦の古書に得たので、腹中に數萬卷の藏蓄がある。特に東坡の博覽は、釋藏經論にまで及んだから、趙翼が評したやうに「胸中書卷繁富、又足以供其左旋右抽、無不如志、」である。且つ其人もと散文の作家であるから、文を作るの法を以て、盛んに之れを詩を賦する上に應用した。韓愈も此の手段を用ゐたが、東坡に至つて別に一生面を開いた。蘇家の散文は、いづれも巧に譬喩を用ゐたが、東坡は直ちに其法を詩に移した。詩中には譬喩が多く、その譬喩が巧妙を極めて居ること、蘇詩の上に越すのは、まづ多くはあるまい。又その心地高明で浮世の窮通得喪に對して、それを視ることが、雲煙の眼を過ぐるやうに思つたのだから、其詩にも自ら超脱した處がある。そればかりでなく、平素禪味を愛したのだから、往々に禪語を飜弄して、詩を作つた。自分でも「供禪以爲詼」と云つた。詩人が遊戲をなすには、禪も釋迦もあつたものでない。悉く擧げてその材料となるばかりであつた。

東坡兄弟の間柄は、極めて友愛の情が

深かつたが、其の唱和の作を見れば、藹然たる友子の情が、最も楮墨の間に發露して居るのが見える。詩は心の聲である。其詩に對して其人を思へば、益々東坡の人格性情が眼前に髣髴たるやうである。

「石鼓歌」、「煙江疊嶂圖」、「定惠院海棠」「五丈原」等の作は、最もその集中の好詩であらう。「澄邁驛通潮閣」は七絶の妙品である。頼山陽の「大隅嶺」の詩は、これを剽竊したのであるが、剽竊の仕方が極めて拙い。

東坡以後の作者は、まづ蘇門の四學士である。四學士とは、黃庭堅、張朱、晁補之、秦觀で、それに陳師道、李廌の二人を加へて、蘇門の六君子ともいふ。皆東坡の門人である。中に就きても黃庭堅最も有名で、蘇黃と並稱せられた。

庭堅は字を魯直と云つて、山谷と號した。其の詩は、もと杜子美を學んだが、變じて深刻となつた。それは峭拔奇巧を主としたからであつて、其の弊は生硬に過ぎ、怪僻に陷つた。松艾軒が蘇黃二家の詩を評した言が面白い。それはかうである。「丈夫見客大踏步便出去、若女子便有許多粧此坡谷之別也」。

二九五　南渡以後の詩人　南渡以後の詩は、氣格大に降つて、北宋諸人に及ばないが、それでも、尤袤、楊萬里、范成大、陸游等あり。中に就きても范陸最も有名である。范は石湖と號す。即ち『吳船錄』の作者であつて、其の詩は、好んで田園の光景を作つたが、稍々恬綿の失がある。

二九六　陸游　は南宋の詩界では、第一の大家である。字は務觀で、放翁と號した。天性忠厚の人で、頗る國家の衰微を慨歎し、何とかして往時の盛況に恢復して見たいと、始終念頭に懸けた。そこで其の詩に現はれた所も、此の一縷の精神が活動して、或は悲憤の處があり、豪放の處もある。詩源は矢張り杜甫で、最初は藻繪を專らとしたのが、中年以後は改めて宏大の作を主としたと、自分で言つて居る。其の一生中に作つた詩數は、一萬餘首に上る。「舟中對月」、「成都書事」、「書憤」等の作は、その集中の好詩である。

朱熹の詩も名作が多い。特に五言に多い。道學で有名で、詩文は其の餘事に過ぎなかつたが、中々隅には置けない處がある。「盧山雜詠」數篇の如きは最も上作である。

二九七　文天祥　文天祥は宋末の忠臣で、滿腔の浩氣は、悲壯慷慨の詩となつて發露した。「正氣歌」は最も人口に膾炙する作である。『前後指南錄』中に尙ほその志氣精神を想見すべき作が甚だ多い。若し此人が國家無事の日に生れて、從容として專ら文學に從事したのであつたならば、必らず一代の大家として數へられたであらうに、史上に忠臣の名を留むるやうになつたのは、最も惜いことである。

（古城貞吉）

近世（元以後）

二九八　緒論　支那文學史上、近世といふのは、元から今の淸朝までで、この時代は、政治上に於ては、異人種の勢力、非常にして、風氣自ら前代に異なるのみならず、因襲的思想緊縛の機會に出會ふことが數〻であつた。そこで、文學者の思想も、極めて自由で、その範圍も、大に廓張された觀がある。

勿論、一般思想界表面の趨勢は、依然として、前代を繼承しただけであるが、大體をいへば、硬文學は漸く衰運に向ひ、戲曲小說等の俗文學が、長足の進步をなして、代つて、其地を占め、前代に缺亡せるを補つて、文學の類別は、はじめて備はつて來た。されば、近代の支那文學は、なか〳〵價値あるもので、單に詩文のみを以て、文學とした前代に比して、斷じて優るとも劣らぬものである。

こゝでは、便宜上この時代を、更に分つて、金元文學、明代文學、淸代文學の三期として。略論しようと思ふのである。

七　金元文學

二九九　異人種の優勢と文運の消長　金元は其源に溯れば、遼に接する故に、先づ遼に就いて概說せねばならぬ。

遼は、古しへの契丹、ツングス族の一派で、松漠より勃興して、五代の頃からだん〳〵盛んになつた、かくて、その極盛時代には、漢族の文化を輸入し、唐宋の制に倣つて文學を以て人を取り、大に經術をも尊んだ。しかも、地理的影響の然らしむる處、その風氣、あくまで剛勁、且つ三面に敵を受けて、蒐獮を以て本務とした故に、典章文物は、その割合に進步しなかつた。『遼史文藝傳』に據ると、文學者らしい人も澤山あるが、今は、その作品さへ傳はらぬ位である。

金は東胡の別種で、もと女眞といひ、今の滿洲人種と同じ種族である。金の文化は、二處から來たので、一は遼、一は宋。太祖は、遼の舊人を任用して、使介往復の任に當らしめ、太宗の時は、遼の舊に沿うて、選擧の法をも設けた。これに次いで、宋を伐つに及びて、多く經籍圖書と士人とを得、宋から使の來たとき、學問の出來さうな奴は、拘らへて還さず、厚祿を與へて、其心を誘ひ、遂に臣として、其技能を用ひ、やがて、發達日に增し盛になつた。勿論、その國運、不幸にして短く、忽ち滅亡の否運に臨んだが、百年積漸の文化は、その末造に於て、多くの人材を輩出せしめた。

次は元、即ち蒙古。元人は、自國に、文字があつた故に、漢族の文化を移植することは、比較的に遲く、その後、國がいくつかに分れ、元室が支那本部だけを領する樣になつて後に、はじめて漢族の文化を保護し、やがて、大分盛になつて來たのである。

金元の文學といつても、金元人の手に成つたものではなく、金元人統治の下に於ける漢人の製作に外ならぬのである。しかし、主治者の好尙及び時勢の感化は、明かに認めることが出來て、その間に、自ら特色がある。

金の文學は、詩を主とし、その他に及ぶ暇もなかつたが、元になつては、更に曲を加へた。兩者ともに國を朔北に建てて、風俗豪健なるが故に、自ら一種瑰麗悲壯の聲調があつて、その前後と自ら趣を異にして居る。それから、元の詞曲は、その特有の產物で、その價値も亦た極めて多大なるものである。

三〇〇　金朝文學の先聲　金の文藝は

遼宋二朝の舊人によつて、播種された。その中、殊に主要なるものを擧ぐれば、宇文虛中は宋人で、學問淵博、才藻多く韓防は遼の舊臣で、善く文を屬し、詔冊が上手、吳激は、宋の使となつて、金に往き、其地に拘留せられたまゝ、遂に臣となつたもので、樂府に工にして、造語淸婉、哀んで傷らずと評せられて居る。蔡松年は、宋人の子で、之と所長を同じうし、淸麗芊綿、時に吳蔡といはれて居た。それから、馬定國、高士談は、前後之に相踵ぎ、なほ此外に、王樞、李獻可、魏道明は遼より來り、王競、杜佺、兆會、朱之才、施宜生は宋から來た。

次に金人として、はじめて名を成したのが、蔡珪、孫九鼎、趙可、遼元鼎等で、その他、鄭子聃、劉汲、劉瞻、郝俣、馮子翼、李晏、王運寂、劉仲尹等、皆一時に名を成し、その所長は同じからざるも、韓高吳蔡に繼いで、祖述の功を盡した故に、蕭楨の功、空しからず、やがて、大定明昌貞祐正大の隆運を致し、金の文學こゝに、はじめて、振ふやうになつた。

三〇一　金朝盛時の諸家　世宗の大定より哀宗の正大に至るまで、七十餘年間は、金朝文學の最盛時期で、大定明昌の際には黨懷英あり、貞祐正大の際には趙秉文あり、その家數は、固より大小の別あるも、位地聲望の上から、宋の歐蘇に比せられて居る。

黨懷英は、隱士的な人で、殊に詩に長じ、神韵縹緲、觀るべきもの多く、金朝第一の作家である。王庭筠は稍や次なれども、略ぼ雁行するに足る樣である。

趙秉文の詩は、幽麗の中に一種悲壯の氣を含み、まさしく、金詩の特色を發揮して居る。なほ、彼は、當時の文弊を矯正し、之を以て士を取り、丁度、歐陽修の宋に於けると同じく、文章風騷の主として、生前盛名を擅にして居た。楊雲翼は、之と相並んで、一時楊趙と稱せられた。

この外、李純甫、雷淵の二人が最も名高く、その前後には、趙昻、劉中、路鐸、高憲、趙元、王若虛、麻九疇などが、詩人として、知られて居た。

これを一概するに、金に於ては、文よりも詩の方が盛であつたので、その理由は、彼等は、もと文字さへ無かつた國民であつて、俄に漢族の文學を輸入したのであるから、美的情操の煥發するところ、自然詩の方に傾いて、詩人を歡迎したからでもあらうが、又、一方からいへば、當時兵亂の世でもあり、思想を鍛錬する暇が無かつたから、むづかしい論策よりも、短い詩句をひねくる樣になつたのであらう。かくの如く、一方に片よつて、專門的であつただけに、金の詩は、十分に特色がある。これより前の宋の詩は、散文化して居るし、これより後の元の詩は、詞曲化して居るが、金の詩は、純然たる詩である。そこで、宋詩の新あるも、その鄙俚なく、元詩の麗あるも、その纖巧なく、風土の影響を受けて、あくまで悲壯ではあるが、爽亮の處がある。元遺山の『中州集』は、金一代の詩を選錄したもので、その作家は、無慮二百四十餘人、隨分盛なもので、金詩は、なか〳〵以て馬鹿にならぬ。そして元遺山、その人は、金朝掉尾の一大作家であつた。

三〇二　元遺山　金の文學を重からしめたのは、元遺山で、名は好問、字は裕之、太原定襄の人、金が亡びし後は亡國の遺臣を以て自ら居り、再び出でて仕へもせず、せめては、金一代の事蹟を後世に傳へやうといふので野史亭を家に構へ、ごしごし記錄を始めて、著述なども頗る多い。

遺山は、詩文ともに長じて居るが、重なものは詩である。人は朔地に生まれて、豪健の血脈を承け、地は山河崔嵬の處、時は社稷の滅亡に際したので、かく三拍子揃ふからには、えらくならねばならぬ筈である。その詩は、識く時を傷み國を憂ふる至情から出たもので、悲壯激越、たとへば、胡天の羌笛を聞くが如くである。次に體形上から立論すれば、いづれも偏頗なく一通行き渡つて居るものゝ、近體よりは古體に長じ、中にも樂府が第一、次に古詩、律は必ずしも本色ではないが、對仗精當、神氣疏暢にして、往々李杜の壘を摩するものもある。それから其文は、筆力勁健にして宏雅、もう一つおまけに、其詞は、雅麗幽雋、稼軒の蹤を追ふに足る如くである。

併し趙甌北の言つた如く、遺山の才は甚だ大ならず、書卷も亦た甚だ多からず、蘇陸に較ぶれば、自ら大小の差があつて、更に杜甫に比すれば、孫どころか曾孫位の見當である。しかし彼は自知の明があつて、巧に之を使ひこなし、才大ならず書卷多からざる代りに、專ら精思銳筆を以て洗錬して、之を出し、雕悍沈思を以て、其長を擅にして居る。彼は、幸に前人に於て見るべからざる地と時とを得たから、善かつたものゝ、もし蘇陸乃至杜甫をして、之に當らしめたならば、その得るところは、必ずや彼に十倍したであらう。して見れば、彼は運命の寵兒である。もし彼の缺點を知らむと欲せば、律詩を見るべく、その複句の多き、自ら其才の窘を示して居る。

元遺山の弟子に、郝經、號を陵川といふ人があつて、元初に於ける知名の士であるが、その詩文は、遺山に酷似して、或時は、殆んど、甲乙し難いものさへある。

三〇三　劇の發達　春秋の頃、すでに俳優といふものがあつたことは、史上に明かであつて、假裝劇の一種は、遠く其源を周代に發し、漢魏以來、遲々たるながらも、漸次發達しかゝつて來た。それから、古しへ、歌と舞とは、全く何等の交渉もなかつたが、唐人が、「柘枝歌」、「連花鏇歌」を作つてより、舞者の執るところと、歌者の措くところと、その詞が、稍や一致する樣になつて來た。しかし、まだ事實を以て脚色したものはなく、劇曲は成るに垂んとして、まだ成らずに居た。

宋になると、鼓子調といふものが出來て、趙德麟が『會眞記』の事實を詞曲に譜した『蝶戀花』が、その元祖である。鼓子調は、一人鼓に和して歌ふ故に名づけたので、いはゞ歌ひ物の一種であつて、諢詞といふのと大抵相似たものである。

それから、金になると紘索調といふものが出來た。これは、一人琵琶を彈じて念唱するもので、一に彈詞ともいふが、白もあり、曲もあり、いはゞ、我が邦の淨瑠璃といつた樣なものである。

紘索調は、更に進んで、連廂となつた。こは、金人が遼時大樂の制に倣つたので、こゝに至りて歌舞は合同し、はじめて舞臺の裝置を見ることになつた。連廂には、歌者たる司唱一人、琵琶笙笛を彈吹するもの各一人の外に、男形たる末泥と、女形たる旦兒と、並に褋色人若干あつて、勾欄に入つて扮演し、歌に從つて所作をするので、大分劇に近く成りかけて來た。連廂の義に就いては、種々の異說があるが、これは略して置く。この連廂が元に入つて、更に發達して、褋劇、即ち雜劇となつた。

さて、何故にかくの如く劇が發達したかといふに、元人は、もと風霜嚴しき朔漠の野に、天幕中の生活を送つた蠻民であつたのが、俄に比較的水軟山溫なる支那本部に入り、從前の文化に眩惑し、その性情志氣の上に大變化を來たし、昔日勤儉苦楚の反動として、驕奢淫佚の風に移り、耳目の快樂を恣にするに至つた

のが、その最大原因であらう。それから、元人は、西方アジアを蹂躪し、今のロシアにまで攻め入り。又歐人もはる〳〵來朝し、當時東亞の交通は、隨分頻繁であつたから、幾分は歐西文化の影響でもあらうかと考へられる。

雜劇に於ては勾欄に舞ふものが自ら歌唱を司り、たゞ笙笛琵琶を設けて、其曲に和するので、我が邦の能と極めて相似て居る。否、日本の能は、取りも直さず、元の雜劇の影響を受けて出來たので、室町の初期は、丁度、支那元明の交に當り、五山の坊主が、支那に渡り之を觀て來たから、出來たので、この事は、新井白石太宰春臺などが、既に明言して、斷じて、疑ふべからざる事實である。そこで、雜劇は劇として所作に乏しく、甚だ間が扱けたものであるが、重んずるところは、知音善歌に在るからである。この雜劇の文句が、即ち曲で、雜劇の特質として。入場ごとに、四齣を以て度となすが故に、その曲も、亦た必ず四折になつて居る。雜劇は事實を譜するのであるが、四折と定まつて居て、甚だ窮屈である。そこで、無論四折を超過した曲本も出來ねばならぬ、筈で、元末になつて、此種のものが大分出來たが、之を名づけて院本といつた。即ち世に謂ゆる傳奇である。この種の劇に於ては、司唱一人を定めて、勾欄の舞人に代りて唱を跳らしめることになつた。しかし、舞人が自ら唱ふる場合は、代唱といひ、それも唯だ二人で、末泥は男唱を主とし、旦兒は女唱を主とし、その他の事は、決して唱へない。それから、裸色人は、場に入れば、唯だ白（セリフ）だけを唱へる。これが即ち北曲で、はじめ、主として北方に發達した故に、名づけたのである。

北曲は、北人の創意で、その性質上、南人には面白くないから、元末明初に至つては、南曲が起つた。南曲に於ては、裸色人が白（セリフ）も唱も幷せて之を爲し、後には、又衆樂器を合せ奏することになつて、何でも、大分賑かなものである。なほ、南北兩曲の差異は、いくらもあるだらうが、今日から見て、詳細な事は、殆んど分らない。

劇の發達及び類別は、大抵この位にして置いて、予輩の主とするのは、これ等の劇に伴へる劇文、即ち脚本の文學的批判に在るので、その對象となるのは、『元曲百種』、及び『西廂記』、『琵琶記』で、これが雜劇及び南北兩曲の代表者である。しかし、其前に、此等が如何に作られてあるかに就いて一言せねばならぬ。

三〇四　戲曲の形式　宋金の間に於ける鼓子調、絃索調、連廂等は、劇の發達上、極めて重要であるが、その曲本は、今殆んど殘つて居らぬから、詳しいことは分らない。次に起りし雜劇の曲本は、全篇殆んど律語より成り、その間の接續として、時文を用ひてある。その律語は、即ち曲であつて、唐宋の間に行はれた詞（一名塡詞、詩餘）から變化して來たもので、その平仄韵法は、なか〳〵六づかしい。

雜劇は、前にもいつた通、必ず四折で、この外、或は、楔子といふものがある。大抵は、通篇の首に在るが、或は其間に在ることもある。それから、各折は長短一ならざるも、白曲を合はせて、一言三千言内外を普通として、一折を通じて、一韵到底で、且つ第一折の、破題は、仙呂點絳唇の調を以て起るものが多い樣である。

傳奇は、形式上からいへば、たゞ雜劇を敷張しただけの樣だが、その拘束が、多少寛になつたらしく、一齣必ずしも一韵到底ではない。それから、曲に襯字といふものがある。襯字とは、一定の平仄聲調以外に、字を挿むことで、これが規則なきが如くで、暗々裏に定式があり、作者の最も苦心するところで、いはゞ曲の生命である。これ等は、自ら相互の比較を爲して、神解すべきもので、なか〳〵、詳しく説明することは出來ない。

北曲と、南曲とは、その動作の上に於て、即ち舞臺の裝置、優人の扮作に於て異なるばかりでなく、その曲本に於ても、自ら異なつた處がある。元來、北方と南方とは、風氣を異にし、從つて、言語を異にするから、自然にかくの如くなるので、李笠翁などは、詳しく、南北二曲の差異を論じて居るが、時と處とを異にせる我々には、とんと分かり兼ねる。しかし、一番目に付くのは、例の襯字が、南曲には少く北曲には殊に多きことと、南曲は殊に多く詞牌を用ひることである。

支那戲曲の變遷を最も明白に示して居るのは『西廂記』で、唐の元微之の『會眞記』は、一變して宋の趙德麟の『鼓子調商調蝶戀花』となり、再變して金の董解元の『絃索西廂』となり、三變して元の王實甫の『西廂記』となつたので、その比較は頗る興味がある。

三〇五　雜劇　元の雜劇は、その數に於ては、極めて豐富であつて、何でも、六七百ばかりはあつたらしく、その中で、最も面白いものばかりを扱いたのが『元曲百種』であるが、この本も、今になつては、容易に求められず、支那に於ても極めて少く、そこで、元曲の研究は、頗る困難である。

さて、何故に、雜劇が、かくの如く、一時極めて盛に製作されたかといふに、これには、人爲的刺激があつて、元代には士を取るに雜劇の製作を以てしたといふのが、普通の説で、即ち唐に於ては詩を以てし、宋に於ては論策を以てせしと略ぼ同じく、そこで、士人は爭つて、之に趨向したといふことである。しかし、此事は、歷史に見えて居らぬから、一寸首肯し兼ねる節もある。尤も、元代に於ては、僧尼の考試をさへ行つた位であるから、士を取ることは、しばらく措き、或は特に一門を設けて、梨園の供奉に備へる爲に、雜劇の作者を試驗したといふことは、隨分有り得べきことである。何は兎もあれ、かゝる説をさへ生せしめたのは、偶ま其盛を證するものといはねばならぬ。

元の雜劇作者の中で、有名なのは、喬夢符、楊顯之、關漢卿、馬致遠などで、喬には『揚州夢』、『金錢記』があるし、楊には『瀟湘雨、』『酷寒亭』があるし、關には『望江亭』『竇娥怨』、『救風塵』があるし、馬には『漢宮秋』等がある。これ等の劇に就いて、その內容の梗槪を敍し、且つ批判を加へることは、もとより容易な事でないから、こゝでは、遺憾ながら、御免を蒙ることにした。

雜劇に限らず、傳奇も同じであるが、支那の戲曲は、大抵古るい歷史事實の一條を敷衍し、作者の意匠を以て運旋したので、前に擧げたものに就て言つて見ても、『揚州夢』は杜牧の情事に關し、『漢宮秋』は王昭君が入胡の事に就いて趣向を設けたもので、この他、『戚夫人』、『陳搏高臥』、『陸績懷橘』、『于公高門』、『哭魏徵』、『立宣帝』などの如きは、たゞ題名を一見したばかりで、內容は直に推察せられる。日本の謠曲も、前に云つた如く、雜劇を學んだものであるから、全く同一の事情の存することは、誰でも知つて居ることであらう。その故たるや他なし、全く耳遠い未知の事實であれば、その事象の經過を諒解する方に氣を取られて、音律の美に存する形式的方面の鑑賞は、自然疎漏になり易いからで、その脚色は、何でも分かり切つたばかりでなく、あまり複雜ならぬものを善しとしたのであらう。雜劇

は、すでに、觀るよりも、むしろ聽くものであるから、その文詞は、極めて巧妙細緻であつて、其作さへも分らぬ人の作とは思はれぬ位、まことに立派なものである。彼等作者は、いづれも、相當な學問も文詞もあつたのに相違ないが、從來文學の眞意竝眞價値を解せざる支那人は、ひどく之を輕蔑して、齒牙にも掛けなかつたので、かゝる國もしくは時代に生まれ合はせた文士は、まことに、氣の毒千萬である。

三〇六　西廂記

『西廂』の作者に就いては、異說多く、或は關漢卿となし、或は王實甫となし、或は元と漢卿が作つたのを、實甫が整理して物にしたといつて居るが、今日では、普通に王實甫と決められて居る。

『西廂』の脚色は、前にもいつた通、唐の元微之が自己の閱歷をほのめかし『會眞記』から漸次に變化したので、その梗概は、次の通。

唐の世に、張珙、字を君瑞といふ風流才子的の男があつて、ある年、都に上つて、文官試驗を受ける積で、河中府までやつて來たところが、普救寺に參詣し、そこで、ゆくりなくも、一美人を垣間見るや、これぞ前世からの戀敵、掛戀の情しきりに動いて、どうも仕方がない。そこで、一計を案じ試驗の下しらべをするといふ口實で、住持に說いて、寺中の一室を借り、折を見て、其女に近づき本懷を遂しようとする。抑も此女は、何者かといふに、故宰相崔氏の娘で、名は鶯鶯、實は從兄の鄭恒と結嫁（いひなづけ）になつて居るが、この度、父が死んで、故鄕たる博陵に歸葬せむが爲に、母夫人及び侍婢紅娘等と一處に旅路に上つたものの、兵亂に値うて路通せず、止むなく、或る緣故から、此寺に寄寓し、鄭恒を呼び寄せて、是非とも博陵まで連れて往つて貰はうといふ手筈。かゝる次第で、張生の戀は、高嶺の花にあこがれるも同樣で、とても、物になりさうにもない、彼は、先づ侍婢の紅娘をかゝへ込まうとしたが、見事に、はね付けられた。然る處、不慮の出來事の爲に、形勢忽ち一變する。そは何ぞといふに賊將孫飛虎といふ、名からして强さうな奴が鶯鶯の美色を洩聞き、是非とも手に入れようといふので、大兵を以て寺を圍むといふ大騷動。そこで、老夫人は切迫（せつぱ）つまつて、寺中の人を集め、此難を救つて吳れた人には、娘の鶯鶯を妻はせると言ひ出した。これが抑もの誤で、夫人は、苦しまぎれに、すでに主ある娘の一身を以て、懸賞品としたのである。すると、張生は、大に喜び、夫人をして、三日の猶豫を賊將に請はしめ、急に一封の書を作つて、其友なる蒲關の守將杜確を招き、忽ちの內に、孫飛虎を追ひ拂つた。そこで、張生は、條約の履行を夫人に逼ると、夫人は、張生と鶯鶯をして兄妹の盟を結ばしめて、それで、胡魔化さうとする。張生は、到底、之に甘んずることが出來ず、深き思に沈んだ結果として病氣になると、侍婢の紅娘は、ひどく氣の毒に思ひ、鶯鶯に說き、やがて、二人をして、一夕の歡會を遂げしめる。しかし、其事は、忽ち發覺して、夫人は怒り出し、鶯鶯、紅娘、大目玉を頂戴するが、元はといへば、夫人が惡るいので、却つて反對（あべこべ）に遣り込められ、今は仕方がないから、張生に向ひ、約束通り、婿にはするが、我家は、累代の名家で、無官の者に娘は遣られないから、かねての志望の如く、試驗を受け、見事に及第して天晴の大官となつて歸つて來いといつて、之を急がして、旅立をさせる。その起頭の第一夜、張生は、草橋店に宿し、夜半に惡夢を感じて、驚き覺めるといふ處で、結んであるが、まことに、神韵縹緲として、盡きざるの情致がある。しかし、これだけでは、普通の讀者には、滿足が出來ないとでも思つたか、誰か知らぬが其後を承けて四折を續撰し、鶯鶯の許嫁の夫たる鄭恒を擔ぎ出し、之をして、張生と相爭はしめ、張生、遂に勝を制し、目出度、百年偕老の契を全うするといふことにしたが、要するに、蛇足である。

かくの如き趣向であるから、『西廂』は、劇としては、あまりに單純であるが、作者の本意は、男女離合の情緖を寫さむと企てたので、配合布置などは、隨分巧に出來て居る。それから張生は、あまり感服せぬが、夫人、鶯鶯、紅娘なぞは、性格が判然と描かれて居る。要するに、西廂の脚色の單醇なるは、原作の然らしむるところで、分析的敍述の妙は、なか〳〵馬鹿にしたものでなく、支那に於ける原始的戲曲としては、先づ上出來の方である。次いで文詞に至つては、流麗芊綿、風情絕えむとするばかりで、古今無比といつても宜しい。

西廂には、李卓吾、金聖嘆の批評本があつて、李は文詞昔の儘なれども、金は大に改竄した跡がある。されば、出來べくむば、二書を對照するが善い。

三〇七　琵琶記

『琵琶記』は、元末の高則誠の作で、傳ふるところに據れば、糟糠の妻を棄て、今日の謂ゆる閨閥によつて、富貴を博取したる不義卑劣なる沒情漢王四を諷したものである。しかし、その材料は、唐人の小說に本づいたので、『說郛』の中に抄出してある。その內容の梗概を述べると、唐の世に蔡邕といふ男があつて、其妻の趙五娘とともに、父母に奉養し、極めて平穩なる生活を送つて居たが、それほどの才能を、空しく埋沒して置くのも惜いから、都に出て、身を靑雲の上に致し、父母の名を顯はせといつて、頻りに勸めたのが、隣家の張太公で、邕もその氣に成つて、妻を故鄕に殘し、老父母の奉養を托して上京し、文官試驗を受けると、首尾よく及第、天子の御覺も、目出たく、立身目ざましく、やがて、丞相牛僧孺に仰せて、其娘を以て妻はせよといふ勅命、蔡邕は、天子の御前では、流石に拒み兼ねたもの〻、故鄕に居る糟糠の妻を懷ひ出で、いつそ辭職して、前の如き至純の樂みを享けやうと決心はしたが、權勢ある牛相公は、無理無態に其娘を押し付け、薄志弱行の蔡邕は、それなり矢張都に留まつて居る。話かはつて、故鄕に於ける蔡氏の家では、其子が上京して後、一回も消息なく、おまけに大飢饉で、趙五娘は、かよわき女の手一つで、舅姑を養つて居るが、兎角する內に、舅姑は相次いで死し之を葬るにも錢がない、止むなく、綠の黑髮を切り拂ひ之を賣つて、棺槨を買はうとしたが、前にも云つた通、飢饉の折柄、髮を買ふ人もなく、張太公の憐恤に因つて、やつとこれを濟ますといふ次第。かくて、すでに舅姑を喪ひ、今は獨りで居ても仕方がないから、兎も角も、都に上つて、夫を尋ねやうと思つたが、旅費などのあらう筈もなく、そこで、一面の琵琶を抱き、これを搔き鳴らして、人家に乞ひ、千山萬水を越えて旅をする、といふので、これが題名の由來である。さて、愈々著京すると不思議な緣で、牛氏の爲に救はれ、その家に於て尋ねる夫にめぐり合ふので、このあとが、波瀾橫生。なか〳〵面白い。しかし、牛氏は、やさしい女で、別に趙五娘を邪魔にもせず、さながら、姉妹の如く睦み合つて、蔡邕に侍し、邕の艷福、羨むべきばかり。邕は、その父母の喪を知らずに居たことを、ひどく悔ゐ是非、一度歸省して、其跡を弔ひたいといふと、牛丞相も、今は納得して、之を許し、一門の孝義、はじめて全く、邕は中郞將を授けられ、趙五娘は陳留郡夫人牛氏は河南郡夫人、邕の父母にまで贈位

の御沙汰、めでたし〳〵で大團圓。

『琵琶記』の趣向は、西廂に比して、はるかに複雜で、且つ大に戲曲的である。寫すところは、趙五娘が孝義節操の哀れな物語で、支那流の勸懲主義に協つて居るところが、評判になつて居る。しかし、蔡邕の人格は、『西廂』の張生と同一類型の意氣地なしで、殆んで取るに足らず、後年の昇進も、實は譯が分らぬ。李笠翁が盛に攻擊したのも、尤である。しかし、大體の結構は、元代幾百の劇を拔き、勿論『西廂』をも凌駕して居る。かくて、趣向が趣向だけに、將た又作者の手腕にもよるか、その文詞は、古雅淡醇であつて、西廂の穠麗幽婉には、とても及ばぬ樣である。要するに、『西廂琵琶』と並稱するものゝ、一は措辭を以て、一は脚色を以て勝つて居るのである。

『琵琶記』には、毛聲山の批評があつて、金聖嘆の『西廂』の批評と並び稱せられて居る。

三〇八　水滸傳　雜劇傳奇の話が濟めば次は小說。元の小說として、有名なるものは、『水滸傳』に『三國志演義』とで、之に『西廂琵琶』を加へて、「四大奇書」といつたが、後には、『西遊記』『金瓶梅』と並稱して、支那小說の四大奇書と言ひ習はして居る。

水滸傳の作者に就いても、種々の異說があつて、(一)は施耐菴となし、(二)は羅貫となし、(三)は七十回までを施耐菴となし、その以下を羅貫の續撰となすのである。しかし、今日では、施耐菴に決めて置くがよからう。さて、施耐菴は、どうして、此書を作つたかといふに、耐菴は、元の初、武林の人だといふだけで、其他の事は分らぬが、或る時、市肆に入つて故書を閱して居る中に、宋の張叔夜が賊を招撫した檄文を發見し、その中に、一百八人の起つた顚末が書いてあつたので、忽ち構想を得、やがて筆を執つたといふことである。しかし、この檄文には、どれだけの事が書いてあつたか、今では、分らぬのみならず、主要なる種本は、別にちやんとある。元來、水滸傳中の人物、宋江は、現實の人で、その事は、宋史以下の雜書に散見して居るが、一番詳しいのが『宣和遺事』である この書は、評詞の一種であつて、宋江盧俊義以下、三十六人の始末が詳記してある。『水滸傳』は、之を土臺とし、且つ宋末に出來た雜書の多數を搗きまぜ、自己の意匠で辻褄の合ふ樣に繋ぎ合はせて鍊り上げたので、天罡地煞、合せて一百八人としたのである。水滸傳の內容は、世人の熟知して居るところであるから、こゝに省略するが、その趣向は、あくまで雄大宏淵で、首尾貫徹、加ふるに、文辭も亦た之に應じて壯絕快絕である。

『水滸傳』は、金聖嘆の批評せる七十回本が普通に行はれて居るが、李卓吾の批評せる百二十回本が正しい。なほ、其外に百回本といふのもあるさうである。それから、『水滸傳』の後を續いだものには、第一に天華翁の『水滸後傳』、第二に雁宕山樵の『水滸後傳』といふのがあるが、後者の方が面白い。第三に『結水滸傳』本名を『寇蕩志』といふのもある。次に『水滸傳』が日本の文藝上社會上に及ぼした影響は、なかなか大したもので、興味ある問題であるが、傍徑に入るが故に、こゝでは、省略することにする。

三〇九　三國志　詳しくいへば、『三國志演義』は、羅貫の作である。貫、字は本中、杭州の人。施耐菴の弟子で、施耐菴が『水滸傳』を作りしを見て、眞似をして、此書を作つたといふことである。尤も、羅貫は、外に『隋唐志傳』などいふ著述もある。併し、現存せる『三國志』が、果して眞本であるかどうか、又實際羅貫の手に成つたのかどうか、この邊は、一寸疑問であるが、何にしろ、元代の產物で、陳壽の『三國志』を敷衍し、或は改竄して、兎も角も、一種の歷史小說を形成したものである。その中で、三國の英雄として權謀相取する曹孟德は、むしろ、天眞爛漫、頗る愛すべきものとなり、忠亮の節を以て千古に稱せられる諸葛亮は、隨分性質の惡るい策士的人物となつて仕舞つたので、こゝらは、甚だ感服しない。文章も、斷片的に面白い處もあるが、決して、完璧とはいへない。いづれにしても、『水滸傳』に比すれば、足元にも、追付かない。それから、坊本の毛聲山評も、坊賈の假托に過ぎぬらしい。この書の續撰には、『續三國志』、一名『東西兩晉演義』といふものと、又別に『後三國志』といふものとがあるが、いづれも取るに足らぬ。

三一〇　元代の諸家　元遺山は金朝文學の殿後であるとともに、元朝文學の先聲と稱すべきものである。なほ金朝の舊人で、之に仕へたのは、いくらもあるが、取り立てゝ言ふべき程のものはない。

もし眞正の意義に於ける元代文學の開祖を求むれば、耶律楚材こそ、實に其人である。しかし、彼は郝經等とゝもに、その所長は、むしろ經史に在つて、この點からいへば、その前後の大儒、許衡、姚樞、劉因、金履祥、吳澄などの方が、はるかに偉い。これ等の人は、道學者であるが、又文章家として、知られて居た。

次に詩の方では、趙孟頫、馬祖常を首として、次に虞集。これは、元代の大作家で、學問博洽、その詩、頗る健利、漢廷の老吏の如く、諸家ともに能く及ぶところに非ずといはれ、又文にも長じて居た。楊載、范梈、揭傒斯は、之に追隨して、元代の四家といはれた。やゝ後れて、薩都剌の詩は、情に長じ、流麗淸婉との評がある。

元の中葉以後に於て、經術文章を以て知られたるものは、黃溍、柳貫、吳萊の諸家で、文のみならず、詩にも長じて居た。しかし、單に詩人としては、何中、戴良、成庭珪などが有名であつて、しかる後に、一代の殿後として、楊維楨が出た。

楊維楨、字は廉夫、鐵崖山中に居て地名を以て號となし、又別に鐵笛道人と號した。彼は、樂府に巧であつて、李長吉、李商隱を學び、才情雙絕、典麗の中に一種の儁致を添へ、以て時弊を救はむとした。それで、動もすれば、怪誕に流れ、當時に於ても、詆譏するもの多く、或は『文妖』とさへ呼ばれたが、その志は、大に諒とすべきであつて、まさしく、元末より明初に至る過渡である。なほ、其友には、李孝光、張雨、丁復、倪瓚、吳恭、顧瑛などがあるが、いづれも、之に及ばぬ樣である。

八　明代文學

三一一　復古の氣運　明代の文學は、之を一概して。鑄型的で、いはゞ、唐の詩、宋の文、元の曲の殘山剩水に過ぎず、支那文學史上、最も光彩の少い時代である。

明の太祖朱元璋は、兎に角、匹夫から起つて、えらい事はえらいし、前朝の遺志を禮し、これに賴つて、道德を講明し、文教を修治するといふ慣用手段は、ちやんと心得て居た。しかし、惜むべし、その人と爲り、峻厲にして恩少く、あくまで慘礉であつたから、明の文教に於ける唯だ形式的で、はじめから、あまり發達しさうにもなかつた。加之、太祖が文教を奬勵したのは、その一、之を以て、學者を籠蓋せむとしたからで、科舉を以て士を取るにも、課するに八股文を以てし、經義を第一とした。かくの如きは、わざと六づかしき無用の學に耽らしめ、天下の俊才を羈束して、風雲の志を抱くの餘地なからしむる狡猾手段であつて、明の文學は、その八股文の爲に、全く腐化して仕舞つたのである。

八股文と一口に云ふものゝ、その内にも、勿論變遷もあり、分派もある。英宗の天順以前は、たゞ傳注を敷衍するばかりであつて、或は對し、或は散じ、別に定式といふものは無かつたが、憲宗の成化以後になつては、全く對偶に成つて、前に四股を講じ、後に四股を講ずるから、八股といふのである。かくの如き時文の俑を作つたのは、宋の王安石であるが、こゝに至つて、愈々頽波を激する樣になつた。八股文の形式上の拘束は、四六駢儷に比して、負けず、劣らず、お負けに、その内容は、更に非文學的であるから、全く話にならぬ。

明人の精神的生活は、概して沈靜であつた。永樂中、『四書大全』を敕撰して、經義を一定し、程朱を以て正學としてより、哲學上、獨思特見を出すものもなく、ひとり、王陽明が陸象山を祖述して、心即理、良知良能を唱へたが、頭から、異端視されて、その學徒は、政府の虐待を受けた。かくの如き次第で、明人は、思索を恣にするを得ず、自由なる大論策を作るものもなく、氣の利いたものゝ出やう筈がない。更に考ふれば、明は版圖も狹く、對外の交渉が、常に絶えず、内廷亦た變故多く、あらゆる事が規模狹小であつたから、文界の趨勢も、これにつれて、自然活潑でない。

勿論、明にも詩人文家は隨分多く輩出したが、時代一般の好尙は仕方のないもので、いづれも、鑄型的であつた。李何七子、李王七子が唱道した古文辭なるものは、殆んど取るに足らないが、それが盛行して、全時代を一貫して居る。されば、明の文學史は、その初期を除いて、其他は、古文辭とその反對派との衝突の敍述に外ならぬので、その紛雜せる有樣は、絶えて面白くもない。

三一二　明初の諸家　明初の文學、文は宋濂、詩は高青邱を以て開祖とし、青邱の方が、稍や後輩である。そこで、便宜上、この兩者の間に伍すべき諸家を、こゝに一括して述べることにする。

宋濂、字は景濂、號は潛溪。その文章は學者的で、唐宋諸家中に於ては、曾南豐に近く、もとより醇正平明であるが、語漫にして格弱く、大にだれた氣味がある。しかし、興國新昌の時に當つたから、他に比すれば、なほ剛勁の處もあらうかといふので、何は兎もあれ、先づ明代の狀元である。

王禕は、宋濂と同門で、學問は濂よりえらいが、文は少しく及ばない。しかし、醇朴にして宏肆、いくらか氣魄のあるのは、濂に於て見ざるところで、一時の瑜亮たるに恥ぢぬものである。

方孝孺は、宋濂の弟子で、氣節の士である。その文は、さすがに、光焰萬丈、小韓の名あれども、むしろ大蘇に近く、決して、曾王以下に落ちない。以上の三人、詩も作つたが、主として文を以て傳ふべきものである。

同時に詩を以て名のあつたのが劉基で、宋濂の文に於けると同じく、臺閣の重臣を以て、一代の先驅となつたものである。その詩は、概して古體に長じ、殊に樂府五言に於ては、古意古調、格の高いものが多い。

三一三　高青邱　高啓、字は季迪、高才不遇の詩人である。彼は、詩の何物たるべきか、及び詩人の何物たるべきかといふことを十分に自覺して居たので、「青邱子歌」一篇、之を證して居る。彼は、はじめ、毎日の課業として、詩を五首づゝ作つたが、後には三首、その又後は一首に減らし、だん／＼、洗練して、之を出した。この故に、其生の短き割合には、其作は隨分多く、今傳はつて居るだけでも、二千餘首はある。しかし、彼の不幸なるや、まだ十分自己の特色を發揮しない内に、殺されて仕舞つたので、その作の多數は、全く修練に屬するものである。

彼の天才は、どことなく、李太白に似て居る。その南方の血脈を承け、感情的であり、且つ人と爲り權略を好み、惆然として天下人なしとなす如き俠焰と、山水に放浪し、風月に吟嘯する底の仙骨とは、全く李太白の兄弟分で、もし天壽を全うすれば、或は第二の李太白と成り得たかも知れぬ。

彼は、自己の才の趨向するところを知つて居たに相違ないが、後世に生まれただけに、能ふべくむば、集めて大成しやうといふ願望があつたらしい。そこで、根本の特質は、李太白的であつたに拘らず、杜甫、白樂天、韓退之、下つて、李商隱、温庭筠、宋では黃山谷、ずつと古るい處は、漢魏六朝を、色々やつて見た。要するに、修練の爲であつたらうが、之に投じて、向ふところ、意の如くならざることなく、やがて、之を融會すれば、一種の特色が出來るといふのであつたが、前にもいつた通、秀でゝ實らずといふ始末、天の才人を厄する彼の如きは、蓋し稀である。

將來發達の見込は、かくの如くであつたが、それは仕方がないとして、今存するものに就いて之を別論すれば、五古五律は漢魏六朝より初盛唐に及び、七古七律は參するに中唐を以てし、七絶は幷せて晚唐に及び、その學ぶところを誤らぬのみならず、その一種英爽人に絶つところは、さすがに、人格の反映で、青邱の青邱たる所以は、朧げながらも、それと認められる。この點よりいへば、彼は、少くとも、善く古を學んだもので、後人に不朽の規度を與へたものといつても宜しい。これでこそ、元末纖穠の習を一洗し得たのである。

三一四　青邱同時の諸家　楊基、張羽、徐賁は、高青邱とともに吳中の四傑と稱せられた。楊基は、なほ元季の餘習に沿うて居るが、五古七律は頗る俊逸である。張羽は歌行に長じ、七律は青邱と並び、徐賁は、稍や小家數であるが、規律がある。明初の四傑は、初唐の四傑と、さながら相似て、良死を得たものは、一人もない。此は太祖の殘忍、彼は武氏の篡奪、清平の世ならぬ時に方つて、才を抱くものは、まことに不祥の極と見える。

劉基高啓の間に介立して、小さいながらも、別に一家を爲したのが袁凱で、白燕の作を以て、世に知られて居る。貝瓊、張以寧も、略ぼ之と相並ぶことが出來る。

明初の詩派は、すべて五處に於て、其源を發したので、越の詩派は劉基、吳の詩派は高啓、それから江右は劉崧、嶺南は孫賁、閩は林鴻、この三家も、一時に傑出して居た。

要するに、明初の詩は、劉基を先驅とし、高啓を中堅とし、袁凱、楊基を羽翼とし、張以寧、孫賁、張羽、林鴻等を殿後とし、それで一代の氣運を開拓したので、その能く元季纖穠の習を一洗し得たるは、全く國初人心の渾朴に起因するのであらう。

三一五　臺閣體　永樂、宣德の間は、明室の守成時代で、國初に於ける崢嶸磊砢の氣風は、いつしか變じて儒雅となり、悠揚となり、どうやら勢の拔けた氣味で、謂ゆる臺閣體に至つて、愈よ甚しい。

臺閣體は、解縉より以下、楊士奇、楊榮、楊溥、謂ゆる三楊の徒に因つて唱へられたので、詩文兩道、ともに同一趨勢の上に成立して居る。元來、文學は、國民自然の聲であるから、草莽に擴がる時は、盛であるが、臺閣に歸すると、とんと面白くなくなる。たとへば、書生の議論は多少間違つて居ても、兎に角、氣慨があつて愉快だが、三太夫の切口上は、千篇一律、四角張つたばかりで、一向味もなけ

れば趣もないものである。しかし、上記の諸家は、何といつても、一派の開祖で、相應の才力學殖があつたから、まだしも善いが、その末社連に至つては、愈よ以て辟易する外はない。

尤も、この間にも、曾棨、郭登などは、全く別派に屬し、人物も高く、詩も面白いが、正統十才子、景泰十才子などいふ手合は、紛々たる小家數で、いづれも、取るに足らず、臺閣體盛行の結果、蒼華渾雄の氣、全く衰へ、時弊は、方に其極に到達した。

三一六　李東陽　物極まれば變ずといふので、永樂以還、三楊の臺閣體、一時その跋扈を極めしより、一般に氣品と風致とを剝落し、天順成化の際に至れば、觀るべきもの、愈よ少く、詩に於ては、中晩宋元の諸調が雜然として起つた。この時に方つて、中流の柱となつたものは、李東陽である。

李東陽は、復古を標榜したものではなく、又その門下には、復古に反抗せるものが多かつた。しかし、彼が後に起つた七子の爲に、復古の開祖として崇められたのは事實で、そは彼が刻苦して杜甫を學んだ爲であらう。彼の才、必ずしも大ならざれども、勉强は恐ろしいもので、その雅馴淸徹の處を得たるに庶幾い。しかし、彼の特色本領は、むしろ、その詠史樂府に在る。

東陽と同時に、楊一淸があつて、之と聲譽を上下して居た。かくの如くして、復古の氣運が、いつしか熟すると、李何七子が、ぞろりと後から出て來たので、して見れば、東陽は差向陳涉で、七子は劉項以下の豪傑といふ樣な役廻である。

三一七　李何七子　七子の張本は李夢陽で、才思雄鷙、卓然として、復古を唱へ、文は秦漢、詩は盛唐、これより以下は全く取らぬものと定めた。こゝに於て、詩文の體裁、全く一變し、互に門戶を張つて、毀譽交爭する樣に成つたので、その功罪如何は、なか〳〵論じ易からざることであるが、兎に角、斯文に向つて、大影響を與へたのである。

李夢陽と其名を等しくしたのが何景明で、同じく、杜甫を學んだものゝ、李は專ら摸倣を主とし、何は擬造を主とし、一は雄深悲壯を以て、一は秀儁穩雅を以て勝つて居る。二人すでに此の如く、その交游も、自然二派に分かれて、左右の祖を分つ樣になつた。

李何二人と徐禎卿、邊貢、康海、王九思、王廷相を加へて七才子と號し、又王廷相を除いて、他の六人に、朱應登、顧璘、陳沂、鄭善夫を加へて十才子と號した。併し、此中で、徐邊二人は、李何と匹敵するので、之を四傑といつた。

邊貢は、才小なれども、巧に之を用ひて、ぼろを廣げず、專ら蘊思に富んで居る。徐禎卿は、ひたすら杜を模したが、風骨超然として、別樣の趣がある。以上は、主として、詩に就いていつたものであるが、七子の文に就いても、殆んど同じ樣な事がある。

三一八　李王七子　李王七子は、李攀龍、王世貞、謝榛、宗臣、梁有譽、徐中行、吳國倫の七人である。この諸人、いづれも年少氣銳、何でも古るく六づかしいことをいつて、一世を驚かして呉れやうといふので、文は西京より、詩は天寶より以下は、ともに觀るに足らず、本朝では、李夢陽ひとり取るべしといふので、文に於ける韓柳歐蘇、詩に於ける韓白蘇陸、ともに三文の價値もないといふのである。しかし、李王の古文辭は、畢竟するに、摸擬剽竊である。試に、その製作の方法といへば、先づ詩では、初盛唐あたりの人の集を讀み、その中で面白い字面をさがして置いて、さて題に臨むと、古人類似の作を一わたり讀み、かねてより貯へて置いた文字よりはじめて、あちらこちらから引きずり出し、之をつなぎ合して、遂に一篇に敲き上げる。文に於ても、亦た此の如く、その用語は、すべて先秦の諸子に限つたので、思想の進步より來れる言語の變遷を無視したものである。これは、要するに、わざ〳〵古錦繡を剪裁して繼綴となす底の仕事で、無意味にして且つ御苦勞千萬、まことに、言語道斷な次第で、いかに尙古主義の支那でも、こればかりは、人文進步の精神に背馳して居るから、到底駁擊を免れなかつたのである。

しかし、李攀龍は、一代の盛名を擅にしただけに、その作、必ずしも盡く取るに足らぬ譯でもなく、造花でも、極めて巧に出來たものは、或る場合に蝶を誘ふこともある。彼の所長は、七言近體に在る。王世貞は、その才、攀龍に十倍するに拘らず、その邪說に惑はされたので、晩年には、自ら其非を悟つたが、最早遲かつた。彼は、樂府古體に於て高く攀龍より出でて居る。謝榛は、五古に長じ、句烹字錬、氣逸にして調高く、七子中異色である。其他は、論ずるにも及ばぬ。

七子の後、前五子、後五子、廣五子、續五子、末五子などゝ、めい〳〵勝手な名目をつけて、一時に橫行したものもあるが、いづれも、陣笠連に過ぎぬものである。

三一九　七子の反抗者　古文辭の濁流、滔々として、懷山襄地の勢を爲し、明末に至つても、なほ汀岸を嚙むの餘勢があつたが、これと全く隔離し、又反抗した人も少くない。

前後七子の間に於て、楊愼は、詩に長じ、しかも、全く趣向を異にして居た。それから、李何と同時の王陽明は、自ら一家の文を爲して、貫目がある。顧みれば、七子の詩は、形式上なほ整つて居るが、文は全く實用に適せぬから、この後の反抗者は、專ら文章を先とした。

そこで、王愼中（號は遵巖）と、唐順之（號は荊川）は、專ら歐曾作文の法を學んで、一家をなし、後に歸有光、號は震川が出て、經術の素養に本づき、且つ司馬遷を學んで、古文辭に反對した。王世貞は、はじめ、之を攻擊したが、晩年になると、自己邪僻の見、到底彼に及ばざるを悟つて、心から屈服したらしい。それから、茅坤（號は鹿門）は、矢張この頃の人である。

次に詩に於て、徐渭は李長吉體を以て、湯顯祖は范陸體を以て、七子の弊を矯めむとしたが、力未だ足らずして、遂に成功しなかつた。

三二〇　公安派と竟陵體　さて其次が袁氏兄弟で、公安の人、宗道、宏道、中道の三名。この中、宏道が一番名があつて、普通に、中郞と稱せられて居る。彼は、詩に於て、性靈を主とし、時代には、各特有の詩があるから、何も刻苦してまで、古を學ばずとも善いといふ說を唱へた。この論は、極めて穩當であるが、自己の製作は、惜いかな、之に添はず、その文に於けるや、幽怪詭異、詩に於けるや詼諧卑陋、格調が極めて低い。しかし、之を以て、大勢を左右したのは、當時の好尙、漸く古文辭を厭忌したからでもあるが、さすがに、彼も好個の才子である。

次に鍾伯敬、譚元春の竟陵體は、專ら僻澁を以て能事をなし、しかも、自ら淸眞幽峻と信じて居た。そこで、活眼達識の士は、暴を以て暴に易ふるものとして、之を斥けた。

その後、明末には、高攀龍、陳子龍などが出て、一種悲壯冷儁の別調を出し、やがて、錢牧齋、吳梅村は、之と相並んだが、淸初に及んで、翻つて、新朝風氣の唱首となつた。

三二一　明の戲曲　明の戲曲家、即ち傳奇作者としては、沈靑門、陳大樽等が

あつたが、陽顯祖が第一である。

　陽顯祖、字は義仍、一字は若士、臨川の人。はじめ仕官したが晩年家居して、著述に耽つて居つた。彼は詩文の士で、文に於ては宋派を主とし、詩に於ては范陸を崇奉して、李何李王、前後七才に抗敵したが、さばかり、成功せず、却つて、傳奇作者として、千古不朽の大名を殘して居る。

　その作、凡そ四種、『牡丹亭』、『南柯記』、『邯鄲夢』、『紫釵記』。いづれも、夢に關して居る。『牡丹亭』は春を懷ふの處子、夢に秀才と遇ひ、『邯鄲夢』は、其名の如く、黃粱一炊の夢を說き、『南柯記』は、夢に蟻國に遊び、『紫釵記』は、夢に俠者の助を得るといふので、之を併せて、『玉茗堂四夢』といつた。いづれも、荒唐幻怪、極めて甚しき夢幻劇ではあるが、彼は、之を以て、その人生觀を具體的に表顯し、殊に情の勢力の偉大なることを暗示せむと企てた。

　彼は、宋以來哲學者が、單に性の一邊を硏究するに慊らずして、情の神秘を認識し、その考察を敍述する爲に、特に戲曲の形式を借りて來たのである。

　『牡丹亭還魂記』も、矢張情の力を形化したものである。杜麗娘といふ可憐の處女が、しづけき春をおもひ寢の夢の中に、柳を折つて居る一人の秀才を見たが、さめた後も、其姿が目について、如何にするも忘られず、さりとて、此世の人かどうか、尋ねやうもないので、自ら其姿を寫し、これに魂を入れる方便もがなとおもひ續けて居る中に、憂欝の極、終に病死し、名さへ床しき梅花道院に葬り、昔痕冷かにして、墓木いつしか拱せむばかり、凡そ三年たつと、一人の書生が來て、この道院に宿つた。これこそ、麗娘夢中の秀才であつて、柳夢梅といふ優男。心上一片の幻影は、不思議にも、現實の人であつた。こゝに於て麗娘の亡魂は、迷ひ出でて、之と懇懃を通じ、やがて、閻王廳前、回生を許され、墓を發くと、忽にして蘇生する。その後、夢梅は、京に赴いて狀元となつたは、善かつたが、淮陽の關に居た麗娘の父は、其女の蘇生を信せず、夢梅は、その爲に一時奇禍に罹つたが、しかし終には、暗雲霽れ盡くし、夫妻偕老、未了の因緣を全うし、情天恨事なく、めでたし〱で大團圓。要するに、夢中の人が現實存在したといふのが、すでに奇幻の極で、通篇すべて怪誕であるが、つまる處、情の力は尋常の理を超越したもので、即ち理外の理があるといふことを說明したものであらう。しかし、この傳奇は、すでに「讀書戲曲（レーゼドラマ）」の範圍に入つたもので、實際塲に登ぼせたら、極めて、間の抜けたものであらうが、その詞彩は、優雅婉麗『西廂』に比して、決して遜色がないといはれて居る。他の三種の傳奇は、すべて省略する。

　次に明末になると、阮大鋮の作に係る『燕子箋傳奇』といふのがある。大鋮は、奸臣を以て目せられ、福王に遊宴を勸め、宮中に於て、此劇を演じたことがある。作者の人物は、兎に角、文學上より見れば、この劇は、なか〱の傑作であつて、湯阮二人が明の傳奇作者を代表して居るといつても善い。

三三二　明の小說　明の小說で、一番面白いのが、『西遊記』で、作者は長春眞人、本名は邱處機、元末より明にかけて生きて居た人だといふ。全篇一百回、傲來國華果山の怪石が、天地の精氣を含んで、石の猿を產み出す、この猿は、やがて、孫悟空と名のつく奴で、仙術を修行し、觔斗雲を飛ばせば、一刻の間に十萬八千里を駈け廻り、又龍宮に入つて神禹の遺物たる金箍棒を分捕し、向ふところ敵なく、ひとりで威張つて居たが、やがて、召されて天上に至り、授けられし宮の卑きを怒つて、天宮を鬧かすこと二回、遂に如來の力で、鎭伏されて、五行山の下に押さへ込まれて居る。しかるに、唐の太宗の世、玄奘三藏が、經を取りに出かけた時に、悟空は、其厄を釋かれて、弟子となり、ともに西天に向つて進むので、その外に、猪悟能、沙悟淨の二人も、其徒となり、周流十四年、大小八十一難、隨分苦んだこともあるが、いづれも、悟空の力で、どうやらかうやらして、魔王どもを退治する。かくて、天竺に達して經を取るや、一先づ唐に還り、折返して、復た西に往けば、靈鷲峯頭、彩霞擧がり、極樂世界、祥雲たなびき、いづれも生きながらに儼然たる諸佛羅漢となつて仕舞ふ。要するに、解脫して正果を得るまでには、意馬心猿、種々の魔障を避け得ざる人類性情の徑路を譬諭的に描出し、遊戲の文字に托して、幽玄高妙なる教理を解釋したもので、バンヤンの『天路歷程（ピルグリムスプログレス）』に比較するのが、一般の通說である。

　『西遊記』の材料となつたのは、支那特有の神仙譚と、佛經と、當時の外國智識とであつて、巧に之を融會して、面白くこしらへ上げたものである。文章も至極平明で、先づ上出來。一言すれば、東洋に於ける唯一の寓意的神仙譚で、世界に於ても、殆んど其比を見ざる偉大なる譬喩談である。

　この書にも、二三の異本があるが、普通流行して居るのは、悟一子の批評本である。それから、續撰では、『續西遊記』といふのが一番善く、『東遊記』、『南遊記』、『北遊記』の類は、全く取るに足らぬ。

　次は『金瓶梅』で、西門慶、潘金蓮の情事を以て筆を起し、複雜なる脚色を結撰したもので、いはゞ人情本の元祖。個々の性情は、巧に書き分けてあるが、往々にして、醜穢猥褻に近い處があつて、文章もあまり面白いとはいへない。しかし、明代の小說中では、屈指の者である。

　支那人は、瑣談零聞の類を小說といつたが、これと眞正の小說との中間に立つもの、いはゞ美文の一體も、明代に成つて、愈よ盛になつて來た。その中で、特に有名なのが、瞿宗吉の『剪燈新話』で、數十の短篇を集めてある。中には、古しへの軼聞を采つたものもあるが、大抵は、自己の構想に成つたものらしく、その文も雅醇秀麗である。

　この他、明代の小說は、隨分少くないが、これといつて、特に傑出したものもないらしいから、こゝで切り上げることにする。

九　清代文學

三三三　考證學風の起源及び其影響

清朝の起原は、頗る古く、長白發祥の始祖は、遼金の末頃にあたるが、太祖努爾哈赤に至つて、はじめて、中原を窺はむとする雄志を起し、太宗に至つて、國を清と號し、聖祖に至つて、天下を統一し、四百餘州の人民は、辮髮の俗に革まり、滿人の朝廷を仰ぐことになり、この後三百餘年、隨分久しいもので、今でこそ、甚だ振はぬが、開國當時の版圖は、極めて廣大なもので、國威も遠きに及んで居た。

　しかし、清朝の文學は、滿人の手に出でたるのではなく、矢張從來の漢族から出たのである。尤も、太祖の時、滿洲文字を作り、支那本部を併吞せし後、之を用ひさせるといふ考も有つたらしいが、何しろ、四千年來打積いたる漢族の文化は、非常なる惰勢と重量とを有するもので、なか〱之を革める譯に行かず、辮髮の俗を布くさへも、大骨折であつた位だから、全く斷念して、却つて、之を保護したのである。されば、一言以て之を蔽へば、滿洲人は、政治上に於てこそ主權者たることが、出來たが、思想上、社會

上に於ては、全く戰敗國化したので、これが抑も今日尾大振はざるに至つた根本的最大原因である。

清朝の學風は考證に在るので、これに就いては、二個の理因がある。一は天然的なる時勢の感化、一は人爲的なる施政の方針。考證學の中にも、種々の分派があるが、その主要なるものは、明代復古の氣運を繼承し、清初昌國の勢につれ、一轉して、學術上に及び、宋儒に反抗して、漢唐の古說に復歸したので、一言すれば、漢唐の注釋的の程度及び範圍が、一層擴張され進步したといふに過ぎぬ。すべて、世の中の事はいつでも循環するので、宋明の學者は、自己の哲學組織を構成するを主として、盛に心性理學の說を振りまわしたが、古典學的研究が全く疎になつたので、これは、本來支那人の思想傾向に反對したものである。そこで、明末清初の學者は、その空疎粗漏を厭ふの極、實事求是、博證精緻、何でも原始的意義を失つてはならぬといふので、考證を以て、儒敎の眞面目を解せむと欲し、又解し得たと信じて居た。

次に、今の清朝は、異人種であるから、漢族の排外的思想を鎭壓する必要がある。然るに理窟を捏ねさうなのは學者で、お負けに、明末東林黨の變後、大分氣が立つて居るから、主として、懷柔の政路を執り、文學を奬勵し、書局を開き、大きな仕事を押し付け、多額の俸給を呉れてやり、强剛制し難き粗心を馴伏し、多忙の間に、餘計な言論を爲す暇なからしめ、いはゞ、學者を買收して仕舞つたので、康熙乾隆の間、大部頭の官撰が續出したのは、即ち此故である。かくて、學者は、書齋的硏鑽に一身を委ね、社會的活動の元氣は、全く沮喪して仕舞ひ、やがて、これが又今日衰弱の一因となつた。

清朝の文學は、時代思潮たる如上の考證學風の影響を受け、必然の結果、內容よりも形式、思想よりも文字といふので、風骨氣韻の高きものなくして、聲調詞藻の麗なるものがある。これは、抑も支那文學一般の特質であるが、こゝに至つて、愈よ甚だしくなつた。然る後、國運の衰替より考證の學も漸く衰ふるに及びては、その形式、その文字さへ觀るべきものがなくなつて來た、これが即ち刻下の狀態である。

三二四 清初の文家 清初の文學者は、大抵明の遺臣で、文章家には侯魏二人、詩人には錢呉二人がその主たるものである。

侯方域、字は朝宗、號は雪苑、明末の名士で、若い時、任俠を擅にしたが、後に發憤して、詩文を學び、時勢に反抗して、韓蘇に倣ひ、遂に一代の名を成したので、かつて、呉中に於て、其集を出版した時、集中文稿の未だ足らざる處、どれ程あつたか分らぬが、一夜の中に、書き足して仕舞つたといふことである。彼の人物才藻、ことに一代に傑出し、その文も亦た才氣に滿ちて居るが、惜いかな、學問が少し足らぬから、深厚の趣に乏しい。その著に係る『壯悔堂文集』、これを一言すれば、才子の文であつて、隨分瑕はあるが、玉は碎けても、瓦石の全きに勝ること萬々である。

魏禧、字は氷叔、勺庭と號し、兄弟ともに名を爲して、寧都の三魏と稱せられ、就中、禧が尤も著はれて居た。彼は策士の文と稱せられたが、それも其筈で、蘇老泉を學んで、論策に長じて居たからである。尤も、敍事も上手で、『左傳』を矩矱して、これから變化して來た。しかし、餘りひねくり過ぎて居るのが其弊である。侯魏二家、殆んど所長を同じうして居るが、その當行本色をいへば、侯は敍事、魏は議論、但し侯は四十にもならずして死んだから、魏に比して、さびの

足らぬのが、まことに惜むべきことである。

次は汪琬、字は苕文、號は堯峰、魏禧と同年に生れて、十年ばかり生き延びた。彼は、儒者の文と呼ばれ、歐陽修、歸震川を主奉したらしいが、法度に拘束して、用筆自由ならず、縱橫歷落の活趣に乏しい。侯魏の三家も三國を以て之に比すれば、魏叔子は曹孟德、侯は孫仲謀、汪は劉玄德、巴蜀に偏安して、大局に關するところ、稍や少き樣なものであらう。

これと同時に、王猷定、姜宸英、邵長蘅は、專門の文章家であつた。廖燕、號は柴舟、學問は淺いが、文章に氣骨があつて面白い。それから、顧炎武、毛奇齡、閻若璩などは、考證家であるが、その文も、亦た大家の規度を備へて、まことに堂々たるものである。

三二五 錢呉二家 文に於けると同じく、詩に於ても、清初の風氣は、明の遺臣に因つて開かれたので、錢呉二家が、その魁首である。

錢謙益、字は受之、號は牧齋、その人と爲り、學問もあり、才識もあるが、操行氣節に於て、甚だ缺けて居たのが殘念で、明亡びし後は、出でて降り、新朝に仕へて、禮部右侍郎となり、晩年職を辭して里居し、絳雲樓中、萬卷の圖書を擁して、著述に從事し、八十三で死んだ。彼は、極力李王の古文辭を排擊し、清朝の詩文の爲には、此上もない大功績を爲したのであるが、二臣傳中、拭ふべからざる汚名を殘した故に、大に評判が惡く、その著に係る詩文箋注の類は、乾隆年間に悉く焚き棄てられたことがある。しかし、其人を以て其言を廢せずとすれば、詩文兩道に於て、才思の雄を誇るべき牧齋は、實に一代の正宗たるべき價値がある。その詩は、各體ともに長じ、次に出て來る呉梅村の樣に艶ではないが、氣力深厚にして、格の高きこと數等、要するに、少陵を宗として、韓白蘇陸元虞の諸家に出入したものである。

呉偉業、字は駿公、梅村は其號。この人も、明の亡後、清に事へたが、その境遇、まことに止むを得ず、苦衷察すべきものあるが故に、牧齋に比して、大に恕すべきものと看做され、後世からも崇められて居る。彼は、專ら唐を學んで、その格調を以て目前の近事を寫したので、高靑邱に似て、清雋は若かざれども、意味は、はるかに深厚である。その作中、最も稱すべきは、時事に關係した古詩で精妙巧緻の敍事の中に、諷諭を寓し、その性質上、不朽の價値がある。その上、彼の才は、艶絕であつた故に、妖艶人を動かすばかり、唯だ惜むらくは劍氣に乏しい。次に律絕に於ても、隨分佳作があつて、いづれも、流暢艶美である。

錢呉と名を齊しうして、江南の三大家と稱せられたのが、龔鼎孶、人物の取るに足らざることは、錢謙益と相似て、その作は、愈々下つて居る。その他、前朝の舊人は、大抵、公安、竟陵の餘習を帶びて、論ずるだけの價値もない。

三二六 王朱施宋及び其他の諸家 王士正の雍正康熙に於けるは、宋に蘇東坡あり、元に虞道園あり、明に高靑邱あるが如く、詩を以て海內に鳴ること五十餘年、まことに一代の大宗であつた。字は貽上、阮亭又漁洋と號した。彼は、始め錢牧齋に重んぜられたが、後に持論の異なる處から大に牧齋を攻擊した。元來、漁洋の主とするところは神韻で、嚴滄浪の妙悟の說から出て來たのである。さて、神韻は、つまり言外の餘情を貴ぶのであるが、刻苦して之を求めむとする極は、むしろ修辭に傾いて、李王の古文辭に近くなつて來た。しかし、其本は才力が足らなかつた爲であらう。されば、

彼の所長は、近體殊に絕句に在るので、律以上の者は十分に運旋し兼ねたらしい。尤も晩年になつては、聊か趣を異にしたところもある。

漁洋は、すでに、錢牧齋を罵倒し、詩論より延いて、人物論に及ぼし、又牧齋と同鄕にして其說を奉ずる馮鈍吟をも薙ぎ倒した。そこで、漁洋と仲の惡かつた趙秋谷は、『談龍錄』を著はして、漁洋の缺點を攻擊した。かくて、淸初の詩は、分明二派に分れ、王を宗とするものは超悟新穎を主とするの極、大篇を作ることが出來ず、趙を奉ずるものは、樸質眞摯なれども淺陋を免れない。その後、王の餘派は、翻つて沈歸愚の格調となり、袁隨園の性靈は、之に反對して起つた。これ等は、詩學の歷史上特に注目すべき現象である。

漁洋に比して、稍や後輩ではあるが、之と名を等しくしたのが朱彝尊、卽ち竹垞で、詩に長じ、文を善くし、詞に工に、その外、經史考證の學に精しく、蔚然たる一大家である。この詩は、王に比して稍や下れるも、學博くして根柢あるが故に、古詩に於て、その長を顯はし、格律蒼勁である。文は古雅で、簡潔澄淡の處が面白い。

錢吳王朱、四家の間に立つべきものが施愚山、名は閏章、宋荔裳、名は琬の二人で、順治の際、相並んで名を成し、一時南施北宋と稱せられた。二人は、その產地に因つて、風氣の感化を異にし、南方の產たる愚山は、溫柔敦厚、北方の出たる荔裳は磊落雄健、ともに、其長を擅にして居る。

趙秋谷、名は執信、これは前にも述べた通、漁洋に反抗した人で、その詩は、思路の巉刻を主としたが、どうも、漁洋に及ばぬらしい。

その他、吳兆騫は順治の初年に出で、その詩極めて悲壯、漁洋の兄士祿、號は西樵、弟士祜、號は東亭、相並んで、詩を善くし、彭孫遹は、一時漁洋と名を同じうして、彭王と稱せられた。次に、馮廷櫆、吳雯などは漁洋門下に於て傑出したものである。

陳維崧、號は迦陵、其詩は、曲折高華尤も風致に於て優れ、詞も亦た雋妙。尤侗、號は西堂、才子の學高く、その詩は醇ならざるも、觀るべきものが多い。やゝ後れて、陳恭尹、屈大均、梁佩蘭は、嶺南の三大家と稱せられた。

淸初の詩風は、專ら明季の餘弊を矯正せむとしたが、搖曳下上、なほ唐を宗として居た。しかし、康熙の末年、査初白一たび出でて宋詩を唱へしより、風氣は全然變つて仕舞つた。

三二七　金聖嘆　支那隨一の批評家は、金聖嘆である。尤も、明の李卓吾や淸の毛聲山も、批評を爲したが、いはゞ餘事で、批評を以て本業としたのは聖嘆だけである。その傳は、廖松舟の『二十七松堂文集』に見えて居るし、その他の雜書にも、散見して居る。

聖嘆かつて曰く、天下才子の書六あり、而して世人知らず、謂ゆる六とは、一に莊、二に騷、三に馬史、四に杜律、五に施の水滸傳、六に王の西廂。そこで彼は、この六種の書の批評を作る積であつたが、出來たのは、水滸、西廂だけで、この外は、まだ手を着けぬ內に、詰らぬ事で、腰斬されて仕舞つた。

聖嘆の批評なるものは、初に全篇を總評し、次に各章各節各句といふ風に、隨分念の入つたもので、內容を論じ、文詞を論じ至れり盡せりではあるが、要するに之を借りて、自己の氣焔を吐いたもので、勿論今日予輩の謂ゆる批評ではない。しかし、その學は、儒はいふに及ばず、釋道にも互り、之を以て、立論の根柢とした故に、その言ひ草は、兎に角、面白く

その文章も、普通の古文と其撰を異にして、一家の調を爲し、紆縈曲折の趣を極盡して居る。しかし惡い癖は、原文を勝手に改竄することで、水滸は七十回以下を絕ち、西廂に於ても、字句を改め、自家の水滸、自家の西廂として仕舞つた。一言すれば、彼は原著者に對して、甚く忠とはいへない。

しかし、從來、儒敎主義を以て、萬事を律し、文學の何物たるかをだに理解せざる因襲的慣習を打破し、小說戲曲の眞價値を論じ、之をして、經史と伍せしめたのは、その大功であつて、次に其評の多くは、勿論、今日謂ゆる美學の規矩に合はう筈もないが、往々にして、文章の妙を發揮し、人をして、頷首せしむるものも少くない。要するに、渠も亦た好個の奇才であつた。廖松舟や、李笠翁が口を極めて賞讃したのも、強ち所好に阿つたものでもない。なほ水滸、西廂に關する聖嘆の批評を又批評するのも面白いが、煩はしいから、こゝでは、差し措くことにする。

三二八　李笠翁　淸朝第一の傳奇作者は、李笠翁で、名は漁、金陵の人、傳奇には『十種曲』があるし、短篇小說には『十二樓』があるし、外に『笠翁一家言』、『芥子園畫傳』『資治新書』などがある。彼は、作家たるのみならず、又評論家であつた。そこで其著に係る傳奇を論ずる前には、先づ傳奇に關する彼の持論を探究せねばならぬ。

彼の戲曲論は、その雜著『一家言』の中の『閒情偶寄』に見えて居る。彼の輕文學殊に戲曲小說の價値を推重することは、金聖嘆に劣らず、その爲に、萬丈の氣焔を吐き、元曲を稱して帝王の國事、塡詞を以て名を得たるものと稱した。勿論、彼は依然として、勸懲主義を振り廻はして居たが、これのみは、今更致方もない。次に、もう一つ特異な見を出したのは、喜劇を重んじて、その功能を說き立てたことである。要するに、笠翁は、戲曲の性質を硏究し、自己の主張に本づいて、創作をも試みたものである。

そこで、彼の作は、第一に結構を重んじ、次は詞彩、次に音律といふので、從前の作家とは、大に異なつて居る。顧みれば、高王湯阮より、笠翁と前後した孔云亭、洪肪思に至るまで、重んずるところは、一に文詞に在つて、篇々「讀む戲曲（レーゼドラマ）」であるが、笠翁のは、決して、そうでなく、文詞は極めて平易卑淺である。しかし、その脚色は前人の未だ道破せざるところを標して、務めて新意を出したもので、彼はこの點に就いて、大に自負して居た。次に稱すべきは、荒唐なる夢幻劇を排して、何でも、事實上有り得るといふ點に重きを置いたことで、さればこそ、彼の作は、塲に上ぼせて、いつでも十分の喝采を博したのである。

『十種曲』及び『十二樓』に就いて、その梗概を敍し、一々評隲することは、餘白がないから略する。次に『笠翁一家言』は、詩文集を除いて、其他は、『閒情偶寄』と題する一部の成書で、勿論、戲曲論も其中に含まれて居るが、宇宙萬象に對する美的觀察を主とし、中にも、人體美の論などは至極面白い。『芥子園畫傳』は、天然美の觀察と畫法とを論究し、『資治新書』は、政治經濟に關する諸家の論策を類集し、且つ自己の意見をも書き加へたもので、笠翁に斯著あるは、一寸意外である。なほ例の淫書たる『覺後禪』、一名『肉蒲團』も、笠翁の手に成つたものだといはれて居る。

三二九　桃花扇と長生殿　『桃花扇』は淸朝第一の傳奇で、孔子の末孫と稱する孔云亭の作に係り、主として、事實によつて結撰し、明末の名士侯方域と名妓李香君との情事を經とし、明朝の衰亡を緯とし、十里の珠簾、秦淮烟華の境に配す

るに、數千の鐵騎、兵馬倥偬の景を以てし、風流の韻事に雜ふるに悲壯なる感慨を以てしたのである。

李香君は、秦淮の名妓で、色藝一時に冠絕し媚香樓中に居たのであるが、侯方域と意氣相感じ、百年の命を棄てることさへ辭さなかつた。すでにして、侯生は馬士英、阮大鋮などいふ奸臣どもに憎まれて、止むなく、南京を去つて、難を避ける。兎角する中に、馬士英は香君を落籍さして、その部下の田仰に與へやうとしたが、香君は、節を守つて、聞き入れず、さきに、定情の夜、侯生が詩を題して贈りし一把の扇を手にして、近づく者を拒み、終に地に倒れ、誤つて、花はづかしき其顏を傷つけ、紅の血は、さつと地に滿ち、併て扇面に濺いだ。その後、香君が昏睡して居る時、見舞に來た楊龍友が、扇上の血痕に、盆草の鮮汁を以て描き足して、桃花としたが、これが劇名の起つた所以である。かくて、侯生も、香君も、引き續いて、樣々の憂き目に逢つて、隨分難儀したが、こう〳〵、めぐり合ふ機會もなかつた。幾もなくして、明の社稷は滅亡し、侯生、香君、ともに難を避け、やがて、ふとした事で、棲霞山中に於て邂逅すると、香君は、何よりも先に、例の桃花扇を出して、舊情を語り出さうとすると、忽ち大道士の張瑤星に叱かられる。こゝに於てか、才子佳人、往日の恩愛、一場の夢と醒めては、跡もなく、情根慾種を芟り盡し、各道を學ばむとて、その儘に別れるといふので、全篇すべて四十四齣、天荊地棘の間に於ける末了の因緣を敍したものである。

『桃花扇』の脚色、すでに此の如く、隨分面白い上に、その文辭は、作者が非常に苦心し、歲月を費して作つたもので、『西廂』、『牡丹亭』に比して、毫も遜色がないといはれて居る。そこで、始めて世に出でたときは、紙價爲に高く、これを演ずるもの、歲として、虛日がなかつたといふことである。

『桃花扇』と相並んで、兄弟行に在るものは、洪昉思の『長生殿傳奇』でこれは白居易の「長恨歌」を扮本として、敷衍し、全篇五十折、その題名は、「七月七日長生殿」といふ句に本づいたものである。しかし、「長恨歌」に手を著けたものは、元の雜劇をはじめ隨分多く、すでに決まりきつた事實を脚色したから、さまでの奇趣はないが、この傳奇中に見えたる楊貴妃は、あくまで可憐なる女子で、實際に於ける驕盈淫蕩の風は、少しもなく、こゝらが、その特色であらう。昉思は、原來王漁洋の詩の弟子で、隨分名聲のあつた人だから、この傳奇も、詞彩に於ては、『桃花扇』に追隨して、少しも愧づるところなく、當時、朱門綺席、酒社歌樓、この曲に非ざれば奏せず、纏頭も之が爲に價を增したといふことで、何しろ、一時に流傳したものである。

三三〇 紅樓夢と兒女英雄傳 淸初の輕文學に於て、傳奇には『桃花扇』と『長生殿』とがあり、之に對する小說には、『紅樓夢』と『兒女英雄傳』とがある。

『紅樓夢』の作者に就いても、やかましい議論があるが、要するに、或る原本があつたのを、曹雪芹が整理し、且つ補加したものらしい。

此書の內容は、二百三十五人の男子と二百十三人の女子とを出して、賈寶玉以下、金陵十二釵と稱する、多くの佳人の情話を經とし、榮國寧國二府の盛衰を緯として、一篇に敲き上げた。結構すでに廣大、局面亦た複雜、作者の苦心も、一通でなく、手腕もすばらしく、梗概さへも一寸述べ兼ねる位。勿論物が物だけに多少の褻氣はあるが、『金瓶梅』ほどではなく、全篇を通じて、人情を十分に描破した處が、この書の生命で、花團錦簇の大文字、支那小說中の絕品で、はるかに、武を『水滸』『西遊』に接することが出來る。一言すれば、『水滸』は雄壯、『西遊』は奇宕、『紅樓』は幽艷、これだけあれば、支那小說もなか〳〵馬鹿にならない。

然る處、この書は、もと滿洲某宰相の府中を譏る爲に作つたものだといふ噂が起つて、その爲に滿洲の巨族どもは、大に怒り出しその板を取り上げて、燒いて仕舞つたが、江湖之を愛惜し、樣々の變名をつけて、續々出版し、今でも、相變らず、盛に流行して居る。

『紅樓夢』が滿人の怒を買へるに對して、『兒女英雄傳』は、滿人の御機嫌を取る爲に作つたので、作者は、燕北閑人。その內容は、極めて義俠なる英雄譚で、運筆健麗、又實に有數の作である。しかし、どうしても、『紅樓夢』に及ばないのは、前半と後半と、著しく出來加減の違つて居る爲である。なほ、この書の續もあるが、それも、あまり面白くはない。

『紅樓夢』が盛に行はれし結果として、擬作續撰が、ぞろ〳〵と出て來た。曰く『後紅樓夢』、曰く『續紅樓夢』、曰く『紅樓復夢』、曰く『紅樓續夢』、曰く『紅樓圓夢』、曰く『紅樓幻夢』、それから、又『靑樓夢』といふもあるが、いづれも、曹雪芹の後塵を拜するものに過ぎぬ。

三三一 桐城派と陽湖派 淸初の奎運かくの如く盛に、文章家の輩出せしもの、隨分多かつたが、はじめて、一派を立てたのは、方望溪である。

方苞、字は靈皐、號は望溪、その生は康熙より乾隆に跨り、一代の正宗として文名は頗る高かつた。しかし、要するに儒者の文で、古るい處では、曾南豐、新しい處では汪堯峰に近く、文に光焰氣魄がない。のみならず、用語に乏しく、如何なる字でも使ひこなすといふ、膽識と力量とを缺いて居た。されば、其文は、一定の典型があつて、變化に乏しい。しかし、考證學盛行の當時に於ては、かゝる文を以て、最も正しいものとして、大に持て囃した。

望溪の後、劉大櫆、姚鼐の二人が相繼いで起り、三人ともに桐城の產であつたから、之を桐城派と呼ぶ樣になつた。なほ、陳用光、劉開、姚瑩、方東澍、吳德旋、呂璜、梅曾亮、管同、吳嘉賓、朱琦、戴鈞衡などは、皆同派の人で、この中、管同が一番名高い。それから、曾國藩、吳汝綸なども、矢張この派の系統を引いて居るものである。

姚鼐と同時に、朱仕琇といふ人は、歸震川を學び、その徒に新城の魯仕驥があつた。新城の地、嘉道間數十年に亙りて、古文の盛なりしは、仕驥に始まつたが、まだ一派として目されなかつた。

桐城派と相對するのが陽湖派で、その首に居るものは、惲敬、即ち陽湖の產である。彼は、自ら司馬遷を學んだといふが、なる程力を秦漢に得たものらしく、近い處では、魏叔子に近く、縱橫變化の妙は、はるかに、方望溪に勝つて居るやうである。陽湖の文士は、この後、張惠言、陸繼輅、董士錫、李兆洛等を出した。

一言すれば、桐城派は儒者の文で、陽湖派は策士の文に近い。しかし、才子の文といふのは、侯方域以後、袁枚が一人あるばかり。兎に角、才は難いものである。

諸派すでに、學ぶところを異にし、從つて、所長を異にして居るが、もとより、康熙の三家に比するに足らず、まして、唐宋の名家には、夢にも伍することが出來ない。おまけに、紛々たる門戶の見、いたづらに、識者の笑を求むるばかり、この頃からして、文界は、そろ〳〵衰颯の氣が動き初めたのである。

三三二 查初白及び同時の諸家 順治康熙の諸家は、或は神韵、或は格調、嗜

好は各異なつて居るが、大抵唐詩を宗として居た。そこで、この後、一派の新調を成さうと思へば、何か變つたことを爲なければならぬ。査初白が、宋詩を唱へ出したのは、まことに、必然的の事である。

査愼行、字は悔餘、號は初白、康熙の末年に出た。その詩、近體は陸放翁より出で、古體は蘇東坡より出で、才氣展開、工力純熟、優に作家の列に入つて居る。しかし、書卷に乏しく、又議論を好んで、專ら白描を用ひたのは其失である。

これと前後して、厲鶚、字は大鴻、號は樊榭。黄任、字は于莘、號は莘田。嚴遂成、字は崧瞻、號は海珊など、相踵いで出で、いづれも、宋に傾いて居た。かくて宋詩盛行の結果は、輕佻に流れる虞があるといふので、沈德潛は、唐を主奉して、格調を唱へたが、大勢は、遂に阻遏することが出來ず。やがて、袁、蔣、趙謂ゆる乾隆三家が出て、宋詩の流行は、方に其極に達した。

三三三　乾隆三家　乾隆は、康熙に次いで、奎運の盛を誇るべき時代で、袁蔣趙の三家は、この時に蹶出して、その盛名を爭つた。三家の所長、同じからざるも、詩に於ては、互に讓らざる故、先づ其詩を論じ、次いで、其他に及ぶことにしよう。

袁枚、字は子才、簡齋、又隨園と號した。彼は、何でも一つ風變りの事を言ひ出すのが好で、その詩に於けるや、常時世に行はれし神韻格調の説に反對し、「詩は人の性情なり」といへる古語に本づいて、性靈といふことを言ひ出した、その議論は隨分長いが、要するに、純主觀詩を以て、第一義としたのである。なる程、純主觀詩は、詩の純粹なるものに相違ないが、この外に、詩の無いやうに言ひ觸らしたのは、たしかに、偏見である。かくて、性靈を重んずるの極は、其弊として、眞率に過ぎ、さながら村婆の絮語に均しきものになる事もあるので、隨園彼れ自身も、老後の頽唐、之を證して餘ありといふべく、その失は、叙事を斥け、修辭を賤んだ處に在るので、まさしく、散文化したる宋人と其弊を同じうして居る。しかし、彼も、才子であるから、佳什も少からず、七言、殊に近體に於て、其長を擅にして居る。その文章も、亦た拗峭曲折の趣を盡し、兎に角、一家の規度を備へて居るところは、常人の夢にも及ばぬ處である。

蔣士詮、字は心餘、若生、又藏園と號した。彼は、宋人の中に於て、黄山谷を崇奉し、更に其祖たる杜甫を學ばうとした。其詩は、諸種の趣を曲盡して居るが、最も傳ふべきは、叙事諸作で、詩才は史眼を兼ね、之を以て綱常を維持せむとし、忠孝節義の事に於て、三たび意を致し、一片の同情を以て、正史以外、湮滅に歸せむとする事實を詠出した、その特に稱すべきは、必ずしも其體に拘束せず、詩詞樂府、どれでも、その適するところに從つて、之を行り、十分その妙を極めたことである。されば、その見は、居然として、道德主義の藩圏を打破するに及ばず、又その作は、必ずしも純然たる叙事詩ではないが、古往今來、殆んど、他に類の無いもので、その活眼卓識は、言ふに及ばず、技工手腕、ともに偉らい。藏園は、又文に長じ、詞に工に、更に傳奇を作つた。

趙翼字は雲崧、號は甌北、その詩は、才氣縱橫なれども、俳諧に陷り、機警人を刺せども、渾厚の處少く、蘇東坡を學んで、未だ其妙を極めぬもので、公平に論すれば、袁蔣二家に及ばない。おもふに、此の如きは、その學問が偶ま累を爲したので、詩人たるには、空想が缺乏して居る。彼は、創作よりも、評論に於て、

特得の技能があるので、其著『甌北詩話』は、李杜韓白蘇陸の外、元遺山、高青邱、吳梅村、査初白、合せて十人の評論を試みたもので、細密周匝にして、且つ精微なる考證を含み、支那の批評文學中に於ては、たしかに古今獨步である。

以上三家を中心として、乾隆の中頃より、嘉慶道光の間に至るまで、詩人が夥しく蹶出した。次に、その中の重なるものを略叙して見よう。

三三四　乾隆嘉道間の詩人　王文治、號は夢樓、袁隨園と其名を上下し、その詩は、禪理を含んで居ると稱せられて居る。鄭燮號は板橋、書で名高いが、詩も當時聊か名があつた。

吳錫麒、號は穀人、厲樊榭、袁隨園に次いで、詩を以て淑西に鳴り、淸雋超詣の處がある。

張問陶、號は船山、蜀中の詩人で、李青蓮の再生と呼ばれ、生氣湧出、沈鬱空靈、家數は固より大きいが、動もすれば粗率膚淺な處がある。しかし、格言めいた佳句の多いことは、他家に於て見ざることである。

黄仲則は、三十五で死んだ不遇な才子で、其詩は、張船山に稍や似て居るが、もつと上品で、含蓄があつて、自ら前人と異なつて居る一種の味がある。

その他、錢載、號は蘀石。吳文溥、號は澹川。王文曾、號は穀原などは、乾隆間に詩名のあつた人で、洪亮吉、號は北江は、張船山、黄仲則と離るべからざる關係のあつた人である。

嘉慶詩人の第一が舒位、號は鐵雲、その詩は品格が高い。陳文述、號は碧城、初唐の風範を以て、吳梅村に以て居るところがある。郭麐、號は頻伽、氣魄は少いが、生峭幽秀である。吳嵩梁、號は蘭雪才藻ともに秀でて、家數も大きく、同代に於ては、ひとり群を拔いて居る。

その他、王曇、樂鈞、孫原湘、劉嗣綰、屠倬等は、皆詩に長じて居た。張際亮の如きは、名を道光の間に成し、唐明を摸し、以て乾嘉輕佻の習を變せむと企てたが、力足らずして、遂に成功しなかつた。又鄧顯鶴、歐陽路は、一時楚南の文獻といはれたが、もとより小家數で、特に論するに及ばぬ。

要するに、乾隆以後、宋詩が盛行して輕佻淺膚に流れたのは、たしかに其弊である。加ふるに、道光以後は、變故相繼いで起り、時勢は優長な詩人などを容れぬ故に、この後は、名家らしいものもない。

三三五　近時の小説戲曲　康熙乾隆の二帝が、不出世の英資を以て學術を奬勵した爲に、博學名儒彬々蹶出し、ひとり詩賦文章ばかりでなく、小説戲曲に至つても見るべき者が頗る多かつた。次にその大略を擧げて見よう。

まづ戲曲の方から始めると、尤西堂は詩人として知られて居たが、傳奇をも作り、その中で、『淸平調』の一劇は、內苑に於て演せられたことがあるので、今に名譽の事として傳へられて居る。しかし、詩人の餘技として、巧に傳奇を作つたのは、蔣藏園であつて、その著は、『紅雪樓九種曲』と名づけある。即ち『香祖樓』、『空谷香』『桂林霜』、『一片石』『第二碑』『臨川夢』『雪中人』『冬青樹』『四絃秋』である。これ等は、皆ありふれた事實を脚色したもので、『雪中人』は吳六奇の事に係り、第一の傑作を推すに足るべく、『臨川夢』は、その名の通り、湯顯祖の事に係り、『冬青樹』は、文天祥を主として、宋末の事に係り、『四絃秋』は白居易の『琵琶行』を本としたもので、最も短く、僅に四折。藏園の作は、概して、詞彩に富んで一種の妙味がある。

次は楊笠湖、名は潮觀、字は宏度、乾隆元年の擧人で、袁隨園の友人であつた。この人の作は、大抵時代物、お負け

に一駒づゝの中幕物である。しかし、巧に古を用ひて、曲を製した手腕は、一寸類が少い。

小說の方では、『紅樓夢』、『兒女英雄傳』の外、一寸見られる位なものは、隨分多くある。

『野叟曝言』は康熙中、常州の一書生姓を夏といふものゝ作で、一部百餘回、明の王陽明が宸濠を擒にすることを敍して居る。中間に淫蕩の記事があり、且つ行筆波瀾に乏しきも、なほ大作たるを失はぬものである。

『品花寶鑑』は、乾隆頃の作で、名を田春航に托し、當時名のあつた畢秋帆尚書の分桃斷袖の陰事をさらけ出したもので、北京梨園の內狀は之に因つて窺ひ知ることが出來る。大體可成の作であるが、性質上、往々にして、猥褻な處もある。『花月痕』は、前者に比して、大に愼重で、文も面白い。

『女仙外史』は、呂熊、字を文兆といふ人の作で、明の女賊唐賽兒が、成祖の靖難に憤慨して兵を起す始末を敍した者で、全篇一百回、作者は學問が深いから、なか〳〵面白い處がある。

『燕山外史』は、陳球の作で、明の馮夢禎の『竇生木傳』を敷衍したものであるが、文章を主として、通篇喆〻、艶麗なる四六駢儷體で出來て居る。この外、『結水滸傳』と稱する『冠蕩志』及び『鏡花綠』などは、大部頭の長篇小說で、『平山冷燕』『金翠翹傳』などは、大したものではないが、早くから、我が邦に傳はつて、その名を知られて居る。

それから、歷史小說、即ち演義の類には、『東周列國志』『南北史演義』『隋煬艶史』『說唐全傳』『殘唐五代』『南北宋志傳』、『說岳全傳』などがある。

なほ、瑣事零聞を書き集めたもので、一番善いのが、蒲松齡の『聊齋志異』で、作者は采訪鈎討、力を萃め、功を積むこと二十餘年、目錄編次すら、數回の改竄を經たといふので、文辭圓瑩、玉の如く、古今の絕品である。後に袁隨園も、眞似をして、『子不語』といふものを著したが、語の妙、事の新、とても比較にならぬ。この書の續撰に、二種あつて、一は作者が分らぬが、筆墨庸劣、一は王韜の作で、元は『淞隱漫錄』といつて、やゝ覽るに足る。

その他、『諧鐸』『西青散記』『夜談隨錄』、『昔闘館外史』『夜雨秋燈錄』『嘯亭雜錄』などは、皆『聊齋志異』と類を同じうしたものである。

三三六　最近文界の趨勢　乾隆至治の世は、六十年の久しきに亙り、次に嘉慶が二十六年、道光が三十年、咸豐が十一年、同治が十年、それから前代德宗の光緒、この間、清國の變亂は非常なもので、鴉片戰爭、長髮賊の昔はいはず、最も近いところで日清戰爭、北京の攻圍、次いで東三省を擧げて、日露戰爭の舞臺に供した。加之、內地に於ける鐵道布設權、鑛山採掘權は、悉く外人に讓り渡し、尾大掉はざる清國の前途、まことに寒心すべく、之と輔車脣齒の關係を有する我が日本も、之を對岸の火事視する譯には行かぬ。扨て、この先は、どうなる事やら。

こんな風であるから、嘉道以後は、文界極めて寂寥で、殊に記載すべき事もないが、强ゐて、二三を擧げると、文章では曾國藩が第一、その人、すでに不世出の偉才で、勿論專門ではないが、その文も、條理暢達、十分論ずるに足る。これに次いで、近時の文柄を握るもの、南には張之洞と兪樾、北には吳汝綸、しかし張は爲政に忙しく、兪は居然たる考證家、吳は前年物故した。要するに、此等の人の眞價は、その全集の出た後でなければ分らぬ。それから、王韜などいふ男は、かつて、我が邦に來遊したから、名を知られて居たが、これは、新聞記者で、特に論ずべきものでなく、この位なものは今はいくらもあることゝ思はれる。

咸豐同治間の詩人で、一番善いのが蔣敦復、字を劍人といふだけは、聞いて居るが、予は不幸にしてまだ其集を觀ないから、遺憾ながら、こゝに論ずることが出來ない。その次は、秦雲、字は膚雨、號は西脊山人、長洲の人で、その著には『伏戀堂詩勝』『栽雲閣詞鈔』などがある。一寸見たところで、吳梅村、陳碧城に似て更に規度の小さいものである。

顧みれば、四百餘州、縱橫八十萬方里、無名の詩人文豪などが、どこかの隅に潛んで居るかも知れないが、新聞も多からず、雜誌も盛ならず、これを發表する機關に乏しいから、その近傍の人は、兎に角、遠く海を隔てゝ國を異にする吾々の耳には殆んど聞くところがない、しかし世愈よ下つて、格愈よ卑く、とても、前代の盛に似ざることは、到底爭ふべからざる事實である。

何しろ、清國の現時は、丁度我が邦の明治初年頃に相當して、新舊思想の交替の時に際し、殊に日清戰爭後、新敎育の必要を唱ふるもの、愈よ多く、康有爲などは、失敗したが、施設は、日に增し盛になり、光緒二十九年、遂に「奏定學堂章程」を發布し、學校の組織系統は、すべて我が邦に倣ひ、又留學生を東遊せしめ、十二年後に於ては、從前の科擧の法を全廢することゝした。かくの如き有樣で、舊時の文物、一時地に落つるは、自然の勢で、今は斷じて、文藝の時代ではない。かくて、現に流行するのは、西洋小說及び我が邦政法書の飜譯ばかりで、どしどし、新熟語を移植し、文法も、亦た變化せむとして居る。されば、自國文化の特色を維持し、東西を融合して、新機軸を出すのは、少くとも、數十年後の事で、その時には、文學も亦た生氣に滿ちて、大に觀るべきものがあらう。予輩は、自國從來の趨勢に對照して、この言の略ぼ謬らざるを確信するものである。

（久保天隨）

參考書目

一、總史

古城貞吉氏　支那文學史
兒島獻吉郎氏　支那大文學史（第一卷古代編既成）
笹川種郎氏　支那文學史（帝國百科全書）
同氏　支那小說戲曲小史
久保天隨氏　支那文學史（講義錄）
笹川、田岡、大町、白河、藤田、久保六氏　支那文學大綱（孟、莊、韓非子、屈原、司馬相如、司馬遷、曹子建、陶淵明、杜甫、韓柳、白樂天、蘇東坡、元遺山、高青邱、湯臨川、李笠翁、王漁洋等評傳既出）

邦文で書いた入門の文學史としてはこの外には殆ど無いといつてよい。西洋人の著書では

Herbert Giles, *A History of Chinese Literature* (Goss, *Literature of The World*)
Legge, *Chinese Classics* 7 vols (1893)
Wylie, *Notes on Chinese Literature* (1867)

などがある。

なほ漢籍の本源に溯つて一々文獻の考究をやるといふ事になると、それのみで一卷を成すほどの專門的事業であるから、茲には省いて僅に其栞となるべき桂湖村氏　漢籍解題　の名を擧げて置く。

二、近世文學

中州集、元詩選、元詩別裁集、明詩別裁集、國朝詩別裁集。
列朝詩集、明詩綜、湖海詩傳、江蘇詩徵、浙西六家詩鈔、國朝詩人徵略、明詩三十家選、明文衡、十六家品、清六大家詩鈔、金史、元史、明史、名臣事略、徵獻錄、國朝先正事略、墨林今話。
詩藪、藝苑卮言、西河詞話、帶經堂詩話、定香亭筆談。

印度文學

一　緒論

三三七　印度文學研究の必要　哲學宗教の本土なる印度は、文藝の發達に於ても敢て他の文明國に讓らない。併し、梵文學の存在が歐洲學界に知られるやうになつたのは、第十八世紀の中葉以後である。爾來印度研究は非常に隆盛に赴き、各方面の著述が多數現はるゝに至つた。されば印度文學の歷史に關する名著も少なからず出でた。今是等の諸書を參酌して印度文學變遷發達の有樣を大略述べようと思ふ。

印度の全文明は、其根底を古代文學より得たものであるから、古文學研究の有益なることは勿論である。世界の諸國に現はれたる古代文學中、其眞價及び美學上の價値に於て第一に來るのはギリシアで、印度は之に亞ぐべき地位を占むるものである。人文史研究の上より云へば、寧ろ印度文學の方がギリシアのそれよりも勝つてゐる。又初期の印度文學は、ギリシア文學の何れよりも其年代が古く、最も原始的の信仰を示す故、宗教思想發展の狀況を明かに知らんとするにも、これに勝る好材料は世界にない。さればこそ吠陀（Veda）古文學の研究は、茲に比較言語學、比較神話學等の新科學を出さしめたのである。

印度文學は其各方面に於て多大の發展をなしたが、就中哲學宗教の部面に於ては世界無比である。印歐民族（The Indo-European Family）の諸分派中、他國の影響をも受けずに、婆羅門教（Brâhmanism）の如き一大國民教、及び佛教の如き世界教を出したのは此國のみである。哲學に於ても玄妙の理を說いた多くの學派を出してゐる。殊に哲學宗教發達の各時期を、印度文學中に發見し得るのは、吾人に取りて最も興味あることと謂はねばならぬ。要するに、印度文學の重要な所以は、一にその創作力の多大なることに歸するのである。蓋し印度は、アーリア族（Âryas）が侵入して茲に別天地を作り、無比の文華を開き、其後他國の爲めに侵入せられた頃には、既に十分開明の域に達してゐたるにより、何等他國の影響を受くることなく、自發的に其浩瀚なる文學を產したのである。アーリア族は、紀元前二〇〇〇年の頃印度に轉住したのであるから、現今に至る迄茲に四〇〇〇年の星霜を經てゐる。併しながら、諸般の文物が顯著なる發達を遂げたのは、轉住以後紀元第十一世紀に至るまでの所謂古代文明期であつて、これより後は印度文明も漸く停滯の有樣であつた。それ故、印度文學史と謂ふも、實は上下三千歲に亙れる古代文明期に限られてゐるのである。今これより說かうとする處も即ち此古代印度文學の歷史に外ならぬが、第十一世紀以降の文學中でも、特に注目すべきものに就ては、併せ記することにした。

三三八　印度古代文學史の二大期　古代印度文學史は更に吠陀期（Vedic Period）と梵文期（Sanskrit Period）とに二大別することが出來る。此中吠陀期とは、これを代表する文學より與へたる名稱であつて、其年代は紀元前一五〇〇年前後より同二〇〇年代の頃に亙つてゐるが、これは更に前半後半に區分せられる。吠陀前半期に於ける文學の特色は、內容の原造的にして外形の韻文的なるに存し、信度河（Sindhu）及び其五大支流の灌漑せる所謂五河地方（Panjâb）が、文化の中心となつてゐた。然るに、吠陀後半期に至つては、文學の內容が神學的考察的となると共に、其外形も散文的に變じ、今や文化の中心も東方恆河（Gangâ）河畔に移つて來た。斯くして、吠陀期の終には、アーリア文化が、北は雪山（Himâlaya）南は頻陀山（Vindhya）東は恆河々口、西は信度即ち今のインダス河に至る迄の、所謂ヒンドゥスターン本部（Hindûstân Proper）の地に普及した。

次に印度古代文學史の第二期即ち梵文期と謂ふのは、言語の上より名けたるものであつて、吠陀文學の最終部なる修多羅と同時に始まり、紀元後一〇〇〇年頃の回教徒侵入に終を結んでゐる。此期に入つては、文學の種々の部面が著しき發達をなし、國民的並に技工的叙事詩をはじめ、抒情詩、戲曲、童話、お伽噺、教訓詩、小說の類に至るまで、一としてこれを產せぬはなく、純粹の詩歌が隨處に見らるゝやうになつた。さり乍ら、印度人は調和若くは程度と謂ふことを度外視せる爲め、此期の文學が概ね誇張に流れてゐるのは惜むべきことである。猶吠陀期の末葉に起つた聲音學、天文學、數學、醫學、文法學、法律學、等も、此期に入りて注目すべき發達を遂げ、又辭典學、美辭學等の新學も起り、中には往々、ギリシア人を凌駕せるものもある。又アーリア文化は、此期に於て頻陀山南なる噠親（Dakshina）即ち南方デカーン高原（Dekhan）に迄及んだ。印度の古代文學は、以上の二大時期に於て發達したのである。此中吠陀期では抒情詩として價値のある宗教文學を產し、又散文に於ても多少の進步をなしたが、梵文期では文學のあらゆる部分が開拓さるゝに至つた。

併しながら、印度は由來無歷史國であるから、文學史上で年時の分明なのは、紀元五〇〇年代以後のことであつて、吠陀期に於ける年表の如きは、全く作物の內容批判より下したる推定に過ぎない。

三三九　印度古代の言語　今吠陀文學の說明に入るの前、猶印度古代の言語に關して一言する必要がある。印度古代の言語も、吠陀語（Vedic Language）即ち古語と、梵語（Sanskrit Language）即ち新語とに二大別することが出來る。此中吠陀語中に於ても發達の種々なる程度がある。その所謂最古の吠陀語なるものも、決して粗野なる俗語ではなく、多年僧族中に傳承されたる優雅な言語である。而して、吠陀期に於ける日用語は　それが詩的形式と優雅な內容とを缺ける外は、別に文學語と差別がなかつたやうである。

梵文期の言語即ち梵語（Sanskrita）は、畢竟吠陀語から進化發達したものであつて、別種の言語が創造せられたのではない。梵語即ちサムスクリタなる名稱は、共に若くは完全にの義あるサム（Sam）にクリタ（Krita）即造られたると謂ふ語を添えて成つたのであるから、完成語（Perfect language）又は雅語（Polished language）の意義を有し、それが吠陀語の完成されたものに過ぎないことを表はしてゐる。しかして、この梵語大成の偉業をなしたものは、紀元前第四世紀に出でた言語文典學の泰斗波尼儞（Pâṇini）である。當時の梵語が啻に文藝上に用ひられたばかりでなく、既に日用語となつてゐたことは、波尼儞及び紀元前第五世紀の耶修迦（Yâska）同第二世紀の鉢顚社羅（Patañjali）等の記せる處によつて明かである。梵語が紀元前第二世紀の頃に、雪山と頻陀山との中間なるアーリア住地（Âryâvarta）に於て、僧族其他の日用語となつてゐたことは爭はれぬ。

猶梵語と相對して俗語即ちプラークリタ語（Prâkrita）が、既に吠陀期に存したことは、耶修迦が、此語を話語（Bhâshâ）と呼んで、吠陀語と分ち、或は其他の古代文典家がこれに論及してゐるので知られる。

既に古代文學史二大期の特徵及びその言語に就いての概觀を終つた故、これより進んで吠陀文學を細說し、然る後梵文學に入らう。

二　梨俱吠陀

三四〇　吠陀文學の種類四吠陀　印度最古の文學は、他の印歐民族の文學に比して遙かに古いが、當時既に思想の淸新奧妙なると、用語詩律の取扱に熟せるとは、特に注目すべき點である。これより紀元前三世紀頃に至る迄の所謂吠陀期の文學に、宗教的色彩の周著してゐるとは、後に說くが如く、「吠陀」なる語が既に之を證明してゐる。吠陀期の文學は、明かに次の三類に區別することが出來る。

（一）四吠陀（Chatur Veda）
（二）婆羅摩那（Brâhmaṇas）
（三）修多羅（Sûtras）

吠陀とは、知る（Vid）と云ふ語根から出でゝ智識を意味する語であつて、文學の一支派として聖教或は神智の意味があると共に、狹義に云へば聖典を表はす語である。婆羅門教の文學中、古仙即ち諸の哩使（Rishi）に神が啓示したと云ふ四種の聖典を此名で呼んでゐる、佛典に、違陀、韋陀、闍陀、比陀、毗陀、薜陀、皮陀、闍陀、吠駄、鞞陀、婆陀、と記し、智、分、明、明論、智論、明解、等と譯してあるのは即ち此吠陀のことである、吠陀聖典は讃頌又は祈禱を集めたるもの故、一に集錄（Saṃhitâ）とも呼ばれる。而して此名を有する聖經には次の四種がある。

（A）梨俱吠陀（Rig veda）
（B）娑摩吠陀（Sâma veda）
（C）耶柔吠陀（Yajur veda）
（D）阿達婆吠陀（Atharva veda）

右の四吠陀は、原造的韻文的なる吠陀前半期の文學である。第二類の婆羅摩那（Brâhmaṇa）即ち祀法書は、僧侶が讃頌の創作を廢し、專ら祭祀供犧に熱中した時代に成り、祈禱祭祀を詳しく說いた神學書であつて、殆んど散文から成つてゐる。第三の修多羅（Sûtra）は、婆羅摩那中に散說に說かれたる儀式及び習慣をば、實用に適するやう簡明に述べたるもので、實に吠陀文學の最後をなしてゐる。本章には、四吠陀中最古に成つた梨俱吠陀を述べやう。

梨俱（Rig）なる名稱は、リチ（rich）即ち讃頌から出で、それが諸神に捧げたる宗教詩の集錄なるより得たる名である。佛典にこれを荷力、一力、頌力等と呼んでゐるのは、力荷、力一、力頌を顚倒したのであらう。又佛典には常にこれを讃誦の義に譯してゐる。

此梨俱吠陀は、中央アジアの原住地を捨てゝ印度に入り來つたアーリア族が、居を五河地方に占め、蘇摩（soma）なる神酒を灑ぎて聖火（agni）を燃やし、以て諸神を祀つてゐた時代の讃頌であるから、神の靈威、慈悲、功蹟を讃嘆し、或は長壽、戰勝、福利、及び子孫家畜の繁榮等を神に祈らんとする單純素朴なる宗教的抒情詩である。此吠陀の本文は種々なる體裁に於て保存されてゐる。餘の三吠陀の未だ成らざる時に編集された梨俱の本文は、長く口傳によつて傳はつてゐたが紀元前六百年頃に當りて聲音學上から變形せられた集錄體（Saṃhitâ-Pâṭha）が出づるや、これに次いで語句體（Pada-pâṭha）階體（Krama-pâṭha）羅織體（Jaṭâ-pâṭha）衆結體（Ghana-pâṭha）等が成つた。諸派解說（Charaṇa-Vyûha）なる書には梨俱吠陀の學系に莎迦羅（Çâkalas）ヷーシュカラ（Vâshkalas）アーシュヷラーヤナ（Âçvalâyanas）シャーンカーヤナ（Çânkhâyanas）マーンドウケヤ（Mâṇḍûkeyas）の五派（Çâkhâs）ありと記せど、此中の第三第四兩派の傳本は莎迦羅派のと大差ない故、實際は殘りの三派しか存せぬ

のである。此三派中でもマーンドゥケヤ派に獨立的の傳本があつたか否かは今日全く知ることが出來ぬ。又ヷーシュカラ派の傳本は失はれたけれども、古典の記事より推せば沙迦羅派のと大差がない。それ故、現存せる唯一の沙迦羅派の所傳が、梨俱の諸傳本中で最上のものと認めねばならぬ。

三四一　梨俱吠陀の區分法　梨俱吠陀を區分するには外形的(新法)と內容的との二法がある前者は此書を八分(Ashṭakas)となし、更に各分を多くの讀(Adhyāyas)となし、各讀をば五句宛を含む所の節(Vargas)に區分する法である。

第二法は普通に用ひらるゝ所であつて、全部を曼陀羅(Maṇḍala)即ち卷に十分し、更にこれを章、篇等に區別するのである。

梨俱吠陀は極めて大部のものであつて、ホーマーの二大詩篇を併せた程もある。

左に、第二の分類法に從ふて梨俱吠陀十卷の內容を槪說しよう。十卷の中、第二より第七迄の六卷は略々其性質を同じくし、或特殊の仙人及び其子孫に作られて、別々に其家に傳へ來つたものである。第一卷第八卷第十卷は、或一族の所產とは認め難い。第九卷の如きは諸家の蘇摩祭の讚頌を集めたもの故、其體裁は毫も作者と結合を持たぬ。第一卷は、何れの家の相傳とも記してないが、印度の傳說は之をシャタルチン派(Çatarchins)の傳承としてゐる。第二卷より第七卷までは次の如く作者の名が知られてゐるが、これとても一個人の作ではなく、其家に屬する諸仙の作若くは他の諸派の詩をも含むでゐる。

第二卷　勃栗瑀家のグリツアマダ (Gritsamada)
第三卷　毗濕婆密多羅 (Viçvāmitra)
第四卷　婆莫提婆 (Vāmadeva)
第五卷　阿低離 (Atri)
第六卷　跋羅陀闍 (Bharadvāja)
第七卷　婆尸陀 (Vasishṭha)

第一卷は諸族の仙人の作である。此第一卷より第七卷迄が最古の作で、これの次に第八卷第九卷が成つた。第八卷はカンヷ仙 (Kaṇva) 第九卷は鴦耆羅仙 (Angirasas) の作と云へど、多くの人の手になつたものである。

第九卷は前の八卷の成つた後に出で、第十卷は前の九卷の出でた後に成つた。其故、第十卷は最新の作であつて、讚頌の外に散文をも混じ、社會の狀況、哲學的考察をも記してゐる。以上に述べた十卷は、更に八十五の章 (Anuvāka) に分たれ、千〇十七の篇 (Sūkta) と、第八卷に追加された十一の補詩 (Vālakhilya) と合計一千二十八篇がある。

(卷名)	(章數)	(篇數)
第一卷	二十四	百九十一
第二卷	四	四十三
第三卷	五	六十二
第四卷	五	五十八
第五卷	六	八十七
第六卷	六	七十五
第七卷	六	百〇四
第八卷	十	九十二及補詩十一
第九卷	七	百十四
第十卷	十二	百十九

是を總計すれば十卷八十五章千〇二十八篇となる。更に細別すれば、句數が一萬〇四百〇二(或は一萬五百八十)、語數が十五萬三千八百二十六、音節が四十三萬二千ある。

此大部の詩は紀元後一五〇〇年まで殆んど三千年間、專ら口誦によりて口から耳へ傳へられたもので、婆羅門の強記なること驚くべきである。

梨俱吠陀は、幾百年間に諸家の仙人の作つた詩を集めたもの故、其年代を精密に定め難けれど、紀元前一五〇〇年より同一〇〇〇年頃までに成つたものとして差支ない。

三四二　梨俱吠陀の思想　梨俱吠陀は印歐民族最古の文學であるが、決して未開時代の民謠を集めたものではない。勿論幼稚にして笑ふ可き思想も存すれど、全體より見れば、醇化せる思想を含み、韻律及び語法の一定せる言語を以て書かれたものであるから、此詩が成るまでに民族發展の長き時期を經たことが解る。

此詩は當時崇拜せられた諸神を讚美せるもの故、其內容の大部分は神話である。

梨俱中にも種々なる思想がある故、此詩の宗教が如何なるものなるかは、一言にして盡し難いが、最も古くして且つ主要なる信仰は、諸の天然現象をば人性あるものとして崇拜せる多神教的天然崇拜(Polytheistic physiolatry)なりと云はねばならぬ。天然崇拜とは自然物自然現象自然力例へば天地日月水火風雨雷電等の如きものより、山河草木の類に至るまでをば、吾人と同じく人格意志を有する活物として崇拜する原始的信仰である。梨俱吠陀では、これ等の自然神を提婆(Deva)と呼んだ。佛書には提婆、泥嚩、禰嚩等と記し、天又は天神と譯してある。輝く(Div)と云ふ語根に出でゝ「光輝ある」と云ふ形容詞であつた。元來は天然現象中で最も顯著なる光明現象を呼ぶに此名を用ひたものなれど、後には光明現象を起さしむる能動者の義となり、遂には威力慈悲ある神的活物をば此名で總稱するに至つた。

吠陀諸神は何れも天然現象の擬人なれど、天然物象を日常目擊してゐる爲め擬人が十分でない。殊に何れも同じ天然現象故、多少の個性を除くの外、性格職掌等に於て共通點が多く、爲めに多少明白になりつゝあつた諸神の個性も不明に陷るに至つた。是れ吠陀の多神教がギリシア、ローマの多神教に比して、一神教若くは汎神教に進み易かつた所以であらう。吠陀の諸神に就いて少しく述べんに、諸神は天地の子又は他の有力なる神の所生とせられた故、皆其始を有するものである。不死(Amṛita)は蘇摩(Soma)日神(Savitṛi)又は神酒を飲むで得た所とせられてゐる。

諸神の形影を人間的のものと考へ、顏面手足等のことを記してあれど、諸神は天然現象の背後に隱れたる不可見の靈物故、吠陀に記せられたる諸神の形態は、畢竟其活動を譬喩したものに過ぎぬ。而して當時の印度人は極めて活潑な樂天的氣質を有し、諸神をも人類に恩惠を與ふる慈悲神と認めてゐた。神は人性を有するによゝ、吾人が讚頌供物によりて神を喜ばす時は必らず其報酬として福利が來ると考へてゐた。諸神の總數は不明なれど、或は三十三神ありと云ひ、或は三千三百三十九神ありなどと記してある。併し此中で最も著しきものは十數神である。

吠陀諸神は其住處によりて天(Dyu)、空(Antariksha)地(Pṛithivī)の三界に配當されてある。上天の神で有名なのは天父(Dyaus-pitā)婆樓那(Varuṇa)ウシヤス(Ushas)及び五柱の太陽神である。天父は光空の神として印歐民族未分時より尊まれた。ギリシアのツオイス、パテール神(Zeus pater)ローマのヨボス即ちユピテル神(Jovis, or Jupiter)は、何れも天父を意味し、印度のデヤウスピターと語原を同うしてゐる。婆樓那は被ふ(Var)と云ふ語根に出で、ギリシアのオウラノス(Ouranos)ローマのウラナス(Uranus)に相當する大空の神であつて、天界諸神中最も尊敬を拂はれ、道德的主宰と認められてゐる。五柱の大陽神とは蜜多羅(Mitra)サビトリ(Savitṛi)プーシヤン(Pūshan)須梨耶(Sūrya)毗濕奴(Vishṇu)である。ウシヤスは曙光を擬人した天女であつて、擬人が最も完全である。

次に空界諸神中最も有力なのは因陀羅(Indra)である。これは旱天に雨を與ふる雷雨神であるが、武族より軍神と崇められた。吠陀中二百五十詩篇は因陀羅の讚頌である。此外空界の神には、暴風雨の諸神マルツ(Maruts)風神婆與(Vāyu, or Vāta)雨雲の神パルジヤニヤ(Parjanya)マルツの父なる嚕達羅(Rudra)等がある。嚕達羅は暴風雨の神として可畏の性を有するが、後代にては濕婆(Çiva)の名で尊まるゝに至つた。

地界の神には大地を擬人した地女(Pṛithivī)の外、火神阿耆尼(Agni)酒神蘇摩(Soma)乃至山河の靈等がある。火神は地神中の最も有力なるのみでなく、恐らく吠陀諸神中の首位を占むべき神であらう。初めは因陀羅が尊まれたるも、後には火神が之に代るに至つた。蘇摩は火と共に祭祀に用ひられた神酒の靈である。此神酒は樹王と崇めらるゝ蔓木蘇摩より搾つた液であつて不死甘露の靈液と稱せられてゐる。以上は吠陀の主要なる神である。

さり乍ら、人智は長く斯かる多神教的信仰に甘んぜず、次第に唯一の神を求むる傾向を生じ、遂には此一元的傾向が宗教的方面に發達して唯一神教となり、又哲學的方面に向つて汎神教となつた。梨俱第十卷なる第百二十一篇及び八十一、八十二の二篇等は即ち一神教的思想を現はし、第一卷八十九篇第十卷百二十九篇等には汎神教的思想が現はれてゐる。此外第十卷には哲學思想の發達せる諸の創造詩篇がある。吠陀初期の思想では、宇宙をば諸神の生じた所としてあるが、第十卷に至つては、工匠が原料を用ひて建築するが如く、宇宙は一大工匠たる神の所造と說く建造論もあり、或は一大犧牲の崩化によつて生ずとなす犧牲崩化說もあり、或は又唯一實在から分出したとなす分出論もある。此故、梨俱には多神教一神教汎神教の思想のみならず宇宙論的の哲學的考察もあるが、猶此外に呪法卜占呪術の如き呪術的の信仰も存し、又祖先(Pitṛi)死靈(Preta)に對する祖先崇拜もあり、或は忿怒、言語、信仰無限等を擬人した抽象神の信仰も見える。猶未來に關する信仰乃至當時行はれた祭祀の有樣なども、興味ある研究なれども、茲には一々述ぶる遑がない。

三　自餘の三吠陀

三四三　神呪部——娑摩吠陀　四吠陀(Chaturveda)とは、婆羅門教の啓示聖典(Çruti)中の神呪部(Mantra)をなす者で、梨俱とこれに續いて現はれた後の三吠陀とを總稱する名である。今梨俱以後の三吠陀に就いて述べやう。

娑摩吠陀(Sāma veda)は、佛典に於て娑麼、三摩等と音譯し、歌詠、平明、等論等と義譯し、享祭讚悔祈禱の諸事を記すとなしてあるが、歌詠の譯のみ採るべきものである。佛書に欲陀法即ち婚嫁欲樂の諸事を記すとなし、或は禮儀卜占兵法軍陣の書なりとしてあるのは、他の吠陀と混淆したものらしい。此吠陀は、梨俱の讚頌(Ṛich)から發達したサーマン(Sāman)即ち歌詠を集めたもの故、娑摩吠陀と稱せられるのである。

此吠陀は、蘇摩祭の時歌僧(Udgātṛi)の使用に供する爲め、梨俱吠陀の第八第九の兩卷の蘇摩讚頌を拔抄したものである。蘇摩祭には、歌僧、役僧(Adhvaryu)、祀僧(Hotṛi)、婆羅門僧(Brāhman)の四僧があつて、夫々專門的に祭務を執るのである。第一の歌僧とは、祭歌を唱へながら蘇摩を獻する吟歌僧(Chhandogas)を謂ひ、第二の役僧とは、祭場を卜し祭壇を建てゝこれを淸め、その外祭具を陳列し、聖

火を點じ、犧牲を殺すことなどをするものである。第三の祀僧には、祭祀に熟達し朗々たる音調を以て讃頌を誦するものである。第四の婆羅門僧は、他の三僧の上に位して、祭典を監視するのが任務である。

娑摩吠陀に含まれる一五四九詩篇中、七五詩篇（一書に七八詩篇とす）を除くの外は、何れも梨俱吠陀から無秩序に拔抄したもので、或特殊の祭祀に關するもののみを集めたと言ふ外には、毫も梨俱と內容上の關係がない。されば此吠陀は殆んど獨立的の價値なきものであつて、梵文學史上より觀て左まで重んずべきものでない。

此吠陀の詩篇は梨俱と同じき讃頌の形式を具へてゐれど、元來唱歌の用本として集錄されたるもの故、唯梨俱と音調の相異がある。

三四四　四歌書　此吠陀に附加せられたる四種の歌書(Gānas)のみは、純粹の唱歌書であつて、延音、復唱、其他唱歌に必要なる音節の區分等が示してある。四歌書とは次のものである。

（一）聚落歌書(Grāmageya-gāna)

聚落(Grāma)即ち村邑に使用するもので十七課(Prapāṭhakas)から成る。

（二）森林歌書(Āraṇya-gāna)

森林中に用ゆるもので、六課から成る。

（三）ウーハ歌書(Ūha-gāna)

二十三課から成る。

（四）ウーヒヤ歌書(Ūhya-gāna)

六課から成る。

右の四歌書の中、二種づゝが夫々娑摩吠陀の前書と後書とに附屬してゐる。

娑摩吠陀は讃頌集(Ārchikas)と呼ばるゝ前後二書に分たれる。此中前書は更に六課に分れ、初めの五課は十句詩(Daśats)十篇づゝを含み、第六課のみ九篇から成つてゐる。後書は九課に分れ、各課は二節又は三節を含むでゐる。

三四五　二派の傳本　娑摩吠陀に屬する學派として、カウツマ派(Kauthumas)と、ラーナーヤニーヤ派(Rāṇāyanīyas)とが知られてゐる。此中前者はグジアラト地方(Gujarat)に現存し、後者は一時マーラッタ國(Mahratta)に住みしも、今は東部ヒデラバト(Eastern Hyderabad)に存するとのことである。二派の傳本は大同小異らしく見えるが、カウツマ派のは第七課のみが現存してゐない。

三四六　耶柔吠陀　第三の吠陀なる耶柔(Yajur)は、佛典に夜殊、治受、耶樹等と音譯し、祭祀、祠論、祠祀明等の義譯を揭げてゐる。此吠陀は、佛典に祭祀若くは善道法を說けるものと訓へる如く、祭式即ちヤジウス(Yajus)の書故此名を得たのである。ヤジウスとは、波斯語のヤヅ(Yaz)と同根なる梵語ヤジ(Yaj)から出でた語である。耶柔吠陀は文學史上宗敎史上重要なる古典である。此吠陀が、梨俱とは地理宗敎社會の狀態を異にした時代の作物であることは、內容批判上容易に知り得られる。

今やアーリア文明の中心點は、五河を去つて今のヒンドウスターン本部(The Hindūstān Proper)に移つてゐる。ヒンドウスターン本部と云ふのは、恆河(Gaṅgā)即ちインダスの中流と、閻牟那(Yamunā)即ちジュムナ(Jumna)との流域であつて、西は今のデルヒ府(Delhi)より、東はベナレス府(Benares)に至る間を含むでゐる。

アーリア民族が五河より東進を始めた年代は、大凡紀元前一〇〇〇年頃であつて、爾來諸族を征服しながら次第に東方へ進み、同五〇〇年頃には、ヒンドウスターン本部の外、更にこれよりも東恆河々口に至るまでの所謂今の東部スバー(The Eastern Subah)をも領土となしてゐた。此時期が歷史家の耶柔吠陀期若くは婆羅摩那期(Brāhmaṇa Period)と稱ふるものであつて、文明の中心點は、所謂中國(Madhyadeśa)となつてゐた。アーリア民族の諸派は、北印度中央部の諸地に建國したが、就中鳩留族(Kurus)の鳩留國(Kurukshetra)般闍羅族(Panchālas)の建てた般闍羅國は最も強勢であつた。此中前者は耶柔吠陀及び此派に屬する婆羅門族が、最も神聖視した所で、婆羅門敎(Brāhmanism)及び印度の社會制度も茲に確立したのである。されば摩奴法典(Mānava Dharma Śāstra)には此地を梵土(Brahmā-varta)と呼んでゐる。梵土とはドリシヤドヷチー(Drishadvatī)サラスヷチー(Sarasvatī)兩河の邊より東南ジュムナ河畔まで擴がり、今のシルヒンド(Sirhind)に相當する地域である。

般闍羅國はアルラハーバード(Allahābād)よりミールト地方(Meerut)に擴がり、恆河とジュムナ河との間に介在してゐる。

右の二國の外摩倫耶(Matsya)憍薩羅(Kośala)毗提訶(Videha)迦尸(Kāśī)等も當時起つた諸強國である。

哲學宗敎も此時期に入りて大發展をしたが、此時期の初めになつた文學が即ち耶柔吠陀である。此吠陀の內容は、梨俱から採つた讃頌と此吠陀に特有な散文とから成つてゐる。

三四七　五派の傳本　此吠陀に屬する學派にカタ派(Kaṭhas)と其分派なるカピシュタラ派(Kapishṭhalas)との外、猶マイトラーヤニーヤ派(Maitrāyaṇīyas)とタイチリーヤ(Taittirīya)ヷージアサネーヰン(Vājasaneyins)との二新派がある。

是等の諸派に傳はつてゐる耶柔吠陀の諸傳本の中、マイトラーヤニー集錄(Maitrāyaṇī Saṃhitā)は四部(Kāṇḍa)五十四課(Prapāṭhaka)から成り、カータカ集錄(Kāṭhaka Saṃhitā)と言語上密接の關係を有してゐる。

又カピシュタラ カタ集錄(Kapishṭhala-Kaṭha Saṃhitā)は未だ斷片しか發見されない。

以上の諸集錄よりも後に成つたタイチリーヤ集錄(Taittirīya Saṃhitā)は七部四十四課に分れてゐる。以上に擧げた諸集錄は、何れも密接な關係を有し、其性質が同じきのみならず、往々文辭上の一致すらある。かくの如く內容及び材料の配列が相類似し、何れも祭祀の時に用ひらるゝ讃頌及び祭式が、その解說と交雜してゐる故、是等の諸集錄を總稱して黑耶柔吠陀(Kṛishṇa Yajur veda)と名ける。黑とは不明若くは無秩序の義で、白耶柔が成つた後に與へられた稱號である。

右の諸集錄とは全く體裁の異なるヷージアサネーヰ集錄(Vājasaneyi Saṃhitā)は全く祭祀用の讃頌祭式のみを含み、その解說は別に婆羅摩那中に集められてある故、此吠陀をば白耶柔吠陀(Śukla Yajur veda)と言ふ。白とは明白の義で、此吠陀が秩序的組織的に編集されてゐることを表はした名である。ヷージアサネーヰとは無秩序なる黑耶柔を改造したる濱若婆佉仙人(Yājñavalkya)の異名であつて、學者マヒーダラ(Mahīdhara)は、此名を以てヷジアサニ(Vājasani)の子なることを表はすものとなしてゐる。

此白耶柔吠陀はマードヤムデナ派(Mādhyandinas)と乾婆派(Kāṇvas)とに保存せられてゐる。前者には三〇三章(Anuvākas)一九七五分(Kaṇḍikās)がある。

白耶柔の二傳本は、散文祭式の讀方に變化あるの外、內容外形殆んど同一で、其製作年代も左までの懸隔がない。されば此二傳本の相異は地理を異にしたるより起つたものであらう。白耶柔は四十諦(Adhyāyas)に分れてゐるが、此中にて初めの十八諦が此吠陀本來の內容であつて、讃頌と散文祭式のみから成つてゐる。殘りの二十二諦は種々の年代に漸次追加されたものである。今此四十諦を仔細に檢するのに、大凡四期の區別を認むることが出來る。本來は初めの十八諦しか無かつたが、次の七諦が之に加へられ、其後儀式發達の結果として第二十六諦より第三十九諦までが成り、最後に第四十諦が出來たものである。併し最初に出でた十八諦も黑耶柔よりは後の作であるらしい。此最古の十八諦中第一諦より第十諦までは新滿月祭(Darśa-pūrṇa-māsa)の神呪（讃頌及び祭式）を含み、第十一諦より第十八諦までには蘇摩祭の神呪が集められてある。

三四八　黑白耶柔概觀　今黑白二類の耶柔吠陀を大觀するに、之が祭祀用として編集されたことは娑摩吠陀と同じきも、娑摩が單に祭祀の一部なる蘇摩祭のみを說けると異り、耶柔は祭祀全般に亙つてゐる。又娑摩耶柔は何れも梨俱吠陀と關係が深けれど、娑摩が殆んど全部を梨俱より引けると異り、耶柔には創作的の部分が甚だ多い。今耶柔の宗敎思想を觀るに、その眞髓は梨俱のと左まで相違せざれども、枝葉の點に於ては種々の變化が發見せられる。まづ神話に就いて言へば、梨俱の第一〇卷一二一詩篇に出づる生主神(Prajāpati)は、耶柔にて更に地位を高め、諸天人類の父としてギリシヤのツオイス神(Zeus)の如き地位に進むでゐる。

又魯達羅神も此吠陀では明かに溼婆の名で呼ばれ、後代に溼婆神の特稱となつた大天(Mahādeva)とか伊舍那(Īśāna)即ち天主とか言ふ稱號を以て呼ばれてゐる。毗溼拏神も梨俱時代に比して大に其地位が高まつてゐる。

此外梨俱で善惡兩神に通じた阿修羅(Asura)なる稱號は、今や全く惡鬼の意味に定まつてゐる。右に述べた神話の外、宗敎的信仰も大に變化してゐる。梨俱では禮拜の對象は諸神であつて、祭祀は唯是等の恩寵を得る方便視されてゐたが、耶柔では祭祀夫れ自身が信仰の目的となり、全能の祭祀を行へば諸神をも僧侶の意想に服從せしめ得ると考へられてゐる。それ故梨俱に溢るゝ敬虔の念罪惡の意識等は今や全く其影を收め、只管現世の福利を得んとする呪術的分子に充ち、祭祀は漸く複雜となり、或儀式にはこれに特有の讃頌を配當してある。殊に其讃頌の如きも、梨俱に比すれば大に重複となり、不明瞭なる間投詞を多く使用する傾がある。唵(Om)の如きは最も屢々用ひらるゝ間投詞である。梨俱の第十卷に萠芽してゐた呪法は、此吠陀に於て著しく發達し、戰勝降雨の如きは僧侶が神呪を唱へて祭祀を營めば忽ちにして成就し得るものと考へて神を強迫する態度を示してゐる。それ故、此吠陀は讃頌と言ふよりも寧ろ呪法に因りて得べき福利を說いたものと認むべきである。かく祭祀が全能視された結果、祭祀によりて神が萬有を造るなど言ふ神學說も屢々記せられてある。祭祀の全盛と相併びて、僧侶も其勢力を增し、今や四姓中の最上位を占むるやうになつて來た。此外梨俱に存せざりし龍蛇(Nāga)崇拜が今や印度宗敎の一要素となつてゐることも亦注目すべき事實である。以上述ぶる所によつて、耶柔が梨俱と婆羅摩那との連鎖をなす重要な文學であることがわかる。

三四九　阿達婆吠陀　今まで述べ來つた梨俱娑摩耶柔の三吠陀が、婆羅門敎の文學と認められて三明(Trividyā)と稱せられてゐた。然るに第四の阿達婆吠陀(Atharva-veda)が出でゝこれに加へられ、茲に四吠陀の名が起つた。

阿達婆吠陀は、佛書に又阿闥婆等と記し、呪術、術

明、術論等と譯し、異能技術禁咒醫方符術之書なりと解しておるのは、何れも當を得ておる。阿達婆なる名稱は、阿闥婆祭（Atharvans）と云ふ祀火僧の族名から出でたものらしい。アタル（Athar）とは梵語及び波斯古語で火を意味するのであるから、祀火僧の族を阿闥婆祭と呼ぶに至つたのであらう。此吠陀には又アタルヷーンギラサ（Atharvāngirasah）と言ふ古名がある。これは前記の阿闥婆祭に他の祀火僧の族名鴦耆羅（Angiras）を加へたものである。此二仙族は印度波斯兩民族の共通の祖先である。印度では此二仙族が阿達婆吠陀を編集したるか、さもなくばこれを其家に傳承し來つたものと見える。併しながら此吠陀の英譯者ブルームフヰールド氏（Bloomfield）は、阿闥婆祭を吉祥章句、鴦耆羅を咒符の義であるとしておる。此吠陀にはブリグ、アンギラサ（Bhṛgv-angirasah）婆羅摩吠陀（Brahma-Veda）の二名がある。前者は祀火僧の族名物栗瞿（Bhṛgu）と鴦耆羅とを結合した稱號である。ゴパタ婆羅摩那（Gopatha Brāhmaṇa）では、此吠陀を最上の神智となし、これを婆羅摩吠陀と呼んでおるが、此名は祈禱（Brahman）特に咒文を意味するものである。然るに此吠陀に關する僧族は、四僧の主位を占むる婆羅門僧が、餘の三吠陀の何れとも結合されて無いのを見て、第四の吠陀の阿達婆は婆羅門僧の用本に造られたもの故、婆羅門の吠陀即ち婆羅摩吠陀と呼ばれるのだとしておる。併しこれは四吠陀を強て四僧と連結せんが爲めの附會說に過ぎぬ。此外俱馬吠陀に屬する尼陀那經（Nidāna Sūtra）には、此吠陀をアータルヷニカス（Ātharvaṇikas）と呼んでおる。

此吠陀は、アーリア民族が恆河の中流に出でし時代に成り、四吠陀中最後の作なる故、これが聖經と認められるまでには長き時日を要した。餘の吠陀中では黑耶柔のタイチリーヤ集錄中に唯一度餘の三吠陀と併べてアンギラサ（Angirasah）の名が現はれておる。此吠陀に屬する婆羅摩那は無論これの權威を認むれど、他の婆羅摩那及び優婆尼沙土にはこれを吠陀に數へぬものもある。又諸の法經（Dharma Sūtras）は、此吠陀に相當の地位を許しておるが、中にはこれを不淨劣等の法として貶したものもある。併し摩訶婆羅多では四吠陀の一として十分其證權を認められ更に布剌那文學では、此吠陀の地位が非常に高くなつておる。此の如くして、阿達婆は聖典中に地位を有することゝなつたれど、他面には法經時代より此吠陀を輕眡する偏執も存し、現代に於ても南印度の有力なる婆羅門中には此吠陀の神聖を否認する者もある。

三五〇　二派の傳本　此吠陀は梨俱より遙に後なるも、婆羅摩那より以前の用語で書かれてある。此吠陀にはパイパラーダ派（Paippalādas）と商那派（Śaunakas）とに保存された二傳本がある。阿達婆集錄は二十部（Kāṇḍas）に分れ、更に是をば三十八課（Prapāṭhakas）若くは九十章（Anuvākas）となすのが恆である。これに含まるゝ詩篇の數は七百三十で、頌數は六千もある。六千頌中、千二百頌は梨俱中特にその第十、第一、第八卷より採れるものである。二十部中、初めの十三部は、詩形の上より整頓せられたもので、元來はこれだけしか存在しなかつたことは內容外形の上より知られる。第十四部より第十九部迄は、內容の上より整列したものである。最後の二部即ち第十九第二十は明かに後世の附加である。第十九部は補充的の斷片を集たもの、第二十部は梨俱よりそのまゝ拔萃した完全な因陀羅讚頌である。此吠陀の六分の一は、これに特有の散文より成り、種々の興味多き思想を含むでおる。

三五一　阿達婆吠陀の內容　今此吠陀の內容を檢するに最後の部を除くの外は其本質に於て全く祭祀と無關係である。されば、これの讚頌は生誕、婚嫁、葬儀等の如き家庭の式典や、即位式の如き政治的の儀式に用ゆる爲め集成せられたものと見える。

全體上より云へば、此吠陀は咒符を集めた異樣の文學であつて、これに表はるゝ主なる信仰は禁咒卜占巫術等の咒法的宗敎である。斯かる信仰は既に梨俱吠陀第十卷にも現はれ、耶柔吠陀に於ても著しく發達しておる。

併し梨俱耶柔等にては祭祀を主として咒法を客としたものなれど、阿達婆吠陀では咒法のみが全流となり、其應用の範圍も、梨俱の如く家庭內に限られず、極めて多方面に跨がつておる。阿達婆吠陀は遙かに梨俱の後になり、其大部分が韻文なることに於て梨俱と外形が似ておれども、其內容は全くこれと異り、梨俱が僧族王士族等の如き上流に行はれた純淨な信仰を表はせるに反し、阿達婆は下級社會や蠻民の間に行はれた幼稚な迷信を以て充たされておる。梨俱には天然の善靈に對する溫かき情が溢るれど、阿達婆では魔力惡靈に對する怖畏心が強く、僧權や迷信に囚はれて活動自躍の氣象なき當代の民心を反映しておる。阿達婆の咒法には、福利を求むる積極的のものと、災殃を除かうとする消極的のものとの二方面がある。前者に屬するものは、長壽、健全、富貴、幸福、愛情、旅行の安全、賭博の勝利等を得んとする咒文で、後者は、惡鬼惡獸病魔死靈乃至婆羅門に抗する怨敵等より起る災害を除く咒文である。

此の如く、阿達婆には種々の迷信が充ち、鬼神を怖るゝ原始的の思想が見え、その符中にはアーリア未分時のと大差ないのもある。全般から言へば勿論迷信的なれども、之と共に他面には、神の本質、世界の支持者宇宙の起原等に關する哲學的宗敎的考察が、梨俱

時代よりも遙かに進歩しておる。此外阿達婆は印度最古の醫學書として注目すべき古典である。是等の點から觀れば、人文史の研究に於ては、阿達婆の方が梨俱よりも遙かに有益多趣と謂はねばならぬ。

三五二　阿達婆の神學　阿達婆の神學及び哲學を槪觀するに、一面には咒法により庶物に宿れる靈鬼を利用し、以て生前死後の幸福を、求めようとする幽術的思想が流行しておるに係はらず、他面には種々の抽象的神格を認め、或は汎神敎的の神を立てゝ之に融合せんとするが如き高遠な思想をも生じた。阿達婆に現はれた神には、紅陽（Rohita）生氣（Prāṇa）愛欲（Kāma）時（Kāla）乃至梵志（Brahmachārin）の行をなしつゝある大陽神等があるが、就中注目すべきは支柱（Skambha）梵（Brahman）の二神である。支柱神は此吠陀の第十卷中第七第八の兩篇に於ては宇宙の最高實在とせられ、此神は一切の生命あるものにして、全法界を自體の上に安んじ、天地を造り萬有に遍滿す、三十三神も此神の支節なり、若し人此神を知れば即ちこれに合一すと說かれてある。梵は梨俱にて祈禱或は讚誦を意味し、後には祈禱の眞髓たるものを表はすに至つたが、阿達婆にては萬有の中心たるべき神智を擬人した神の名とせられ、天空を造り下界を支ふるは此最高神なりと記してある。されば支柱神並びに梵の觀念は優婆尼沙土哲學の遠き源と認むべきである。

前章及び本章に於て述べた四吠陀は即ちこれ吠陀文學第一期の作物である。今章を改めて更に第二期の婆羅摩那文學を述べよう。

四　婆羅摩那文學

三五三　概說　前述の四吠陀集錄は吠陀文學の中、前期即ち創作時代に成り、印度國敎の第一期吠陀敎（Vedism）を代表しておる。四吠陀の中で最後の二吠陀即ち耶柔と阿達婆とは、アーリア文明が恆河流域に東漸せる初期の作物であるが、これに續いて吠陀文學の後半期即ち註釋時代に成つた一群の文學に婆羅摩那（Brāhmaṇas）と言ふのがある。婆羅摩那とは祀法書と譯さるべき稱號であつて、其が祈禱（Brahman）に關する書なる故、此名を得たのである。此意味に於ける婆羅摩那なる名は白耶柔吠陀中特に第十三卷に現はれておる。又此書は祭祀に關して敎條的解說を與へたるもの故、俱馬吠陀の諸修多羅では、婆羅摩那をば註疏（Pravachana）と同義に用ひてある。

三五四　婆羅摩那の三部分　廣く婆羅摩那と呼ばれる文學は、正規として婆羅摩那（狹義）森書（Āraṇyaka）優婆尼沙土（Upanishad）の三部を包含しておる。

狹義の婆羅摩那には、其終末に補充として追加された森書がある。森書は婆羅摩那の儀式を表號的に解釋したもので、優婆尼沙土は實に此書の最後の部分をなすものである。

右の分類の外マドウスーダナ、サラスヷチ（Madhusūdana Sarasvati）は、其著プラスターナ、ベタ（Prasthāna Bheda）中に於て、婆羅摩那文學の內容を法規（Vidhi）解說（Arthavāda）吠檀多（Vedānta）即ち優婆尼沙土の三類に分つておる。茲に謂ふ所の法規と解說とが狹義の婆羅摩那の內容をなすもので、吠檀多は即ち優婆尼沙土である。

此狹義の婆羅摩那は、四吠陀即ち神呪部（Mantra）と相合して婆羅門敎聖典中の行法部（Karmakāṇḍa）即ち實行門をなし、優婆尼沙土は森書と共にその智識部（Jñānakāṇḍa）即ち理論門を形成し、行法部と智識部とが相合して啓示聖典（Śruti）即ち天啓文學の全體をなしておる。啓示聖典に傳承聖典（Smṛti）の一部なる修多羅文學を加へたるものが、所謂吠陀文學の全體である。

印度國敎の第二期なる婆羅門敎即ち「アーリアの正法」（Ārya-dharma）には、儀式的（若くは祀法的）と哲學的（若くは理論的）との兩方面がある。前者を代表するものは狹義の婆羅摩那で、後者を含める文學が即ち優婆尼沙土である。夫故廣義の婆羅摩那は婆羅門敎學の全般を含めるものとして差支が無い。或學者は、婆羅門敎に右の外更に形名的（Nomistic）と神話的（Mythological）との二面があるとし、諸の法論（Dharmaśāstra）に表はるゝのを形名的と呼び、史詩（Itihāsa）のをば神話的婆羅門敎と稱しておる。

茲には狹義の婆羅摩那を指すに祀法書なる譯名を以てし、これを述べたる後森書及び優婆尼沙土を槪說しよう。

三五五　祀法書　祀法書は僧族が新讚頌を作るを止め、古詩を反唱しつゝ祭祀供犧に熱中せし當時の思想を代表した文學であつて、其名の示す如く、儀式を細說せるものである。

此書は、吠陀以來の若くは新興の儀式を精細に論究して、僧族の指針となす目的で作られたのである。されば、讚頌と祭祀とを結び附け、一方に於て兩者の直接的關係を示すと共に、他方にはその間の表號的意義を明かにしておる。即ち前者の目的を達せん爲には、特殊の祭祀に就きて詳密な解說を試み、後者の爲めには、祭式を精細に分析して其要素を一々說明し、或は古傳及び考察の補助を假りて獨斷的に其關係を說いておる。されば此書は、僧族が祭祀の起原、意義、價値等の考察に耽り、供犧を事としておた時代思潮を反映してゐる。

三五六　製作年代及び文體　此祭祀熱中時代の長か

つた事は、全體上諸の祀法書が其性質を一にせるに係らず、各々製作年代が異り、甚しきは同一の祀法書中にも時代を異にせるのがあるので知られる。其製作年代は大凡紀元前八〇〇年より同三〇〇年頃に亙り、印度に於て社會的若くは精神的方面の發達上最も顯著なる一時期を代表してゐる。祀法書の用語は梨俱に比して大に形式に囚はれた傾がある。其大部分は散文で書かれてゐる故、印歐民族最古の散文として注目すべきものである。しかし、散文の外、これに混入された伽陀（Gāthās）即ち偈頌もあり、又散文及び偈頌と相並びてスパルナードヤーヤ（Suparnādhyāya）と言ふ別種の詩體もある。この詩體は、吠陀風の讃頌が其生命を失ふた當時に於て、吠陀の詩風を摸擬した一種の擬古文學である。

三五七　祀法書の内容　祀法書は本來祭祀供犧を究明したものであるから、其内容は主として祭祀の法規（vidhi）とその解說からなつてゐる。法規には根本法規（Utpatti vidhi）特行法規（Viniyoga）特殊法規（Prayoga vidhi）攝任法規（Adhikāra vidhi）の四種がある。以上によつて知らるゝ如く、當時の僧族は、天然崇拜の古教を一變して儀式全能の宗教となし民心に多大の感化を與へたのである。それ故、祀法書は彼の吠陀詩人の優雅淳朴なる思想とは大に趣を異にし、傳說古譚のが讃頌と代つたる神學書であるから、儀式的婆羅門教を探る好材料と言はねばならぬ。

祀法書は元來一個人の思想で作られ、口傳によりて其家族又は門弟の間に授受增補せられたもので、隨分多數あつたが、後に至り此類の諸書を調和統一するの必要上、別種の祀法書を合一したものが各地に編集せられた。此書は僧侶の所造なれど、年を經るに從ひて神聖視され、遂に啓示聖典中に其地位を占むるに至つた。後に修多羅文學が起つて、儀式執行の指南書となるや、多くの祀法書中には實用を失うて散逸した。されば、他の祀法書中にその名稱のみが殘つて傳本の存在せぬものも少くない。

ヷーシユカラ派（Vāshkalas）バールラヰン派（Bhāllavins）パインギン派（Paingins）シヤタカヤニン派（Çatakayanins）等の祀法書は何れも現存してゐない。併しながら、重要な祀法書にして、幸に今日に傳はつたのも多い。現存の祀法書は、最古の儀式及び其言語學的解釋を記せるのが共通の特色なれども、元來作者及び時代を異にし、且つ別種の吠陀に附屬せるもの故種々の點に於て相違がある。

祀法書中早きは紀元前八〇〇年代になれるも、遲きものには同五〇〇年頃のもある。言語學者波儞尼（Pānini）は、祀法書を古（purānaprokta）新（tulyakāla）の二類に分つてゐる。

三五八　主要なる祀法書　現今の學者の研究に從へば祀法書の正形を具へて現存せるものゝ中、ターンディヤ（Tāndya）タイチリーヤ（Taittirīya）の兩書が最古の作と謂はれる。前者はターンディン派（Tāndins）の所傳にして、二十五卷ある故一に二十五卷書（Pancha Vimça）とも云はれ、或は又プラウダ（Praudha）の名もある。此書は娑摩吠陀に屬し、鳩留國よりも東になつたもので、其中には非婆羅門教徒のアーリア族を婆羅門教に化せしむる入族祭（Vrātya-Stomas）及び蘇摩祭のことなどを說いてゐる。第二のタイチリーヤ書は、黑耶柔吠陀に屬し三卷から成るが、これは、性質上タイチリーヤ集錄と差異なく、集錄に洩されたる一部の祭祀を述べ、或は既に說かれたるものをば更に詳述したるもの故、集錄の補充に過ぎぬ。

以上の二書に續いて成れるものは、娑摩に屬するジヤイミニーヤ（Jaiminīya）と梨俱に屬するカウシータキ（Kaushītaki）アイタレヤ（Aitareya）との三書である、ジヤイミニーヤ書は、一にタラヷカーラ（Talavakāra）とも云ふ、其大部分は未だ出版せられねど、五卷より成るらしい。

カウシータキ一名シヤーンカーヤナ書（Çānkhāyana）は三十章より成り、弘く設火式（agni-ādhāna）旦暮の火祀（agnihotra）新滿月祭、四ケ月祭（Chāturmāsya）等のことを說けど、その主とする所は蘇摩祭である。此書にも興味ある傳說が多い。アイタレヤ書は、八卷（Panchikās）四十讀（adhyāyas）より成り、一卷に五章を含む。後の三卷は前五卷よりも後代の作である。此書にはアグニシユトーマ祭（Agnishtoma）ガヷーマヤナ祭（Gavāmayana）十二日祭（Dvādaçāha）等の種々なる蘇摩祭や、旦暮の火祀、即位式（Rāja-sūya）王師（purohitas）の地位等を說いてゐる。又此書には、一婆羅門の子狗尾（Çunaḥçepa）に關する長くして且つ有名な傳說がある。右の三書の後に成れる白耶柔吠陀の百步書（Çatapatha）である。此書は白耶柔の儀式を精細に釋解したものであつて、全吠陀文學中、梨俱に亞いで重要なものである。

此書にはマードヤムデナ（Mādhyamdina）乾婆（Kānva）兩派の傳本がある。マードヤムデナ本は十四部（kāndas）よりなり、註疏又は奧書には各部にそれぞれ特稱を附してゐる。十四部は百讀（adhyāyas）若くは六十八課（Prapāthakas）に分たれ、これが更に四百三十八婆羅摩那（Brāhmanas）七千六百二十四分（kandikās）に區分されてゐる。乾婆派の傳本は十七部に分れてゐるが、これはマードヤムデナ本の第一第五第十部を夫々二分せし爲め三部が增したのである。兩傳本共に部名は同一である。

マードヤムデナ本十四部中、最初の九章は古く殘りの五章は新しい。此祀法書を初めて集成したのは演若婆佉仙（Yājnavalkya）なるべきも、爾後幾代の間此學派の人々の手に增補せられて現存の形を取つたものと見える。此傳本にて、第六部より第十部迄の部分では、シヤンデリヤ仙（Çāndilya）の教を最高の證典と仰げど、其他の部分には演若婆佉仙がこれに代つてゐる。此書の成りし當時、アーリア文化の中心が鳩留般遮羅の地方であつたことには、幾多の例證がある。此書に於て崇まるゝ人物中、ジヤナメジアヤ（Janamejaya）は鳩留國の王で、アールニ仙人（Āruni）は般遮羅人である。されど、婆羅門教は當時既に中國よりも以東の憍薩羅、毘提訶（Videha）に及んでゐた。毘提訶王闍那迦（Janaka）の宮廷にて、鳩留般遮羅地方の婆羅門のなした論議が、此祀法書の後部の主なる内容となつてゐる。是等の婆羅門中にて最も有名なのが即ちアールニの門下の演若婆佉仙である。原始佛教は、憍薩羅及び毘提訶に根據を置いたのであるから、百步書とも關係してゐる。又數論學派の第二祖阿修利（Āsuri）の名も、百步書に出てゐる。此外百步書には、有名な洪水說話の外、後の摩訶婆羅多、羅摩耶那、等の史詩と關係せる傳說もあり、又詩聖迦梨陀娑の二劇シヤクンタラー、ヸクラモルヷシーの題材となつた古譚もある。此の如く百步書は梵文學史上極めて重要な位地を占めてゐる。其成立年代は婆羅摩那時代の末期なること疑を容れぬ。此書は他の祀法書と文體同じきも、平明なる點に於て大に進步の迹が見え、又儀式の說明も極めて組織的である。殊に萬有を一元に統一せんとする哲學的考察に於ては、到底他の祀法書の及ぶ所でない。

祀法書中最後に成つたものは、阿達婆のゴパタ書（Gopatha）と、娑摩の短かき四書とである。ゴパタ書は、阿達婆集錄と特別の關係なきものであつて、二書よりなり、前書は五章後書は六章を含む。その製作年代はヷイターナ經（Vaitāna sūtra）よりも遲く、吠陀期以後らしい。娑摩の短かき四書サーマヸダーナ（Sāmavidhāna）デワタードヤーヤ（Devatādhyāya）ヷムシヤ（Vamça）サムヒトパニシヤド（Samhitopanishad）は、祀法書の名あれど内容はそうでない。

以上に述べた祀法書の外に、猶娑摩に屬するシヤドヸンシヤ書（Shadvimça）チユハーンドギヤ書（Chhāndogya）がある前者は七部より成り獨立的の名稱を有すれど、實はターンデヤ書の第二十六卷をなすものである。後者は十讀あれど、初めの二章のみが生誕婚嫁等を說いた眞正の祀法書で、後の八讀は所謂チユハーンドギヤ優婆尼沙土と稱せらるゝものである。祀法書中、梨俱のは祀僧、娑摩のは歌僧、阿達婆のは役僧の職務に關係してゐる。

三五九　祀法書の神學　今諸の祀法書により當時の社會狀態を見るに、婆羅門族は多年王士族と權力を爭ひたる結果、此時代に於ては四姓の最上位を占むるに至つた故、祀法書中に婆羅門族は人中の神なりと記したのもある。僧族が勢力を得ると共に、其專業とせる祭祀（Yajna）も亦全能視さるゝのは當然であるから、祀法書には屢々祭祀の効驗の偉大なることを說いてゐる。當時の僧族は一般に抽象的理論よりも、祭祀禮の如き實行的方面に全力を注いでゐたるに係らず、哲學宗教の方面に於ても自から考察の步を進め、梨俱の末期に現はれた生主神（Prajāpati）は、祀法書に於ける最高神となり、諸神の權威屬性は悉く此神に攝取されてしまつた。但し、祀法書中後期に成つた部分には、生主が漸く勢力を失ひ、動もすれば梵（Brahman）に壓倒さるゝ傾向が見え、漸く優婆尼沙土の梵我論に接近しつゝある。祀法書では、宇宙の起原に關しても、生主の創造なりとするものと、水其他の原物の分化なりと說くものとの兩說がある。此外神秘主義表號主義の全盛、未來觀の發達等も、亦祀法書に於て注目すべきことである。

三六〇　森書　次には廣義の婆羅摩那の第二部をなす所の森書（Āranyaka）に就いて述べよう。森書は祀法書の補充として後に現はれたものなれど、實は祀法書の終末の部分と認めて可い。此名の由來に關し、オルデンベルヒ氏（Hermann Oldenberg）の說によれば、此書に說く所は神秘幽玄にして、喧騷なる聚落（grāma）で學ぶべきに非ず、唯閑寂なる森林（aranya）中に授受さるべきもの故此名を得たとのことである。一說には、在家（grihastha）の俗人の家庭に用ふる儀式書として婆羅摩那の成つた如く、林住（Vānaprastha）の仙人が屋外に使用する爲めに森書が出でたとある。併しオルデンベルヒ氏の說が當つてゐるやうである。

祀法書に於ては思索的方面が欠けてゐる故、森書が出でゝ、祀法書の儀式に譬喩的象徵的の解說を與へ、かくして祀法の原理を闡明した。印度民族は、由來象徵主義神秘主義を喜ぶ傾がある故、既に祀法書に於ても祭祀の各部分を表號としてゐたが、森書出づるや、專ら斯かる象徵的解釋に力を盡し、神秘主義に耽溺してしまつた。されば森書は最早實用的儀式的のものではなく、神智を說いた哲學書と言はねばならぬ。

森書はかくして、祀法書の儀式教から、優婆尼沙土の一元哲學に進むべき間接的の連鎖たるに至つたのである。森書の言語が大に後の梵文學期のに近づいてゐるのも茲に注目すべきことである。

梨俱及び耶柔には、祀法書と同名の森書があれど、娑摩、阿達婆には存せぬ、森書は本來凡ての祀法書にあつた筈なれど、後に優婆尼沙土の中へ混入

せられたものと見える。今二三の森書（アーラニヤカ）の内容を略說しよう。

梨倶（リグ）のアイタレヤ祀法書には、五巻十八章からなる同名の森書（アーラニヤカ）が存する。第一巻は蘇摩（ソマ）祭の儀法を記したものなれども、第二巻最初の三章には、生氣（プラーナ）、丈夫（プルシャ）（Purusha）等と呼べる宇宙我に對する考察を含み、後の優婆尼沙土（ウパニシャド）と密着してをる。最後の二巻は修多羅（スートラ）體故、修多羅（スートラ）文學の起原と認むべきものである。

次に梨倶（リグ）のカウシータキ祀法書にも亦これと同名の森書（アーラニヤカ）がある。十五章ある中、第三章より第六章に至る中間の四章が、有名なカウシータキ優波尼沙土（ウパニシャド）である。

黒耶柔（クリシナヤジュル）のタイチリーヤ祀法書にも、同名の森書（アーラニヤカ）が附加されてある。此森書（アーラニヤカ）には十節ある中で、第七節より第九節迄は同名の優婆尼沙土（ウパニシャド）をなし、第十節は摩訶那羅延優婆尼沙土（マーハーナーラーヤナウパニシャド）となつてをる。

マードヤムデナ本の百歩祀法書（シャタパタブラーマナ）では、第十四部が森書（アーラニヤカ）の部分をなし、此森書（アーラニヤカ）中の最後の六章が即ちブリハダーラニヤカ優婆尼沙土（ウパニシャド）である。

三六一　優婆尼沙土（ウパニシャド）　最後に婆羅摩那（ブラーマナ）の第三の部分なる優婆尼沙土を述べねばならぬ。

祀法書が一たび出づるや、儀式的婆羅門教全盛の一時期を劃したれど、斯かる儀文の宗教は到底長く人心を滿足せしむることを得なかつたゆゑ、他面には高遠なる宇宙人生の問題を釋かんとする幾多の求道者が現はれ、玆に森書（アーラニヤカ）の神學を出した。しかしながら、森書（アーラニヤカ）中の哲學的研究は他方面の事柄と交雜せる故、宇宙の實體、自我の本性、物心の關係等の如き形而上の問題をば更に明瞭に探求せんが爲めに、優婆尼沙土（ウパニシャド）なる哲學的の文學が起つた。

前の祀法書が祀道（Karma-marga）を述べてをるに反し、優婆尼沙土（ウパニシャド）は智道（Jnana-marga）を說いてをる。此故に優婆尼沙土（ウパニシャド）は哲學的婆羅門教を代表し、儀式萬能の舊教に對する反動として出でた革新的宗教なれど、此新教たるや舊教を破壞して別に起つたものではなく、祀法書の裏面に於て漸く發達しつゝあつた哲學的方面即ち智識部（ジナーナカーンダ）を大成したるに外ならぬ。此點は、傳承の古教を棄てゝ、外來の基督教を迎へた希臘羅馬（ギリシヤローマ）と大に趣を異にしてをる。

優婆尼沙土（ウパニシャド）は、祀法書に附加されたる森書の終末をなし、婆羅摩那（ブラーマナ）文學の最終部である故、吠擅多（ヴェーダーンタ）（Vedanta）とも稱せられる。吠擅多（ヴェーダーンタ）とは字義上吠陀の終末（end of the Veda）を意味すれども、後には吠陀の究竟目的（final goal of the Veda）と解釋せらるゝに至つた。優婆尼沙土は一般に森書（アーラニヤカ）中に其地位を有すれど、往々例外もある。かのイーシャ優婆尼沙土（ウパニシャド）（Iça）の如きは白耶柔（シュクラヤジュル）のヷージアサネ井集錄（サムヒター）中に存し、又ケナ（Kena）タラヷカーラ（Talavakara）の如きは、狹義の婆羅摩那（ブラーマナ）中に含まれてある。

三六二　優婆尼沙土の起原　優婆尼沙土（ウパニシャド）の起原を考ふるに、此新哲學は婆羅門（ブラーマン）族が産したのではなく却て王士族（クシャトリヤ）（Kshatriyas）中の一小範圍から興つたものらしい。優婆尼沙土（ウパニシャド）中、屢々婆羅門（ブラーマン）僧が王者（ラージャ）に就きて梵我（Brahman-Atman）の哲理を學んだことを記し、或は又眞理が婆羅門（ブラーマン）族よりも王士（クシャトリヤ）族の手に所有せらる等と述べてあるのは、即ち此新教が王士族の所産なることを示した證左である。婆羅門（ブラーマン）族も初めは此新教を危險視して斥けたるも、後にはその深玄微妙なるに感じて聖教中に採用し、更にこれを完成したものと見える。

獨り優婆尼沙土（ウパニシャド）のみならず、佛教、耆那（ジナ）教（Jainism）訖里戸那（クリシナ）教（Krishnaism）等の開祖が何れも王士（クシャトリヤ）族の出身なるを見ても、哲學宗教の發達に於ける印度武族の功績が知られる。

三六三　名稱　優婆尼沙土（ウパニシャド）なる名稱に就きては諸學者其說を異にしてをる。ウパニシャド（upanishad）なる梵語は、ウパ（upa, near）即ち近くにニ（ni, down）即ち下にと言ふ二前置詞にサド（sad）と言ふ動詞を加へてなつた語である。

吠擅多（ヴェーダーンタ）派の大哲商羯羅（シャンカラ）（Çankara）はサドを破壞する若くは接近すると言ふ意義に解し、此書に說かるゝ神智によりて無明（アヸドヤー）（Avidya）を打破し或は梵（ブラーマン）を知りてこれに接近し得る故、かゝる文學を優婆尼沙土（ウパニシャド）と呼ぶと論じてをる。併し、此解釋は吠擅多（ヴェーダーンタ）派の教義に附會して下したもの故、毫も言語學上の典據がないのである。

印度人が優婆尼沙土（ウパニシャド）なる名稱を秘密（ラハシヤム）（Rahasyam）の義に解し、稀にはこれを侍坐（サミーパサダナ）（Samipasadana）の語で說明してをるのは何れも典據ある解釋である。

歐洲學者中オルデンベルヒ氏は、優婆尼沙土（ウパニシャド）をウパーサナー（upasana）即ち禮拜と同義に解し、大我（アートマン）即ち梵（ブラーマン）に歸依することを示す語であるとなしてをる。此說は信じ難い點がある。パウル、ドイッセン氏（Paul Deussen）の說に由れば、優婆尼沙土（ウパニシャド）は、サド即ち坐する（to sit）と言ふ語原から出でゝ侍坐、會坐等を意味すれど、これにウパ即ち近くと言ふ前置詞を添へたのを見ると、普通の集會（パリシャド）（Parishad）とは異れる秘密の集會を表はし、教を傾聽せんが爲めに其師を圍める高足の秘密會を此名で呼ぶに至つたが、後には集會の目的たる秘密的教化の義に變じ、種々なる神秘的の事柄に適用さるゝに至つた。されば優婆尼沙土（ウパニシャド）なる語を秘義（Secret import）密語（Secret word）秘經（Secret text）の三義に用ひてをるが、此中秘義と言ふのが最初の意味であつて、優婆尼沙土（ウパニシャド）哲學の源泉となつた儀式の譬喩的象徵的解釋を呼ぶに用ひた。然るに後ではこれが密語の義となり、更に密語を含むる聖經を意味するに至つた故、森書（アーラニヤカ）の後に出でた哲學書に此名を與へたのであると。

右に擧げたドイッセン氏の說が最も妥當と考へられる。此外マックス、ミュラー（Max Müller）ロート（Roth）エバー（Weber）等も、優婆尼沙土（ウパニシャド）の原初の意義を集會となし。これが如何に變化したかを述べてをる。

三六四　用語及び文體　優婆尼沙土（ウパニシャド）文學に於ける用語は大に後の古典的梵文學に接近してをるが、最古のものは言語上祀法書と修多羅（スートラ）との中間に位する。

優婆尼沙土（ウパニシャド）には、散文體のもの、韻文體のもの、兩者を交雜したもの、對話的のもの等がある故、文體が一定してをない。プラトンやアリストテレースの哲學書に見るが如き統一が缺けてをるにより、優婆尼沙土（ウパニシャド）は往々斷片の集錄のやうに見ゆれど、其根本教理に至つては略々相一致し、全く同一の章句が別個の書に存することもある。

三六五　總數　現存せる優婆尼沙土（ウパニシャド）の總數は確定し難い。彼のダーラー、シュコー（Sultan Mohammed Dara Shukoh）の波斯譯オウプネカート（Oupnek'hat）には五十を出し、コールブルーク氏（H. T. Colebrooke）の集錄せるものには五十二がある。那羅延（ナーラーヤナ）（Narayana）の集錄も五十二を擧げてをる。此外マハーヷーキヤ、ムクターヷリー（Mahavakya-muktavali）及びムクチカー優婆尼沙土（ウパニシャド）（Muktika）には優婆尼沙土（ウパニシャド）に百〇八種ありとし、ドイツのアルブレヒト、エバー（Albrecht Weber）は二百三十五を數へてをる。併し、エバー氏は同本異名のものをも別々に數へてをる故、マックス、ミュラー氏は百四十九に減じたが、其後バーネル氏（Burnell）は五種、ハウグ氏（Haug）は十六種を增したるにより、總計百七十種ある。猶此外、未だ出版せられざる寫本もある故、彼是二百數に上るであらう。

三六六　製作年代　諸の優婆尼沙土（ウパニシャド）は個人的の作物でない上、地方や時代を異にして成り、同一書中にも後に混入した部分もある故、各優婆尼沙土（ウパニシャド）を年代の前後に從つて配列することは難い。

併しながら、回教侵入以後になつたアラー優婆尼沙土（ウパニシャド）（Allah）の如きは論外として、その最古のものが紀元前千年（或は八百年）頃より同五百年に至る間になつたことは疑を容れぬ。

勿論これより後紀元前三百年頃迄に成つたのもあり、紀元以後の作もある。

三六七　分類　優婆尼沙土（ウパニシャド）の分類には大凡三法がある。

第一は紀元第八世紀に出でた商羯羅（シャンカラ）の判釋である。彼は優婆尼沙土（ウパニシャド）をば正統的と宗派的とに二分してをる。前者は十一若くは十二あつて、吠擅多（ヴェーダーンタ）哲學の基本をなしてをる。マックス、ミュラー氏が東方聖書（Sacred Books of the East）中に譯出したのは、この十二部である。第二の異端的のものは甚だ多數ある。

第二法は、優婆尼沙土（ウパニシャド）の屬する吠陀（ヴェダ）に從つて二類に區別するものである。第一類は前三吠陀（ヴェダ）即ち梨倶（リグ）娑摩（サーマ）耶柔（ヤジュル）に屬するもの、第二類は第四の阿達婆（アタルヷ）吠陀（ヴェダ）に屬するものである。

阿達婆（アタルヷ）のは、一二を除く外は宗派的である故、商羯羅（シャンカラ）の分類中の第二に相當してをる。

第三法は思想發展の順序より下した分類であつて次の四類に分れる。

（第一類）最古の散文優婆尼沙土

（一）ブリハダーラニヤカ（Brihadaranyaka）
（二）チュハーンドギヤ（Chhandogya）
（三）タイチリーヤ（Taittiriya）
（四）アイタレヤ（Aitareya）
（五）カウシータキ（Kaushitaki）

以上の五種は何れも佛教以前になつた最古最要の優婆尼沙土（ウパニシャド）であつて、祀法書と相似たる散文にて書かれ、其態度が研究的である。商羯羅（シャンカラ）は梵經（ブラフマスートラ）（Brahma-Sutras）に下した註疏中に、ブリハダーラニヤカより五六五處、チュハーンドギヤより八〇九處、タイチリーヤより一四二處、アイタレヤより二二處、カウシータキより八八處引用してをる。

（第二類）韻文優婆尼沙土

（六）ケナ（Kena）
（七）カータカ（Kathaka）
（八）イーシャー（Iça）
（九）シュエーターシュエタラ（Çvetaçvatara）
（十）ムンダカ（Mundaka）
（十一）マハーナーラーヤナ（Mahanarayana）

此六種中第六第十一を除く外は、何れも韻文である。第六のケナは第一類と第二類との過渡をなすもので、一部は散文一部は韻文から成つてをる。此六種も純粹なる吠擅多（ヴェーダーンタ）教義を說き、最古の五種と調和してをれど、既に十分教義が圓成してをるにより、最早研究的態度を失ひ獨斷に流れてをる。第一第二類の十一種中、ムンダカのみが阿達婆（アタルヷ）に屬し、餘は悉く前三吠陀のものである。以上の二類が商羯羅（シャンカラ）の所謂正統的優婆尼沙土（ウパニシャド）に相當するものである。

（第三類）後期の散文優婆尼沙土

（十二）プラシュナ（Praçna）
（十三）マイトラーヤナ（Maitrayana）
（十四）マーンドゥキヤ（Mandukya）

此三種は第二類の次に成り、散文で書かるれど、其文體は第一類程古雅でなく、却て梵文期の散文に接近してをる。

此中第十二及び第十四は阿達婆（アタルヷ）に屬すれど、商羯羅（シャンカラ）

はこれを正統的のものと認めてゐる。

（第四類）後期の阿達婆優婆尼沙土　これは前の部類の阿達婆優婆尼沙土とは異り、一般に異端的宗派的のものである。極めて後代の神學書なれど、神聖の度を增す爲め、優婆尼沙土の體裁を具へてゐる。

此類の優婆尼沙土は多數ある故、中にはガルバ(Garbha)プラーナグニホトラ(Pranagnihotra)ピンダ(Pinda)アートマ(Atma)ガールダ(Garuda)等の如き吠擅多的のものもあれど、其他は瑜伽(Yoga)苦行(Sannyasa)の功德を說き若くは溼婆、毗溼拏等の諸神を讚美したものである。瑜伽即ち禪定を說いたものは、ブラマボドヤー(Brahmavidya)クシュリカー(Kshurika)シューリカー(Culika)ハムサ(Hamsa)ブラマビンドゥ(Brahmabindu)ヨガシカー(Yogacikha)ヨガタトヴ(Yogatattva)等である。苦行を說いたものには、ブラマ(Brahma)サンニヤーサ(Sannyasa)ジアーバーラ(Jabala)アーシュラマ(Acrama)等がある。瑜伽優婆尼沙土は、韻文なれども、苦行に關するものは、散文から成つてゐる。溼婆を大我の顯現として讚美したものには、ニーラルドラ(Nilarudra)カイヴルヤ(Kaivalya)カーラーグニルドラ(Kalagnirudra)等がある。毗溼拏に關するものは、マハー(Maha)那羅延(Narayana)アトマボダ(Atmabodha)ラーモタラターパニーヤ(Ramottaratapaniya)等である。

三六八　主要なる優婆尼沙土概說　以上に述べた四類の優婆尼沙土中、最初の二類十四種が最も重要なるにより、右の順序に從うて略述しよう。

（一）ブリハダーラニヤカ(Brihadaranyaka)　これは白耶柔の百步祀法書に附屬し、優婆尼沙土中最も長く且つ重要なものである。此書は甘露部(Madhukanda)須若婆佉部(Yajnavalkya-kanda)補充部(Khila-kanda)の三部よりなり、各部は皆二章に分たれてゐる。第一部第二部は、白耶柔に屬する別種の優婆尼沙土として九代間存したのをアーグニエシャ仙(Agnivecya)が合一したのである。第一部に於ては馬祀(Acvamedha)を宇宙に譬へてその象徵的意義を明かにし、或は萬有が根本實在の梵(Brahman)より出でゝこれに依屬することなどを說き、猶我(Atman)及び其顯現なる丈夫(Purusha)生氣(Prana)の本性をも述べてゐる。第二部には須若婆佉仙が他の哲學者と交へた四大論議を記してゐる。第一の論議に於て彼は九師の偏見を破り、梵は理論上不可知的なるも實際上之を領會し得ると歸結してゐる。

第二の論議に於て仙人は梵の本性に關する六定義の不合理なることを闍那迦王に述てゐる。第三も同王との問答であつて、覺、夢、睡、死、輪廻、解脫の六境に於ける我の狀態が巧みに描かれてある。此章は、說明の豐富、信仰の熱烈及び思想の深玄美妙なることに於て、梵文學中の絕品である。第四のは、仙人が家を棄てゝ林中に退かんとする際、其妻マイトレイー(Maitreyi)と交はした談話である。

（二）チュハーンドギヤ(Chhandogya)　こは娑馬吠陀に屬し、前者よりも短かけれど、重要なことに於ては同等である。此書は八章よりなり、各章には、補充が附してある。最初の二章では歌詠の神秘的解釋を試み、第三章では梵を宇宙の太陽となし、梵と我との一なるを悟れば解脫を得べしと說き、第四章では梵の表號及び死後梵界に入る有樣を述べてゐる。第五章前半では輪廻を論じ、後半では有(Sat)より生じたる熱水地の三元素が結合して現象界を生ずれども、梵我のみ實有にして現象は空名に過ぎずと論じてゐる。猶最後の第八章では萬有及び自己に內在せる大我を說き、至高梵に到達する方法を敎へてゐる。

（三）タイチリーヤ(Taittiriya)　黑耶柔のタイチリーヤ森書は十課(prapathakas)から成り、更に三大部に分れてゐる。十課中、最初の六課が純粹の森書をなし、第七第八第九の三課は即ちタイチリーヤ優婆尼沙土で、殘りの第十課が後に述ぶる摩訶那羅延優婆尼沙土である。タイチリーヤ優婆尼沙土は、更に更に、式叉婆(Ciksha-valli)梵喜婆(Brahmananda-valli)勃栗畢婆(Bhrigu-valli)の三諦(Adhyaya)に分れてゐる。

（四）アイタレヤ(Aitareya)　梨俱には、五阿闍若迦十八講より成るアイタレヤ森書がある。此中第二阿闍若迦の第四講より第七講までが、アイタレヤ優婆尼沙土である。これは、優婆尼沙土中最も短かき者の一である。

第一章に世界及び人類が梵我の所造なるを說き、第二章には梵の三生、第三章には梵の本性を論じてゐる。

（五）カウシータキ(Kaushitaki)　これは梨俱に屬する長き優婆尼沙土であつて、九講中最初の四講が現存する。第一講には死後流轉の境を述べ、第二章には梵の表號なる生氣を說く。最後の二章には、梵論及び心理說がある。

（六）ケナ(Kena)　これは娑馬吠陀に屬するもので、別名をタラヴカーラ(Talavakara)とも言ふ。甚だ短かけれども二部に區別することが出來る。前部は韻文を以て發達せる吠擅多敎義を說き、有性梵と絕對無相梵とを區別してゐる。後部は前部よりも後に成り、吠陀の諸神が梵に依屬することを散文にて說いてゐる。

（七）カータカ(Kathaka)　これは、黑耶柔に屬する韻文優婆尼沙土であつて、二諦、六婆(Valli)百二十節を含むでゐる。第二諦は、瑜伽及び現象非實在の思想あるにより後の附加と認められる。これは優婆尼沙土中最も著しく且つ美妙なものであつて、若き婆羅門ナチケタス(Nachiketas)が、眞理を求めん爲めに一切の誘惑を打破し、遂に死王閻摩より優婆尼沙土の秘義を授けらるゝ有樣を問答體に描いてある。

（八）イーシャー(Iça)　これは白耶柔集錄の最後の部にある十八節の短詩であつて、別名をイーシャーヴーシヤ(Içavasya)又はワージアサネーイ集錄優婆尼沙土(Vajasaneyi-samhita-upanishad)と謂ふ。迷悟を對立的に說明し、吠擅多敎の根本義を十分明かに說いてゐる。

（九）シュエターシュエタラ(Cvetacvatara)　これは黑耶柔のタイチリーヤ集錄に屬し、六諦百十一節より成る韻文であつて、一にシュエターシャヤタラーナーム曼特羅優婆尼沙土(Cvetacvataranam Mantropanishad)とも謂ふ。一個人の作と傳へらるれど、體裁整はず、韻律一定せず、其上他より引用せる所も多い故、個人的作物とは認め難い。極めて難解なれども、種々の興味ある思想を含むでゐる。劫(Kalpa)の終に宇宙が滅盡して後更に造化せらるとなし、或は現象界が梵の所生なる幻妄(Maya)に外ならずとしてゐるのは、初期の優婆尼沙土には見えない思想である。數論哲學の思想及び發達せる瑜伽の敎義を含めるより推せば、此書の神學は吠擅多、數論、瑜伽の三敎を混和したものと思はれる。

（一〇）ムンダカ(Mundaka)　これは阿達婆の優婆尼沙土中、最古最要のものであつて、古き優婆尼沙土に溢れる爲め創見は少なけれど、吠擅多の故敎を忠實に說ける爲め、跋陀羅耶那(Badarayana)商羯羅等の學者に引用せられた。こは神咒體(Mantra)に書かれた美妙な詩篇なれど、祭祀用の目的で造られたのではない。此書には梵に關する秘義を說き、眞智は祭祀又は禮拜(Upasana)に由りて得るものに非ず、世榮を抛てる苦行仙(Sannyasin)のみ優婆尼沙土の敎によりて梵を知り、これに合一すとなしてゐる。印度人は此書の名稱を剃刀の義に解し、そが利劍の如く無明を截斷するより此名を得たとしてゐる。併し、ムンダカとはムンダ(Munda)即ち剃髮者の義から出た語である。此書は多くの點に於て佛敎に感化された形迹がある故、學者中には剃髮者とは編髮の婆羅門に對する佛僧を意味すと說く者もあれど、恐らく佛僧の如くに剃髮せる婆羅門者の苦行仙を指せるものであらう。此書は三章(Mundakam)より成り、第一章には梵を知る豫備行法、第二章には梵論、第三章には梵に合一するの方法を說いてゐる。

（一一）摩訶那羅延(Mahanarayana)　これは黑耶柔に屬するタイチリーヤ森書の補充であつて、一にヤージニキー(Yajniki)とも呼ばれ、散文から成つてゐる。

（一二）プラシュナ(Prasna)　これは別名を六問優婆尼沙土(Shat-Prasna-Upanishad)とも謂ひ、阿達婆のパイパラーダ本に屬する散文體のものである。忠實に吠擅多敎義を記せる故、跋陀羅耶那及び商羯羅に引用されてゐる。此書は、ピッパラーダ大仙(Pippalada)が六梵志の發した六問題を解ける吠擅多敎の六要義である。六要義とは、第一に物質及び生氣が生主神より生ずること、第二に生氣が他の活力に勝ること、第三に活力の性質及び種類、第四に夢及び熟睡、第五に唵(Om)なる聖音の冥想、第六に人體の十六成分である。

（一三）マイトラーヤナ(Maitrayana)　これは黑耶柔のマイトラーヤニーヤ集錄に屬し、七章を含む大部の散文優婆尼沙土である。他の優婆尼沙土を多く引用し、又數論派の思想を混入せるを見れば、極めて後代の作であらう。此書は七課より成り、佛敎及び數論の思想を混和して優婆尼沙土敎義を統一せんとしたものである。特にその厭世思想に於て佛敎數論の影響を受けたことを示してゐる。此書は客觀界に我が內住せし次第、最勝我が個體我となれる過程、並びに解脫の方法等を論じてゐる。解脫論は、吠擅多及び數論に異り、種姓の別及び四期生活(Acrama)を承認せるものゝみ、よく智見、苦行、冥想によりて解脫すと說いてゐる。

（一四）マーンドゥキヤ(Mandukya)　これは短き散文優婆尼沙土であつて阿達婆に屬するものゝ中では古き一である。此書は唵が宇宙の表號なることを說いてゐる。第八世紀の喬駄鉢陀(Gaudapada)をして、印度哲學史上に特筆すべき其要頌(Karika)を作らしめたのは、此優婆尼沙土が動機である。

三六九　優婆尼沙土の哲學　以上に擧げた主要なる優婆尼沙土に就いてその旨趣とする所を考ふるに、この新敎は祭祀供犧によつて福利を求めんとした祀法書の儀式敎と異り、最高唯一なる宇宙の本體を直觀し、以て解脫(Moksha, mukti)を得ざるべからざることを敎へたものである。優婆尼沙土は何れも此目的で起つたもの故、枝葉の點に於ては互ひに矛盾せる所もあれど、其根本敎理はよく相一致してゐる優婆尼沙土中に含まるゝ敎說中でも、（一）梵我論、（二）宇宙論、（三）輪廻論、（四）解脫論が其中心思想をなしてゐる。

第一の梵我論は宇宙の本體に關する敎理であるから哲學的に謂へば即ち本體論である。此哲學に於ては、

唯一無二なる宇宙の本體を立てゝこれを梵（Brahman）又は我（Ātman）と呼んでゐる。梵なる語は、梨倶吠陀にて讃歎、祈禱、呪文等を意味してゐたが、祀法書では啻に讃歎聖經等の如き客觀的聖語を表はすばかりでなく、これに含蓄せらるゝ主觀的內容即ち聖敬、聖智、神學等の義と變じたと共に、猶萬有に生あらしむる普遍永劫の原理を呼ぶの名ともなつた。かくて、優波尼沙土哲學に至り宇宙最高の實在を梵なる名稱で呼ぶに至つた。

我即ち阿怛曼はアン（an）即ち吹くと謂ふ語原から出で、梨倶では元來呼吸の意味に用ひられてゐた。然るに呼吸は吾人に生命あらしむるもの故、此語は更に生命若くは靈魂の義となり祀法書では概ね靈魂の義に用ひられてゐる。優波尼沙土では更に此語が抽象化せられて我即ち眞正自己の意義に變じ、吾人に內在する主觀的精神的本體を表はす語となつた。しかして、客觀的實在なる梵と主觀的本體なる我とを不二なりとし、宇宙には此一元を除くの外何物も存在せずと說くのが此哲學の根本義である。所謂梵我不二（Brahma-ātma-aikyam）の思想を最もよく表はした有名な句に「予は梵也」(Aham brahma asmi)「それはこれなり」(Tattvam asi) 等と謂ふのがある。

優波尼沙土では此不可知的なる唯一實在をば、言語、生氣、眼根、耳根、意、心の六種の表號によつて說明したものもあり、或は又梵に實有（Satyam）歡喜（Ānanda）智識（Prajnā）等の如き屬性を與へて積極的說明を試みたものもある。しかし、梵は元來吾人の經驗を超越せる不可知的の實在故、唯否定的消極的にのみ表はさゞる可からずとなすのが、最も進んだる見解と認められてゐる。

第二の宇宙論にも種々の見解がある。梵我唯一の原理を極端に及ぼし、差別相のある現象界をば幻妄（Māyā）に過ぎずとなすのが即ち迷妄論（Vivarta-vāda）又は無宇宙論と呼ばるゝ見解である。此外現象界は梵より分化せる實有なりと說く轉變論（Parināma-vāda）もあり、或は又梵を人格的のものとなし、其造化によつて宇宙が成ると說く唯一神敎的創造論もある。以上に述べた梵我論と宇宙論とが優波尼沙土哲學中の最要義であるから、輪廻論及び解脫論は茲に說明を略することゝした

三七〇　概評　優波尼沙土は啓蒙時代の哲學なれば、空想的の思想を含めども、宇宙の大元自我の本性に關して哲學的解釋を下したのは、これが最初であるから、此文學の出現は人文史上に特筆すべき價値がある。此哲學には幾多の眞理が存するが、就中梵我不二論の如きは宗敎の眞髓を捉へ得たるものと謂うてよい。殊に其汎神敎的思想に至つては、歐洲のブルーノ、マルブランシ、スピノーザ、エリゲナ等の上に出で、最早これ以上一步も進み得ない程發達してゐる。獨り其所說が高妙幽玄を極むるばかりでなく、當時の哲學者の敬虔にして且つ熱誠なる態度があり／＼と文學の上に表はれ、二千幾百年後の今日猶吾人の心を感動せしむるものがある。

されば印度研究の泰斗マックス、ミュラー氏の如きも、この書を評して「世界文學史上最も驚歎すべきものゝ一たるを失はず」と謂ひ、彼の惡罵に長じたる大哲ショーペンハワー氏すら、一たび此書のラテン語譯オウプネカート（Oupnek'hat）に接するや、其崇高なる思想に感激し、これをば「最高智の所產」(Ausgeburt der höchsten Weisheit) なりと讃美し「世界に於て此書の研究程吾人の心を高潔せしむるものはあらじ、啻にわが生時の慰安なるのみならず、又死後の慰安なり」と謂うてゐる。彼の哲學が優波尼沙土に負ふ所の多いのも怪しむに足らぬ。

優波尼沙土哲學が一たび印度思想界に現るゝや、幾多の哲學系統もこれから出でたが、就中優波尼沙土の敎理を統一大成したる跋陀羅耶那の吠檀多敎は、識者の宗敎として今に至るまで印度の靈界を支配してゐる。

近時優波尼沙土研究が東西の諸國に流行し、これに關する良著の數多出づるのは、吾人の特に快心にたへざる所である。

五　修多羅文學及び吠陀研究の諸學

三七一　傳承聖典　以上に述へ來つた四吠陀及び婆羅摩那は、婆羅門敎に於て啓示聖典（天啓）と認められてゐるが、これより後に出でた宗敎的社會的の文學は何れも傳承聖典（Smriti）即ち人說の部に收められてゐる。傳承聖典とは諸の古聖より出で、記憶によつて傳へられた傳說である。勿論啓示聖典は最高無上の典證故、傳承が啓示と矛盾する場合には、傳承を棄てゝ啓示に據らねばならぬ。

三七二　修多羅文學——起原　傳承聖典中最古の作物は吠陀文學の第三期を表はす修多羅文學（Sūtras）である。此文學は簡明に吠陀の儀式及び民間の習俗を記したものである。即ち散漫冗長に說かれたる祀法書の儀式や民間に存留してゐた古俗習慣等をば、記憶に便利なるやう明了に組織的に要約し、以て敎學の指針に供せんとしたのが此類の文學である。修多羅はかくの如く簡約を旨とせる故、祭祀儀式其物を顧みず、敎條及び儀式執行の順序をば、格言的に秩序的に述べてゐる。簡約が修多羅の特色及び目的であることは、其名稱及び「修多羅は要約を旨とす」(Sūtras aim at conciseness) の格言によりて知られる。

三七三　名稱　修多羅とは縫ふ（Siv）と言ふ語根より出でゝ綫絲を意味し、それが敎學の要義を貫穿せること、猶綫線の華聚を貫くに似たるより、此名を得たのである。夫故修多羅は契經、經典等と譯してよい。又凡ての修多羅を稱するにカルパ若くはカルパ修多羅（Kalpa Sūtra）の名を以てする。佛典にはこれを劫波論、柯剌波論等と記し、釋諸天仙上古以來因緣名字之書と解してゐる。カルパとは宗敎的實踐を述べた式典の義である。修多羅文學の製作年代は紀元前六〇〇年代より同二〇〇年代に及んでゐる。婆羅門敎外の哲學宗敎の諸派も、皆言語を省略したる修多羅體の經典を造つた。佛敎も亦修多羅體を敎理發表に最も適當な形式と認めたものと見え、最古の巴利語（Pāli）の聖典はこの體裁を具へてゐる。

古き修多羅はあまりに省略が甚しき爲め註解無しには讀み難いが、後世のものは一般に解し易く往々韻文で書いたものもある。

茲には專ら婆羅門敎の修多羅文學に就きて述べよう。

三七四　修多羅の三類、聞經　修多羅文學は之を吠陀の儀式に關する祀法經（Ritual Sūtras）と、社會的律法的慣習を說ける法規經（Legal Sūtras）との二大類に分つことが出來る。前者は聞經（Çrauta Sūtras）家經（Grihya Sūtras）の二類を含み、後者には法經（Dharma Sūtras）がある。夫故修多羅は分れて三經となるのである。此中家經法經は傳承聖典に基きて成れるもの故、傳承經（Smārta Sūtras）とも謂はれる。

三類の修多羅中、聞經に屬するものが最も主要なるものであつて、部數も亦多い。これは口傳を交へ、實用に適するやう祀法書の內容を改造したものであつて、大祭を行ふ際に當り或吠陀と關係ある特殊の僧侶の行ふべき義務を說いたものである。優波尼沙土が祀法書の哲學的方面の發達なるに反し、聞經は祀法書の儀式的方面を大成したものである。聞經なる名は、それが隨聞即ち啓示聖典（特に祀法書）に憑れることを表はしてゐる。梨倶に屬する聞經には、シャーンカーヤナ（Çānkhāyana）アーシュヴァラーヤナ（Āçvalāyana）兩派のがある。兩經は何れも同じ順序で儀式を記述すれども、王者の大祭に就きては前者の方が詳密である。又前者は同名の祀法書と密着せるものであつて、その十八書中、最後の二書は後代の附加である。後者は商那（Çaunaka）の弟子アーシュヴァラーヤナの所造に係り、十二書より成る。

娑摩吠陀に屬するものには、マシャカ（Maçaka）ラーツヤーヤナ（Lātyāyana）ドラーヒヤーヤナ（Drāhyāyana）の三聞經がある。三經中、第一のは別名をアールシェヤ劫波經（Ārsheya kalpa）と言ひ、種々なる蘇摩祭の祈禱の數を擧げてゐる。第二のはカウツマ派に採用され、第三のは娑摩吠陀のラーナーヤニーヤ派に屬す。

白耶柔吠陀には二十六章より成るカートヤーヤナ聞經（Kātyāyana）が屬する。其文體の難解なるより推せば、修多羅期中でも後代の作である。

黑耶柔に屬するものには、アーパスタムバ（Āpastamba）ヒラニヤケシン（Hiranyakeçin）バウダーヤナ（Baudhāyana）バーラドヴァージア（Bhāradvāja）摩納婆（Mānava）ヴァイカーナサ（Vaikhānasa）の六聞經が屬する。第一は同名の劫波經三十章中の最初の二十四章である。第二は同名の劫波經二十九章中最初の十八章であつて第一のから派生したものである。第三は第一のよりも古く、第四と同じく未だ刊行せられない。

第五は摩奴家（Mānavas）に屬し、最古のものゝ一である。第六の內容は未だ知られぬ。阿達婆吠陀には、ヴイターナ經（Vaitāna）が屬する、これは古くも非ず、又原造的でもない。以上に述べた聞經の中、古きは佛敎興起頃の作である。恐らく佛敎の出現が、婆羅門族をして修多羅を編集せしむる動機となつたものであらう。聞經は祭祀の概要を理解するに必要なれども、文學として見れば無味乾燥たるを免かれぬ。然れども其祭祀たるや公衆的のものでなく、僧侶が一個人の供養者（Yajamāna）の爲めに營む所であつて、これに要する僧侶の數は祭祀によりて異り、一名より十六名迄の增減がある。凡ての祭祀に於て常に重要なるは聖壇（Vedi）の周圍に設くる三聖火である。

十四種ある聞經の儀式は、七供物（Havis）祭と七蘇摩祭との二類に分れ、これには種々の動物供犧が附隨してゐる。供物祭では、乳、酪、麥、穀、菓等を供養する。供物祭中最も普通なのは、日暮二回三聖火に酪を灑ぐ聖火供養（火祀）である。其他最も重要なるは、新滿月祭及び三季の初めに行ふ四ケ月祭である。

蘇摩祭は供物祭よりも遙かに複雜し、僅か一日で終る最も簡單な火神奉讃祭（Agnishtoma）すら、猶十六名の僧侶を要する。其他の蘇摩祭には數日より十二日を要するもあり、長きは一年以上に及ぶのもある。

三七五　家經　修多羅の第二類なる家經は、僧侶の手を假らずして、家主（Grihaspati）が自から其妻と共に、家火を拜して行ふべき家庭內の祭祀を說いたものである。諸の家經は、それが屬する特殊の吠陀より拔いた讃頌を除けば、何れも眞髓に於ては大差なきものである。家經は聞經の後に出で、同派に屬する聞經と密接の關係あれど、兩種の經が合して一體をなす如きことはない。

梨倶に屬する家經には、聞經と同名なるシャンカー

ヤナ、アーシュヷラーヤナの二經とシャーンバヸヤ經(Çāmbavya)とがある。第一には六書あれど最初の四書が原部である。第二は四書より成り、第三は寫本のみ存する。倶馬には、ゴビラ(Gobhila) カーディラ(Khādira)の二家經が屬する。第一は家經中でも古く且完全にして興味多きものである。第二はドラーヤーヤナ派(Drāhyāyana)に屬するものである。

白耶柔にはパーラスカラ家經(Pāraskara)がある。これはヷージァサネヰ又はカーチーヤ(Kātīya)とも呼ばれるものであつて、演若婆佉の法論に影響を及ぼしてゐる。

黑耶柔に屬するものには、聞經と同名のアーパスタムバ、ヒラニヤケシン、バウダーヤナ、バーラドヷージア、摩納婆、ヷイカーナサの六經と、カータカ家經(Kāṭhaka)とがある。第一は、同名の劫波經の第二十六第二十七の兩書に當る。第二も亦、これと同名の劫波經の第十九第二十の兩書である。第三第四は未だ多く知られてゐない。第五は、毗濕祭法典と密接に關係してゐる。第六には、他の家經に見えざる毗那耶迦(Vināyakas)崇拜の儀式が說かれてある。第七は浩澣なものにして、後期の製作である。

阿達婆には憍尸迦家經(Kauçika)がある。これは單に家經たるに止まらず、魔術等をも說いてゐる。

以上に述べた家經は、生より死に至る迄の家庭生活に適用すべき種々の儀式を說いたものであつて、之を行ふには家火(Avasathya, or Vaivāhika)のみで足るのである。家經には一期の間に行ふべき四十の行式(Saṃskāras)を擧げてゐる。此中にて十八種は淨身式で、餘の二十二種は祭祀である。淨身式は、求男式(Puṃsavana) 生誕式(Jāta-karma) 命名式(Nāma-karma) 剃頭式(Chūḍā-karma) 入門式(Upanayana) 還家式(Samāvartana)等の如き專ら男子に關するものなれど、婚嫁式(Vivāha)のみは女子も與る式典である。

命名式は生れて十日目、剃頭式は三歳の時に之を行ふのである。入門式は最も重要なものであつて、婆羅門族にありては八歳より十六歳迄、王士商賈の族は婆羅門族よりも數歳遲くこれを行ふ。此時學師(Guru)より、三杖、衣、帶及び左肩に掛くる祀紱(Yajñopavita)を受けて、二生族(Dvi-ja)となる。かくて十二年間、梵志(Brahmachārin)として吠陀を修學せる後、其家に還りて還家式を行ひ、これに次ぎて婚嫁式を擧ぐるのである。

二十二祭祀中家主の行ふべきものは、五大祭(Mahāyajña) 熟祭(Pākayajña)等の八種であつて、其他は聞經に屬する儀式である。

五大祭とは、梵祭(Brahma-yajña) 祖祭(Pitri-yajña) 天祭(Deva-yajña) 鬼類祭(Bhūta-yajña) 人祭(Manushya-yajña)である。右の外新滿月祭の如き季節祭もある。家經は、又葬式(Antyeshti) 信祭(Çrāddha) 其他家庭に行ふべき種々の儀式を記してゐる故、文明史研究には無上の好資料である。

三七六　法經　修多羅の第三類なる法經は、法(Dharma)即ち宗教上社會上の本務を說いたもので、印度法律の起原をなし、吠陀と密接の關係をもつてゐる。

法經中、其本來の形を具へて今日に殘れるものはアーパスタムバ法經である。これは同名の劫波經三十章中の第二十八第二十九をなし、梵志及び家主の本務、淨身式、苦行、禁ぜられたる食物等に就きて述べ、社會的部面に關しては唯結婚相續犯罪の三法を說いてゐる。ビューレル氏(Bühler)は此法經を紀元前四百年代の作となしてゐる。

右の法經と密接の關係あるヒラニヤケシン法經は、同名の劫波經二十九章中の第二十六第二十七の二章をなせるものである。傳說によれば、ヒラニヤケシンはアーパスタムバ派より出でゝコンカン國(Konkan)に別派を建てた人であるとのことである。

バウダーヤナ法經は、四姓の本務、混族、種々なる祭祀苦行苦辭祭淨身式等を始め、王者の義務、犯罪、檢證、婦人の地位、結婚及び相續法等種々なる事項を說いてゐる。

喬答摩(Gautama)の法論(Dharmaçāstra)は、法論の名を存すれども、外形及び性質に於て全く正規の法經である。これは全く散文のみより成り、紀元前五百年代の製作故、現存せるものの中最も古き一である。

婆尸陀(Vasishtha)の法論も、吠陀期に屬する修多羅體のものであつて、三十講中最後の五講には後代の附加に係るものが多い。他書に引用さるゝもので、今日に存せぬ最古の法經もある。其中摩奴(Manu)の法經は、摩奴法論の基をなしたもので、屢々婆尸陀法經中に引用せられてゐる。其文體は散文韻文の混淆であるらしい。

商迦(Çankha)リキタ(Likhita)なる同胞の作と言はるゝ法書の斷片が殘つてゐる。これは法律の各方面を論じたものと見え、パラーシャラ(Parāçara)の法典にも引用されてゐる。

修多羅體の文學は長く勢力を存してゐたる故、極めて後代に成つた法經もある。ヷイカーナサ(Vaikhānasa)の法經の如きは紀元後第三世紀以後の作らしい。これは嚴正な意味に於ける法律を說いたのではなく、只家庭法(Grihya-Dharma)の書たるに過ぎぬ。

以上に擧げた三種の修多羅は、其難解にして修辭的なる點より言へば祀法書に劣れども、其内容に於ては非常なる價値がある。

他國に於ては完全なる儀式書などが存せねど、印度には僧侶が其祀法教の基礎となした幾多の組織的な經典があつて、宗教制度史研究に無比の好材料を殘して置いた。吾人は聞經によりて印度古代の儀式を知り、法經及び家經によつて當時の印度民族の生活狀態を伺ふことが出來るのである。

右の三種の經典の外、猶宗教的實踐に關係ある別種の修多羅にシュルヷ經(Çulva Sūtra)と謂ふのがある。彼のアーパスタムバ劫波經の第十三、第三十の二章は即ち此類の一書である。シュルヷ經は聖壇神机等の構成に必要なる測算を記し、幾何學等の方面に於ても多大の發達を示してゐる。それ故、此經は印度最古の數學書と認むべきである。彼のピタゴラス(Pythagoras)の定理の如きも、既にシュルヷ經中に存せる故、學者中にはピタゴラスが之を印度から學んだとなす者もある。

三七七　六吠陀分　印度人は、修多羅體に造られたる吠陀文學の凡てをば、六吠陀分(Vedānga)と呼んでゐる。六吠陀分とは吠陀研究の補助學たる式叉論(Çikshā) 闡陀論(Chhandas) 毗伽羅論(Vyākarana) 尼祿多論(Nirukta) 劫波論(Kalpa) 樹提論(Jyotisha)を謂ふ。此中で最初の四論は聖典を正しく誦讀理解するに必要なもの、最後の二論は祭祀本務祭日等を說いたものであるから、何れも宗教に起原してゐる。式叉論は文字、抑揚、發音、及び發聲器官の運用等に關する原則を說いたものであるから、所謂發音學(Phonetics)である。此名を有する書數種あれども、吠陀發音學を代表するものは、寧ろ集錄及び吠陀の語典(Pada-pātha)と直接に結合せるプラーチシャーキヤ經(Prātiçākhyas Sūtras)である。プラーチシャーキヤ經は梨俱に一種、阿達婆に一種、耶柔吠陀のヷージァサネヰ集錄とタイチリーヤ集錄とに各一種、合計五經が現存する。

第二の闡陀論にはピンガラ(Pingala)の闡陀經(Chhandaḥ Sūtra)があれど、これは後代になりし補充書である。

第三の毗伽羅論は、佛典に毗阿羯喇喃等と記し、譯して聲明記論と言ふてゐる。所謂文法學である。第四の尼祿多とは解說を意味し、吠陀の難語を研究する語源學であるから佛典には一切物名を立つる因緣を釋けるの書と記してゐる。

ヤースカ(Yāska)の尼祿多論十二卷(此上に二卷が追加されてある)は、雜語集(Nighaṇṭus)に基づけるものであつて梵文註釋書中最古のものである。

第五の劫波は即ち前に述べた修多羅文學である。第六の樹提論は、佛典中堅底沙論とも記し、天文地理算數法等を釋すと記してゐる。即ち天文學の謂である。此學は聖日や供犧の時を定むる必要上起つたのである。

此外修多羅文學の補充として現はれたるものには、諸の補充書(Pariçishṭas) 神珍書(Prayoga) 指針書(Paddhatis) 索引書(Anukramaṇis)等の文學がある。

三七八　學者サーヤナ　以上述ぶる所に依り吠陀文學三期の歷史を終つたが、茲に吠陀研究者として有名な印度のサーヤナに就て一言する必要がある。

アイタレヤ祀法書、アイタレヤ森書其他タイチリーア派の集錄、祀法書、森書等の註解は、何れも彼の手、若くは其指導になつたものである。彼は中世紀に於ける一大吠陀學者であつて、紀元後第十四世紀後半にヸジヤヤナガラに都してゐたブッカ一世(Bukka I)ハリハラ王(Harihara)等の保護を受けて多くの書を著はし、一三八七年に歿したのである。

六　二大史詩

三七九　吠陀文學と梵文學の差異　吠陀文學に關して述べ終つた故、之より擬古的文學を述べねばならぬ。併し乍ら、茲には豫め吠陀文學と梵文學とが形式內容に於て好個の對照をなしてゐる點を述べねばならぬ。吠陀文學は宗教的であるが、梵文學は全體として觀れば、道德的なれど、多方面へ大發展をなしたる爲め、往々瀆神的に傾いたのもある。又梵文學期の宗教は、吠陀のと異り、古代に有力なりし諸神も新興の諸神に壓倒されてゐる。又吠陀文學の精神が全體上より見て樂天的なるに反し、これには悲觀的の色彩が離れぬ。殊に梵文學には超自然的の分子が多く、人事を述ぶるにも誇張に走つてゐる。かく前後兩期の文學は內容に於て大に差があるか、形式に於ても亦然うである。耶柔吠陀及び婆羅門那等に於て發達した散文は、梵文期に衰へ、哲學文典以外のものは、概ね韻文を以て書かれた。哲學文典等の散文も體裁より言へば純粹の散文とは認め難い。勿論後期に於ても童話小說戲曲等にも散文が存すれど、これも甚だ幼稚なものである。梵文學が韻文的なる點は古代と相似るも、詩律は全く異り、概ね首盧迦律(Çloka)を以て四行一聯の偶頌體に造られてゐる。又後期の文學は、內容が誇張的空想的なるに反し、形式に於ては嚴精なる修辭の法則に囚はれてゐる爲め、二大史詩を除くの外は、技巧纖麗に流れ、天馬辭空の文字、雄渾壯大の調は、殆んどこれに見ることが出來ぬ。梵文學はかくの如くに古代文學と異れど、そが吠陀文學の末期に初めて起つたものとは言はれぬ、梵文學は吠陀梵學の後を承けて發達せるものではなく、最古より非宗教的文學として、吠陀聖典と共存してゐたのである。されば こそ、吠陀文學の最終をなす優婆尼沙土、修多羅以外に、巴利語

(Pāli)の佛教文學も出で、梵語の史詩も現はるゝに至つたのである。今印度文學史の後期をなす梵文學を見るに、叙事詩抒情詩戯曲童話等の諸方面に於て非常なる發展をなしてゐる。玆には叙事詩を第一に述べ、然る後其他の方面に及ばうと思ふ。

三八〇　印度叙事詩の種類　印度の叙事詩は之を二大類に分つことが出來る。其第一類は伊底訶娑(Itihāsa)即ち史譚、阿佉那(Ākhyāna)即ち説話、布剌那(Purāṇa)即ち古譚等と呼ばれるものを含むだ文學である。第二類は柯毗耶(Kāvya)とて一定の詩人(Kavi)の作つたものである。後者は宮廷詩人の作物にして第一類に比すれば技巧綴旋に陷つてゐるから、これを技工的叙事詩若くは宮廷叙事詩と呼んで差支ない。第一類の最大なのは摩訶婆羅多(Mahābhārata)で、第二類を代表するものは羅摩耶那(Rāmāyaṇa)である玆には右の二大史詩を述べ、然る後章を改めて第一類中の布剌那及怛特羅(Tantra)を説き、最後に宮廷史詩を叙することとする。

三八一　摩訶婆羅多　伊底訶娑として今に殘れる摩訶婆羅多は十萬頌ある、世界最長の史詩であつて、ギリシアの『イリアッド』(Iliad)『オデッツイセー』(Odyssey)を合するも、漸くこれの八分の一に當るのみである。十八書(Parvans)に分たれ、更に第十九書として波利史傳(Harivaṃça)が加へられてある。こは詩史の名を有すれども、其主題たる婆羅多族(Bhārata)の戰史は僅かに二萬頌即ち全篇の五分の一に過ぎぬ。しかも、此説話中には、諸神王士聖賢に關する古譚、開闢説、諸神の系譜等を交へ託し、或は哲學宗教正法乃至武人の本務等に關する論議を含み、爲めに物語の筋を探るに困難な場合が多い。甚しきに至つては、全部を或る特殊の事件の説明に費やせるのもある。かの「薄伽婆帝の歌」(Bhagavadgītā)即ち此史詩の第十二書の如きは、其十八品をば哲學の説明に費してゐる。されば此詩は通例の叙事詩と異り、人類の本務を説いて印度人に宗教的教化を與へようとしたものであるから、婆羅門教ではこれを「歸信論」(Bhakti-çāstra)の一として傳承聖典(Smṛiti)中に列してある。此詩がカールシュナ吠陀(Kārshṇa veda)即ち訖里尸那神(Kṛishṇa)の吠陀」と呼ばれ、或は各處に毗濕笯(Vishṇu)の別名なる那羅延(Nārāyaṇa)及び那羅(Nara)を讃美し、又全篇に毗濕笯派の宗教思想が充ちてゐるのを見ると、本來は般遮羅特羅派(Pañcarātras)若くは薄伽婆多派(Bhāgavatas)と呼ばれた往古の毗濕笯教の一教典であつたことが爭はれぬ。此詩の骨子たる大戰鬪譚は歷史上の事實を詩化したもので、象城(Hastināpura)に都してゐた婆羅多族中般頭(Pāṇḍu)の五子瑜提翅羅(Yudhishṭhira)毗摩(Bhīma)阿順(Arjuna)那拘羅(Nakula)沙波提婆(Sahadeva)の五王子が、王國を爭ふ爲め、其從弟にして陀利哆剌羅(Dhṛitarāshṭra)の子なる百王子と、十八日間流血の慘劇を演じた有樣を詳しく叙べ、五王子の昇天を以て局を結んである。詩の主題なる此戰史は紀元前一〇〇〇年頃の歷史的事實を本としたものらしい。即ち元來は口碑に傳へられた戰譚をば或天才が一篇の詩としたもので今日のものとは大に異つてゐたのを、婆羅門族が利用して、これに民心を感化すべき教訓を加へ、かくして今日見るが如き正法(Dharma)の書となしたものである。而して現存の形は既に紀元前五世紀頃に存してゐた。更に紀元前三世紀以後より基督降誕前後までに加へられたものもあるから、三たび改作を經たのである。

五分の一を占むる戰史の外は、倫理道德其他種々なる事項を網羅してある。それ故、單に史詩たるに止まらず、寺院及び家庭に於ける宗教的感化の書として愛誦せらるゝに至つた。此書は毗耶娑(Vyāsa)即ち廣博仙人の所造と傳ふれど、毗耶娑とは單に輯成者の義であつて人名ではない。

此史詩中には戯曲、宮廷叙事詩、布剌那、怛特羅等の材料となつた多くの挿話がある。舍君多羅姫(Çakuntalā)の傳説、羅摩(Rāma)の史譚、リシヤ、シュリンガ仙(Ṛishya-çṛinga)ウシーナラ(Uçīnara)等の物語は、有名なものである。殊に那羅王(Nala)の事蹟を叙べたる那羅王物語(Nalopākhyāna)は最古最美のものであつて、道德的教訓を與ふる事が多い。

三八二　羅摩耶那　他の史詩羅摩耶那は七書に分たれ、現存のものは二萬四千頌を含む。西印度、孟買、ベンガルの三傳本ある中で、孟買本が原形に近い。彼の摩訶婆羅多が史詩たる本來の性質を失うて教訓詩と認められてゐるに反し、此詩は跋彌仙人(Vālmīki)が叙事詩の作法に從ひて作れる個人的作物故、後世より第一叙事詩(Ādi-kāvya)と呼ばれてゐる。ヤコビ教授(Jacobi)の指摘せる如く、此詩は元來五書より成り、第一書と第七書とは明かに後世の追加である。此詩は元來口誦によりて傳へられ、史詩の吟誦を職とせる者が公衆の前で歌ふたものである。追加の部は、原本よりも遙か後に、吟誦者の加へたものであることは、原本で單に種族の勇士に過ぎざる羅摩が、追加の部では人類の模範たる國民的勇士とせられ、毗濕笯と合一されてゐるのでも知られる。

此詩が阿踰陀(Ayodhyā)に都してゐた甘蔗族(Ikshvāku)の領國憍薩羅(Kosalas)に成つたことは疑を容れぬ。即ち、跋彌仙は、當時宮中の吟誦者(Sūta)間に行はれてゐた、甘蔗族の羅摩の史譚をば、技工を加へて此詩となしたのである。此詩の古き部分が摩訶婆羅多大成以前に成つた證もあり、又巴利語の佛教本生譚中に之を引いてゐるのを見ると、佛教以前に

成つたものらしい。追加の部は紀元前第二世紀よりも後の作である。此詩は、内容を重んじて形式を粗外する民謠ではなく、巧みに譬喩(Rūpaka)其他後代の文學に見る處の文飾を用ひてゐる。又此詩は中古の叙事詩の起原をなせるもの故、後の作家は、跋彌仙をば第一の詩人(Ādi-kavi)と尊稱してゐる。最古の作なる中間の五書に記せる物語は、自ら二部に分れてゐる。第一部は阿踰陀なる十車王(Daçaratha)の宮廷に於ける波瀾を記した史譚故、神話的夢幻的の分子を含まないが、第二部は神話を基とせる爲め、怪異荒唐の記事が多い。此第二の部分の意義に關して、クリスチアン、ラッセン氏(Christian Lassen)氏は、羅摩の南遷を以てアーリア文化が南方に及んだ事を譬へたのであると主張した。此説に贊成するものもあれど、これよりも寧ろヤコビ氏の云へる如く、古代神話例へば因陀羅が降雨神マルツ(Maruts)と共に旱鬼ブリトラ(Vritra)を征し、サラマー(Saramā)が因陀羅の命を奉じて牝牛を回復した古傳を原型に取つたとなすのが妥當である。今此詩の大略を述べて見れば、十車王の三妃にそれぞれ羅摩、婆羅多(Bharata)落迦摩那(Lakshmana)なる子があつた。羅摩は當時有名な毗提訶國(Videha)の闍那迦王(Janaka)の女なる私多姫(Sītā)と結婚した。老年の父王はカウシヤリヤー(Kauçalyā)の生むだ羅摩に位を讓らうと思ふたれど、繼母のカイケーイ(Kaikeyī)より、已が所生なる婆羅多を位に即けて羅摩を十四年間追放せよと迫られ、止を得ずして之に從ふた。羅摩は即ち其妻と庶弟落迦摩那とを伴ひ漂浪の途に就いた。父王は之を悲しんで、遂に悶死した。然るに婆羅多は自から即位するに忍びず、羅摩の住へる檀特山(Daṇḍaka)に赴いて之に歸國を勸めたが、羅摩は強て之を拒み、夫より進むで山中の惡鬼を伐つた。鬼王羅婆那(Rāvaṇa)に其妻を奪ひ去られたる故、先づ猿將スグリーヴ(Sugrīva)の援を得て可畏の巨人婆利(Bāli)を誅せる後、猿將ハヌマト(Hanumat)の嚮導により、楞伽(Lankā)即ち錫蘭に攻め入つて羅婆那を滅ぼし、私多姫を回復して國に歸り、玆に王位を繼ぐに至つた。以上が此詩の骨子であるが、猶此外に注目すべき傳説が多い。第一卷及び第七卷には、羅摩を最高神毗濕笯の化現として讃美してゐる。此信仰は第十二世紀の羅摩奴闍(Rāmānuja)第十四世紀の羅摩難陀(Rāmānanda)等の宗教思想の根本と成つたもので、印度の民心に深き感化を及ぼした。猶此詩には、毗濕婆密多羅王(Viçvāmitra)の物語、恒河の傳說等、興味ある物語が少くない。印度文學中で、此詩が最も弘く民間に愛誦せられたが、今も猶年々ベナレス(Benares)府に行はるゝ羅摩祭に於て吟誦せられ、幾萬の人民を喜ばせてゐる。印度人は實に羅摩と私多姫とを德行純潔の標準とし、二千幾百年間此詩篇によりて多大の教化を受け來つたのである。

七　布剌那及び怛特羅文學

三八三　布剌那文學　摩訶婆羅多と密接の關係ある文學に布剌那(Purāṇas)と呼ぶのがある。佛典にては補剌那、富蘭那等とも記してゐる。布剌那とは古譚若くは史話の義である。其性質は教訓的であつて、濕婆派(Çaivism)毗濕笯(Vaishṇavism)の如き宗派的信仰を鼓吹する目的で起つたものである。布剌那なる名は、イチハーサ即ち史詩なる語に結合せられて屢々祀法書中に用ひられ、萬物の起原(Agra)に關する宇宙論的考察を呼ぶの名とせられてゐる。然るに布剌那とイチハーサとは其後別個の文學となつたが、イチハーサなる摩訶婆羅多が成れる頃、既に布剌那の存したことは、摩訶婆羅多中に現存せざる十八布剌那を記して居るので知られる。今日現存するものは、概ね摩訶婆羅多以後になり、題材を多く此史詩より取つたものである。布剌那中にも史詩、摩奴法論及び散逸せる布剌那の斷片等と共通の傳説が存し、しかもこれを以て史詩法論より得たりとは認め難い。されば布剌那中にも、史詩等と源を同じくせる極めて古き傳説の存することも疑を容れぬ。即ち現存の布剌那では、古譚の一部が除かれて、哲學神學儀式苦行禮拜等に關する外來の思想がこれに代つたもの故、古譚にして此中に存留せるものも多い理である。多くの布剌那に同似の傳説や文章のあるのもこれが爲めである。

布剌那は印度教(Hinduism)初期の神學を表はすものであつて、大凡紀元後第五或は第六世紀より第十四世紀頃に至る迄に成つたものである。此書に於て注目すべき神學は、三體顯現(Trimūrti)及び化現(Avatāra)の信仰である。三體顯現とは、絶對無相の最高實在が、喜(Sattva)憂(Rajas)闇(Tamas)の三德に支配せらるゝや、梵天(Brahmā)の身を現じて造化(Sṛishṭi)を司り、毗濕笯(Vishṇu)と現じて保持(Sthiti)を司り、濕婆(Çiva)として破壞(Laya)を司ると言ふ説である。化現とは、毗濕笯、羅摩等の神が屢々人間若くは他動物の身を現じて法界を利益すると言ふ信仰である。諸の布剌那には毗濕笯が八乃至二十二の身を現ずることを記してゐる。

印度の大字典家アマラシムハ(Amara siṃha)の辭典(Koça)によれば、布剌那は正規として(一)天地の創造(二)世界の壞滅及び劫(三)諸神勇士の系譜(四)各劫を支配する摩奴の歷代(五)日月兩王統歷代の事蹟、の五事を記せねばならぬとて、布剌那を五相(Pañcha lakshaṇa)の名で呼んでゐる。

現存するものゝ中、此五事を完全に記したるものは、

唯毘濕奴布剌那のみである

三八四　布剌那の二類　布剌那には勝(正)劣(穢)の二類があつて夫々十八を有してゐる。十八の勝布剌那中梵天に關する六部を憂種布剌那(Rajasa purānas)、毘濕奴に關する六部を喜種布剌那(Sattivi kapurānas)、濕婆に關する六部を闇種布剌那(Tāmasa purāna)といふ。

( )憂種布剌那
(一)梵天(Brahma)
(二)ブラマーンダ(Brahmānda)
(三)ブラマヴイヴルタ(Brahma-vaivarta)
(四)マールカンデヤ(Mārkandeya)
(五)バヴヰシヤ又はバヴイシヤト(Bhavishya or Bhavishat)
(六)ヴァーマナ(Vāmana)即ち侏儒

( )喜種布剌那
(一)毘濕奴(Vishnu)
(二)バーガヴァタ(Bhāgavata)
(三)ナーラディヤ(Nāradiya)
(四)迦樓羅(Garuḍa)即ち金翅鳥
(五)鉢頭摩(Padma)即ち赤蓮華
(六)ヴァラーハ(Varāha)即ち野猪

(C)闇種布剌那
(一)濕婆(Çiva)
(二)リンガ(Linga)
(三)塞建陀(Skanda)
(四)阿耆尼(Agni)
(五)マツヤ(Matsya)即ち魚
(六)クールマ(Kūrma)即ち龜

右の中、マールカンデヤは對話に富み、割合に宗派的偏執が無いこれは第八世紀頃の作である。バヴヰシヤは儀式を說ける故、對話的ではない。ヴァーマナは、毘濕奴の一化現なる侏儒を意味する。此神は侏儒と現じた時鬼王婆利(Bali)を地下に逐ふたと言はれる。

毘濕奴布剌那は第四世紀以降第十一世紀迄に成つたものである。ホルソン氏(Horace H. Wilson)は、その製作年代を紀元一〇四五年と定めてゐる。これは六卷から成つてゐる。バーガヴァタは毘濕奴書以後の作故、第十三世紀以後に成つたものである。これは吠擅多哲學と民間信仰とを調和した神學を含み、十二卷一萬八千頌より成つてゐる。此書は學者間に信奉せられ、社會に大感化を及ぼした。その第十卷には訖里尸那神(Krishna)の青春時代の傳がある。迦樓羅及び阿耆尼は、摩訶婆羅多の拔抄に過ぎない。

ヴァラーハなる名は、毘濕奴の一化現なる野猪から來たものである。毘濕奴は野猪の身を現じて阿修羅を征服し、かくして下界を保護したと言はれる。

マツヤとは魚の義であつて、此書には洪水の時毘濕奴が魚身を現じて摩奴を救ふた古譚がある。最後のクールマは龜を意味する。毘濕奴は龜身を現じて世界を其背上に旋轉し、惡魔を滅ぼしたと言はれる。

右の十八種の外に、猶左に擧ぐる劣布剌那(Upapurānas)の十八種がある。

(一)サナトクマーラ(Sanatkumāra)
(二)ヌリシムハ(Naisimha)即ち人獅子
(三)ブリハンナーラデヤ(Vrihan-nāradiya)
(四)濕婆(Çiva)
(五)ドルヴァーササ(Durvāsasa)
(六)迦毘羅(Kapila)
(七)摩納婆(Mānava)
(八)アウシヤナサ(Auçanasa)
(九)ヴァールナ(Vāruna)
(十)カーリカー(Kālikā)
(十一)シャーンバ(Çāmba)
(十二)難提(Nandi)
(十三)サウラ(Saura)
(十四)パーラーシヤラ(Pārāçara)
(十五)阿泥坻耶(Āditya)
(十六)摩醯首羅(Māheçvara)
(十七)バーガヴァタ(Bhāgavata)
(十八)ヴァシシュタ(Vaçishtha)

此劣布剌那中の數種は、表によりて名稱を異にして居る。

布剌那の神學は吠擅多哲學數論哲學民間信仰等を調和したものであつて、實に濕婆派毘濕奴派の根本敎理となつてゐる。布剌那には三體顯現、並びに化現等の信仰の外、歸信(Bhakti)の敎義も大に發達してゐる。

三八五　怛特羅文學　布剌那よりも後に現はれて、印度敎後期の神學を表はせるものに怛特羅文學(Tantras)なるものがある。怛特羅は神變を意味し、その呪術秘法の書なるより此名を得たものである。此文學に表はるゝ敎義は神變敎(Tantrism)又は威力敎(Çāktism)と呼ばれる。威力敎とは、女神をば男神の威力(Çakti)として崇拜せるより起つたのであるから、これを女神派と呼んで差支がない。威力崇拜の敎義は、既にスカンダ、ブラマヴイヴァルタ、カーリカー等の布剌那にも表はるゝ所であるが、怛特羅文學に至つて更に顯著となつた。布剌那にて最も有力なる神は毘濕奴であつたが、怛特羅にては濕婆が特に尊崇せられてゐる。大凡印度敎の神には消極的と積極的との二方面がある中、積極的活動的なる威力を擬人して女神となしてゐる。かの濕婆が諸神の權威性質を吸收して大天女(Mahādeva)とせらるゝに及び、其活動的の威力たる神妃も亦大天女(Mahādevī)と仰がるゝに至つた。

然るに此大天女は種々に分身して諸天女となつた、威力派は即ち是等の女神を威力として崇拜せるものである。

全般より見れば、怛特羅は神變、幻術、女神の崇拜等を說いた惡劣なる迷信の書なれど、必らずしも不淨の分子のみではない。其根本敎理は、數論派に說く神我と自性の二諦をば濕婆と其妻とに配し、男女二神の和合によりて宇宙が生じたと言ふにある。若しよく此文學を研究したならば、佛敎の眞言密乘敎(Mantra-yāna)乃至數論派などとの關係も自ら明かになるであらう。

怛特羅は、女神派が四吠陀に次ぎて貴む所であつて、其數六十四種あれど、未だ歐譯されてゐない。怛特羅文學も亦(一)創造、(二)破滅、(三)諸神禮拜(四)如意自在力、(五)大我に融合すべき四法を記すべきものとせられてゐる。

女神派の怛特羅中、最も尊まれ且つ內容の豐富なルドラ、ヤーマラ(Rudra Yāmala)は十萬頌ありと言はれる。此外シヤクヂ、サンガマ(Çakti-sangama)ヴシュヅ、サーラ(Viçva-Sāra)ヴヰラ(Vīra)クラールナヴ(Kulārnava)摩訶涅槃那(Mahā-nirvāna)シヤーマー、ラハシヤ(Çyāmā-rahasya)シヤラダー、チラカ(Çārada-tilaka)ウッデーサ(Uddīsa)カーマークヤー(Kāmākhyā)ボシュヌ、ヤーマラ(Vishnu-yāmala)等も主なるものと見える。此外毘濕奴派怛特羅(Vaishnava-Tantra)と呼ばるゝ別種には、ガウタミーヤ(Gautamīya)サナト、クマーラ(Sanat-kumāra)等がある。

何れの怛特羅も、濕婆が其妻に向つて說いた談話として記せられてゐる。

布剌那怛特羅の二類は、史詩と共に婆羅門敎傳承聖典中の歸信論に編入せられてゐる。

八　技工的叙事詩及び散文小說

三八六　宮廷詩人の技工的叙事詩　前に梵文叙事詩の第一なる二大史詩を述べたる故、之より第二類の柯毗耶(Kāvya)即ち諸の宮廷詩人(Kavis)の手に成つた技工的叙事詩を述べねばならぬ。此宮廷叙事詩は遠く羅摩耶那より發達し來つたもので、既に紀元前第二世紀頃に幾多の創作のあつたことは、彼の梵文典の大家鉢顚社羅(Patañjali)の大註釋(Mahābhāshya)によりて知られる。

更に紀元後第一世紀の迦膩色大王(Kanishka)の治下に出でたる佛敎の大哲馬鳴(Açvaghosha)の作に佛所行讚(Buddha-charita-kāvya)と云ふ史詩がある。これは其名に見るも、體裁より云ふも純然たる技巧的叙事詩である。支那北涼の世に曇無讖(Dharmaraksha)が漢譯したのはこれである。爾來三百餘年間にも幾多の史詩が作られたに相違ないが、現存するものは何れも第五世紀力日王朝以來第十二世紀の間に成れるもののみである。

三八七　迦梨陀娑の叙事詩——羅倶族史傳　宮廷史詩中、製作年代も古く又最も巧妙なのは、力日王朝の迦梨陀娑の二篇羅倶族史傳(Raghuvamça)鳩摩羅軍神の降誕(Kumāra-sambhava)である。詩形內容共に完美であるから、後代の作は何れも此二篇を模範にした。此中羅倶族史譚は當時神的勇士として人口に膾炙した、阿踰陀國の羅摩王子を中心とし、併せて祖先後裔奕世の事蹟を咏じたるものである。十九品(Sargas)の中、初めの九品では、始祖泥梨巴(Dilīpa)其子羅倶(Raghu)より羅摩の父に至る迄の四祖の事蹟を咏じ、第十品より第十五品迄は、羅摩の史傳を叙してあるが、其筋は羅摩耶那の記事と一致してゐる。迦梨陀娑が此詩に於て跋彌仙人を第一の詩人と讚してゐるのを見ても、羅摩耶那に材料を得たことの多いのが知られる。第十六第十七品の兩品には、三世に互る羅摩の子孫の歷史を咏じ、第十八第十九の兩品では、羅摩の末裔にして中印度阿踰陀國を支配した二十四王の史傳を述べ、局を淫逸に耽つた末王阿耆尼婆梛那(Agnivarna)の死に結んである。ドイツの印度研究者中には此詩を以て迦梨陀娑が其保護者であつた力日大王の功業を讚美したものであると唱へたのがある。併し此詩が古譚によりて羅摩の事蹟を叙したものなることは疑はれぬ。此詩は對話にゆるみが無く、其上巧妙な譬喩天才的詩想に充ちてゐるから、印度人間に愛誦せられ二十種程の註釋書が現はるゝに至つた。

三八八　鳩摩羅軍神の降誕　第二の詩篇鳩摩羅軍神の降誕は、十七品から成る。此詩は男神濕婆(Çiva)と神女鉢婆底(Pārvatī)との情話に初まり、遂に二神が結婚して天軍の將なる鳩摩羅(Kumāra)を生み、此軍神が惡鬼と戰つて其巨魁にして提坻(Diti)の子なる提姤耶吒羅迦(Daitya Tāraka)を滅ぼすに終つてゐる。今其梗概を述べんに、北方大雪山の神雪摩(Himāla)の女に鉢婆底があつた。此神女は突伽(Durgā)鄔摩(Umā)歇利(Kālī)等と呼ばれてゐる。其生れたる時に諸の吉祥があつた。迦梨陀娑は此神女の少女時代を最も艶麗に叙してゐる。扨此神女が生長した時、諸神は彼女を濕婆に嫁せしめ、其間に生れたる子を軍將として惡鬼の軍を亡ぼさんと計つた。神女は深く濕婆を崇拜し戀慕してゐた。濕婆が大雪山に籠つて苦行を修むるに及び、神女は淨衣を着け美華を飾りて常に濕婆に侍し花を散じて歸依の念を表はしてゐた。然るに戀の神迦摩(Kāma)は、濕婆の疲勞に乘じて其胸に愛の華箭を放つた故、濕婆の心に神女を愛慕する

情が萠え初めた。然るに溼婆は其情を抑へ、愛の神が苦行を妨げたのを怒り、眼から發した瞋恚の焔、もて愛の神を燒いて死灰となした。神女は相變らず溼婆に侍して苦行を共にし、眞情を捧げてゐる。遂には男神も其熱誠を感じて伉儷の契を許すに至つた。此の如くして其間に生れたのが、善神の軍將(Senāpati)として惡鬼を討滅せし鳩摩羅である。これが此詩の概略であるが、作者は特に此情話を叙するに全力を盡したる故、神女の純浄にして天眞愛すべき性質や兩神が愛慕に悶ゆる痛切な情緒をば、甚だ巧みに描いてゐる。されば此詩も普く誦せられ二十種程の註釋が存してゐる。

三八九　迦利陀娑以後の叙事詩　右の二篇が最も作なれど、此外第十二世紀迄の間に出でた幾多の史詩がある。併し迦利陀娑以後の史詩は抒情詩教訓詩等の分子を混じ、概ね材を摩訶婆羅多、羅摩耶那に採つてゐる。第七世紀瑟利陀羅犀那王(Çridharasena)の時に出でゝ六五一年に死んだ伐拔訶利(Bhadhrihari)は詩人文典家哲學者を兼ねた人であるが、其作の跋底叙事詩(Batti kāvya)が殘つてゐる。これは梵語の動詞の變化を說明する爲めに造つたもので、二十二品(sargas)より成り、羅摩の史傳を詳しく述べてゐる。

迦利陀娑と同代若くは、稍々後れて出でたる婆羅毗(Bhāravi)の作『山人と阿順』(Kirātārjunīya)は、勇士阿順(Arjuna)が大戰の前敵を服する力を得ん爲め山中に苦行せる時山人に假裝せる溼婆神と爭鬪せることを詠じたもので、十八品より成る。文辭流暢で力がある。

第九世紀又は第十世紀頃に成つたと云はれる溼首鉢羅の最後(「Çiçupāla-vadha」)は、吃里戸那の從弟に當る中印度の溼首鉢羅王子が毗溼笯(Vishnu)神に殺された次第を詠じたもので二十品より成る。ボージャ(Bhoja)の王に仕へた詩人摩伽(Māgha)の作故、摩伽叙事詩(「Māgha kāvya」)とも云ふ。彼は達多迦(Dattaka)の子であつて、其祖父スプラバデヴ(Suprabhadeva)はシュリ、ダルマナーバ王(Çri-Dharmanābha)王の寵臣であつた」。此詩には美妙にして感動すべき詩想がある。今でも普く印度に讀まれてゐる。

「尼沙陀王所行傳」(Naishadha-charita)即ちナイシャディヤ(Naishadhīya)は、第十二世紀前半の尸利波沙(Çriharsha)の作で二十二品より成り、尼沙陀國(Nishada)の王なる那羅(Nala)の史傳を詠じたもので、溼首鉢羅の最後と同じく材を摩訶婆羅多に取つたものである。

迦利陀娑の二篇に右に列擧した四篇を加へたものが、印度修辭學者の六大叙事詩(six mahākāvyas)と呼ぶ所のもので、何れも摩利那陀(Mallinātha)の註釋がある。檀陣の定義によると大叙事詩とは題を大史詩に取り、浩瀚なるものにして、都城山海季節日出結婚戰鬪等の記事を交へたる長篇である。第九世紀に出でた迦濕彌羅國(Kashmir)の詩人寶積(Ratnākara)の作に、波羅の勝利(Hara-vijaya)と云ふ大叙事詩がある。波羅の異稱ある溼婆神の事蹟を詠じたものである。那羅の勢力挽回を題にせる那羅王の奮起(Nalodaya)は、落魄せる那羅が勢威を挽回する迄の運命を描いたもので、複雜な韻律を自由に使用してゐるのを見ると苦心の作たるが知られる。記事には荒唐なのが多いけれど、詩としては見るに足るものである。史詩とは云へど抒情詩が甚だ多く含まれてゐる。迦利陀娑作と云はるれど、筆意大に趣を異にし遙か後代の作なるを示してゐる。八百年代に成つた羅伽般陀驃(Rāghava-Pāṇḍavīya)は柯毗羅闍(Kavirāja)の作に係り、羅伽婆(Rāghava)即ち羅摩及び般陀婆(Pāṇḍava)諸王子の史傳を詠じたものであつて價値が多い。此詩は同一の用語を以て第一に羅摩耶那第二に摩訶婆羅多に那羅王物語を述べた技工的なる詩であつて、四品から成つてゐる。ナヴァサーハサーンカ王所行讃(Navasāhasānka)は、其名の示す王と信度羅闍王(Sindhurāja)との史傳を讃した十八品千五百頌の詩である。讀者を倦ましめぬやうに苦心してゐる。

以上に述べたのは梵文の叙事詩であるが、此外俗語のプラークリット(Prākrit)で書いた建橋(Setubandha)即ち羅摩那の最後(Rāvana-vadha)は、羅摩の錫蘭征伐を詠じたもので、迦濕彌羅王プラヴラセナ(Pravarasena)がヴィタスター河(Vitastā)に船橋を架せし時、紀念の爲めに迦利陀娑の作つたものと傳へられる。猶地方語で作られたる叙事詩も少なくない。

三九〇　散文小說　第六世紀以降に成つた散文小說も存するが印度の詩論には之を柯毗耶詩中に列してゐる。就中有名な十王子所行傳(Daça-kumāra-charita)は第六世紀(或は七世紀とも云ふ)頃に檀陣(Dandin)の作つたもので、よく當時の腐敗せる社會狀態を穿つてゐる。又第七世紀の始に蘇槃豆(Subandhu)の作つた短篇小說に婆沙縛達多(Vāsavadattā)と云ふのがある。優禪尼國(Ujjayinī)の公主婆沙陀達多姬と後に其夫となりしヴトサ國(Vatsa)の優陀耶那王(Udayana)との俗話を綴つたものである。

紀元六〇六年に即位して六四八年迄羯若鞠闍(Kanyakubja)及びターネシャル(Thanesar)を支配した戒日大王(Çīlāditya)と云ふ英王があつた。別名をシュリー、ハルシャ(Çriharsha)ハルシャヴァルダナ(Harshavardhana)又は單にハルシャ(Harsha)とも云ふ。文藝及び宗教を保護し領土内では殺生肉食を禁じ、慈善を勸めた。されば王の治下に多くの文人哲學者が出でた。就中王宮に仕へて殊遇を受けたのは、梵文學史上に有名なる波那(Bāṇa)若くは檀陣(Dandin)と謂ふ婆羅門である。此の詩人は幾多の戯曲詩歌を作つたが、小說に於ても其保護者の戒日大王の史傳なるハルシア王所行傳(Harsha-charita)を六二〇年頃に作つた。此小說は八卷より成り當時の文化を知るに貴重な書である。彼は此外に猶公主迦檀婆利姬(Kādambarī)の運命を描いた詩的の小說迦檀婆利をも作つた。此物語は甚だ夢幻的のもので、情人相思の熱情、深痛なる苦悶、荒野に於ける苦行等の描寫には力が籠つてゐる。併し此詩のみならず、ハルシヤ王所行傳などでもあまり文飾に凝つた爲め、文章が自から冗漫に流れて、叙述的でない所が多い。梵文小說は以上に述べた數種しか現存してゐない。

九　抒情詩

三九一　迦利陀娑の二大抒情詩　詩趣豐かにして變化多き熱帶印度の風光は、梵詩人に深き印象を與へた。されば彼等は、天然の美を稱へ、是に對する感想を抒ぶることに巧みであつた。梵文抒情詩には、左まで長篇のものはないが、流麗にして愛吟すべき詩が多い。戯曲及び叙事詩に於て、その技倆を十分發揮した迦利陀娑は、抒情詩に於ても印度第一流の作家であつた。其作にして今日に傳はつてゐる「雲の使者」(Meghadūta)「季節の循環」(Ritusaṃhāra)の二篇は實に梵詩壇の絶品である。

「雲の使者」は百十五頌(四行一頌のもの)の短詩なれど、ドイツの詩宗ゲーテの如きも深く其美妙なるに感じ、愛誦して措かなかつた。實に此詩は、迦利陀娑が、其圓熟せる筆を揮ひ、詩腦を絞つて作つたもの故、詩形の完美なる、聲調の流麗なる、抒情叙景の妙と相待つて、千古に傳ふべき價値がある。此詩は、一歲の中で最も詩趣に富む印度雨際の風光を背景として、謫人悲愁の情緒を巧みに抒べたものである。左にその大略を述べよう。富貴財寶の神俱吠羅(Kubera)即ち佛教の毗沙門天王(Vaiçravaṇa)の配下に屬して、北方大雪山中なるカイラーサ山(Kailāsa)の神城を守つてゐた夜叉(Yakshas)の一人が、其妻の美容に溺れて職務を怠つた爲めに、天王の譴責を受けて中印度頻陀山(Vindhya)の邊なる羅摩山(Rāmagiri)中の森に一年間流された。夜叉は配所にありて常に北方の空を望み、故山の妻を思ひて悒々八ケ月を過ごした。今や雨際が近づき、黑雲の北に走るを見ては、一しほ孤獨の感に堪へず、思慕の切なる情を故山の妻に傳へんとを飛雲に願ひ、其行程に於て飛雲の遭逢すべき阿摩山(Āmrakūṭa)毗提沙城(Vidiçā)ナルマーダ河(Narmadā)吠特羅河(Vetravatī)優禪尼城(Ujjayinī)鳩留國(Kurukshetra)殑伽(Gangā)等の如き諸地方の風光及び之に關した古譚などをば、いと美しく說明し、最後に故山の美景及びわが妻の妖艶なることを述べ、且つ往時の歡樂を追想しては現在の不運を悲み、再び放されて妻と相見るの日の速に來らんことを願ひ、雲の使者に告報を齎らして茲に還ることを命じて北方に向はしめた。雲は此怨れむべき流人の消息を天王に傳へた。天王も其情を憫みて夜叉を召し還し、妻と二人に不死の威德を與へた。これで局が結んでゐる。此詩は情緒を描くこと深刻ながら、全篇に哀傷の調が溢れてゐる。彼の『印度古代文明史』(History of Civilisation of Ancient India)の著者ダット氏(Romesh Chunder Dutt)も、此詩を詩想の豐富聲調の婉妙に於て世界無比であると讃美してゐる。此詩は近年に至り、歐洲諸國に於て出版若くは翻譯せられ、ゲーテ、シルレル等の愛誦する所となつた。シルレルの如きは、一八〇〇年に出した悲劇『マリア、スチュアルト』(Maria Stuart)の第三段の初には「雲の使者」の思想を採り、スコットランドの女王マリアをして、南に走る雲に對し思鄕の情を抒べしめてゐる。猶古き西藏佛典中にも此の詩が譯されてゐる。他の詩篇「季節の循環」は、迦利陀娑がその犀利なる觀察力、美に對する深き同情、並びに圓熟せる技倆をば餘蘊なく發揮したものであるから、自然美を活々と描いた點に於て、實に印度獨步である。六品百五十三頌より成り、移り行く印度六季の風光を叙し、これに人事を結び着けてゐる。印度の習俗では一歲をば熱雨寒の三際に區別し、或は左の六季(six ritavas)となすのが恆である。

熱際（或は盛熱）即ち夏季（Grīshma）
雨際（或は雨時）即ち雨季（Varshās）
秋時（或は茂時）即ち秋季（Çarad）
寒時（或は漸寒）即ち初冬（Hemanta）
冰雪（或は盛寒）即ち嚴冬（Phālguna）
華時（或は漸熱）即ち春季（Vasanta）.

迦利陀娑は先づ筆を夏季に起し、詩趣に充ちたる清夜に喘々として相語る情人の有樣、月に對して望鄕の思をかこつ旅人のことなどを描き、又日中に於て獅子象野豬羚羊水牛等が炎熱に苦しみて佇々たる狀態、萎靡した草木の有樣などを描いてゐる。雷が鳴り密雲の飛ぶ雨際には、清新の氣天地に溢れ、詩人の感興を惹くべき時であるから、新芽に被はれて金色なせる森の姿、驟雨を喜ぶ禽獸の樣をばいさく寫してゐる。印度の秋は、溫帶のと異り、草木生ひ茂りて華を開く時であるから、迦利陀娑は、此期に於て、純白なる素馨の花、眞紅なる無憂樹(Açoka)の花、及び湖上にゆらぐ紅蓮白蓮の清き姿をたゝへ、稻甘蔗の穗が生熟し葛藤が茂る樣などを巧みに寫してゐる。寒時冰雪の二季には、黃熟せる稻、玉なす白露の地に布ける外、滿目落莫たるの光景を描き、最後に、歡樂の光あふるる春の日に、無憂樹の華鬘、素馨の簪して戀に醉ふ少

女の様、花咲き蜂飛ぶ野邊の景などを緻密に叙して此一篇を結んでゐる。迦利陀娑の美妙なる抒情詩はいたく歐洲詩人の心を動かし、ハインリヒ、ハイネの如きも「蓮華」(Die Lotosblume)「詩の翼」(Auf Flügeln des Gesanges)等の諸篇に於て是等の梵詩に負へる所がある。

三九二　迦利陀娑以外の抒情詩人　梵文抒情詩中の白眉たる右の二詩の外、幾多の價値多き作物がある。「羯多の寵」(Ghatakarpara)は、力日王朝九賢の一人と云はるれど眞の年代の不明な羯多の作で、僅か七十二頌の短篇なれど、中々巧妙に出來てゐる。「盜賊五十頌」(Chaura-panchâçikâ)は、迦濕彌羅(Kashmir)の詩人毗璃波那(Bilhana)の作で、美妙なる句が多い。作者は國の公主と通じたことが發覺し、將に死刑に處せられんとした時、此詩を作つて國王を感動せしめ、王女と伉儷の契を結ぶことを許されたと傳へられてゐる。中世紀の梵文抒情詩には長篇のものは少なく、概ね四行より成る一頌を以て、短かく戀愛の情緒を描いた絶句體のものなれど、觀察豐富感情深刻なる故、詩形内容共に完美である。斯かる種類の詩作に長じたのは「伐撥呵利」である。其作に絶句體のもの三篇ある中二篇は後の教訓詩の條に讓り茲に擧ぐ可きは其「戀愛百首」(Çringâra-çataka)である。此詩によつて見ると、彼は女子の魔力及びその男子を籠絡する技倆をば十分理解してゐるらしい。次に此頃の詩に「愛の的」(Çringâra-tilaka)と云ふのがある。想像的の譬喩に富む二十三頌の短詩である。世には迦利陀娑作と傳へてゐる。更に是等よりも珍重すべき、阿摩樓(Amaru)作の「阿摩樓百首」(Amaru-çataka)には戀する人の狀態及び種々なる離間和解などを叙してゐる。此詩及び他の梵詩に現はるゝ戀愛は幻想的理想的でなくて肉慾的現實的である。此外絶句體ではないが、落乞濕彌陀娑(Lakshmîdâsa)の「鸚鵡の使者」(Çukasandeça)と云ふ一抒情詩もある。これは「雲の使者」の着想を襲ふたものであつて、往年トラヴンコール(Travancore)の王が刊行した。

俗用語なるプラクリット(Prâkrit)文學にも、絶句體の抒情詩が多いが、中でも一〇〇〇年前後の波羅(Hâla)の「七種百首」(Saptaçataka)は、當時民間に行はれたる俗謠を知り得べきものである。

猶抒情詩と戲曲との中間に位す可き「歌の牧人」(Gîtagovinda)と云ふ劇詩は、第十二世紀のベンガル詩人闍耶提婆(Jayadeva)即ち勝利天の作で、正劇未成時の脚本を擬し、訖里戸那神と牧女羅陀(Râdhâ)との戀愛を描いたものである。詩形完美にして文辭流麗、眞に劇詩として最上乘の作である。極めて肉感的の描寫が多いが、印度人は此情話を神秘的譬喩的に解し、最高實在に對する人靈の憧がれを表はすものとしてゐる。以上に述べ來つた諸篇の外に、戲曲詩論等に散在せる美妙な短詩を集むれば、數千頌に上るであらう。是等は顯著なる風光深痛なる情緒等を詠じたるもので、歐洲のソネット(Sonnet)即ち短詩と相似て、技工的のものなれど、ソネットよりも巧妙で且つ天才的の思想が溢れてゐる。

印度の抒情詩を通覽するに、何れに於ても動植物が其主なる部分を占めてゐる。從て鳥獸などにも優美な傳說が加へられてある。

今印度中古の抒情詩を梨俱吠陀に比較するに、中古詩人は何れも修辭の法則に囚はれて技巧纖麗に流れ、吠陀時代の如き天眞の思想や雄大の文辭を見ることが出來ぬ。之は中古詩人の免かれ得ざる欠點であつて、詩聖迦利陀娑すら、動もすれば言辭運用の綺巧を誇らんがために、詩の題目をば客位に置き、結局言語の遊戲に陷れる點の多いのは惜むべきことである。

一〇　戲曲

三九三　印度戲曲の起原　梨俱吠陀の中には、非ヴスヷント(Vivasvant)の雙生兒なる耶摩(Yama)と耶彌(Yamî)の對話を初め、曙のサラマー(Saramâ)と闇の力パニス(Paṇis)樂神プルーラヴス(Pururavas)と天女ウルヷシー(Urvaçî)等の對話が記せられてある。是れが印度戲曲文學の萠芽と認むべきものであつて、斯かる對話風の文學が次第に發達し、抒情詩叙事詩と相結んで遂には戲曲となつたものである。

基督降生以前、旣に幾多の梵文戲曲が作られた形迹はあれど、是等は一も今日に傳はつてゐない。現存する六十有餘の戲曲は、紀元第五世紀以後になつたもののみであるから力日王朝に出でた印度の沙翁迦利陀娑を以て、戲曲史上最初の作劇家となさねばならぬ。

三九四　迦利陀娑の三大戲曲　詩聖迦利陀娑は啻に叙事詩抒情詩に於て無比の天才を發輝したのみでなく、戲曲の方面でも「車君多羅姬」(Çakuntalâ)「非クラモルヷシー」(Vikramorvaçî)「摩羅毗柯と阿耆尼密多羅」(Mâlavikâgnimitra)の三大傑作を殘してゐる。此中で、「車君多羅」劇は題材を史詩摩訶婆羅多第一書の傳說に取り、ドウシュヤンタ王(Dushyanta)と車君多羅姬との、戀愛別離再會等を描いたもので、七段から成り、印度戲曲中最も完美な作である。其筋の大略を述ぶれば、初め王は遊獵して聖林に入り、一たび姬と相見てより、互ひに愛慕の情が募り、遂には伉儷の契を結ぶを約し、日ならず臣下を派して姬を宮中に迎ふべしと告げ、紀念として王の名の刻してある黃金の指環を與へて王城へと去つた。然るに姬は不圖したとから或道士の怒を買ひ、道士の爲めに王が姬を忘れるやうにと呪詛された。果せる哉、王城よりは何の音信もない。姬は詮方なさまゝ、侍女などゝ共に王宮に至り、前約を履まむとを王に願ふたれども王は呪詛により全く姬を忘れてゐる。姬は紀念の指環を示さうとしたが、之も途に失うて無い。姬は絶望の餘り遠く天上界に去つてしまつた。其後王は魚腹から現はれた指環を得て、過去のことを思ひ起し、思慕の情に堪へ兼ね、鬱々と日を送つてゐた。或日帝釋天即ち因陀羅(Indra)の許より天使が降臨し、王に魔軍討伐の命を傳へた。王は昇天して魔軍を服した後、下界に歸る途中、樂神乾闥婆(Gandharvas)の群れる雪山(Hemakûṭa)で、車君多羅及び其子の婆羅多(Bharata)に逢ひ、互ひに再會を喜び、限りなき天神の恩寵を謝して、共に下界に還ることゝなる。之で終局してゐる。第二の「非クラモルヷシー」劇は、勇氣によりて得たるウルヷシー天女と云ふ意味である。材を百步祀法書の神譚に取り、相愛せるプルーラヴス王(Purûravas)とウルヷシー天女(Urvaçî)とが再三別離の悲苦を味ふた後、帝釋天の慈悲によつて、伉儷の契を完ふするに至るとを骨子としたもので、五段から成つてゐる。脚色は「車君多羅」と同工異曲であるが、文辭も敢て「車君多羅」劇に劣らぬ傑作である。

第三の「摩羅毗柯と阿耆尼密多羅」は、前の二劇と異り、題を史上の事實に取り、シュンガ王朝(Çunga)のプシュヤミトラ王(Pushyamitra)の子なる阿耆尼密多羅王(Agnimitra)が、正妃の侍女摩羅毗柯(Mâlavikâ)を慕ひ、之が爲め二夫人が嫉妬して閨房が亂れたるも、侍女が元と他國の公主であつたと知れ、二夫人も意解けて侍女と姉妹の約束を結び、共に王の寵を受くるに至つたとを骨子としてある。

三九五　迦利陀娑以後の戲曲　第六世紀頃に出でた有名な戲曲は「土車」(Mricchakaṭikâ)である。周陀羅迦王(Çûdraka)の作と云はるれど、王の保護した檀陳(Daṇḍin)の作らしい。これは、創意が嶄新なのと舞臺面の活躍に富むでゐるのとで、印度戲曲中上乘の部に數へられてある。十段から成る。

其筋は、家產を失ふた婆羅門族の貴人斫達多(Chârudatta)と官女春軍姬(Vasantasenâ)との戀愛を描き、兩人が種々悲慘な運命を味ふた後、圓滿に局を結ぶとになつてゐる。此戲曲の第四段には、當時の貴人の豪奢な生活が遺憾なく描かれて居り、第五段には美妙な抒情詩が數多含まれてゐる。

第七世紀前半に成つた「瓔珞」(Ratnâvalî)「龍の歡喜」(Nâgânanda)の二傑作は、羯若鞠闍國及びターネシヤル國を支配してゐたシュリー、ハルシヤ(Çrî-harsha)即ち戒日大王(Çîlâditya)の作と云はるれど、前者は婆那(Bâṇa)後者は陀婆迦(Dhâvaka)の作らしい。二人は共に戒日王の保護を受けた宮庭詩人である。「瓔珞」は印度敎の戲曲であつて、優陀耶那王(Udayana)と王妃の侍女娑羯利迦(Sâgarikâ)との戀愛を題としてゐる。性格描寫の巧なのと詩美の豐富なのとは、此戲曲の特色である。「龍の歡喜」は敎訓的の佛敎傳說を題とし、非ドヤーダラ族(Vidyâdhara)の乘雲菩薩(Jîmûtavâhana)が、其愛せる悉陀族(Siddha)の公主摩羅耶跋底(Malayavatî)と結婚した後、西國にて金翅鳥(Garuḍa)の餌とならんとする一龍に代りて生命を失ふたるも背頸天女(Gaurî)の爲めに蘇生することを得たる事蹟を仕組み、巧みに慈悲仁愛の實行を鼓吹してある。

三九六　婆縛部底　第八世紀前半には、迦利陀娑に亞ぐべき大戲曲家の婆縛部底(Bhavabhûti)が現はれた。彼はもと南天竺毗達婆國(Vidharva)の人なりしも、後中天竺羯若鞠闍國に來りて當代の英主耶輸跋摩王(Yaçovarman)の保護を受け、その三大戲曲「末羅帝摩杳婆物語」(Mâlatî-mâdhava)「大雄所行傳」(Mahâvîra-charita)「羅摩王子後日譚」(Uttara-râma-charita)を今日に殘した。感情描寫の深刻なのと、崇高悽慘の分子が多いのとは、彼の作物の特色である。猶彼は南印度の天地に生長した爲め、作中にも好むで自然界の偉觀を描いてゐる。三作中で最も有名な「末羅帝摩杳婆」劇は、西印度優禪尼國の官吏の娘末羅帝と、此國に遊學せる毗達婆國の官吏提婆羅多(Devarâta)の子摩杳婆との戀愛を骨子とし、此兩人が國王の阻礙に遭ふて幾多の悲慘なる運命を味ふたる後、慈悲深き佛敎比丘尼迦受諾(Kâmandakî)の助力で圓滿に局を結むだ次第を描き、猶摩羅帝の學友摩柯闍陀(Makaranda)國王の寵臣の妹摩陀延底迦(Madayantikâ)等の運命をも併せ述べてゐる。十段から成る。餘の二劇は、何れも當時神的勇士として崇拜された羅摩王子の事蹟を仕組むだものである。此中で「所行傳」の方は、羅摩耶那に基づき、擅特山に漂泊してゐた羅摩が、錫蘭の魔王羅婆那を滅ぼして國に歸り、遂に王位を繼ぐまでの史傳である。「後日譚」は、阿踰陀國王となつて後の羅摩傳であつて、嘗て王子と漂泊の苦を共にした貞妃私多が、大旱の不祥によつて其貞操を疑はれ、十二年間追放せられた後、遂に冤罪なりしことが知れて歸國を許さるゝ迄のことを仕組むである。文辭の凄艷美妙なることは、梵文中にて古今無比の評あれど、戲曲としてはあまり舞臺の活動に乏しい故、寧ろ劇詩と目すべきものである。

年代の全く不明な毗娑迦達多(Viçâkhadatta)の作に「落叉沙の印」(Mudrârâkshasa)と云ふ戲曲がある。題を歷史上の事實に取り、巧みに政治的陰謀を描いたもので、孔雀王系(Maurya)の始祖旃陀羅笈多(Chandragupta)即ち月護大王が、難陀王系(Nanda)の末王摩訶鉢頭摩(Mahâpadma)を滅ぼして王位に即いた後、末王の輔相落叉沙(Râkshasa)が故主の爲めに報

復せんとした孤忠を骨子としてある。多分第八世紀以前の作であらふ。

第九世紀に跋多那羅耶那(Bhaṭṭa Nārāyaṇa)の作つた「編髮」(Veṇī-saṃhāra)は、陀羅鉢提(Draupadī)なる婦人を題にしたもので、文學的價値は乏しいが、當時盛んであつた訖里尸那(Krishṇa)の崇拜を鼓吹した戲曲故、長く衆俗の歡迎する所となつた。摩訶婆羅多中の傳說に基いたもので、六段からなつてゐる。

三九七　訖里戸那彌濕羅　第十一世紀の終に出でた印度戲曲史上最後の大作家訖里戸那彌濕羅(Krishṇa Miçra)は、當時ジェジアカブクチ國(Jejākabhukti)を支配してゐたチャンデラ王系(Chandella)のキルチヴルマン(Kīrttivarman)の保護の下に不朽の大作「覺月出現」(Prabodha-chandrodaya)を出した。これは毘濕笯派の信仰を鼓吹せんが爲めの神學的譬喩劇であつて、理性が天啓即ち正統宗敎と相結んで眞智を生じ以て迷妄を打破する所以をば、人事に擬して巧みに描いたもの故、印度戲曲中無類のものである。

三九八　十二名曲以外の戲曲　以上は現存せる梵劇脚本中、最も有名なる十二種である。此外婆那の「パールヴァチー・パリナヤ」(Pārvatīpariṇaya)戒日大王に歸せられる「淑女」(Priyadarçikā)第九世紀羅闍釋羅(Rājaçekhara)の四劇「ボダ、シャラバンヂカー」(Viddha-çālabhañjikā)「カールプラ、マンジャリー」(Karpūra-mañjarī)「婆剌羅摩耶那」(Bāla-rāmāyaṇa)「婆剌婆羅多」(Bāla-bhārata)第十一世紀「刹密濕伐羅」(Kshemīçvara)の「怒れる憍尸迦」(Chaṇḍakauçika)第十一世紀「陀母茶羅」(Dāmodara)の「猿將ハヌマト」劇(Hanuman-nāṭaka)等の如きも、多少注目に價するものである。猶第十二世紀以降今日に至るまでに、多少の戲曲が出でたが、大抵題材を古譚史話に仰いだもので、文辭感想到底前代の作物に及ばない。近時アジミール(Ajmir)で第十二世紀に成つた二種の脚本が發見され、今後も猶多少の發見があることゝ思はれるが、第十一二世紀頃に至つて印度戲曲史は終を告げたとして差支ない。但し劇論の著作は却て第十一世紀より第十五世紀頃紀までに出でた。

一一　童話、お伽噺、及び教訓詩

三九九　童話——五卷書と美訓　印度には、童話お伽噺格言等の文學も大に發達し、興味あるものが甚だ多い。

幼童に道德的薰陶を與ふる目的で、諷刺譬喩を交へて書かれたる數多の童話書中、特に有名なのは「五卷書」(Panchatantra)である。これは梵文學中でも注目すべきもので、其名の示す如く五卷から成り。童話中に說明的の敎訓詩を挿むである。此書の大成した年代は明かでないが、紀元第六世紀の初めに存在したことは、コスル、アヌーシールヴン王(Khosru-Anūshīrvān)が、此書を第六世紀に近代波斯語即ちペーレ非語(Pehlevi)に譯さしたので明かである。此書が佛敎傳說に負ふ所の多いことは、これに出づる寓話の大抵古き佛敎文學に存するので證せられる。佛敎には佛陀前生の事蹟德行を記せる闍多伽(Jātaka)即ち本生文學があつて、既に紀元前三八〇年の毘耶離城(Vaiçālī)の結集の時に集錄せられたのも存する。現存の五卷書は、佛敎より材料を取つて之を婆羅門族が改造したもので、本來は十二卷あつたものらしい。年少の王族に行爲(Nīti)の原則を敎へる爲めに作られたもの故、至つて簡單なれども興味が多い。古傳にはマヒラーロピヤ(Mahilāropya)の城主阿摩羅舍底(Amaraçakti)の愚惰なる三子を敎訓する爲め、一婆羅門の作つたものとしてある。此書のペーレ非譯は、シリア(五七〇年頃)アラビア(第八世紀)兩譯の原本となつたが、アラビヤ譯から、更にシリア(一〇〇〇年頃)ギリシヤ(一一八〇年)ペルシヤ(一一三〇年及一四九四年)スペイン(一二五一年)ヘブライ(一二五〇年)等の諸國語譯が出來た。又一二七〇年のラテン譯はヘブライ譯に依つたもので、ドイツ(一四八〇年)イタリー(一五五二年)兩譯の原本となつた。而して一五七〇年のイギリス譯はイタリー譯本が本である。此の如く、「五卷書」は歐亞の諸國に譯され、第十六世紀前後には童話の上乘なるものとして西洋に珍重せられてゐた。

右の「五卷書」と相似た內容を有する「美訓」(Hitopadeça)四卷は、特に價値多きもの故、梵書中最も有名にして且つ尊く行はれてゐる。此書の四十三話中、二十五話が既に「五卷書」に存するのを見ても、材料を多く「五卷書」に取つたことが知られる。作者及び製作の年代は不明なれども、最古の寫本が一三七三年に書かれたとだけは疑はれない。これも波咤釐子(Pāṭaliputra)即ち華子城の善見王(Sudarçana)の諸子を敎訓する爲めに或學者の作つたものと傳へられる。「五卷書」よりも更に多くの格言的の詩があるが、何れも有益なる思想を含むでゐる。

四〇〇　お伽噺　お伽噺にも巧妙なものが多く、何れも東洋的の特色を帶びてゐる。「吠多羅鬼二十五譚」(Vetāla-pañchaviṃçati)は、優禪尼國の毘柯羅摩王(Vikrama)に、向つて死屍に宿る吠多羅鬼が談つた二十五譚を集めたものである。次に「獅子座三十二譚」(Siṃhāsana-dvātriṃçikā)は、毘柯羅摩王の玉座が談れる三十二譚を記してある。以上の二書は共に佛教起原のものである。猶「鸚鵡七十譚」(Çukasaptati)と云ふお伽噺は、七十日の間一日一題づゝ鸚鵡の談つた所を集めた書とせられてある。以上の三書は何れも散文で書かれた比較的に短いものである。韻文のお伽噺「譚川の大海」(Kathā-sarit-sāgara)は、一〇七〇年頃(一說に一一〇〇年とも云ふ)迦濕彌羅國(Kashmir)の詩人蘇摩提婆(Somadeva)即ち月天の作で、百二十四章に分たれ、二萬二千頌以上を含むでゐる。作者は婆羅門なれども、材料を佛敎傳說に仰いでゐる。此書には興味ある物語が多い。詩人求那陀耶(Guṇāḍhya)の作だと檀陳の記してある「大譚」(Bṛihat-kathā)は餘程古き作と見えるが、蘇摩提婆は是から材料を取つたと自から記してゐる。猶一〇三七年頃にクシエメンドラ、非ヤーサダーサ(Kshemendra Vyāsadāsa)の作つた「大譚華鬘」(Bṛihatkathā-mañjarī)も、大譚を改作したる長篇である。

四〇一　教訓詩　倫理的並びに社會的知識を敎ゆる爲めに作られた印度の敎訓詩は、何れも簡單な對句からなり、格言の體裁を具へ、人を感動せしめる高尙な道理をば、如何にも詩的に述べてある。かゝる敎訓詩は、法典戲曲史詩童話等の各所に散在してゐる故、特にこれのみを集めたものは比較的少ない。

第十七世紀の學士伐拙呵利が作つた敎訓詩に「本務百首」(Nīti-çataka)「離欲百首」(Vairāgya-çataka)の二集がある。前者では行爲の原則を說き、後者で口を極めて棄欲隱棲を奬めてゐる。又迦濕彌羅國の戸瑠波那(Çilhaṇa)の所造「寂靜百首」(Çānti-çataka)には放逸を戒めてゐる。「痴盲鐵槌」(Moha-mudgara)は世榮を棄つべきことを敎へたものであるが、これを吠檀多哲學の泰斗商羯羅阿闍梨(Çaṅkarāchārya)の作と云ふのは誤つてゐる。「所那伽百首」(Chāṇakya-çataka)一名「王道要集」(Rājanīti-samuchchaya)は、戲曲「落叉沙印」中にも旃陀羅笈多大王の參謀として現はるゝ所那迦波羅門の所造と謂はれてゐる。所那迦は別名を憍底利耶(Kauṭilya)又は毘瑟笯笈多(Vishṇugupta)と呼び、印度で謀略の泰斗と認められる人である。右の諸書の外、猶迦曼陀迦(Kāmandaka)の「本務要義」(Nītisāra)提耶陀毘吠陀(Dyādviveda)の「本務華鬘」(Nīti-mañjarī)等もある。「本務華鬘」は二百頌を含み各頌を解するに例話を以てし、猶作者の自註が加へてある。猶後代に成つた梵文格言集は甚だ多い。就中戸利茶羅陀婆(Çrīdharadāsa)が一二〇五年に集成した「金訓耳環」(Saduktikarṇāmṛita)の如きは、四百四十六詩人を引いてある。第十四世紀に商伽陀羅(Çāṅgadhara)の集めた「商伽陀羅名句集」(Çāṅgadhara-paddhati)は、二百六十四作家の撰んだ六千行を含むでゐる。又縛羅婆提婆(Vallabhadeva)の集成した「善訓蔓」(Subhāshitāvali)は、三百五十人から引ける三千五百行がある。

四〇二　佛教の教訓詩——「法句經」　右の外巴利語(Pāli)で書かれた、佛敎の「法句經」(Dhammapada)の如きも、佛敎文學中最も美妙崇高な思想を含める聖訓集であつて、諸經律中から拔萃した四百二十三の偈頌より成つてゐる。此經では、無常なる人世を厭ふて離欲出家の身となり、聖道を修めて涅槃(Nirvāṇa)の淨樂を求むべきことを說き、或は三世因果善惡應報の理を示して諸惡莫作衆善奉行と敎へ、特に一切の生物に對するに慈悲仁愛の情を以てすべきことを說いてゐる。法句經全篇を貫ける此慈悲の精神こそは、即ち民族至上主義乃至階級制度等の如き宿弊を一掃し、以て佛敎を法界等流の大宗敎とならしめた所以である。啻に佛敎ばかりではなく、婆羅門敎の文學中にも屢々此四海平等主義が現はれてゐる。猶印度の敎訓詩は、何れも柔和忍辱を旨として悁忿復讐の念を去るべきこと、友愛を重んじ交友を撰擇すべきことなどを說き、或は邪智を斥け眞智(Vidyā)を稱揚してゐる。此外優波尼沙土以來印度思想界を風靡せる輪廻應報の信仰も亦印度の敎訓詩の隨處に現はれてゐる。されば是等の敎訓詩は「善惡の業をなせるものは必らず其果報を享けざる可からず」(Avaçyam eva bhoktavyam kṛitaṃ karma çubhāçubham)と謂ふことを絕對普遍の眞理と認め、吾人が生死海(Saṃsāra)に輪廻して受くる所の運命は、皆これ自己が過去に於てなしたる業(karma)の必然的結果なれば、神意人力共にこれを除くことが出來ぬと說き、宇宙に於ける道德的制裁の的確にして寸毫も誤らぬと及び各人の運命は自己の所造なることを敎へてゐる。

印度文學中に散在してゐる諸の敎訓詩を概觀するに、婆羅門族の抱ける倫理思想は、佛敎のパーリ語聖典に見るが如き組織的の取扱を受けて居らぬ。

是まで述べ來つた所は、古代文學の主要なるものを網羅してゐる。併し科學的文學及び俗語で書かれたる近代の地方文學に就いても猶一言すべき筈なれど、今は古代の純文學だけで筆を止める。

（武田豐四郎）

參考書目

(1) Arthur A. Macdonell; *A History of Sanskrit Literature*, New York, 1900.
(2) Albrecht Weber; *Indische Literaturgeschichte*, Berlin, 1876.
(3) Romesh Chunder Dutt; *A History of Civilisation in Ancient India*, Calcutta, 1891.
(4) Friedrich Max Müller; *History of Ancient Sanskrit Literature*, 1860.
(5) Frazer; *Literary History of India*.
(6) Christian Lassen; *Indische Alterthumskunde*, Bonn, 1847.

(7) John Muir; *Original Sanskrit Texts on the Origin and Progress of the Religion and Institution of India*, 3rd edition, London, 1884.
(8) *Select Works of Horace Hayman Wilson*, London, 1861.
(9) Henry Thomas Colebrooke; *Miscellaneous Essays*, 1873.
(10) P. Regnaud; *Matériaux pour servir à l'histoire de la Philosophie de l'Inde*, Paris, 1876.
(11) *The Works of Sir William Jones*, 1807.
(12) Albrecht Weber; *Indische Studien.*
(13) Leopold von Schröder; *Indiens Literatur und Kultur.*
(14) Dr. Paul Deussen; *Allgemeine Geschichte der Philosophie mit besonderer Berücksichtigung der Religionen.*
vol. II: Allgemeine Einleitung und Philosophie des Veda bis auf die Upanishad's,
vol. II: Die Philosophie der Upanishad's,
vol. III: Die nachvedische Philosophie der Inder.
(15) Sir Monier Williams; *Indian Wisdom*, London, 1875.
(16) *Ânandâçrama Sanskrit Series*, Edited by Pandits of the Anandâçrama, Published by Mahadeva Chimnaji Apte. Nos. 1 to 41, Poona.
(17) *Bibliotheca Indica*.-Messrs Luzac & Company.
(18) *Sacred Books of the East.* Translated by various oriental scholars and edited by F. Max Müller.
vol. I. vol. II. vol. VII. vol. VIII. vol. X. vol. XII. vol. XV. vol. XXII. vol. XXV. vol. XXVI. vol. XXIX. vol. XXX. vol. XXXII. vol. XLI. vol. XLII. vol. XLIII. vol. XLIV. vol. XLV. vol. XLIV.
(19) Carl Cappeller; *A Sanskrit-English Dictionary* Based upon the St. Petersburg Lexicons.
(20) Albrecht Weber; *Indische Skizzen*, Berlin, 1858
(21) Friedrich Schlegel; *On the Language and Wisdom of the Indians*, 1808
(22) Grierson; *The Mediaeval Vernacular Literature of Hindustan*, Vienna, 1888
(23) Rhys Davids; *Buddhism, its History and Literature*, London, 1896.
(24) Grierson; *The Modern Vernacular Literature of Hindustan*, Calcutta, 1889.
(25) Albrecht Weber *Indische Streifen*, Berlin, 1868-1879.

ヘブライ文學

四〇三　國民、國語及び國民性　古代セミチック諸民族の中精神的文明の光輝最明らかであつたのはヘブライ民族である。世界の二大宗教は此民族の胸より湧出でゝ、清新な靈の泉となつて東西文明民族の精神を導いた。彼等は幾千年かの昔には獨立した强固な國家を作つて居たが、二千年この方他の國民の壓制蹂躙の下に其國家は崩潰し、國民は四方に離散して流浪生活を送つておる。

ヘブライ民族の國語は、今は寺院の內に讀誦される經典、新約文の中に、僅に名殘を留めておる。彼等の子孫は今世界の寄食民として、其行く先々の國語を用ゐて用を通じておる。そして彼等は又其借りて吾郷國とした國々の文明を吸收して精神的食糧とし、益其活力を進めて行く。彼等はかく一定の住所なく到る處の國に寄居し乍ら、其原始のまゝの性情――敬虔な宗教的感情を今に保つて失はずにおる。詩人王ダヴヰデの「吾らバビロンの河のほとりに座り、シオンを思出でて涙を流しぬ。われら其途の柳に吾琴をかけたり。そは吾らを虜にせし者吾らに歌を求めたり、吾らを苦しむる者、吾らに己れを歡ばせんとてシオンの歌一つ歌へと言へり。われら外邦に在りていかでかエホバの歌を歌はんや、……」詩篇一三七、一――四と歌つた樣な止みがたき憧れ心は母國を戀ひ其聖都―エルザレムに憧るゝ情となつて幾千年を經て今なほつくる期を知らぬ。同じくダヴヰデの歌に

「エルザレムよ。若し吾れ汝を忘れなば、吾右の手に其巧を忘れしめ給へ。吾れ若し汝を思出でず、若し吾れエルサレムを凡ての歡樂の極となさずば吾舌を吾腭につかしめ給へ」詩篇一三七――五、六

といふが如き情懷は今に至つて彼ら民族の胸に新たなる者で喜びとはた悲しみと、情懷內に動いて神に誠心の祈を致す時、絃の斷れた絃琴のあらしに吹なびけられて鳴るが如くである。而して彼らが飄零流轉他の國民の侮辱と虐遇に忍びつゝ、祖先の遺寶として、苦痛に對する唯一の慰めとして肌を放なさなかつた者は即ち舊約の聖書であつた。

ヘブライ(Hebrai)正しくいへばエブライ(Ebrai)は元來エベル(Eber)――彼方といふ意味のヘブライ語から出て、モーセの第五書にヘブライ民族の住所をEber hannahar（河――ヨルダン河――の彼方）と記したのに本づいておる。けれども聖書に依るとヤコブの子孫の名だといふ「イスラエルの子等」(Bnei Issroël)と呼ばれて居る。彼等はカルデアの原住地を去つて後にカナーンの地方に移住し、フェニシャ人と同根の言語を用ゆるに至つた。けれども文字は依然カルデアの楔形文字を用ゐたのが今日ゐ傳はつておる。

ヘブライ民族の詩歌は專ら宗教的性質を帶び思想文辭兩つながら古代民族の間に優越の地位を占めておる。更に彼らは政治上の劣敗者として常に肉體上に精神上に壓迫苦痛を感じておる、其慷慨悲憤の情緒が自らにして其詩歌に現はれ、之れを讀む者に深い痛ましい印象を與へねば止まざらんとする。宗教的誠實と清淨の感情、これが彼らの文學に通ずる情調である。

四〇四　舊約全書の內容　舊約全書(Old Testament)に收むる所大小二十四種、元は非常に豐かな著作の中から拔萃集錄した者らしく、其中に頗る雜多な種類を含んでおる。其內容を邦譯と英譯の表題に依つて舉げると――

第一、モーセの書五部(律法書)
一、創世紀 Genesis (五〇章)
二、出埃及記 Exodus (四〇章)
三、利未記 Leviticus (二七章)
四、民數紀略 Numeri (三六章)
五、申命記 Deuteronomium (三四章)

第二、前豫言者の書四部
一、約書亞記 Book of Joshua (二四章)
二、士師記 Book of Judge (二一章)
三、撒母耳前、後書 Book of Samuel I&II. (前一三、後二四章)
四、列王紀略、上、下、Book of Kings I&II. (上、二二、下、二五章)

第三、後大豫言者の書四部
一、以賽亞書 Book of Isaiah (六六章)
二、耶利米亞記 Book of Jeremiah (五二章)
三、以西結書 Book of Ezekiel (四八章)

第四、後小豫言者の書十二部
一、何西 Hosea (一四章) 二、約耳 Joel (三章)
三、亞摩士 Amos (九章)
四、阿巴底亞 Obadiah (一章)
五、約拿 Jonah (四章)
六、米迦 Micah (七章) 七、拿翁 Nahum (三章)
八、哈巴谷 Habakkuk (三章)
九、西番雅 Zophaniah (三章)
一〇、哈基 Haggai (二章)
一一、撒加利亞 Zechariah (一四章)
一二、馬拉基 Malachi (四章)

第五、文集
一、詩篇 Psalms of David (一五〇篇)
二、箴言 Proverbs of Solomon (三一章)
三、約百記 Book of Job (四二章)
四、ソロモンの雅歌 Song of Solomon (八章)
五、路得記 Book of Ruth
六、耶利米亞哀歌 Lamentations of Jeremiah (五章)
七、傳道之書 Ecclesiastes of the preacher (一二章)
八、以士帖書 Book of Esther (一〇章)
九、但以理書 Book of Daniel (一二章)
一〇、以士喇書 Book of Ezra (一〇章)
一一、尼希米亞書 Book of Nehemiah (一三章)
一二、歷代志略上、下 Book of Chronicles I&II (上、二九、下、三六章)

以上の分類は、ヘブライ原文の舊約全書の分類の順序に從つた者で現今普通に行はるゝ者とは排列の順序を異にしておる。これは略經典として採收編成された年代順に合つてはおるが、必ずしも製作の年代とは一致して居らぬ。

四〇五　律法書（モーセの五書）　舊約首卷の五書『創世紀』『出エジプト記』『レビ記』『民數紀略』『申命記』（これに『ヨシュア記』を加へて最初の六書といふ）はモーセの五書と稱し、通常其著作と信ぜられておるが、近代の研究は其一時に同一人の手に成らず、古さは紀元前八〇〇年より前四〇〇年以後に亙つて古來より存在した幾多の古典を雜然系統もなく取捨蒐輯した者だといふ事を明にした。モーセの五書に一貫した體裁はユダヤ民族の歷史傳說であるが、作者の目的は歷史傳說の記錄としてよりも、エホバ神の特別な恩寵を受けた民族が、神より傳へた制度典禮を編成記述して後代の子孫の守るべき道を示さうとした者で、篇中に挿んだ幾多の說話は畢竟この制度典禮の起原由來を明にする爲にすぎない。其中『創世紀』は天地創造、人類の起原よりイスラエル族の古史を說き、『出エジプト記』はヨセフの死イスラエル族のエジプトに於ける困阨より流寓二年の後モーセ一族を率ゐてシナイ山に定住する迄を叙し、民族の生活、諸種の社會上道德上宗教上の

儀式律法を記しておる。『レビ記』に至つては全部宗教上の律法を蒐めてある。『民數紀略』は『出エジプト記』を承けて、其後四十年間の歷史を經として、其間に諸種の制度律法を說いておる。最後に『申命記』はイスラエル族が曠野に彷徨した四十年間の終末に屬し主としてモーセが全民族に與へた法律及びこれに關する演說で、その敍述が乾燥な條欵の列擧でなくつて、雄壯な預言者的警告であるのを異彩とする。

四〇六　預言者の書　古代の預言者は——モーセもデボラも、サムエルも皆神靈の妙火をうけて、其民族の信仰を支配し、其運命を導く士師たり、祭司たる者であつた、而して明らかに預言者を以て標榜した最初の偉人はエリヤ（Elijah of Thisbi）である。エリヤの風を追つた後代（前七五〇年以後）の預言者即ちイザヤ、エレミヤ、ナホム等の人々は一切神異を行はず、宗教的恍惚といふ如き靈妙な所作を止めて、只誠心を以て人を動かさんとした。後預言者の書は凡べて預言者の熱烈な演說集であるが、前預言者の書は前のモーセの五書を承けて、イスラエル民族の歷史を敍しておる。只彼れの純客觀的の歷史なるに反して、これは民族の盛衰王家の興亡を敍するに預言者自身の信仰教義を寓した主觀的の歷史なるを異色とする。此中『ヨシュア記』は預言者ヨシュアの行蹟を中心としてユダヤ人のカナーン征服の歷史を敍し、『士師記』はカナーン征服時代の國民的英雄たる士師（Judges）の行蹟を中心として敍したもの、中に「デボラの歌」（Song of Deborah第五章）は古代詩歌の傑作である。『サムエル書』は士師サムエル及びサウル、ダヴィデ二王の行蹟を敍した者で、ヘブライ民族の武力四隣を壓した時代の紀念である。『列王紀略』は前書を承けてダヴィデ王の晩年に筆を起し、ソロモン王が榮華の一生を中心として記し預言者エリヤ、エリシャの言行を錄しておる。ヘブライ民族の歷史の最光彩に富む部分であらう。

ソロモン王の治世（前九七三—三三一頃）を限としてヘブライ民族の國民としての榮光は永へに消失せた。ソロモン死後、イスラエルの王國は南北二朝に分裂して各權力を爭ひ、一方にはアッシリヤの勢威日に加はり、世界統一の理想を掲げて近隣を強壓した。後代預言者の目ざましき活動は此危難の際より始つた。當時まづ國民の墮落を指摘し將に來るべき神罰を預言して峻嚴を極めたのは正義の預言者と呼ばれたアモス（前七五〇頃）である。彼に對して愛の預言者と呼ばれたホセア（前七四〇頃）は稍後れて出て同じく當代社會の腐敗墮落を痛罵して國民の覺醒を促し、エホバは夫、イスラエル人は妻、妻にして其不義非行を改めなば慈愛深きエホバはいつでもこれを允すに吝ならずと說いた。當時又北朝に於てはヘブライ預言者の粹たるイザヤ（前七四〇頃）が出てアッシリヤの附屬とならうか、エジプトと同盟しようかなどといふ一切の俗論を排して、敢然エホバとの同盟を宣明した。奔放の意氣、雄偉の思想、富贍の想像、凡べての點より『イザヤ書』一卷はヘブライ預言文學の頂點を代表する。尚此書にはイザヤ以後の人の預言が組入れられておる。

イザヤと略時代を同くしてミカの預言書が出た。

預言者の警告も其効なく北朝は遂に前七二二年アッシリヤに亡ぼされた。南朝は其後も度々危い所を切拔けてなほ百年の間は細々作ら國祚を維持してゐたが、終に前五八八年アッシリヤに代つて興つたバビロンの爲に亡ぼされエルサレムの神殿は劫掠され、國民の多數はバビロンに移された。ヘブライ民族漂泊の歷史は爰に始まる。此間に立つてエレミヤ（前六〇〇頃）は國家百年の大計の爲にバビロンと誓約を結ぶべきを說き、却つて國民の猜疑を買ひ、胸にみつる愛國の至情も報ひらるゝ事なくして國は亡びた。其預言書の全篇激越悲壯の調を帶びておるのは當然である。エレミヤに先つてナホムあり、アッシリヤがエジプトの首都を陷れて全盛の頂點に達した時（前六六四）に方り、敢然其首都ニネベの滅亡を預言した。又エレミヤと同時代にはハバクク、ゼハニア等の預言書が出た。民族のバビロン囚移時代に出て異邦にある國人の間に精神的指導者となつたのはエゼキエルである。彼の預言の特色は絕對的神權を以て人生の一切を律する祭司的神政の理想を布くに在つた。文章は氣熱に乏しい。

バビロン囚移後五十年、前五三八年に至り、バビロンはペルシア王キルスに亡ぼされ、民族は再び故國に歸る事を許さるゝや、彼らは又破壞されたエルサレム神殿の再建を企てた。けれども內憂外患交も起り、事業捗々しからず。ハガイ、ゼカリヤ等の預言者は此時に出でゝ國民を勵まし、神殿回復の急を說いた。此後ヨエル、オバディアよりマラキ（何れも前五世紀末以後）に至つて終に預言者の聲は亡びた。『ヨナ書』は預言書の中に入つてはおるが、ずつと後世の者（前三世紀頃）で神の惠は異邦の民にも及ぶ事を說いた一種の寓意譚である。

四〇七　舊約の詩歌　舊約全書の二十四書は凡べて純粹の散文を以て書かれておる。元來詩の句格や韻律といふ事はイスラエル人の文字には存在せぬ。後に十一世紀になつて新ユダヤの詩人——ガブリエル（Gabriel）イエフダ（Iehuda de Halevy）モゼス（Moses ben Esra）の如き人々の出づるに及び、當時其民族が支配を受けておたアラビアの句格律格を借りて、詩を作つたのみであつた。かくの如くにして舊約二十四書に收めた詩歌は無數に多い中で僅に二三の散文作らに韻を整へた例と見るべき者は『士師記』十四章十八節のサムソンの語に、"Lule charaschtem be' eglossi, lau mozossem chihossi" （汝ら若わが牝犢をもて耕さゞりし

らば吾が隱語を解得ざるなり）云々の文句などに見える。かく韻律なき詩の音調を整へるのは綴音に依らず、偏に音の低昂——Arsis に依り、言ふにも書くにも弱音符——Neginoth を付してこれを標し大抵一行八個の昂音より成つておる。作詩の上には一定の字數を定めて句を作り、二句又は四句の聯句を連ぬる事などの法があつた。

ヘブライの詩歌は紀元前一〇六七年ユダヤ王國の建設と共に、華咲き、前五三八年キルス（Cyrus）王のバビロン攻略（ユダヤ人歸國）まで其全盛は續いた。殊にダヴィデ（David前一〇〇〇—九七〇頃）ソロモン Solomon（前九七〇—九三一頃）二王の時代は前にもいつた如くヘブライ民族の英雄時代、黃金時代で、其の政治上の勢力は絕頂に達した。此時に至つて久しき昔よりの讐敵たるフィリスチン人を斥けて、長らく精神上にうけた壓迫を脫し光風霽月の氣持になつた。ユダヤ建築の粹を盡した寺院宮殿も盛に起され、音樂もダヴィデ王の細心なる保育の下に發達した。このダヴィデ王が讚美歌歌謠に合せて用ゐた樂器はいろ〳〵あつたらしく、學者もさま〴〵に考證を努めておるが、よくは解らぬ。中で今日に名の傳はる者は Neirel と名けた五絃のリラ、竪琴（Kinor）朝日のさし出づる前の祈禱に呼醒す者は Eols の竪琴で、ダヴィデの擇むだ Ajeleth hashachar（朝紅）の名をも帶びた一絃の樂器である。又漸次に遠方へ響を傳へるヨナの伴奏樂器の Jonath elem それから今日も尚 Synagogue（ユダヤ人の集會）に用ゐる喇叭（Schofar）及び最後に喇叭（Chazozeroth）とこれ丈である。尚 Higgion と唱へた樂器はヴィオリンと同一物であつたらうと推測される。

古來ヘブライ民族の大詩人として第一に數へられるのは勿論ダヴィデとソロモンである。ヘブライ詩歌の最美しい詞華はこの二人によつて世界文學に寄與された。ダヴィデは百餘篇の讚美歌（Psalm）を作りソロモンは雅歌（Songs of Solomon）八章の豐富なる詞藻に加へて、なほ三千の箴言、約一千の歌謠とがソロモンの手に作られたと傳へておる。讚美歌の作者にはダヴィデの外尙アサフ（Asaph）エズラ人エタン（Ethan）及びヘマン（Heman）コラの子（Children of Korah）などの名を傳へておる。『士師記』第五章にのせたデボラの歌（The Song of Deborah）もダヴィデ以前古代ヘブライ詩歌の傑作の一である。

所謂ソロモンの『雅歌』をソロモンの作に非ずとするのは今日では定說になつた。著作の年代も前四世紀の末迄に下げられた。此歌はソロモン王の富貴に從はず、賤しい牧夫の戀人に節を全くしたシュラミの少女の美しい戀愛を歌つたもの豐麗多彩な自然の風物を背景に用つて優婉な牧歌の體を成しておる。ヘブライの詩にしては珍らしく宗教的臭味を帶びぬ純然たる世間的抒情詩で、何れにしてもさう古い作ではない。所謂エレミアの『哀歌』もエレミアの作ではないがエルザレムの廢址（前八八八）に對して感慨を寄せた悲愴の文字で、詩律もよく整つておる。

教訓詩としては『箴言』廿二章、これは祭司預言者以外智者といふ一階級の人々が青年の爲に日常の覺悟、處世の眞理を說いた簡單な格言、教戒を蒐めた者で、古代社會生活の一面がこの中に窺はれる。

舊約の諸書中最文學としての形式を備へ、ヘブライ文學の精華と仰がれる者は『ヨブ記』※である。古來モーゼの作と傳へたが信ずるに足らぬ。餘程後世の作と思はれるがはつきり年代を極める事は出來ぬ、一篇の形式は劇詩の體を爲し、對話は韻文を以て、所作は散文を以て記されておる。『義人は榮え、惡人は亡ぶ、苦痛は罪惡の結果なり』といふ教理に對して、大膽な疑問を提出した者で、正義を重んじ神を畏れて惡に遠かる人であり乍ら非常な困阨痛苦に陷つたヨブを主人公とする。その人生の根本問題に觸れて一部の近代思想と合する所が新奇な形式と相俟つて、今に最も持囃される所以であらう。

四〇八　後代の散文　前にもいつた樣に前五三八年ペルシアの英雄王キルスはバビロン征服後、ユダヤ人に其宗教上の儀式習慣を自由に用ゐる事と其任意エルザレムに歸る事を許した。第二のエルザレム殿堂建造後祭司政治はエズラ、ネヘミヤ等の律法的新ユダヤ教の下に再び榮えた。ヘブライの特有の語法はバビロンの國民と雜居の結果漸く失はれバビロン流寓の土產として他の言語——アラマイ語（Aramaic）は將來され、これが文語として用ゐらるゝ事になつて漸次古代ヘブライ詩歌の消滅を見るに至つた。當代に散文の預言書、歷史書の著作は可なり多く、古代詩歌、律法等の編纂も盛であつた。其れでもハガイもマラキも、もう古代の預言者の樣にもゆるが如き詩歌的情熱はなかつた。エゼキエルの追懷の思をよせた『ダニエル』にもユダヤ民族の情感を動かす力は乏しかつた。

『ダニエル』もエゼキエルと同じく空想的で、神祕的の性傾を表はしたが、更に一層の陰暗な眼を以て將に來らんとする世界の終を預言した。『ダニエル』とは匿名の一作者がダニエルの古話に假托して、シリア王アンオクス・エプファネスの信教壓抑（前一六八頃）に對する不平を謎語の樣な文章で書いた者で、ヘブライの默示文學の先驅をなしておる。『ダニエル書』はもう純粹のヘブライ語で書かれては居らぬ。主としてアラマイの語格を用ゐて書いておる。

平明な文辭を以て書いた詩的小說『エステル書』はベニヤミン族のヤイル（Jair）の子モルデカイ（Mordechai）の養女エステル（Esther）の運命を敍したもので

ある。エステルは前二〇〇年ペルシア、メディアに君臨して、一百二十七州の主たるアルタクセルクセス王(聖書には Ahasuerus（アハシユエラス）) の世、其後離縁された后ワシテの代りに後宮に入つて寵愛を受け王の重臣で、ユダヤ人とは世襲の怨敵なるアマレク人 Haman（ハマン） が國中に住むユダヤの全人口を勦絶せんとする企畫を破り、國中に流寓するユダヤ人の讃歎をうける。書は此始終を叙した者で東方宮廷の活畫圖として興味が多い。著作の年代は前三百年以後であらう。

『エステル』と同樣の小説で『ルツ記』はイスラエル人と結婚したモアブの少婦ルツの事を記しネヘミヤ以後のユダヤ敎が主張した異邦人との雜婚を禁ずる律法に對して反抗の聲を擧げた。

『傳道之書』は現世を虚無と觀じ、中庸節欲により滿足して一生を送るべきを説いた快樂派的人生觀を述べた隨想録の樣な者、これも前三百年以後の作である。

最後にネヘミヤ以後の祭司的律法政治——一種の法王政治の歴史を記した者は『歴代志略』『エズラ記』『ネヘミア記』の三書で、相次いでエルザレム神殿再建以後の律法、制度の歴史を叙してゐる。

以上は舊約文學の極めて粗末な紹介である。舊約以外のアポクリファの文學、基督以後に起つた新約の文學、『タルムード』其他漂泊のユダヤ人の文學など書立てれば際限はないが、專門の研究者以外我々には興味の無い事であるから省いて置く。

（く、ま）

アラビア文學

四〇九　國民の詩の起原　鋸形の灰色の山と山と重り合ひ、南方地平線の際限迄、暗黒色の小石を散布した大平原、他は皆な赤色の荒涼たる大砂漠だ。堆積した砂丘は風に隨つて飛散して飽く迄も旅人を苦しめずには置かない。これは不思議な國、アラビアの風土である。又紅海は無數の緑石（ミリアド）と危險なる暗礁を其下に隱し、印度洋の颶風は平原を縱に荒れ廻る、かと思へば一方ペルシア灣は其細波を寄せてユウフラテス（Euphrates）とチグリス（Tigris）二川に挾まれた沖積地に消滅する。半島の中央には、高い裸體の山が突出し其麓に清泉湧出して町をなし、其周圍に棕櫚の葉が群生して居る。港には、數多の船舶輻輳して波斯棗（デイツ）、珈琲、護謨、拔爾撒謨（バルサム）等を積載して輸出し、時には小量の歐洲物産を交換輸入する。

斯樣な土地に住せる國民は、有史以前から遊牧アラビア人として、家畜を率ひ彼地此地と天幕（黒駱駝の毛にて作れるもの）を携帶して水の湧く所、草の生ずる所、何處ともなく駱駝の脊に跨りて旅行して歩いたもの、時には此旅行は一種の軍事的遠征の性質と變ずる事もある。然し此國民は不思議にも大ペルシア帝國を顚覆し、ローマ帝國の一部を征し、殆ど世界をも一統せんとしたけれども、再び何時となく昔の無智狀態に復歸してしまつた。又都市アラビア人はイスラム以前シリア、カルデアの商人と交はり、又メッカの宮や黒石(Black stone)の靈地參拜にとて參集して來る諸國順禮の人々に接して一種の文明を形成するに至つた。勿論斯かる都市人民の性として狡猾、狐疑、冷酷を恬として少しも怪しまなかつたのであつた。

言語學及人類學上からアラビア人は全アジアに散亂して居るセミチック(Semitic)種族に屬すると言はれて居る。恐らく此半島の民は低部バビロン平原から移住した種族であらうと思ふ。されば彼のアブラハム(Abraham)の子イシマエル(Ishmael)家の子孫とシエバ(Sheba)王カタン(Qahtan)の族との反目、爭鬪は是等移住民をして諸方の山水を跋渉せしめたと同時にアラビア人の詩的天才を刺激した事が多かつただらうと思はれる。長い隊商（カラバン）の物憂い砂漠旅行の間では、駱駝の搖動につれて慣れたものも自ら五體を二つに折らなければならぬし、初めの程のものは眩惑して病氣となることも往々にしてある。此旅行の單調と苦痛を救ふものは、實にアラビア人の間に自然に發生した詩歌であつた。勿論其音節といふも一定して居ないけれども恰度彼の駱駝の歩行の如く、一度は緩く一度は早く、長短二樣のシラブルがアラビア人特有の詩韻を形成したので、これが即ち駱駝追ひの先導等に依つて歌はれたヒダア(Hida)である。然し乍ら此等の詩の多くは砂漠旅行か若しくは戰陣の間に生じたもので、同じくアラビア人の所産とはいへ、寧ろ遊牧アラビア人に依つて歌はれたもので、都市アラビアは南方にてはエジプト、印度、北方にてはシリア、ローマ、ペルシア等の諸國民と交通して、彼れ等の文明を吸收し、言語思想をも採用して新文明を形成するに忙しかつた。此頃、彼のイバッツ(Ibads)といふ奴隷族は其奉ずるキリスト敎の宗旨をアラビア人に傳へると同時にベドヰン旅人と諸種の貨物を交換したのであつた。

アラビア人の最古の詩の殘つて居るものは「ヒジア」(Hija)といふ一種の諷刺詩であつた。是れは多くは當時の迷信と魔術とが歌はれた。其作者は Shair（シヤールー）（預言者の意）聖人と稱された一種の詩人であつた。またギリシアの歴史家に依れば紀元三七二年の頃サラセン(Saracen)のマニア女王がパレスティン、フヰニシア征服の勝利の歌がアラビア人一般の詩歌となつた事があるとは記されてあるものゝ勿論今は傳はらない。さればアラビアの古詩はただ僅かに西暦六世紀の頃ナバテアンの旅行者がシリアから持來してアラビア語に採用した、エストランゼロ・アルハベット(Estrangelo alphabet)となつてからの詩に見る外はないのである。

四一〇　回々敎以前の詩　イスラム前の古詩は七個の『ムアラカット』(Muallaqat 賭け物の意)の集で、後代ハマッド・アル・ラヰヤ(Hammad-al-Rawiya)とも名付けられ亦も當時の根據なき傳説、神話の類を金インキにて認め、メッカの宮に懸け收めたものであつた。ムアラカットの作者はイムルウル・カイス(Imrul Qais)タラフア(Tarafa)ズハイル(Zuhair)ラビド(Labid)アンタラ(Antara)アルハリット・イブン・ヒリサ(Al-Harith ibn Hilliza)等の人々であつた(一説には最後の二人はナビガア(Nabigha)アシア(Asha)の二人であるともいふ)

此時代にはカシイダ(Qasida)は既に一定の詩形を採る樣になつた。イブン・クタイバ(Ibn Qutaiba)に依つて引照された古規に依ればカシイダの作者は第一に古戰場を歌はねばならぬ事、第二に伴侶の者が水と天幕の地を求めて旅に出づる時、別の賦を歌はねばならぬ事、第三には彼等の情事と戀愛に伴なふ苦悶を歌はねばならぬ事。此最後の特質は實に此七作家の一の人放浪王イムルウル・カイス・フンドジの生涯で代表され實現されたものであつた。此王放浪中父の死報に接した時の逸話がある。此時王は旅先で葡萄酒を傾け、骰子を振つて樂んで居たが。

「吾れは百人のベニ・アサド人を殺し、また戰勝の紀念として他の百人の前髮を切り取る。其れ迄は酒と女には手を觸れまじ」

と誓つたといふ事である。

ナビガア・ドビヤニ(Nabigha Dhubiyani)はヒイラの町の人で極めて放恣な宮庭詩人であつた。彼れは好んで當時の皇后の寵を得んとて詩を作り且つ皇女達の知遇を誇つて居たがマホメットの敎旨がアラビア全國を震撼する頃世を去つた。

荒野詩人アンタラは勇士の賞讃の歌として知られたアンタラの物語作者に材料を供給した人で、もと奴隷族の人であつたが其勇敢な行爲に依つてシヤダッドの養子體になつた人である「吾々の劍が戰士の頭蓋骨を打碎かぬ間は磨臼の如くに荒れ廻りたり」とはアンタラの言葉であつた。

此外宮庭詩人タラフアは其妹キリニッと共に熱心な詩作者であつたし、タシム族のアルカマ・イブン・アバダ(Alqama ibn Abada)なども有名であつた。

然し乍ら『ムアラカット』は古代アラビアの詩歌の唯一のものではなかつた。此外六人の詩人の作したディワン(Diwans)アルハベット順の詩韻の集が殘存して居る。これはスペイン・アラビアの學者ユスフ・アル・アラムといふ人に依つて蒐集されて、後ア、ルウルトに依つて出版されたもの、其外此種の集では『ムフアダリヤット』(Mufaddaliyyat)として知られて居る詩集はトルベックに依つて出版され、尚ほボドヰン族の詩集、「ジヤマアラット・アシヤル・アルアラブ」はイブン・ラシクに依つて出版され、又アブ・タアマン(Abu Tammam)の戰爭詩、「ハマサ」(Hamasa)はフライターグに依つて出版され、更にエフ・ラッケルに依つてドイツ譯となつた。アクバアル・アルルサスの盜賊の物語は文法家スッカリに依つて集められ、アブル・フアラヂ・アリアル・イスフアハニイ(Abul-Faraj Ali al-Isfahani)の大册のキタゴ・アル・アガニイ(歌本)はバレアクで印刷に附された廿册物で、ブルンノウ氏は尚ほ歐洲にて發見された記録に依つて尚ほ一册を添加して二十一册とした。尚ほ數種の參考書に加ふるにイスラム以前及びモスレム時代の詩を傳へるフッドハイル族の詩があつた。皆な吾人のアラビア文學の研究に材を供給するものである。

此等ディワンの作者等と相併んで世に顯はれた勇士詩人をも數へる事を忘れてはならない。彼れ等は一面軍人で一面盜賊の類、詩の多くは放恣な荒野生活中の遠征情事に關聯したもの計であつた。其人々の重なる者を擧ぐればダヤビット・イブン・ヤビル・アルフアミ、アブ・ワアブやタバアタラシヤランの友にして健脚者のシヤンフアラ(Shanfara)(シヤランはシヤンフアラの死を惜みて悲壯なる演説を試みたと傳へらる)等である。シヤンフアラの賦は「ラシヤット・アルアラブ」として今尚ほ翻譯されて現存して居る。尚ほ其他ウルウア・イブン・アルヴアルド、ダアルアスバア・アルアドワニイ、また諷刺家のアル・ハデラとイブン・セイヤアルがをり、次ぎにコーラン六十四章最後審判の日(Yaum al-taghabun)の先發者として傳へらるゝ宗敎詩人ウマヤ(Umayya)ムアラカットの作者と併稱せらるゝアルアシヤ、都市詩人としてアルカッムの子カイス(Qais)及び挽歌作者として有名な女詩人アルカンサア(Al-Khansa)(つぶれ鼻の牡牛)等であつた。またヒヂヤズ(Hijaz)の北方の都市に住むユデア人は純然たるアラビア語に依つて彼等の思想を發表して居た。其内の詩人で有名なものは貴族にして詩人なるサマウアル(Samual)及びアルリビイ(Al-Rabi)等で同じ頃基督敎徒も亦詩作に依つて彼等の信仰をアラビアの地に傳へて居た。最も有名なものはアディイ・イブン・ザイド(Adi ibn Zaid)である。

四一一　散文——コーラン　散文として尚ほ未だ傳へる程のものがない。唯だ僅かに夜話(Sumar)として荒野生活の物語や、ナドル・イブン・ハリスの如き物語生業者の傳へたペルシア諸王に關せる物語なぞではないでもないが、未だ文藝上の作品として傳へる程のものがない。唯だ此時代に生れたのは『コーラン』(Koran)である。コーランの生れたのはアラビア文學の誇であつた。

マホメットは貴族でもない軍人でもない低級な市民

家に生れ勃然として一種の醒覺を得て、無智にして遊逸、浪々のアラビア人の間で最も早く神の聲を聞いた人であつた。『コーラン』の內容は頗る亂雜多樣なもので必らずしも是れを文學的作品として見る事は出來ない。其內には彼のユデア、キリスト教から傳化した唯一神教(Monotheism)の宗旨を主として當時の地理、歷史、哲學及び社會の一班が包含されて居る。『コーラン』全體は二部に分たれ、更らに各は百四十四章(Suras)に分れて居る。大部分は押韻ある散文の形で、就中前半は後半より比較的遒逸した詩的形式から出來て居るのは前半ではマホメットは人々に向つて神の聲、眞理唯一の神の聲を聞けと勸めた一種の謎語の樣なもので、後半は全く詩の分子を除去し、平易に且つ反覆して其信者に說く說教の如きものであつたからである。『コーラン』最初の形は極めて混雜した支離滅裂な物であつて其章節の如きも後代多くの文法學者に依つて蒐集され、整頓されて現今の形を取るに至つたのである。カーライルの言ふた如く『コーラン』は實に面白くない者だ。然し同時に『コーラン』は粗雜ではあるが偉人の胸の內にある醱酵素とも見られる。荒廢して居る、訓練されて居ない、讀むことさへ不可能だ。然し飽く迄も表白せずには置かぬ熱烈な意氣込が表はれて居る。アラビア文學の素地は『コーラン』の如く支離滅裂なものであつた、然し其內から何等かの意味を拾得し得る一種の謎語の如きものであつた。

四一二 オメイヤツド朝の文學 彼のムアウィヤ(Muawiya)の反逆が成功し、メジナのカリフは滅亡し、玆に新帝國の首都はアラビアの荒野からダマスクス(Damascus)に移された。元來ダマスクスの地方は自ら古ギリシア、シリアの文明を繼承し、荒野アラビア人の住所を掠略して其土地を都會住民の間に分賦した。此頃の詩人の多くは彼のボドウィンの古賦、カシイダ(Qasida)を摸倣する事に勉めて居る計りで未だ創意ある新詩歌は生れなかつた。然し乍ら新帝國の政治方面の不意の出來事に刺激されて、案外秀逸したる詩歌を此時代に見る事が出來た。

ウマア・イブン・アビ・ラビア(Umar Ibn Abi Rabia)はマホメットの同族なるカライン族の人で、父は商人にして後マホメットの命を奉じて久時南方地方の治者となつて居たが、再び故鄕へ歸つて來た頃、此若い詩人は靑年となつた。生活豐富で且つ性來怠惰なアド・ラビアは長じて其詩技を以て宗族の王妃達を讚美し歡心を買ふ事に勉めた。かくしてアビ・ラビアの情事は遂にダマスカスのカリフ、ウマア二世の忌避する所となり彼れの友アル・アソスと共に捕縛されて其面前に引致された。友アル・アソスは紅海のダアラック島に流され、アビ・ラビアは其危險な詩技を捨てる事を誓はしめられた。詩人も亦當時六十餘歲の老年であつたので其の命に服したが、間もなく七一九年に死んだ。彼の詩の多くは音樂に合はして所謂職業的歌手の間に持て囃され遂にはアラビア全國の歌となるに至つた。

オメイヤッド朝の三詩人として世に唱へらるゝはアクタル(Akhtal)フェラズダク(Ferazdaq)ジャリル(Jarir)である。當時の宮庭皆な詩を愛して居たので朝臣も亦其怒を恐れ各々是等の詩人を賞讚する事を勉めた。「ジャリルは詩を作る事井水を汲むが如く、ファラズダクは岩を斫るが如く、アクタルは讚美の歌と英雄的詩歌に於て秀でゝ居る」といふのは當時此三人を批評した詞であつた。然し後代アッバサイドの文法家は此內アクタルを以て最秀の詩人と稱揚した樣であつた。斯くしてアクタルの名聲がメソポタミアに廣つた頃他の二人はイラクの地方に名をなした。

フェラズダクは熱心な回教信者であつたが性質頗る皮肉にして常に女性の名譽を攻擊する事を樂しみとして居た。其勇敢な詩風にも拘らず本質は極めて臆病な人間であつた。幼時カリフ・アリに勸められて、詩の研究より『コーラン』の研究に一身を委ね『コーラン』全篇を暗誦せぬ間は其足を束縛して歩む事が出來ない樣にした事があつたが性來の性癖は止むる事が出來ず、父の死と共に詩人になつた。其詩で見ると彼は常て繩梯子に依つて宮庭の閨房に潛入し、メジナの學者達のセンセイションを刺激した事があつたとして居る。

ヤマナのジャリルはナジド(Najd)の南方の人でタアミン族(Tamin)に屬する。彼はイラクに住める頃其地の壓制知事アル・ハジヤジ(al-Hajjaj)の歡心を得る事が出來たけれど未だオメイヤットの王達の好意を得る事は出來なかつた。ウマア二世の卽位と同時に彼は詩人として公生涯を送るに至つた。彼れの生涯は實に詩的鬪爭の生涯で其對象は卽ちフェラズダクであつた。二人は同年(七二八年)に死んだ。

此等三大詩人の外同時代の詩人にはドウル・ル マと呼ばれたガイラン・イブン・ウクバ(Ghailan ibn Uqba)と女詩人サイラ・アラクヤリヤ (Laila Alakhyaliyya)の二人であつた。前者の詩風は寧ろ上代の荒野詩人作風と類似したもの、重もに軍陣、征旅の生活を歌つた所に特長があつた。後者は挽歌作者として有名で、歌は重も彼女に戀して其意を果さなかつた男アル・フマイルの紀念の爲めに作つたもので、彼女の父は二人の結婚を拒斥けて、嫉妬深い野卑な他の男を彼女に配したのであつた。尙ほ此期に忘るべからざる人物は記憶に長じたハマッド・イブン・サブル (Hammad ibn Sabir)であつた。彼の異狀な記憶力は古代アラビア詩の數千のスタンザと多數の短詩とを記憶して居たと言はれた程だ。されば前イスラム時代の詩歌と『ムアラカット』の一卷の保存は全然此人の記憶に依るものであつた。

四一三 アッバサイド時代の詩 大ザビの戰鬪はアラビア人に對するペルシア人の復讐であつた。然し不完全な復讐であつた。何故なれば其頃ペルシアは宗教上言語上に於いて抹殺する事の出來ぬアラビア主權の印刻を與へられて居たから。サヽニアン朝の宗教上の條規(アフル・ラマズダの古崇拜の復活)は失はれて唯だ僅かに數個の火祭壇は勝利者にのみ特に許容されて居た。ペルシア人は凡てアラビア語で文章を書いた計りではない。セミチック語の勢力は現今迄も繼續する程優勢であつた。斯く言ふものゝペルシア人は一種の特質を具有して居た。其れは卽ちアリアン特有の精神であつた。印度、ヨウロッパの自由な想像力と發明力、哲學的構想の力は此頃から發達してアラビア文學をカリフ朝の國內に普及のものとならしめた。其れとても蒙古族の襲來と共に消滅の悲運を見るに至つたけれども其樣式の幾分は保存されて居たので、中世のヨウロッパに及ぼした是等の影響は人々の想像するより一層偉大なものであつたに相違がない。カリフのバグダットは荒廢して僅かに其建築物を殘留する計となつた、此頃には昔の長々しいカシイダ(Qasida)の詩風は廢れて僅かに學問上少數の學者の研究に委ねられて居た計りで今や新たなる詩風が發生したのであつた。

アッバサイド時代の詩人としてはタイ族のアブ・タアメン・ハビブ・イブン・シャウス (Abu Tamman Habib ibn Aus)ムタナビイ(Mutanabbi)ペルシア種のツグライ(Tughrai) 其他エジプトの神秘詩人ウマア・イブン・アルファリット(Umar Ibn Al Farid)の人々であつた。

アブ・タアメンは八百〇七年ナペリアス湖畔に生れて、父は藥種屋として非常な旅行好の人であつた。アブタメンは幼時ヒイム(Hims)に於いて初めて詩人アル・ブウトリと逢つた事があつたが此頃から彼れは詩人たるべき素質を備へて居たのであつた。ある確實な研究によれば彼は幼時給仕として回教會堂の水搬者をして居たといふ事である。初めて彼の詩才を發輝するに至つたのはエジプトで、ダマスクスではアラビア詩人の常に得る事を望んで居る保護者を得る事が出來なかつたのである。後アルメニアに旅行して初めて其處の知事の知遇を得、後カリフのアル・マムンの死後バクダットに歸り、皇子アル・ムタシムの寵を得る事が出來たので彼の詩の多くは此皇子及び其臣下に奉獻したものであつた。其後彼は旅行中偶然當時博識の名高きアブルワファ・イブン・サラマ (Abul-wafa ibn Salama)と知己となり此人の圖書館に入る事を許された計でなく此人の激勵はアブタメンをしてアラビアの「金寶」として世に唱へらるゝ『ハマサ』(Hamasa)の編輯に身を委ねしめた。此『ハマサ』は古代よりのアラビアの詩歌を蒐集した珍書である。アブタアメンの文學上の功績は詩としてよりも此れが編纂者としての方が遙かに從つて居るのである。

ムタナビイは水搬者の子で、九〇五年カァファ (Kufa) に生れ、幼時多くはシリアや荒野アラビア人の間に生活して居た。此人間は餘程不思議な人間で、幼少の頃から自ら預言者と稱して、コウランを書いたマホメットの如くユウフラテス河畔のサマアワ (Samawa)の町で彼一流の新宗教を說教して歩いたが間もなくヒイムの總督の將軍リヽの爲めに捕縛されて獄に投ぜられた。然し彼は入獄中眞の信念を獲得した、之は卽ち彼の後半生を修飾した卓越した詩想であつた。彼れは此詩技を以てサイフ・アルダウエの朝に參じて其處で初めて詩人として認めらるゝに至つたものゝ言語學者のカラワイと不和になり、其地を捨てゝ漂泊の身となり、後ペルシアからの歸途ボッドウィンの盜賊の群に身を投じ、間もなくバグダッドより程遠からぬ所で殺されて了つた。彼れの生涯は斯樣に不定亂雜であつたに拘はらず其詩作はアラビア本土の人所でなく歐洲の批評家も亦讚嘆措く能はざるものであつ 。であるから、ディ・アブル・ハッサンはムタナビイの詩が一方賞讚者から當時最秀のものと唱さるゝに拘らず他方誹謗者側からは單に一種野蠻人の聲に過ぎぬと言はるゝ事實は此詩人の功績に重大な意味を與へるものだと言ふた。又「ヤティマト・アルダアル」(Yatimat al-Dahr)の著者のタアアラビイも同じ意味の事を言ふて居る。而して氏は更らに此詩人の技巧を讚嘆して彼の詩の「韻律は其意志に服從し、思想は其の奴僕となりぬ」と評した程であつた。

アブ・イスマイル・ハッサン(Abu Ismail-Hasan)はペルシアの出でイスパハンに生れた。詩人で學者で且つ政治家として有名で、彼れの異名のツグライはツグラ(Tughra)といふ一種の意匠風の文字を得意として居た爲めであつた。ツグライはバグダットで彼の有名なシャンファラの『ラミヤット・アルアラブ』(Lamiyyat al-Arab)に對して「ラミヤット・アルアジヤム」(Lamiyyat al-Ajam)の詩を作つた。これは挽歌であつた。サルタンマスウドは彼れを任じて首府モウスルの大臣としたけれどもマスウドが其兄弟マアムウドの爲めにハマドハンの戰爭で打破られた時、大臣サマイラミの勸告に依り彼れは無神論者の廉を以て彈劾された。彼の詩(Diwans)の多くはマリクシャアの息サルタン・サイド及び大臣ニザム・アルムルクの讚美の歌であつた。東洋研究者ボコック及びゴウリアスはラミヤットのラテン譯を試みた事があつた。

ウマア・イブン・アルファリッドはアラビア神秘詩人の最大なるもので、一一八一年カイロで生れ長いメッカの滯留の後一二三五年同じ都で死んだ。彼れの Diwans は孫のアリイに依つて蒐集されたもので、其詩體はサアフィス (Sufis) の群が其狂喜の狀態を表白す

べき最も適當なものであつた。サアフィスとは萬有神敎的哲學者の群で、彼等は常に葡萄酒を汲み交はし乍ら神の讃美の歌を謠ひ、大アルの胸の内に己れを融合させようとして居るので、其酒に醉ひ詩に熱した瞬間こそ最も人間の神に近接した時だと思惟したのであつた。從つてアルファリッドの賦の中には葡萄酒に與ふる讃美の歌が一つある。

尙ほ當時の詩が以前のアラビアの詩と比較して如何に完全に細密に人間の感情を表白するに適當な迄發達して居たかを知るには當時エジプト政府の秘書官にして宮庭詩人のアル・ムハラビィ(Al-Muhallabi)の詩を見るより便利なものはない。此詩人の作の一はパルマア氏に依つて英譯されて居るが稍當時の進歩した詩風を想見するに足るのである。

又律格を整へたる散文の名家アバ・ムハマッド・アルカシム・アルハリリ(Abû Muhammad al-Qasim al-Hariri)(一〇五四——一一二二)は有名なハリリの諧演集の著者でバフサロに生れた。家族は大商業都市に近接した棕櫚林に蓋はれたマシヤンと呼ぶ僻村に住んで居た。彼れは多少富裕の家に人となつた爲め幼時より安心して自分の研究を進めて行く事が出來た。ハリリの諧演はハマダニィの諧演を摸倣したものであるが却つて先人を後へに摘着せしめた事は明かである。彼れも亦たハマダニィと等しく一種の架空的英雄を假作して居る。其はスラジのアブ・ザイトと言ふて貧窮に苦しみ憔悴はして居るが彼れの雄辯は美麗玉を轉ずるが如くであつたとしてある。佛の有名な東洋語學者セルヴストル・ドサセイはハリリの諧演集の定本とアラビア語の註釋とを著はした。此外ハリリの著述には數種の文法書及び敎訓詩等がある。

四一四 バグダット陷落後の詩人

バグダット陷落後の詩人として最も卓越したものは宮庭詩人イブン・サラヤ・アルヒルリイ(Ibn Saraya al-Hilli)で、一二七八年八月二十七日に生れ一三二六年にバクダットで死んだ。彼の『ウルツクイヅのカシィダ』(Qasida of Urtuqids)は二十九個より成立し、其各の詩は又二十九の對をなして居る。而して又各頭韻と結韻とは同一アルハベットで出來て居る。此詩はウルクイドのマリ・マンスルに獻じたもの、尙ほエジプト訪問の折エジプト王に獻じた賦はパアンスタイン氏に依つてラテンとドイツ譯になつて居る。

尙ほ同時代には詩人としてイブン・ナバタ・ジヤマル・アルデン(Ibn Nabata Jamal al-din 1287-1369)、イブ・ヒッヂヤ(Ibn Hijja 1366-1434)、歷史家としてモスレム帝國史の著者アリ・イブン・タバタバ(Ali Ibn Tabataba 1262-1302)アーマド・アルガブリニ(Ahmad Al-ghabrini 1246-1314)、アブルハッサン・アリ・イブン・アビザル(Abûl-Hasan Ali Ibn Abizar)等の人々があつた。

四一五 物語類——千一夜譚

アラビア文學史上物語類の位置は決して低い物ではない、特に左に掲ぐる二三の物語に至つてはアラビアの凡ての抒情詩、叙事詩が失はれても決して其生命を失ふべきものではない、就中※『アラビア夜話』の如きは其著者及び由來に於いて疑ふべき余地ありとするもアラビアが世界に向つて供給した、質朴であるが價値ある一種の色彩であつた。

(一)、『アラビアン・ナイツ』(Kitab Alfaila wa-lail)は原語の意味は「千一夜譚」で、中央亞細亞の一王が女子の貞操を疑ひ其妻を一夜毎に新にし、一朝毎に妻を殺す事にした。家老の娘は其身を犧牲にして、其妹と共に王の閨房に入り、王の許可を得て、世に不思議な物語をして、其物語の面白さに、王の殘忍な行爲を思ひ止らしむるといふ筋で、其娘の物語は遂に一千一夜に及ぶといふ大部の物語集である。此書の序言の人物の名は大抵ペルシア人であるのはやがて此書の出處を示すもので、歷史家のムスディに依れば『ハザル・アフサナ』(Hazar Afsana 一物語)といふ書は確かにペルシア物であつたのをヘジラの二世紀の頃アラビア語に飜譯したものだといはれて居る。然し更らに此物語の由來に溯ると諸種諸國の物語が混入して出來て居るのは事實だ、現今吾人の手にある『アラビア夜話』は、比較的近代に整頓蒐集されたものであらうと思はれるのは例の「カアマル・アルッアマンと寶玉師の妻」や「マルフと妻ファチマの物語」、更らに「漆工のアブ・キイルと理髮師のアブ・セイル」等のあるので判る。前の二話は十六世紀の頃のもので後の一話は餘程近頃のものであるのだ。次ぎに『アラビア夜話』を歐洲に初めて紹介したのはフランスの東洋學者アントアヌ・ガラン(Antoine galland)の功績であつた其飜譯は一七〇四年と一七〇八年との間に出たので、英譯となつたはレイン(一八四一年)ジョン・ペイン(一八八二——一八八四)、リチアード・バアトン(一八八五——一八八八)等を經て完成した。一つは十三册物で一つは十六册物であつた。

尙ほ此物語の作者に就いては所說紛々であるけれども、當時諸方のカフィよりカフィを徘徊して歩く物語生業者マッダア(Maddah)の作なるべしとせられて居る。

(二)『アンタル物語』(Antar)此物語はヘジラの二世紀の終りの頃(七三九——八三一年)文法家アルアスマイ(Al Asmai)の作で一種の武俠小說である。其部分的の飜譯はテリックハミルトンに依つて英譯された、フランスへ傳はつたのは全篇で、カルダン・ド・カルドム(Cardin de Cardomo)がコンスタンチノープルからパリへ持つて來たのが初めで、其後カッシン・ド・パアセバルが、其に關して東洋雜誌『Journal Asiatique)で論斷し且つ其一部を『東洋節用』(Chrestomathius Orientates)で拔萃した事があつた。其製作年月は不明であるけれども彼は生業的ラウィが此書に保護迄與へた時と大差ないものらしい、從つてアルマスマイの名も恐らく其れが初めだらうと思ふ。時代は現存の本に從へば十字軍時代といふ。『アンタラ物語』は實にカウシン・ド・パアセルの賞讚した樣に「荒野アラビア人の生活は、年代に依つて消滅さるゝ事もなく最も鮮明に描き出されたもの」でアラビアの「イリアッド」とも言はるべき者である。全體の調子合が大デュマがフランスの歷史を書いたのと餘程似て居る。就中アンタルの死の所などはラマルチンの激賞した所で、毒矢に打たれて馬の一跳と共に此英雄が地に倒る、所など殆んど描寫の妙を盡して居るものである。

(三)ベニヒラルの物語。『近代のエジプト人』(Modern Egyptians)といふ趣味ある著述に於いてアラビア學者エドワアド・レイン(Edward Lane)氏は所謂アラビアの物語生業者が休息所の椅子に腰懸けて一條の物語をして居る光景を描寫した。其周圍には近鄉の人人が長い煙管(Chibouks)を口にして其物語を傍聽して居る。氏は次に生業者の物語の內容をも擧げて居るが其一つは即ち前に擧げたアンタルの物語で、尙は一の趣味ある物語は此『ベニ・ヒラル』(Beni Hilal)である。此話はエジプトの有名『アブザイド』の物語と密接の關係がある。『アブザイド』ではアブザイドは其世が軍旅の間に黑い鳥を見て、己れの子も亦彼の鳥の如く勇敢なれと祈り乍ら產み落した黑色の子であつた。父のエミイル・リツクは國人の勸告に依つて此黑色の兒を母と共に國外に追放したが、後に此子アブザイドが其父なる事を知らずに父エミイル・リツクと戰ひ將に双を下さんとする瞬間に母の注意に依つて其れと知るといふ筋なのである。マルテン・ハルトマン氏に依ればベニヒラルの物語は此アブザイドとベニヒラルとが同盟して北アフリカに侵入するといふ後代の物語がボードヰンの歐物語と一所に三十八話の卷物となつて居る。其第一は即ちベニヒラル家の祖先なるジヤビイル・ジュバイルの物語で恰度マホメット時代の事になつて居るが、其れから百年位で丁度アブザイドの母アルカアドラの時になる。次ぎはシヤンマとエミイル・セルハンの物語になるので、エミイル・セルハンは海路歸國の途中キリスト敎徒の海賊に捕はれ、其妻は夫を訪ねて旅立つ、其子サルタン・ハッサンは初めて彼の勇猛なアブザイドと結托して敵を滅ぼし、印度、ジヤラドの僧院を破壞し且つ自國をも制服してエミル・セルハンを救ひ出す。其話の後の部分は即ちサルタン・ハッサンとアブザイドがアフリカ地方へ移民(Taghriba)を初むるといふ所で終を告げて居る。

(四)、『サイフ・ドウル・ヤザン』(Saif Dhûl yazan)エイメン王ホサイフは其母(奴隷族)の爲めに國を追はれ不思議にも子を失つた羚羊に飼はれて生活して居た。長じてムカタテフといふ猛惡な巨人を殺した報酬として其國の王女を得る事になつたが大臣に反對する者があつてサイフに二個の難題を課した。一はアビシニアの恐怖となつて居るサダン・アルザンジィの頭を持ち來る事、一は呪符に依つて守られて居るナイルの歷史を持ち來る事であつた。母はサイフの健在を聞き、飽く迄も其生を斷たんと企てる。サイフは在らゆる妖怪變化と苦鬪し遂に自國に歸り位は其子に讓り家長として隱遁的生活をして居たが偶然な不幸に依て其生涯を終へて了つた。

(五)、ルックマンの寓意譚 此古話の材料は『イソップ物語』として世に知られて居る。著者はルックマンと言はれて居るが、ルックマンは果して何んであるかは不明だ。『コーラン』中ルックマンの章を見ると『吾等はルックマンに智慧を賦へた而して言ふた「神に感謝であれ」とまた「ルックマンは或日其息子に敎へて曰はく、あゝ吾子等よ、眞聖唯一の神を他の神々と混同せしむる勿れ。蓋し偶像崇拜は恐しき罪惡なればなり」としてある。またモスレムの聖書の中には此物語の人物の名が二度迄出て來るけれども果して如何なる人であるか不明である。唯だ要するに狡猾で怜悧な性格の人であつたに違ひがない。斯樣な性格は當代に行はれた國民の智慧を代表したものとしてルックマンは諸種の物語の作者と看做さるゝに至つたのであらうと思ふ。此物語の多くはギリシアからアラビアへ轉化したもので一二九九年の頃パルスウマといふキリスト敎徒の筆に依つてシリアから飜譯されたものらしい。尙は此れと同種の物語は『イソップ物語』としてシリアに殘存して居た。

四一六 近世アラビア文學及び出版物

エジプト、シリア、チュニス若しくはモロッコ等アラビア語の話さる、國々では其後新聞雜誌其他の出版物に依つて多少文學的活動があつた。然し是等の運動の中心は必らずしもアラビア語が正當に話さる、土地ではなくて却つてコンスタンチノープル、パリ等の大都市の一部少數の東洋學者間の研究に過ぎなかつた。アラビア文學は今日では到底世界の文學ではなくなつた。唯だ昔の榮華の夢を回想して其美を誇る計りとなつた。新文明の光は不思議の國アラビアの不思議を除去して了つた、唯だ近代新聞雜誌の出版は文典の研究と共に新なる文藝の新運動を誘起しつ、あるけれども、果してアラビアは過去に生じた樣な文藝の花實を其將來にも擴ひ得べきや否やは大なる疑問である。唯だ玆では近代アラビア文學の新活動の先驅者の仕事を叙述して其將來の發展を待つより外ないのである

ミハイル・イブン・イブラヒム・サバグ(Mikhail ibn

Niqula ibn Ibrahim Sabagh）は一七八七年サント・ジヤンダルクに生れ其青年時代をダマスクスで過し後フランスのエジプト遠征に加はり、軍隊のエジプト退却と共に從歸つた。土耳古のカイロオ府再從入の時氏の家は掠奪され財產も亦た失はれて了つた。同時に氏はパリの帝國圖書館の書記となりセルブストル・ド・サシイの知遇を得詩作も數多あつた。其內にローマ王の誕生日にナポレオン一世に與へた讃美詩はセルヴストル・ド・サシイに飜譯されたし、ルイ十八世に與へた讃美詩はグランジユウレ・ド・ラグランジユ（Grangeret de Lagrange）に依つてフランス語に飜譯された。其外彼は近世アラビアの詩形に關して註釋を加へたものはグランジユウレ・ド・ラグランジユの所有であつたが後フライターク（Freytag）のアラビア韻律論の材料となつた。遺稿としてアラビアの種族史、シリア、エジプトの歷史と其他エジプト、シリアに行はるゝ卑俗アラビア語の文法等がある。また氏と同時に記すべきは氏の友にしてアラビア文學の飜譯に從事したエルユウス・ボグトル（Elyus Bogutor）で氏は屢々フランスの東洋語學校でアラビア語の講義をして居たが一八二八年と二九年にペレヴル（Caussin de Perceval）氏の庇蔭のもとにフランスアラビア語の字典を出版した。

ナコウラ・アル・ツルク（Nakoula al Turk）はギリシアカゾリック敎の信者で一七六三年ダイル・アルカマルで生れ、ドルユウス公（Druse）に奉仕し敎授職（Mua-llim）として將た詩人として此小宮廷の寵を得て居た。晚年明を失して其詩は大抵娘のワルダが筆記したものである。彼れの"Summary of the French Occupation"はアレキサンダア・カルテンに依つて飜譯され、エジプトの勝利に對する感想賦はジ・ジ・マアセル氏に依つて佛譯されて居る。

シヤイク・リフア・アル・タタウイはエジプト軍に法敎師として從ひ、エジプト語學校の學生とパリに派遣されたが晚年カイロオ府の飜譯局長として專ら譯述に從事した。重にフランスの著述をアラビア語に飜譯したので其內最も有名なものは"Nazam al ugud"であつた。創作として"Takhlis al Ibriz"（精練の黃金）といふフランス旅行記があり此外エジプトの愛國詩及びエジプト史等の著があつた。

シヤイク・ナーシフ・イブン・アブダラア・アル ヤゼジ（Shaikh Nasif ibn Abdallah al-yaziji 1800-1871）はカフル・シメイアで生れ、ハリリの講演集を摸擬した"Majma al-bahrain"論理學說の"Qutbul-Sina"ムタナビイ詩註（Al-Arf al-Tayyib）ジヤミアの詩註（Iqd al-juman）其外ディワンの出版とタアリト・アル カマラン（Thalith al-qamarain）と稱する集を出した。

アヽマド・フエアリス・イブン・ヤア スフ・イブン・マンスル・アル シデアク（Ahmad Faris ibn Yusuf ibn Mansir Al-Shidyaq——1880）は頗る多才の人で、文法家にして科學者であつた。文學的事蹟としては"Lafif fi kull mana tarif"の辭典編纂は最も注意すべきものである。

此外詩人のカアハル・エフインディ・アルター、文法家のブウトラス・ビスタニイ（Butrus Bistani）はセントジヨセフ大學のルイス・チエホウ（Louis Cheikho）と共にバイロオトの文學的活動の中心であつて、此內チエホウは六冊の文選（Majani l-Adab）及び古代アラビア詩歌の名句集（Shurra）を著はした。

歷史の方面ではレバノンに於いて盛んに活動した『マロナイト史』の著者イスチファアン・アルドワイヒを初めとしてユスフ・アル シディクの『ゼルサレム史』及びシリア僧ルイス・ラアマニの『中世史』等があつた。

また此地の詩人にブトラス・カラマ、アミン・アル ジユンデー等の人々が居た。

此外新聞雜誌の刊行は餘程注意すべきものである。最近アラビア文學の發達は新聞雜誌の出版である。是等の出版物はアラビア語の研究されて居る東洋語學校の學生又は一部少數學者の研究若くは機關として出版されて居るのが多い。エジプトでは佛語の二新聞"Courrier d'Egypte"と"De Code Egyptienne"が表はれ、ムハマッド・アリは政府の機關として"The Waqai al-Misriyya"を發刊した。三十年後カアリル・アル クウリは一八五八年一月元旦の『新聞の園』をバイロウトで出版したが、一八六〇年にはチユニス政府は機關紙"Al-Raid al-Tunisi"を出し、サライマン・アル バライリはパリで"Al-Barjis"と呼ぶ新聞を發刊してアンタラ物語等、趣味ある文學的記事を掲載し初めた。同時にダマスカスでは、オツトマン官概が"Suriya"の古雜誌を復興させ、アレッポ洲の知事は"Al-Furat"（ユウフラテス）と命名した官報を出し、一八六九年にはセント・ジヨセフ大學の創立者はアル バシイルなる週刊雜誌を發行し初めた。此他ブトラス・アルビスタニイは"Janna"及び"Taqaddum"を發刊したが、是れにはイスカンダア・アルアザルやアディブ・イシヤク等智識ある新進文士が多く執筆した。ブトラス・アルビスタニイの養子カアリル・サルキスは別に"Lisanal-hal"といふ週刊を發行して居た。是等と同時に獨立マロナイトは一八八〇年に"Misbah"を出し、プロテスタントは『曉の明星』を、ムハマッド・アル カアヤミは"Al-Islam"を、古モスレム閣憶は"Al-Adal"を出版した。また女子の讀物としては『少女』（Al-Fatat）『美の鏡』（Mirat al-hasna）『極樂』（al-Firdaus）『信の友』（Anis al-Jalis）等の數種が出た。此等の出版物はアラビア人一般の文學的衝動を刺激して、諸種の出版物が族々として世に出づるに至つた。

四一七 アラビア文學の將來 以上列擧したカイロオ（Cairo）やバイロオト（Beyrout）の運動は新代の青年を激勵して古典の崇拜以外に新たなる道を展開せしむるに充分であらうか？是れは大なる疑問である。困難はアラビア人の精神狀態の不振といふより寧ろ形式的言語の不統一といふに歸する。此二三十年間アラビア人が特に言語に意を用ゐて革新運動を試みたといふ事を聞かない。古い時代の修辭學的形式を破壞してオスマン・トルコ語に代へんとする企圖のあつた事も聞かない。アラビア語は尙ほ依然として古風な誇張と煩瑣とを繰返して居る計りだ。小數の學者はハリ、の頭韻法を用ゐて一般の理解を拒んで居る。斯樣な有樣であるからアラビア文學の發達を希求する人々は先づ如何にしてアラビアの言語は統一され、革新され得るかを考究するより急務はない。今や言語上の新敎主義は世界至る所確立した眞理と認識されて居る。アラビア語が巧に其文法を造り、言語を統一して近代思想の自由な表白に適當な形式を採るに至つたならば、單に文學上の便益といふ計ではなくまた科學上の研究にも尙ほ一層の功果を持來す事が出來るだらうと思ふ。表白の淸明、簡樸といふ事はアラビア文學の進むべき道であらう。若し此事にして一度達せられたならばアラビア文學の未來は光榮あるものだらうと思ふ。

（秋田雨雀）

參考書目

Brockelmann, *Geschichte der Arab. Litteratur* 2 vols (1899-1900)
Clement Huort, *Litterature Arabe* (1902). 英譯はゴッス編世界文學史叢書に收む）
Ahlwardt, *Poesie und Poetik der Araber-Althenrtt.*
Sale, "Colan" (英譯)
Arbuthnot, *Arabic Authors*

ペルシア文學

四一八 ペルシアの國語 ペルシア人は、印度の西に當りて裏海とペルシア灣に包まれたる一大高原の南部、海に臨んで住した國民であつて、バクトリア人、メディア人と共にイラン民族と稱せられて居る、是れ其住する高原の名を以て民族の名稱としたのである。而して其中ペルシア人は勢力最強かりし爲に、後世イラン民族の首領となり、バクトリア人、メディア人を凌ぎて、全民族の文明を自ら負ふに至つたのである。此イラン民族は古代のアーリヤ民族の一であつて、彼の東洋の一大文明國印度と其人種系統を等しくして居るのである。されば其國語は實際のペルシア人の其一隅に棲めるに拘らず殆近世イラン民族全體の言語と酷似して、其根源たるアーリヤ種族の言語の色彩を帶びて居る。抑もイラン民族の言語は印度歐羅巴語の七大支流の內の一であつて、印度語とペルシア語とは、他の物に比して一層親密の關係を有し、相提攜して發達した俤が見ゆるのである。今ペルシア語發展の順序を一瞥すれば、ゼンド及び古バクトリヤ語は最も古くして、後者はバクトリヤ人の住する一小地域に於て用ひられたるもので、前者即ゼンドは彼のイラン民族の奉ずる宗敎なるゾロアステルの敎義を宣說せる神聖なる敎典『アヹスタ』の語である。ゼンドは比較言語學者に取りて重要なる一題目であつて、彼の梵語と共に時代伯仲の間に在り、多く點に於て一層原始的である。さて現存の『アヹスタ』は一人の手に成つたもので無く或一時代に於て數多の人の思想の集積であると言つて差支無い。ツアラトウストラ即敎祖ゾロアステルの作と定める說は完全ではない。何れにしても此の『ゼンド・アヹスタ』は宗敎上の經典ではあるが一面ペルシア文學の最古のものとして見得るのである。ゼンド語の次に說くべきは古ペルシア語であつて中世及び新ペルシア語の先驅となつて居る。此時代にあつても吾人は何等文學上記憶すべき大著述に接し得ないのである新ペルシア語は文法上から言へば中世ペルシア語に比して一層不完全であるが、是れペルシア國語の最後の發達階段にして、其の新ペルシア語としての最も古き形式は彼のフィルドウジによりて表示されて居る。ペルシアの國語は斯く淵源遠くして幾多の變遷推移を經たものであるが今は唯文學史の一部として其の一端を記すのみで、詳細の研究は言語學に讓つて置く。

四一九 ゼンド・アヹスタ 前記の記く『ゼンド、アヹスタ』（Zend Avesta）はツァアラトウストラ即ゾロアステルの敎典であつて、同時にペルシア文學最古の產物である。其の內容は言ふ迄も無くゾロアステル敎の敎義であるが、宇宙に相反對せる屬性を有する二神を立て、一を光明、他を闇黑を以て表示し、人生は此二神相爭ひて各自ら勝らんとして居つて其爭鬪勝敗はやがて宇宙の現象である、されば人は須く闇黑の神に背きて、光明の神に歸すべきである。と說いて居る。茲に於てか夙に印度人と其人種を等しくして、共に自然崇拜を以て彼等の信仰對象として居つたイラン民族は、此敎旨によりて光を尊敬歸仰すること切にして其結果光の源泉たる火を崇拜するの風を生じ其儀式は後世に及びて、彼の宗敎學上著しき例となれる拜火敎を組成したのである。此のゾロアステル敎の旨義は後世文學上幾多の英雄的傳說を生じ、其思想は後代に流れてフィルドウジの傑作の主な一要素となつたのである。拜火の風は永く民族の間に遵奉せられて、劍と貢とコーランとを以て威壓せしマホメットの怪腕にも屈せずして、永く其命脈を保つたのである。

四二〇　近代ペルシア詩の起源　ペルシア國民詩の起源に關しては史家の說區々であつて、第五世紀のササニアン王の一人バラムガル或はバラム五世（Baram四二〇—三九頃）を指名し又は其他にペルシア詩の先驅者を立つる等史家の說は一定しない。されど後代のササニアンの統治者が國民の詩的精神を養成したことは疑無き事實である。併し近代ペルシア詩の眞の創始と確認すべきは第九世紀初期に於けるアバス（Abbäs）である。而かも初期のペルシア文學は其發展頗る遲々たる有樣であつて古來存在せるアラビアの言語及び文學は容易に其基礎を動搖され無かつたが、當時二三の詩人は既に後代ペルシア文學の萠芽を植付けて居つた。彼の怪傑マホメット出でゝ東亞の天地を席捲するの機に際しても尚、國民思想は之れと化合變形せず、最近文壇にまで其思潮を繼續したのである、併し多少マホメットの宗教趣味に同化したる痕跡は二三文學の作物に於て斷片的に認むることが出來る。

四二一　十世紀の文學　十世紀はペルシア文學が稍其の形體を成し來れる時代であるが、當時の作物は多く歌謠體であつて、若干の作家が出たが、其重な者を擧ぐれば、第一にルダギ（Rüdagi）である、彼はその個性を抒情詩及び教訓詩の作に印象した最初の古典的天才である。彼の風格を摸倣した者は麵麭燒を業とした詩人ハッパイ（Hakim Khabbay）である。

マンズール一世は九六三年バラミ（Wazir Balumi に）命じてタバリ（Tabari八二九—九一五）の有名なる『世界史』をアラビヤ語よりペルシアの國語に譯させた。此の『世界史』（Ta'rikhi-Tabari）は近代ペルシアに於ける最初の散文著述であつて、言語學上注目の價あるのみならず、簡易なる古典標本として看過すべからざるものである。次でタバリーの第二の大著『タフシル』（The Tafsir）即回教の聖典『コーラン』の註譯が翻譯されたが、後幾何も無くアヸセンナ（Avicenna 九八〇—一〇三七）出でゝ一進步を與へた。彼はペルシアに生れて寓謠（Wine-Songs）、教訓格言、心理學上の論文を著し、其他哲學科學の小著があつたが、彼の國語で記した"Dānishnāma-i-Alāi"は有名の作である。

四二二　ダーキキ　第十世紀の末に及びてヌーニ世（Nüh II）の奬勵によりて、ペルシア人の愛國的精神は大なる刺戟を受け、イラン王國に對する熱誠の情はあふれて一大國民詩となつた。王はイランの英雄時代の神聖譚及び傳說を集めたる『ハダイナマ』（Khudaina-ma）即所謂「王の書」をペルシア語韻文に翻譯させんとて、ゾロアステルーの信條を奉ぜるダーキキ（Dakiki）を宮廷詩人として採用した。職を執ること幾程も無く倘春秋に富める彼は兇刄に斃されたのである。されど彼れの大思想は此處に終を告げずして、彼が非凡の天才、製作上の手腕は其後繼者を得て、遂に美果を結びペルシヤ文學上に一大光彩を添へた。後繼者とは即ち十、十一世紀に誇りペルシア文學の精華を一身に萃めたフィルドウジ其人である。

四二三　フィルドウジ　フィルドウジ（Firdousi九四〇—一〇二〇）はツウス（Tūs）の郊外シヤダブ（Shadab）の生れで、本名はアブウル、カシム、マンスウル（Abūl Casim Mansūr）と稱し、樂世の人なる意味のフィルドウジは其の雅號である。彼が後年の大事業は既に其の根幹を幼時に於ける教育に發した。彼はアラビア語と其の文學とに造詣深く又古代ペルシア語をも研究したのである。前に述べたるダーキキの遺業を繼いで成れる「王の書」即『シヤアナアマ』（Shahnamah）は其律韻數約六萬に達する完備せるペルシアの歷史である。凡そ叙事詩は何れの國に於ても其國古來の勇士の傳說又は民間の口碑に傳れる歌謠俚諺等の一大集合であるが、此邦に於ても古來幾多の傳說勇士の事蹟が傳承されて居り、此れを蒐集して國民的一大叙事詩を大成せんとして、屢手を着けたる詩人は少くはなかつたが。何れも其結果失敗に歸したる中に獨り、フィルドウジが此の前例を破りて民的一大叙事詩『シヤナアマ』の卷に、古來の傳說奇談歌謠を收めたるは文學史上彼の一大功績である。是れ併しながら作物の性質、材料の完全と共に都合よき事情の下に書かれたる自然の結果と言ふべきである。抑も傳說蒐集の傾向は既に第十五世紀頃に其兆候を呈しアノウシルヴン（Anushirwān）朝の時各地方より古傳記錄を集めて帝室圖書館に保管したことがある。爾來此の企は屢若手せられたが遂にダーキキの手に委せらるゝに至つたのである。然るに彼は業半ならずして暗殺の厄運に會した爲、當時の王マンムウドは自ら手を下して歌謠の大部分を蒐集し且多數の詩人に命じて、其編纂を分擔せしめたが、之れを大成して其業を全ふすべき學識才能を具ふる者を求めて得ず、百方苦心の末遂にフィルドウジ其選に膺じたのである。彼は夙に古代語に深き趣味を有して屢ペルシア詩文に其を翻譯したが、偶ダーキキの訃報を耳にするや、稍々其緒に就ける一大事業の後繼者を以て自ら任じ、抱負甚だ大であつた。而かも彼は自己を宮廷に紹介すべき何等の緣故を有せなかつたが、一友の手を經て其豫期を遂行して、終に三十六歲を以て其一大計畫に着手したのである。彼はツウスの首長アブ、マンズールの保護によりて、奬勵されたが、マアムッド即位するに及び、其技能漸く認められて當時宮廷に於ける七人の詩人と共に、一大叙事詩編輯の任に當つたのである。彼が赴任日尚淺き時一日闔内に遊べる三詩人に會し、詩作の技を競うた折に、彼の「シヤアナアマ」に記せる事蹟によりて珠玉の字句を吐き、其典故を解說して彼等を喫驚せしめ、其博學と辯才とに敬服せしめ、彼等儕輩の輕侮の念を拂ひ去りたる偶然の出來事は、彼の豫期を實現するに少なからぬ助となつたのである。今やマアムッド王は往古の神聖の譚を完成して詩化する處の事業をフィルドウジの手に委し、詩人として重き名譽を彼の頭上に加へた。且つ彼の詩一千句每に一千金を與ふべきことを財務官に命じたが、彼は其を鄕里の溝渠を治むる資に供せんとて、自ら收めなかつた。斯くの如き決心を有せる彼は、一方儕輩の猜疑の爲、其の後半生を窮乏の中に送つたが、其一世の寵遇聲名は隆々として敢て人後に落ち無かつた。併し一時彼の地位は、ハイメンディ其他の敵手の讒誣によりて、甚だ不安であつたが、彼が非凡の才幹は適任なる彼の事業上の位地を支持した、が、此の不祥事に加へて三十七歲の折唯一の兒を失ふの不幸に際會して此大詩人の胸裡に無限の痛恨を與へたのである。斯かる間にも遂に一大事業は完成して、マアムッドは彼に象背に一駄の黃金を與ふべきことを財務官に命じたが、嫉視せる官吏は金に代へて僅に六萬銀を彼に贈つた。彼は受くべき六萬の黃金が賤しき銀に代り、財務官の奸計此處に出たるを聞くや、折柄浴室に在りたる彼は激怒の餘り四萬銀を其を齎せる友と浴室の番者に分ち與へ、殘餘を酒食に蕩盡し去つたのである。此悄報を耳にするやマアムッドは怒りて、其財務官を難詰したが巧に詭辯を弄して王の怒を却てフィルドウジに向けしめた。王は翌朝彼を象に蹂躙せしめんとまで脅したが、此報を知つた彼は遽遽しつゝも翌日王と私邸に會して其罪を辯解して怒を收めしめた、併し餘憤止まず家に歸るや數千詩句の稿を裂きて火に投じ、王の祈禱室の壁に此の言を記した。『マアムッドの宮庭は海に似たり陸地に遠き大海原に眞珠を得ざるは我の過ぞ海の與り知らざる處なり』と、彼の性格粗豪し得るのである。斯くて彼は二十日を經たる後に王の一覽に供せよと、一封の書を其友に托した儘で旅途に上つた。此書は現在『シヤアナアメ』の卷頭に添へられたる、彼の最も強く最深刻な嘲罵を逞ふせる辭であつて、王は之れを見るや非常の怒を發して捕吏を遣したが、詩人は最早安全の域に在りて僅に其綱を免れた。彼は一たびジョルヤンの皇子の擁護の下にあつたが、追れて後バグダッドの一商賈に身を托して、其紹介によりて自作の詩句をトルコ宰相に認識された。去りながらフィルドウジがペルシア固有の拜火教に對し、文筆上少なからず貢獻したる一事は頑陋なる宗教心強きトルコ全般の思想と相容れず、一種の罪惡視せらるゝとを知るや、彼は欲くも自己の地位を保障せんとて、回教の聖典『コーラン』の記錄に基き、ヨゼフヒ、ポチィフアアルが妻との愛を描ける九千句の一大叙事詩を起稿したのである「ユーズフと、ズライカ」（Yūsufva Zulaik-hā）は是である。此は世に多く知られないが確かに一傑作に相違ない。彼は江湖に流寓して漂泊生活幾星霜、齡漸く傾き夕陽將に光輝を收めんとするに及びて、鄕里ツウスに歸つた。一日街上に曾て自らマアムッドを痛罵せし詩句を低唱する兒童の聲を聞くや切なる感情を禁じ得なかつた。家に歸りて後病に臥し幾程も無く八十歲を以て其放縱の生を終つた。ツウスの祭司長は彼を目して異教徒と呼び、一般葬祭の儀を用ゆるを許さなかつたが、其夜フィルドウジが寶冠盛裝して樂土に在るを夢みた爲、遂に正教徒の列に加へて祭儀を許したと傳へられて居る。事は荒唐無價値の談であるが、當時宗教の權威が強かつたとが證せられる。王は彼の死後黃金若干を其遺族に贈つたが拒んで受けなかつた。ツウスの河畔長へに基搖がぬ石堤は彼の事業を永久に標榜する好個の紀念碑である。

四二四　シヤナアマ　前節に於て粗記した如く本書はペルシヤに行はれたる古代よりの物語、勇士の譚其他の傳說を材として、編纂整頓されたる一大叙事詩であつて、又完全なるペルシヤ國史である、抑『シヤナアマ』即「王の書」一卷中に含まれたる思想は遠くゾロアステル教義に其淵源を發して、イラン民族と他の蠻族との鬪爭は勇士の譚を生じ、是等の傳說は文字となりて傳るものは僅少であるが思想は綿々として盡きず、回教入りて擧國其旗下に服する時運に會するも、能く其の命脈を保ち、彼の固有の拜火教と其運命を共にして幾多外國の壓迫を凌ぎ、其の貯へられた潛勢力は遂に第十一世紀に及んで文豪フィルドウジの手を藉りて、『シヤアナアメ』の形を以て發動したのである。而かも此書一卷を組成せる素材の蒐集は既に過去幾世紀間幾人の王者と幾多の詩人の手もて企てられ遂行せられたが、其最後の大成に當りたるはダーキキである、此機運に際し此ダーキキの遺業を受けたるフィルドウジの成業は蓋し當然の結果と言ふべきである。併しながら彼が王の委託を受けて二十年間の長日月を此一事に捧げ、精勵完美を期したる功は永久にペルシア國民の忘るゝ能はざるものであつて、此書の歷史上及び人種學上に益する處多きは、世界學者の等しくフィルドウジに感謝の意を表すべき點である。

『シヤアナアマ』の他尙後代に大作無きにあらざるも、此書の右に出づべき思想と文辭とを有するものは絕無なりと言つて差支無いのである。

フィルドウジ世を去りて後彼の『シヤアナアマ』摸倣の潮流は文壇に横溢し、約四世紀間の長き此光景を繼けて、其間幾多の作家輩出したが何れも先人の道縱を辿のみにて何等淸新の作風には接し無かつた。「バーマーンナーマ」（Bahma-nnamah）ニサミ（Nizami）の「イスカンダルナーマ」（Iskandarnamah）の如き其著しき者である。彼と同代の作家ではウンスリ（Unsuri）が最名高い。

四二五　フィールドウジ以後の詩歌　フィールドウジ以後同じ敍事詩の方面で傑出したのはハチフィ(Hatifi 一五二一歿)である。「タイムール、ナーマ」(Timur-Namb)は其名作だ。賦(Qasaid)の作家としてはアンヴリ(Anvari 一一九五年頃歿)を第一に推す。彼は一面星學の大家であつたが諷刺體の詩に巧みであつた。而して又彼の詩風の影響著しきに從ひ正格な詩形は漸く壞れ、低級な滑稽詩が流行するに至つた。サマルカンドのスザニ（Suzani 一一七四歿）ザカニZakani（一三七〇歿）及びアンヴリの好敵手であつたカーカニ（Khakani 一一九〇歿）などは其詩風の代表者である。

「シヤアナアマ」全卷を通じて散見し得る如く、ペルシア文學の殆全體に其俤を留むるのは、敎訓的及び神秘的要素である。此の思想の醱酵して、哲學的思索と宗敎の色彩とに染みたるものがスーフィ（Sûfie）の萬有神敎主義である。この主義を理想として歌つた哲學的詩人―所謂スーフィ詩人の最古い者はサナイ(Hakim Sanai 一一三〇)で"Hadiqualul Hagiquah"といふ者を書いてゐる。けれど此派で名聲最高き詩人はルーミ（Jalalu'ddin Rumi 一二〇七―七三）で、其名作「マスナヴィ」(Masnavi) は豐麗な思想に富み名句佳草少ならず。陽に回々敎を尊信する倣をして萬有神敎を說いてゐる。サーディ（Sa'di 一一八四―一二九一）は神秘的思想に溺ちた「果園」（Bustan 一二五七）「薔薇園」(Gulistan 一二五八）の二篇を以て知られてゐるが、其國ではむしろ彼の抒情的な賦（オード）の方が評判がよく、抒情詩集(Divan)には情熱の烈しい哀切の作が多いサーディの作と並べ稱すべきはシャビスターリ(Mamud i Shabestari 一三二〇歿）の"Gulshan i Raz"ジュヴィニ（Juvaini 一三三五歿)の"Nigaristan"ヤーミ（Jami 一四八七頃）の"Baharistan"等である。これらの人々は詩歌と散文を一篇中に混用し、假話、比喩譚を用ゐて敎訓を說いてゐる。

此他イラキー（Iraki 一三〇〇年頃歿）の「閃光」、カシミアンワール(Kashm-i-Anwar 一四三四歿)の「神秘の友」ファツタヒ(Fattahi 一四四八歿)の「美と情」等幾多のスーフィ主義の作物がある。

當時又有名なオーマル・カイヤム(Omar (Umar) ibn Khayyam）が出て、快樂（エピキュリアン）派的人生觀に本いて厭世的懷疑的の思想を歌つた。彼の詩は十九世紀の中葉頃イギリスの詩人フィッツゼラルトに飜譯されて以來ヨーロッパで名高くなつた。

抒情詩人としてペルシア第一に位すべきハフィーズHafiz（一三八九頃）のもオーマル・カイヤムと同じくエピキュリアンの精神を歌つてゐるが彼に比して一層の情味を帶び聲調も美しい。ハフィーズに次いではアミルシャーロ（Amir Shahi 一四五三歿)、小ハフィスと稱せらるゝフィカニ（Fsighani 一五一九歿）等其他多數の作家がある。これらの詩人に次いでは最後のクラシック詩人たるジーミ(Jimi 一四一四―九二)は巧みに古詩人の長所を模し、殊にサーディの道德的な調子を復活した。此外十七世紀に於て新抒情詩形を創始したサイフ（Sa'ifZ 一六七七歿)歌謠體に巧なる最近代のハチフ（Hatif 一七八五歿)がある。

四二六　散文　散文小說の作家としてはムハンマッドタッキカン（Muhammad Taqqi Khan 一七四二―五六)が最有名で「想像の園」(Burtan i Khagal)と題する浩瀚な著作を殘した。『ダビスターン』(Dabistan)と稱する書は種々な宗旨宗派に關する價値ある著述である。

戲曲の流布は甚だ遲々たる有樣で、今世紀の始に到りて其完成を見た。此國の戲曲は彼の古代ギリシア及び歐洲中世紀の神秘劇と等しく、其淵源は宗敎上の儀式だ。材は多く回敎に基く悲劇物であつたが、後世は此の狹少の範圍を脫して聖書の譚又はクリストの奇蹟さへもペルシア劇場の舞臺に上された。而かもペルシアの戲曲はむしろ將來に發展の餘地を貯へて居る。

一面史傳の方にも可なりの產物がある。一八六七年より七八年に及んでエリオットの『印度史』が出版され、其他アラビヤ語の原書から譯されたモハメッド歷史の外、地理書、旅行記、人文地理書等にも觀るべき作物がある。ムスタンフィ（Mustaufi 一三四九歿）の"Makhzan-ulgharaib"('Treasure of marvellous matters" 1800) 詩人の傳記等は重なる史傳である。

此他クヴンダミール（Khvandamir）ミルクヴントMirkhvand ジュヴィニ(Juvaini)ヷサーフ(Vassaf)等は歷史家として名ある人々である。

尙近世の散文の名作にナシハヂンシャー（Nasiru-d-din Shah の日記(Rhznamalha)がある。近代ペルシアの俗語で書いて平明な新文體の祖となつた。

參考書目

E. G. Browne, *Literary History of Persia*

西洋

古典文學

ギリシア文學

一　太古の敍事詩

四二七　巡遊伶人の敍事詩　ギリシアに於ても最古の詩歌の形式は、他の多くの國民の場合と等しく、宗敎的のものであつた。けれども此類の詩は後世の作に交つて僅かに其斷片を傳ふるのみである。頌神歌よりやゝ後に始まつて、紀元前八世紀の頃よりこれと並んで神祇又は古英雄の事蹟を歌ふ敍事體の詩が行はれた。けれども、この方は禮拜崇敬の本地が定まつてゐたので、其の歌はれる區域も限られてゐたが、一方には當時の人目を聳動した大事件、例へばトロイの戰爭とか、テーベ附近の戰鬪とかいふものが歌はれて、一層ひろく民間に流布した。有名なる古詩人ホメロスHomeros（イギリス訓名ホーマー、Homer）の敍事詩*『イリアッド』(Iliad)と*『オディセイ』(Odyssey)とは其の好標本である。が、勿論敍事詩はホメロスの詩に創まつたのではない、其の以前から竪琴を奏で歌を口吟んで諸國を遍歷し王侯の宴に侍して興を添ゆるを職業とする巡遊伶人（ミンストレル）と呼ぶ音樂者の一階級が在つた。彼等はみな盲人であるが侯伯からは篤い饗應を受け且つ平藝人として扱はるゝ事なく神明より特殊の力を與へられたものと視られてゐた。例へばかのアガメンノン王がトロイ征討の途に臨み、王妃クリテムネストラの操を看守する爲めに一人の伶人を城內に殘して置いた。故に奸獰のイージスタスも王妃に近づき得なかつたとの傳說もある。

これらの伶人が唄つた短篇卽興の詩が、年を經て漸く敍事詩になつた。敍事詩のギリシア原語(Epos)（エポス）といふは素と神の託宣の義であつた。然るに託宣は恆に六音步の韵語を以て授けられた所からエポスはやがて詩句の意味となり、次で詩の最古の形式たる敍事詩の事となつたのである。而して上に擧げたホメロスの二篇、サイクリック詩人の斷篇、ヘシオッド及びホメロス聖歌など矢張此六音步の詩であつた。

四二八　イリアッドとオディセイ　普通にホメロスと云へば此二篇の詩をさす。『イリアッド』とはイリオン(Ilion)卽ちトロイ(Troy)の歌の義で、トロイ戰爭の大立物アキレース(Achilles)が憤怒を歌つたもの、又『オディセイ』は「オディシウス(Odysseus)の詩」と云ふ意味で、イタカ王のオディシウス及び其子テレマカスの漂浪奇談（アドヴェンチューア）である。以上二篇の中殊に『イリアッド』の如き全體の結構より考ふるに挿話（エピソード）甚だ多きに係らず自ら統一あり均整あり。用語は諧調の妙ある故素朴ながら卑俗に落ちず、神祇や英雄やの功業偉勳煩惱等寫し得て莊重に將た優麗に、アキレースの忿怒、パリスの痛恨、アンドロマックの悲嘆、ヘクトルの壯烈みな强く明確に描き出されてギリシア文藝の特色は十分に發揮された。さて其中には自のづから當時の宗敎政治は勿論社會百般の事業に亙つて弘く記されてある處から、恰もヘブライに於ける聖書（バイブル）の如く後世のあらゆる思想の源となり、宗敎となり、詩人も美術家も哲學者も爲政家も、皆此乳房に養はれたのである。「我が戲曲は悉く

ホメロス

ホメロスが宴の殘物に過ぎず」と揚言したエスキラスを始めギリシヤの戯曲家はみな材料を此處に仰いだ。が尙ほ其後も然かする例は世々に絕えず、下つては十九世紀にイギリスのテニズンの『ユリシーズ』（ローマ人はオディセイをユリシーズと呼んだ）もある。其與へた形式は敍事詩の模型となつた。ミルトンの『失樂園』の如き其書出しからして全く之に倣つてゐる。

四二九　ホメロスの流布　ホメロスの出づる以前、伶人等の時代には唱歌と作歌は一人で兼ねたのである。しかるにホメロスが世に現れてから、伶人は自ら作詩する事を止め、偏へにホメロスを吟唱するのみを以て滿足するやうになつた、世に吟誦者（ラプソヂスト）と呼ばれたが自らはホメーリデー(Homeridae)即ちホーマーの子孫だと云つてゐた。吟誦者の群が起つて後、學校の兒童は正課として之を暗誦し雄辯家は辯論に其佳句を引用し道德家は之を切り拔きて格言を造り各市の人民や貴族の家々は由緖を此處に求めるなど唯一篇の詩歌がかく迄に世間に重んぜられる事はギリシアの他に行きて見る事は出來ずホメロスの詩を他にして聞かない處である。されば前六世紀にはホメロスの吟誦は四年每にあるアセンスの大祭パナテニヤ(Panathenea)の時、賞を懸けて催される事となつた。

そこでホメロスは續々刊行せられた。メッシリヤ、キオス、シノープ、アルゴス、サイプラス、クリート等の各都市各爭つて刊行した。又個人の手に依つて刊行された事も數知れずある。其の中でアンチマクス(Antimachus)リアヌス(Rhianus)アリストテレース等の校訂本は名高いものだ。アリストテレースは其弟子にしてマケドニヤの皇子たるアレキサンドルの爲めに校訂した。處が其後アレキサンドルはバルカン半島を統一した餘勢を以て更にアジアへ攻め登つた時之を珠玉を鏤めた函に容れて常に座右に携へて居たと云ふので特に手函版(Edition of the casket)と呼ばれてゐる。

四三〇　ホメロスの研究　併し乍らホメロスの研究が絕頂に達したのは、アレキサンドリヤの學徒に依てゞある。ゼノドーツス(Zenodotus)アリストファネース(Aristophanes)等は其錚々たるものであるが、就中、アリスタルクス(Aristarchus)は一頭地を拔いてゐた。彼の校訂した者は最も信賴するに足るもので今日あるホメロスの詩は主に之を基礎として出來たのだ。彼は又ホメロス批評の目的を以て學校を建てた、之は紀元二百年頃迄續いたが其間に爲された事業は後世の長い戰亂の爲めに殆んど烏有に歸して終つた。現今存するホメロスの最も古い寫本は「イリアッド」の(Venetus)の卷で紀元十世紀頃のものである。之は十八世紀も末つ方になつてヹニスで、アリスタルクス其他アレキサンドリア學徒の殘した書類の裡から發見されたのだ。又活版本になつた最初はビザンチンの人デメトリウス(Demetrius)の校訂に成るもので一四八八年フイレンチエから出版された。

四三一　ホメロスに關する疑問　由來大天才の生涯（ライフ）には、疑惑の雲が附き纏ふ者である。シエークスピーアも近松も、其傳記は明かでない。況んやこれは三千年から昔の人の事故解らぬも尤もである。併し紀元前一七〇年頃までは何等の疑問も起つたのではないその後になつて始めてヘラニコス(Hellanicos)と云ふ學者が此問題を揭げた。其も唯「イリアッド」の作者と「オデイセイ」の作者が同一人のホメロスであらうかと疑つた丈であつた。其論據は重に兩詩篇の文體の上に横はつてゐたので至極尤もな疑問に過ぎない。然るに此說は當時學者の間に全く容れられなかつた。アリスタルクスさへも之を反駁しセネカの如きは皮肉にも斯る問題を論究すべく人生は餘りに短かしと云つて更に取合はなかつたのである。爾來久しく默殺に附せられてゐた不審は、十八世紀の初めになつて再び其蓋をあげた。イタリア、ナポリの人ギコ(Vico)は其著「新知識綱要」の中に、古代の立法家詩人等の名は悉く表徵なりと論じホメロスは即ち敍事詩の表徵である、多くの詩人のつぎ〳〵に書き足した者で初から一人の手に成つたのではないと云ひ、又「オデイセイ」は「イリアッド」に比して一世紀後の作であると斷定した。而も彼は何等の證據をも有たなかつた。下つて一七九五年ドイツの學者ヲルフ(Friedrich Wolf)は自身校訂のホメロスの序文にギコと略〻同樣の意見を以て其製作の時を疑ひ、僭主ピシストラッスのホメロスを編纂させたと云ふ傳說に附會しホメロスの詩は其時大勢の人の手に成つたのであると推斷した。之が恰度其當時文藝改革運動の波間に漂つてゐたドイツの人心に投じて非常に歡迎された者である。かくて之が端緖となつて種々研究を重ねたが未だにホメロスの僞は明に見へぬ。併し其結果に依ると之は又意外にもヲルフの想像とは大きに違つて來た。第一に彼は普通にホメロスの出たと云はれる時代を以て之を產むべく餘りに原始的だと云つて其六世紀以前の作なる事を否定したが、實際其當時のギリシアは其樣な原始的な狀態ではなかつた。第二にピシストラッス編成の事はキケロ以前の記錄がない。若此事があつたのなら其研究の最も盛んであつたアレキサンドリアの學者等が揃ひも揃つて看過すべき筈もなからう。さればヲルフの說は崩れた。グラスゴー大學でギリシア文學の講座を擔當してゐたジエッブ(Jebb)の說に依ると、「イリアッド」は初め一人の詩人がアキレース憤怒を題として書いたものへ、後からだん〳〵書き加へ書き直して遂にあれ丈けのものに仕上げた。此原詩の「アキレースの憤怒」は大方紀元前九四〇年頃に出來た、一寸した短篇ではなくて規模の大きい敍事詩であつたらうと云ふのである。此說が尤も信ずべきものであらう。兎に角原は一人の作でなくては言語に筆致に將た構想の上に統一均齊がとれまい、但し多くの誦者の口傳へに幾多の年月を經たのであるから其間に於て隨分增補もされ改作もされた。殊に其第十卷の如きは全部後人の挿入した事が明かであると云ふ位であるから學者等が疑ひ惑ふたのも道理である。

偖てホメロスは如何なる人であつたかと云ふに之もかいくれ知れないので其詩句の一節に賴つて琴彈く盲人であつたと云ふものもあるがオルフユウスが全く傳說の詩人である如くホメロス其人に係る諸說も殆んど傳說的である。唯此樣な大詩人が一人あつた事丈けしか解らないのだ。其生地に就いても不明な事は右と同樣でスミルナ(Smyrna)キオス(Chios)コロホン(Colophon)イタカ(Ithaca)ピルス(Pylus)アルゴス(Argos)アセンス等の諸市相爭つて自分の鄕土詩人となさうとした。併し詩の用語を見るに言葉はイオニアのもの乍ら、形は古きイーオリア語である事や、詩の中の諸英雄が專らイーオリアの王侯將相である處から推して、ホメロスの生地は多分イーオリア族の都市であるとは察せられるがギリシヤ本土か殖民地かは決し難い。其在世の年代に就いても諸說紛々たる有樣であるが、英雄に着せた甲冑等から鑑定すると、ミケナイ時代(Mycenean period)の次に來るアッチカ時代(Attice period)の人らしい。

「オデイセイ」の作者と「イリアッド」の作者とが同一人ならぬ事は殆んど學者の定論となつた。兩篇を比較して見ると第一神々に對する見解が違ふ。第二に地理の範圍が擴がつた。第三に文章はよく「イリアッド」を摸倣してあるが文典が後世のものに近づき、第四に語彙が廣く、第五に音振（スタイル）が全く違ふ。そこで一般に之を「イリアッド」の一世紀後に出來たとしてある。而も文學上の價値から云へば「イリアッド」と伯仲の間にあるのであるから、ホメロス程の天才者が二人あつた事となるのである。かくの如き天才者が二人まで出るには其周圍の空氣が詩に於て當時既に餘程進んでゐたに違ひない。

四三二　ヘシオドス　ギリシア古代の詩人の中でホメロスに次で有名なのはヘシオドス Hesiodos (Hesiod)である。彼が在世の年代に就いても色々の說はあるが、史家ヘロドータスに從へば紀元前八六〇年頃、小アジヤのキメ(Cyme)に生れたのである。未だ幼少の頃父ディウス(Dius)に從つてベオチア州のヘリコン山に近きアスクラ村に移住し、山麓で父の群羊を牧しつゝ其詩を製作し始めた、晚年に及びコリンス灣頭のナウパクッス(Naupactus)に行つて其處の土となつた。此邊は惣てドリス人の國であるから其作にも影響を受けた跡が見える。

彼の作として傳はるものに『仕事と日取』(The works and days) 及び『神統記』(Theogny)の二篇がある。古來へシオドスはホメロスと並べ稱せられてゐるが、それは古いと云ふ點で相通ふのみで詩は全く別物である。ヘシオドスのは敎訓詩だ。尤も之は後世の人が散文で用の足るべき敎訓を、殊更道樂に韻語の形式を借りた類ではなく、當時全く散文が世の中に無かつたから何事を書くにも韻語を用ひたのだ。だから哲學者も物理學者も韻語で書く、之が其頃の習はしであつた。

四三三　仕事と日取　は三部に分れ(一)其弟パルセスを戒める言葉、(二)は仕事、(三)暦の日取となつてゐる。父の遺產を頒つ時パルセスは法官に賄して兄よりも多く取つた。兄なる彼は『鷹と鶯』と云ふ比譬談を引き來り、鷹、捉へられたる鶯の非道也と呟くを聞き、之に答へて曰く「强は即ち正義也」と、沒義道なる屁理屈を言ふ邊は其後に出た『イソップ物語』の其れにも似て寸鐵人を刺すの概がある。仕事即ちエルガ(Erga)こそ此詩の眼目で、人の世の始に筆を起し、時代を金、銀、眞鍮、神人、及び鐵の五期に區分し、己は最も澆季の鐵時代に生れ合せて憂目を見るのだ。遠き古への人に在つた美質は既に失せ、今人はアイドス(Aidos)即廉耻とネメシス(Nemesis)即義憤の心のみを止め之に依つて纔に風敎を保つて行くが、其すらいつかは失ふ時が來ようと云つて嘆く。「エルガ」にも又卷末の曆にも日取の吉凶が書いてある。之はギリシア人の如き自然に親しむ民族の好んで取る詩題で

ある試みにレナイオン(Lenaion)の月をよむと。「牡の革を剝くには餘り善くない日ばかりだ。トラキアから北風が吹いて來ると大地も草木も身を閉ぢ伏せる。彼(風)は森林に落ちて松樅の大木を倒す。森の隅から隅まで呻く。野獸も慄ひおのゝき尻尾を股の間へ突つ込む、彼等の背革は毛深いけれど寒さは身の中まで吹き徹す。牡の背革も山羊の髮をも吹き徹す。けれど、藁屋の母御の傍に坐る優しい乙女にあたりはせぬ」。などゝある。

四三四　神統記　は千二十二行の長篇詩、體裁の亂雜な處はあるが矢張古人の云ふ通りヘシオッドの作であらう。其內容は大別して二部となる。初のには天地の開闢を說き後のには神祇人間の成生を記した。素とギリシア人はヘブライ人の神を天地の創造者と考ふるのとは違つて神は寧ろ天地の間から生れたと思つた。又彼等は神の長壽無限なる事を信じたけれど而も神は世の始めから存在したとは思はなかつた。此『神統記』を書くに當りヘシオドスは其話說を當時流布してゐた傳說や民謠から集めた、だから之は其頃の信仰其儘を書いた宗教書とも見る可く、後世藝術の士の好個の教權となつたが、併し其影響はユダヤの聖書印度ペルシアの經典のやうな事はなかつた。

四三五　ヘシオドスとホメロス　終に臨んでヘシオドスとホメロスとを較べて見ると、彼は王侯の宴に侍して想をオリンピアの白雲に走せ、之は天離る寒村に、犂鋤を杖に汗押し拭ひつゝ牧笛の聲を聞く。彼は人生の感興を見、此は浮世の辛酸を嘗め、彼は醉ひて詠め、此は醒めて批評する。故にホメロスは美しくヘシオドスは忠實やかである。ミューズ神ヘリコン山の牧者に現はれて云ふ。「昔多き受造物よ、醜き自然の子よ、我等は誠の如くにて僞はれる多くの事を語るを得、されど又、語らんとすれば誠に眞なる事物をも知れる也」と。此處にてヘシオドスは女神の委託を受けて歌つたのであるから、例令日常生活の平凡なる些事を捉へても「眞」を以て勿論のキーノトとして歌ふ。必竟するにホメロスは理想派の詩人で、ヘシオドスは現實を主とする詩人であつた。同時に彼は神より得たと云ふ教訓をも告げる豫言者風の詩人であつた。

四三六　其後の敍事詩　ヘシオドスの後、紀元前八世紀の半ばより六世紀の半迄に多くの敍事詩が出來た。何れにも右二大詩人の臭ひはあるが之に比肩すべきものはない。殊にトロイに關する傳說や民謠は、イオニアの詩人等に夥しく歌はれ、後世の藝術家の材料となつた。又ホメロスの序曲と稱して誦者が先づホメロスを誦せんとするに臨み、其宴を司る神、又は宴の催さるゝ地の守護神を頌して序曲とする風が行はれたので、此の序曲は惣て三十三篇丈け傳はつた。何れも六音步の中には隨分短いものもある。

二　新詩歌の勃興

四三七　エレジーとアイアンバス　ギリシア文學の有史時代は前五世紀に始まる。前七五〇年より同五〇〇年に至る二百五十年間に於てギリシアは政治上の大變遷に逢つた。ホメロスの頃の王政一度廢れて貴族の寡頭政治となり、寡頭政治倒れて僭主と稱する者各所に起つたが、最後に民主政治流行の世となつた。農工商の庶民と雖も古へ王政の下にあつた時の如く、一英雄下の傀儡に過ぎなかつた狀態から脫して、今では皆自意識ある人となり、下層社會も人文の洽澤を蒙つて美術科學も漸く芽ぐんで來た。されば人の心も漸々反省的に傾き、『イリアッド』には毫も見られなかつた瞑想的な傾向が、『オディセイ』には仄見えたが、ヘシオッドに至つてやゝ著しく、更に此時代に逹しては非常に盛んに顯はれて來た。然し未だ散文は發達の初期にあつたので、人々は其の感想をエレジアック(Elegiac)及びアイアムビック(Iambic)と呼ぶ二個の形式に依つて詩歌に寄せた。

四三八　エレジー句法　此句法は從來敍事詩に用ひられたる長音步句法から轉化して生れた、五步一聯の句法である。凡そ此句法による詩歌は其主題の何たるを問はず、詩人自身が直接其事に關係を有し之に同情する態度を以て歌ひ、而して之は常に宴樂の席上に於てアジアから傳來の、音色やさしきリヂア笛に合はせて唄はれた。エレジーの製作された時期は三つある。初めは軍歌中程は戀歌而して終りは教訓の詩となつた。之が挽歌の意味にのみ用ひられるやうになつたのはアルキロクスの此句法に依つた挽歌が非常に傑出した處から遂にさうなつたのである。

四三九　軍歌、戀歌、教訓詩　(一)軍歌　エペソのカリヌス(Callinus 前六九〇頃生)はエレジー詩人の先驅だ。此頃北狄の蠻族屢々南下して小アジアを掠略し、イオニア人を苦しめるのを憂ひ「起ちて戰へ、生者の死は到底免れざる處、潔く邦國の爲め殉ずる英雄は神の宮殿の賓客たる可し」とて國人を勵まし賊徒の討伐を奬めた。イオニア人チルテイッス(Tyrtaeus)は第二メッセニア戰爭の時、訓戒(Exhortations)數篇を物してスパルタ武士を鼓舞した。其歌は長く彼等の口頭に登り後世までも傳はつた。

(二)戀歌　從來軍歌にばかり用ひられたるエレジー句法を他の新方面に向けたものはミムネルムス(Mimnermus)である。彼は紀元前七世紀の人。コロフォンにて一生を榮華と歡樂の中に終へた。彼の幽婉典雅なるエレジーの何れにも靑春の紅顏去り易きを繰り返し繰り返して嘆いてゐる。頗る東洋的な臭ひがする。

(三)教訓詩　有名なアゼンスの立法家ソロン(Solon 前六三九—五五九)は其後此格法を以て政治風教を歌つたが、其風格頗る高かりし爲め彼以後の詩人で之に倣つた者が澤山あつた。メガラのテオグニス(Theognis 前五四〇頃)ミレトスのフオシリデス(Phocylides of Miletos 前五二〇頃)は其著しきものである、其他コロホンのクセノフアネース(Xenophanes)の如き哲學者も此格法を用ひ、ケオスのシモニデス(Simonides of Ceos 前五五六—四五九頃)の如き墓誌銘を書くに之を用ひた。かくて次に來るアゼンス文學全盛期(四七五—三〇〇)は戲曲の尤も繁昌した時代であるにも拘らずエレジーは其典雅流麗を以て頗る上流社會に行はれ、ツーキディデース、プラトーン、アリストテレース、デモステネース等の如き散文の大家も之を作り、下つてはアレキサンドリアの學者まで尙ほ盛に之を作つた。

四四〇　アイアンバス格法——アルキロクスとヒッポナックス　ギリシアの原語の意味で、アイアンバスは諷刺の「刺」又は、詆毀の「毀」を意味する。この一抑一揚の格法は輕快にして而かも強く銳く人の胸を打つ所があるから、專ら諷刺詩に用ひられた。エレジーと同じくイオニア人の中より出で、共に敍事詩の後抒情詩の前にギリシアの文學史を飾る雙生兒である。

アイアンバス格法を始めて用ひて大名を博した人はアルキロクス(Archilochus of Paros 前七一四—六七六頃)である。彼は詩界に此一生面を開いた爲に、後代のギリシア人から或はホメロスと並稱せられ、或はプラトーンを以て第二の彼也と云ふ者さへあつた。パロス島に生れたイオニア人で後にタソスの植民地へ移つたが、此島人とトラキア人と戰端を開くに至り、彼もタソスの軍隊に加はり軍歌數十篇を作つて士氣を鼓舞した。彼は又妹聟が海に溺れて死んだ時エレジー一篇を草したが、將來エレジーと云へば挽歌の義となつた程の絕品であつた。併し彼の天才の最もよく現はれたのはアイアンバス格法に依る詩であつた。其諷刺詩の爲めに彼と婚約に背いた老父リカンベスの娘ネオブレ及び其姉妹等を憤死せしめたとの話もある。

ヒッポナックス(Hipponax 前五四〇頃)は素とエフエサス(Ephesus)の人、曾て僭主のために故國を追はれクラゾメナエに移住した、然るに其處なる二人の彫工は彼の小柄で容貌の醜いのを見て之を嘲弄した。ヒッポナックス乃ちアイアンバスの最後の一步を揚々格に更へ跛行步法の諷刺詩を作て之に報いた。其他アイアンバスに巧みなる詩人にはアモルガスの人シモニデス(Simonides of Amorgos)がある彼は猛烈に女性の弱點を衝き、「女てふものは神衣を創造するに當り狐や猫の如き獸類の性質を集めて捏ち上げたものだ」と云つた。

四四一　抒情詩の種類　敍事詩は誦讀す可き者であつたが、抒情詩は歌唱すべき性質の者であつた。從つて音樂とは不離の關係を有し、之と結んで一藝術をなしたのである。だから詩人は同時に音樂家でなければならぬ、必竟俘はれたる文學となつて終つたかと云ふに決してさうではなかつた。何となればギリシアの音樂は其頃既に非常の進步をなし、今日用ひられてゐる階音も發明されてゐたし、他の民族は單に旋律を解したにすぎないがギリシア人は夙く和聲の研究を遂してゐた。加之學校に於ては盛んに音樂を習得せしめたから、音樂趣味は一般に行き亙り兒童と雖も琴を手にして歌ひ得たのである。之ならば詩人にして音樂家を兼ねるのも易々たる事だ。其故音樂と云ふ制限が附着したにも拘らず、詩人の數も多く抒情詩其物の範圍も頗る廣かつた。今其種類を擧げれば、凡て神祇の祭にある行列の歌をプロソデイア(Prosodia)特にアポロ神の時は凱歌(Paen)と云ひ其行列が唄ひつゝ踊る場合にはヒポルケム(Hyporchem)バッカス神に奏る歌をディチラム(Dithram)と稱し之れから後の悲劇が生れた、其他祭の際各所に行はる、競技に勝を得た戰士のために謠ふエピニキア(Epinikia)死者を弔ふトレノイ(Threnoi)祝言の歌及び宴會の歌、神祇英雄其他に寄する賦(Ode)童謠等一々數へては日も維れ足らず。

茲に注意すべき現象は詩に對するギリシア諸民族の傾向である。エレジー及びアイアンバスの作者は、只一人のメガラ人テオグニスを例外として、總てみなイオニア人であつた。ドリス人の地にては諷刺詩を作るものは一人もなかつた。かのアルキロクス若し旅行してスパルタ人に夜の宿を借らん事を請ふとも、其諷刺詩人なるを聞かば彼等はすげなく其請を拒むであらう。之に反して抒情詩人はイオニア人の中から一人も出で

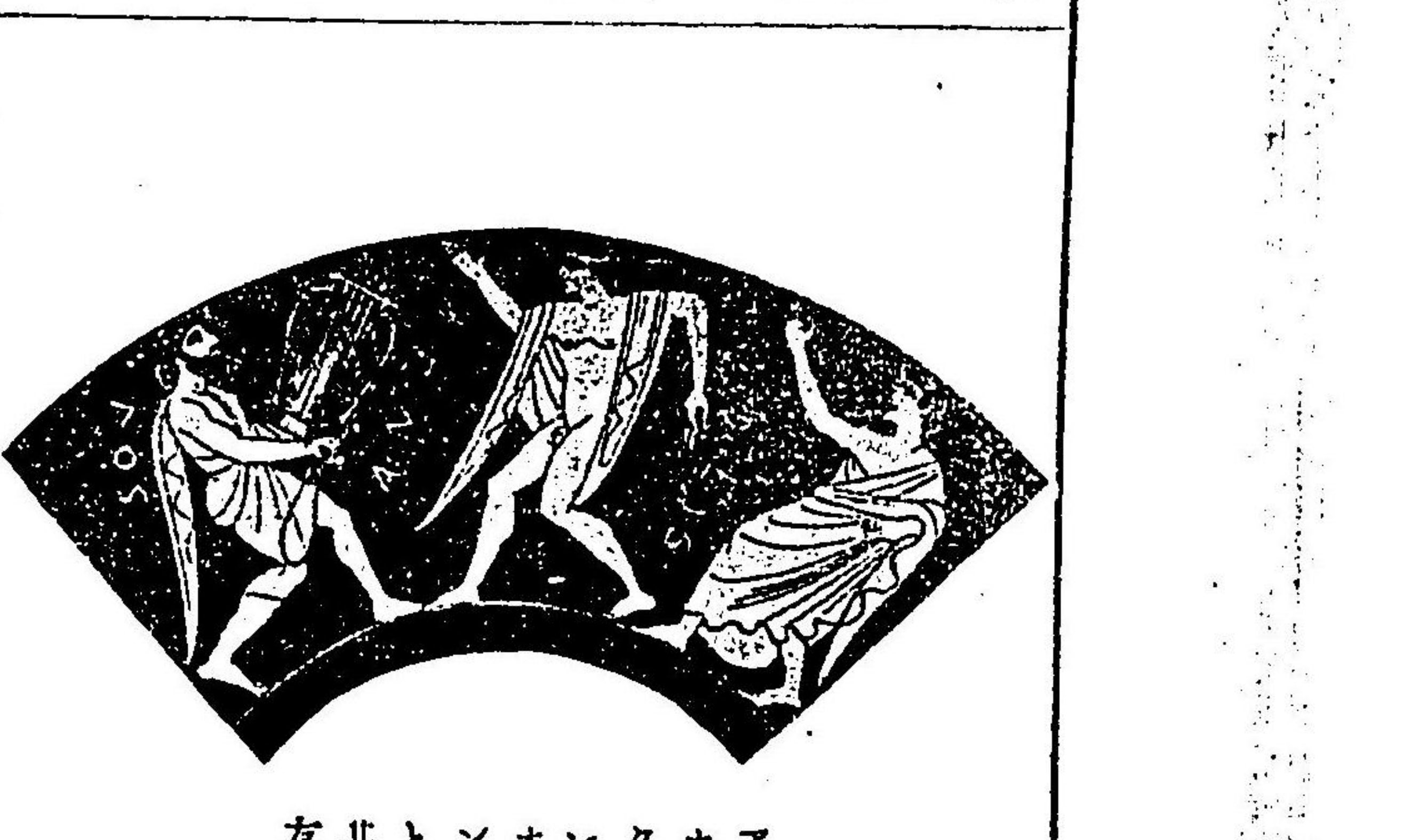
ず總てイーオリア人とドリス人のみであつた。

四四二　イーオリアの抒情詩—サッフオー　レスボスのイーオリヤ人は夙に音樂と詩歌を以て聞えてゐたが、更に外からはピエリカの古詩やリディアの器樂の影響を受け、內には貴族と平民の政爭に盛衰興亡の世態を見るなど、樣々の刺戟を受けたため、地體熱烈奔放な其情緒は遂に抒情詩となつて現はれた。其力の强き事はフランスのトルーヴヅールの戀歌の如く、エニス詩家の色彩のやうであつた。併しイーオリアの方言は藝術の材料となるべく語數未だ乏しく且つ粗野であつたために、ドリス人の詩のやうに弘く行はれない中に早くも衰頽して終つた。

烈々たる情熱を以て美に憧れ之を形式に音響に比類なき調和ある詩歌によせた女詩人はサッフォー(Sappho)だ。女の身で彼程の詩を作つたものはヘラス民族の中に彼女を措いては他に例を見ぬ。彼女がフェーオン(Phaon)を戀ひて報ひられず思ひに燃ゆる胸の焰を冷さんとしてリウカスの絕壁から身を海中に投じたと云ふのは、全く後世に出來た作り話である。サッフォーの當時に於けるレスボスの貴婦人等は他の民族の其と異り頗る自由を得てゐた。彼等は男子と交際するにも自由であつた。彼等は男子のやうに高等敎育をも授けられ、文學美術研究の爲めには俱樂部をも組織してゐた。サッフォーはかゝる貴婦人社會の中に成長した。而してかの天才を以て常に其等詩社詩壇の中心となり多くの門弟を養つてゐた。併し紀元前五九六年頃彼女の友人なる政事家ピッタクスの爲めに異鄕の土となつた。彼女の傳記で知れてゐる處はこれ丈である。其傳記の傳はらざる如く其作物も殆んど傳はらない。今日在るものは數章の斷片のみであるが之を見れば碎けたる寶玉の如くで愈々益々失はれたる他の破片が惜まれる。

其他レスボスの貴族アルケーウス(Alcaeus of Mitylene)サッフォーの門人エリンナ(Erinna)及びダモヒラ等皆イーオリアの抒情詩人である。併し彼等はサッフォーに比べれば月の前の星にすぎぬ、唯一人アナクレオンはサッフォーと光を爭ふものである。

四四三　アナクレオン　は紀元前五三〇年頃に榮へた人、元來テオスのイオニア人でイオニア人の中に人となつたが、其詩の風格は全くイーオリアのものであるから彼は常に文學史家に依つてイーオリア派の中に列せらる。彼の一生はサモス、アゼンス、テッサリー等の宮廷に皇子皇孫を友として派手に送られた。從つて彼は酒、戀、音樂の如き快樂のみを求めて歌つた快樂派の詩人である。此等のものを樂しむ他には人生何等の不平もなく、野心もなく、偶ま靑春の去り易きを嘆いた位の事である。彼の作として今日に傳はるものに頌歌戀歌宴樂歌等數篇あるが美しく花やかな中に折々輕妙な諷刺が見られる。



アナクレオンと其友
（大英博物館所藏古酒杯）

四四四　ドリスの抒情詩　イーオリアの詩の華かにして情の切なる、聞くもの〻心を魅するのとは大に趣を異にし、ドリスの抒情詩は雄大豪放を主として居た。ドリス人のスパルタ國は尙武を以て其國是とし男子は幼少より親の手を離れ國家の手に依つて軍隊生活の如く共同的に發育せられた、だから彼等は個人を國家の中に埋沒する事に馴れ國家の爲めに大業を爲さんとの志はあるが個人的の戀や怨や感想を吐かうとはしなかつた。從てイーオリアの抒情詩はない、イオニアの諷刺詩もない。唯ドリス人の求むる處は國家の大祭に大勢で歌へる樣な歌であつたから遂に其產出した抒情詩は全く個人でない、國家的民族的のものであつた。國家の爲めに殉じた英雄とか國家を守護する神祇の徳を讚ふる歌とか云ふものであつた。而して其等の詩は多人數にて合唱され追々舞踊をも添へられ後のアゼンス文學全盛時代に榮えた演劇戲曲の始めとなつた。併し乍らドリス人は自分達の希望を滿すべく自ら作詩するには幼少より軍隊敎育に仕上げられて來た頭なのでとても彼等には出來なかつた。故にスパルタの王等は外國の音樂家詩人を雇つて料理人に食物の調理を注文する如く、國家的に且つスパルタ風に作るやうに彼等に命じて作られた。アルクマン(Alcman of Sardia 前六七〇—三〇頃)はサルヂアの人、ステシコロス(Stesichorus of Hemera 前六三〇—五五〇頃)はイオニアの植民地に生れ、アリオン(Arion of Methymna 前六二五頃)はレスボスのイーオリア人、シモニデス(Simonides)とバッキリデース(Bacchylides of Ceos 前五一〇—四五〇頃)はイオニア人、而してピンダロス(Pindaros 前五二二—四二二頃)はベーオチア人である。純然たるドリス人はイビコス(Ibycus 前五四〇頃)一人であつたが、而も彼等は凡てドリスの方言を用ひドリスの國風によつて作詩したから一括してドリス抒情詩人と稱せられた。

作詩の目的が個人本位でなかつた爲めか其發達の過程に於ても一人二人飛びはなれた天才を出す事はなかつた。其先驅たるアルクマンは頌歌行列歌婚姻歌等を作り之を人々に謠はせるに當り、右列の歌ストローへ(Strophe)と左列の歌アンチストローへ(Antistrophe)と相交錯せしめ、始めて合唱體抒情詩に藝術的形式を與へた。續いてステシコラス〔之は渾名にて合唱（コーラス）の將軍の義、彼の實名はチキアス(Ticias)であつた〕はアルクマンの定めた形式の末尾に更にエポーデ(Epode)と呼ぶものを附加した、之は謠手が一ツ所に靜止して唄ふ章句である。又たアリオンはバッカス神の祭壇を廻りつゝ唄ふヂチラム謠ひの數を五十人に定めるなどつぎ〳〵に詩形又は謠ふ方式を改良し來つて遂にシモニデスを起した。シモニデスはケオス島に生れたイオニア人で僭王ヒッパルコスの代にアゼンスに來りペルシア戰爭の頃は彼の名聲嘖々として喧傳せられたのである。彼がイオニヤ人で有り乍らイオニヤ人の中心たるアゼンスに居てドリス風の合唱體抒情詩を作つた事は、端なくもイオニア、ドリス二族の詞藻形式を渾然融和せしむる所緣となり、此時よりドリスの抒情詩はギリシア全國民のものとなつた。而して又一方ギリシアの國狀を見れば數回のペルシア戰爭はギリシア方の勝利を以て終を告げ、其結果一にはアジア、シシリヤ等の各植民地にあるヘルラス人に民族的感念を自覺させ、二にはアゼンスを中心として全國に都市の繁昌を促し人々は暗に從來の如き一地方に限られた天才でなく全國民の心情を歌ふべき民族的大天才の出現を待つた。

四四五　ピンダロス　其大天才は即ちピンダロス Pindaros (Pindar of Thebes)である。彼は紀元前五二二年ベーオチアのテーベ市に近き田舍に呱々の聲を擧げた。イーオリア人の間に人となつた。且つ其祖先はスパルタの名家であつたのであるから彼はドリアの血をも受けてゐたのだ。父は逸くも其子の天才を認め彼の乞ふがまゝに少年の頃にアゼンスに上せ當時高名なりし詩人レーソスの許に學ばせた。併し彼は二十歲の時ははや故鄕テーベへ歸つてゐた、其年の競技に勝利を得たるテッサリーの一靑年の爲めに賦を作つたのが彼の名聲を得た始めであつた。爾來再び故鄕を出でず、一意專念詩作の技を磨き、サラミスの海戰にもプラテアの大戰をも殆んど知らず顏にゐた處は恰度ミケランジェロがローマの攻圍もフィレンチエの落城をも顧みずして藝術に沒頭してゐたのと同樣である。而かも彼の名聲は日に月に高くピンダロスの名はギリシア詩界を風靡する勢を示すに至り國家は彼に與ふるにデルヒ祭の聖莚に列する特典を以てした、此時其知己は天下に普ねくシラキユースの僭王ヒエロン、アクラガスのテロン、マケドニアのアレキサンダア等各國の王侯に招かれて其宮廷を歷訪するなど人の羨む境涯に老いて紀元前四四三年七十九歲の高齡を以て歿した。彼は集大成した人である丈けに其作品は實に各方面に亙つて夥しくあつた。頌神歌、凱歌、ヂチラム歌、行列歌、舞蹈歌、頌功詩、挽歌等の他にオリンピア、デルヒ、ネミア、イスマス等に催ほす國祭の競技に勝つた勇士の爲めに作つた勝利の賦

ばかりでも四十四篇ある。雄渾なるドリスの方言を幽麗なイーオリアの形式に盛つたのは其詩の姿であつた、且つ音樂のさま〲なるに合せて詩賦の調べを更へた。音樂が若しドリスのものならば詩を晴明高雅にして材料を神話にとり、イーオリアの音樂ならば詩を急速奔放華麗にし、もし一方がリヂアのものならば詩を妖婉纖細にした。

此大詩人の作品がいかばかり當時のギリシア人の感興を助けたかは、之に附隨する音樂の湮滅した今日、到底想像する事は出來ぬ。よし音樂が傳はつて居たればとて、かの盛んなる祭典のさま勝利者を出した各市民の胸の鼓動、歡呼の聲之れ等を想像に加へなければ彼の詩賦を評する事は出來ぬ。憾む可し古ギリシアの華麗なる生活幽婉なる音樂と共に彼の詩の榮光は長へに此世を去つた。詩其物以外に附屬してゐた榮光は去つたが尙ほ其本文の高調激越なる讃むものをして淸透なる空に日輪の行方を追ふて翔ける鷲の羽音を聞く思ひあらしめる。

かくシモニデスとピンダロスに依つて抒情詩の分野は擴張せられ、文學は玆にはじめて全ギリシア諸族諸民の共に有する理想信仰哀憂歡樂を弘く歌ふやうになり、遂に大勢の赴くところ戲曲演劇を産むに至り。所謂ペリクレース時代のギリシア文藝の全盛期に達した。

三　戲曲

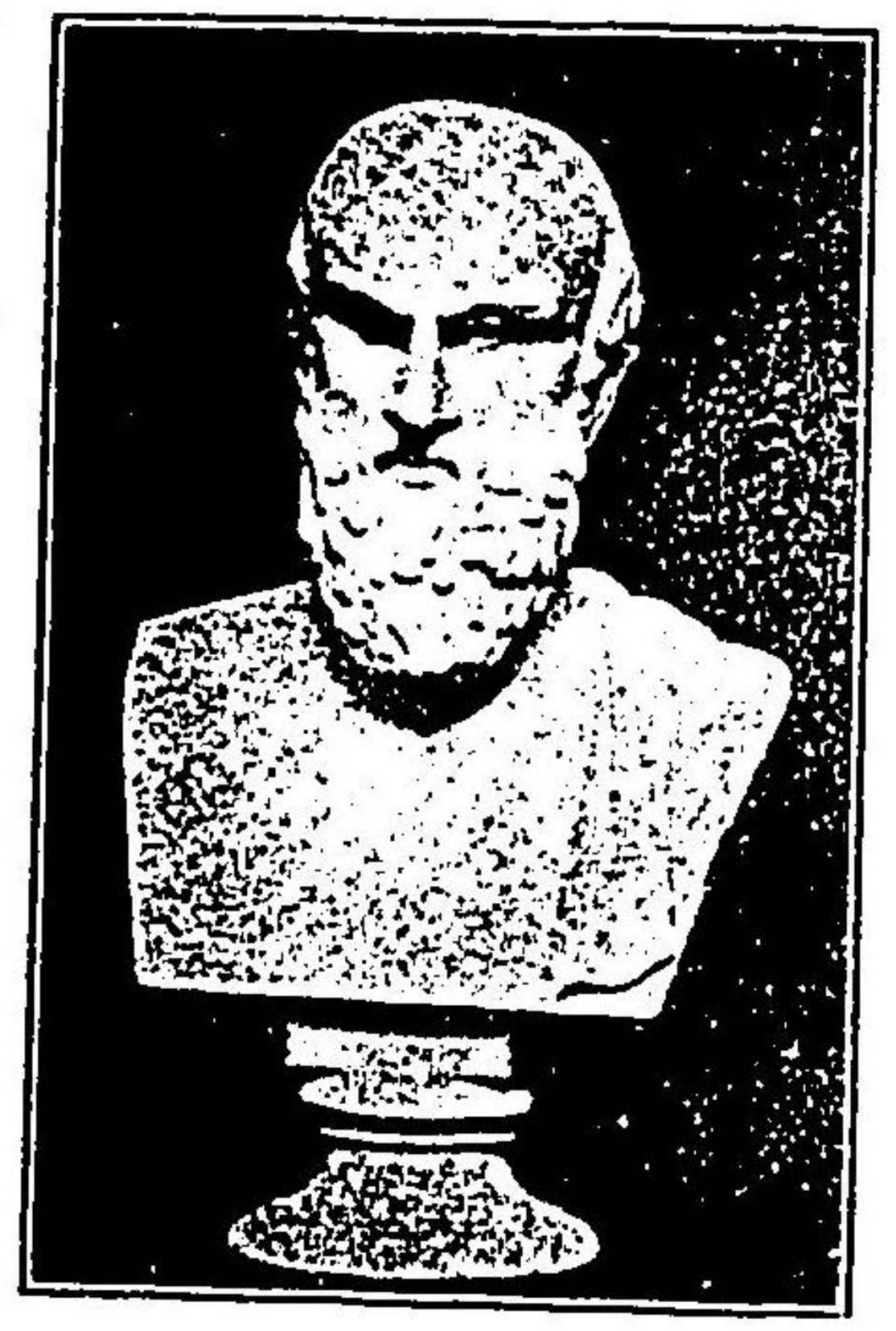
四四六　ギリシア演劇の起源　ドリス人の力に依つて仕上げられた合唱體の抒情詩の中ディオニサス神の頌德詩たるヂチラムは、其神祭に當つて歌ふ方式に種々變遷を來し遂に之に俳優の技さへ加はり有名なるペリクレーズ治世の頃は既に立派な戲曲となりアゼンスに於ては盛んに演劇が行はれるやうになつた。かのヂチラムを後世の其れにも辱ぢぬ戲曲たらしめた功は之をアッチカのイオニア人―アゼンスの市民に歸せねばならぬ。

文學としての戲曲を說かうとするには先づ其演劇としての起原發達から說かねばなるまい。之に就いて委曲の事は別項の「西洋演劇」に讓り玆には唯概略を述べる。さて今ギリシア古劇發達の跡を案ずるに我國の古劇猿樂が神樂から興つたのと殆んど同樣の道を踏むで來てゐる。元來ギリシアの神々は喜怒哀樂とする處凡て人間と異ならず、故に彼等はヘブライ人が畏敬の念を以てエホバ神に對するのとは違つて人々は神々と友達の如く馴れ親んでゐた。で今日は此神明日はかの神と毎日の祭禮に春秋を送つたが、中にも酒神ディオニサス（ローマ名バッカス）は凡て憂愁苦悶を惡み歡喜怡樂を好む神であつたから、現世的な此國人の心によく合したものとみえ、年四回ある其祭典には村々町々の賑ひ夥しく、人々神殿に打寄りバッカス神の偉勳を歌ひ囃してゐたが、其れ丈では物足らず思つたものか、後に到つて合唱隊の中より一人バッカス神又は其使に扮した者を出し、彼此呼應して演ずるやうになつた。之等が劇の萠芽であらう。

四四七　悲劇と喜劇　此頃まだ悲劇喜劇の別はなかつた。悲劇とはギリシアの原語にて山羊の歌の義である、之はディオニサスの祭に神前に供する山羊の犧牲から其名を得たのであらう。又喜劇とはもと在鄕歌の意味で、矢張ディオニサスの祭典に催された滑稽諧謔の方面に付けた名である。要するに兩方ともヂチラムを幹として長年月の間に自づと異なる方面へ伸びた二つの枝で、恰も神樂の後能狂言の二方面を生じたのと同樣である。

悲劇の源となつたヂチラム（ディオニサス頌德の詩）も抒情詩人アリオンが出て其伶人の數を五十人に規定する前までは唯一管の笛に合せて、多勢寄集つて歌ひ囃す分の事、何と定つた形もなく極めて幼稚なものであつた。アリオンの後テスピス（Thespis of Attica 前五五〇頃）が出て大改革を加へた。彼は合唱隊の中からヒポクリット（Hypocrites）即ち應答者と云ふものを選出し、之にやゝ演技めいた科をさせ、且つ時々合唱の音頭取と問答をさせた。彼は又衣裝や面を用ひはじめ、此時漸く幼稚ながら悲劇の形式が出來た。テスピスの後ヂチラム唄ひの方式に心を用ひた詩人にはケーリルス（Choerilus）プラチヌス（Pratinus）フリニクス（Phrynichus）等がある。就中フリニクスは合唱隊を幾つにも小分して少女の隊、老人の隊など云ふものを工夫し出したが、之は此後エスキラス、ソフォークレース等の時代の演劇に著しい效果を與へた。

四四八　悲劇の創始者―エスキラス　以上述べた通りヂチラムは多くの詩人の手を經て次第〱に進められて來たが未だ之に對つて劇と云ふ名を許す事は出來ぬ。さらば眞の劇が起つたのは誰々の時であるか。かのテスピスが一座を率ひて車上にて演劇しつゝ諸國を廻つたと云ふ根もない傳說に賴つて、之に創始者の名譽を捧げる譯には行かぬ。どうしても其名譽を受く可き人はアゼンス人エスキラス（Aeschylus前五二五―四五六）でなければならぬ。彼が始めて悲劇に指を染めたのは恰も紀元前五〇〇年彼が二十五才の時でプラチヌスと賞を爭つた時である。併し其後の勁敵はむしろフリニクスであつたがこの人のヂチラムもまだ幼稚で到底劇とは云はれなかつた。エスキラスの作物を一見すると技巧に依らず、むしろ神興に依つて成されたやうに思はれるが、實際彼は技巧家としても綿密な頭腦を有つてゐた。從來のヂチラムでは一人の俳優と合唱隊の音頭取との對話はあるが先づ合唱と音樂とが主であつた。然るに彼は俳優を二人とし合唱と對話とを引離し對話ばかりで一幕を演じ得るやうにし、合唱は其を補助する丈けの者となした。爰に於てかヂチラムは敍事的抒情詩の境涯を脫して劇となつたのである其他面の事や大小道具書割などにも種々の工夫を出し、彼に依つて整つたもあり彼に依つて極められたものもあるが、彼以後に於て改められたとは至つて鮮ない。



エスキラス

四四九　エスキラスの戲曲　ギリシア詩人の多作なる事は眞に驚くべきもので演劇全盛期に出たソフォークレーズは百十三篇、ユーリピデースは九十二篇ある。さればエスキラスも其四十年間の詩作生活に於て數多の半羊神劇の他に七十篇の悲劇を作つたと云ふ。併し二千餘年後の今日殘つて居るのは僅か七篇にすぎぬ。即ち『七將テーベ攻』(Seven against Thebes)『繫縛プロメシウス』(Prometheus Bound)『懇願娘』(Suppliants)『ペルシア人』(Persoe)『アガメンノン』(Agamemnon)、『コエーフォリ』(Choephori) 及び『ユーメニデース』(Eumenides)である。其中終に數へた三篇は三篇相連關するもので、之れを三部曲(Torilogy)と云ふ。此三部曲は彼の死に先だつ二年、即ち紀元前四五八年にアゼンスに於て演ぜられた。

彼の戲曲は巨大なる塑像の如き趣がある。惣て全體の均齊に重きを置き、性格や趣向の細々しい處は殆んど顧みずに書き下したやうに見える。自然と人生とに

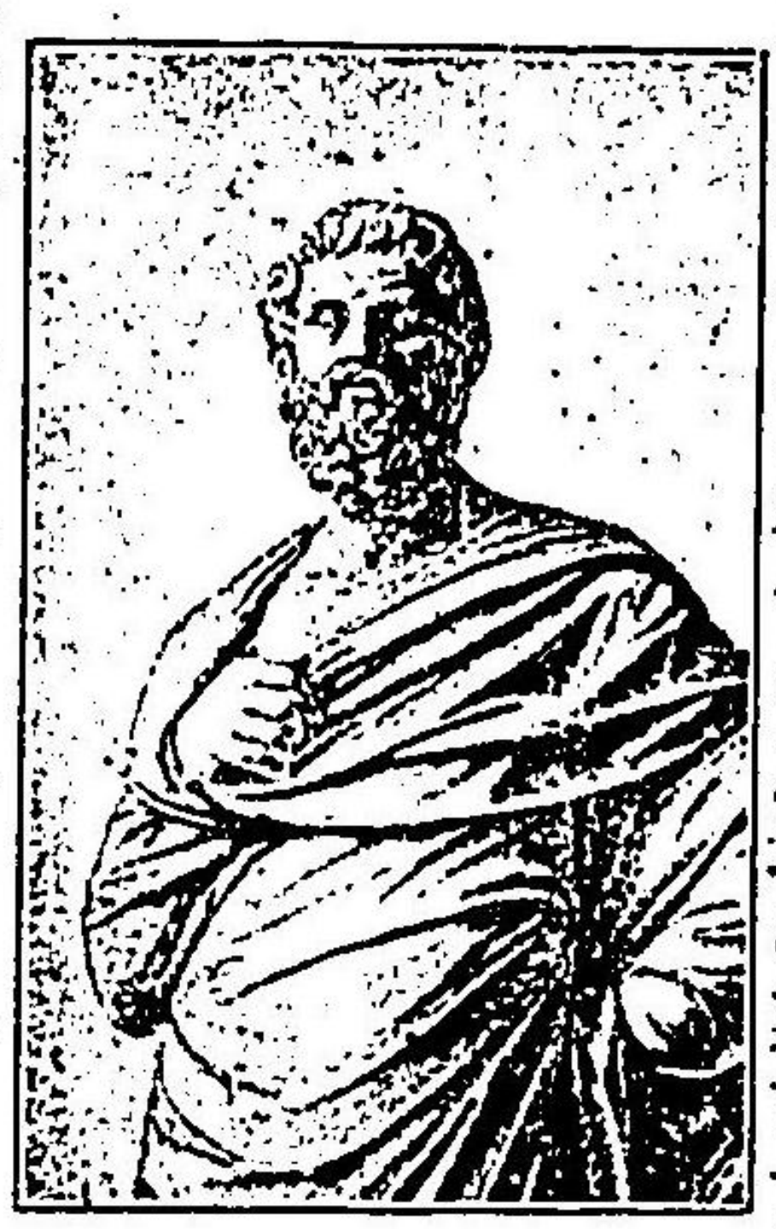
對する態度はアジア人の如く深邃で、之を神祕幽遠なるものとして描き出さうと勉めた。ソフォークレースやユーリピデースが好んで一篇の動機に用ひた戀愛をも、彼は主たる要素としないで、却て罪とか呪ひとか云ふものに依つて全篇を貫かせたのも其爲めではなからうか。

四五〇　運命の觀念　彼の戲曲は自らも云つた通り其材料をホメロスの中から得た。從つて其取扱ふ戲曲中の人物は英雄若しくは神祇であつたが、彼の宗敎思想は普通人の奉ずるものよりは甚だ高かつたから其神々も道德的に高く意味の深いものとなつた。そこで先づ彼の宗敎道德の根本觀念となつたものはと、考へると、第一に因果應報の觀念で、第二に宿命論であつた。勿論是等の觀念は意識して戲曲の中に含められたのではないが、彼の思想の中に潛んで居たから自然其作物に現はれた譯だ。「蒔く者は苅る」とか「父酸き葡萄を好む時は其子等の齒は疎ら也」と云ふ如き因果應報の觀念は、當時のアゼンス人の中に一般に在つたのである。併し乍ら實際世の中を見ると果して因果律の通りに行つてゐるか、短かき人生の經驗を以て見れば善人の善果を得ずして終り、惡人の惡報を受くるに至らずして終る事が甚だ多い。之れ心淸く多恨なる詩人をして「あはれ神は盲目也、盲ひにして邪まなる力也」との怨聲を發せしむる所以である。世上の事が因果律ばかりで行かぬ事は獨り之に止まらぬ。人間は凡そ如何なる人と雖も罪惡を犯さぬものはない。若し嚴密なる應報があるとすれば人間は殆んど一日も生存する事はならなくならう。エスキラスは此嚴峻な因果應報を堅く信じた。併し彼は之ればかりでは世上の事の蔽ひ盡せぬのを見たものか、更に宿命說を携へ來つて其不足を補つた。惡を爲て罪せられるのは當然である。併し惡を重ねて罰せられぬ事のあるのは運命のなす處であると云ふのだ。而して又彼の應報思想は物凄くも又怖ろしい位嚴しいので、一人の罪は子々孫々に至るまで祟りをなして己れ先づ神意に背いて罰せられ、其子其報ひとして又罪を犯すやうになり其罪に依つて罰を受け其子も其子もと引續く。

四五一　エスキラスの晚年　彼は啻にアゼンス一都の詩人たるのみならず、ギリシア全國民の詩人であつた。其處女作を出してから三年めに起つたペルシアとの戰爭には、慓悍なる其兄アメイニアスと共に軍に從ひ、マラトン、サラミス、プラテーア等に轉戰し、自からも常に作詩よりは寧ろ其時の戰功を誇つてゐた。紀元前四七二年には、有名なる『ペルシア人』(Persoe)を物してヘラス民族の武勇を讚へ、國家の光榮ある前途を祝福した。曰く「行け、ギリシアの子等、行きて汝の國家を救へ、汝の妻子と祖宗の奧津城と祖宗の傳へし神々の宮居を救へ。君聞かずやダライアスの尊靈墳墓より起つて、神々今やクセルクセスの不遜を罰せんとすと叫ぶを」と。彼は將に天下の勢力たらんとして奮鬪しつゝあつた若きギリシアの民衆の爲めに、其理想たる英雄的事業を歌つた。然るに新興國の常として當時ギリシアの思潮の流るゝ事の速かなる、恰も一瀉千里の勢であつた處から、僅か十年後の新國民はエスキラスの歌ふ所を以て滿足しなくなつた。於是彼はアゼンスを去つてイタリアに行きシラキユースの僭主ヒエロンの城中に晚年を送り紀元前四五六年シシリー島のゲラで沒した。享年六十九。

四五二　ソフォークレース　紀元前四六八年のディオニサス祭に當時劇壇に双ぶものなき老大家エスキラスと月桂冠を爭つて克ち、爾來新代の詩人として名聲一世を掩ふたものは、其時廿七歲の一靑年ソフォークレース(Sophocles)であつた。

紀元前四九五年此稀世の才人が呱々の聲をあげたるコロンナスの地はアゼンスの近郊であるから、住む人も都の手ぶりを見聞きして文明の光には浴してゐた。而かも其風光は都會の塵埃に染まず、此人の『エディポス、コロンナス』にもある通り、其所には蔦葛生ひ懸れる並木道あり、その綠蔭には老鶯たえず玉音を弄ぶ。其所にはたそがれにほの白き水仙の花咲き、旭日にはわけてけやけきサフランの花開く。且つ其所には水晶を溶いたやうな泉流が涓々として流れてゐる。此秀麗なる山水の間に生成した麒麟兒はその容顏の美麗なる其音聲の淸爽なる實に造化翁が其技工の祕を盡し妙を極めて制作した好個の藝術的作品の如くに見えた。されば其十六才の時過ぎサラミスの海戰にギリシア軍の大捷を得たるに會ひ、其戰捷紀念碑の前で凱歌を唄ふ群童の音頭取に撰ばれた事もある。之より彼は當時音樂の大家たりしラムプラスの門に入つて益々研鑽する處あり、遂に三十に足らぬ若雅の身を以てエスキラスと競爭するに至つたのである。此時程審査に困難した事はない。一方は舊時代を代表し舊思想の政黨を後援に有つてゐる老大家で、一方は又新時代を謳歌する新時代の天才者である。そこで時のアルコン職は其審判を恰度トラキアから凱旋した名譽の將軍シモンに諮り、シモンも他の九人の將軍等と合議の末、月桂冠は遂にソフォークレースに落ちたのである。



ソフォークレース

爾來彼の身邊には榮光の輝く如く萬人の尊敬を享け富貴顯達にして一生を終つた。競技に臨んで一等の賞を受くる事實に二十回、二等を受けた事は僅かに一回、二等以下に落ちた事は無い。二等を受けた時の作は即ち『エディポス王』で今日の人が仰いで以てギリシャ戲曲の逸品とする大傑作である。四四〇年に『アンチゴーネ』を出すや、衆望を負つてサモスの賊徒征討軍十將の其一人に擧げられペリクレース等と席を列ねた。

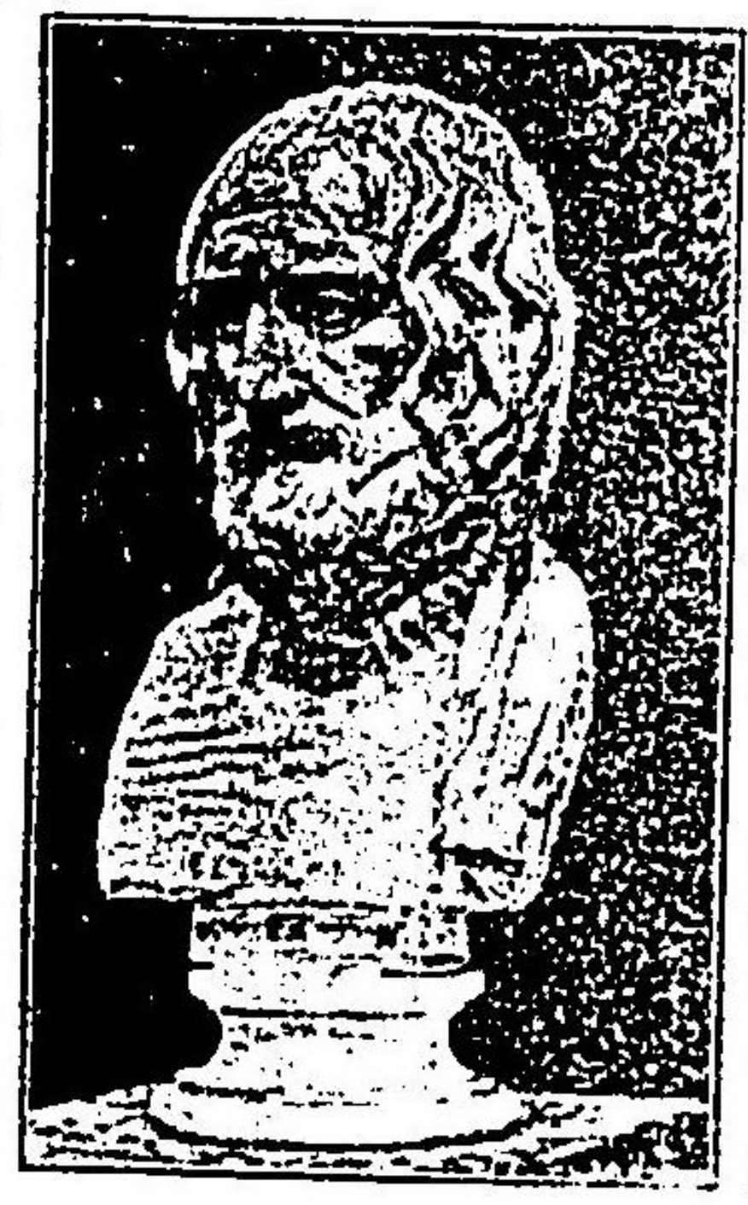
紀元前四〇五年彼が病歿して數ケ月の後アゼンスの大軍はエーゴスポタミに於てリサンドルの率ゆるスパルタ艦隊の爲めに粉碎せられ、アゼンスはヘラスの覇權を失ふの悲境に落ちた。併し幸ひにして彼は此事變よりも先に沒した。故に其當時の一詩人彼を羨み「彼は何等の不幸をも見る事なくして巧に死せり」と嘆息したが、誠に彼れは幸福に生きて幸福に死んだ人である。死後國人は彼の爲めに祠を建て年每に犧牲を奉つて之を祭つた文人の榮譽も茲に至つて極まれりと云ふべきかな。

四五三　ソフォークレースの戲曲　彼は處女作を物して以來六十年に亙る長き創作の生涯に於て百篇以上を創作したと傳へられてゐるが、今日に殘存するものは僅か七篇にすぎぬ。今其の名を記せば『トラキニー』(Trachinioe)『アジャックス』(Ajax)『エレクトラ』(Electra)『エディポス王』(Oedipus Tyrannus)『エヂポスコロナス』(Oedipus Colonus)『アンチゴーネ』(Antigone)『フィロクテテス』(Philoctetes)であるが、就中彼の技巧が圓熟して所謂第三風體の妙境に入つた作は『エディポス王』『エディポスコロナス』『アンチゴーネ』であらう。

彼とエスキラスを比べるとエスキラスはアリストテレースが劇詩の要素として揭げた中の神與の一面を得、ソフォークレースは技巧の一面を有つて生れた。だ

から其作品も彼の素樸豪宕を見る事は出來ぬが均齊淸明沈靜などギリシア人殊にペリクレース時代のアゼンスが理想通りの條件を備へてゐた。戲曲のエスキラスから彼に移つて變更された點は、第一に俳優の數と合唱隊の數を殖した事、第二に三部曲を個々別々にしても完全せるものとなした事等にすぎぬ。併し乍ら其題材の取扱ひ方に甚だしい相異があつた爲め、見物人の之に對する觀念も大に違つて來た。エスキラスは『イリアッド』に出づる如き英雄や神祇を描いたが、ソフォクレースは其等神仙界を下つて專ら人間界の喜怒哀樂を寫し、宗敎とは不離の關係を保ち乍らも、其は常に背景としてのみ用ひ舊來のヂチラムの分子は全く跡を絶つに至つた、かくて其戲曲はディオニサス祭の餘興の一具と視らるゝ事なく、全く純然たる藝術となり終つた。

四五四　ユーリピデース　ソフォクレースが幸福圓滿なる詩人であつたのに對し、之と前後して劇壇の一方を飾る天才であり乍ら、轗軻困頓の間に一生を終へたのはユーリピデース(Eurypedes 前四八〇—四〇七)である。彼は紀元前四八〇年即ちサラミス戰爭の際に生れた。ソフォクレースより僅か十五才若かつたにすぎないが、彼よりは遙かに新代の思潮を汲み又戲曲其物に對する見解も大に異つてゐた。彼は夙くより競技者として世に立たんと志し、十七歳の時は繪畫を試み二十五歳にして戲曲の創作に心を傾け、其年の中に處女作を作つたと云ふが、不幸にして世間から認めらるゝ事殊に遲く初めて一等賞を得たのは實に三十九歳の時であつた。且つ其創作の年月は殆んど五十年の長きに亙りながら、一等賞を得た事は僅々五回に過ぎなかつたと云ふが如き、之をソフォークレーズが弱冠にしてエスキラスに勝ち、生涯國人の尊崇を受けたのと比べる時は、詩人の世に迎へらるゝの厚薄の甚だしきを嘆息するの外はない。且つ彼の性質と容れる事の出來ぬ極端な民主々義が、其頃アゼンスに時を得て榮え、又彼の家庭の圓滿でなかつた處から、彼は紀元前四〇九年アゼンスを捨てゝマケドニアに赴き、アルケロス王の許に晩年を送り、四〇六年ソフォークレースの死に先だつ數ヶ月にして不幸なる生涯に終りを告げた。


ユーリピデース

四五五　ユーリピデースの戲曲　世に彼の作として傳へられたものは九十二篇あつたが、今日は其中十七篇しか遺つて居らぬ。『アルセスチス』(Alcestis)『メディア』(Medea)『ヒッポリタス』(Hippolytus 之は四百二十八年の作で彼が初めて一等賞を得たものである。)『ヘキユバ』(Hecuba)『アンドロマック』(Andromache)『イオン』(Ion)『懇願者』(Suppliants)『ヘラクレイデエ』(Heracleidea)『ヘルクレーズの狂亂』(The mad Hercules)『タウリス人中のイフィゲニア』(Iphigenia among the Tauris)『トローヅ』(The Troades)『ヘレン』(Helen)『フェニッセー』(Phoenissae)『エレクトラ』(Electra)『オレステス』(Orestes)『アウリスに於けるイフィゲニア』(Iphigenia at Aulis)『バッケエー』(Bacchae) 以上十七篇の悲劇の他に『サティクロップス』と云ふ半羊神劇が一篇ある。(半羊神はディオニサスの從者である處から昔からヂチラムの中に詠み込まれた。然るにヂチラムが漸々純雅なものに改善せらるゝにつれ此不格好な姿の從者は全く抑しのけられた結果、別に半羊神劇なるものを生じた。アゼンスのコエリラスは此劇の王と稱せられプラチヌス、エスキラス、ソフォークレース等も皆な之を作つた。)

エスキラスとソフォークレースに、ユーリピデースを加へて普通に三大悲劇家と云ふが、其中で今日最も弘く愛讀されてゐるのはユーリピデースであらう。然るに其當時には赫々の盛名はひとりソフォークレースの擅にする處となつて、彼はあまりに持て囃されなかつた。啻に俗受けがしなかつた許りでなくアリストテレースの如き學者までが彼の戲曲は詩の道德を缺いてゐると云つた。(其意味は戲曲が非道德的であると云ふのではなく、思想や人物等が適合して居らぬと云ふのである。)而して彼の眞價が世に認められて其名聲が他の二大家を凌ぐやうになつたのは遙か後の事である。其故如何と云ふに第一彼の思想は看客よりも進みすぎてゐた。彼は三大詩人の中では最も學問のあつた人で哲學者のアナキサゴラスやソクラテスとは朋友の間柄であつた。わけてもアナキサゴラスの主智哲學には大にかぶれてゐたから、彼は遍ねく其頃の科學哲學に通曉し其高遠なる議論を以て戲曲を彩つた。而して其議論たる時に萬有神敎的の色を帶び在來の宗敎には懷疑の傾を示した。第二には彼の創作の態度が全く寫實的であつた事である。對話には日常普通の言語を用ひ、人物は實社會から模型をとつた。且つ又技巧に囚はれなかつた彼は全體の均齊などに重きを置かなかつた。此點に於て彼はソフォークレースよりもギリシアに遠ざかつて近代文學に近づいてゐた。だからアリストファネースのやうな保守的な人には殊に惡まれたので、彼は其の喜劇『蛙』に於て思ふ存分罵倒した。かくもユーリピデースは製作の態度に於て近代的であるのに材料のみは之を實在の活社會に求むる事をせず、やはり在り來りの神話傳說より採り形式も殆んど普通りの單純なものを襲踏したから譬へにある古き革袋に新しき酒を盛つた觀がある。之れソフォークレースが形式と內容と能く適合して調和せる快感を人に與ふるに比して彼の及ばざる點である。彼も其事を變へなかつた譯ではないが終生舊い形式を破る事が出來ず習慣の捕虜で終つたのは傷ましい事である。之を惟ふにエスキラスは進步の急なる時代思潮に伴ひ得ずして其晚年を失意の中に過ぎ、ユーリピデースは餘りに時代思潮の先頭に驅け拔けすぎて却つて一生を不遇に終り、ソフォークレース獨りよく時代及び民族の嗜好に投合し、以て一代の寵兒たる事を得たのである。

ギリシアの演劇は全く其國民の獨創に成つた。且つエスキラスが賞を得た紀元前四八四年から數へて同四〇六年ユーリピデースが死去の年まで、凡て八十年の間に全く發達の絶頂に達した。古來幾多の文明國に劇と名のつく者はあつたが斯樣に早い時代に於てかくまで完全の域に達した者は他に例を見ない。剩へ其產出の多量なる事も以上三大家の作とアクリトファネースの喜劇とを合すれば優に後世に誇る事が出來ようし、更にかゝる大家の出現は飛び離れて偶然に出る者ではなくて其周圍には常に數多の小文星を率ゆる事を知らば如何に當時のアゼンス劇壇が繁昌したかを推量する事が出來よう。然れども憾む可し名のみ聞て形の傳はらざる作多く、名のみ傳はつて作の殘らない作家が多いキオスのイオン(Ion)エレトリアのアッケエウス(Achaeus)アゼンスのアガソン(Agason)等皆先の三大家と拮抗して名譽を競ふた人々である。

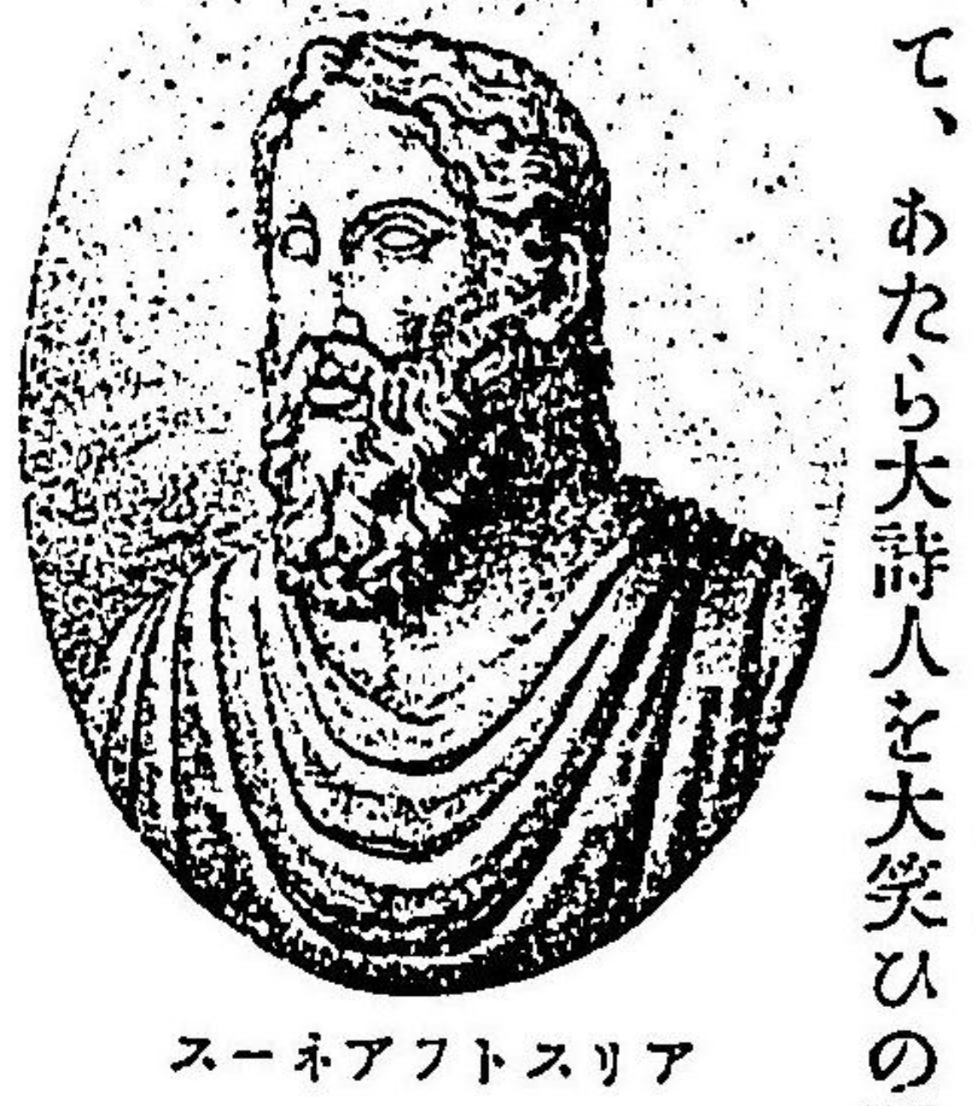
四五六　ユーリピデース以後の悲劇　併し乍ら悲劇の運命は、五世紀を以て盡きた。其の後も作家の數は澤山あるが盡く凡才であつた。紀元前四世紀に於てアスチダマス(Astydamas)大ユーリピデースの甥、ユーリピデース、ポリイドス(Polyidos)モスチオン(Moschion)等の名前はあるが最早前代程の創作力はとても無かつた。

下つて紀元前三世紀となると文學の氣運は漸く漲つてアレキサンドリアに移つた。此處の大學(Musaion)で七文星(Pleiad)と呼ばれた七人の作家が何れも戯曲に指を染めた。七文星は少ホメロス(Homeros the Younger)リイコフロン(Lykophron)フイリスコス(Philiscos)アレキサンドロス(Alexandros of Aitolia)ソシテオス(Sositheos)デイオニシアデス(Dionysiades)以上六人と他にアイアンチデス(Aiantides)若しくはソシフアネース(Sosiphanes)が加はつて七人となる。其他トレミー、ロベーター王と學者カリマクス(Callimachus)又アレキサンドリア市以外の地でも諷刺詩人キモス及びヘラクレイデース等みな創作に志し、中にもヘラクレイデースは自作を以て「テスピスの遺著」と名づけて出版した。

四五七　喜劇の發達　喜劇も悲劇と同じくディオニサスの祭典から生れた事は既に演劇起原の條に一言した。祭に唄ふ頌神歌の莊重典雅なるものはアリオンの與へた合唱の形式によつて悲劇を作り、他の一面の輕快素朴の歌は其時々の感興に乘つて人々の唄ふに任せ長く幼稚な狀態に止まつてゐた。併しいつしか之も定まつた形式を具備し一人の俳優（狂言のシテ）をも有するに至つた。之もドリス人の中から扱つた、而して諧謔は一層彼等の性質に適したものか悲劇の土臺を造つた時よりは更に一歩を進めて「にわか」樣の喜劇に仕上げた。スーサリオン(Susarion)はメガラのドリス人で、テスピスが悲劇史に於ける位置を喜劇史に於て占むべき人である。彼に續いて出でたソフィオン(Sophion)も、エピカルモス(Epicharmus)も、共にシシリー島メガラの產である。かくの如くしてメガラは喜劇發達の舞臺となり「にわか」に似たるメガラ風の喜劇として後の世に知られたのである。併し乍らメガラの喜劇は粗野な道化や平凡な駄洒落澤山であるから、高雅を尙ぶ後代のアゼンス人は之を卑んで彼等の喜劇が之と接近する事を避けた。

四五八　アゼンスの喜劇—アリストファネース　喜劇も悲劇と同じ運命を以て生れ、ドリス人の中から扱まつて後にアゼンス人の手に落ち完全な物に成つた。アリストファネースに從へばアッチカに於ける喜劇の鼻祖をマグネス(Magnes)と云ふ。クラテス(Crates)クラチヌス(Cratinus)フェレクラテース(Pherecrates)及びユーポリス(Eupolis)等相繼いで出でたが中にもユーポリスは寸鐵人を刺すの警句に巧みで、當代の喜劇作者中アリストファネースに次ぐものは彼であらう。

アリストファネース(Aristophanes 前四四〇—三八〇頃)はユーポリスの諷刺に加ふるに縱橫の奇才を以て諧謔百出、到底ユーポリス如きの敵ではない。彼の技倆はモリエール、シェークスピーアと比肩するに足ると云ふ人もある。彼は紀元前四四〇年を以て生れた。其父フィリポスはもとエーギナの地主であつた。其故政敵のクレオンは彼に對つてアゼンス市民の權利を拒まうとしたと云ふ。二十一歲から始めて四十年間に五十四篇の喜劇を書いたが今は十一篇だけしか世に無いのである。從來ギリシアの喜劇は政事家なり學者なり專ら個人の思想言論行動の上に加へる批評の方法として書かれたのであるから隨分露骨な攻擊や推薦もある。云はゞ政事の道具に使はれて居たので其弊害も甚だしかつたから法律で之を禁制した事さへもある。アリストファネースの作る處も矢張同樣の目的に出た。彼は至つて保守的な人で、先代アゼンス人の朴直で剛健で且つ快濶な氣風を慕ひ、民主政治家哲學者修辭學者等凡て新時代のものを蛇蝎視してゐた。故に其若年の作『宴客』(Banqueters)では新舊思想の對照を示さんとし、『バビロニア人』(Babylonians)では民主政事家の政策を諷刺した。此二篇はどちらも今日に傳はらない。『騎士』(Knights)でも同じく民主政事家クレオン及びデモステネース等に對する攻擊を續け、『蜂』(Wasps)には市民等の法廷に列席して審判する物々しき樣を冷笑ひ、『雲』(Clouds)に來るとアナキタゴラス、プロタゴラス、ソクラテス等を引出し大痛棒を喰はせ、『蛙』(Frogs)には其頃はや歿してゐたユーリピデースが冥府に行つてエスキラスと詩人の冠冕を爭ひ失敗する筋に造らへて、あたら大詩人を大笑ひの種として終ひ、『巾幗議事堂』(Ecclesiasusae)は女だてらに新憲法を制定せんとする滑稽を描き、以てプラトーンの近著『共和國』(Republic)に說かれたる男女同權論を揶揄一番した。而して其傑作の一たる『鳥』(Birds)では當時の人の分を越へたる向上心を嘲けつた。併し『鳥』から後の作は追々諷刺の筆法も婉曲になり最後の作『プルートス』(Plutus 388 B. C.)の如きは全く人間離れをした神の事跡で、個人に對する攻擊の臭味を蟬脫し終つた。



アリストフアネース

喜劇の性質より云へば社會若しくは個人に對する批評であつたけれどアリストファネースは普通の政事的社會的批評家ではなくて天成の詩人であつた。彼の奔放な想像は時に觀客の魂をオリンポスの九天に誘ひ、或は天地の間に懸る羽族の國に遊ばせ、平凡の詩人が扱へば影も形も付かぬ抽象的な理論も、彼の筆に乘れば血の通つた戯曲中の人物となつた。其作物を見れば啻に諷刺滑稽の才の橫溢して居ると云ふばかりでなく、言語の用法流麗典雅にして對話の呼吸もよく合ひ、殊に抒情句の巧妙は優に一篇の氣品を高め後世の所謂喜劇なるものとは日を同ふして語る可からざるものとなした。

四五九　アリストファネース以後の喜劇　ギリシア喜劇を文學史家は便宜上古、中、新の三期に區分する。古期は其の起原よりアリストファネースに終る紀元前四七〇年より三九〇年迄。中期は政治的喜劇の純社會喜劇に移る間の過渡期で、三九〇年より三二〇年迄とし、作家にはアンチフアネース(Antiphanes)アレキシス(Alexis)及びアリストフアネースの二子アレーロス(Arôros)とフイリッポス(Philippos)などがあつた。アンチフアネースは二百六十篇をアレキシスは二百四十五篇を作つたと傳へられてゐる。作風は古代の奔放な空想や縱橫の諷刺を失つて政治よりは寧ろ文學哲學等を批評する樣になり。合唱の音樂は全く痕を止めなくなつた。新期喜劇は紀元前三二〇年より同二五〇年に至る七十年間であるが、此期間にはアリストファネース當時の如き隆盛を見る事が出來た。此期に出でた喜劇作者はメナンドロス、フイレモン(Philemon)ヂヒラス(Diphylus)等其主なる人々である。就中メナンドロスは喜劇界のソフォクレーズとさへ言はるゝ程の天才であつたにも係らず、其作の完きもの今に傳はらず、僅にのこる斷篇に依つて其頃の喜劇の粹を忍ばせてゐる。

四六〇　メナンドロス　メナンドロス(Menandros 前三四二—二九一)は中世喜劇作家アレキシスの甥で、エピキュラスの親友テオフラスタスの弟子であつた。其故叔父よりは喜劇を作る道を敎へられ師よりはエピキュリアン哲學を授けられた。アゼンスは先にペロポンネサス戰爭に敗れて以來國威復た揚らず、次第〳〵に政事の中心たる位置を遠ざかつて餘はたゞ學術技藝のみの首府となり、實業も衰へて人々は富裕の點に於てペリクレースの昔と變らなかつたが政治上には全く自由を失つてゐたから、何れも生活に奢侈を盡し文學美術を弄び「喰ひ且つ飲め、吾人は明日をだも知らぬ身なれば」てふエピキュリアンの哲學思想は上下を問はず一般の社會に行き渡つて市民は馬鹿の限りを盡してゐた。されば喜劇家の眼の前には社會を見ても家庭を窺つても諷刺嘲弄の的となるべき者は澤山あつたから、彼等も古への如く政事を、或は前期の作家の如く文學哲學等をのみ諷刺するのを止めて、別に社會喜劇なる一生面を開きいよ〳〵近代の喜劇に近いた。メナンドロスを始め何れも題材は戀愛談

であつた。而して其中にはやかましやの親父、子に甘い母、どら息子、三百代言、三びん侍等が出る事、フランス近代のモリエール等のものと同樣である。メナンドロスの斷片に就いて見るに莫迦らしい痴情を描くにしても一體に智識の方が勝ち對話も重くろしく、若きアゼンスの華やかな匂は失せて老年の悲哀が其滑稽の間から仄見える。人生の背景が薄暗く人間が何となく學者臭い。之が此頃の實社會であつたのだ。メナンドロスと恆に拮抗したものはフィレモンで當時に於ては却てフィレモンの方が世評が好かつた。併し其後追々メナンドロスを推すものが殖へて、遂にアレキサンドリアの一學者をして「メナンシドロス人生を摸寫したるか、人生メナンドロスを摸寫したるか」とさへ嘆ぜしめた。惜い事に其作の完きものは一つも今日に傳はらないが、彼の作風はローマ戯曲の模範となつて其所に英才テレンスを生むだ。吾人は今日テレンスが爲した飜案に依てメナンドロスが喜劇構成の一般を髣髴する事が出來る

四　散文

四六一　ヘロドータス以前の散文

（詩歌が發達の頂點に達した頃になつて散文は漸く芽ぐんだ）

散文界で眞先に出た名はヘロドータス(Herodotus)で彼が筆をとつてゐた頃戯曲の方はや丶下り坂になつてゐた。成程彼以前にも散文を書いた人は澤山ある、併し文學と見做す事の出來る程の散文はなかつた。元來何所の國でも詩は散文に先んじて榮えるのが常であるが此國の如きは又甚しい。太古の長き年月敍事詩が獨舞臺であつた時代は云はずもがな、漸く人間に反省の心を生じ自己の思想感情を吐露する樣に成つて、他の國民ならば宜しく散文を使用する時節が到來しても、六音歩詩悲歌（エレゴス）體詩が敍事詩に代つて用ひられ、尙ほ未だ散文が頭を出さない。凡てギリシアの文明の根底は詩歌を以て造られたのである。故にヘロードータスは其方面の先驅者と云ふ事と全ギリシアに遍く其範を垂れ感化影響を及ぼした點に於て詩界に於けるホメロスと同等の地位を散文界に於て占めるものである。

散文の萠芽はイオニアに開けた。紀元前五五〇年頃キロスのフエレキデース(Pherecydes of Cyros)が「瞑想錄」に始まり、哲學者アナクシメネース、(Anaximenes)アナクシマンドロス(Anaximandros)等皆散文を用ひた。去乍ら之は唯口語其儘で書いたもので、とても言文一致と云ふ所まで進んではゐない。哲學者でも數學者でも少し文章を飾る氣のある人は矢張韻語が使ひよかつたものと見える。クセノファネース(Xenophanes)パルメニデース(Parmenides)エンペドクレース(Empedocles)等の哲學者は何れも詩を以て哲學的思想を發表した。紀元前六世紀の末つ方、散亂せる神話傳說系譜等を蒐めて散文に綴めたり、又此頃から旅行記を散文で物する風が始まつて、ミチレネのヘラニコス(Hellanicus of Mitylene)は其旅行記でヘロードータスと其以前の散文との橋渡しをしたと云はれてゐる。

四六二　ヘロドータス

ヘロドータス(Herodotus 前四八四生)はカリヤのハリカルナッソス(Halicarnassus)の名族の子であるが長じて後アゼンスへ來てソフォークレースと交を結び、四四〇年には南イタリアのチユーリイに遊んでアゼンスに歸り四二八年頃再びチユーリイに行つて其所で死んだ。彼は故あつて故郷を逃げ出してから其流離の半生に於て當時のギリシア人の知れる程の世界には足跡殆んど遍しと云つても善い位旅行した。彼の此地理上の博識は其歷史の上に著しく現はれ古來「歷史の父」と呼ばれてゐる。彼の歷史はギリシアとペルシアの戰を敍して遠く太古の神話時代からサラミスの海戰まで含む。驕る者久しからず凡て風の前の塵に同じと觀じて盛衰興亡の跡を書いた『平家物語』にも似て、彼は歷史の全篇を運命（ネメシス）の開展とし、ペルシアの皇祖キロスの勃興よりクセルクセスの敗北まで、皆是クセルクセスの驕慢にか丶る神の惡

ツーキヂデースとヘロドータス

であるとの考をもつてゐた。故に彼の歷史は詩人の筆を以てか丶れた歷史で、行文の流麗を以て稱せられた美文である。然るに之に對し政治方面を閑却した書き方だとか事件の根本的探索が屆かぬとか云ふのは寧ろ野暮の骨頂であらう。彼は藝術の士で歷史を材料に使つた迄である

四六三　ツーキディデース

ツーキディデース(Thucydides 前四七一—四〇〇頃)はアゼンスの人、ヘロドータスより若き事僅かに十三歲に過ぎぬのであるが、其著書を比較すると殆んど隔世の感がある。ツーキディデースの扱つたのはペロポンネサス戰爭で全ギリシアの血を湧かし胸を躍かした二大覇國アゼンスとスパルタの合戰である。ヘロドータスの歷史の樣に神が出て人を操る時代でない、生存競爭の爲めの苦々しい近代の色を帶びた戰爭である。彼は之れを書くに當り宗敎や哲學の頭を以てする事を好まなかつた、彼は又道德的臭味を全く捨て丶かつた。彼は眞の歷史家的冷頭を以て此戰の因つて起る所以を明にした。だから彼のペロポンネサス戰記は文章美辭と云ふに止まらず大に歷史其物としての體裁を備へて來た。

四六四　クセノフォン

クセノフォン(Xenophon)(前四四四—三六二頃)右二人の對照はかくの如く甚だしいけれど、クセノフォンを以て彼等に較べると又更らに一異彩を放つ。ヘロドータスは聞いて書き、ツーキディデースは考へて書いたがクセノフォンは一兵卒として自身戰爭の渦中に躍り込んで遣つた事、觀た事を書いた。彼の歷史には前の二人のやうに統一がない。理論的の頭はない。且つ其『ヘレニカ』(Hellenica)に於てはスパルタに對し甚だしい偏見を含みテレへの英雄エパミノンダスやペロピダスを默殺してゐる。けれども文章は拙くはない。多くの瑕瑾はあり乍ら矢張證典（オーソリチー）になつてゐるのは其所に捨てがたい或るものがあるからであらう。『一萬人退軍』は恐らくは彼の傑作か。『ソクラテース言行錄』は流石弟子であつた丈けに事實を多く捉へてある點に於て重要なものである。

四六五　修辭家と雄辯家

散文發達の過程に於いて、看過すべからざるは雄辯術である。これはギリシアの國柄で夙くから論議が盛んであつたからであらう、卽ち政事に野心のある者、法廷で權利を主張しようと云ふ手合は總て辯舌を磨く必要があつた、そこで彼等は修辭に注意し書き下せば直ちに文をなす位に善くしたから遂には藝術の一端と見らる丶樣になり、散文體の上に大なる影響をのこしたのである。組織的な雄辯術はシラキユースのコラツクス(Corax of Cyracuse 前四六六頃)が法廷に出る人の爲めに草した「言語使用法」(Art of words)で之は其弟子チシアス(Tisias)に依つてアゼンスへ輸入せられた。ソフイスト等の敎授は不完全ながらも文典や論理の方面に人々の注意を迎き、ゴルギアス(Gorgias of Leontini 前四九〇—三九〇頃)の演說の如きはアゼンスの市民をうながして修辭の絢爛華美に對する趣味に向はしめた。

アンチフォン(Antiphon 前四八〇—一一頃)は雄辯家の最も古くより著はれた人で、アッチカ散文の壯麗（グランド）文體（スタイル）を代表した。アンドキデース(Andocides 前四一〇頃)の興味ある處は主として歷史的の邊にあるけれど、矢張莊重の力が強い。リシアス(Lysias 前四〇〇頃)は之と異なり從來の文辭（マンネリズム）となつてゐたぎこちない遣り口を改めて、日常口頭に上る平易雅純なる普通語を以て之に代へ、且つ洗錬を重ねて毫も斧鑿の痕を見せなかつた。之れ其平明體（プレーンスタイル）の開祖と仰がれアゼンス散文の寶典となつた所以である。

アンチフォンとクシアスの中間に入れらるべきはイソクラテース(Isocrates 前四三六—三三七)であらう。彼の演說は聽衆に與へんとよりは寧ろ讀む人の爲めに草したものであつた。其文の著しい處は句切を用ひて明晰を得、而かも流麗にして修辭的の裝飾程よく使はれた。前四世紀の半程から此人の散文體がギリシア文學に遍く行きわたつた。イゼッス(Isaeus)の遺產問題に於ける十一回の辯論は技巧の縱橫自在なるデモステネースにさへ敬服せられた。

四六六　デモステネース

デモステネース(Demostenes 前三八九—三二二)の雄辯に至つては啻に古代ギリシアに冠たるのみならず、恐くは古今を貫いての雄辯家であらう。今日の人は最早彼の生きた聲を聞くとが出來ず、抑揚の調子に接

する事も出來ぬ。唯文学の上から窺ふにすぎないのであるが、語彙の豐富なる行文の暢達なる粧飾を施した技術と云はうよりむしろ自然の天工と嘆ずる他はない其の演説は主に政治上の者であつた。エスキネス（Aeschines前三八九—三一四）は活潑華美で、語る處の事、躍如として人に迫るが、而かも人を服するに至らず。其の他雄辯を以て聞ゆるものヒペリデス（Hyperides前三三〇頃）リイクルクス（Lycurgus前三四〇頃）デマデース（Demades）等がある。かくのごとく榮えた雄辯術もアリストテレースの門弟デメトリウス（Demetrius）を最後の人として衰運に向つた。

デモステネース

四六七　プラトーンとアリストテレース

プラトーン（Platon前四二〇—三四八）の散文學史上の地位は其思潮史に於けると同樣に殊絶である。其對話に現はれた文學的才能は實に多方面に亙つて言々事物を躍如たらしむる處があつて且つ寸鐵人を刺す點もあり、而して一體の調子が純正高雅に行つてゐる。晩年の作——法律論『チムューウス』（Timaeus）『クリチアス』（Critias）——邊になると其當代の人々の影響を受けたものが流麗暢達に傾いて來た。

ギリシアの散文は純文學を起すに至らずして科學的批評の時代に到達した。

アリストテレース（Aristoteles前三八四—三二二）の『修辭學』（Rhetoric）でも『詩學』（poetics）でも若し最少し早く世に出て尚アゼンスに雄辯家もあり詩人もある時代であつたなら其效果は非常なものであつたらう。併し最早創作の時代は過ぎてゐた。だから彼の事業は總て既成の知識を蒐集して秩序的分類を施す事にあつたので、是等文藝批評上の著作も其數に洩れない。然り彼の批評原理ギリシア文學勃興の資とはならなかつたけれど、文學批評の源にはなつて、後世ルイ王朝のフランス文學をはじめクラシック文學の上に及ぼした影響は拔き難いものがある。彼の弟子にテオフラスッス（Theophrastus）と云つて植物學方面に開拓した學者で『氣質集』と云ふを書いた人がある。飲だくれ、法螺吹男、小野心家など極く一般的な氣質が巧みに描かれてゐる。

五　衰頽期の文學

四六八　序説

ギリシア文學の衰頽期はギリシアのマケドニヤに降つた時を以て始まる。是より先其自由を失はなかつた頃のギリシアでは市は即ち社會組織最高の團結であつた。個人の修錬も教養も直接市に關係するものであつた。人々は即ち二重の關係に立ち一方からは個人としての人、一方からは市民としての人であつた。市場でも集會所でも、劇場でも皆之れ市民てふ觀念の釀成され、輿論の形成される處。詩歌、音樂、彫刻、文學、繪畫等何れも彼等が等しく感興を持つて味はつたり評したりした。同時に之等を製作する藝術家も又浮世と關係を絶つて書齋裡に瞑想してはゐなかつたので、彼等も時事問題を熱心に考へてゐたのである。否加之時として彼等の藝術は全く時事問題に對する意見の表白であつた。エスキラスは國家自由の爲めに奮闘した勇者の魂を悲劇の中に含ませた。ソフォークレー又はペリクレーズと同列に坐する武將の一人に擧げられてゐた。ツーキディデースは自身戰艦に乘り組むだのではないかと思はれる程綿密な軍事的知識を以て、ペロポネーサス戰記を物した。藝術家と普通人との間に溝もなければ境界もない藝術の批評は今日の樣に少數の專門家から出て衆俗は唯盲目的に雷同するのとは作物の享樂人でも夫々一應の批評眼を備へてゐたから異つて、下は審査官の與へる賞牌よりは寧ろディオンサス祭にあづかる二萬人の市民の眼と耳とで定つたのである。

マケドンのフイリップ（Philip of Macedon）はギリシア諸都市の行政上の獨立は奪はなかつたが、古來の政事的生活に大打擊を加へた。アゼンスの詩人美術家は尚ほ佳作を産出し得たかも知れぬ。併し今迄インスピレーションの源泉となつてゐた國民的精神の因て起る基礎を失つた。繼てアレキサンダアの爲に國家は顛覆の運に會ひ、アレキサンダア東征の歸途病を得てペルシアの王宮に斃るゝや尨大なる彼の帝國は彼部將の間に四分せられた。其間に於てギリシアの文明は其植民地を經てアジアに傳播した。去り乍ら古へ在つたやうな政治上の自由思想が行はれたのではなく外に表はれた風俗であつた、祭や宴會もギリシア式にやる、ギリシアの言語を操つてギリシアの書籍を讀む、此文明を史家稱してヘレニズム（Hellenism）——ヘラス（ギリシア）人の如く爲るの意味——と云つてゐる。素より外形的の文明であるが其文學も又ギリシアの思想なくして其型のみを傳へ、古代ギリシアの獨創なくして徒らに摸倣を事とした。

四六九　アレキサンドリア王朝期

アレキサンドリアはアレキサンダアからオーガスタスの代に至るまで文學の中心となつてゐた。其所のミュゼアム（Museum）即ち大學及圖書館は、トレミー一世の建設する處、四方より天下の碩學を鳩むる學府となつた。併し彼等は博引旁搜を唯一の仕事としてゐたにすぎぬ。かゝる病弊は詩歌の中にまでも浸潤して、作風に自然を缺き博學を示す技巧に落ちた。カルリマクス（Callimachus）の頌歌叢誌、挽歌に於て然り、リイコフロン（Lycophron）の難解な章句、アポロニアス、ローヂアスの精緻を極めた敍事詩に於て然り、ことにアラタス（Aratus）やニカンドロス（Nicandros）となれば最早韻語に書いた天文學、醫學に他ならぬのである。此時代の產物ではドリス風の牧歌が最も面白からう之は元來自然の觀照に基くものであるから學問が左程まで邪魔をしない。テオクリッス（Theocritus前三一〇頃）はヘレニズム期の技巧過重を全く脫したわけではないが、尚自然美に對する眞情を吐露した點は牧歌詩人に伍して一位を占める事が出來やうイオニアのビオン（Bion前二八〇頃）シラキュースのモスコス（Moschus前一五〇頃）は何々某々音樂の如き辭あり、又牧歌を以て鳴つた。

併し何と云つても此時代の詩文は其學問科學と比べものにならぬ。アリスタルカス（Aristarchus前二一五—一四五頃）は古典を校訂註解するの基を開き學究的研究の祖と稱せらる。彼の爲す所に倣つて批評的研究に向つた人々の間から文典と云ふ一科學が興つた。又此期には翻譯が頗る盛んであつた。舊約聖書の『モーセ五書』と稱するものは紀元前三〇〇年より二五〇年の間に彼等の手に依つてギリシア語に譯された。

其他マネトオ（Manetho）エラトステネース（Eratosthenes）ベロルス（Berorus）等の年代學者もあればユークリット（Euclid）の如き數學者も出で、學問科學に於て盛んなる前代に向つて後世に對しても此點に於て彼等は誇る事が出來る。

要に此時代は創作的精神が殆んど無かつた、併し吾人が今日古ギリシアの文學哲學に接する事の出來るのは、トレミー王家の學問保護と、學徒等の古典校訂の賜物である事を思へば、創作方面に於ける無能をも償ひ得ると云ふも差支へはあるまい。

四七〇　ローマ帝政期

盛衰興亡の迅速なる、時世は又も一變したが變らぬは奴僕となつたギリシアである、アレキサンダアが歿した時も古の自由を取返す事が出來ず、其部將の國が倒れても再び起つ力もなく、今度はローマ帝國羈絆の下に壓服された。政治の自由が戻らぬばかりか、先祖の稼ぎ貯めた學問までも失つて終ふ。成程オーガスタス帝の時代にもアゼンスは世界の學府てふ美名を持つては居た。併し已に其實力を失ひつゝあつた。ローマは次第〳〵に學者を吸ひ寄せ圖書を拾集して紀前二世紀の末つ方には此文學を移植して終つた、スルラ（Sulla）は圖書館を運んで行つた、シセロやアチクス（Atticus）などはギリシア語を語りギリシア書を耽讀した。此ギリシア語を語りギリシア書を讀む事はローマ人に缺く可らざる藝能の一となつた。ローマは次第にアレキサンドリアと學問を爭ふやうになり、ギリシアの哲學詩歌を始め諸の學問はローマ人に依つて弘くも深くもされたのである。

前一四〇年からローマ共和國の終りまでが一期を劃する。此期の始めに方つてポリビアス（Polybius前二〇四—一二二頃）が出た。彼の著は古代ギリシア人の傑ありと稱せられた。前六十四年より同百四十六年迄のローマ戰捷の歷史である。其文章簡古素樸にしてよく時流の妍華を拔き古の敢爲なるギリシア精神を示した。抑も彼が此著あるは美辭佳章を連ねて美文を草さんとの考へでなく、勢力の西漸してローマに移るを觀し其此處に至つたのは全く軍隊の士氣にある事を痛切に感じて筆を執つたのである。次世期になつてディオドラス・シキュルス（Diodorus Siculus）が『世界歷史』を著はしたが政治家としての洞見もなければ旅行家としての觀察もない、事實の堆積にすぎぬとの評を受けた。之は當時の歷史家の等しく受く可き非難である。オーガスタス帝よりジャスチニアン帝までローマ治下のギリシア文學は夥しく豐かに製造された。ギリシア語は交際の機關として又高等教育の一科としてローマ帝國の隅から隅まで殆んど行亙つた。古人の著へて置いた由なす材料に依つて、批評が出る、註解が出る、摸倣が出る、宛然工場の機械から製造品の吐き出されるやうに續出した。而も此五百年多産的文學の特色はと問へば內容に於ても形式に於ても獨創の絕無と云ふ點のみであつた。只リューシアン（Lucian）一人を例外とする。其作に於ても廣く讀まれた事でもプルタルクス（Plutarchus前五〇—一二〇頃）と共に此時代稀に見るの天才であつた。プルタルクスに至つては齊に其當時廣く愛讀せ

られた許りでなく、後世各國の言語に譯されて有名な政治家や文豪で其影響を蒙つた人は頗る多い。シェークスピーアの「ローマ」物と稱せらるゝ數篇の戯曲が之を藍本としたのは云ふ迄もない一例である。

例令創造の功は空しくともかう澤山の文學的作物があつたのは打つゞく平和の賜物である。政治上に大變動が無かつたからである。

此期の散文は四の部門に分たれる。(一)歴史、地理、傳記、其人を一々列擧すれば日も維れ足らぬ。唯代表となる者を數へれば、歴史にはディオニシウス(Dionysius of Halicarnassus)——此人は雄辯家の批評に巧みで且つ之に依つてアッチカ散文の規範を建てようとした。傳記にはプルタルクス、ディオジエネス(Diogenes)レエルテウス(Laerteus)フィロストラッス(Philostratus)地理にはストラボー(Strabo)ポーザニアス(Pausanias)がある。(二)古文學はアレキサンドリア學派の隊に立つ人々に多い、ジュリアス・ポルックス(Julius pollux)の辭彙、ガレン(Galen)のプラトーン及びヒッポリリタス哲學註解、アテネアス(Athenaeus)エーリアン(Aelian)ストベーウス(Stobaeus)の題集、ポリエーヌス(Polyaenus)の軍事學、(三)修辭美文、ソフィストと呼ばれた修辭學者の一團はディオンクリソストム(Dion crysostom)エーリウス・アリスチデス(Aelius Aristides)テミスチッス(Themistius)ヒメリウス(Himerius)リバニウス(Libanius)アッチクス(Atticus)等である。修辭と幷べて茲に擧ぐべきは對話書簡文論文小說などであらう。リューシアンは其「對話編」の如き形想二つな乍ら古典的（クラシカル）な點に於て當時幷ぶものもない、同時に諷刺的の處はヴォールテール、スヰフトなどに似て近代の臭を帶びてゐた彼の文章素より當代の流弊を受けて技巧に染んではゐたが此前後四百年間中での名作である。ジュリアン帝も雄辯もの及び諷刺文の作家であつた。

小說にはエフェソスのクセノフォン(Xenophon of Ephesus)の「エフェソスの話」(Tale of Ephesus)及びロンゲス(Longus)の「ダフニスとクレエ」(Daphnis and chloe)其他印度シリア等東洋諸國の影響によつて書かれたものが澤山ある。ヘリオドラズのエチオピアの話(A Tale of Aethiopia)は其代表作であらう。又キリスト教の傳播により四世紀頃から宗教小說が續出した。「マカリアスの天國旅行記」とか「ユダヤ人アブラハムと商人テオドル」などの利生記もある。アルキフエロン(Alciphron)の書簡體小說はアゼンスの新喜劇にふまへて想を構へた(四)此期は又哲學の再燃した時代でエピクテタス、マーカス、オーレリアス及び新プラトーン派のプローチヌス(Plotinus)ポルフイリー(Porphyry)イアンブリコス(Iamblichus)折衷學派のプロクルス(Proclus)等の著書もある。

此時代の詩歌は全く振はない。バブリアス(Babrius)はイソップ物語を韻語に書き更へたオピアン(Oppian)は漁獵を主題としたる教訓詩を作り、クヰンッス・スミルネウス(Quintus Smyrnaeus)は敍事體の句を以て華麗なる論評を書いた「神託集」(Sybilline Oracles)は六音步の詩、前一七〇年から紀元七〇〇年までのものをつぎ〳〵に集めてある、ユダヤ人のイスラエル回復を熱望する思想と、キリスト教の諸宗征服を豫想する考へが其生命である。以上のものより遙かに面白く讀まれるものは前五世紀から紀元六世紀までの小編を集めた「佳句集」（アンソロジー）の中から發見する事が出來る。

文藝の衰頽は四世紀から目に見えて甚しくなつた。文藝に對するキリスト教會の態度がアレキサンドリアのクレメントやジャスタン・マーチナーやオリンヂン等とは全く違つて來た。而してキリスト教的ギリシア文學が起つた。文學は實際純潔にもなり高尚にもなつたけれど、古の異教的ギリシアの文學とは遠ざかつた。

同時にギリシア語も僅かにイタリアに於てのみ昔ながらの儘を傳へ、本國では却て漸々ローマ化して來た。紀元五二九年ジャスチニヤン帝の代には異教の哲學を教ふる學校は閉校す可く勅令が發せられた。之は形式上に現はれたのであるが、此一事を以て其衰運を察するに難くはない。さりとて歷史は一條の連鎖、どこに切れ目があるでもない、一事件を以て時期を劃然と區切るのは誤であらう去り乍ら此ジャスチニアン帝の勅令の如きは茲に至つて俄に起つた事ではなく寧ろ次第〳〵に衰運に向つて來た古代ギリシアの精神が全く滅亡に歸した挽鐘に外ならぬのである。之よりキリスト教主義のビザンチン王朝の下に此地に永く文學哲學は榮えた。併し榮えれは新代のもので古代と交涉する處が鮮ない、依つて此古代ギリシア民族の文學史は茲に筆を擱く事とする。

參考書目

Gilbert Murray, *A History of Ancient Greek Literature* (Goss *Literature of the World*. 1897)
J. Addington Symonds, *Studies of Greek Poets*, 2 vols. (1893)
Jebb, *Greek Literature* (Literary Primer, 1877)
Lionel Barnett, *The Greek Drama*. (1900 縮入)
始め二書は甚だしく浩澣繁雜ならず併せ讀んでギリシア文學の概觀を伺ふべく、後の二書は何れも百頁そこらの袖珍本ではあるが入門の書として都合の好い著である。此外英文の文學史には
Maffy (1895) Jevon (1886)
佛文にはCroiset (1899) ドイツ文では Christ (1889) Bernhardy (1892) Bergk (1894) 等の著書があり、
特殊な部面に關しては Haigh, *Tragic Drama of the Greeks* (1896) Jebb, *Attic Orators*. (1893)
: *Growth and Influence of Greek Poetry* (1893)
Süsemihl, *Geschichte der Griechischen Litteratur in der Alexandrinerzeit*. (1892)
Krumbacher, *Geschichte der Byzantinischen Litteratur* 2. vols. (1897)
Rohd, *Der Griechischen Roman* (1900)
尙近代のギリシア文學に關しては
Felton, *Selections from modern Greek Writers* (1857)

ローマ文學

一　序說

四七一　ラテン語とラテン文字の特質

後世の人が古代の三大國民に負ふ所を數ふればギリシアの文學哲學ヘブライの宗教及ローマの法律である。彼等は各自其天與の賦性に從つて偉大なる遺物を人類の子孫に遺した。

ローマは初めイタリアの一小鄕より漸次四隣を征服して、遂に當時の世界を殆んど惣てその領有となした。ひとり戰捷に就いてのみ云ふならば、アッシア人の如き、バビロニヤ人の如き、乃至アレキサンダアのマケドニヤ人の如き、何れも咸な武勇に於て必らずしもローマ人の下に落ちぬであらう。けれども彼等は其戰捷に依つて得たる廣大な地域を幾年も維持する事の出來なかつたのに反してローマ人斗りは千有餘年の間此世界的大國家を支持する事が出來た。誠に之れは彼等の頭腦が政治法律の一方に非常に秀でてゐた爲である。其代り萬事が政治法律的で文學も其數に洩れなかつた。否夫れのみか言語からしてさうであつた。言語は其國民性の鏡なりと謂はれてあるが實際ローマ人の使用したラテン語は帝國と法律の辭であつた。修史立法政論等に宜しくして文學的詞華に適しなかつた。ホラテウスの天才を以てして尙且つ其賦を作るに臨み「ラテン語を抒情詩の型に盛るは容易の事業に非ず」と嘆ぜしめたと云ふ。美はしき詞華を組立てる事は彼等にとつて容易の事業でなかつた丈に彼等は推敲し洗錬した。シンナの「ヅミルナ」(Zmyrna)の十年の歲月を費して成されたのを以て美談として傳ふる如く、しかく彼等は技巧を重んじた。之をヱルギリウスに見るもセネカに見るも彼等の文學は文學即技巧の觀がある。次に之を其內容から考へてみると一國を擧げて殆んど皆な政治家であつたから從つて其文學は常識的智的でギリシア人等の深邃な思想やヘブライ人等の人格的な熱心は其所に見られなかつた。加之彼等の文學は近代人の其れの如く內部生命の要求に基いて起つたでもなければ古代諸國民の如く美に寄する憧憬から湧いたのでもなく專ら常識から割り出して文學を以て文明國民の一資格と見、國家を安全にせんために文學を求めた。だから彼等は厖然たる大國に成つて後も尙未だ自ら生んだ文學を有せず、其必要を認めて急拵へにギリシアから其戰利品の如に移植した。從つて摸擬的であり技巧的でもあるのだ。共和政治時代には貴族高官等の風流韻事に用ひられ、オーガスタスの帝政以後は文學を職業とする詩人等を生じたが必竟するに文明の裝飾たるに止まつてゐた。

斯樣な次第であるからローマ文學はギリシア及び近代の其れに較べて確かに數等劣つてゐる。併し乍らラテン語は其國民の如く勇悍に當時の世界を征服した。政治法律宗教を始め總ての社會的事業は專ら此言葉で無くては通らなかつた。且つローマ帝國滅亡の後も西歐諸國の土語と混じて所謂ローマンス語なるものとなり以て近代語の根源となつた。故にラテン語は古代の文明を保存し傳へて近代文明を起さしめたものである。長き暗黑時代の間も古代諸國民の文明が湮滅しなかつた事はラテン語に負ふ所が多い。

ローマの文學はギリシア及び古代東方諸國民の文學に較べて、彼等と勝利の桂冠を爭ふ事は出來ぬかも知れぬ。併し乍ら最も多數の人々に最も長き間讃誦せられた事に於ては、ローマ文學の右に出づるものは有るまい。此點より考ふるときはローマの詩人文人等は何所の天才者よりも幸福であつたと云ふことが出來る。

二　共和政時代

四七二　ローマ文學の起原　ローマの文學は他の何れの國よりも人爲的であつたが、其發達の順序丈けは略ぼ自然の徑路を踏むで韻語のものから先づ盛ひ然る後散文の文學が始まつた。

開國の歷史は古く紀元前七世紀にある。併し文學の歷史は紀元前三世紀以後のものだ。最もこれよりずつと以前から詩も散文も其種子だけは存在してゐた。詩にはサチュリアン句法(Saturian metre)と云つてローマ人の敏捷快活なる氣象に適ふ急速な調のものがあつた。祭と何かの儀式の時粗野な踊に合せて俳優等の唱へた頌神歌から發達し、後に詩人や卜者に用ひられた。此句法の詩は古くから澤山あつたが書かれた詩でなく口傳に唄はれた詩であつた。又散文には高貴の人埋葬式に臨み其人が一生中に成した事蹟を綴つて俳優等が讀んだものがある。之は後に年代記作者の材料となつた。右は何れも自國産の文學であるが其發達遲々として捗らず未だ文學と稱するに足る程の形式を備ふるに至らぬ中に。一般社會の急劇なる進步は早くも更に完全せる文學を要求し始め剩へ當時既に開明の極に達せるギリシアと政治上接觸せる爲め、素より交際的な性質を以て生れたローマ人の事故自國より大文學の興るを待たず既に立派に出來上つてゐるギリシアの文學を直に取り入れた。文學史の第一頁は此時に始まる。

四七三　ギリシア悲劇の輸入　紀元前四四一年を以て、第一ピュニック戰爭は終はつた。こゝに於てローマは地中海沿岸の最大强國となり、カルタゴの雌伏に依つて海上にも亦敵なく、平和と共に富貴が來た。そこで常識的なローマ人は從來の如き無學にして强暴一天張では滿足出來ず、茲に文明の化に浴せんとつとめギリシア語を學ぶ事は上流社會の流行となり人事百般の事人々相競うてギリシア風を眞似た、其ギリシア語教師の中にタレンツム城陷落の際にギリシアから囚はれて來た奴隷で今はリビイ家の家僕たるリヰウス・アンドロニクス(Livius Andronicus)と云ふものが居た。彼はローマ人の祭禮の爲めに「オディセイ」(Odyssey)と稱する戲曲をギリシアのものから翻案した。文辭は何方かと云へば拙い方のものであつたが非常に平民の意向に投じたと見へて爾來劇の流行を來した。

アンドロニクスと同時代の詩人にエンニウス(Ennius)とネヰウス(Naevius)があつた。彼等はローマが始めて生むだ詩人である丈けにアンドロニクスの翻案を卑屈なりとし、別にローマの國粹を示すに足るものを製作せんとして材料を歷史に漁つた　去り乍ら此の二詩人の名をローマ文學史に重からしめたものは戲曲よりは寧ろ其敍事詩である、エンニウスがギリシアの六音步を以て綴つた「ピュニック戰爭」(Bellum Punicum)及ネヰウスがサターニア句法に依る「年代記」(Annal)――矢張第一第二のピュニック戰爭を細寫し且つ國祖イーニアスが此國へ漂流し來たる昔より書きつゞけたもの）は共に後代の詩人ヱルギリウスの「エーナイド」の粉本となつた。

此二人の後を受けて多くの悲劇詩人は出たが悲劇其物は漸々廢れて終つた。成程キケロ時代にもオーガスタス時代にも悲劇の脚本を出版した文人は幾らもあるし、ヴアリウス(Varius)は悲劇に依つてヱルギリウスホラテウス等と詩人としての榮譽を分つ事が得、又オヸデウスの「メディア」(Medea)やオーガスタス帝のアジ「ヤシクス」(Ajax)等は價値ある作品であつたらうけれど、要するに机上の讀物と云ふに過ぎなかつた。

四七四　喜劇―プローツス　悲劇が世間に捨てられた大なる理由の一は、其內容が何れもギリシア神話に限られたからだ。外國の神話が彼等に面白い筈がない。そこで悲劇のパリアタ(Palliata ギリシアの衣裝を纏へるの義)と云はるゝに對してトガタ(Togata イタリアの衣裝トーガを着たるの義)と稱する喜劇が始まつた。

ウムブリア(Umbria)の人プローツス(Maccius Plautus 前二二七――一八四)はローマ第一の喜劇作家である。彼は頗るギリシアのメナンドロスに私淑し其新喜劇に倣つて第二ピュニック戰爭終局の年より四十年の間に百有餘篇のトガタを作つた。其の中二十編丈けは今日まで傳はつてゐるが之に就いて覧ると彼は機才に富み滑稽自在に、對話の呼吸よく警句澤山で且つ其筋も面白い。無論獨創の點に於てはギリシアの詩人達に一籌を輸せざるを得ないであらうが、ギリシアの方はアリストファネースの他は殆んど湮滅して傳はらない。其新喜劇の如何なるものであつたかは之を摸倣したるプローツスの作品に依つて窺ふ許りである。此點から見てもプローツスは古典文學に重きを爲すものである。

去り乍ら其當時好んで彼の劇を見物したものは學識ある少數の紳士に限られてゐた。一般世間の人々は矢張在來の曲馬趣味から多く手品闘技曲藝さては野卑なバレー踊のある方へのみ赴いて、莊重典雅なる悲劇は素より輕快圓滿なる喜劇をさへ顧みるものは鮮なかつた。けれどプローツスは自分の非凡なる天才を補くるにローマ第一の名優たるロスキッス(Roscius)を以てしたから未だ見物を繋ぐ事が出來た。

四七五　テレンテウス　プローツスの後に出て彼と共にローマ喜劇の二大家として舉げられるテレンテウステレニス(Publicus Terentius 前一八五――一五九)の時代になると社會の趣味益々墮落し劇を見て感心する者などは殆ど全く無くなつて終つた。成程彼の天才は獨創に於てプローツスより劣つてゐる。併し技巧にかけては必ずしも彼の下に降るものではない。から成つたのは社會趣味の變遷に因ると考へねばならない。彼の作『姑』は二度興行して二度ともみぢめな失敗に終つた。三度目には興行人側の非常な骨折りの結果漸く觀客を牽寄せた。其時彼は開場詞に於て下の如き皮肉を並べた曰く「第一回の失敗は愚俗なる公衆が劇の後に演ずる筈の綱渡りに憧れてゐたからで第二回めの失敗には其一幕が濟んだ許りの時「何所か他所で劍士の仕合ひがある」との噂が棧敷の一隅で起つた。而して五分時の後は劇場は空虛となつた」と。

四七六　カトオとリューキリウス　劇に代つて世に持囃された文學はカトオ等の散文とリューキリウス諷刺詩(Satura)である。是より先き年代記の編成を試みたる者は澤山あつたが其等は未だ歷史と云ふ程の者でもなければ散文の文學とは倘ほ更ら云ふ事の出來ぬ者でゐた。第二ピュニック戰爭に於て武名を轟かしたローマの古武士マルクスカトオ(Marcus Porcius Cato 前二三四――一四九)の出づるに及んで初めて散文の文學を見る事が出來た。彼の演說百五十餘篇並びに其時代史と『起原記』(Origines)と云つて諸市の起源を語つたもの等はラテン散文で書かれた重要なる書物の初めである。リューキリウス(Gaius Lucilius前一八〇――一〇三頃)はカトオと同時代の人、彼れはアリストファネース、ユーポリス、クラチヌス等ギリシアの古き喜劇作家より政治的諷刺の才を習得し後世の批評家クヰンチリアヌスが「全然吾等ローマ人に屬する文學」と呼んだ諷刺詩を創め、當時の政界に時めいた人々を標的として嚴しく彼等を鞭撻した。彼の句法は粗朴であるが其奧に鋭利なる才と力を示してゐる。

四七七　ブルロとキケロ　紀元前一世紀に成るとローマ文學は躍如として進むだ。ローマの文學者の中で最も博學と云はるゝヴルロ(Varro 前一一六――二七)は哲學文典考古學農業等に關する著述を夥しく公にした且つ諷刺詩をも澤山書いた彼は非常に古ローマの生活を慕ふ所よりカトオの如く總て新しき文明を呪ひ其頃流行したギリシアの哲學を嘲つた。彼の諷刺詩は哲學道德の論文を讀むやうな感を與へるが而かも其中に縱橫の才氣を見せてゐる。

キケロ(Marcus Tullius Cicero 前一〇〇――四三)はヴルロより十歲若かつた。彼の人生に於ける目的は文體の完美せる散文を製作する事であつたが、實際彼は其目的通り成功した。彼れ法律家雄辯家としては法曹界の牛耳を握り趣味の人として

は誤らざる趣味の標準たる事を許されてゐた。かれの演說は綿密な校訂を經て小冊子となりて出版された。又哲學上の著述も澤山あつたが其等は不完全乍ら今日まで殘つてゐる。彼は深遠にして廣大な思索家でないまでも文章に於て間然する所なき藝術家たる事は古來より何人も否認せぬ所である。

キケロ

四七八　新詩歌――カツルス　更らに茲に前一世紀の初年から詩壇に一新生面が開かれた。これは其頃のギリシア詩壇に榮えた詩人等の作をモデルとして出發した一派の運動で、その卒先者はカツルス(Catullus 前八四―五四)であつた。彼は天才者らしい氣概があり、且つ學問も廣かつた。その詩の調子は粗野ではあるが確かに生々した社會に生存したローマ人が現はされてゐる。だからホラテウスの餘り巧に飾られた賦などよりは、却つて吾人の胸に滲く所が多い。彼と同時代の詩人で別に截然たる特色を示して現はれたのはルークレチウス(Titus Carus Lucretius 前九五―三一)であつた。彼はその一代の傑作『事物の自然』(De Rerum Natura Nature of things)の中に當時數多の信徒を有して社會に有力なりしエピキュリアン哲學の精神を歌ひ込むだ。詩の句法は六音步（ヘキサメター）を用ひたが、エンニウスの夫れから見ると調子が著しく改訂されて、優艶でないまでも崇高であつた。この詩の主題は極めて非詩歌的のものであつたから感情に訴へる所は極めて鮮なく、惣てが理智的であるが、流石天才者の筆だけに人をして一誦三嘆せしむる個處々々が屢々有る。

四七九　共和時代と帝政時代　散文にはキケロあり、韻文にはリュークレテウスあり、其他ヴァルロの詩文やガイウス・サルスチウス(Gaius Sallustius)の歷史やラベリウス(Decimus Laberius)及プブリリウス・シルス(Publilius Syrus)等の道化芝居脚本ケーザル(Julius caeser 前一〇〇―四四)及び其幕僚の軍中日誌等もあつて此時代は國運の隆々たると共に文運も鬱然として興り次に來るべきオーガスタスの文學全盛期を豫想せしめる。就中ケーザルの「軍中日記」(Commentarii)は筆致の雄渾なる文學としても事實の確實なる歷史としても千歲不磨の價値ある逸品である。武人として將た政事家として古今無雙の英雄であり乍ら又文學の上にも斯の如き貴重なる遺物を遺した事は素より驚くの他はないが、獨りケーザルに限らず共和政時代の文學の優秀なる作品は何れも咸な軍人乃至政事家の手に成つたのである。何となれば彼等は皆教育ありて趣味の高い貴族であつたからである。然るに數度の內亂の後天下兵馬の權悉く武人の手に落ち遂に共和政府倒れてケーザルの甥オーガスタスの下に帝王政治と成るに至り、貴族等は默して歌はず、新勢力と成つた軍人等は無教育なり無趣味なりであつたから其中からも文學は出でず、此時に至つて政治と文學とは全く袂を分ち文學を專門の職業となす文士なるものが出來るやうに成つた。彼等は皇帝の篤き庇護の下に心長閑に製作する事例へばヹルギリウスの『ジョルジックス』に七年を費し『エーネード』に十有一年を費して尚ほ足らず、死するに臨んで更らに三年の推敲を待ち度しと云つた位、念に念を入れて仕上げる餘裕を與へられてゐた。斯く考ふる時はオーガスタス時代の盛大なる文學も半ば人工的のやうに思はれるが、不思議に又ヹルギリウス、ホラテウス、オヸデウスを初め稀世の才人が雲の如く群り出でて帝都の繁昌を飾つた。併し之も僅かにオーガスタス一代の事で、彼れが崩御の後は文學全く衰へ、趣味長へに墮落し、三萬の觀客を容れ得る圓形劇場（アンヒシアター）は在りと雖も劍客の眞劍仕合や、猛獸をして罪人を殺戮せしむる等の殺風景な事に使用された許り、前の時代に產出した文學書を失なはなかつたのがまだしも不思議な位である。

三　帝政時代

四八〇　文藝の勃興　紀元前一世紀の後半に於けるローマの文學は其前後に無き繁榮を極めた。ケーザルの暗殺よりブルッス等共和軍の敗亡となりローマの政權は一時アントニイと大ケーザルの甥の子なるオクタヸウス・ケーザルと此二人の手に歸して茲にレピヅスを加へたる三頭政治となつたが、程なくアントニイはエジプトに走りクレオパトラと結んだがアクチウムの一戰に亡ぼされ當時の全世界を領土とする尨然たる大國は擧げてオクタヸウス一人のものとなつた。マリウスとスルラの內亂以來絕間なき政權の爭奪は此時に至つて初めて止み久しく民衆の待ち望んでゐた泰平の春が來たのであるから捨てて置いても文藝の華は咲きこぼるべき時期に成つてゐた。然るにオーガスタスは大に文藝の士を養ひ自らも又戲曲に指を染めた程であるから上の好む處下之に倣ふの譬へヹルギリウス、ホラテウス、オヰデウス等の大文家を中心として數多の文星一時に現はれて玉座の周圍を彩つた。右三大家の著作が二千年後の今日まで全部揃つて傳はれるのを見ても如何に長く社會に推重せられたかが解らう。況んや後世に及ぼした影響に至つては此時代の文學の如く大なるものは殆んどない。故にオーガスタス時代(Augustan Age)と云へば一般に文藝上の黃金時代の異名と合點せらるるのである。

四八一　ヹルギリウス　ヴーシル(Vergilius Maro Virgil 前七〇―一九)は少壯時代はギリシアのテオクリタス及び自國の老詩人クレテウスに私淑し之に負ふ所が多かつた。其『牧歌』(Eclogue)は彼を學んで未だ至らざるものであつたと謂はれた。彼の父はアンデスと云ふ小村の百姓でさして裕かでは無かつたが、子供に當時の最良なる教育を受けさせる事位は出來る財產を有つてゐたので、彼はクレモナからミラン其れからローマと押し出して當時最も學殖深しと稱せらるゝ教師の門に學んだ。修辭學者エピディアスの教室では後に皇帝オーガスタスと成つたガイウスオクタヸウスと學友であつたとの傳說もある。其から十餘年の後、フィリッピの一戰に共和軍脆き敗北を取り世はオクタヸウスの天下に成つた時、共和黨に與みした地方の地主等は何れも皆所有地を沒收された。而してヹルギリウスも此の不幸なる地主の一人であつたが、彼の地方の文學好きな行政官とローマにある學友等の盡力で彼はクレモナに失つた所を再びカムパニヤに於て得る事と成り且つ此時からオクタヸアヌス(Octavianus)と稱して皇帝を中心として集まれる一團の文人等に紹介されて其仲間に加はり爾來簀を易ゆるまで帝の優渥なる寵恩の蔭にゐて創作を擅にする事を得た。『牧歌（エクローグ）』が出版されたのは此頃の事である。

その後七年を經て『グオルギックス』(Georgics)が公にせられた。之も同じく

ヹルギリウス

牧歌で、彼が少年にして未だミンシオなる父の牧場や田畠や蜜蜂棚に送つた頃及び其後風光絶佳なるナポリに近きカンパニアに住んだ頃、十分に味はつた自然美を此中に歌つた。凡て四篇何れも推敲に推敲を重ね洗錬に洗錬を經たもので辭句の妙詞華の麗同人の晩年の作たる『エーネード』を他にしては當にローマ文學の中に匹儔を見ざる而已ならず、又各國の文學を通じて稀に見るの好文字である。殊に其挿話（エピソード）甚だ面白く、中にも第二編の終りなるもの及び第四編のオルフュウスとユーリヂーケ（Orpheus and Euridice）に係るもの丶如きは絶妙と言はれてゐる而して此オルフュウスの挿話に至り彼は一新生面を拓き新たなる力を示して來た即ち之は牧歌（アイデル）と史詩（エピック）の中間に在るやうな味を有し後に出づ可き『エーネード』を豫想せしめてゐる。

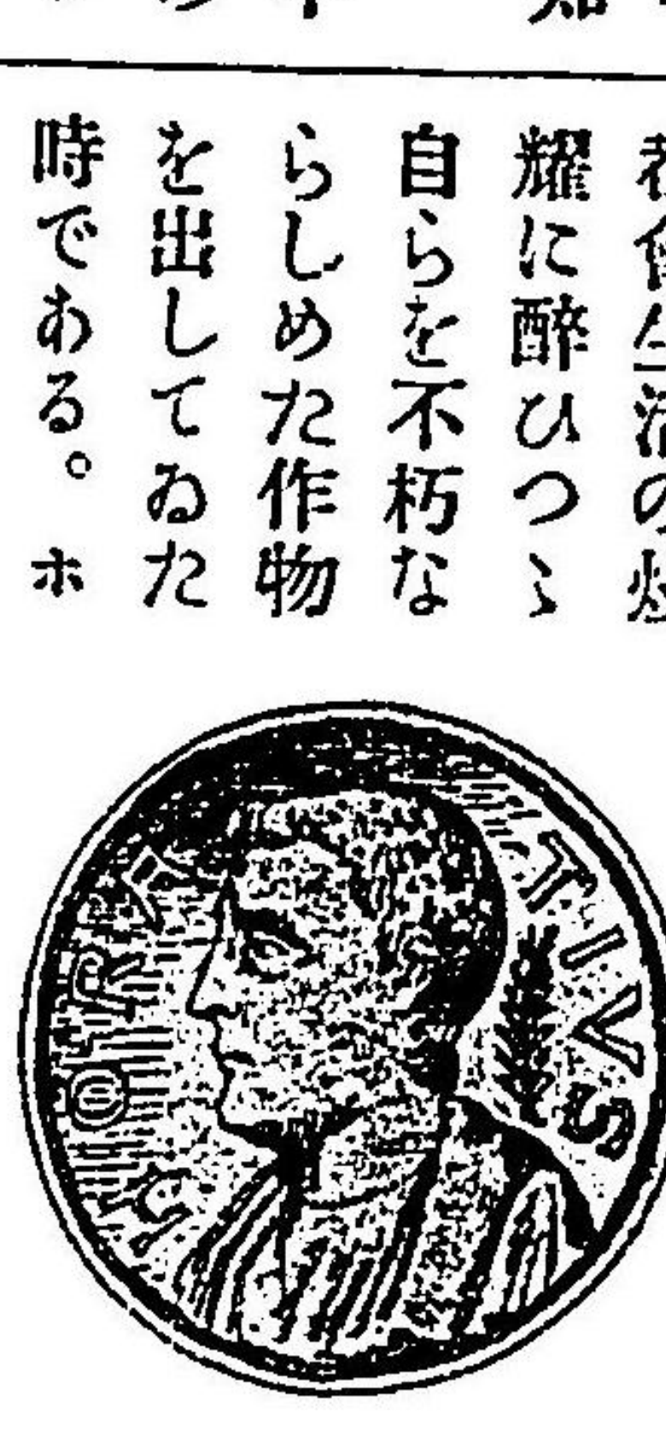
四八二　エーネード　『エーネード』

(Aeneid)は彼が技巧才藻共に圓熟の境に達したる晩年の作で、ギリシアのホメロスが『イリアッド』に擬したものである。彼は愛國心を鼓舞せんとの考へより筆を執り古への詩人ネーギウス及びエンニウス等が爲さんとして果す事の出來なかつたローマの史詩を書いた。即ち『エーネード』とはローマ市の創造者たるエーニウスの話の義にて、ローマの起原とトロイ戰爭とを結び付けてローマを中心として成る神話を築いた。之が古典文學第一の寶として長く且つ廣く愛誦せられた事は『イリアッド』に勝るとも劣りはせぬ。且つ其文學上の價値さへも或はホメロス以上と誇張する人もあつた位であるが、技巧は如何に妙を得ても摸倣は摸倣である。其優劣を考ふる如きは素より愚劣なる腐儒の戯れにすぎぬ。吾人は唯之を古典の雙璧と見れば足る。蓋し『エーネード』のローマ人に尊重された事は後世の詩聖ダンテが其神曲に於てヱルギリウスを己が敎導者としたのを以ても略ぼ推知する事が出來よう。

『エーネード』の神韻漂渺たる所甚だ中世的な趣を備へ後世ローマンチシズムの源泉を成す者であるが作者たるヱルギリウスは寧ろ過去に對て深い興味を有つてゐた。且彼が太古の事に通ずるの深き遂に其詩は多くの註解者を起すに至つた。吾人は其等の註解に依らなければ容易に之を解するに苦むのである。故に彼は神祕的なると太古的なるとの二點よりして現代現實と云ふものから懸離れてゐた。

四八三　ホラテウス

ヱルギリウスと全く相反しこれが對照をなして現代と現實に立脚するものは、ホラテウス・ホレース（Quintus Horatius Ericeus Horace 前六五―八）である。彼れとヱルギリウスとは親しい間柄で、年も纔か五つしか違はない。併しこの五才若いと云ふことが二人の作詩の發展上に大なる距離を生ぜしめた。ヱルギリウスがローマに在つて盛んに作詩してゐる間は、ホラテウスの作るものに獨特の長所が見へなかつた。しかるにヱルギリウスがローマを去つて淋しき片田舍に退き、『エーネード』の製作に潛心してゐた五六年間は、ホラテウスが都會生活の炫耀に醉ひつゝ自らを不朽ならしめた作物を出してゐた時である。ホラテウスは南部イタリアなるヱヌシア（Venusia）の生れで、父は富裕な收税吏であつた。（一說に奴隸だとも云ふが、玆にはマッケール氏に從ふ。）修學の爲めローマへ出たのは彼が十二才の時で、恰度十七才のヱルギリウス、がミランから出て來た年である。後ち更らにギリシアのアゼンスへ渡つて、古典及び哲學を修めたが、其間本國ではケーザルの弑逆あり、內亂相次ぎ共和軍は到る所、壯丁を驅つて兵士とした。彼れは一介の學生であつたが直ちに將校と成され、共和軍がフィリッピに最後の敗北を遂げるまで軍に從つた。その結果己れの私有地は沒收されたが逮捕されたり殺されたりする程に重要な人物でもなかつたから反逆の罪は免かれ、暫く小官吏となつた。かくて三年の後ヱルギリウスの紹介で當時の文藝保護者たるメーケナス（Maecenas）と相知り、後オーガスタスの寵を得て光榮ある一生を送ることが出來た。



ホラテウス

彼の初めの作は『諷刺詩集』（Satires）である。彼は元來至つて晩成の人であつたと見へて其第一卷の如きは生硬で瑕瑾が多かつた。併し『エポデス』（Epodes）を經て第二卷の『諷刺詩集』へ來ると彼の力は殆んど其極頂に達したと云つても差支へない位であつた。之は半ば戯曲の體裁を有つた者で其對話は平明な六音歩（ヘキザメター）であつた。

『諷刺詩集』を公にして後の彼は『ヱルギリウス』の如く浮世を超絶した人となり。己が所有地なるサバインが岡の閑居に退いて徐ろにギリシア哲人等の書を繙き其間に『賦』（Odes）を作つた。かくて十年の間に書き溜めた『賦』は其數惣て八十八編三卷の書物として前二三年即ち彼が四十二歲の時に出版した。之は自らも天地の存する限り永久に傳はる可しと迄確言した程得意の作で、實際の所今後の事はいざ知らず前世紀まではヨーロッパ諸國の敎科書として幾千萬の學生に讀誦せられたのである。さらば之は如何なる點に於て不朽であるかと云ふに、若し熱烈奔放なる抒情的叫喚を以て抒情詩の眞髓とする者ならホラテウスの『賦』は詩と云へない。之を以てカッルスの其等と較ぶる時は力なく重苦いものと成つて終ふ。ホラテウスの賦一として眼に付く程の技巧の臭味のないのは無い。けれども彼はカッルスよりは數に於て十倍の讀者に訴へる。否ヱルギリウスよりも多くの讀者を牽き付ける彼は詩人の詩人ではなく普通人の爲の詩人であつた。彼の技巧の强味はペトロニッスが有名の評語たる合宜（Felicity）にある。平易にして輕妙而かも高雅幽麗の趣を失はない。故に如何なる飜譯の妙手も之を宛らに譯し得るものは無いと云ふ。加之彼の思想の覘ひ所は黃金的平凡（Golden mediocrity）であつたから、自己の感情に制限を置き宜しく一般人の中程の所を捉へんとした。故に其賦は常識に富み滑稽諷刺を擅にするの餘裕があつた。其簡潔なる章句の中に盛られたから人もし之を讀めば一言一句盡く箴言のやうな味がある。

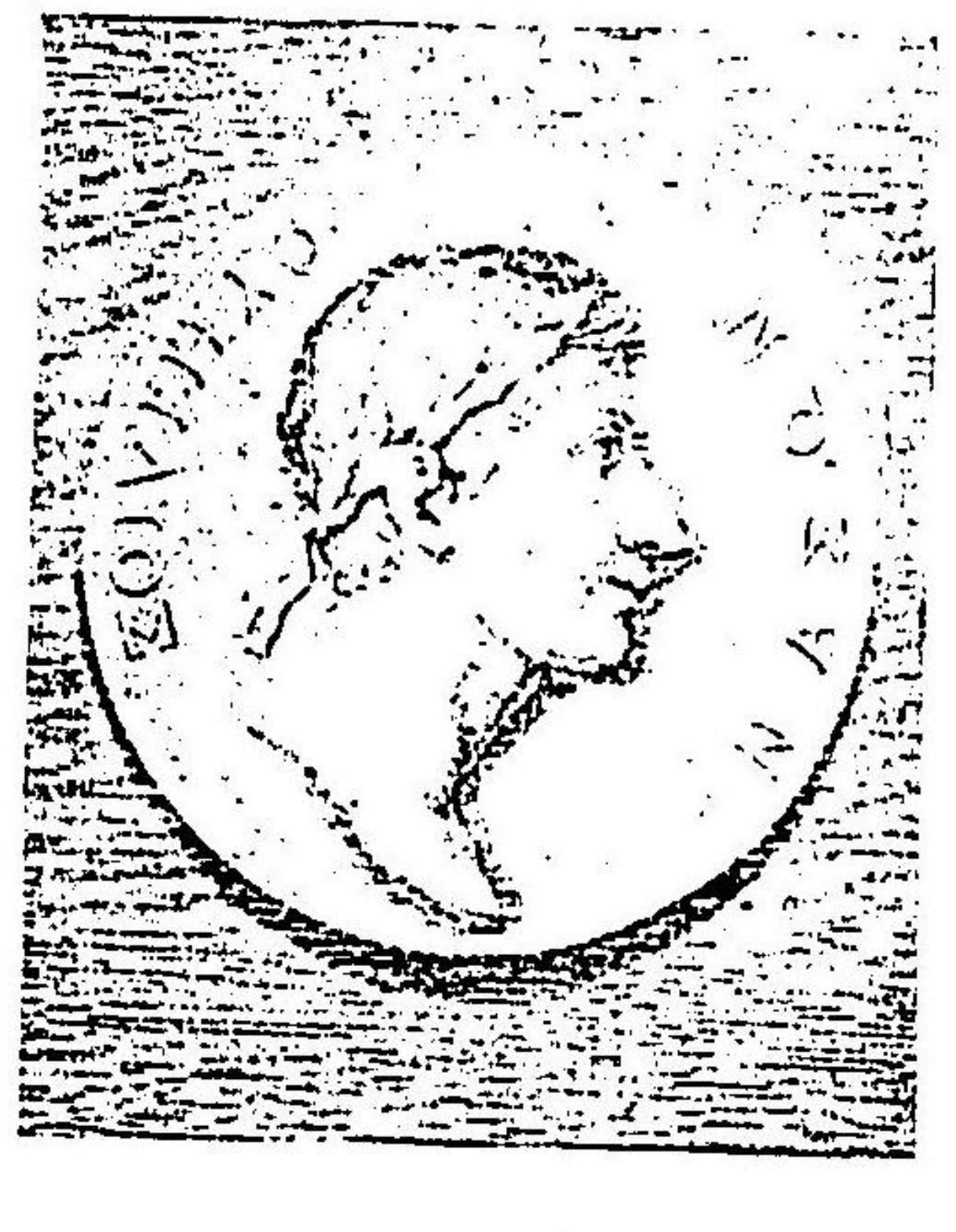
彼は此『賦集』を四編まで出版した。而して其第三編を出す頃其『書簡集』の第二編を出し『賦』の第四編と相前後して『書簡集』の三と四とを公にした。一はオーガスタス帝に奉つてラテンの詩を論じ他流を斥けて自家の作風を辯護せるもの、第二のものは年若き己れの友人に與へて先には文學の人たりし自分が之より知惠の人と成らんとするに臨み自己の經歷を敍し且つ批評したものである。

最後に彼は『ピソスに寄するの書』（Epistle to the Pisos）を著はした。世に『作詩術』（Art of Poetry）として知らるるもので彼の文藝―就中悲劇―に對する批評である。アリストテレースの『詩學』と殆んど同樣に後世詩學のオーソリチーとなつた、此書は彼の歿後前八年に世に公にせられた。

四八四　オギデウス

假りにヱルギリウスを以てホメロスに、ホラテウスを以てピンダロスに擬する時は、サッフォーに該當するものはオギデウス（オギット Publius Ovidius Naso Ovid 前四三―紀元

一八）であらう。彼には勿論サッフォーのやうな熱烈な情は無い。彼も他の總てのローマ詩人の例に洩れずして技巧の人であつた。唯彼の生活してゐた社會とサッフォーの周圍と類似し且つ彼は戀に就いて甚だ多く歌つたからである。但しサッフォーは戀を感じて歌ひ彼は戀を智的に研究して歌つた。此種の作の始めは『書簡集』（Epistolae or Heroides）で古の貴婦人達が其夫等へ宛てたるものとして書いた繼いで『戀』（Amores）なる抒情詩集をなし更らに前一年頃『戀愛術』（Ars Amandi）三卷を世に示した。之れ普通の戀歌に非ず、寧ろ戀愛の研究にして如何にせば女の愛を得且つ其關係を繼續し得るかを敎ゆるものであつた。更に其補遺として『戀の病治療法』（Remedia Amoris）を作り戀愛より得る苦痛や失望等に就き慰安を得る方法を示した。是等は惣てオーガスタス帝の皇女にして當時の社交界に花たりしジュリア姬をモデルとして書いたのだと云ふ。それかあらぬか此書が出版せらるると同時にジュリア姬は流刑に處せられた。而かも却つて其作者たる彼は其時何等の咎めをも受けずに濟んだ、併し其より十年の後に至り本書が社會の風敎に害ありと云ふ名で彼は遠く黑海の濱に貶謫せられたのである。



オヸデツス

彼の遠流の原因はジュリア姬の叛逆を助けんとした事か然らずとも何れ政事に關係した事であつたに相違ない、が、此書が風敎に害ある事は事實であつたらう。文章詞句共に華麗にして彼自らも誇とし人も嘆賞したであらうが、情操の深みなく酷だしく肉慾的で到底讀むに堪えずと後の人々の一般に言ふ所である。彼は黑海々岸に流されてからも是非一度は罪を免されてローマを見ん事を願ひ、オーガスタス在世の間は配所に在つて常に筆を採り詩文を草して奉つた。併し其等には餘り見るべきものがない。

だが彼をしてヱルギリウス、ホラテウス等の次に位せしめる作は他にある。彼は其貶流せらるゝ少し以前に『ローマ歲事記』（Fasti）と『變形神話奇談』（Metamorphoses）とを書いたが、僅かに『歲事記』の上半六卷のみが出版されてゐた彼の傑作は『變形奇談』（メタモルフォーセス）である。ギリシア、ローマの神話の中から變形に終る話のみを選び流麗な筆に敍した。全部十五卷插話に紹ぐに插話を以てし、長きに亙（わた）つて人を倦ましめず、何時しかオリンポス山頂に湧く雲上の世界に人を誘ふ力に至つては此書と光を爭ふものは古典に求めて獨り『アラビア千一夜譚』に得るのみであらう之は只古典文學の珍寶たるに止まらずして又神話學の最好なる材料と成つた。

オヸデウスと同時代の詩人にして此小史にも洩らす可からざる名が二つある。抒情詩人プロペルテウス（Propertius）とチブルス（Tibullus）は其れである。前者は學識深き人であつたため其弊として衒學的にして晦澁であるが時々眞の詩的情緒を發露し來つて雄壯高雅なる思想を歌ふ事があつた。後者の詩は詞藻優美にして陰鬱な色を背景を有つ。彼はホラテウス、オヸデウス等の友であつた。

四八五　散文――リヰウス

キケロが出た時代には彼れの他にケーザルだのサルスッスなど云ふ散文の大家輩出し誠に散文の全盛期であつたがオーガスタスの帝政時代に成つてからはヱルギリウス、ホラテウス等の大詩人が生れた位であるから、詩歌が非常に盛んであつた代り散文界は甚だ其人に乏しく、纔かに歷史家のリヰウス（Titus Livius前五七―紀元後一九）一人あるのみであつた。

リヰウスは專ら筆硯を友として一生を終つた人で政治には全く關係しなかつた。但し彼れは政治上の主義としては共和主義に傾いてゐたが、而かもオーガスタス帝とは終生相背かざる親友であつた。彼の大作「ローマ史」はローマ市の起原に筆を起し紀元九年ゼルマン征討軍將帥ドルッスが戰歿まで書いた。全部では百四十二卷のものであるが今日まで傳はつた所は其中の三十五卷のみで、他は悉く失はれて終つた。恰度マケドン落城の條まであつて其後がない。リヰウスは自分の時代に近づくに從つて細密に書いたのであるのに肝腎の其部分を失つたのは誠に惜むべき事で、其爲めに前一世紀に於けるローマ史は最も完全に近き史料を鈌くとさへ學者は嘆息してゐる。文章は流麗平易で恰度マコーレーの英國史の樣だ。彼は史學者や考古學者の爲めに書いたのであるから素より俗であるべき筈である。

四八六　文學の衰頽

オークスッス帝の治世の末年に、リヰウスとオヸデウスと相前後して歿し、茲にローマ文學の黃金時代は其終局を告げた。それから最後のカイザルたるドミチアン（Domitian帝紀元八一―九六）治世の時代までは特に記す程の文學は無いローマ文學の衰頽期であつた。特にオーガスタス帝の末年即ち紀元一世紀の上半には詩歌も雄辯も歷史も無かつた。ネロ帝（紀元五四―六八）治下のローマには治世の初めにセネカあり末に至つてペトロニウスあり其の他諷刺家のペルシウス（Persius）――此人の詩は躍如として劇の樣に書かれてはゐるが其意味が模糊として判然せぬ所が頗る多い――又リユーカヌス（Lucanus）――此人はファルサリア（Pharsalia）と云ふ名の下にケーザルとポンペイの内亂を歌つた。――等の人々もあつたが、殆んど此の位の人々にすぎず、文人の人數も寂なく其人々も小文星のみであつた。

機才ありと稱揚せられたマルチアリス（Alerius Martialis 紀元四三―一〇四）や「博物學」（Naturalis Historia）と云ふ浩瀚な書物を著はした老プリニウス（Plinyus Secundus紀元二三―七九）等の學者はあつたが彼れ等の遺した所は、獨創なき學問の堆積にすぎない。

四八七　セネカ

セネカ（Annalus Seneca 前四頃―紀元六五）の父は當時有名な修辭學者であつたから彼は法律修辭等の諸學科に於ては申分なき敎育を受けた、殊に彼れはストイック派の哲學中者錚々たるものであつて其れに關する著書も數多あつた。其頃哲學が殆んど此國の宗敎の如き勢力を社會に得たのも彼に負ふ所が甚だ多い。彼はネロ帝少時の侍講で其上に大なる感化を及ぼしネロは善政を布きセネカも又榮えたが、先天的にストイック哲學の敎理に叛いた性質のネロは壯年時代から漸次其本性を現はして心の儘に振舞ひセネカを忌みて之を斥けセネカをして動脈を切斷して死するに至らしめた。セネカが死して後ネロの寵を得たのは「風雅（エレガンス）の君主」又は「奢恣の大君」等の綽名を得たるペトロニウス（Petronius）（紀元六六歿）である。彼は寫實風な小說を作り又批評をもした。併し今日は其斷片が僅しか傳はつてゐない。

セネカ

四八八　ユヱナリス

ドミチアン帝治世のローマは、文藝復た興り、小數ながら天才者も出た。就中著名なる人々を擧ぐればユヱナリス、タチッス、少プリニウス、及びクヰンチリアヌス等である。ユヱナリス（ジュヱナル Decimus Junius Juvenalis―Juvenal 紀元四〇―一二〇）の諷刺詩は苦く殘忍（ビッターサベージ）なりと謂はれてゐる。其全集は紀元二世紀に成つてからトラヂャン及びハドリアン（Trajan and Hadrian）二帝の盡力で出版された。諷刺詩の數總て十六篇、何れも社會の腐敗偽善醜劣虛榮なる汚點を痛罵したものであるが、其中でも第六編の「惡女の傳說」（Legend of Bad Women）殊に痛烈を極め最も傑作と云はれてゐる。彼れの諷刺はホラテウスの如き冷笑でなくつて憤怒なのだ。從つてホラテウスが喜劇と見る所をも、彼は痛罵の對象としてゐた。詩句力強く、吾人の胸を衝く所ある。イギリスのジョンソンの作「ロンドン」（London）及び「欲望の虛しきこと」（Vanity of human wishes）とは彼れを摸倣したものである。

四八九　タチッス

併し此時代で最も文名高かつた人は史家タチッス（Conerius Tacitus 紀元五四―一二〇頃）であつた。彼はリヰウスのやうな純白然たる文學者では無くて、寧ろ進んで社會生活の渦中に身を投じて活動した。彼の著書の奧底には低き諷刺の音響が聞える。又其文章は警句に富み格言と思はれる者が頗る多い。故に凡そ後世の論文家に彼程多く章句の材料を供給した人は有るまい。其簡潔にして意氣豐かなる一言一句は直ちに讀者を俘囚として終ふ力がある就中自分の舅にしてブリトン國に知事たりしアグリコラ（Agricola）の傳記は傳記の軌範と稱せられる。之れは、紀元九八年に出版せられた。次に著はしたゲルマンの地誌風俗を描ける「ゲルマニア」（Germania）は當時の人々に非常に迎へられた「年代記」（Annals）と「ローマ史」（Histories）はチベリウス帝の卽位からネルバ帝（紀元一四―九八）の卽位迄を敍したが、今日遺つてゐるのはチベリウス、クローヂウス、ネロの一部分とガルバ、オットオ、ビテリアス及びヱスパシアンの勃興等に過ぎず。彼が自ら己が時代の記憶と呼んだ歷史の著

述は餘程精細に書かれた事は明白である。之が失はれた事は史學研究家の惜む所である。尙此頃の人でスエトニウス（Suetonius）は「十二カイザル傳」を著はし今日に傳はつてゐるがさして吾人を滿足せしめる物でない。

四九〇　少プリニウスとクヰンチリアヌス

タチツスと並んで當時有名であつた散文家は老プリニウスの甥なる少プリニウス（Younger Pliny 紀元六二―一一五）である。彼は都督として小アジアに在職中初代キリスト敎徒等と衝突し彼等の取扱ひに關してトラヤン（Trajan）帝に自己の意見を奏した事がある。之を以て後世キリスト敎國の人々は一層親しく記憶された。此人の「書簡集」（Letters）には政治文學美術社會等に關する多方面の評論があるが、何れも當時の文學の好標本で、吾人は之に依つてローマの社會狀態を窺ふ事が出來る。

プリニウスの師と稱せられるクヰンチリアヌス（Marcus Fabius Quintilianus 紀元三五―九二頃）は少時より法律を學び二十年間敎師と成つてゐた。エスパシアン帝の殊遇を蒙り「執政官（コンサル）」なる稱號を許された。ドミチアン帝の代に成つてから彼は公職を退き隱居仕事に二年かゝつて「原論」（Institutes）十二卷を書いた。修辭に關する論文を主とし敎育論もあれば古典文學と雄辯の關係を論じたものもある。人事諸般の事象に就いて評論說述した。其該博なる智識を示した。

四九一　帝政末期の文學　ラテン文學の歷史は殆んど此時を以て終ると云つても能い。爾來は少數の技倆なきものゝみ出で總て小なる修辭學者と碑銘書きであつた。

オーガスタス治世の頃彼の宮廷を中心としてギリシアの事物を研究し移植するの風が、非常に盛んであつたが、分けて文學に其摸倣を主とした。故にドミチアンの銀時代（シルバーエージ）をも過ぎて、騷壇殆んど天才の士なきに至つては愈々ギリシアを倣ふの外に出る事は出來なかつた。紀元一一七年ローマ帝國の王位に登つたハドリアンの治世は長く且つ泰平を樂しむを得た爲めに一旦全く衰頽したる文學が復活せんとした。併し其れはラテン文學の復活に非ずしてギリシア文學の復興であつた。而してハドリアン帝はギリシア學者で自らギリシア語で詩文をも作つた。勿論此時其反動の潮流もアプレイウス（Apuleius）やフロント（Fronto）の散文に見られるが併しギリシア語を以て文章語となすの風は尙ほ其後まで繼いて、ストイック派の哲學者なるマルクス・オーレリウス帝（Marcus Aurelius 紀元一二一―一八〇）の如きも其著「瞑想錄」（Meditatum）を記すにギリシア語を以てした。然るに彼れの子なるコムモーヅス（Commodus）治世の時代からキリスト敎文學が始まつた。後には詩歌の類ひも出たが初めは主として宗論にラテン語を用ひたると云ふ丈けだ。而かも此時からキリスト敎文學の中に二個の流を生じた。一は古のラテン文學に據らんとしてクヰンチリアヌス等の後を襲はん事を志すもので之をイタリヤ派と云ひ、他は近體のラテン卽ちアプレイウス（Apuleius）等の文脈を傳へんとする者でアフリカ派と呼んだ。然るにイタリア派は次第に衰へ、三四世紀の間を通じてアフリカ派獨り盛んであつたが、其代り之れは次第に當初の猛烈卒直なる趣を失ひイタリア派の如く只管修辭の完美を旨とするやうに成り、遂にラクタンチウス（Lactantius）に至れば「キリスト敎會のキケロ」と稱せられるやうに成つた。かくて四世紀の末葉には聖オーガスチヌス（St. Augustinus 紀元三五四―四三〇）及び聖ジエローム（St. Gerome）等出て、前者は「懺悔錄」（Confessiones）と「神都」（de Civitate Dei）により後者は新舊約書の飜譯に依つて前述二派の文體を調和し、新體を起して以て中世紀間を通じて用ひられたキリスト敎徒的ラテン文の軌範を示した。オーガスチヌスの「神都」は北蠻アラリックがハン族及びゴス族の韃靼を率ひてローマ市を陷れたるを慨歎して書いたものなので、實に之れ紀元四一〇年の事、千年の都ローマは茲に滅びて之より中世紀の暗黑時代が來る。併し乍ら其暗黑なる中世紀にもキリスト敎てふ大帝國を戴いてローマは依然として世界の智識と信仰の首都であつた。

キリスト敎が勢力を得てから其れ以外の純乎たるラテン文學は幾干もない。四世紀の末つ方テオドシウス帝の世にマルセリヌス（Ammianus Marcellinus 紀元三三〇―四〇〇）の「ローマ史」がある。之は好個の史料ではあるが文學とは稱し難い。其頃抒情詩人にクロヂアヌス（Claudianus 紀元四〇〇頃）がある。彼は「ラテン詩人の最後の花」と呼ばるゝ人で後世十六世紀の文藝復興期の文學に多大の影響を遺した。五世紀の末より六世紀の初へかけて博學の聞へあるボエチウス（Severinus Boetius）が「哲學の慰藉」（De Philosophiae Consolatio）を著はした。後世イギリスの王アルフレッドに依り飜譯せられた。

暗黑時代と成つてはラテン語はゴール、スペイン等の言語を混じて所謂ローマンス語（Romance）と成り十世紀頃まで人の口頭に登つた。而してラテン語は死語と成つて終つた。併し十六世紀の文藝復興に際しエラスムス（Erasmus）を初めキケロニズムの熱一度イタリアに盛んであつた。去り乍ら一旦死語となつたものを個人の力で復活する事は不可能である。但し各國の學者は長く是れを以て思想交換の具となし神學科學の論文も皆ラテン語を以て記された。ベーコンの「新機關」（Novum Organum）もニユートンの「原理」（Principia）も其他ミルトンの書籍の大部分も皆ラテン語を以て記された。宗敎改革家ルッテル以前には各國の敎會で讀みあげる聖經は皆ラテン語であつた。イギリス邊の大學に講義は長い間ラテン語を以てせられた。

（生方敏郎）

參考書目

J. Mackail, *Latin Literature.* (1896)

Wilkins, *Roman Literature.* (Literary Primer, 1890)

R. Burn, *Roman Literature in relation to Roman art.* (1888)

Tyrrell, *Latin poetry.* (1895)

Sellar, *Poets of the Republic.* (1889)

Sellar, *Poets of the Augustan Age.* (1891)

Sellar, *Horace and the Elegiac Poets.* (1892)

Teuffel Schwabe, *Geschichte der Römischen Litteratur.* (英譯1900)

近代文學

イタリア文學

序論

四九二　イタリアの國語と文學　イタリア文學は、南歐イタリア半島の青き空の下に、暖き日の下に、碧りなる海の岸に、橄欖の森の中に成長したるラテン民族の文學である。彼れ等の先は曾てその武力を以て世界を征服したるのみならず、その國語（ラテン語）を以て世界を統一した。シセロとヷージルとホレースと、その他幾多の燦爛たる文人を生みたるのみならず、これ等の人の著書は全歐の敎育ある人によりて熟讀せられ、久しくその思想と趣味とを薰陶した。イタリア文學はラテン文學の大樹より生じたる孽である。母樹朽廢して後も此孽はすくすくと延びて行つた。其血に傳はる典雅優麗の性質は、決して徒らに埋れて了はなかつた。

此くの如くイタリア文學はラテン文學の繼續である、若くは復活である。故にその母と其子とを何處に於て區劃すべきかは困難なる問題である。イギリス文學とフランス文學とはその國土によりて、其人種によりて區別することが出來る。併しイタリア文學ラテン文學との間にはこれを許されない、ローマ帝國滅亡以後、イタリア半島に生れた文學をイタリア文學とせば、ローマ帝國の滅亡といふ政治史上の一時期を境として、同じくラテン語で書かれ、同じく中世思想を盛りたる文學を、一はラテン文學史上の出來事とし、一はイタリア文學史上の事件とするのは餘りに兒戲に類する。故に兩者の區劃は當然に言語の差別の上に置かれねばならぬけれども、イタリア俗語が既に文章語として採用されて、ダンテの『神曲』や『新生』の如き立派な韻文及び散文が出た後でも、イタリア第一流の文人思想家にして猶ラテン語を以てその思想感情を發表したものが多い。ペトラルカのイタリア語詩は、そのラテン語の諸作に比すれば量に於て殆んど比較にならない。ボンタノの如き、イタリアの大才であるけれども、其著書は凡てラテン語を以て書かれて居る。若しイタリア文學史とはイタリア語を以て書かれたる文學の歷史であるといふ定義を嚴重に押通すこと

なれば、此等ラテン語の諸作は全然除外されなければならぬ。併し此くの如きは餘りに言語の形式を過重して、之れに盛られたる思想感情の內容を蔑視したる方法である。故に此處では主としてイタリア語を以て書かれたる文學の發達を敍し乍ら、傍らイタリア人の生活に大關係のあつた詩人や、思想家のラテン文をも注意して行くといふ、折衷的の曖昧な態度を取るの外はない。

イタリア語は(從つてイタリア文學は)主なる近世歐洲語の中、最も若い言語である。ラテン語はイギリス、ドイツ、フランス等の人にとつて要するに外來の繼母であつた、故に彼れ等は早くより獨立してその國語を開拓する必要を感じた。これに反してイタリア人にとつては、ラテン語は親身の母であつた。故に彼れ等は久しく安らかにその懷に眠つて居た。併し一度イタリア語といふものが出來るや、孩兒は直ちに青年となつた。他國語が未だ幼稚な野蠻な狀態にある間に、直接に古典の血統をひきたるイタリア語は既に磨かれた、美しい言語になつて居た。故にイタリア文學の外國文學に及ぼした影響は非常に多い。イタリア文學夫れ自身に於て固より獨得の價値を有するけれども、全歐洲の精神的文明に貢献した點に於て、殊にその功績の偉大なるを見る。例を英文學に採れば、チョーサア、スペンサア、ミルトンの如きイタリア文學によりて無限の影響を受けてゐる、近代歐洲文學の未だ幼稚なるに當りイタリア文學は列國の模範となり、敎師となつて、嘗てその母なるラテン文學が果したと同樣の使命を果した、イタリア文學史の研究は單にこの點丈けでも頗る必要である。

次に注意すべきは、イタリアに於ける他の人文と文學との關係である。イギリス、ドイツ、フランス等に於ては、精神界の偉人の大部分は、文筆に携はつたのであつた。然るにイタリアに於ては、文藝復興期の如き重大なる時期を背負つて立つものは、文人に乏しくして却つて繪畫彫刻、建築等の側に多い。ミケランゼロの如き偉大なる人も、文學史上には唯少量のゾンネットによりて名を列するに過ぎぬ。で、イタリアの文學者には、世界文學史上に第一流の地位を占むる者比較的少數である。しかも之を以て直ちにイタリア人の思想上の能力を輕視するは不當である。數こそ少けれイタリア文學史は決して群小の競進會ではない、ダンテ一人を以てするも、優に古今に獨歩することが出來る。

第一期

中世のイタリア文學

一 ダンテ以前

四九三 プロヴァンス詩派とシチリヤ詩人 十四世紀の初葉既にダンテの詩文を産出し得たるイタリア語は必ずや其以前に久しき鍛錬を積んで居なければならぬ様に見える。併し事實は此豫想に反してイタリア語を以て書かれたる詩文は十二世紀の末葉に至つて漸く現れ始めた。

イタリア人の如き聰明なる人種が六百年の間何等注目すべき詩文を産まなかつたのは驚くべき事實である。ボエティウス(五三〇年頃)以來イタリア人の文學は唯功利の爲に用ゐられて居た。神學と法律と記錄との外には何の見るべき者も無かつた。ギリシア語が猶東帝國に於て思想運搬の要點となつて居る間にラテン文學が此の如く衰微したのは一つは學者(從て文學)と一般民衆との交渉が疎かになつて、人民は學問の餘惠を蒙らず、文學が國民の精神中に其根柢を掘ゆることを得なかつた爲であらう。當時ラテン語が崩れて一種の俗語を生じて居たけれども俗語の文學は聊かも見えなかつた。十一世紀にサラセン征伐を歌つた六脚律の詩があり、十二世紀に漂泊し歩く大學生の歌が出たけれども皆凡てラテン語であつた。

ラテン民族の中始めて文學に相應しき言語を作り出したのは、プロヴァンス(Provence)である。プロヴァンス語はフランス語よりも詩的であつた、プロヴァンスが半島の地よりもラテン語に威壓さるゝことの少かつた事、宗教上の迫害起る迄は平和と繁榮とを享樂し得たと、貴族制度が文人保護に便利であつた事、此等の原因が集つてプロヴァンス語を早く發達せしむることになつた。プロヴァンス詩人は悉く王侯貴族の寵を受けて、或は其功績を頌し、或は其敵を嘲り、或は宮廷に參會して詩技を鬪はした。此等の詩人は技巧を主として其詩に拘泥の痕が多かつた、プロヴァンス語の押韻に便利なるに任せて徒に押韻を弄ぶことに屈托して感情天眞の流露を妨げた。ジングネ(Singuené)の調査によれば四百篇の詩集中四行隔句韻の詩は僅に二篇しか無かつたといふ。

プロヴァンスの漂泊詩人が北部イタリア王侯の宮廷を訪へるは十二世紀の末葉である。彼等の詩は此處でもプロヴァンス語を用ゐてプロヴァンス的韻律を使つた。併し其中の二三はイタリア語の一節をプロヴァンス語に混じたものもあり、稍々後にはイタリア語とフランス語とを混じたる一種奇態の方言を用ゐる者も出來た。

始めて純粹のイタリア詩を作つたのは一二二〇年フレデリック二世の保護の下にサレルモに起つたシチリア(Sicilia)詩人の一群であつた。彼等の詩風は全然プロヴァンス風であつたけれども、其用語はトスカナ(Toscana)風なイタリア語であつた。此等の詩は始めから現存の如くであつたか、始めはシチリアの方言で書いてあつたのをトスカナ風に改めたのか、之は疑問であるけれども、兎に角之が俗語詩の魁であると丈は明白である。フレデリック王自身がシチリア派の詩人であつた。其他此派の詩人で有名な者は、チエロ・ダル・カルノオ(Cielo dal Carno——普通チウロ・ダルカルノオ(Ciullo d'Alcarno)として知られて居る)及びヤコポ(Jacopo.)である。彼等の詩は特に優れたものではないが、前者の『情人の對話』(Dialogue between Lover and Lady)は巧慧なる滑稽機智に富み、後者の十四行詩の或者はダンテの抒情詩の萠芽を含んでゐる。

四九四 詩風の變化 十三世紀の中葉にホオヘンスタウフエン朝が壞れてシチリヤの宮廷は詩人の家でなくなつて了つた。併し一度起つた俗語詩は之がために消滅し去る樣な脆弱な者ではない、當時のイタリア語は既に作詩に堪ふる迄に錬られて居た。而してトスカナの詩人がシチリアの宮廷に仕へて俗語詩を始めたとすればシチリア以外に新詩人を出すべき處の先づトスカナなる可きは想像し易いことである。ダンテの『俗語論』にもトスカナとボロニヤの方言の特に優秀なるを論じてゐる。果してトスカナのアレッツオ、ボロニヤのギニチエリ等が新文學の領袖と成つた。

文學が宮廷を出でて公衆の社會に移つた事は注目すべき一事件である。詩人は之が爲に自由に其詩想を歌ふことが出來る樣に成つた、詩は王侯の娛樂に非ずして或程度迄眞面目な思想や意見を發表する道具と成つた、從つて漂泊詩人やシチリヤ詩人の戀愛詩が其範圍を廣めて政治詩諷刺詩、敎訓詩等が起つて來た。之等の詩の文學的價値が從前の戀愛詩に比して

優れて居るとは云へないが、彼等が一方に於て文學と國民生活との接近を標示して、來るべき善き物の萌芽を藏して居たとは爭はれない。

ギットオネ・ディ・アレッツォ（Guittone di Arezzo.）は一二三五年前後に生れた。始め彼は漂泊詩人風の戀愛詩人であつた。イタリア詩形の珠玉として世界文學に貢獻すると多かつた十四行詩（ソンネット）は此人あたりから一定の形式を取つたものらしい。併し後に至つて彼は妻子を捨てゝ桑門に身を委ねた。從來の生活を呪咀し戀愛詩の製作を廢止して唯道德宗敎に關する詩のみを作つた。彼の情操は賞讚に價するけれども其律語は（矢張プロヴンス風であつた）荒んだものであつた。併し彼の詩は同時代の人に影響した。彼のラテン主義（彼は多少古代のラテン文學に通じてゐた）の影響が特に多い。

ボロニヤのギドオ・ギニチェリ（Guido Guinicelli of Bologna. 一二三〇―一二七六）は純粹なる文學的見地よりすればアレッツォよりも遙に優越である。彼はイタリアの律語に嚴肅にして哲學的なる性質を附與した。加ふるに彼の戀愛詩は漂泊詩人の者に比して遙に精神がある、印象が深い。ダンテの十四行詩に此人の詩から暗示されたものがある。「優しき心に戀は隱れ、綠の木蔭に鳥は巢ふ」といふ「優しき心のカンツォネ」（Canzone of "Gentle heart."）（之もイタリアの詩形である高雅と諧調の優麗とを表すに適して居ると云はれる）は就中優秀な作である。

其他の抒情詩人としてはギドオ・デレ・コロンネ（Guido delle Colonne.）ルスティコ・ディ・フィリッポ（Rustico di Filippo.）及び『被造物の歌』（"Song of the Creatures."）の作者聖フランチス（St Francis of Assisi.）等を擧げるとが出來る。

兎角する中にダンテが出た（一二六五）。彼の光輝は太陽の赫々たるが如く同代の群星は之に壓倒されて光を失つたけれども、彼等の或者はダンテなくんば空前の詩人と稱せらるゝに價する者があつた。中に於て吾人はダンテの友人たりし二人を擧げようと思ふ。

ギドオ・カヷルカンティ（Guido Cavalcanti）はダンテの年長の友である。ダンテの十四行詩に「ギドオよ、君及びラポオと共に……」とあるギドオは彼である。彼はダンテと共に同代の二大明星と稱へられたる人である。ダンテも其『俗語論』に於て彼を褒めてギニチェリも光を失ふと云つた。彼の抒情詩家として偉大なるとは年少ダンテの詩が彼の詩に負ふ所大なるを見ても明かである。ダンテの詩句は頗る美しくなつて居るけれども。カヷルカンティの粗野なるも亦味がある。又彼のバラッテ及びカンツォネは哲學的精神を以て貫かれて居る。

チノオ・ダ・ピストイヤ（Cino da Pistoia―本名ギットンチノオ・デ・シニブルディGuittoncino de' Sinibuldi. 一二七〇―一三三六）はダンテの弱年の友である。彼は獨創に於て劣るけれども趣味の清純に於ては寧ろカヷルカンティに優つて居る。此人にも亦ダンテの抒情詩と酷似する作が多いが、ロレンッオ・ディ・メディチの說によれば野氣を脫するに於てダンテよりも一歩を進めて居ると云ふ。彼の有名な詩はダンテに贈つてベアトリチェの死より受けたる悲哀を慰むるカンツォネである。

其他ダンテと同時代の抒情詩人にはラポ・ジャンニ（Lapo Gianni.）ディノ・フレスコバルディ（Dino Frescobaldi.）及びジャンニ・アルファニ（Gianni Alfani.）等が居る。彼等はダンテやカヷルカンティと同じく戀愛を靈化して詩中の婦人に超人間的完全を附與する詩人であつた。

眼を轉じて諷刺詩を見れば其處にはフォルゴオレ・ディ・サンゼミニャノ（Folgore di San Geminiano.）及びチェッコ・アンヂョレリ（Cecco Angiolieri.）が居る。前者は諷刺詩以外一年の歡樂を歌へる一聯の十四行詩を以て有名である。又敎訓詩の方面に於てはダンテの師ブルネットオ・ラティニ（Brunetto Latini.）の『テソレットオ』（Tesoretto.）は或程度までダンテの『神曲』の構造を豫示するものとして面白い。ヤコピノ・ディ・トディ（Jacopino di Todi.）は十三世紀の末に出て聖フランチスの宗敎詩の衣鉢を紹げるもの、歸依渴仰の情に燃えて他を顧みざる所が大に其時代の民心を動かした。

四九五　散文　プロヷンスの漂泊詩人及びシチリヤの宮廷詩人の時代には俗語の散文がなかつた。後アレッツォに散文の書翰集があつたけれどもラテン主義の臭氣が強く、ブルネットオ・ラティニの『テソロ』（Tesoro.）があつても之は百科全書で文學の書ではない。其他の俗語の散文は大抵ラテン語からの飜譯であつた。初期のイタリア文學史はギリシア文學の始めと同じく、花やかなる律語があつても散文は殆んど皆無だと云ふ奇態な現象を呈して居る。併し詩語として適當だといふとは其國語が同時に優秀なる散文を產出するに堪ふるとを表示する。唯ラテン語でなければ高尚でないと云ふ迷信を除去すればよい。ダンテの『新生』は、イタリアの散文に極めて有望なる紀元を開いたものである。

二　ダンテ

四九六　ダンテの生涯　ダンテの偉大は萬岳を凌駕して、獨り天空に聳ゆる底の偉大である。彼の先驅者たる名擧を擠ふ者も唯ダンテの天才を發揮するに適當なる精神的空氣を作つたと云ふに過ぎない而して其空氣とは即ち漂泊詩人より傳はれる騎士的な熱情的な感情と、アリストテレースの科學及びトオマス・アクイナスの哲學との結合である。此點に關してはカヷルカンティ既に先例を示した。

ダンテ（ヅランテ）アリギエリ（Dante (Durante) Alighieri）は一二六五年五月の末つ方フィレンチェ（Firenze.）に生れた。彼の先祖カッチァギダ・デリ・エリセイ（Cacciaguida degli Elisei.）は一一四七年の十字軍に加はつた。其妻の假名アリギエリを其子に與へたのは此人である。彼の家はグルフ黨に屬して居た。ダンテの少年時代に就ては多く知られたとがない。幼にして母を失つたと、ブルネットオ・ラティニを師としたと、屢々遠征軍に身を投じたらしいと、フィレンチェの上流社會に交際し得る位の資產があつたと――わかるのは此位なものだ。併し彼の當時の內部生活は『新生』が完全に語つて居る。彼は全身を捧げて少女ベアトリチェを戀した此女が假設にあらずして實在の人間なるとは、かの不信用なるフィレルフォの傳記以外、古いダンテ傳記者は一人も疑つて居ない。ボィカチオの記錄に照すにダンテの愛人はベアトリチェ・デ・ポルティナリ（Beatrice de' Portinari.）であつたに遠ひない。ダンテの愛は熱烈を極めたけれども純粹に精神的であつた。『新生』中の詩の書かれた頃はベアトリチェは旣に人妻であつた。從つてダンテの愛が女によりて酬いられたとも思へない。ベアトリチェは一二九〇年六月九日に

ダンテ銅像（十五世紀作）
（死顔の面型に依りて作る）
（ナポリ博物館藏）

死んだ。ダンテの生涯にとりて大に記念すべき出來事である。女の死後ダンテは愈々之を靈化して胸中の本尊とした。友人の切なる勸によりて（若し一三〇〇年に七人の子が有つたといふ説が眞ならば遲くとも一二九三年に）ゼンマ・ドナティ(Gemma Donati)と結婚したけれども、それはベアトリチェを忘れる爲ではなかつたゼンマとダンテとの間には格別の不和合もなかつたらしいが恐くは心からの融合が無かつたらうと思はれる。一三〇一年ダンテがフィレンチェの黨爭を絶たんとして成らず却てギベリン黨(王黨)と共に市外に追放さるゝ時ゼンマは其子と共に殘りグルフ黨なる父の家に身を寄せた。

ダンテは追放の徒黨とアレッツォに集りてフィレンチェを敵黨より奪はんとする計畫に與かつたが、恐くは自黨の人にも愛相をつかしたのであらう。彼は此處を去つて北部イタリア諸侯の宮廷を漂泊した。パリに行つたとは疑なく、恐くイギリスにも渡つたらしい。彼が晩年の保護者として最も有名なるはヹロナのカネ・デラ・スカラ(Cane della Scala of Verona)である。彼は一三一〇年其處より移りてラヹンナのギドオ・ノヹロ・ダ・ポレンタ(Guido Novello da Polenta of Ravenna)に身を寄せたが、ヹネチヤに使して病を得一三二一年の十一月十四日*『神曲』(Divina Commedia)の完成後幾何もなくして異郷に客死した。彼の葬儀は立派であつた。

四九七　ダンテの散文及び抒情詩

年代に於ても價値に於ても『神曲』以前の諸作中第一に來る者は『新生』(Vita Nuova)である。其成れるは多分一二九二年であらう。此作は散文に交ふるに十四行詩とカンツォネとを以てしたるもの、彼の熱烈なる內部生命の告白である。全篇を貫くものは清絶にして地上の臭味を帶びざる靈性である。之は同時代の美術文學に通ずる一般の傾向であつた。併し『新生』程强烈なる表現を與へたものはない又『新生』は其形式の如何にも架空的に見ゆるに拘らず其の實最も誠實率直なる直寫である。誠實率直の直寫なるに拘らず主人公もベアトリチェも個人性を超越して居る、固より『神曲』其他の聯想がある爲に主人公は或程度迄ダンテ其人の俤を讀者に思ひ浮べしむるけれども、ベアトリチェに至りては見るべくして觸るべからざる精神的存在として讀者の心に臨んで來る。世界に『新生』に勝る書はあつても、新しき天才が最初の試作によりて先人と同儕とを凌駕したると此書の如きはない、イタリア文學の發展は徐々であつた、併し此書に至りて一躍して大なる溝渠を飛び越して了つた。散文に比して詩は特に美しい。之に肩を並べ得るものはあつても之を凌ぐものは未だ一つも出ない、殊に十四行詩の優秀なるものに至りては今日に至る迄之と肩を並べ得るものさへない。

『饗宴篇』(Convito)に至つてベアトリチェは哲學の記號となつて了つた。此書はカンツォニ十數篇と其中三篇を註釋した散文とから成立つて居る。カンツォニの最初の數篇は一二九五年頃に出來たもの、其他の諸篇と註の散文とは追放後に成つたもので、最後に著者の手を離れたのが一三八九年頃であるらしい。如何にしてベアトリチェを哲學の記號とする樣に成つたかは『新生』の仕舞に書いてある不思議な幻のことで説明が出來よう。ベアトリチェは人間の女に非ずして超自然なる榮光、完全として考へられる樣になつたのである。故に『饗宴篇』に至つては『新生』の如き眞正の歷史ではなくなつて了つた。ベアトリチェの變身は同時に抒情詩の變身である、韻律の技倆は依然として優秀であるけれども內容は推論に

過ぎざるものが多くなつた。併し中には詩として優れたカンツォネ二つを數へることが出來る。コールリッヂは其一つを毎年十二回以上十四年間讀んで漸く味が解り始めたと云つた。

『俗語論』(De Vulgari Eloquio)は一三〇四年に書いたもの、俗語を讀むを不思議だと心得て居る學生の一讀を得んが爲にラテン語を用ゐてある。此書はダンテの言語に對する感覺の鋭敏であつたことを證明する。

『王國論』(De Monarchia)は國家に關する中世思想を代表するものである。ローマ人は天の命によりて地上の世界を統一すべきもの、ドイツ皇帝はローマ帝國の正當なる代表者である旨を説いたもので宗敎上の主宰なる法王が地上の事に干渉するを痛く非難した。

猶外にダンテの作と稱せらるゝ斷片の詩が多くあるけれども確なものはない。ダンテの樣な性質の人が作り掛の詩を澤山殘さうとも思はれない。

四九八　神曲

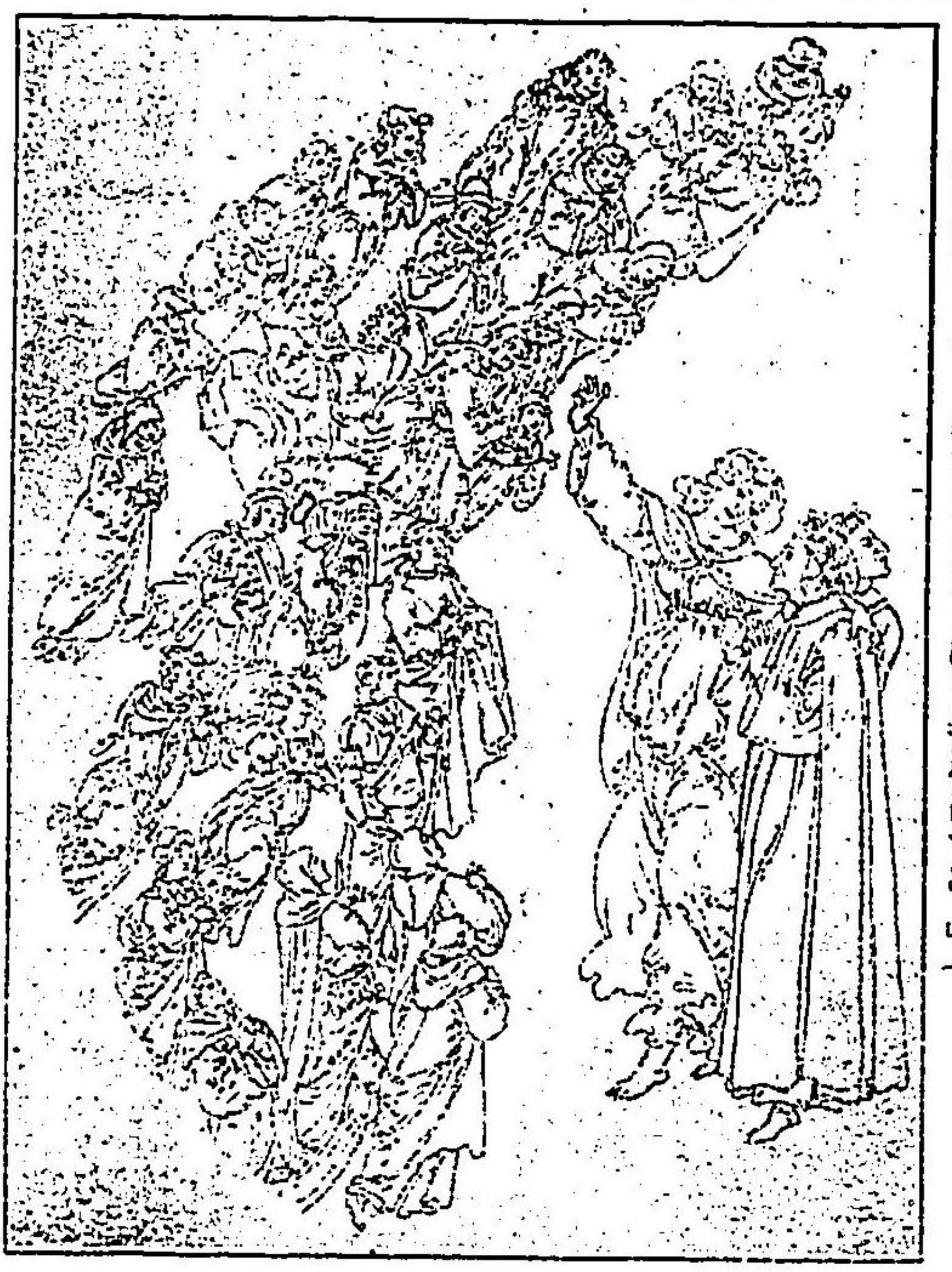
前にも云ふ如くダンテは『新生』の最終の十四行詩に於て天上にベアトリチェを見たる幻を敍して之を彼の詩の題目とせんと欲する旨を云つた。又更に附加して祝福されたる者を讚美するに相應しき技倆を得る迄は彼の女に就きて一言も云ふまい、それ迄は力の限り物學びに勉めて嘗て女性に就て云はれたることなき言葉を彼の女に就て云はうと書いてある。『新生』の書かれたる一二九二年頃に彼は此の如く「天上のベアトリチェ」を描かんとする決心を抱いて居た。而して『天國』(Paradiso)に於るベアトリチェとの再會を描く爲に先づ『煉獄』(Purgatorio)を描き『地獄』(Inferno)を描いて彼の女を見る迄の長く辛き旅路を筆に上せる氣になつたものであらう。それにダンテは此の敍事詩に人生の運命を代表せしめて人と國とを天國に導かんと欲する希望を抱いた。人を救ふの眞理を以てベアトリチェを讚美せんと欲した。一つの主題を得るや之に就て沈思し默考し、布置結構を案じ材料詞藻を撰擇し、以て一篇の完成品を作り上げるのはダンテが製作の特質であつたらしい。神曲に於て然り抒情詩に於て亦然り。

ダンテは孤高の人であつた。彼が同時代の人を卓越するの度はシエキスピーヤが其時代を超絶するの度よりも甚しい。（三重韻（テルツァリマ）の詩形迄が彼の創意であつた樣に見える。）彼の技倆に於て然るのみならず彼の性行に於ても亦左樣であつた。彼は人間社會より離れたる孤行の偉人である、永遠なる他界の市民である、現世に於て容れらるべく餘りに偉大なる人、從て何等目前の事功を擧げ得ざる人であつた。併し彼は一面に於て忠實なる中世の子であつた。彼の『神曲』は中世人の抱いた疑問を最も深刻に感受し、中世人の智識を悉く綜合し來りて、中世人の世界解釋に最も深い色を與へたものであつた。此點に於て『神曲』は最も國民的(時代的)である、云はゞ個人によりて作られたる國民敍事詩である。中世は斃れんとするに先ちて其最大なる綜合を後代に殘した『神曲』の意義の一半は確かに玆にある。

彼の哲學と神學とはトーマス・アクヰナスの哲學と神學とである、彼の科學はアリストテレースの科學である、彼の「悲哀の谷」は個人の罪惡のみに非らずして同時に基督敎會の分裂である。彼の「祝福の國」は人間靈魂の淨化に止らずして同時に法王と帝王との分限を守りたる全盛である。凡ての點に著しい中世の臭がある。從つて後代を豫想する問題と思想とは寧ろ甚だ少い。されどラテン語の權威に盲從せずして俗語を自由に使用したる如き、古典時代の詩人哲學者に對する尊敬に乏しからざるが如き、來るべき文藝復興の

微かなる豫示として見ることが出來る。

『神曲』の結構なる下界廻りの思想は古くからあつた。アッシリヤの敍事詩に既に此類の者あり、ホーマアの『オディセイ』やプラトーの『國家篇』にも此類の趣向がある、中世になつても『ツンダルの幻』其他の物語があつた。併しダンテの暗示を得たのは『エーネイド』の六卷であらう。尤もダンテの地獄廻りは『エーネイド』のそれとは態度に於て異る。ヴージルは哲學者の様に推想した。ダンテは豫言者の如く其視たる處を直寫する。ダンテの『神曲』は約翰の夫にも比すべき默示錄である。而も其幻に見たる國を充すに嘗て彼の四圍に生きたる人、彼と同時代の空氣を呼吸したる人を以てせるは空前の大趣向である。由來簡淨にして而も印象深き細緻の筆を以て、自ら觀察したる處を忠實に鮮かに描き出すはダンテの得意とする處である。此筆を以て此結構を遣れる『神曲』が人の心を捉ふる力恐るべきものあるは怪むを須ゐない。併し『神曲』には今一つの方面がある。ダンテは中に不易なる敎條の系統を具現せんと企てた。此企は曲中に寓言を饒多ならしめた、『地獄』が一般に歡迎せらるゝに拘らず、『天國』及び『煉獄』の左迄愛讀せられざるは此理由に基く。尤も高級の鑑賞家中には世俗の評價を逆に行きて、『煉獄』を以てダンテの靈魂の美と靜寧との紀念碑となし、『天國』を純潔と光耀と聖愛との憑據なりとする者、例へばサイモンヅの如き人も少くはないが、ダンテの哲學の一般に信奉せられざる今日に於て其寓言が讀者の退屈を誘ふは亦やむを得ぬ次第である。



ダンテとベアトリチエ
『神曲天堂界』（第三歌一月宮天）
ボッチチエリー作銅版畫

「微塵曇らぬ玻璃板に、底透き徹る清流に、吾らが面わの浮ぶと純白き額の白玉を見分るより猶遲く淡影幾つとなく物言はまほしげに現れ出でぬ。」

『神曲』の偉大は既に彼の生時に認められた。故市フィレンチェは此偉人を過するに道を誤れるとを後悔して神曲に關する講演を開いた。ボッカチオが最初の講師であつた。十七八世紀に於てはイタリア人の注意が彼の上に向けらるゝと稍々疎かであつたけれども、十九世紀の初葉に至りて彼の名は再び全歐に輝き渡つた。彼の價値の永遠なるは彼と傾向を異にすると著しきラムネエ、シェレー、カーライル、サイモンヅ、マッヂニ、レオパルディ等を崇拜者の列に加へてゐるとによつても分明である。

四九九　ダンテに關する文獻　ボッカチオが彼の最初の傳記々者である。ボッカチオの傳記には大小二種あるが小さいものは後人の杜撰なる改竄であらう。フィリッポ・ヰラニの『フィレンチェ名士傳』（一四〇〇年）中のものは主としてボッカチオによつたらしい。レオバルドオ・ブルニ（一三六九―一四一四）のものはボッカチオの傳に缺けた處を補ふつもりで書かれて居る。其他無數のダンテ文獻中讀者の參考に便なるもの二三を擧げて見れば

Rossetti: Dante and his Circle. 1893.

Scartazzini: Companion to Dante, English translation by A. J. Butler 1895.

Symonds: Introduction to Dante 1890.

M. F. Rossetti: A Shadow of Dante 1884.

Dean Church: Dante. 1878

A. J. Butler: Dante. 1895

Oelsner: Influence of Dante on Modern Thought, 1895.

Franz Xaver Kraus: Dante, sein Leben und sein Werk, sein Verhältniss zur Kunst und zur Politik. 1898.

英譯ではケリイ（Cary）のものとロングフェロウ（Longfellow）のものとが最も多く讀まれてゐる。ドイツ譯ではフィラレテス（Philalethes）のとストレックフッス（Streckfuss.）のとを擧げよう。

第二期

文藝復興期の文學

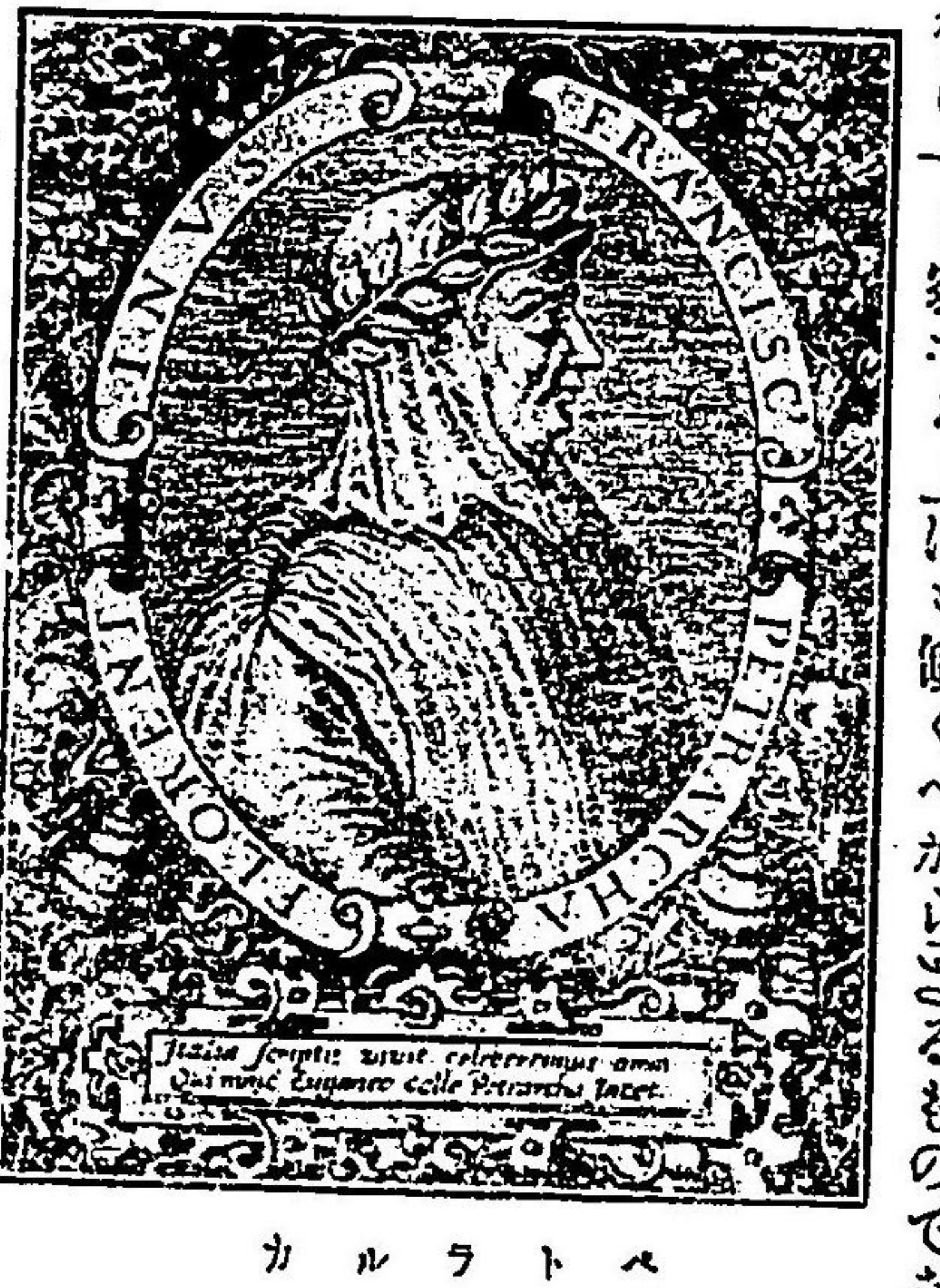
一　文藝復興の先驅

五〇〇　ペトラルカ　ダンテは曠世の偉才であつたけれども人文史上に於ける彼の位置は中世の人文を總括して其紀念の大殿堂を建るにあつて、新なる感情と思想との潮流を起すといふ職分は寧ろ之を他人に俟たなければならなかつた。人を威壓する中世の形式主義を脫して自由な清新な空氣を造るには先づ密閉せる窓戶を開きて清鮮な外氣を注入せねばならぬ。古典研究は此使命を果すべく起つた。古典の尊敬はダンテに於ても之を發見し得るけれども、自ら深く之を研究すると同時に廣く一般の氣運を振興したものはペトラルカである、彼が當時に重きを成した所以は重に此ラテン學者たり人文派（Humanist）たるの方面にあつた彼の著書も分量より云へばイタリア語の者に比してラテン文の方が遙に多かつた併しイタリア語を以て書いた戀愛詩の方がイタリア文學史上の產物としては更に遙に意義が多い。清新な愛すべき戀愛詩は彼を先頭として起つた。後代文學者の摸倣と崇拜とを喚起してイタリア文學史を支配した點に於てはペトラルカのカンツォニイレの方がダンテの神曲に優つて居る。

フランチェスコ・ペトラルカ（Francesco Petrarca）は、フィレンチェより追放されたるギベリン黨員の子として、一三〇四年アレッツオに生れた、彼の父は遂にフィレンチェに歸るを得ずしてローマ法皇客寓の地なるアヸニォン（Avignon）に遷つた、ペトラルカは父の命によりて法律を研究すべくボロニヤ大學に入つた。此處で後にロンベの僧正（Bishop of Lombés）となるべき一青年と交を締したとが緣になつて其兄コロンナ（Cardinal Colonna）大僧正の厚き保護を受くるとなつた。彼がアヸニォンの花やかなる交際社會に立交る様になつたのは此緣による。初てラウラ（Laura）を見て激しき戀に落ちたのは一三二七年四月六日春靜かなる頃であつた彼は其愛人に解し易からしめむが爲にイタリア俗語を以て其戀を歌つた。古典崇拜のペトラルカはラウラの爲に非ざればイタリア語を以て詩を作るが如き「俗」なとをしなかつたであらう。併し花やかな交際社會も激しき戀も古典學者としての活動を妨げなかつた。彼の名聲は愈々昂つた、其間彼はパリを訪ひベルギーからラインの地方にも旅行した、一三三五年彼は僧職に就きて法皇の保護金を受くるとなつた。彼が始めてローマを訪へるは一三三六、七年の間である、彼はローマの荒廢を見て之を法王の久しく不在なるに由るとなし、法王廳の有司に向ひて歸府を勸めたけれ共聽かれなかつ

た。從てアギニオンも彼にとりて厭はしき土地となつたのでソルガ河邊のヴォクリュウズ(Vaucluse on the Sorga.)に退いて美しい山水の間に俯仰した。此間ラウラとの間に既に男女の二兒を擧げて居た。彼は此處でラテン語のローマ史を書きかけたが間もなく之をやめて同じくラテン語の敍事詩『アフリカ』を始めた。四〇年になつて同じ日にパリとローマから月桂詩人たらむとを申出されたが彼は後者を受くるとに決心して四一年四月八日ローマに赴いて之を受けた。其後或は法王の使節としてナポリに行き、或は熱烈なる愛國詩を作つてゐたが四八年の大疫癘は其愛人ラウラをも奪つて了つた。彼の悲哀はダンテのそれの如く崇高では無かつたけれども日を經るに從つて其深さと優しさとを加へて來た。學者として人文派の運動に携り、實際家として外交の衝に當る間にも彼が詩作の唯一の題目は情人ラウラの俤であつた。彼の最後の力を注いだ物は實にラウラの讃美なる『勝利』(Trionfi.)である。ボッカチオとの交際も亦其晩年を飾つて居る。一三七四年ペトラルカはアルクワ(Arqua.)の隱拔で死んだ。

ペトラルカはイタリア文學の代表者として當時の世界に鳴つた人の抑も始めである、ダンテも其生時に於ては唯イタリアのダンテであつた。ダンテより小なるペトラルカが此點に於て先人を凌駕するは一つはアギニオンにありてフランスの社會に觸れたためであらう。一つは專門的文學者が社會に要求せらるゝ機運に際會した時勢の推移である。ペトラルカは中世の社會が近世に移らむとする時期に生れた。此機運を助成し此機運に推し出された。思想界に於て此機運を代表する者は人文派の古典復興運動である。彼は此運動の先覺であつた。ラテン文學を尊崇して特にシセロに推服した。ギリシア語を解しなかつたけれどもラテン譯によりてホーマアやプラトーを讀んだ彼のラテン詩は到底古典の典雅なるに及ぶ筈もないし、殊に彼は全然抒情詩人で敍事詩の才がなかつた爲に其『アフリカ』(Africa.)は見事に失敗したが、併し當時のイタリア人には俗語の作よりもラテン語のそれが多く影響した。又ラテン語の散文には『浮沈兩途の救濟』(De Remdiis utriusque Fortunae, 1356)・『兩岐亡羊錄』(De znuctaliorum Ignorantia, 1361)・『遁世論』(Secretum, sive de Contemptu Mundi. 1342)等がある。甲は幸運及び不幸に際して自ら守る所以を論じたるもの、乙は人文學者としての自己と基督公敎信者としての自己の矛盾煩悶を敍したるもの、丙はラウラに對する情火と道德感情との衝突を述べたるもの、ルウソオの懺悔錄の先蹤として見るとが出來る。書翰集中『後昆へ殘す書翰』(Epistola ad Postero.)も亦自傳である。併し彼のラテン散文中最も重要なるは其書翰集であつて、ペトラルカの人物を見る上にも、當時の風俗人情を察する上にも缺くべからざるものである。王侯に宛たる書翰はペトラルカの古代的政治を憧憬する理想家なるを示し、エンツウ山の攀登を敍し、ナポリの暴風を記したるものは敍事文として頗る興味がある。


FRANCISCVS PETRARCHA FLORENTINVS
Italia scriptis vivit celeberrimus omni
Qui nunc Euganeo colle Petrarcha jacet.

ペトラルカ

ペトラルカのラテン文は過雨である、地に潛みて禾穀を養ふ濕潤となれども其痕は人の目より消えた、併し彼のイタリア詩は水道の中に集りて永へに絕えざる水晶の流れとなつた。ケーレー(Cayley)の云へる如く。ペトラルカの『カンツォニイレ』(Canzoniere)程の戀愛世界の種々相を盡したものはない。戲れと眞面目と、喜びと悲みと、執着と自責と、恨みと反抗と服從と尊崇と友愛と恨悔と、はた次第に他界の希望と景仰とに導き行く宗敎的慰安と、凡て之を具備してゐる。唯缺けてゐるものは戀を得たる歡喜である。『カンツォニイレ』二部の中第一部は切なる求愛である、第二部は死別の悲哀である。ラウラは靈氣を吸ふ理想界の女性の如くに描かれてあるけれどもペトラルカの戀は純然たるプラトニック・ラヴでは無かつた。

『カンツォニイレ』に於ける排列の順序は製作年代の順序であるらしい、第一部に於てソンネット第二十二に至る迄は寧ろ幼い。其以後第六十に至る迄は無比の優婉を盡してゐる。第六十以下になつて稍々劣作を交ゆる樣になつたのはラウラの病に關する心痛に影響されたものであらう。第二部に至つても其始めが比較的に振つて居ないのは其悲哀がペトラルカの詩才を痲痺させたものであらうか。

『勝利』は中世趣味の寓言詩で、戀愛、純潔、死、榮譽、時間、永遠等の力を歌つた者である。其中最美きはラウラ現れてペトラルカに語る『死の勝利』の一章である。此書は一三五七年に書き始て死に至迄未だ著者の手を離れなかつたものである。

ペトラルカをして終生變らざる戀に熱せしめたラウラとは如何なる人であつたか。ラウラ假設說の信ず可らざるは『カンツォニイレ』の感情や事情の實際らしいのに照しても明かであるが其如何なる女性なりしやに就ては論爭今に決せぬ。

ペトラルカは一局部に於て絕對的完全に達したる詩人と云つてよい。其領域內に於ては何人の追從をも許さない。而て彼の最大長所は優秀なる詩想の滾々として流れて聊の無理を存せざる所にある。

五〇一　ボッカチオ

ジオヴンニ・ボッカチオ(Giovanni Boccaccio)はイタリアに模範的散文を與へた、近世小說家の鼻祖としての彼が人文史上の地位は極めて重大である。

フィレンチェの一商人の(恐くは)庶子として、ボッカチオは一三一三年に生れた。彼は自らチェルタルド(Certaldo)のボッカチオと稱するけれども生れた處はフィレンチェらしい、ナポリの大學に法律を學んで三八年にはフィヤンメッタ(Fiametta)と戀に落ちた。フィヤンメッタ本名はマリヤ、當時既に人妻であつた。『フィロコポ』(Filocopo)『アメトオ』(Ameto)『フィヤンメッタ』等皆マリヤの爲に書いた者である。一度フィレンチエに歸つたが四五年再びナポリに來て女王ヨアンナ(Joanna)の保護の下に『デカメロオネ』(Decamerone)に着手した。併し四八年の大疫癘で父が死んだので翌年再故市へ歸つて其以後は生れ變つた樣に眞面目な人となつた。信用すべき外交家、熱心なる古典研究者となつた。一三五〇年にペトラルカを訪ひて交を締したと、晩年にフィレンチエ市の囑を受てダンテの『神曲』を講じたと等は彼の生涯に於て逸すべからざる事件である。善良なるボッカチオは我を忘れてダンテを崇拜し、ペトラルカを尊信した。彼の死は一三七五年十二月二十一日である。

ボッカチオ

『フィロコポ』は一三三九年に書かれたボッカチオが最初にして最長の作である『フロリとブランシュフルウル』(Lay of Floris and Blanchefleur)の歌を種にした物語で筋もだれて居るし、文章も拙く氣取つて居るけれども、文學史上から見れば律語の物語が純粹の小說となる過渡期を表示するものとして重要である。

『アメトオ』も優れた作ではないが風俗誌（ジャンル）として、又種々の物語を一篇の中に鏤めるといふ趣向を始めた田園譚として、注意すべきである。牧女フィヤンメッタの語る處は或度迄自傳であらう。

『フィヤンメッタ』になつては自傳としての眞實が一層加はつて來た。筋は女主人公フィヤンメッタがトスカナの一靑年パンフィロ(Panfilo)に對して懷いた不幸な戀を物語りて戀人の變心を咨嗟するに過ぎない。併しボッカチオが自らを薄情者と考る譯がないから、恐らくは女主人公の口を藉りて自分の心中を語つたものであらう。近世心理小說の先驅である哀情の眞實にして自然に忠なる處、主人公の獨白長きに失して時に讀者を倦怠せしむる處ゲーテの『ヱルテル』に似て居ると云つてよい。文體は年代と同く『フィロコポ』と『デカメロオネ』の中間に居る（四六年の作だ）修辭に凝り過ぎて形容詞の五月蠅い點はあるが一般に一通の雄辯に達してゐる。從來詩の專有と考られた情熱の表出を散文に移し得たのは手柄である。

『デカメロオネ』に至つてボッカチオの散文は完成した。『フィロコポ』以後僅に十年にしてボッカチオの名は不朽となつた。此の如き進歩をなしたるは驚くべき事である。此書の第一の功績は宮廷の優麗にして往々技巧を偏重する文章と活氣あれども時に卑俗に失する市井の文章とを調和し得たことである。明晰にして力ある文章は兩者の長所を合せて其短所を受ない。由來ボッカチオは其人物に於ても臺閣虛飾の風に適せずして江湖の寬濶なるに適する人であつた。快活にして氣取氣なきフィレンチェ市民の好標本であつた。『デカメロオネ』中の物語の時として卑猥に過ぐるもの多きを難ずる人があるけれども之は彼の時代を考へて見ねばならぬことで、內的描寫の存在は拒むことが出來ぬけれども大體より云へば禮讓坦懷親切等の美德に富んだ話が普通である。

『デカメロオネ』の趣向は四八年の大疫癘にフィレンチェを逃げ出した紳士淑女が一人で十宛十日間話し合つた物語を書き集めたことになつてゐる。話材はボッカチオの創意に成るもの少く大抵は東方の話フランスの話若くは當時あつた事實譚から成立つて居る。『アラビア夜話』に見るが如き東洋的結構を歐洲文學に輸入したのは恐くはボッカチオが最初であらう。泉のほとり、綠の木陰など談話の場所の詩味が物語其者よりも却て人の心を牽く。猶ボッカチオの散文には『デカメロオネ』以後『コルバッチョ』(Corbaccio.)『ウルバノ』(Urbano.)の二篇がある。

ボッカチオは又其敍事詩『テセイデ』(Teseide. 1340)と『フィロストラトオ』(Filostrato. 1340)とに於て八行節（オクテエツ、スタンツァ）が敍事詩に適當なることを示した。前者は彼が其愛人に寄せて謝意を表したるもの、後者は竊に女の不信を諷するもの、前者は堂々たる英雄詩にして、後者は色彩の爽々たると情緒の切實なるとを以て前者を凌駕してゐる。其後に出でたる『ニンファレ・フィエゾラノ』(Ninfale Fiesolano.)はディヤナの法律に背きて男を戀したるニンフの悲劇を歌ひたる者で、ボッカチオの技倆が一段の進歩を加へたるを示してゐる。彼が若し續いて詩を作つたらば此方面に於ても第一流たるを得たであらう。其他ナポリ時代の作にダンテを摸倣した『アモロザ・ヴィジオネ』(Amorosa Visione.)といふ三重韻の寓言詩がある。

ボッカチオは偉大なる創意者であつたイタリア人に模範的散文（デカメロオ）を與へ、英雄譚（ヒロイック、ロマンス）（フィロコポオ）田園譚（パストオラル、ロマンス）（アメトオ）を與へた、敍事詩に於ても亦八行節の用法を示した。

五〇二 其他の詩人 ペトラルカとボッカチオとは三百年代の文藝復興期（Renaissance of the Trecentisti period.）に於て相對峙せる二個の峻嶺である。併し同時代の文人は兩者に比して甚だ小さかつた玆では二篇の敎訓詩と――フィレンチエの人ファチオ・デリ・ウベルティ(Fazio degli Uberti. 一三六七歿)の三重韻詩『世界論』(Ditamondo.)とフォリニオの僧正フレデリコ・フレッチ (Frederico Frezzi, Bishop of Foligno 一四一六歿)の『四つの國』(Quatriregio.)と――二人の詩人――フランコ・サッケッティ(Franco Sacchetti.)及びジョヴンニ・フィオレンテイノ――(Giovanni Fiorentino.)の名を擧げて措くに止める。短篇小說家（ノヴェレット）としてのサッケッテイとフィオレンティノはイタリア小說の發達を敍する際に再び之を說かう、前者の『あはれ山に住む美しき牧の少女よ』(Ovagha montanine pastorelle.)といふカンツオネは當時頗る人口に膾炙したものであつた。凡そ當時の詩の諧調に優れたるは音樂に合せた爲であらう。

二 一四〇〇年代の文學

五〇三 古典の研究――前半期 ペトラルカ、ボッカチオ等に依て始められたる古典の研究は幾多の學者や大學の熱心を喚起した、一四〇〇年代(Quattrocento. 十五世紀)に入りてラテン、ギリシアの詩人學者は其著作によりて再びイタリア人の胸中に復活した。所謂人文運動に參加した學者には非常な天才が少かつたけれども、皆醉へるが如き熱心を以て古代文化に傾倒した、王侯より一般市民に至る迄景仰に耀く眼を擧げて此等の學者を仰ぎ見た、王侯は競ひて學者を聘し之れに重職を授けた、學藝と智識とは少年の時人生の五月にも優れてめでたきものとされた。殊に東西の敎會を合一せんとする目的を以て開かれたるフェララの會議（一四三八）と、幾多のギリシア學者をローマに移轉せしめたるコンスタンチノオプルの陷落（一四五三）とはギリシア、ラテン兩文明の接觸を親しからしめて古典研究の熱は愈々加はつた。又印刷術の發明は大に智識の擴布を助けた。而して此運動に最も有功であつた者はボロニヤを始め處々の大學と、學者の團體なる種々の學會（アカデミイ）であつた、一般人文史上に於ける古典復興の意義は玆で論ずるに及ばぬけれども其文學史上に於ける結果は寧ろ後に至りて始めて現れた。中葉ロレンツオ・デ・メディチの出る迄四百年代初葉の文學には何等の創意を見得なかつた、之一つは古典を尊崇するの餘り其衒學的摸倣に陷つたのと、一つはギリシア語をラテン譯するの必要等より自然にラテン語を多く用ゐてイタリア語を用ゐぬ樣になつた爲であらう。當代初葉の文學史上意義は一般人民の趣味の敎練にありて創作的天才の生現にはなかつた。

初葉に於て見るべきものは散文殊に歷史であつた、而も其大部分はラテン語であつた。文藝復興期の歷史を論ずるには十四世紀の後半に生活したフィレンチエ人ジォヴンニ・ヴィラニ(Giovanni Villani 一三六八歿)を看過する譯に行かぬ。彼は純樸の筆を以て公正無二の敍述を遣つた、經濟事情其他日常生活のことに注意を拂ひたる事實も亦特筆に價する。十五世紀に入りて其甥フィリッポ(Filippo)は『フィレンチエ名士傳』を書いた。

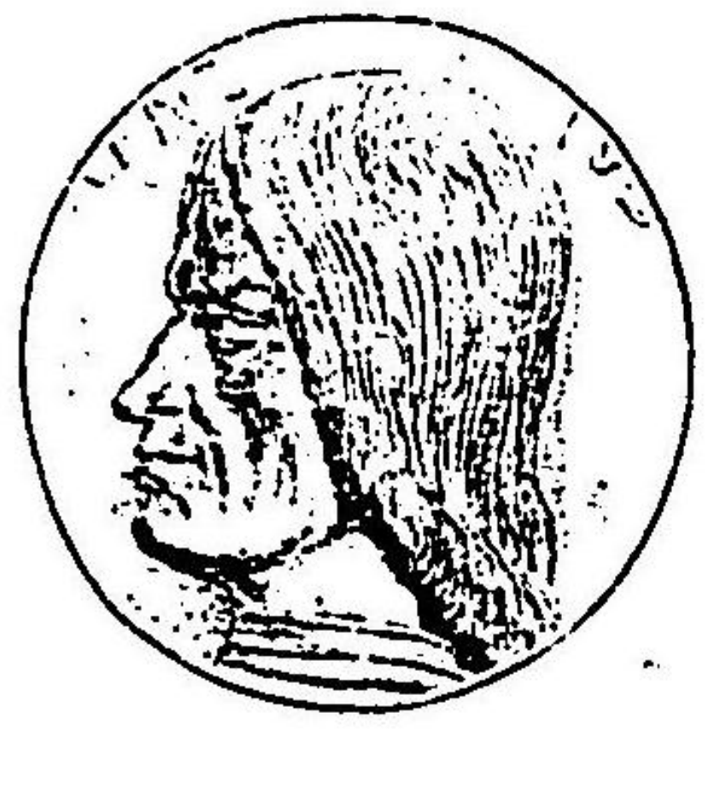
エネア・シルヸオ・ピッコロミニ――後法王ピオ二世――(Enea Silvio Piccolomini――

Pio II 一四〇五—六四）は凡てラテン語で書いたけれども其人物は十五世紀文士の典型とも云ふべく、都雅なれども恒心少く自制力に乏しくして而も人文に對する渇仰燃ゆるが如き人であつた。彼が法王となつたとは當代に於けるペンの力の偉大なりしを想見せしめる、彼の著には其時代を註釋せる歴史上の書と、小説『ユウリュヤルスとルクレチャ』（Euryalus et Lucretia）とがある。

ジオヴンニ・ボンタノ（Giovanni Pontano 一四二六—一五〇三）も亦多能多才の士であつて優れたる著書が多いけれども凡てラテン語で書かれて居る。諷刺家としては鋭く、風俗記者としては慧眼に、抒情詩家としては熱があつた。其他建築家にして學者なるアルベルティ（Leone Battista Alberti, 一四〇四—七二）にイタリア語を以て書ける『家庭篇』（Della famiglia.）及び論文『イチャルキャ』（Iciarchia）短篇小説『イッポリトオとレオノラ』（Ippolito e Leonora.）等あり、フランチェスコ・コロンナ（Francesco Colonna.）はラテンともイタリアとも就かぬ言語を以て冒險に富める『ヒュプネロトマキヤ・ポリフィリ』（Hypnerotomachia Poliphili.）を書いた。

五〇四　ロレンツオ・デ・メディチとポリチャノ

メディチ家はコジモ（Cosimo de' Medici. 一三八九—六四）の時から人心を收攬し藝術を保護して來たが其孫ロレンツオ（Lorenzo. 一四四八—九二）に至りては、一代の學者文人美術家の重なる者を其宮廷に集めた。併しロレンツオは唯文藝の保護者たるに止まらずして又自ら詩を作つた。彼及び彼の友ポリチャノの詩は一面に於て彫琢精錬して古典の典雅に至るを念とすると共に一方に於ては野歌俗謠の天眞に聽いてこれを自家藥籠中のものとした。『アンブラ』（Ambra.）『鷹狩』（La Cacciacol Falcone.）『バルベリヤのネンチャ』（La Nencia di Barberino.）等の優秀なるものに至りてはこれを牧歌の中に數ふることが出來る。また戀愛を歌へるカンツォニは、感情の深さよりは寧ろ典麗なるを以て優り、ロレンツオが文明の紳士にして歡樂の人なるを示してゐる。その戀愛は最早ダンテの如き天上のものではない、『謝肉祭の歌』（Canti Carnascialeschi.）の如きは、時に甚だしき肉臭を交へて居る、併し彼れには一面に嚴肅の方面ありて、その子ジォヴンニ、（後の法王レオ十世）に與ふる書翰には、多くの道德的感情を現はし、宗教詩『讃美』（Laudi.）の中には往々赤心より出る敬虔の聲を藏する。


ロレンツオ・デメディチ

ポリチャノ（本名はアンゼロ・アンブロヂニ）（Poliziano—Angelo Ambrogini. 一四五四—九二）はモンテプルチャノ（Montepulciano.）の生れなるを以つてこの名を得た。ロレンツオの客として滿廷の尊敬を集めて居たがロレンツオの死後その子ピエロの代になつてはフイレンチエに政治上の騷亂多くポリチャノも失意の中に死んだ。彼れは優れたる古典學者であるけれどもその文は洗練をこれに學んで衒學の餘弊を受けなかつた、彼のラテン詩の「術よりは熱に富む」を以て非難されたるは偶々彼の詩人の資なるを證するに過ぎない。彼れの抒情的悲劇（若くは歌劇）『オルフエオ』は後の戯曲を論ずる際に讓るとして、彼れの未完の詩『ジォストラ』（Giostra.）はロレンツオの弟ジュリヤノの鬪武を詠じたるもの、彼れの戀人シモネッタをも引き來たりて頗る美しい詩篇である。彼れは此詩に於て八行節の理想的用法を示した。彼れの詩の美は古典の形に感覺の美を盛りたる所に存する。併し彼れは同時代の人と共に自己の詩作よりも古典學者としての活動を重視した。此方面に於ける彼れの功業は古代人の間に鬱勃したる驚くべき生命を生きたる興味として同時代の人に注入するにあつた。

茲に一言したきはロレンツオやポリチャノを動かした俗謠のとである。トスカナには十三世紀頃より此種の歌謠ありて口より口に傳へらるゝ間に民族的に精錬されて居た。他地方に於ても同樣であつたらしいが就中シチリャには其數が多かつた。此俗謠は二種に別たれる。一つはリスペッティ（Rispetti.）一つはストルネリ（Stornelli.）前者は隔句に押韻せる四行又は六行より成りて之に偶韻（カツプレツト）の二句が附加されたもの、後者は唯三行の詩で首尾兩句に押韻されたものだ。此等の形が發達してマドリガル（Madrigal.）を生じたけれど野人は猶原始の形で謠つた。此等の小歌は想像の優婉と情緒の純淸とを以て文學の空に小さき星の如く瞬いて居る。

五〇五　傳奇詩　イタリアの傳奇詩（シヴリツクポエトリイ）の源は主もに『ツルピンの記錄』（Chronicles of Turpin.）と稱せらるゝ者に存する。此書は八世紀のものと稱せらるれども其實は十一世紀に成た者である。十世紀十一世紀に於るサラセン人デンマルク人の侵略等は異教徒に對する憎惡心を増長せしめた、シャーレマン及其期門（パラディンス）を異端の征服者として理想化したるは卽此記錄である。此記錄の記者は中世の『イリアッド』とも稱せらるゝ『ロオランの歌』（Chanson de Roland.）に負ふ處多かつた。之はフランスに於て屢々詩材に用ゐられたが始めてイタリア文學に現れたのは散文の武勇譚『フランチャ實錄』（I Reali di Francia.）である。併し之が詩に用られたのは十四世紀の初葉であつた。『アントナのブオヲ』（Buovo di Antona.）『スパニャ』（La Spagna.）『フエブス』（Febus.）『女王アンクロンヤ』（Regina Ancroja.）及近年發見せられたる無名の一篇等が卽之である。

ルイジ・プルチ（Luigi Pulci. 一四三二—八七）の『怪人モルガンテ』（Morgante Maggiore.）は最後のものを種にして居る。眞摯なる宗教心と誠實なる道德觀に交ゆるに物もなげなる惡謔を以てする處批評家をして大に解釋に苦ましめた。通俗神學に對する猛烈なる攻擊は熱心なる公教主義の章句と雜居して居る。蓋し此篇は當時イタリアの智識階級に普ねかりし精神的無政府狀態を代表するものであらう。彼等はザヴナロオラの信者となる能はずされば迚て胸中の宗教的要求を無視することも出來なかつた。『モルガンテ』の影響は大きかつた。大沙翁も『オセロ』に於て此書の影響をとゞめてゐる。近世に入りて現れたる重なる諧謔詩中の最初のものとして記憶すべきのみならず、眞面目な部分（殊にオルランドの死を敍する邊の高潔なる哀情）を見ればプルチは決して諧謔の外に能なき野卑なる人に非ざりしを想見し得よう。彼の傳記は殆んど不明であるがロレンツオの宮廷にありて其信任を得たとだけは解つてゐる、此敍事詩はロレンツオ北堂の請求によりて作たものと云はれて居る。

レッジョに生れてフエルララ侯に仕へたボイヤルドオ（Matteo Maria Boiardo. 一四三四—九四）の作『戀のオルランドオ』（Orlando Innamorato.）も前者と同じ材料を使用してゐる。冒險續出し風光頁を追ひて新に、讀者をして知らず知らずの間に其脚色の迷路を辿らしめる。而も脚色こそ荒唐なれ其主要人物は皆人間の血肉を備へて讀者の興趣を牽引する現實の男女にして寓言と抽象とを滿載する中世的の物語ではない。レッジョに生れたるボイヤルドオはトスカナ邊に生れた人の

様に優秀なる言語を使用し得なかた、從て其律語はイタリア人の耳には粗野に響く處が有たけれども、要所に至るや其悲哀は切に其情は激する。半ば都雅にして半ば無智なる初々しさ、半ば古典的にし半ば浪漫的なる感情の隈取は、若き文學を外にしては見るを得ざる味ひである。

ボイヤルドオの詩句を改竄して此美しき物語をイタリア人の耳に快からしめむとした人が二人あつた。ドメニキ（Domenichi.）のは毒にも藥にも成らなかた。ベルニ（Berni.）の『改修』（Rifacimento.）は滑稽の分子を強めて詞句を典雅優麗にしたけれども原詩の高調を低めて諧謔詩に類するものとして了つた。其後久しく改修の方のみが行はれて十九世紀の中葉迄原詩は忘られて居た。ボイヤルドオには『オルランドオ』の外に喜劇『テイモネ』と數十の抒情詩がある。

五〇六　散文　十五世紀を通じて古典的と稱するに足る散文を書いた者はサンナッツァロ一人と云て宜しい。彼はスペイン種のナポリ生れであつた、彼の人格は忠誠高潔であつた。ナポリ王のフランスに移さるゝや彼は其主に從て異郷に放浪した。

サンナッツァロ（Jacopo Sannazaro. 一四五八―一五三〇）の傑作は一四八九年に完成したる田園譚『アルカディヤ』（Arcadia.）である。全篇の調子は徹頭徹尾古典的で、現實を忠實に描かんとする努力を見ることが出來ないけれども、其敍述は典雅にして最も詩情に富んでゐる。缺點は其單調と其ラテン臭味とだ。此點に於てサンナッツァロはボッカチオ初期の散文の惡影響を受けて居る。

サンナッツァロの影響は大きかつた。併し摸倣者の多數は愈々單調に陷つた。内容よりも形式を重んじ、偏に典麗と洗練とを覗ふは四百年代文章の通弊であた。

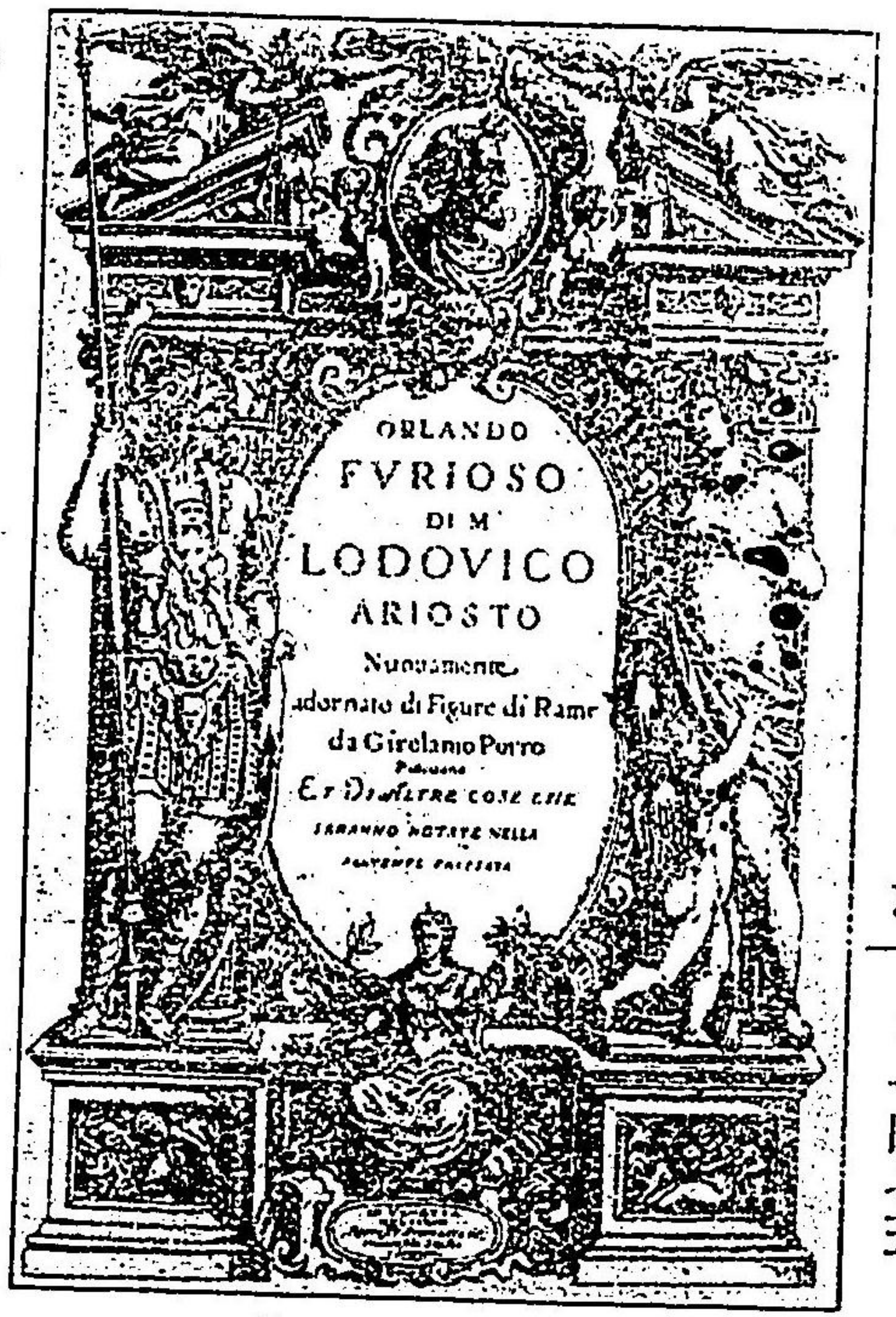
三　一五〇〇年代の文學

五〇七　アリオストオ及び其摸倣者　一五〇〇年代（Cinque Cento 十六世紀）は文藝復興の頂點にして同時に其終末である其結果として現れたる産物は美術史上に於て最も偉大であつた。文學の方面に於ては多くの新意を出したとも非常な天才を産んだとも云ひ難いけれども、雅馴な典麗は模範的文章（散文律詩）を生み出して當時猶粗野なりし他の歐洲文學に先例を示したのは其功績である。

ロドヴィコ・アリオストオ（Lodovico Ariosto 一四七四―一五三三）は此時代に於ける大名の随一である。彼はレッジョの貴族の子として生れた。父の命によりて法律を學んだけれども彼の好む所は古典の研究にあつた。始めエステの大僧正（Cardinal of Este.）に仕へ、後其兄弟なるフエルララ公の宮廷に移つた。彼の有名なる敍事詩『獰猛オルランドオ』（Orlando Furioso.）はエステ家祖先の名譽を表現せんがために作られた。併しエステ家兄弟の宮廷に於て彼は十分の知遇を受くることが出來なかつた。彼の唯一の知遇者はヴァスト侯（Marquis del Vasto.）であつた、彼は其晩年を喜劇の創作と『オルランドオ』の添削とで送つた。彼は又其續篇をも書き掛けたけれども第五歌迄書いて、一五三二年に死んだ。

『獰猛オルランドオ』はボイヤルドオが『戀のオルランドオ』の續篇として書かれたものだけれども、アリオストオは其作の中心をエステ家の祖先と稱せらるゝルジエロ（Ruggiero.）とブラマンテ（Bramante）の結婚のことに移した。ボイヤルドオのもアリオストオのも共にエステ家を飾らむ為に書いたものであるが、ボイヤルドオのは讀者をして製作の動機を忘れて讀み耽らしむることが出來るけれどもアリオストオのに至りてはエステ家が毎度鼻につくを免れない。蓋アリオストオは騎士に非ずして廷臣である。從て其詩の上にも誠實と簡素の味に於て前人に劣らざるを得ぬ。彼の長所は寧ろ其文體の洗練と話術の巧妙に存する。作中に著れたる思想も道德觀も凡て當代流俗の最良なるものを代表するに止り、深くキビ〜したる所なきは惜むべきであるが、溫藉なる皮肉、創意ある譬喩、雅馴なる詩句は彼が詩才の卓越せるを示して遺憾がない。

『獰猛オルランドオ』は當時のイタリアに於てホーマーよりも持囃された。從て彼の後には一聯の摸倣者が出た。彼等の作の重なるものを擧ればルイヂ・アラマンニ（Luigi Alamanni.）の『ジロオネ・イル・コルテエゼ』（Girone il Cortese）ベルナルドオ・タッソオ（Bernardo Tasso. 一四九三―一五六八）の『アマディヂ』（Amadigi）少タッソオの『リナルドオ』（Rinaldo.）等である。悲劇『ソフオニスバ』（Sophonisba.）の作者トリッシノ（Giovanni Giorgio Trissino. 一四七五―一五四九）にもゴート擊退を歌へる敍事詩がある。これは敍事詩としては失敗であるが、イタリアに於て無韻律をこの種の作に應用したる最初の作として注意す可きものである。


ORLANDO
FVRIOSO
DI M.
LODOVICO
ARIOSTO
Nuouamente
adornato di Figure di Rame
da Girolamo Porro
Padouano
Et di altre cose che
saranno notate nella
seguente facciata

アリオストオ作
『オルランドオ・フユリオソ』原
（作者肖像入）

五〇八　マッキヤベリ及び其他の文章家　此時代に於ける一群の政論家、歷史家中最も出色の者はマッキヤベリ（Niccolo Macchiavelli. 一四六九―一五二七）である。彼はフィレンチエに生れて法律を學び、其共和政府に仕へて畫策する處多かつたが、一五一二年メディチ家回復後、或は獄に投ぜられ、或は與黨に疑はれて、數奇の中に其生を了へた。彼の主著は『君主論』（Il Principe.）及び『フィレンチ史』である。彼は峻烈にして皮肉なる觀察者であつたけれども、其内實は創才に富める理想家、衷心よりの憂國者であつた。

之に反してギッチャルディニ（Francesco Guicciardini.）の眼中には徹頭徹尾實際あるのみであつた。彼はフエララ及びバヅアに法律を學び、其學說に於て法權に大反對なるに拘らず法王レオ十世に仕へてその最も忠實なる僕となつた。彼の主著『現代史』はイタリア衰亡史とも稱すべき悲歌の文章である。あくまでも彼の行爲と言語とが皮肉なるに拘らず亦愛國の士であつた。以上兩者は當代歷史家の最も傑出せる者であるがその他猶優秀なる史家が少からず居た。彼等は一般人民が未だ讀者として十分の趣味と理解とを缺いて居る時代に生れたるが故に、餘儀なく王侯保護の下にその史筆を揮はなければならなかつたけれども、これが爲にその公正を失することは極めて少かつた。ナルディ（Jacopo Nardi.）の『フィレンチエ史』（一四九四年より五三〇年に至る）は

マッキヤベリ

その記質の精確にして隱蔽する處なかりしが爲に生前に於て出版するとが出來なかつた。ヷルキ(Benedetto Varchi.)は其『フィレンチェ史』(一五二七年より三八年に至る)の忌憚なき記事の爲に怨を買ひて暗殺の厄に遭はむとした。その他『フィレンチェ通史』を書けるアンミラトオ(Scipione Ammirato.)あり『ヹネチャ史』を書けるベンボオ(Pietro Bembo. 一四七〇—一五四七)あり、殊にベンボオは詩に於ても散文に於ても文體の流麗想像の豐贍を以て一代に鳴つたが恨むらくは獨創を缺き精透を缺いて居た。

更に傳記の方面には平明多趣なるヷザリ(Giorgio Vasari. 一五一二—七四)の『巨匠傳』と圭角多き個性と其接觸したる社會の空氣とを躍如たらしむるチェリニ(Benvenuto Cellini. 一五〇一—七一)の自傳とがある、又カスチリオネ (Baldassare Castiglione.)の『宮廷の人』(Cortegiano)は當時イタリア上流社會の理想的生活を描いて有名なもの。猶フィレンツオラ (Agnolo Firenzuola 一四九七—一五四三)は當代文士の代表的人物にして『戀の對話』(Dialoghi d'Amore.)の著あり、アレティノ(Pietro Aretino. 一四九二—一五五六)は特別の能なきも大膽なる摘發家として一代を横行した。

五〇九　抒情詩人　内容よりも形式を尙ぶ此期の特徴は抒情詩にも現れた。此期の抒情詩人にしてペトラルカの摸倣を事とせざりし者は少い。ペトラルカ崇拜の先例をなしたる者は前代のサンナッツァロである。併し彼には形式の流麗を外にして猶個人的感情の活きたるものがあつた。當代のベンボオとモルッア(Francesco Maria Molza. 一四八九—一五四四)とに至りては意味なき諧調、耳に快きも心に愬ふる處なき韻律になつて了つた。ベンボオは四十の抽斗を具へて其詩をば常に彼より此へと順々に入換へ、入換へる度に之を訂正して行つたといふとだ。始めは如何に感情に滿ちた詩でも第四十の抽斗を出る頃には殺されて了ふのが當然である。但しモルッアに於ては『ニムフア・ティベリナ』(Ninfa Tiberina.)丈が優れた作である。

一代の詩人は翕然としてベンボオ—モルッアの旗下に集つた。併し中には其天性により其主義によりて多少ペトラルカの詩風に離れたる者もあつた。而して離るれば離るゝ程生きて居た。此類に屬する人を擧ぐれば——ベルナルドオ・タッソオ (Bernardo Tasso 一四九三—一五六九) は形式の美に於て缺點があつたけれども其感情は高雅であつた。ギディッチォニ(Guido Guidiccioni 一五〇〇—四一)の詩は一般に平板であるけれども祖國の逆運を歌ふ際には不思議に哀切悲痛の高調を響かした。カザ(Giovanni della Casa. 一五〇〇—五六)の詩の或物は詩材を戀愛以外に取りて雄大莊重の聲を成した。コンスタンツォ(Angelo di Constanzo. 一五〇七—九一)の特色は典麗であつたけれどもそは云ふに價する情内に動きて然る後に其詩となるのであつた。其他女流詩人には才名一代に高かつたヸットリア・コロンナ(Vittoria Colonna 一四九〇—一五四七)戀のために身を果せしスタンパ(Gaspara Stampa 一五二四—五三)が居る。併し此等の中に於て最も詩人の資を備へたるはナポリの人タンシロ(Luigi Tansillo.)である。彼の詩は技巧の妙よりも感情の強烈を以て優れてゐる。彼の詩神は優れて冷かなるヷスト侯夫人(Marchioness del Vasto.)であつた。彼の十四行詩の大部分は戀の疑、戀の嫉みを歌つた白熱の情歌である。其他の作中最も有名なるは『葡萄作り』(Vendemmiatore.)であるが。敎訓詩『イルポンデレ』(Il Pondere)『ラ・バリヤ』(La Balia)及び『歌集』(Capitoli)は快活治悦の情を湛へてゐる。ミケランゼロも亦抒情詩を作つた。彼の詩は遒牙にして甚だ雅馴ならずと雖も、其心に潛む恐るべき力と外面に現れざりし内心の優しさとは共に其詩(殊に戀愛詩)に現れてゐる。又宗敎詩に於てはマニオ(Celio Magno.)の作とフィヤンマ(Gabriel Fiamma.)の作とに拔群の名什を見る。要するに當代の詩はペトラルカを宗として雅馴を專としたりと雖もタンシロ以下二三の詩家には詩情然ゆる如き者あるを見るとが出來る。之が順當に發達すれば恐くは大なる新しき者が生れたであらう。然るに惜い哉反動時代來りて其芽を折て了た。文藝復興晩期に於ける詩風の繼續は恐く英のミルトンに似た者を此國に生んだであらう。

五一〇　滑稽詩　ペトラルカ尊崇の時代は當然抒情詩全盛の時代である。抒情詩以外に於ては五六の敎訓詩——タンシロの『バリヤ』と『ポンデレ』バルディ(Baldi)の『ナウティカ』(Nautica)ヷルヷゾオネ(Valvasone)の『カッチャ』(Caccia.)ルカ・アラマンニ(Luca Alamanni)の『コルティヴチオネ』(Coltivazione) ルチエライ(Giovanni Rucellai)の『アピ』(Api)等——を除けば大抵は諷刺諧謔滑稽の趣を帶びてゐた。尤もイタリアの諧謔は猛烈なる嘲罵に非ずして柔かな皮肉である、そして其詩形も輕い三重韻を用ゐて居た。扨此方面に於て長所を持つて居たのは第一にアリオストオであつた、マッキャベリも其『デチエンナリ』(Decennali.)や『カピトリ』に於て諷刺諧謔の手腕に優れたるを示した。其他パテルノ(Lodovico Paterno.)は此體に無韻律を用ゐ、コッペッタ(Francesco Coppetta 一五一〇—八四)も亦此體に長けて居たが、流麗にして聊かも澁滯なき詩體を以て此方面に覇を稱するは『オルランドオ・インナモラトオ』の改修者ベルニ(Francesco Berni. 一四九七—一五三五)の『カピトリ』である。後世彼に從ふ詩體をベルニ式(Bernesque)と稱した。又フオレンゴオは狂體の捩りを以て鳴り、タッソニ(Alessandro Tassoni. 一五六五—一六三八)は水桶の奪ひ合から起きたモデナとボロニヤとの戰爭を滑稽傳奇詩に綴りて『ばけつの強奪』(La Secchia Rapita.)と名けた。後繼者ブラッチオリニ(Francesco Bracciolini. 一五六三—一六四五)は到底タッソニに及ばない。

五一一　小說　ボッカチオ以來最近に至る迄イタリアの小說は大抵短篇小說であつた。寧ろ小話であつた。筋の複雜を求めず、敍述の精到を求めず、唯食後の娛樂に日常のとを雜談するが如き態度を以て書かれて來た。其動機が消閑にあるを以て此等の小說は敎訓に傾くの處がなかつた、而もイタリア人の話題は大抵現前目睹の事に定つてゐた。故に其結果は自ら時代風俗の描寫となつた。イタリア小說の特色は茲にある。

ボッカチオの後を受けたるものは十四世紀の詩人サッケッティである。彼れは靑年時代にイタリア全土及びスラヴ人の國を旅行した。彼の物語の或物は『ゲスタ・ロマノルム』及び『フランス古話集』より來て居るけれども、其大部分は半ば文明半ば野蠻なる當時の社會の活畫圖である彼の談話は簡素で明快で何の技巧をも求めざる處に却て妙味がある。サッケッティと同代の人フィオレンティノも亦『大馬鹿』(Pecorone) と云ふ皮肉な結構の小說を書いた。十五世紀に入りてはナポリ人マッスッチオ (Massuccio)に露骨なるを以て有名な『小話』(Novellino) の著がある。サバディノ(Sabadino)のポレッタアネ』(Porrettane)も亦前者に劣らず露骨なものである。

十六世紀に及びて小話の出版されるもの愈々多かつたが、中にはフィレンツオラやアレティノ等の作もあつた。ボルタ

(Luigi da Porta.)の『ロメオ』と『ジュリエッタ』(Romeo e Giulietta.)は沙翁の悲劇と同一材料を取扱つてゐる。併し此時代の重なる小說家は、バンデロ（Matteo Bandello. 一四八〇—一五六一)グラッチニ(Antonio Maria Grazzini 一五〇三—八三)チンティオ(Giovanni Battista Giraldi Cinthio 一五〇四—七三)及ストラパロラで(Straparola)である。バンデロは其先驅者に比して性格描寫の力を備へ且つ一體の調子が眞面目である。其『ギオランテ』(Violante)や『ゼラルドとフレナ』(Gerardo e Elena)は彼の一に悲劇的の力あるを證明する。グラッチニは明暢の筆を以てフイレンチエの私人生活を描いた。チンティオの『エカトミティ』(Ecatomithi)は直截簡勁の文章を以て往々戰慄すべき悲劇を描いた。沙翁の『オセロ』と『メッジユア・フォア・メッジュア』は其結構を之に得た。ストラパロラの『ノッティ・ピヤチェヴリ』(Notti Piacevoli 一五五四)は民謠を材料にした最初のものである。百年後バジイレ(Giovanni Basile.の『ペンタメロオネ』(Pentamerone.)出でてストラパロラの書は全く光を消された。

五一二　戲曲　イタリア戲曲の濫觴は他國に於けると同じく宗教劇であつた。始めは聖書中の記事が聖人傳から材料を取つたもので臺詞は即興か然らずんば默劇（だんまり）であつた。轉じて奇蹟劇となるや脚本の必要を生じた、而もイタリアの『信心劇』(Rappresentazione Sacra)では他國より一歩進んで臺詞が八行節の律語で書かれた。之は十五世紀に入てからの事で年代の明なるもの、中最も早いのはベルカリ(Belcari)の『アブラハムとイサク』(Abraham e Isaac 一四四九)らしい。其の後處々に於て行はれてロレンツオ・デ・メディチなども其作者であつた。中には社會上の事件を材料にするもありて其景氣は中々盛んであつた。當時の脚本には二類あつて一つはラテン語で書いてセネカ等の作を擬したもの、一つはイタリア語で書いてラプレゼンタチオネにかけるもので後者を基礎としてイタリア國民劇が出來さうであつた。而も遂に之を見るに至らなかつたのは、一つは作者が學者である爲にセネカやテレンスの模範を學ぶに急にして國民との同情が足りなかつた故、一つは統一的治政がなかつた爲に國民的感情が發達しなかつた故、今一つは爲政上の方針が平民劇場に反對であつた故と考へることが出來よう。悲劇の方面では無韻律で書いたトリッシノの『ソフォニスバ』(Sophonisba.)が一五一五年に出て大成功をした。彼の多數の後繼者中スペロオネ・スペロオニ(Sperone Speroni)が無韻律に交ふるに抒情的の章句を以てして『ソフォニスバ』に缺けたる處を補ひ、田園劇を作らうとした試驗は失敗したけれども有效であつた。タッソオの『トリスモンド』(Torrismondo 一五八六)は少年の時に着手し長く間を置きて老後病中に之を仕上げた事とて調子の弱い者となつて了つた。喜劇に於てはボイヤルドオの『ティモオネ』(Timone.)あり(沙翁のティモニ・オヴ・アゼンスを起す)、ビッビエナ(Cardinal Bibbiena.)の『カランドラ』(Calandra)は一五〇八年に興行されて大喝采を博した。アリオストオがフェララの宮廷の爲に作つた諸喜劇—『カッサリヤ』(Cassaria)『スッポジティ』(Suppositi)『レナ』(Lena)『ネグロマンテ』(Negromante)及未成品『スコラスティカ』(Scolastica)—は皆陰謀の喜劇である。マッキヤベリの『マンドラゴラ』(Mandragola)は個性の明瞭に出て居る人物と最も喜劇的な幕とが多い。之に續いて出た喜劇中にはフィレンツオラやグラッチニのものもある、ベオルコ(Angelo Beolco)は田園の生活を描いて方言を採用した。アレティノの喜劇は下男部屋の立場にありて大世界を覗いた下卑た觀察が面白い。此の如くイタリアの劇は常に實なる人生に觸れ得べき方面に向いて來た。スペイン劇の發達とは面白い對照をなして居る。

扨古典的な悲劇と實社會に近いて來た喜劇との間に來て十六世紀中最も優れた作を出したのは田園劇（パストラルドラマ）である。ポリチヤノの『オルフェオ』(Orfeo.)亦此類であるが茲に擧ぐべき二つはタッソオの『アミンタ』(Aminta, 一五七三)とグワリニ(Giovanni Battista Guarini. 一五三七—一六一二)の『忠實なる牧人』(Pastor Fido.)とである。兩篇共に野心背信爭鬪の住家なる現世と、歡喜忠誠平和に滿ちたる理想界との對照を描きて黃金時代を慕ふの情に溢れてゐる。

第三期

十七八世紀の文學

一　反動時代の文學

五一三　**反動時代**　十六世紀初葉のイタリアは學術文藝の側に於てこそ全盛を極めたけれども政治上に於てはフランススペイン等の大國が次第に高壓を加へて來た。一五五九年カトオ・カンブレシス(Cateau Cambrésis)の條約に依てフランスが手を引きてスペインが半島に全勢力を振ふとになるやイタリアの政治的社會的自由は痛く束縛された。加ふるに新教徒の反抗に驚かされたる法王廳はスペインの物質的壓制と相並んで精神的壓迫を加へ、殊にクレメント八世が一五九五年に發布したる檢閲法令は全然思想の自由を窒息させて了つた。作者は著作を罷め書肆は出版を差控へ讀者は頭腦貧弱にしてゼシユイットの固陋なる趣味に薰化されて了つた。十六世紀の中葉より十七世紀を通じたる政治的宗教的壓制の時代—之を茲に反動時代と名ける。

文藝復興の末に至りて哲學科學の勃興が著しく思想界に活氣を添へた、獨創に富める熱烈なる思想家が蔟出した。併し彼等は其本國に於ては唯迫害され焚殺される運命を持つてゐた。彼等の蒔いた種は英佛獨蘭等に移りて實を結んだ。

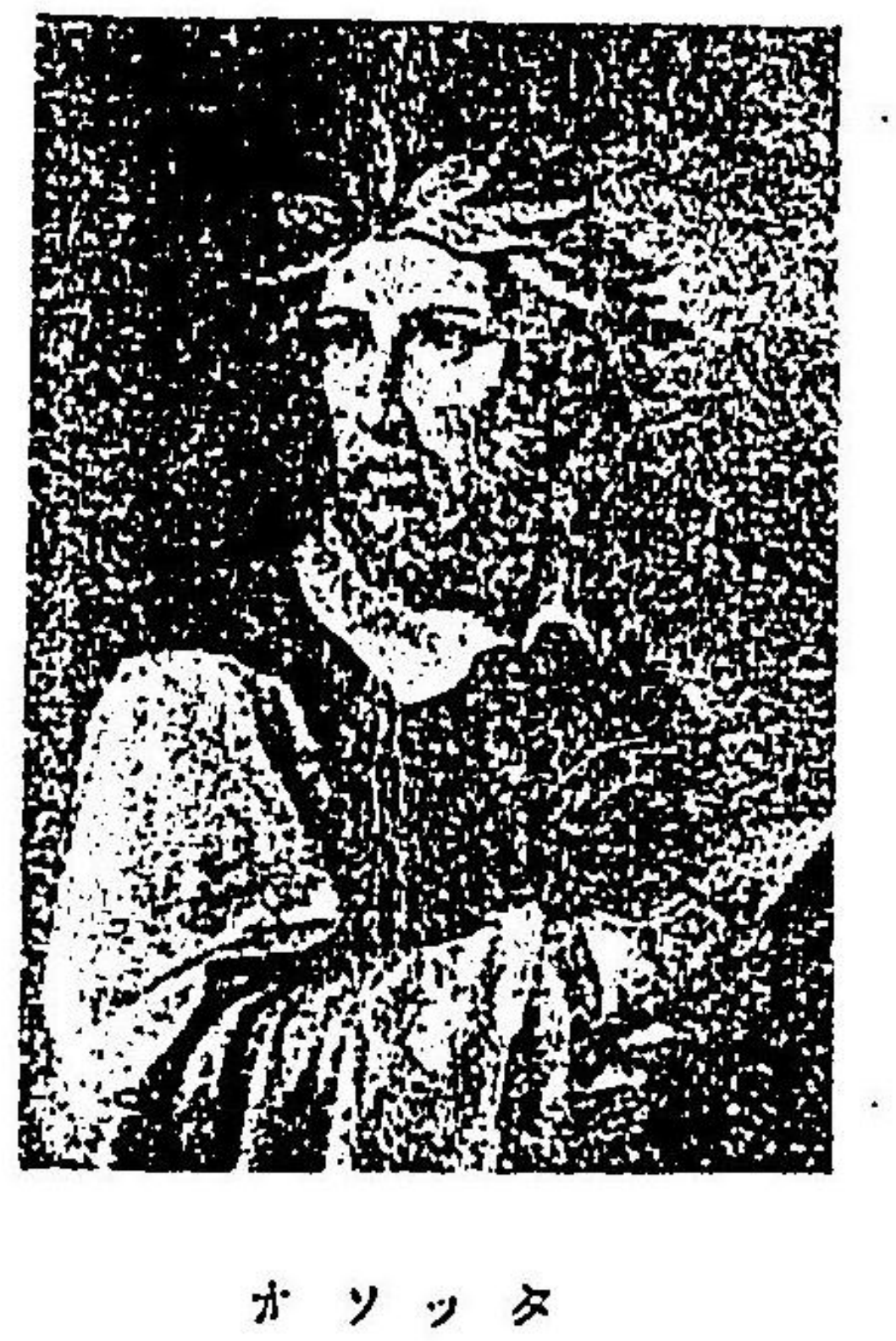
ブルノオ(Giordano Bruno. 一五四八—一六〇〇)は此種の學者中最も著しき者である。彼は哲學者の透察と詩人の熱情とを兼ねた。其文辭の突兀たるは却て內心に燃ゆる者ありて筆能く寫す能はざるを示して居る。彼は萬物一體の汎神教的思想の爲に焚殺された。彼の著書には『原因論』(Della Causa)『宇宙無限論』(Dell' Infinito Universo.)『狂熱』(Gli Eroici Furori)等がある。カンパネルラ(Tommaso Campanella 一五六八—一六三九)も亦其の愛國心の故に壯年時代二十六年間を獄裏に送つた。彼はトルコ人の出現がイタリアをスペインの軛から救ひ出すだらうと夢想して居た。彼は異常の智力と病的空想とを一身に兼ねた人であつた。彼の著にはラテン文『自然の意義及其神祕』(De Sensu et Magia Naturali)と『世界王國論』(De Monarchia Universali)とがある、又イタリア語をもて書かれた彼の宗教詩は誠實なる敬虔と攝理の信仰とに滿ちてゐる。天動說の故に迫害されたガリレイ(Galileo Galilei)は文學史上に其不朽の『對話篇』(一六三二)を殘した。

猶此時代の散文家としては上述の大名の外『トレント會議史』の著者サルピ(Pietro Sarpi 一五五二—一六二三)『フランスに於る宗教戰爭史』の著者ダギラ(Enrico Caterino Davila 一五七六—一六三一)『ニイザアランド反逆史』の著者ベンティヴリオ (Cardinal Guido Bentivoglio 一五五八

一六〇九）シッキスッス五世、インノセント十世其の他種々の傳記を書きたる自由思想家レティ（Gregorio Leti 一六三〇—一七〇一）『パルナッサス通信』を書きたるボッカリニ（Trajano Boccalini）東邦旅行記の著者ヴルレ（Pietro della Valle）等を擧げるとが出來る。タッソオの『對話篇』も亦看過するとが出來ない。

五一四　トルクワトオ・タッソオ

反動時代の公敎主義は其最良き意味に於てタッソオを支配した。トルクワトオ・タッソオ（Torquato Tasso 一五四四—一五九五）はベルナルドオの子で、ソレント（Sorrento）に生れた。父の運命の數奇なる中に育ち、ゼシュイット派の暗い敎育を受て彼は陰氣な人間になつた。『リナルドオ』を書たのは十八の歳である。後ルイジ・デステとフェララ公との兄弟に仕へて、公の妹レオノラと戀するに至つた。戲曲『アミンタ』は其インスピレーションを受けたものと見得よう。『救はれたるエルサレム』は一五七五年に完成した。彼の狂氣が最初の明瞭なる徵候をあらはしたのは此年である、幼時ゼシュイット派より受けたる嚴酷な敎育、陰謀と嫉妬とに滿ちたる宮廷の生活等も固より誘因には成つたらうけれど、從來信ぜられた如くフェララ公兄弟に罪が有るのでは無かつたらしい。幸に其後も彼の智力は曇らされなかつたので猶著作を續けるとが出來た。晩年にはフェララを脫して、處々の宮廷を彷徨した。『トリスモンド』を完成したと無韻詩『天地創造』（Il Mondo Creato）の『十週』を書いたと、『救はれたるエルザレム』を書き換へて『エルザレムの征服』としたと等が彼の晩年の重なる事業であつた。タッソオは高雅にして愛すべき士人であつた。洒落氣の皆無なると社會生活に風馬牛であつたのとは缺點と云ひ得よう。



タッソオ

『救はれたるエルザレム』（Gerusalemme Liberata）は公敎主義の詩である。エルザレム回復は公敎徒の熱心を具現するには最も適當の題目である。隔りたる時代に遠き國にて行はれたる公敎徒の功名は歷史の鍍を帶びて詩美の底光を發する樣になつて居た。併しエルザレム回復は敍事詩の題目として餘り廣漠に失し而も餘りに脚色に乏しい故にタッソオは幾多の挿話幾多の人物を創作して其空虛を補はなければ成らなかつた。彼の創造の人物（殊に女性）には生色ある個性、高潔なる精神が多かつた。彼の挿話は戀愛と傳奇の色彩とに豐かであつた。併し挿話の饒多は一面に於ては主題たる事件の重みを殺ぎ、一面に於ては彼が覘ひたる公敎讃美の精神に矛盾する樣な印象を與へる。戀愛の挿話は抒事詩の威嚴を損して寧ろ抒情的傳奇（ローマン）的の長所を持たしめた。又彼の人物は基督敎徒よりは異敎徒に、純公敎徒よりは多少異端の色彩を帶びた者に同情すべき者が多い。故に救はれたる『エルザレム』の長所は寧ろ細敍（デテイル）の絕妙にある。人間を描き戀愛を描くに彼は神韻生動の筆を用ゐた。病後の改删はうまいものではない。

彼には猶『リナルド』『アミンタ』『トリスモント』の外に許多の抒情詩がある。名數は優れたものでないけれども其最良なる物に至りては滔々として流るゝ大河に似たる雄渾がある。

五一五　十七世紀の文壇　一代の文學完全に達したる時は其完全を更に改良しようとするの努力が起る。其結果は新奇を衒ふ誇張である。此傾向は天才ある者に於て殊に最も著しい。神來を標榜して瞞着し去るに便利なる詩歌の範圍に於て最も現れ易い。『アドネ』（Adone 一六二三）及び『パストレラ』（Postrella）の作者マリニ（Giovanni Battista Marini 一五六九—一六二五）は此傾向の代表者であつた。彼はキラ〳〵光る言葉を用ゐて三色版めいた「有聲の畵」を描いた。彼の當時に於る名聲は大きかつた、從て摸倣者亦群をなして起つた。此風潮に反抗して高慢なる頭を擡げたものはキャブレラ（Gabriello Chiabrera 一五五二—一六三七）である。彼はイタリアのカンツオネをギリシアの模範に從ひて改造するの必要あるを主張して、之を諸種の作詩によりて示さんとした、併し其多數は文體が方便的で思想が貧弱なりとの非難を免れない。『セルモニ』（Sermoni）を除けば彼の事業中獨り見るべきは壯麗なる抒情詩である。彼は其抒情詩を「ピンダル風」と「アナクレオン」風とにわけた。彼の衣鉢を受けたる、テスティ（Fulvio Testi 一五九三—一六四六）は不安の精神を莊大なる文體に託し、レディ（Francesco Redi 一六二六—九九）は『トスカナのバックス』（Bacchus in Toscana）を以て現はれ、フィリカヤ（Vincenzo Filicaia 一六四二—一七〇七）は藝術的良心強き忠實なる詩人として輕き、悲き、或は莊重なる詩を作つた、諷刺詩の方面にはメンチニ（Benedetto Menzini 一六四六—一七〇四）が嶄を稱した。當時の壓制政策は無數の諷刺詩を生んだ。

併し喜劇は振はなかつた。悲劇はボナレルリ（Prospero Bonarelli）の『ソリマノ』（Solimano）が名ありしのみ、小說ではマリニ（Giuseppe Ambrozio Marini）の『カロアンドロ』（Calondro）傳記では、ロッシ（Rossi）のピナコテカ（Pinacotheca）を擧ぐれば足りる。

二　十八世紀の文學

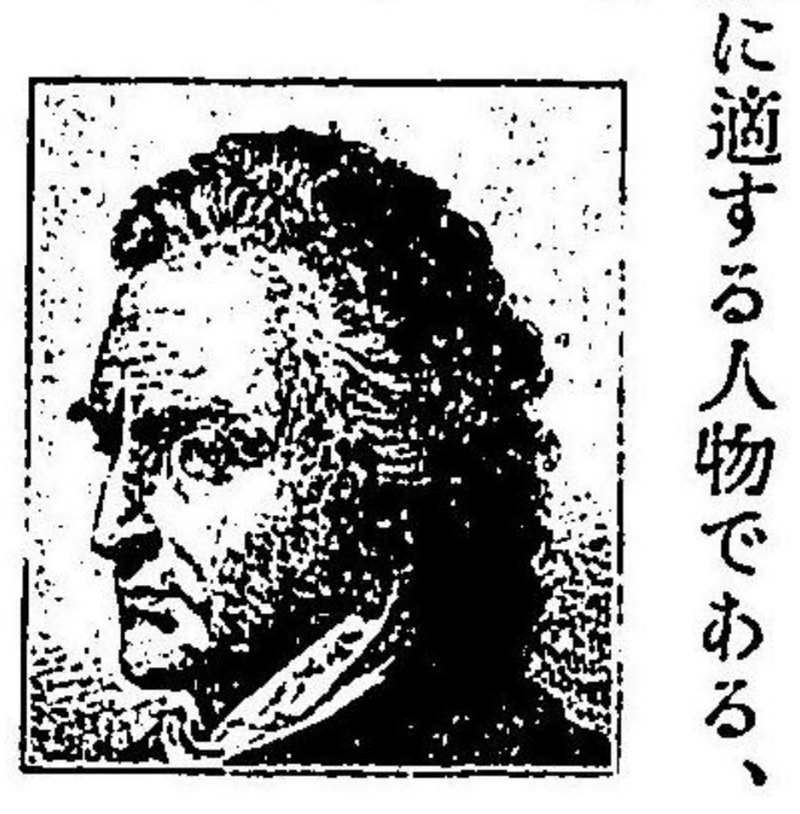
五一六　回復時代　十八世紀に至りてスペインの勢力は殺つた。二世紀の間其高壓に苦んだイタリア半島ははじめて息をついた。併し文運の恢復は徐々であつた。イタリア人の注意が先づ向けられたるは政治經濟法律の方面であつた。而して最後に音樂家の活動之に從つた。歷史の發展は抒情劇の興起を促し、一般の劇界之に連れて活動した。十八世紀に於けるイタリア劇の地位は同時代歐洲を通じて第一流である。十八世紀に至りてイタリアは再び歐洲を通じて流るゝ潮流に參することが出來た。政治法律の方面に於てはヰコ（Giovanni Battista Vico 一六六八—一七四四）に於て人間を集合體として觀ずるの思想生れたることゝ、ジャンノネ（Pietro Giannone）ゼノヴェジ（Antonio Genovesi 一七一二—六九）等によりイタリア統一の理想が再び揭げ出されたとの二事を注意するに止めて置かう、歷史の方面に於てはイタリア古文書の出版を遂げしムラトリ（Lodovico Antonio Muratori 一六七二—一七四五）考古學者マッフグイ（Scipione Maffei 一六七五—一七五五）文學史家ティラボスキ（Girolamo Tiraboschi 一七三一—九四）等を記憶せねばならぬ。雜誌に於てはチエノ（Apostolo Zeno）が始めた『文學雜誌』（Giornale de Letterati）が大勢力を得た。併し當時に於て最も著しい運動は『イタリア詩史』の著者クレスチンベニ（Giovanni Mario Crescimbeni）等によりて始められた『アルカディヤ會』（Arcadian Academy）である、會の首腦に居る者に天才の人は無かつたけれども、所傳（トラデイション）を保存して國民の趣味を開いた丈でも其功績は認めなければならぬ。全國到る處に支部有らざるはなく、會員

は皆詩を作つた。併し其の中眞に詩才ありと稱すべきはツアッピ(Zappi)夫妻(フエリチェ及びファウスティナ (Felice e Faustina)に過ぎない。一七六三年パリニ(Giuseppe Parini)の『ジョルノ』(Giorno)第一卷が出でゝ世を驚かした。イタリアの洒落者の二十四時を無韻律によりて歌へるもの、風俗志として溫藉なる諷刺として卓越してゐる。日常の些事を詩歌の領に包容したるは彼の功績である。シチリヤ詩派の首領メリ (Giovanni Meli 一七四〇―一八一五) の抒情詩は方言を以て綴られて居る爲に一般の名聲がパリニより劣るけれども簡素、輕快、溫雅の趣は比ぶべきものもない。ワーヅワースに先ちて此人の口から自然に歸れの聲を聽くのも面白い。又カスティ(Giovanni Battista Casti 一七二一―一八〇三)の詩はバイロンが『ドン・ファン』の先驅として注意すべきである。

小說界に於ては顯著なる作者がない。『ノッティ・ロマアネ』(Notti Romane)『エロストラト』(Erostrato)『サッフォ』(Sapho)などの著者、エルリ(Alessandro Verri 一七四一―一八一六) 丈を擧げて置かう。

五一七 戲曲 吾人は十六世紀の戲曲が如何にしてラップレゼンタチオネから發達して來たかを見た。玆ではコンメディヤ・デラルテ(Commedia dell' arte)より出た十八世紀の戲曲を見よう。假面狂言（コンメディヤデラルテ）は恐くはギリシアからあつたものであらう。イタリアでもトスカナやナポリ邊の農夫に此習慣があつたが、之が十六世紀になつてから新しい意義を有して來た。假面の數に限があるから劇中の人物には自ら一定の型が出來て來る。劇中の人物は常に同じだから自ら對話が超時代的になる。此の如くにして假面狂言には自ら滑稽（ファス）劇に似た型が出來て來た。此の型が劇として用ゐるに足ることを示したのは十八世紀のチエルロオネ(Francesco Cerlone)とゴッチ(Carlo Gozzi 一七二〇―一八〇八)とで、就中後者は重要である。彼は假面狂言の價値に就きてゴルドニと論爭したる末其用ゐるに足ることを實例に示さんが爲に自ら『御伽芝居』(Fiabe)を作り、之をヱネチヤの舞臺に掛けて大喝采を博した。種はバジイレの『ペンタメロオネ』より取りて白は方言を用ゐた。人物や科は凡て假面狂言の型を踏襲したけれども筋立許りは出來る丈一貫して興味を惹く樣にした。彼は其後四年間此種の作を出したけれども以後は筆を折つて之を書かなかつた。其作には『三つの蜜柑』『ツランドット』(Turandot)『青い怪物』『綠の鳥』などがある。併しゴッチの作も一時の現象であつて、假面狂言は十七世紀の末から十八世紀にかけて次第に衰へた之に代りて起れるは歌劇である。此方面に先鞭を着けたるはチエノで、彼は一六九五年に始めて眞面目なる試作をやつた一七一八年にヸエンナの宮廷詩人と爲たが後自ら退いて之を新進のメタスタシオに讓つた。メタスタシオ (Metastasio 一六九八―一七八二) は劇評家グラヸニ(Gravini)に育てられ歌ひ女ロマニナ(La Romanina)の世話になつて世に出た。彼の名聲は大きかつた。歌劇作者必須の要件なる音樂の才と文筆の能とを彼は十分に具へてゐた。スクリイブの壘を摩する結構の才と歌劇に適はしき抒情詩人の筆とを持つてゐた。彼の作の重なるものは――『オリンピヤアデ』(Olimpiade)『アキレ・イン・スチロ』(Achille in Sciro)『クレメンツオ・デイ・ティトオ』(Clemenzo di Tito)『アンテイリオ・レゴロ』(Antilio Regolo)『アルタゼルゼ』(Artaserse)『テミストクレ』(Temistocle)『チエノビヤ』(Zenobia)『棄てられたるディトオ』(Didone Abandonata) 悲劇にはマッフェイ(Maffei) の『メロオペ』(Merope 一七一三)が新時期を劃した。

劇詩人としてマッフェイの後に來る者はピエモンの人、アルフィエリ (Vittorio Alfieri 一七四九―一八〇三) である。彼は猜介不羈の人、其生涯には曲折極めて多かつた。ピエモンは、方言大に本國語と異る國である、アルフィエリは、詩人よりも寧ろ政治家に適する人物である、然るに其不屈の努力によりてイタリア語を學び、劇作を學び、遂に兩者を自らの物として、第一流の地位を占むるに至つた。


アルフィエリ

蓋し彼は自由を熱愛し、壓制を蛇蝎視する者、彼が大なる不利を冒しても、イタリア國民精神の復活者となるを得たるは此故であらう。彼は自然に對する趣味を缺いて居るし、又其文體には、苦心慘憺の迹を留めて居るけれども、彼が一度歷史上、又は神話中の大人物を捉へて之を描くや、其の印象は極めて力强い、マッシウ・アーノルドは彼を評して「狹隘なる高調」(Narrow Elevation)と云つた。又劇術上彼の貢献は器械的技巧を排したと、戀愛情事以外更に高崇なる感情を劇の中心としたことである、彼の小詩も亦「狹隘なる高調」を示すものが多い。彼の悲劇の重なる者は――『サウル』(Saul)『ミュラ』(Myrrha)『フヰリッポ二世』(Filippo II.)『アンティゴオネ』(Antigone)『オレステス』(Orestes)『バッチの陰謀』。猶彼の自傳も亦極めて正直な極めて眞摯な者である。アルフィエリに反してドルドニ(Carlo Doldoni 一七〇七―九三) は氣輕な、無頓着な、天成の喜劇作者であつた。ヱネチヤに生れヱネチヤ劇場の作者となつて、其傑作の多くをヱネチヤ方言で書いた。後パリに招聘せられて後半生を全く其處で暮した。彼は風俗を生きたる儘に捉へ來りて之を喜劇の材料にした。人心の底を寫し出してまざまざと人に見せる樣な深さはないが、簡樸に溫雅に自然なるは彼れの長所である。彼の重なる作は――『不思議な出來事』(Un Curioso Accidente)『誠の友』(Il Vero Amico)『珈琲店』(La Bottega del Caffe)『ロカンディエラ』(La Locandiera)メタスタシオの歌劇、アルフィエリの悲劇、ドルドニの喜劇、此三つは十八世紀イタリア文學の誇である。

第三期

十九世紀の文學

一 イタリア統一以前の文學

五一八 十九世紀の初葉 十八世紀を經て二世紀間の壓制に苦みたるイタリアの瘡痍は漸く回復した。十九世紀歐洲の思潮に幾許の獨創を貢獻したかは疑問であるけれども、少くとも凡ての新運動に參加した。凡ての動搖を感受した。自然主義、情感主義、ローマン主義、革命主義は皆其痕跡をイタリアに殘した。

フランス革命の刺戟は(思想上の影響より見るも政治的の事情より見るも)イタリアをして熱烈に祖國の統一を希望せしめた。自由を欲する爲の愛國主義は十九世紀初中葉に於けるイタリア文人一般のインスピレエションであつた。イタリアの傳奇（ローマン）主義は愛國主義と密接の關係を有する。ダンテの復活は十九世紀初葉の著しい現象であるが之は中世を慕ふの動機よりは寧ろイタリア人の偉大を回顧す

るの情に基いて居る。古典の根據地たりしイタリア、ゴシック建築に乏しきイタリアに於て、其傳奇主義は中世の回顧と云ふ形式を取らなかつた。傳奇主義に攝取されたる自然主義（自然に歸れと叫んだルッソォの意味に於て）情感主義（感情の奔放を尙び、憂鬱と耽溺とを愛するといふ意味に於て）換言すれば近世的傾向がイタリア人の心にも感染して來たといふ外に、傳奇派のイタリア文學に與へたる影響は主としてスコット、ゲーテ等の文體であつた。愛國主義と傳奇主義とは此期に於けるイタリア文學の細目である。

モンティ（Vincenzo Monti 一七五四―一八二八）はフランス革命から大那翁時代にかけてのイタリアを代表してゐる。彼は時代の說明者に非ずして。時代變遷の各階段を其儘に寫したる鏡である。多感なる彼は旋風に捲かるゝ紙片の如く歐洲の大混亂に捲かれた。最初は法王廳に仕へたるアバテであつた、彼は此時代に抒情的の悲劇『アリストデモ』（Aristodemo 一七八七）を作つた。『ガレオット・マンフレディ』（Galeotto Manfredi 一七八八）によりて、傳奇悲劇の先驅をなした。フランス革命起るや彼は敍事詩『バスヸリヤナ』（Bassvilliana 一七九三）を作つて革命の酸鼻を描いた。此の篇は全然ダンテの摸倣であるけれども摸倣に似ざる強さを持つてゐる。幾許もなくして法王廳の廷臣はフランス革命黨の將士と交驩して宗敎狂と迷信とを罵倒するの詩を作つた。アバテは平民となつた。更に幾許もなくして彼は那翁の讃美者となつた、平民は騎士に變つた。未完の詩『マスケロニャナ』（Mascheroniana）は那翁を讃美して颶風の如き雄偉の調を成した。彼の人物も詩も南方人の情熱と浮躁とを持つてゐる。彼は情火に煽られて殆んど卽興的に抒情詩敍事詩を作つた、而も多くは未成品である。彼は流星の如く輝いて消えた。思想の貧無は詩句の雄大により蔽はれた。彼の作には上述以外無韻詩『プロメテウス』（Prometheus）悲劇『カイユス・グラックス』（Caius Gracchus）及び『黑き森の歌人』がある。

フォスコロ（Ugo Foscolo 一七七八―一八二七）はモンティと正反對の人であつた。彼は終始一貫して其態度を變へざる愛國者であつた。內心は弱い氣の變り易い人であつたが外面は傲岸人を凌ぐ執拗の態度を持した。彼の處女作『ヤコポ・オルティス』（Jacopo Ortis 一七九八）は『ヱルテル』の後繼、『ルネ』の先驅として、同じく戀愛の悲哀を描いた憂鬱な自傳的小說である。併し『オルティス』には戀愛以外に故國の衰頽を痛む悲歌をも交へてゐる。彼は又『セポルクリ』（Sepolcri 一八〇七）に於て死後の光榮を思ふの情を歌ひ『グラチヤ讃歌』（Hymns to the Graces）に於て洗練の調を示した。悲劇にはアルフィエリを學びたる『アヤックス』（Ajax）『リッチャルダ』（Ricciarda）の二篇がある。批評家としての彼は趣味混亂の時代にありて能く一世を指導し、ダンテ、ペトラルカ、タッソオ、ボッカチオ等の研究に一時期を劃した。

五一九　マンツォニ

マンツオニ

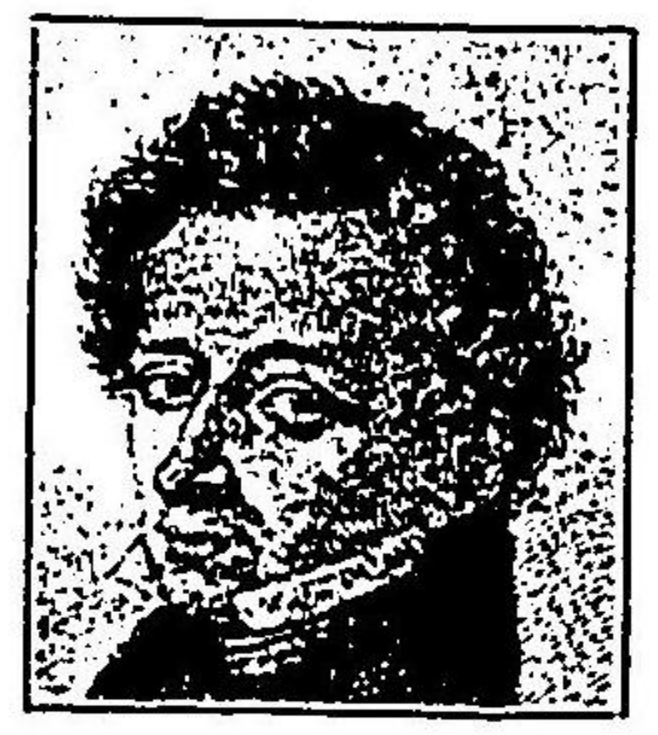
併し當代の文才で述作の價値より云も歷史上の意義より云も十九世紀初葉の第一人たるべきはミランの人マンツォニ（Alessandro Manzoni 一七八五―一八七三）である。彼は第一にイタリア傳奇的運動の首腦であつた。第二は新公敎運動の元祖であつた。第三にイタリア語の改革者として學者と無學者と雙方に適する平明優麗な文章を始めた。併し彼は多くの改革家に見るが如き傲岸執拗の人ではなかつた。自己を知り他人を觀察して時に諷刺を試みることもあつたが一體に温厚にして我を張らぬ人であつた、人と逢を厭ひて終日籠居してゐるともあつた、見えを張らず法螺を吹かず、四十代にして筆を棄てゝ了た。一八一二年に讃美歌集が出版された。那翁の死を悼む『イル・チンケ・マッジョ』（Il Cinque Maggio）は彼の文名を高からしめた。『ピエモン義勇兵進擊の歌』（一八二一）亦愛國の詩として響いた。彼の悲劇『カルマニョラ』（Carmagnola 一八二〇）と『アデルキ』（Adelchi 一八二二）とは、沙翁の方法をイタリア劇に應用したる試作として文學史上の意義多きのみならず。作物の價値其者より云ふも亦傑作である。但戲曲と云ふよりは寧劇詩で、舞臺上效果よりも詩情に豐な點に於て榮て居る。併し彼の名を世界的にしたる者は戲曲に非ずして小說にある。彼の『婚がね』（I Promessi Sposi 一八二五）は、敍述の眞と美とに於て比ぶべきものがない、材料を取りたる時代及び場所――十七世紀スペイン治下に於けるミラン――に對して眞なりや否やは疑問としても少くとも人間心情の描寫としては萬代を通じて眞たるを失はぬ。ゲーテは之を評して『恰も醇熟したる果實の如し』と云つた。マンツォニの著は他に『汚れの柱』浪漫主義を論ずる書翰『時の一致と場所の一致とに關する書翰』等がある『婚がね』の成功は直ちに一群の歷史小說家を生んだ。其の重なるものを擧ればグロシ（Tommaso Grossi）の『マルコ・ギスコンティ』（Marco Visconti）ダチエリオ（Massio d'Azeglio）の『エットレ・フィエラモスカ』（Ettore Fieramosca）カンツウ（Cesare Cantu）の『マルゲリタ・プステルラ』（Margherita Pusterla）等を數へ得る。

猶此期の人としてはイタリアのカウパアとも稱すべき隱逸の詩人、哀愁の色濃き『アントニオ・フォスカリニ』（Antonio Foscarini）の著者、イッポリト・ピンデモンテ（Ippolito Pindemonte 一七五四―一八二五）と、『入獄記』（Le Mi Prigioni）の著者シルヸオ・ペリコ（Silvio Pellico 一七八九―一八五四）を逸することが出來ない。

五二〇　那翁沒落後のイタリア文學

那翁がイタリア帝國の王冠を戴いたことは少くともイタリア統一の希望を國內の識者に與へた。今は專制家那翁を戴いて居るけれども、彼の死後は統一したるイタリアとして善良なる政治十全なる自由を享樂し得る望があつた。併し彼の不時の沒落は再びイタリアをオーストリア壓制の手に返した。併し一度イタリア統一の希望を胸に燃した半島の民は從前の如く安閑として其の治下に安んじて居なかつた。凡そ文學は常に自由の友である、壓制の下にある時最も自由の憧憬が烈しい。當時イタリアの文人は最も不自由なる境遇の下に最も自由なる思想を懷いた。祖國の愛、統一イタリアの熱望、これが當時イタリア詩歌の基音であつた。ダンテの復活も亦この機運に乘じて行はれた。ダンテの文體を復活せしめたるはモンティの功である、其の文體に亞いでダンテの精神も亦復活した。彼を崇拜するものに之を中世公敎主義の使徒と見るものとイタリア國民主義の先覺と見るものとの兩派あつたが、彼の最も崇拜された理由は前者に非ずして後者であつた。

レカンティ(Recanti)の人レオパルディ(Giacomo Leopardi 一七九八―一八三七)は此時代最大の天才にして又壓制せられたるイタリアの象徴である。彼は病弱畸形の青年であつた。頑固なる父の監視下に殆んど禁錮同樣の生活を送つた。彼は此孤獨を慰めんが爲に全力を思想上の勞作に傾倒した。十九歳にして既にギリシア文獻學上重大の事業を成した。彼は屢々父の家を脱走して又屢々呼び戻された。オーストリア及ブルボン家の壓制を免れて自由に其の思想を公表し得んが爲にイギリスかフランスかに移住せんとしたけれども行はれなかつた。三十三年に漸くナポリに獨立し得たけれど其の後僅に四年にして病死して了つた。彼が父の家に在りて慰藉は僅に弟カルと妹パオリナであつた、孤獨の思に堪へずして二度戀に陥つたけれども皆不幸に終つて了つた。


レオパルディ

彼の詩は量が少く、取材が狹い。併し彼の詩は少しと雖も凡て完璧である。一言の浮辭もない。一句の浮響もない、文字と情調とがシックリ合つて一分の隙を殘さぬ處恰も美き衣の美き人に着られて其姿のあでやかさを其儘に表出するが如くである。前後を絶して拾ひ出すべき警句もない、全體が全體として美しいのである。彼の詩は修辭を離れて、簡素高潔なる雄辯の標本である。『死近く』より始りて『金雀花』に終る迄彼の無韻詩は滑かにして而も逞しきこと恰もヘラクレスの大理石像である。『初戀』『返り咲』等の三重韻亦美しい。一句増減す可らざる點に於て彼の散文(主として『對話篇』外に書翰集及び『人類の歷史』『光榮に就きて』『ブルト・ミノオレ』『フイリッポ・オットニエリ』等)も亦詩に讓らない。此等の諸作に於ては彼の苦痛の經驗が思想の形をとりて表出されてある。彼の主義は幸福主義である、幸福の絶望より來る厭世主義である。

レオパルディが默受して苦んだ壓制をジウスティ(Giuseppe Giusti 一八〇九―五〇)は詩によりて諷刺した、彼はトスカナの人、精練にして獨創に成るトスカナ俗諺を用ゐて猛烈なる諷刺を壓制者の上に浴せかけた。

ベルリ(Gioachino Belli 一七九一―一八六三)はローマに居て、ジウスティがオーストリアに對してなしたる處を法王廳に對してなした。彼の今一つの重要なる事業は『ローマ寫生詩』二千章である。

ジョルダニ(Pietro Giordani 一七七八―一八四八)は、イタリア全體の爲に其文筆を動かした。併し彼の興味あるは寧ろ當代の諸大才に刺戟を與へた點にある、レオパルディを古典研究より轉じて創作の方面に向はしめたるは彼の力である。マンツォニ、ジウスティ、コレッタモンティは皆彼の友であつた。ジォベルティ(Vincenzo Gioberti 一八五二歿)とマッチニ(Giuseppe Mazzini 一八七二歿)とは共にイタリア統一の大豫言者にして實行家として失敗した人であつた。前者の『イタリアの優越』(Il Primato d'Italia 一八四五)は大なる影響を與へた。後者は宗教的興味に豐かな高潔の理想家で、外國文學紹介者として功績も亦少くない。其の他當時の哲學的理想家にはロスミニ(Antonio Rosmini-Serbati 一七九七―一八五五)ロマニオシ(Giovanni Domenico Romagnosi 一七六一―一八三五)マミヤナ(Terenzio Mamiana)等あり、歷史家にはボッタ(Carlo Botta 一七六六―一八三七)コレッタ(Pieto Coletta)カンツゥ(Cesare Cantu)アマリ(Michele Amari)ミカリ(Giuseppe Micali 一七八〇―一八四四)及び中世の研究者トロヤ、(Carlo Troya)傳記作者にはダチェリオ(Massimo d'Azeglio 一七九八―一八六六)モンタネリ(Giuseppe Montanelli 一八一三―六二)等を數へ得る。

那翁沒落後イタリア詩壇を占領したるローマン派の中、愛國詩『ファンタジエ』(Fantasie)の作者ベルシエ(Giovanni Berchet 一七八三―一八五一)は過去崇拜と神秘的精神とを缺いたイタリア的ローマン主義者であつた。イギリスに於て兄妹の詩人を生んだロゼッティ(Gabriel Rossetti 一八一五―五四)敍事詩『エドメネガルダ』(Edmenegarda)の著者プラティ(Giovanni Prati)及幽婉なる憂愁の詩人ツァネラ(Giacomo Zanella 一八二〇―八九)も亦此派に屬する、ツァネラの集には『アスティケロ其他の詩集』(Astichello ed altre Poesie)がある。戲曲に於ては唯一人を擧ぐれば足る。コッサ(Pietro Cossa 一八三〇―八〇)は詩人に非ずして寧ろ狂言作者であつたけれども、其の作には男らしい力があつた。『ネロ』『クレオパトラ』『ユリヤン・アポスタタ』等が優れた作だ。小説にはゲラッチ(Francesco Domenico Guerrazzi 一八〇四―七三)の『ベネヱントの戰』『フィレンチェの圍』『パスクワレ・パオロリ』及び夭死せるニエヴ(Ippolito Nievo)の『八十翁の懺悔』(Confessioni di un Ottuagenario)等を數へ得る。

二 現代文學

五二一 カルヅッチ 現代は文學上無政府の時代である。久しく古典に陶冶されたイタリア文學にありても亦此狀態を分たぬ譯に行かない。此狀態が如何に統一されるか、如何なる趣味の標準が今後に於て設立せらるべきか現今に於ては知る由もない。今は各人各樣に自己の途を開くべき時代である、開きつゝある時代である。併し現代のイタリア文壇に在つて既に其作物によりて不朽を獲得したるもの、ダンヌンチオを除けばカルヅッチを第一に推さゞるを得ない。

カルヅッチ(Giosue Carducci 一八三六)は近世的精神を古典の形に盛る者である。彼の題目は雄大である、彼の情調は變幻多樣である、猛烈なる反抗的精神より可憐なる纏綿の情に至る迄人間の情にして彼の詩に具備せざるものはない併し彼は之を統ぶるに古典の齊整を以てする形式美に對する彼の感覺は鋭敏である。彼は文藝復興期の宿題――如何にして强烈なる内容と巧妙なる形式とを結合すべきか――を解釋した者である。思想より云へば彼は反法王黨である。勞働者の友である。自由思想家にして而も有神論者、愛國者にして同時に世界主義者である。

カルヅッチ

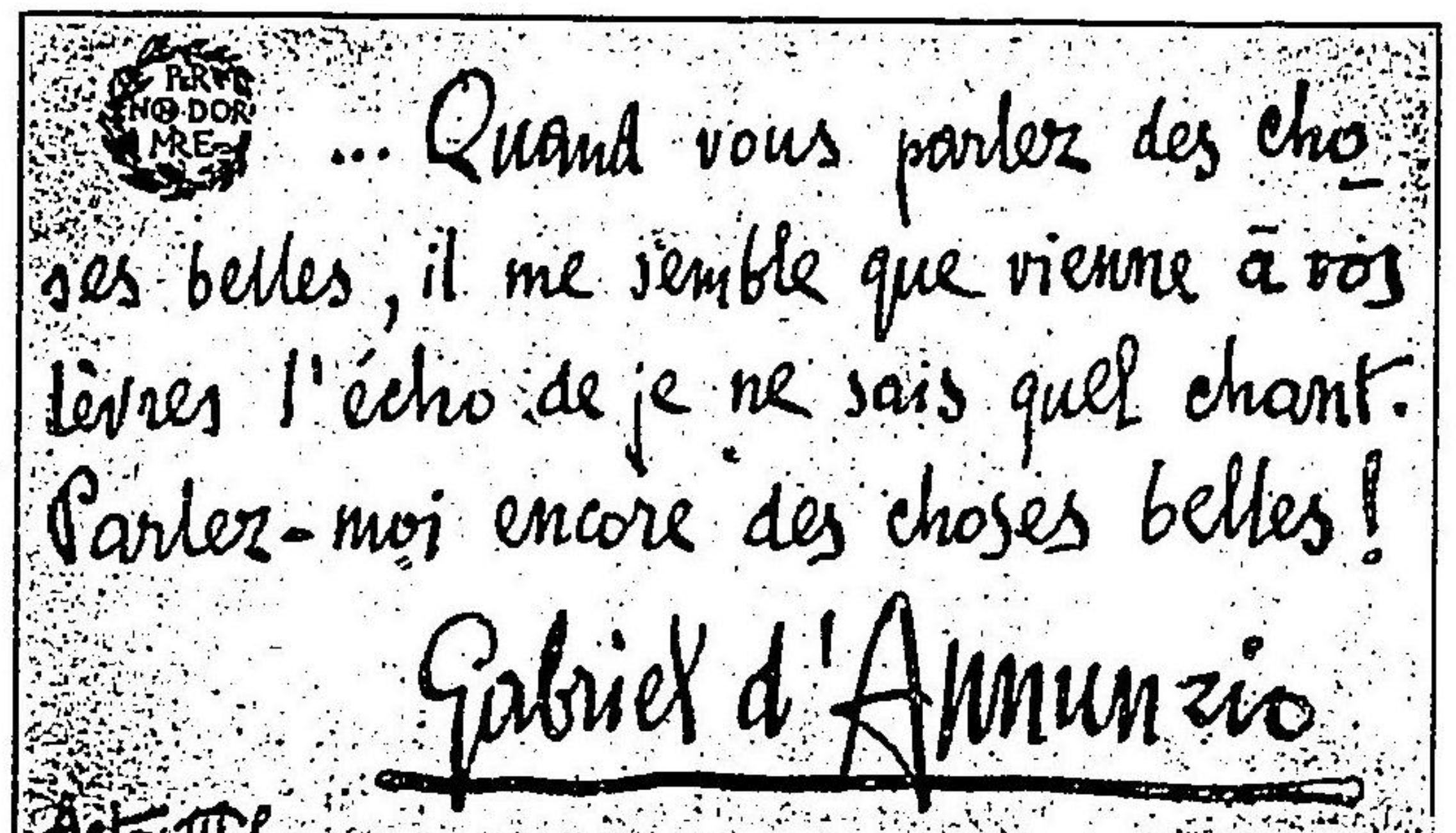
カルヅッチの第一集は五七年に現れた。六五年の『惡魔讃歌』(Inno a Satana)は思想上の論難を惹起し、七七年の『異調』(Odi Barbare)は詩形上の論爭を惹起した。併し『新調』(Rime Nuove)出でゝ彼の優越は公認された。外に六七年に出版された『レヸヤ・グラヸヤ』(Levia Gravia)がある。

五二二 ダンヌンチオ 現今に於てイタリア文壇第一の花形は云ふ迄もなくダンヌンチオ(Gabriel D'Annunzio 一八六三)である。ダンヌンチオは詩小說戲曲の三つに渉りて孰れも第一の名を博しゐるが

此三方面を通じて彼の長所は人目を眩する絢爛である、人を醉はしむる芳香である。鋭き官能の臭である。形式の美に關する感覺の微細である。彼は驚くべき富贍の言語を縱橫に驅使して面白く敍述を進めて行く。敍事抒情の材能に於ては比ぶべき者が無いけれども戯曲的結構の技倆に就ては一部の批評家に疑はれてゐる。

ダンヌンチオ

ダンヌンテオは一八六三年アドリアの海邊ペスカラに生れた。十六歳にして既に『プリモ・ヹレ』(Primo Vere)を出した其の後『新曲』(Canto Novo 一八八二)『インテルメッツオ』(Intermezzo 一八八三)『イソッテオ』(L' Isotteo 一八八五)『キメラ』(La Chimera)『心の歌』『海の賦』(Odi Navali 一八九三)『天上の曲』(Poema Paradisiaco)等順を追ひて其詩は進歩した。彼の絢爛を極めたる詩の傍に、簡素にして諧調豐かなる小詩の一群あることをも記憶せねばならぬ。彼は其詩作の當初からダンヌンチオ一流の調を出して嚴密なる意味に於ては何人の摸倣者でもなかつた。併し小說に於ては九〇年代迄ロシア自然派支配の下に立つた。『サン・パンタレオーネ』(San Pantaleone)『ジヨヴンニ・エピスコポ』(Giovanni Episco三)の如きは此期の作だ。併し『適意』(Il Piacere)『*死の勝利』(Il Trionfo della Morte)『巖の處女』(La Vergine della Rocce)『フオッコ』等に至りて彼の獨創は熟した。戯曲は現今此人の最も熱中する處であつて、愛人なる女優エレオノオレ・ヅウゼ(Eleonore Duse)の助を得て目覺しき成功を博しつゝある。ワグネルがドイツ民族に對して成したる事業をラテン民族の間にも完成して新ラテン民族文學を振興しイタリア國民劇を作らんとするは彼の抱負である。『死市』(La Citta Morta)『ジョコンダ』(La Gioconda)『榮光』(La Gloria)『フランチェスカ・ダ・リミニ』(Francesca da Rimini)『ヨリオの娘』(La Figlia di Jor三)『舟』(Nave 一九〇八)等の作皆イタリアのみならず全歐洲の評壇を動かした者である。ダンヌンチオは未だ春秋に富む。今後の發展は刮目して見るべき處である。彼は今「ガッポニ館」に居を構へて莊麗善美の生活をしてゐる。


PER NON DORMIRE

... Quand vous parlez des choses belles, il me semble que vienne à vos lèvres l'écho de je ne sais quel chant. Parlez-moi encore des choses belles!

Gabriel d'Annunzio

Acte III.

ダンヌンチオ手蹟

五二三　其他の詩人小說家　ダンヌンチオをギリシア主義の使徒とすれば詩人兼小說家フォガッツァロ(Antonio Fogazzaro 一八四二)は基督教主義の選手である。一八八一年處女作『マロンブラ』(Malombra)の散文を出してから、『ダニエレ・コルティス』(Daniele Cortis)『ポエタの秘蹟』(Il Mistero del Poeta)『ピッコロ・モンドオ・アンティコ』(Piccolo Mondo Antico)『ピッコロ・モンド・モデモ』(Piccolo Mondo Moderno)等の諸作相踵いで現れ、一九〇五年小說『聖僧』(Il Santo)により遂に世界的の名聲を得た。彼は依然公敎主義を奉ずるけれども原始基督敎の精神を尊んで敎會の腐敗を攻擊するを憚らない。ヹルガ(Giovanni Verga 一八四)も亦前二人に亞いで世界的名聲を受けた。彼も亦ダンヌンチオと同じく寫實主義の人であるが彼の寫實主義は地方色を出すを目的とする。彼の題目は其生地シチリヤであつた。

フォガッツァロ

其の他詩人には『ポスツマ』(Posthuma)の作者ゲリニ(Olindo Guerrini)社會詩人ラピサルディ(Mario Rapisardi)貧民の同情者ネリ夫人(Ada Negri)マッシウ・アノルドに似たるアルナボルディ(Alessandro Arnaboldi)イタリアのトムソンと云ふべきグラフ(Arturo Graf)優麗を以て優るパンツアッキ(Enrico Panzacchi)旅行家で、有名な兒童の心理小說『クオレ』(Cuore)の作者たるデ・アミチス(Edmondo de Amicis)及びカプアナ(Luigi Capuana)マラディ(Giovanni Marradi)パスコリ(Giuseppe Pascoli)バッチェリ(Alfredo Baccelli)の諸人あり。小說家にはセラオ(Matilda Serao)ファリニ(Salvatore Farini)バリリ(Giulio Barrili)プラッチ・(Carlo Placci)ツッコリ(Luciano Zuccoli)等を數へる。バリリの『竊盗』(Un Furto)ツッコリの『ロベルタ』(Roberta)等は優れたる作である。戯曲にはカヴ(Cavallotti)ボギオ(Giuseppe Bovio)ブラッコ(Roberto Bracco)ガリナ(Giacinto Gallina)等が居る。

五二四　結論　イタリア文學は現代歐洲の國民文學中最も遲れて獨立した。併し獨立するや幾許もなく列國に模範たるべき韻律と散文とを生んだ。彼も是も皆イタリア文學が古典文學の正系たる事實から主要な說明を引き出し得る。十七世紀の政治狀態はイタリア文學に特別に災した。併し十八世紀に靜養して十九世紀には歐洲文運に重要なる一部の役を演じた。イタリア人は感受性の强い人民である。從て世界文學の潮流から一人取殘される樣な憂は決してないが、其積極的に貢獻したる方面より云へば現今と雖も依然として形式と文體との方面にある樣に見える。之がイタリア民族に負はされたる唯一の使命か、但しは破天荒の新事業をやるか、氣の長い歷史は我等の死後にゆつくり此問題を解決するであらう。

（生田長江）

參考書目

Richard Garnett, *A History of Italian Literature*.(1898 Goss' *Literature of the World*)

Gaspary, *History of Early Italian Literature to the Death of Dante*. (1900英譯)

F. Trail, *A History of Italian Literature*, vol 1. (1903)

A Symonds, *Italian Renaissance*, 7vols (1875-86)

W. Pater, *Renaissance*. (1873)

フランス文學

A 十九世紀以前の文學

一 十四世紀以前

劈頭第一吾人は、能ふ限り且簡短なる文學史を作らざる可らざるとを告白する。フランス文學の最盛時は十七世紀以後今日に及ぶ。十七世紀以前の文學史の言盡さず意達せざるは、其價値少きと紙幅限られたるとに因る。

五二五　**古代抒情詩**　フランス文學の起原を何時に置くかは史家に依て違ふ。併し是を最も古く求むる人は第八世紀以前には溯らぬ樣である。第八世紀、第九世紀の頃新國語が發生した。所謂(Lingua Rustica)の發展したもので、八九世紀の頃ラテン語が其語尾變化を失つて、綜合的言語から分解的言語に變じたのである。此新國語は先づ僧侶が說敎の目的に用ひた。十世紀頃には既に文學上の作物にも用ひられるに至つたが、其過半は聖徒の行爲生涯に關する物語である此宗敎的作物以外、普通人の作つた多數の聖歌がある。但、それはラテンの聖歌を傳承した物で、爾後一定期間ラテンの原作が文學の作物に摸倣され採用されてゐたのである。

併し新國民の新銳氣は彼等をして長く摸倣に甘んずるとを許させぬ。是等普通人の手に成た通俗の詩歌は國民的自覺の勃興と共に、大に重要視さるゝに至つた。國民の自覺は先づ南フランス、プロヴンスに生起した。

元來フランスには成立の要素に於て全く異れる二種の言語がある——南方卽プロヴンス語、北方卽パリ語。プロヴンスは土地豐沃風景優勝、其住民は熱烈なる感情を有して豪奢を好愛した。當時此鄕の貴族が華奢風流。巡歷樂人を聘して琴を彈じ詩を吟ぜしめた居城、陣營は今日でも尙諸所に往時の面影を見せてゐる。如斯プロヴンスに情熱熾盛なる抒情詩が發達したのは怪しむに足らぬ。抒情詩の詩人は社會の花と呼ばれた騎士及貴族であつた。且プロヴンスでは婦人が大に尊重されて、社會の中心と成てゐた。騎士は是等の女性に因て敎養されたのである。

斯してプロヴンスの抒情詩は甚だ官能美に富み多量に戀愛分子を含んでゐる。官能美は屢一步を進めて不道德の境に入つた。而も其詩は國民的感情橫溢して秀絕無比、以て十一、二世紀の南フランス、イタリア、スペイン諸國に榮えたのである。プロヴンスの詩は嚴に抒情詩に限られて、敍事詩は無かつた。敍事詩の發生し繁昌したのは北方フランスである。

五二六　**敍事詩、戲曲、散文**　敍事詩は略一一〇〇年頃に始つて、其最盛期は一二五六年代であつた。敍事詩には夥多の種類があつた——フランス古英雄の生涯冒險を歌つた*『武功の歌』(Chansons de Gestes)アーサー王を中心とした『アーサー傳奇』(Romans d'Arthur)アレキサンドル大王及トロイ包圍等古史を材とした"Romans antique"全く虛構空想の冒險譚たる"Romans d'Aventures"及廣義の滑稽趣味を代表せる平俗文學"Fabliaux"など澤山あるが今細說する暇を有たぬ。是等敍事詩(Fabliauxを除き)は彼十字戰爭の爲に大影響を受けてゐる。十字軍に出戰した各國の騎士は、彼我接觸して、未知の風俗、習慣を經驗した。當時既に文明の程度高かつたアラビアは、十字軍騎士に

多大の發見發明を與へた。騎士はサラセン人の高級知識を認めた。十字軍後の歐洲文明は眞個騎士的性質のものとなり、騎士文學は顯著秀拔なるものとなつたのである。以上古フランス詩の二種は、時に盛衰隆替はあり乍ら、何れも第十四世紀迄續いてゐた。戲曲亦既に中世に僧侶牧師の手に開拓されて、敎旨傳播の具として用ひられた。材料は是を小說、傳說、使徒或は豫言者の傳記、事業等から採た。初めはラテン語を以て後通俗の國語を以て綴つた。扨其演者は初め僧侶自身であつたが後普通人が演戲するとゝなつた。フランス中古の戲曲として是等の宗敎劇卽"Mystères"及"Miracles"は文學史の數頁を埋るのだが、詳細は後章に讓る。散文に就て一言すれば、文學發展上自然の順序としてフランスでも散文は韻文より遲れてゐる。而も散文の斷片零墨は是を早く第八世紀に求め得る。散文中最初に發生するのが廣義の歷史たるとも自然の數で、フランスにも編年史家として頗る有名な人が中世に三人ある——十二世紀のヸィユハルドウアン(Villehardouin "Conquete de Constantinople"の著者)十三世紀のジョワンヸィエ(Joinville "Vie de St Louis"著者)十四世紀のフロワッサール(Froissart "Chronique"の著者)卽是。

二 十五世紀

五二七　**序說**　十五世紀はフランス文學史上、史家の評論ある時代だ。イタリアに起つた文藝復興は既に十分に浸潤してゐるから或史家は中古の最後だと云ひ他の人は近世の最初だと云ふ。或は又過渡時代とする人もある。何れも一分の眞理を含むだらうが、封建制度はフロワサールとユースターシユ・デシャム(Eustache Deschamps　十四世紀の詩人)と共に死滅したけれども、近世思想の起つたのはロンサール(Ronsard)とラブレー(Rabelais)(共に十六世紀の詩人)とが出てからである。而も十五世紀は文學上、普通の史家の言ふよりも重要なる時代だらう。十五世紀には深き印象を與ふる獨創的文學は何も無い、文學者から見ても眞の大家と稱すべき人は殆ど皆無だが、併し第二流以下の人は澤山在る。印刷術の發明は文學發展上多大の利益であるが、其弊として、新文學の創始より寧ろ古文學が復活せられた。而も戲曲其他の散文文學は此世紀に確固不拔の位置を得たのだ。

五二八　**詩**　ピザン(Christine de Pisan　一三六三—一四二〇)とシャルチエ(Alain Chartier　一三八六?—一四五八)の二人は博學宏識の詩人で又散文家である。二人の詩共に、餘りに道學臭ありて衒詩の弊ありと言はれる。併し當時は政治上社會上腐敗した時代であるから、是を救治する爲に道德を鼓吹し、又貧弱なる中世の科學、學問を豐富ならしめんと努むるは文學者の天職だらう、ドルレヤン(Charles d'Orleans　一三九一—一四六五)は武人である。併其詩は優雅纖麗特に得意とした循環句詩は機功精妙音樂を伴はずして而も樂音を聽かしめるの致があつたといふ。若夫れ、フランソワ・ヸィロン(François Villon　一四三一—一五〇〇?)に至つては文藝復興以前此の國第一の詩人で其の傑作は、『プチー・テスタマン』(Petit Testament)及『グラン・テスタマン』(Grand Testament)の二篇、一解八行、一行八綴字より成り、而して其間に抒情的バラアドとロンドウとを織込だ者であるが此バラアドがフランス古文學中無比の妙文字、而も全篇を通じて剛健悲壯の詩趣橫溢するといふ。扨他方諷刺好笑的の詩に就て一言すれば、此時代には諷刺が大に流行して、文學的價値の著しき作も少くなかつた。ヸィロンは此方面でも有力

なるはコキャール（Coquillart）で、生涯大部をライム市で過した。ライム市は當時ルイ王の爲に厭制抑壓を受けてゐたので彼は是を諷して『モノローグ・デュ・ヂャンダルム・カッセ』（Monologue du Gendarme Casse）『レ・ドロワヌーヴォ』（Des Droits Nouveaux）などを作つた。

五二九 戲曲 前にいつた所の神秘劇（Mystères）と奇蹟劇（Miracles）とは長く劇界を占領して、十六世紀の中頃迄幾分其領域を保つてゐたが、併十五世紀に最榮えたのは敎訓劇（Moralite）と狂言（Farce）とソティー（Sotie）との三種通俗劇である。但し是等亦彼ファブリオー（Fabliaux）及ジュー・パルチ（Jeuparti）の簡單なる物の發展せるに過ぎぬ。宗敎劇の演戲組合コンフレリイ・ド・ラ・パッション（Confrérie de la Passion）が其勅許を得たのは一四〇二年である。併コンフレリ自身は通俗劇の演者でも作者でもなかつた。是れはバゾーシュ（Bazoche パリ法衙の人）及アンファン・サン・スーシ（Enfans sans Souci 貴族の青年子弟）の領分で、敎訓劇は前者のソティーは後者の演じた物だ。併し敎訓劇は時に甚煩瑣だつたので狂言の生起と共に稍衰へた。

五三〇 散文 十五世紀は韻文より寧ろ散文の榮えた時代だ。但眞の散文大家としてはコミーヌ一人しか無い。印刷器の發明は詩を殺して古典を復活した（パリ大學にギリシア語の敎授ができたのは一四五八年）。散文の飜譯が盛んになつたのも此以前からである。前記ド・ピザンやシャルチエには多數の道德上の著書がある。併今世紀散文の主なる物は說敎及講演集である。是は前々世紀より引續いて、今世紀の初期にはゼルソン（Jean Gerson 一三六三―一四二九）あり後期にはメノー（Menot 一四五〇―一五一八）、ローラン（Raulin 一四四三―一五一四）がある。傳記及史蹟の記者亦今世紀に至つて增加した、ド・コミーヌ（Philippe de Comines 一四四五？―一五〇九）は其恰好の代表者、フランス中世の大史家、何人にも些の負ふ所なく全然獨創にして斬新なる史家である。一面又熱烈なる志士で、其著書はマキャヴェリ（Macchiavelli）の著書と幷べ稱せられる。而も彼は此イタリア政客の如く全然無道德の人ではなく、敬虔なる宗敎心を有てゐた光景事變の活敍家と云はんより性格の描寫家で、成心無く偏頗無く、史筆亦流暢堅實、よく作家の穩健なる常識と鋭利なる觀察とを寫すに適してゐた。併し當代の散文は獨り是等硬文學のみに限られてはゐない。十四世紀末以後、傳奇即騎士の敍事詩が復活されて、それが散文で綴られたが併し夫等は餘り文學上價値豐かではなかつた。文學上の價貴かつたのは稗史小話集で、就中著名なるは『百新物語集』（Cent Nouvelles Nouvelles）である。是れは皇太子ルイに奉仕する文臣の一團が作つたのだといふ、其材料は決して新しい物ではなく。彼のファブリオーを換骨脫胎したのである。新らしい點は是を散文の作物と爲して、其散文の典雅流暢且勁健の姿を得たとである。其作者の一人にして最主要なるはサル（Antoine de la Salle 一三九八―一四六一）といふフランス古文學中最獨創にして最多作せし人だと稱せられる。サルの著なりとせらるゝ此時代の傑作が他に三つある―“Petit Jehan de Saintré,” “L'Avocat Patelin” 及 “Les Quinze Joies du Mariage” 此中特に最後の『結婚の十五愉快』は嚴肅と嘲笑とを巧みに調和した諷刺的のものだ。而も此書は殘忍にして道義觀念を缺くとも難ぜられる。併し十五世紀には未だ人道、道德などいふとは強く感じられて居なかつた。百年戰爭の慘禍は人心を荒ましめ同時に凡百の惡事、不正事を不斷に爲さしめたのである。當時上位にある人即王侯貴族等は偏へに私利をのみ圖つて他を顧みず甚しく人民を輕侮してゐた。宗敎界亦混亂を極めて、單に一寺一僧のみならず全敎義全制度（寺院の）も信用地を拂てゐた文學の舊形式は時代の趣味を失つて而も自ら發展進歩すべき新形式は尙起て居らぬ。新科學萌芽し航海の道亦緒を得たとはいへ、是等の新勢力が十分に活動し威力を振ふの日は未だ前途遠い有樣であつた。

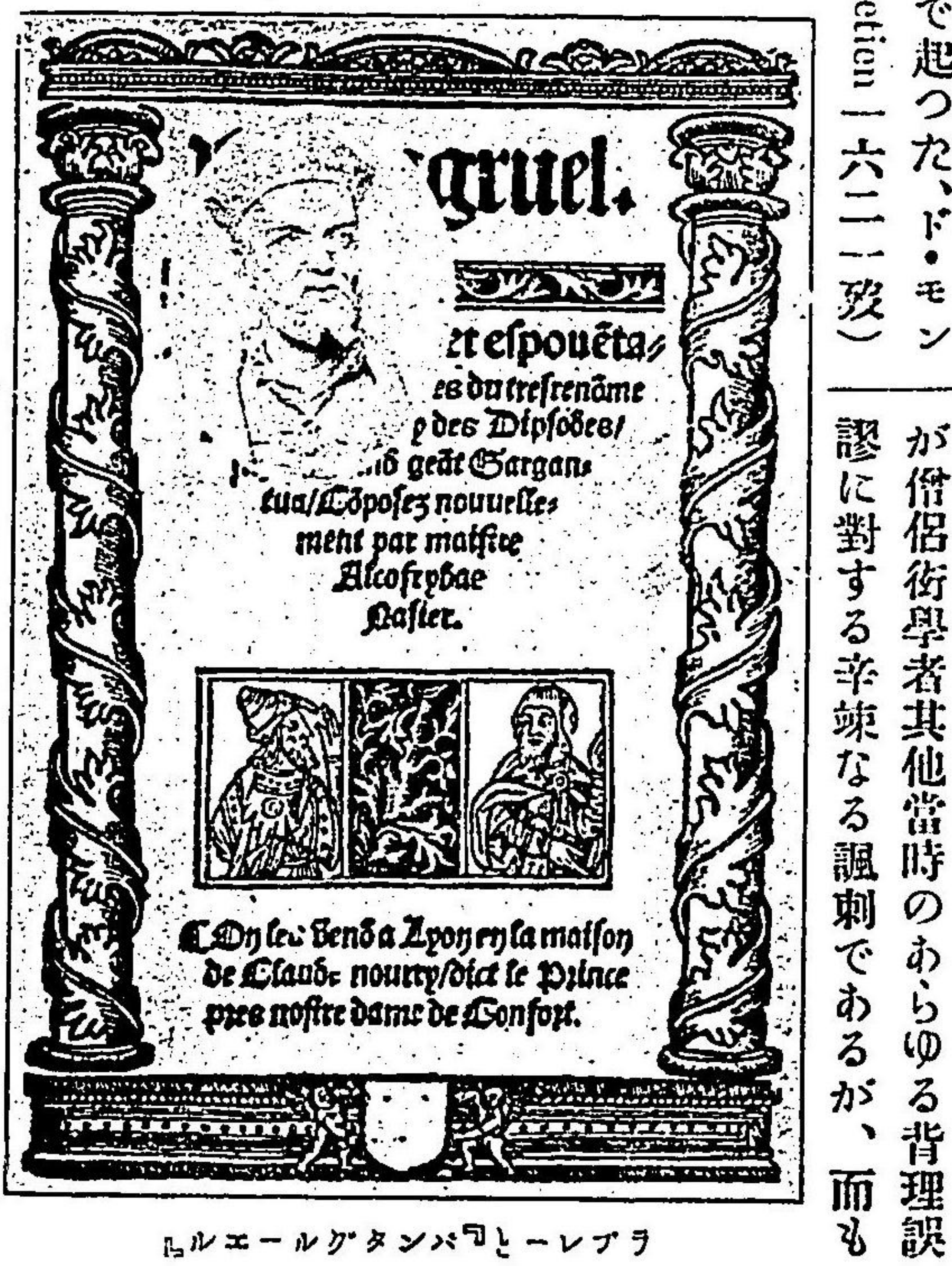
三 十六世紀

五三一 文藝復興 十五六世紀の間、全歐の文藝に大革命を與へた文藝復興に就て今更絮說するのは寧ろ贅だらう。文學上文藝復興の影響の最も顯著多樣であつたのはフランスだ。古典の研究と宗敎の運動とは文學上凡百の發展を惹起したのである。マロー、ロンサール、及レニエ以下多くの文學者は獨り想思の淸新雄健想像の典雅豐富、學問議論の堅實強固なりし耳ならず、又新文學の表現に適當なる國語文體を創造して著大なる貢獻を爲した。カルギン（Calvin）よりモンテーヌ（Montaigne）に至る散文家、マローよりレニエに及ぶ韻文家の一團は、其美麗、豐饒、婉曲、勁健なる點に於て、近世紀の何れにも讓らざる言語の創造に努力したのである。

五三二 詩 今世紀初の數年は萬事中世の形式を襲用して未だ新典型の組織に暇がなかつた。彼の『シャンソン・ド・ジエスト』や韻文のローマンス及ファブリオーなどは既に久しく其の跡を絕つてゐたがバゾーシュ（Bazoche）やコンフレリイ（Confrérie）は尙宗敎劇、敎訓劇、狂言を書き演じてゐた。新文學の第一聲を聞かせたのはクレマン、マロー（Clément Marot 一四九五？―一五四四）で、其眞價を認られたのは三十歲前後、爾後二十年間の生涯を通じて幾多の困扼事に逢着したがそれは彼が機智に富で、諷刺攻擊の作を出したからである。其詩體は輕妙精練、得意なりし悲歌、循環句詩、牧歌、バラード、エピッスル等は佛の文學、國語に多大の寄與を爲した。マローの摸倣者も續出した、併當時は新らしき物を創めんとの氣魄が盛んだつたので、一派の振はんとする以前既に他流の興り來る有樣であつた。ピエル・ド・ロンサール（Pierre de Ronsard 一五二一？―一五八五）は即其最なるもの、初め宮廷に附屬し又オルレアン侯に侍したが、後、文學界の人と成て短歌及十四行詩を作り又、ジョデール（Jodelle）ベロー（Bellau）デューブレー（Dubellay）等とプレヤード詩社を起てギリシア、ラテンの古典を研究し國語及韻律に重要なる變化を輸入した、其事業は利弊相半ばするが詩界革新の功は沒す可らざる者がある。プレヤード詩社の事業を嗣いだ詩人中有名なるはルイズ・ラーベ（Louise Labé 一五二六―一五六六）で、女史の悲歌及十四行詩は其感情の深さ當時の何人よりも勝つてゐて、中には沙翁の壘を摩せんとする物があるとすら言はれる。ドービニェー（D'Aubigné 一五五〇―一六三〇）亦十四行詩、短歌を作つたが、最有名なのは諷刺詩『レ・トラジィク』（Les Tragiques）で當時の腐敗、迫害、徒黨等を玷辱したものだ。此詩にはコルネイユ、ユゴー以外に發見し難き聲調の美、節奏の妙が在る。デボルテ（Desportes）亦當代有名のプレヤード派詩人だが、十六世紀掉尾の詩聖は其甥マチュラン・レニエ（Mathurin Regnier 一五七二―一六一三）である。靑年時代には放縱の生活を送つたが、後年諷刺に特技を示した材料は此間に收集されて熱烈の想、勁雄の筆、以て今世紀後半のフランス詩界無比の盛觀を恣にした。第二流以下の詩人を列記すればジュレー（St. Gelais,）

コレリー(Collerye)マニイ(Magny)タウーロー(Tahurau)ジャミン(Jamyn)ドラタイユ(Delataille)パッスラ(Passerat)等。

五三三　戯曲　十六世紀の戯曲は二方面から影響を受けてゐる。一はロンサール以下其詩社の人々の古典研究より他は隣邦即ち伊、西兩國の戯曲より(スペインは前世紀に於て戯曲殊に"Tragicomedy"が大に發達してゐた)。此のギリシア、ラテン古戯曲の飜譯とイタリア、スペインの戯曲とがフランスの藝苑に移されて、二種のフランス戯曲ができた。卽、上流の教養ある士女は古典劇に趣味を有し、普通人はスペイン種の物を好んでゐたのである。但、當紀の初期には矢張前紀より連續せる「コンフレリ」「バゾーシュ」「アンファン・サンスーシ」などの組合が、古劇を演じてゐた。此階級の著名なる作家はグランゴール(Grangore 一四七四—一五三四)で其作"Prince des Sots"及"Mystère de St. Louis"は名作だといふ。此種の作は前半期に澤山出たが彼の古典好のジョデール(Jodelle 一五三二—一五七三)出づるや、悲劇"Cleopatre"喜劇"Eugene"を出して形勢を一變させた併し悲劇で更に有名なのはガルニエ(Robert Garnier 一五四五—一六〇一)で、コルネーユやラシース等と同列に並ぶるゝ人である。傑作としてはネブカドネザアに囚られたゼルサレム人を材とした『セドシー』(Sedecie)又、"Bradamante"はフランスの悲喜劇中最初の名作である。ガルニエに續で起つた、ド・モンクレシアン(De Monchretien 一六二一歿)は現代を趣向に探る例を開いた人だ其傑作は蘇國皇后マリーを戯曲化した『レコッセーズ』(L'Ecossaise)を作つた。喜劇はイタリア生れのラリゼー(Pierre Larivey 一五四〇—一六一一)が最初の大家、其の作は大概イタリア物の飜案、併し非常に自由大膽な飜案で、殆ど創作と稱しても可い。


gruel.
et espouēta
es du tresrenōme
des Dipsodes/
geāt Gargantua/Cōposez nouuellement par maistre
Alcofrybas
Nasier.
On les vend a Lyon en la maison de Claude nourry/dict le Prince pres nostre dame de Confort.

ラブレーと『パンタグルエール』

五三四　小說傳奇—ラブレー　世界文學の一異彩として往々沙翁、ダンテと覇を爭ふ怪文豪フランソア・ラブレー(François Rabelais 一四九五—一五五三)は十六世紀の前半に屬する。一藥劑師の息としてシノンに生れ、九歳修道院に入てフランシス派の僧となつたが、過度の讀書勉強の結果、僧院生活に堪へざるに及んで、四十歳遁逃してモンペリエに行き、醫術を學んで暫くは醫を業とした。其文名を不朽に傳えた『ガルガンツア』(Gargantua)と『パンタグルーエル』(Pantagruel)とは此間に成つたのである。此二大奇書は彼が僧侶衒學者其他當時のあらゆる背理誤謬に對する辛辣なる諷刺であるが、而も外面暴戾酷烈なるに係はらず其奥底には慈仁の涙あり、吾人人類の間に眞理と正義を建てんの熱望を含んでゐる。其著作はフランス十六世紀の美、醜、向上心、欲性、宗教上の爭訌、學問に對する貪食慾、急消化其の他風俗習慣等の反射鏡である。如斯作家が無數の摸倣者を有したのは怪しむに足らぬ。而も摸倣は竟に摸倣に過ぎず、此の點に於て特記を値する

人は殆ど無い。併し十六世紀の小說家は獨りラブレーのみを模型には採らなかつた、彼等は又簡古雄勁なる『百新物語』の文體と『七聖傳』などにも感化を受けてゐる。此の兩者結合せる影響の下にはフェール(Noel du Fail 一五二〇—一五九一)の"Propos Rustiques"と"Contes D'Eutrapel"とがあつて、當時の思想、生活の活圖畫である。同時に傳記物が榮えてきた。夫れはエルベレー(Herberay)の"Amadis de Gaula"の飜譯(原作は四卷のスペイン小說)に因てゞある。原作に關しては記述する暇が無いが、フランス化した此『アマディス』も立派な文學書で、作家は佛散文壇の先蹤と仰ぐべき一人だ。此飜譯傳奇小說は非常に流行して多數の外國語に重譯せられた、十七世紀に於けるスキューデリ(Scudéry)やカルプルネエト(Calprenède)式の小說家にも善惡兩樣の影響を此傳奇は少なからず與へてゐる。

五三五　歷史　小說、傳奇と同じく當代の歷史亦前代よりの引續である。當代の史家が文藝上ジョアンヸル、フロアッサール、コミーヌ等と比肩し得るや否やは疑問であるが、併、十六世紀は史家の職を世界史と、逸事或は傳記の記者とに分別する例を示した。世界史に就ては特筆すべき値も未だ無かつたが、フランスが他邦に勝る傳記、傳記にも勝る書簡通信文學の基礎は今世紀に確定したのだ。併吾人は紙幅に制限せられて純文學の範圍外に在る歷史に關しては玆に殆ど何等の記述をも容されぬ。世界史家としてはド・セイッセル(Claude de Seyssel 一四五〇—一五二〇)デュ・エーラン(Du Haillan 一五三七—一六〇一)ラ・ポプリニエー(La Popelinière 一五八〇年頃在世)を、又傳記、書簡文學の史家としてはラ・マルク・デュ・ベレー(La Mark Du Bellay)マルゲリート・ダングレーム(Marguerite d'Angoulême)ラ・ツール・ドーヴルニュ(La Tour d'Auvergne)カルロワ(Vincent Carlois)ブラントーム(Brantôme)の名をあげるに止めて置く。神學家、道學者、政治論文記者なども今世紀に隨分あるが、併其多くはラテン文を以て書いてゐるし、フランス文で成つた書も純文學に緣遠いから著者と書名とをのみあげておく。神學者としては前半期にカルギン(John Calvin 一五〇九—一五六七)ありて『キリスト教の用法』を初め、ラテンで、後自らフランス文に飜譯した。後半期にはサレーのサン・フランソワ(St. François de Sales 一五六八—一六二二)の『信仰生活の道しるべ』がある。道德教育者にはモンテーニュ(Michel de Montaigne 一五三三—一五九二)の『論文集』あり、其後繼者にシャルロン(Pierre Charron)ありて其著は"De la Sagesse"政治論文の大なる物はボダン(Jean Bodin)の"République"にして、次でラ・ボエチー(Etienne de la Boétie)には"Discours de la Servitude Volontaire"がある。古典飜譯の學者としてデ・ペリエ(Des Periers)プラトンの對話篇リシスの譯ラ・ボエチー(La Boétie)のゼノホン及プルタークの譯デュヴェール(Du Vair)の"De Corona""Pro Milone"の譯ベーフ(Baïf)のプラウッス及テレンス戯曲の譯等。最後に科學者の著書としてド・セレー(Olivier de Serres)の"Théâtre L' Agriculture"は非常に流行した者で、現今でも讀者を維持してゐる。

四　十七世紀

五三六　序說　一五九八年ナンツの勅令發せられてアンリ四世の下に宗教の自由公許さるゝと共に世は初て靖寧に歸し、娯樂を愛する世俗は婦人の勢力を加へ閨秀文學會の開始を見るに至て玆に文學は頓に勃興の氣運に向た。十七世紀のフランスは常に文學の隆盛期と稱せられ

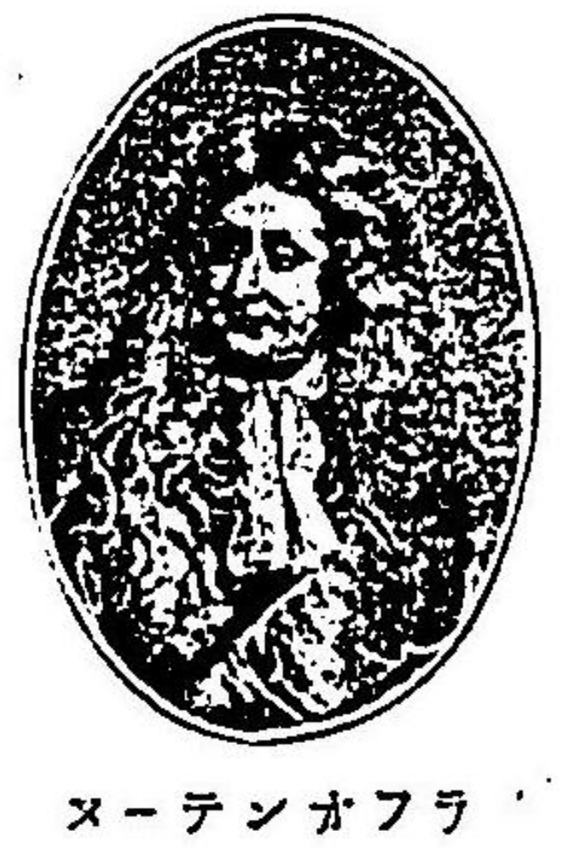
る。是れ殆ど疑ふ可らざる事實特に其後半期即ルイ朝の文學は紅紫爛漫、妍を競ひ芳を爭ふ。或意味に於て十八、十九世紀以上の文學全盛時代である。先、韻文界の改革者たるマレールブは其功散文壇の革進者たるバルザックに伯仲し、ラ・フォンテーヌの比喩譚（フェーブルス）はモリエールの喜劇と共に世界文學の双珍とすべく、ラシーヌ、コルネイユの悲劇、デカルト、パスカルの哲學、宗教はフランス全世紀に亙つて他に匹儔を見出さぬ。ラムブーイエ侯爵夫人（Marquise de Rambouillet）マドモワゼル・ド・スキューデリ（Mlle de Scudéry）は未だ珍とするに足らずとするも、其閨秀（サロン）會、文學倶樂部の文學上社會上の效益は拒まれぬ。さらばまづ詩界は如何。

五三七　詩　マレールブ（François de Malherbe　一五五五—一六二八）は其自畫自讃に拘はらず眞正の詩人ではない、言語韻律の改革家として僅に斯界を濶歩すと雖、ロンサールと并び得る抒情詩人ではない。尤も彼の目的も他に在つた。卽彼はイタリア、スペインの惡感化に囚はれたる當時の詩人を救ひ、ロンサールを摸して虚僞矯飾に流れたる詩風を改めんとしたのである。換言すれば幻想狂妄の詩國を征服して是を正確無錯の制約に從はしめんとしたのである。其手段として彼はラテン、イタリア、スペイン總ての外國語を驅逐して純正なるフランス語を拵えた。正字學文章學に於ける國語の使用を確定し、アレキサンドル詩格（Alexandrine Verse）と呼ぶ詩形を創造した。文學批評家として活動した。文士交遊會を開いてフランス翰林院（Académie français）の基礎を建てた——皆詩界廓淸の手段に過ぎぬ。努力空しからず二世紀間彼はフランス韻文を自己の鐵鎖に縛し得た。其詩は綺麗である。而も其綺麗は人形の綺麗で、血も肉も熱も無い、活きてゐない、死んでゐる。詩形の整然たる丈內容は貧弱だ。マレールブ彼自身の詩中最善（ベスト）の物は、夭逝した愛女を詠じた悲歌である。如何に詩形の綺麗なるかを見よ。

"Mais elle était du monde, où les plus
belles choses,
Ont le pire destin;
Et rose, elle a vécu ce que vivent les
roses:
L'espace d'un matin."

彼は一派を建てたとは言はれぬが、其後繼者としてはラカン（Racan　一五八九—一六七〇）メエナール（Maynard　一五八二—一六四六）等がある。前者は純詩人的の人で、自然に對する眞情は其戲曲的牧歌『牧童歌（ベールヂェリ）』に表はれてゐる。思ふに彼は何人よりも最よくアレキサンドル詩格の特長——平滑好調而も單調柔弱なる點を出してゐる。此特長はユゴー出て此平滑單調を排し、代ふるに強力、變化色彩明晰を以てしたまで續いた。併、十六世紀後半のレニエの力は此爲に全く亡されはしなかつた。ド・ヴィオー（Théophile de Viau　一五九〇—一六二六）は詩人としても個人としても十七世紀のレニエである。後年其信仰を棄て放肆なる生活を爲した此新敎徒（ユーゲノート）詩人は、追跡され幽囚せられ流竄されて壯年卅六歲で死だ。彼は當時最後の抒情詩人で又最初の新詩（ポート）代表者と呼ばれる。其作の短詩は自由にして音樂的、自然美の描寫色彩に富み且、文學上の批判は嶄新にして堅實であつた。併彼は詩に要する推敲彫琢を缺き、整正に反抗して自由を宣言しつゝマレールブの詩の爲に建設した位置より逆行してゐた。

五三八　サロン　吾人は詩界の記述と連關して玆に當時有名のサロン（Salon）に就て一言するを便とする。社會秩序の恢復と共に次に社會改良の希望が起つた。所謂サロンは此希望を滿たさん爲に起されたのである。其創設者はラムブイエ侯爵夫人で、次で澤山の閨秀會（サロン）、才媛倶樂部が出來たが、是等貴婦人の勢力は實に大したものであつた。マレールブ、ラカン、シャプラン、ヴォージュラ、バルザック、ヴォワチュール、サンテヴルモン、ラ・ロシュフコー等の詩人文士は皆此會に槐門貴族の淑姬縉紳と會合した。其結果文學趣味高まり從つて社會の蠻風野氣は消失せた。斯して是等の會合は初めの內は一般社會に文壇に善且大なる寄與を爲したが、年月を經るに從うて極端に馳せて才氣爛漫の弊は衒氣濫發となつた。文學は過巧糜麗となり風尙は婬縱驕奢となつた。此間に出來た詩の如何なる者かは略想像がつく。サン・タマン（St Amand　一五九四—一六六〇）は多く宴飲の歌を作つた。スカルロン（Scarron　一六一〇—一六〇）、サルラザン（Sarrasin　一六〇三—一五四）などは狂詩狂曲に變身を窶した。シヤプラン（Chapelain　一五九五—一六七四）の『處女（ラピュセール）』は嘲笑せられた。コタン（Cotin　一六〇四—八四）メナージュ（Menage　一六三〇—九二）はモリエールが嘲罵の的となつた。ヴォワチュール（Voiture　一五八九—一六四八）の作は閨秀會（サロン）精神の一面を現してゐるが、一六四九年に起つたユーラニスト（Uranistes）とジョベラン（Jobelins）との詩戰は兩派が首領としたヴォワチュールの十四行詩（ソネット）とバンセラード（Benserade　一六一二—九一）のそれとを互に辯護賞讃する評論であつて、兩派共に十四行詩、短嘲詩（エピグラム）を盛に製造したのである。



ラフォンテーヌ

五三九　ラフォンテーヌの諷喩詩　是等嘲笑的短詩を製造する事は長く流行した。十七世紀の最珍重すべきラ・フォンテーヌ（La Fontaine　一六二一—九五）の『比喩譚』（Fables）と『小話』（Contes）とは恐らく上述諷刺の短詩が導火線となつて世界文學稀有の文學的產物となつたのだらう。此の『比喩譚』の作家に就ては此紙幅中に記すべく餘りに偉大であるが而も一言せずしては止まれぬ。

彼は恐らく最多く、本國フランスに於て愛せられ、重んじられる人である、世の中には一種の文學者があつて、其人を十二分に好愛するには、先づ其國民に對して融合的同情を有たねばならぬ。斯の如き文學者の好例はラシーヌとラ・フォンテーヌで後代ではアルフレッド・ド・ミュッセ（Alfred de Musset）である。此れ等の人がフランス人の寵兒たる所以は、其のあらゆる意味に於てフランス的だからである。ラ・フォンテーヌの諷喩譚中の生物は全然フランス的で、慧敏にして機智に富む。其動物は動物をやめて人間になつた樣である。毛皮を被つた人間の男女である。併し此大詩人の胸中には純粹の詩情が流れてゐる。『槲（ルシエーヌ）と葦（エロソー）』などを一讀すれば此事は容易に認められる。要するに彼はモリエールを完成した。而して此二人は共力して他邦文學の有せざる或物をフランス文壇に貢獻したのである。

五四〇　近世戲曲の發達　十七世紀劇文學の大立者は無論コルネイユ、ラシーヌ、モリエールの三人、其中でも最大切で最趣味あるはモリエールである。フランスの悲劇は國民的天才の幸福なる產物ではない。フランスの悲劇は一方ギリシアの悲劇に苦められ他方イギリスの悲劇に惱まされてゐる。コルネイユもラシーヌもソフォークレースや大沙翁と同席する譯には行かぬ。併モリエールは諷刺的喜劇といふ自家獨特の擅場に安座して競爭者を有たぬ。

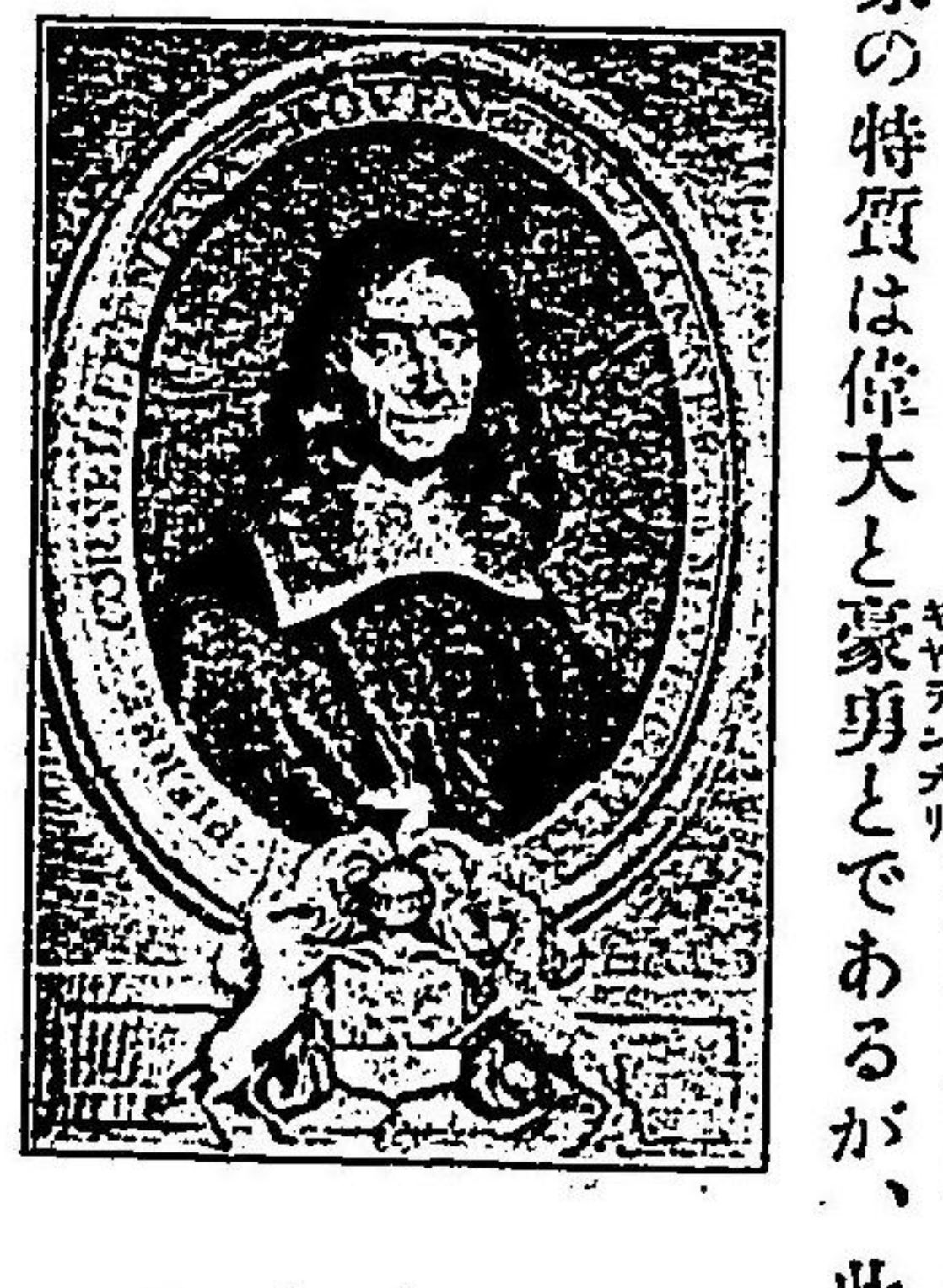
今世紀の初めには劇はまだ十分普通人士の趣味敎育の機關とはならず特殊の團

體にのみ限られてゐた。アルディ(Alexandre Hardy 一五六〇(?)—一六三一(?))が出て初めて社會一般の娛樂物となつた。彼は五六百種も劇を作たさうであるが殘存してゐるのは四十餘しかない。文學上の價値は殆ど無いが、社會公衆の趣味如何を察知する上から面白い。其作には所謂三一致が嚴守されてゐず、場所はローマからアゼンスの間を往來し、時間は二十年も引續いたのがある。劇的天才では無いがフランス劇の始祖とは稱せられるだらう。從來演說的抒情的だつた戯曲は彼の手から終に戯曲的となつた。

アルディとロトルーの間には文學的興味の點から見て大なる罅隙がある。ロトルーとコルネイユとの罅隙は更に大きい。ロトルーはフランスのマーローと呼ばれるが兩人の間には奇しき類似と奇しき差異とがある。ロトルー(Rotrou 一六〇九?—一六五〇)の二傑作『ワンセラス』(Vanceslus)及『サン・ジュネ』(St Genest)中の巧妙なる部分は慥に前代諸家の物より勝れてゐる殊に後者中の中心說話はフランス劇詩の何れに較べても遜色が無い。彼と時代を同じうして澤山の劇作家があるが、其多數は誤れるスペイン戯曲の病所を踏襲してゐる。シェランドル(Jean de Schélandre)は『チールとシドン』(Tyr et Sidon)の名戯曲を殘した。ド・ヴィオー(De Viau)は其『ピラームとチスベ』(Pyrame et Thisbé)と『パシフェー』(Pasiphae)とでガルニエ(Garnier)の古典主義とアルディの放肆狂妄の奇體な混合物を作つた。アルディは三一致を嚴守しなかつたと記したが、嚴守しないのではない、知らなかつたのだらう。三一致法則を最好く例示した劇はコルネイユの『シッド』(Cid)である。

五四一　コルネイユ

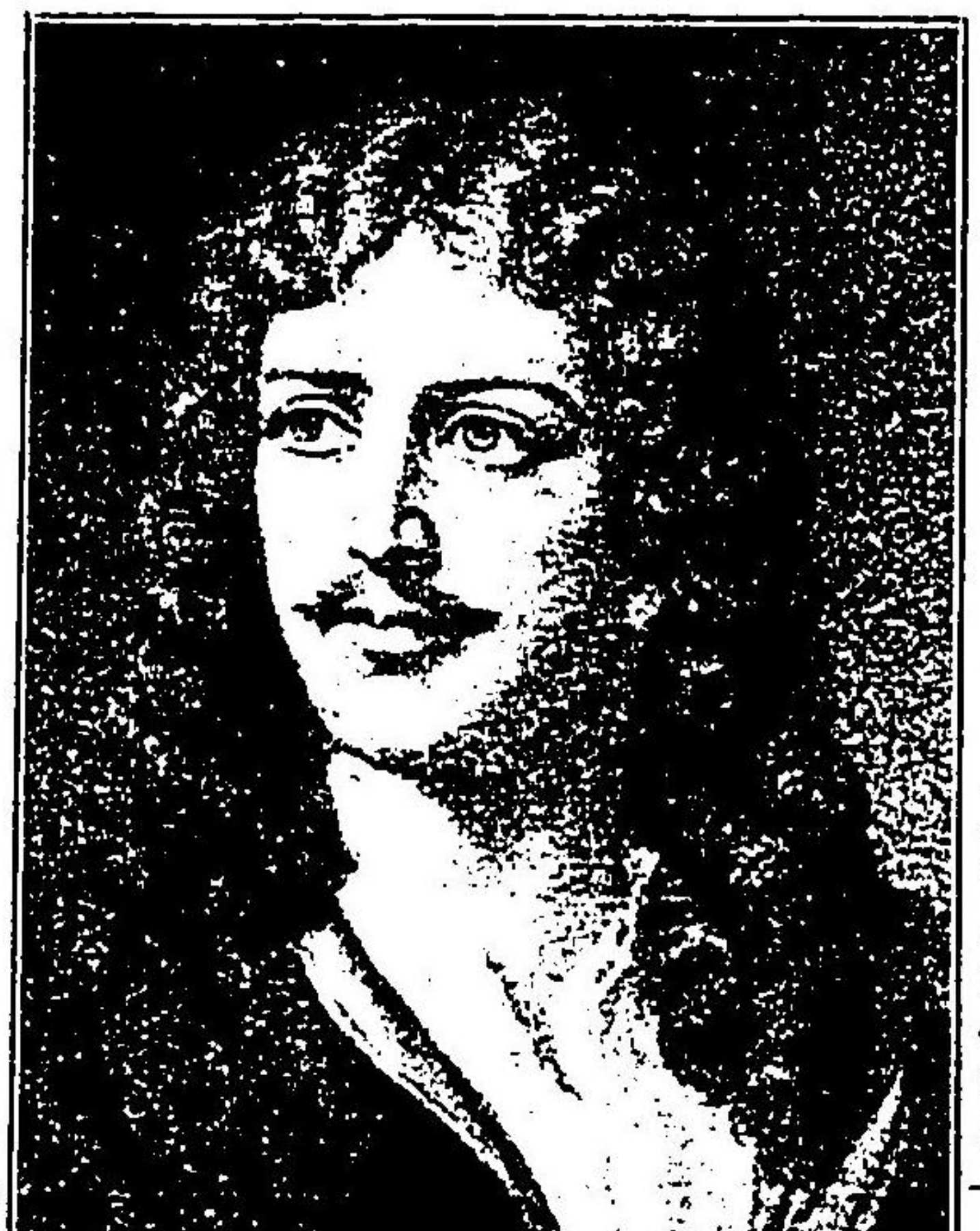
コルネイユ(Pierre Corneille 一六〇六—八四)の初期の作はロトルーも誰も僭し能はざる功績と共に又ロトルー以下總ての作家の過誤を有つてゐる、其廿三歲の處女作喜劇『メリイト』(Mélite)は青年時の放恣なる閱歷に暗示を得たもので、パリ劇場で歡迎された傑作『シッド』を出して劇界を振蘯したのは卅一歲の時、此戯曲の兩主人公は貴族の青年男女である。作家は其趣向を兩人の戀と孝との衝突に取つた。高潔なる感情に滿ちて筆致亦甚美しい。『シッド』劇は實に一時期を劃するもので、後年の『嘘言家』と共にフランス悲劇及喜劇の新代的と稱せらるゝ最初の模範戯曲である。『シッド』の後に『オラース』(Horace)『シンナ』(Cinna)『ポリュークト』(Polyeucte)等が續いて出た。總體で廿五ある(悲劇十八、悲喜劇一、歌劇三、英雄劇三)。此作家の特質は偉大と豪勇とであるが、此特質は後年頑强と硬直とに陷した。彼はフランス文學の發展上最重要の位置を占め特に前揭悲劇喜劇の二つに殘した例は久しからずして眞個に「喜劇界獨步の偉人」と、長く悲劇壇の重鎭となつた人とに繼がれたのである。



コルネイユ

五四二　モリエール

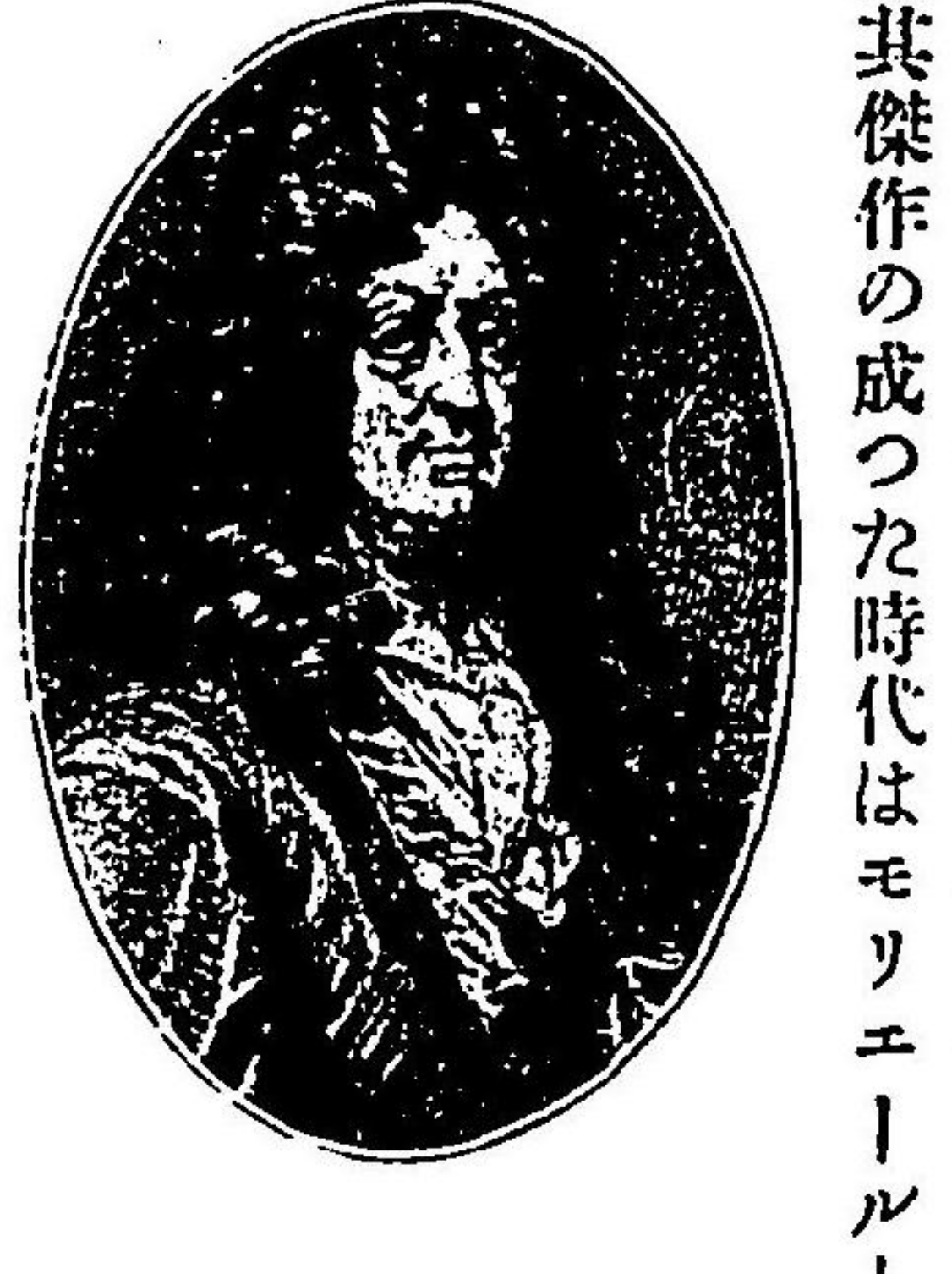
「喜劇界獨步の偉人」たるモリエール(Jean Baptiste Poquelin Molière 一六二二—七三)はベジャール(Bejart)一家の姊妹兄弟と合同して劇界に入つて、而して此姊妹兄弟とは『精神病患者』を舞臺の上で演じつゝ死ぬ迄離れなかつた。イタリア型の單なる滑稽狂言より始め而して此狂言より尙或點迄イタリア型の喜劇に過行きつゝ、彼が終に所謂『好喜劇』の語を贏ち得たのは『氣障式部』(一六五九)であつた。この時より以降十五年間彼は稀有の精力を以て世界の傑作廿有七篇を藝苑に提供したのである。モリエールの喜劇は其生涯と密接な關係を有てゐるが茲に其傳記を示し得ぬのは遺憾である。フランス悲劇の光りを曇らした時も彼には何等の影響をも與へなかつたフランス魂(?)は十二分に彼に因て活現せられた。其宗教及道德に對する態度は常にフランス市民の態度であつて、殊に僞善は決して假借しなかつた。彼は又此國戯曲家の總ての如く人性を具體化するよりは寧ろ善德惡德の類型を作る傾を有てゐた、タルチューフが僞善者の類型なる如く、アルバゴンは守錢奴の類型、アルセストは厭世家の類型である。是れ一人物中の一屬性をのみ餘り多く個人化せんとするより其結果却つて類型に陷るのであらう。劇中の某男は渾身僞善で、某女は渾身妖婦、或男は吝嗇の化身で或女は譎詐の權化である。併此缺點は獨り此作家のみではない、喜劇詩人の通弊である。否喜劇の性質上此誇張癖は殆ど必然的に隨伴するのだらう。若それ作家の機智縱橫、觀察鋭利、人格高尚なる等の點に就ては特に記すを要せぬ。今其傑作と年代を示す。(Les Précieuses Ridicules, 1659)『婦人學校』(L'Ecole des Femmes, 1662)“Le Tartuffe”(1664)“Don Juan”(1665)『厭人家』(Le Misanthrope, 1666)『守錢奴』(L'Avare, 1668)『俄紳士』(Le Bourgeois Gentilhomme, 1670)『女秀才』(Les Femmes Savantes, 1672)“Le Malade Imaginaire”(1673)



モリエール

五四三　ラシーヌ

コルネイユの喜劇的天才を受けた者をモリエールとすれば、其悲劇的方面を嗣だのはラシーヌで、而て其長所短所共にコルネイユに勝る。ラシーヌ(Jean Racine 一六三九—一六九九)の現存せる最初の作『ラ・テバイード』(La Thébaide)は一六六四年モリエール一座に因て舞臺に上せられたが、一六七七年劇界より退隱して、十二年後捲土重來(?)してからは『エステル』(Esther)及『アタリー』(Athalie)の二佳作あるのみ故其傑作の成つた時代はモリエールと略一致してゐる。彼の作劇通計十一、其傑作は『アンドロマック』(Andromaque, 1667)『ブリタニクス』(Britannicus, 1669)『ベレニース』(Bérénice, 1670)『ミトリダート』(Mithridate 1673)『イフィジェニー』(Iphigénie 1674)等。彼の戯曲の特色は眞卽人情の解釋と描寫との自然にして眞なる點に在る史的眞實や地方色は唯其宮廷の看客が眞らしと承認する丈の點に止めてゐる。彼は情緒の變轉動搖を女性の性格に研究したロクサーヌ(Roxane)フェードル(Phèdre)の戀、ベレニース、イフィジェニイ、モニーム(Bérénice, Iphigénie, Monime)等の複雜の愛又は母としての愛情、或女性的欲望、是等は詩人描出の主題である。併彼は過失なき戯曲家ではなかつた。人間性情の複雜性を無視した弊はモリエー



ラシーヌ

ルと同じである。是等フランス戲曲の短所弱點は(モリエール、コルネイユの作には明に現れてゐないが)ラシーヌ及其後繼者の中に歴々として見られる。而して此弊は例の三一致說及批評家ボワローを通してホレースに因て傳へられたる種々の制約に原因する。而して更に如上の理論法則を採用したのは翰林院の勢力に負ふ所甚多い。翰林院は一六三五年設立せられ文藝の進歩、社會の改良を目的としてマレールブの遺業を襲つたのである。

五四四　コルネイユ、モリエールの後繼者　以上三大戲曲詩人の直接間接の繼續者には悲劇作家としては特筆すべき人は無いが、喜劇の方面には尊重すべき作家が多少在る。翰林院に因て喜劇に課せられた制約は、悲劇の受けた迫害よりも少ない。トマス・コルネイユ(Thomas Corneille 一六二五―一七〇六)は到底阿兄の敵ではないが、而も第二流悲劇作家中では一頭地を抜いてゐる。『アリアーヌ』(Ariane)『エセックス伯爵』(Le Comte d'Essex)特に『チモクラート』(Timocrate 一六五六)は當代に稀有の歡迎を受けた。彼に次ではカムピストロン(Campistron 一六五六―一七三七)プラードン(Pradon 一六三二―九八)を記さねばならぬ。キノー(Quinault 一六三五―八八)には、喜劇も悲劇もあるが、最も傳ふべきは其輕妙なる歌劇で、ルリ(Lulli)の音樂と相俟つて當時稀有の物である。

喜劇方面ではブリュイエ(Brueys)パラプラー(Palaprat)ブルソー(Boursault)が有名で、殊に最後の者はモリエールには大痛棒を食はせられたが、亦一分の功蹟を殘した、併十七世紀後半の主要なる喜劇作家はレニャール(Regnard 一六五五―一七〇九)で、其『賭博者』『受産人』などはモリエールの衣鉢を傳えて殆ど第一流と稱すべき佳作であり、ヴォルテールにも讃辭を受けた。レニャールの出る以前モリエールの鍾愛してゐた少年俳優バーロン(Baron)は『幸運の人』といふ快濶なる喜劇を作した。

五四五　小說　フランス十七世紀の小說は劇壇の盛觀に及ばざると遠く、近代的意義の小說では唯一つド・ラファエット(de Lafayette)女史の『クレーヴの皇女』(Princesse de Cleve)がある耳である。但虛欺矯飾の戀愛小說や艶治武俠の傳奇小說等は多數にあつた。前者は翰林院の弊所と閨秀文學會の缺點とより成たもので、後者はスペイン文學の感化影響を受けたものだ。是等似而非小說の跋扈と、詩界の下らぬ紛擾と、フロンド戰後の惡思潮と及びルイ朝の全盛なる戲曲等の爲に眞の、強い、僞らぬ、生きた小說は興り得なかつたのだらう。今紀前半の傳奇物は過去の文學的遺物を復興したるものである、騎士小說古代の戲曲、散文の傳記記錄とファブリオー(Fabliaux)及プロヴンス派の詩等は悉く盛んに復活せられた。尙古派の人古物愛翫家には是等スペイン系のアマディス式小說が歡迎されたが、併他方又浮華輕佻眞摯の氣の擲すべきなき小說が懦弱半開の社會に流行したのである。ゴムベルヴィエ(Gomberville 一六〇〇―四七)のポレザンドル(Polexandre)カルプレネード(La Calprénède 一六一〇―六三)の“Cléopatre”やドモワゼル・ド・スキューデリ(Mdlle de Scudéry 一六〇七―一七〇一)の“Clélie”“Artamène”等は即此種の重なるもの。是等の小說は皆何れも長篇である。スペイン系のアマディス式小說も長い併アマディス式の長いのは事件の錯綜せる爲で、クレリー式の長いのは似而非戀愛論、逼狹窮窟の道話及び煩瑣冗漫の敍述の爲である。クレリー系の小說は又英のユーフューズ(Euphues)式である。ジョン・リリのユーフュイズムがエリザベス朝の宮中語の反影であつた如く、十七世紀フランスのプレシューイズムはサロン、オテルの理想的言文であつた。併彼等才媛には理想的であつたが、一般人士には滑稽笑ふべきものであつた。反動の起るのは怪しむに足らぬ。反動の第一者は小說界ではヴィユディユー夫人(Madame de Villedieu 一八三一―八三)で、流暢平易なる小說家、長く人氣を保ち得なかつたが一時は大に迎えられた。(劇界には『氣障式部』がある)其他サン・タマン(St. Amand)・デマレー(Desmarets)等も或は小說或は戲曲を以て才媛連に當つた。

スペイン文學の感化から出來た小說が今一つある。スペインの感化とは(前述のとは異り)十六七世紀間其國で盛んに出版されたピカルーンローマンス(Picaroon Romance)に負ふ所ある小說を謂ふので其の最著名なるは奇狂の文士スカルロン(Scarron 一六一〇―六〇)の『ロマンコミック』(Roman Comique)といふ田舍役者の旅巡りを記述したものでフュレチェール(Furetière)の『ロマン・ブルジョワ』(Roman Bourgeois)はパリ中流社會の活圖畫たると共に觀察は精緻、描寫は巧妙である。是等諧謔小說とは少しく方面を異にして、且モリエールと因緣淺からざる點で、シラノ・ド・ベルヂュラック(Cyrano de Bergerac 一六二〇―五五)を逸してはならぬ。彼は悲劇、喜劇、政論、文藝批評を書いた外に半傳奇的半諷刺的の『太陽及月球界旅行記』がある。『ガリワー旅行記』及びラブレーの傑作と同架に列せらるべき種類の物だ。多少記述を價する小說家は先づこんなものだ。

併し縱令こんなものは逸しても吾人はラファエット夫人(Madame de Lafayette 一六三四―九三)に就て是非數言を費さねばならぬ。夫人は近代小說に先鞭を着けたとは言ひ難きも其傑作『クレーヴの皇女』(La Princesse de Clèves 一六七八)は前記諸人の小說とは全然異る色彩、感情を有して新らしき匂ひある作である。皇女は其良人に酷愛され又良人を尊敬してゐるが併し如何しても其愛に酬ふに我愛を以てすることが出來ぬ。其うち某公爵の誘惑に會ふこととなつた。女よ、汝の名は弱きもの、皇女は遂に此公爵と不義に陷る。而も此爲に胸中の苦悶抑ふ可らず、罪を懺悔して良人に保護を求む、悲むべき避け難き變化が夫妻の間に湧く。欺かれたものと信じて良人は熱病に冒されて死去する。公爵は再び皇女に迫つて愛を獲んとす、皇女是を排け尼寺に這入て罪障消滅を圖る。此小說の美と悲壯とは二世紀後の今日尙少しも失はれぬ。是は女作家が自家胸中の戀の苦悶を描いたものかも知れぬ。某公爵とは實は作家が十五年間親善の仲だつた。ロシュフューコー公爵(Duc de Rochefoucault)だらう。夫人の結婚生涯が不幸なるものであつたといふ證據は何もない。又其良人なりし人の惡聲も傳つてゐないが、併少くも良人は只消極的に善良だつたのだらう。夫人は良人を厭はぬ乍ら進んで愛を捧げることを爲し得なかつたのだらう。扨此小說は嫻雅であつて。力の作では無いから大傑作とは稱し難きも少くも此國今世紀中の佳作とは言はれよう。少くも新方面の開拓者として歷史的價値は拒まれぬ。

五四六　散文　ラファエット夫人を除いて小說界に散文の特記すべき物は無いが併單に散文としては決して貧弱ではなかつた。否雄健瑰麗の散文が出來て後代に誇り前代を凌ぐに至たのは實に此十七世紀である。散文界のマレールブはバルザック(Guez de Balzac 一五九四―一六五四)である。十六世紀の文士は散文の言語を造つたが併散文の文體は創めなかつた。又十六世紀の散文は天才者の手に懸れば名文章を爲したが、天才ならぬ平凡人の手に取扱はれると瑕玼百出到底讀む

に堪へなかつた。是れ一個一個の綺語麗語は在ても一團の文體として模範が無かつたからである。然るに今は形勢一變して茲に一個堅實にして實用に適する散文文體が創められた。此必要なる散文の創造者はバルザックで、是頗て彼の偉功である。彼の著述は文藝、社會、人物の評論を集めた書簡集で左程重要なる物ではなく又彼は深遠なる思想家でもないが、散文の發明家としては逸し難き人である。ヴォルテール亦不知不識バルザックを扶けて自らフランス散文に少なからぬ貢献を爲したのである。

五四七　歴史　十七世紀の歴史文學は日記隨筆等が重なる物で、純粹の歴史は餘り大發展を爲さなかつた。前半に於るメヅレー(Mézeray)後半に於るフリューリ(Fleury)は未だ以て大家と稱するに足らぬ中頃ではレッツ(Retz)の『フィエスク伯の陰謀』(Conjurations du Comte de Fiesque)サルラザン(Sarrassin)の『ワルスタインの謀叛』(Conspiration de Walstein,)サン・レアル(St Real)の『ヱニスに對するスペインの陰謀』(Conjuration des Espagnols contre Venice)が、散文を歴史に用ひて成功したが例とするに足る。

併歴史よりも文學上の値多く從つて茲に記述の要あるは日記隨筆類である。リシューリェー(Richelieu)の文藝に對する態度は隨筆作家に幸多き物ではなかつたが併レオー(Tallemand des Réaux)の『史談』(Historiettes)は間々誹毀的の記事を含むとは言へアンリ四世からルイ十四世に至る間の逸事集でギイ・パータン(Guy Patin 一六〇二—七六)の『書翰集』(Lettres)と共に一種當時の變體史である。ルイ王朝の初めフロンド戰爭時代にはレッツが此方面でも有名なる者で、コーマルタン夫人の命に因て書いた"Mémoires"は文學者としてサン・シモン(Saint Simon)に次ぐ位置を與えたのである。前記のロシュフコー公爵の"Mémoires"亦此種の中で尊重すべき者其研究的冷靜なる態度でレッツの流麗絢爛なる筆華と好對稱を爲す。閨秀の隨筆文學家中著名の者はモンパンシエ(Mlle de Montpensier)モットヴィユ(Mme de Motteville)セギィニエ(Mme de Sévigné)など、後半紀にも澤山あるが其質に於て少しく劣る。併しラファエット夫人、マントノン夫人(Mme de Maintenon)及びドルレヤン公爵夫人(Duchesse d'Orléans)は侮る可らざる人だ、實際十七世紀程日記、書簡、隨筆の量に富み質に豐かなる時代は無い。是等は史家の職ではなくて修養あり餘暇あり又觀察の機會を有せる男女の天職となつた。是等の多くは高貴上流の婦人である。斯の如くして才媛閨秀は其國語を驅使して文界に優秀なる一席を占め以て閨秀會才媛會、婦人閨の趣味と傾向とを辯明したのである。一人一人に就て細敍は容されぬがセギニエ夫人(Sevigne 一六二六—九六)に就て一言すれば夫人はパリに生れて幼うして兩親を失ひ、叔父の膝下にラテン・イタリア及佛文學を學び、十八歳放恣の夫セギニエ公爵に嫁したが廿五歳にして寡婦となつた。容貌の姸麗は夥多の求婚者を呼びしも皆耳を閉して聽かず、只管男女二愛兒の養育に心を注ぎつゝ又廣く文藝の社會と交遊した、其文學者としての功績は其プロヴンスに在る愛女に送つた書簡で能く慈母の愛情を現はせる傍、又能くパリの上流社會を描いてゐる。

五四八　哲學　從來哲學の著述は大概ラテン語を用ひて俗語を使はなかつた。十六世紀には多少自國語の論理。倫理及び政治上の論文があつた、又其性質茫漠なるも澤山懷疑的思索が行はれて今世紀迄引續いた。ル・ヴィエ(Le Vayer 一五八八—一六七二)は懷疑派モンテーニュ及シャルロン(Charron)などの系統を引いた最後の代表者である。併十六世紀の哲學者は狹義の形而上學には手を觸れてゐない。反之、十七世紀はデカルト(René Descartes 一五九六—一六五〇)といふ散文の大家で同時にフランス最大の哲學者、何れの時代に於ても第一に數へらるゝ最大の形而上學者を出したのである。但彼以前にもフランスに形而上學的思索家が無かつたのではない。其の中の重要なる人はガッサンディ(Pierre Gassendi 一五九二—一六五五)で、近代化されたエピキュラスの快樂說を奉じてゐたが併し彼は多くラテンで其著を書いた。ガッサンディはデカルトの反對者ではあるが併哲學其物から見ても文章から見ても決して後者の敵とするに足らず從つて文學史上到底位置を爭ふとは出來ぬ。文體の點からデカルトはプラトンと拮抗するが併何等模すべき範文を有せず自家自ら其用語を造らざる可らざりし點では何人よりも秀逸な文章を書いたと言へる。"Discours de la Méthode"は獨り時代を劃するの哲學書なるのみならず、文體としても亦時代を劃するものである。彼の文學に與えた感化は哲學に與えた感化と匹敵する。其明晰にして瑕疵なき文章は之を其哲學の後繼者が採つた耳ならず、又パスカル(Pascal)及ポールロイヤル派(Port Royal)の人すら用ゐた。彼が哲學の天才は密に其平易簡勁なる文體と結合してゐる。而も一方に於て其文體はベーコン、ホッブス、ロックと全然異る特質を有す。扨彼の哲學其ものは茲に記述せぬが、有名なる"Cogito, ergo sum"(予は考ふ、故に予は存在す)は、人格高雅にして而も智力偏狹なる當時代の提言で、此「考える我」の存在から彼は全哲學系統を推斷したのである。彼の哲學の著述は前記の書と"Meditation"との二。哲學及文學の彼の後繼者はマルブランシュ(Malebranche 一六三八—一七一五)其著"Recherche de la Verite"は思想の精緻連續せる點と文體の優雅趣味ある點とで廣く讀まれ、論文家としての位置は前者に讓らぬ。併哲學はフランスでは餘り榮えなかつた、餘りに多く神學宗敎等の點と密接してゐるからであるデカルト彼自らが先づ嫌疑を招き、迫害を受てオランダ及スヱデンに流竄せしめられた。ネザランドに流寓したフランス哲學者の最顯著なる人はベイル(Pierre Bayle 一六四七—一七〇六)彼は文學的價値の上より見れば左程のこともないが、大文學的感化影響の廣大なることは實に大したものである。但、其文體は煩瑣粗雜で決して名文ではないが其著"Dictionnaire Historique et Critique"は十八世紀英國及び歐大陸の名家大家に非常なる影響を與へてゐる。特にフランスでは彼の思想が大革命の際國中を橫流した懷疑的哲學の源泉となつたのである。ベイルは一種宗敎的の狂熱を以て其全精力を此著作に傾倒したのであつた。

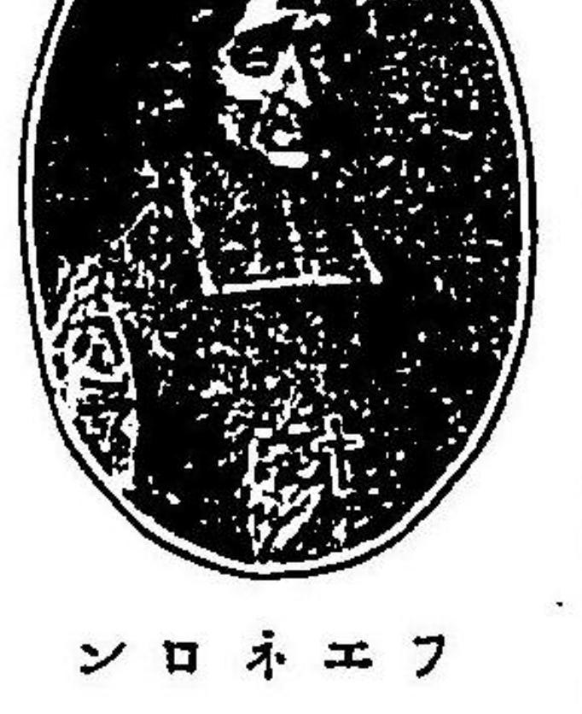
五四九　道德及宗敎—パスカル　十七世紀の宗敎思想は嚴格なる道德と發縁してポール・ロイヤルの士及び是に同情を有したる人々に因て發表されてゐる。所謂ポール・ロイヤル(Port Royal)とは當時流行の一種の團體であるが戀歌牧歌等の軟文學に盡したのではなく宗敎學問及び靑年の敎育等に熱心したジャンセニッス派の一團をいふ。彼等はサレー・サン・フランソワの導いた信仰の坦路を步み得なかつた。彼れ等は人と神との間に廣き深き滞渠の在ることを看たのである。

彼等と密接に關係して一人の天才がある。Lettres Provinciales 及 Pensées の著者パスカル即是。パスカル(Blaise Pascal 一六二三—六二)の宗敎思想は論諍家に大に尊重せらるゝが、夫は實は科學に對する崇高なる欲求心で。それが宗敎的精神と密着してゐるのである。(彼は數學

家で物理學者で哲學者である)。其名著“Provinciales”はジャンセニスト派の爲にジェシュート派を駁撃して致命傷を與へた者又其文學的價値は單に文體の雅趣ある耳ならず、厳粛なる議論に彼獨特の精練せられた冷靜なる反語を巧みに用ゐて辯難攻撃の一新體を創造した點に在る。“Provinciales”の主題は過去の物であるが『瞑想』は永久に興味を失はざる問題を論説してゐる。『瞑想』は優れたる容智の瞑想である、瞑想以上の或物である。苦み惱んで解脱し、解脱して慰安以上の或物を感得した心の熱烈なる詩的叫喚である。文章の妙亦前者に劣らぬ。センツベリ博士曰く、論爭に於る彼の大なる武器は彼自ら完成した文雅なる譏誚也。是を行るの巧みなる未だ彼以上の士なしと。扨ジャンセニストは終にジェシュートの爲に壓抑せられて了つたのであるが、尚此派には文學書を殘した人がある。其主なる者はアルノー(Arnault)の“Apologie de Catholiques”“L'art de Penser”ニコール(Nicole)の“Les Visionaires, Ler Imaginaires”等。ポール・ロイヤルの僧侶亦多數の文學的小著がある。

五五〇　ボシュエ　吾人一度此國今紀に於るカトリック教理に思ひを及ぼす時は先當時の敎壇の辯士が心頭に浮ぶ。其中の最大なるボシュエ(Bossuet 一六二七—一七〇四)は、讀まるべき書冊の著者としてよりは聽かるべき敎説の演者として一層秀でゝゐた。哲學者或は神學者といふよりも寧ろ辯説家であつた。説敎家であつた而して、又大辯論家であつた。是はフェネロン(Fenelon)との論諍で能く解る。ボシュエの“Discours sur l'Histoire Universelle”は神學、哲學、歴史及び文學の點から著名のものである、“Politique tirée des l'Ecriture Sainte”は神學的政治學から、“Meditation sur les Evangiles”及“Elevation sur les Mysteres”は神學から各著名である。併彼の主要なる著書は要するに『オレーゾン・フュネーブル』(Oraisons Funébres)であつて、此埋棺時の説敎ほど彼が畏敬の念と人生の光榮とを遺族の胸に感じさすものは無い。精力と神學上の常識とが彼の特質であつた。其著書は稍深さを缺き魔力に乏しかつたが而も最も健全のものである。

五五一　フェネロン　ボシュエが其殆どヘブライ的偉大と素樸とを以て其説敎と其著書とに因て名をあげた共に、ギリシア的プラトン的精神を結合せるキリスト敎理の更に特殊なる性質はフェネロン(Fénelon 一六五一—一七一五)に顯現せられた。


フエネロン

フェネロンは宗敎上に於ては『聖徒訓言解』(L'Explication des Maximes des Saints)を著はして、秘密敎(Quietism)に關してボシュエと大論戰を交へた。併し文學に於ても彼は神學、道德、政治の方面同樣著大である。其文章の巧妙なるとは名著“Télémaque”を見れば人も肯くだらう。彼は古文學の簡古遒勁なる文致を喜んでロンサールを激賞し、大膽に自説を述てマレルブ・バルザック、ボワロー等近代現代の文學者はフランス語を精選銑錬せると共に之を拘束し破壞したと罵つた。

フェネロンは內部から精神的生涯を解釋した。道德界の事實を社界上から研究し、解剖し、描寫したのはブリュイエールとサン・シモンとである。ブリュイエール(Bruyere 一六四五—九六)は平凡無奇の道德家であるが、併文字の肖像畫家卽性格の描寫家としては頗る稱すべき士である。吾人の所謂スタイリストと呼ぶ佛文壇最初の人だらう。其名著[illegible]

は一六八八年に出初めて九六年迄に九版迄出た。ラ・ロシュフコーの明察力無きも當代の傾向に就ては明快なる知解力を有てゐた。“Lettres Persanes”の著者“Gil Blas”の著者は皆其感興をラ・ブリュイエールから得たのである。

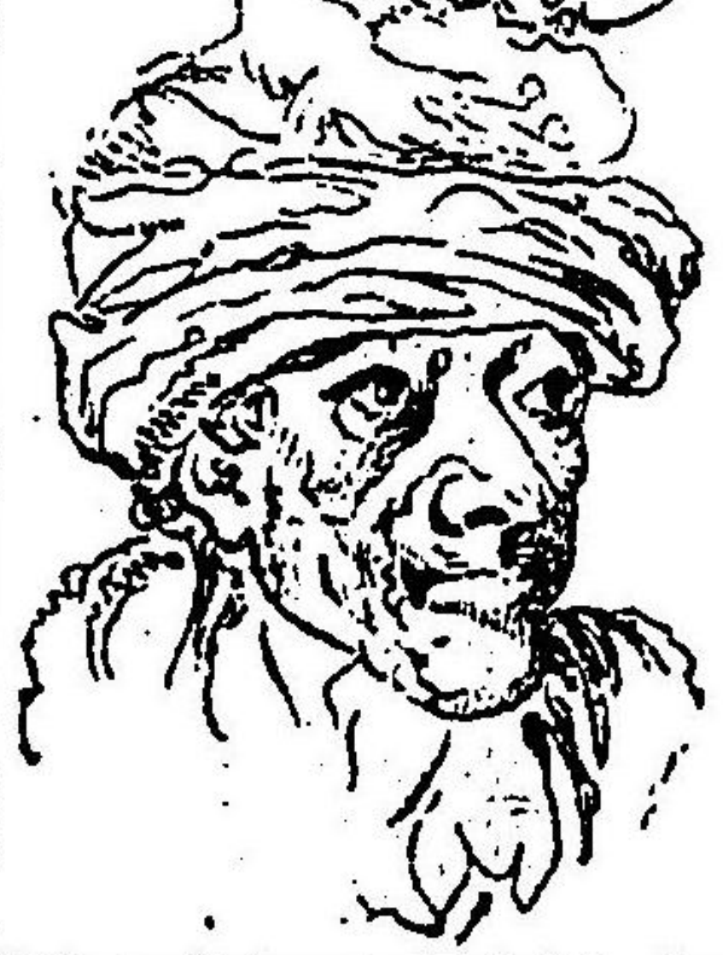
五五二　ボワロー　十七世紀後半の才人として吾人はボワローを簡敍して本章を終る。ボワロー(Boileau 一六三六—一七一一)の文學的生涯は三期に分れる自ら文藝上庸僞賤劣と思ふ物に對し惡戰苦闘せし破壞的奮闘時代(一)文學的正理派と稱すべき敎理を宣傳してフランス詩界を制定せし改造時代(二)宮廷附屬の史官となりて比較的安靜を得從つて稍衰退せしも文學に對する信條は圓熟穩健となりし時代(三)其作物は諷刺物十二、書簡十二、“L'Art Poétique”及“Le Lutrin”碑銘及短詩、散文古小説の評論等。而して一六七四年は文學敎學詩“L'Art Critique”及敍事詩“Lutrin”の第四歌迄を出せし年代として記憶すべき年だ。

かくの如くボワローは、多才多藝であつたが其最得意とする所は文學の諷刺的批判で、其『詩術』は彼の傑作である。此中に彼は不易にして私無き詩の軌範を説示した。又古人今人文藝優劣論に於ては彼はペルロー(Perrault 一六二八—一七〇三)に反對して古人に與した。ペルローは『妖精譚』の著者として有名である。

五　十八世紀

五五三　序説　十八世紀フランス文學の發展及其傾向を研めんとする者は先づフランス大革命を思念に上さなければならぬ。愈大革命の起生したのは、今紀の末年(一七八九)であるが、砲烟上り彈雨降る迄には長く〳〵社會、人心の動搖が行はれたのである。文學亦此大渦中に在て盛衰消長した。此一事先づ記憶を要する。

フランス十七世紀の後半卽ルイ王の治世は君權の時代である。個人性は全く認めざりし帝王權集中の時代である。從つて其時代の文學は君主的である。又古典的、基督敎的である。然るに十八世紀は面目を一變した擬古の精神は(其形式のみは多少保存しつゝ)失はれ、基督敎の權威は毀され、君權は壞されて了つた。理性が承認せられて批評時代が來た。國民の間に自由思想發生し、專制政治を厭忌し來つたのである。十八世紀に於て此變化を來し此傾向を生じたのは君權に對する反抗心と自治を欲する熱望との爲である。從つて十八世紀文學の內容は全く前代古典主義の者とは違ふ。十七世紀は大なる文藝の時代であつたが、十八世紀は思想、觀念の戰闘時代であつて、文藝は只其手段、其運搬品として用ひられたるに過ぎぬ。前代には戲曲と美文學とが美はしく華さいたが、今紀は(單に詩人ではなくして)政治家、哲學家、自由思想家が文學壇に活動した。政治論、批評法、科學、懷疑哲學が文學藝術を襲つてきた。外來の思想殊に英國の感化——自由思想家、政治論文家、科學者、小説家詩人などの英國の感化がイタリア、スペインの感化に代つた、哲學の世界は著しく社會的、世俗的となつた。サロンは復活されて新樣の浮靡矯飾が流行した。併時の進むに從ひ此サロンは文藝の研究會と言はんより哲學科學の對論場となつた。


ヴオルテール

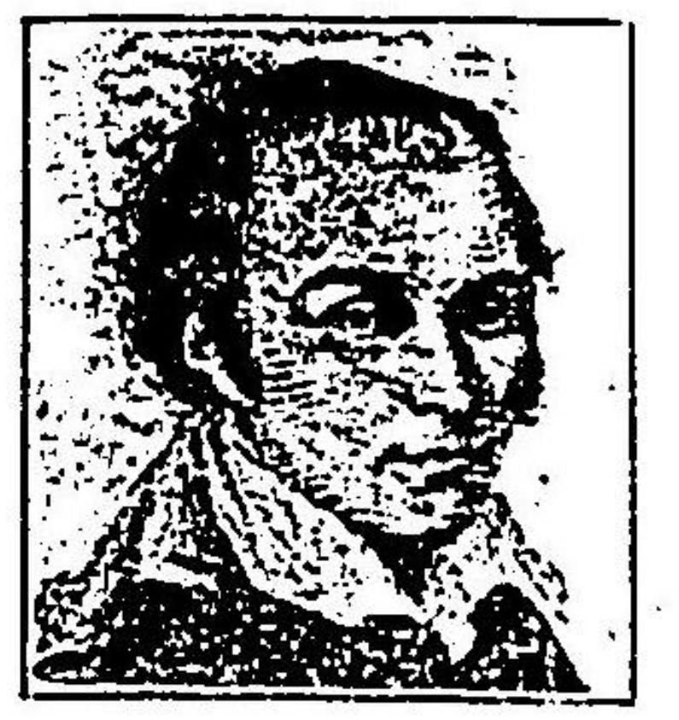
新聞業雜誌業は發展して其論評は直接社會と交渉してきた。破壞的批評の著述刊

行されて、道德改造の基礎を橫たへた。ヴォルテールの活動時代來つて、知力は古信仰を覆へした。ルッソー出で囚はれたる感情を放釋し新たに自然なる敎養に努めた。最後に政治的、社會的大革命が本世紀を總收した。

併ながら十八世紀の初葉はフランス文學の凋落時期である。ルイ大王の治世を飾つた文豪は皆既に久しく死滅して只ボワローとトマス・コルネーユ（Thomas Corneille）のみが當紀の數年を生存えてゐたのだ。ルイ王朝の晩年は政治上軍事上の累ありて社會の狀態、文學發展に幸ひなるものでなかつた。デカルト・コルネーユの鼓吹した文學、哲學に對する愉悅の念は消失して、而もヴォルテール及び百科全書の編纂家を鼓舞すべかりし一種の無神論的快樂主義及び科學、社會學に對する憧憬は未だ流布してゐない。フェネロン・マルブランシュは尙生存え、殊にマッション（Massillon）は今世紀の中頃迄在世してゐたが、併是等は要するに過去の人である。又ダゲッソー（D'Aguesseau）フォントネール（Fontenelle 一六五七—一七五七）サン・シモン等は十八世紀文學の開原者として著名の者ではあるが寧ろ是等は過渡期の士で、他の爲に新路を拓いたでもなく去り迚先人の後を追て驀進したのでもない。フォントネールはコルネイユの甥で百歲の長壽を保つた。此時代の代表的文學者で戲曲家、道德家、哲學者である。批評家、歷史家にして詩人又諷刺家であつた。『古人今人優劣論』では今人（モデル）に與してボワロー、ラシーヌと論戰した。文體平易にして野卑ならず、內容亦侮る可らざるものがあつた。

五五四　詩

十八世紀の詩界は前代の衰を受けて愈萎靡振はなくなつた。眞摯になり嚴肅になつた當代の人心は哲學的思索、宗敎、政府、社會觀察或は科學研究に占領せられて風流韻事を專らとする餘裕に乏しかつた。解剖、知力の發達は純空想を排けて詩を殺した。豪快活動の社會狀態は沈思詩想を要する詩的心狀と調和し難い。十八世紀初頭の名ある詩人はアベ・ショーリューク（Abé Chaulieue 一六三九—一七二〇）デュック・ド・ラ・ファール（Duc de la Fare 一六四四—一七一二）等だらう。此僧正と此侯爵とは常に屢同時に引用さるゝが、其作る所はマレールブ以後の抒情詩即ちモリエールに嘲笑せられた四句解詩（クワトレーン）及びピンダル風のオード（Pindaric Odes）であつた。ジャン・バプチスト・ルッソー（J. B. Rousseau 一六七〇—一七四一）の抒情詩は感情の熱誠も流露もなかつたが、併し其短諷詩（エピグラム）は頗る巧妙なるものであつた。ヴォルテールにも“Henriade”“La Pucelle”などの小敍事詩がある。十八世紀の英國崇拜熱は詩壇をも浸して、トムソンの『四季の歌（シーズンス）』は佛詩界に煩瑣なる敍述詩の例を與へたのである。其最初のものとしてランベール（St Lambert 一七一七—一八〇三）の『四季の歌（シーソン）』がある。同じきは題名のみで實質は痛く劣つてゐる。次でデリイユ（Delille 一七三八—一八一三）は此種の詩『庭園（レジャルダン）』を、ル・ミエール（Le Mierre 一七二三—九三）は『年曆（レファスト）』を、ルーシェ（Roucher 一七四五—九四）は『歲月（レモア）』を作つた。是等の敍述詩家は敍述さるゝ物なら何でも採用したのだ。デリイユは又『稼穡詩（ゲオルギクス）』を譯して、佛國現代の大詩人と稱せられた。彼と此稱號を爭つたのはル・ブラン（Le Brun 一七二九—一八〇七）といふジャン・バプチスト・ルッソー派の抒情詩家兼短歌（オード）作家である。シェニエに至る迄の記憶すべき詩人は、ジルベール（Gilbert）とグレッセー（Gresset）とフロリヤン（Florian）と位ゐなものだらう。アンドレー・シェニエ（Marie André Chenier 一七六二—九四）は疑ひもなく十八世家第一の大詩人である。因習の堅き鎖が有り且若うして斷頭機（ギロチーン）上の露と消えたので、當時の國語と作詩とを緊縛した忌むべき羈絏を全く斷ち切るとは爲し得なかつたが、而も今世紀の後半に起れる古典主義の復興に乘じて深くギリシア詩人を研鑽し、以て清新獨創の短詩（オード）、牧歌、悲歌（エレジイ）を、貧弱なる當時の詩壇に貢獻したのである。彼が在世中自ら出版したのは、“Jeu de Paume”及“Hymne aux Suisses”の二詩だけであるが、死後雜誌上に“Jeune Captine”と“Jeune Tarentine”とが現はれた。而して詩集の出たのは十九世紀の初めである。ローマンチックは彼の援助を以て生起したものではないが併し彼は其先驅者である。一八三〇年前後彼は先雅として多くの詩人に研究され摸倣された。彼は十八世紀フランス詩壇の爲に十六世紀中葉のロンサール等のプレイヤード（Pleiade）と同じ仕事をした、彼等よりも更に愼重の態度を以て且マレールブの事業の批評家として此仕事をしたのである。



シエニエ

五五五　戲曲

振はざると甚しい、殊に悲劇は寂寞を極めて十七世紀の二悲劇詩人に較ぶべき作家は一人もない。多藝能才のヴォルテールは此部門に於ても活動を示したが、稍見るに足るは“Zaïre”“Mérope”“Mahomet”及喜劇“Nanine”等に過ぎぬ。蓋し彼が古典的悲劇を新に恢復せんとした努力は、初は劇の爲に劇を愛して其後は自己の政見に貢せん爲の道具として劇を愛した人の努力であるから、是等とてもクレビヨン“Crébillon”一六七四—一七六二）の悲劇の純なるに如かず、クレビヨンは實にラシーヌ以後唯一の劇作家であつて、其作“Rhadamiste et Zenobie”は當時非常の好評を博したのである。ラシーヌ及びヴォルテールを模した者の中ラ・モット（La Motte 一六七二—一七三二）は稍成功の部で“Inés de Castro”の女主人公の爲には多數の看者が其不幸に泣いた。“La Grangechancell”はラシーヌの弊所をのみ重に模した。サヴラン（Saurin）とド・ベロイ（De Belloy）亦ヴォルテールの爲に同じ務めを演じたに過ぎぬ。

今世紀の後半にはルトルニュー（Letourneur）が出て大沙翁劇の飜譯を示したが、それに先だちデューシ（Jean Ducis 一七三七—一八一六）が『ハムレット』と『ロメオ・エンド・ジュリエット』とをフランス人に紹介した（一七六九）次で『リヤ王』『マクベス』『ジョン王』『オセロ』が出た（一七九二）併デューシは大沙翁を飜譯するには餘りに早くフランス劇壇に現はれたのだ。オフィリヤはクロヂャス王の娘となつて居り、女王は我手で自ら殺してゐる。デスデモナの手帕は其手箱中には藏せられず、ジュリエットの雲雀は聲を揚げて鳴かぬ。リヤ王は日出を見る爲に薔薇の花床に橫たはりつゝ舞臺の上で生れてゐる。デスデモナはオセロの妻でなく、イヤゴーも登場して來ぬ。要するに十八世紀のフランス悲劇は實に塋穴（シチー）の都（オツ、トウーム）である。

喜劇は然らず、悲劇の殆ど總てが外國產なりしに反して是れは生粹の國產物であつた。先づ今世紀の初葉ル・サージュ（Le Sage 一六六八—一七四七）は『財政家（チュルカレー）』を以てモリエール傑作以外の何れにも比肩し得たのである。實に十八世紀の風俗喜劇（コメディ、ド、ムール）中第一の傑作である。ダンクール（Dancourt 一六六一—一七二五）は“Chevalier à la Mode”及“Bourgeois à la Mode”で、デュフレニー（Dufresny 一六五五?—一七二四）は“Double Veuvage”でデトゥーシュ（Destouches 一六八〇—一七五五）は“Le Glorieux”で何れも多少の成功を博

した。ル・サージュの大膽辛辣な諷刺と好個の對稱を爲すはマリヴォー(Marivaux 一六八八—一七六三)の喜劇である。其喜劇は戀愛を主題とし女性を主役として、死に導くラシーヌの悲劇を結婚に終る喜劇に變轉したるものと稱せらる。纖細なる婦情を描に長じ想像亦華やかに豐かであつた。前述諸家がモリエールを摸倣したに反して彼は全然創意を以て一七三〇年より四十年に至る間に“Le Jeu de l'Amour et du Hazard”(『八重襷』は此飜案であらう)“Les Fausses Confidence,” “L'Heureux Stratagèmes, Legs” 等を作した。

所謂哀憐喜劇の生ずべき傾向は既に見えそめた。ピロン(Piron 一六八九—一七七三)は自ら知らずして此新戯曲の發生を助けたのである。“Les Fils Ingrats”(L'Ecole des Pères)は、不孝の子に對して餘りに寛大なる父親を材に取て看客を笑はしめんと仕組んだが、作家の狙ふ笑ひよりも涙を催さしむるものとなつた。外形技巧の稍放恣になると共に情緒的哀憐的分子が戯曲中に鮮明になつてきた。感性の働き鋭くなり、富と安逸の增すに從ひ「微小なる物」が重要視されてきた。從來勢力を壓抑せられてゐた中流社會が今や漸く頭を擡げてきた。皇帝と皇后、貴族と貴女のみが舞臺の上に巾をきかす理由は無い、日常一般の家庭に見ゆる喜び悲みな何故忘られて戯場に上らぬか。人間の「性」と「德」とが大切なものなら何故それを市民階級、中流社會の裡に索し出さぬか。人間は本來性善なるものである、人性は生れ乍らにして道義的傾向を有つ。それが若し四周の爲に惡或は痴に墮したとすれば、そは同情を以て、哀感を以て見るべきではないか。——斯くして喜劇は眞面目となり、悲劇は其高上りの風を捨て去るに至つたのである。悲劇の天才と喜劇の天才とは緣を組でそして哀憐喜劇(市民戯曲と稱する方が更に適切だ)は生れたのである。而して其創始の效を多くの人はディデロー(Diderot)に歸する併又市民戯曲の發明家はラ・ショッセエ(La Chaussée 一六九二—一七五四)であるといふ人もある。ラ・ショッセエの“Melanide”は、父と子とが戀の鞘當をして死せしと思ひし父の妻即ち子の母が其實存生であつたので、父は又其妻の愛情に歸り、子と和親するといふ筋だから、明かに中流社會の日常生活を戯曲化した者即市民戯曲である。然るにディデローが其新戯曲意見の實例として“Fils Naturel”(一七五七)“Père de Famille”(一七五八)を示したのはラ・ショッセエの歿後である。但し“Mélanide”の出た年月はディデローが新劇意見を公けにした年月と共に不明である。於是折衷說が出る、ディデローは新劇意見の提出者でラ・ショッセエは新劇作家の最初の人であらう。『百科全書』の編纂者(後章を見よ)は創作の才は殆ど皆無だつた(前記の二作は全然失敗の作だ)が、批評家としては有力なる人である。彼は悲劇と喜劇の中間に眞面目なる戯曲の占むべき一席を發見した。而して斯市民劇の形式は散文を最適當とすとはディデローの意見であつた。併作劇の才は後繼者のセダーヌ(Sédaine 一七一九—九七)が遙かに上位に在る。十八世紀の市民戯曲ではセダーヌの“Le Philosophe sans le savoir”が特に傑出してゐる。

併十八世紀掉尾の大喜劇詩人は無論ボーマルシェー(Beaumarchais 一七三二—九九)である。彼も其初年の作“Eugénie”“Les Deux Amis”等では市民戯曲の弊を受けて涙脆く傳奇的であつたが、幸ひに其悲愁的情緒より脱出して、十七世紀の快潤なる嬉笑と辛辣なる諷刺とを復活したのである。“Barbier de Seville”(一七七五)“Mariage de Figaro”(一七七八)の二作は「喜劇界獨歩」の偉人の巧に加ふるに更に政治的諷刺を以てした。——現制度を非難し、社會平等を叫び、貴族特權の不公平を罵り、判官の買收、廷臣の貪慾、政治家の譎詐を極力熱罵冷嘲したのである。「一七八四年『フィガロー』の上場せられし時は革命は既に實行せられつゝありしなり」とは那翁の言である。實際『フィガロー』の笑聲中には將に來らんとせる、フランス大革命の爆音が聞えてゐた『フィガロー』劇は革命の先驅者である、此劇の大成功は此「際物のため」とも言へる、而も其戯曲的文學的價値は今日尚依然として舊の如く、些の損減をも來さぬ。ボーマルシェは實にモリエールの比肩接踵する天才である。而して又後に說くルッソーの革命的精神の好代表者である。

五五六　小說　悲劇と迹ひ今紀の散文小說壇には大家があつた。併其多數は(他の文藝同樣)時代思潮に影響を蒙つてゐる、即ち小說は藝術として始つて一種の傳道(主義意見の傳達物)として終てゐる

紙幅に制せられて前には記述を省いたが、十六世紀には既に數頁位ゐの短篇小說が餘程發達してゐたのである。又種々の散文物語も騎士詩の散文化したもの。アマディス傳奇物、及ゴムベルヰーュラ・カルプルネード(Gomberville, La Calprenède)の奇怪なる說話となつて發達してゐた。是等傳奇物の狂詩、狂文、狂曲はラブレーよりスカルロンに至る人々に因て試みらるゝに及び終にラファエット夫人に至つて近代小說の曙光が現はれた(此ことは一言した)。十八世紀は“Princesse de Clève”の小說發展に忙がしかつたが、而も、事件を主として是に人情を加味した一種の傳奇物及び感情性格の解剖を旨とする側の小說なども見捨られはしなかつた。此方面での最初の大家はル・サージュ(Le Sage 一六六八—一七四七)である。彼は其傑作“Diable Boiteux”及“Gil Blas”に於て材料と構成とをスペインに求め以てド・ロジャ及スカルロンのピカルーン、ローマンスに嗣だ。併彼は英のフィールディングの如く事件の傳奇を深き注意を以て巧に性格小說と融和せしめつゝ而も其文體は佛文學中の古典とせらるゝ迄全然獨創的であつた。スペイン小說の飜譯“Le Bachelier de Salamanque”も有名なものである。

フランスで性格小說を創めたのはアベ・プレヴォ(Abbé Prévost 一六九七—一七六三)で、其第一の傑作は無論“Manon Lescaut”であるが、其他の“Mémoires d'un Homme de Qualité,” “Clèveland,” “Le Doyen de Killerine”なども戀愛を中心とせる悲劇的名著である。飜譯としては英のリチャードソンの小說が數種ある。其小說は多く冒險談の歌舞伎物語で英のラドクリッフ(Radcliffe)グレゴリ(Gregry)ルイズ(Lewis)等の傳奇物の如く其裡には恐怖、哀憐、血、涙などが溢れてゐる。併一度情感を寫すや決して空想上の遊戯に耽らず、汾湧せる胸奥の激しき情緒を直ちに紙に塗るの感を與へる。虛榮と戀とに苦惱せるマノンが其情人と抱いてアメリカの曠野に最後の息を引く一段の如き、吾人は作家の技巧を忘れて直ちに血と肉とに接觸するの思がある。

扨十八世紀の後半には哲學が小說、小話を侵し同時に哲學は感情に侵された、而して又此間に流れ込だのは一種の肉情である。故に小說も純なる小說ではなく一方に嚴しき哲學の聲を聞き他方に卑しき肉欲の香を交えてゐる。前記の小說と幷んで更に大に流行したのはヴォルテールが中心となつて開拓した十六世紀のコントの發達した小話で、當時の弱點、信仰哲學、滑稽に諷刺的に書き綴つたものである。ヴォルテールの物語風の小話は即ち是で、彼の痛快なる機智が其中に躍動してゐる。其弟子マルモンテル(Marmontel 一七二八—九九)の“Contes Moraux”は其

更に佳なる作だ。『モロー』は「嚴格なる道徳を愛らしきものとなし、激情の嵐を金絲鳥の歌で凪ぎさせた」と或評家は言つてゐる。

十八世紀小說の第三種は、十六世紀の滑稽小話の復興で英のスターンから影響を受けたものだ。ヴォルテールの"Homme aux Quarante Ecus"は此種に屬するが併最もよく其特色を現はすものはディデローの"Jacques le Fataliste"であつて、其中の一話"Histoire de Mme de la Pomray e"は薄情男に對する一人の婦人の復讐譚である。尚他の小話作家にはレスティフ(Restif) カザット(Cazatte)などがある。教訓小說として道話史談を語るものにはバルテルミィ(Barthélemy)に"Voyage du Jeune Anacharsis" フロリャン(Florian)に"Numa Pompilius"あり、マルモンテルに"Bélisaire"及び"Incas"がある。此種の小說と感情小說との間に恐らく挿まるのはサン・ピエル(Bernardin St Pierre 一七三七—一八一四)の『ポールとギルジニイ』(Paul et Virginie)と"Le Chaumiere Indienne"であらう。サンピエールはルッソーをシャトーブリヤンと十九世紀傳奇派とに結んだ蓬萊の住人、自然の心友である、自然と人間とを天才の靈筆を以て融合した小話"Voyage à l'Ile de France"を佛文學に寄與した人である。其傑作『自然の研究』中に『ポールとギルジニー』(Paul et Virginie)を加へたのは一七八八年のことである。是は熱帶地方を場所に採た牧歌の小說で、自然及感情の慈仁な感化を、文明社會及び知力の危險、害惡と對比せしめた教訓小說とも稱すべきもの。題名の男女兩兒は仲睦じく、『淨く、一點の汚塵をもとどめず相幷んで成育つたが、頓て二人は戀を知り初める。書中の道學的套語と色褪めた情操とは、初戀を語る優しき筆の跡を殺へども去迚匿す迄には至らぬ熱帶自然の風光と少年少女の初戀の描寫は稀に見る美くしきものである。ディデローの小說"Neveu de Rameau"も或意味に於て"Virginie"と同架に置かる〻だらう。其他の彼の作は言ふに足らぬ。

サン・ピエール

以上の外、此時代に二大小說家がある『マリアンヌ』(Marianne)の著者と『ジュリイ』(Julie)の著者卽ち是。マリヴォー(Marivaux 一六八八—一七六三)とルッソーとを幷べ上げるは聊か非倫の嫌ひあるが併此兩作家は少くも獨創的なる點と何派の影響をも受けざる點に於て幷び稱するに足る。マリヴォーは所謂"Marivaudage style"の創始家として又興味中心の無目的小說の創作家として永く記憶せらる〻彼の小說"Le Paysan Parvenu"も前記"Marianne"と共に未完物であるが兩方共、傳奇冒險譚を戀愛小說に改めた點に於て大なる勢力を有してゐた。併ジャン・ジャック・ルッソー(J. J. Rousseau 一七一二)は更に遙かに偉大なる作家である。其二傑作"La Nouvelle Héloïse"及"Emile"は、小說としては不完全であるが而かも是程諸方面に大影響大感化を及ぼした者は他に決してない。斯る影響感化は主として小說としての興味が人心を惹いたのであるが又或一種の教義を小說の形式を假りて發表した其教義に因るとも決して疑はれぬ。

ルッソー

"Nouvelle Héloïse"は家庭小說で其原型は英の『クラリッサ・ハーロー』だ。筋は極めて簡單—"St Preux"の、其教へ兒"Julie"に對する戀情は"Abelard"の"Eloïse"に對する戀情に似てゐる。ジュリーは父の言に從つて、ウォルマール(Wolmar)と結婚した。サンプリューは絕望して外國に漂遊する。ウォルマールは彼に友情と家庭とを捧げる。戀人同士は會つた。兩人は情の聲に聽かずしてジュリーは母としての愛に犧牲となつて死ぬ。死んだのは時宜を得たもの、「今一日生きてゐたら私は乾度罪に落ちたらう!」。家庭を改革するには先づ教育法から革めねばならぬ。作家の其理想的教育法を描いたのが"Emile"である。彼の教育の理想は自然である、人間には自然教育が大切であるといふのだ。此場合の自然の意味は決して原始的、半獸的自然の意ではない。彼之を卷中に說明して曰く、エミールを野蠻兒に育てあげて曠野の中へ突放すといふのではない、人工的の邪僻なる社會律に從はせられては不可自己の目で見自己の心で圖り、自分自身の理性の力で我と我身を導いて行く樣にならねばならぬのだ、自然と調和して教育せられねばならぬと。ルッソーには小說以外に澤山名著がある。年代順で前に漏れた者を記せば、"Discours sur les Sciences et les Arts" "Discours sur l'Inégalité"『民約論』(Contrat Social)及『懺悔錄』等。ルッソーの影響は既に一言したが實に多方面に渉つてゐた。彼は抽象的自然神教或は混亂せる實利主義の世に宗教の感情を恢復した。道義の改革を始めた、其の弟子ロベスピイルをしてフランスを抑壓せしめた、理性の領域より感情を解放し想像を放釋したフランスの散文に色彩と溫味とを恢復した。彼は又其親しき物、私人的の物、抒情的の物が凡て其權利を主張する文學を創作した。最後に彼は藝術の古典的理想的を殺へして『我』を以て是に代らしめたのである。

五五七　歷史　フランスにおける十八世紀思想界の歷史的研究は特に重要である。歷史哲學と稱せらる〻ものは此時から起つてゐる。其起原は通常のイタリアの哲學者ギコ(Vico 一六六八—一七四四)に歸せられるが、併其完全なる徵證はフランスの政治家チュルゴー(Turgot 一七二七—八一)に因て見られたと云ふべきだらう。併し乍らチュルゴー以前佛國には既に歷史家として二三の大家があつた就中モンテスキュー(Montesquieu 一六八九—一七五五)は其巨擘である。此大家の三大著は文學的價値豐かなる史籍なると同時に其性質に於て。政治書である。其處女作は"Lettres Persanes"(一七二一)で、ペルシアの二紳士が歐大陸觀光の通信文といふ體裁に書いてある。モンテスキューはルイ十四世の專制、教會宗門の暴虐に對する反動的精神及び宗教上の自由思想等を機智縱橫の筆を以て書き表はした。當時の歐洲社會殊に十八世紀フランスの道德政治の腐敗危險等を知るには最適當の書である。本書の成るに就て暗示を與へたのは『アラビア夜話』の飜譯とデュフレニィ(Dufresny)の"Amusement"とである。次の著『ローマの盛衰』(Grandeur et Decadence des Romains 一七三四)は其結構も性質も全く異る。彼は古代の世界を尊崇してギリシアラテンの史家及びローマ國民の道德と愛國心には最も深き感動を受けた。彼はローマの歷史に於て、一國興亡盛衰の原因を發見した。卽ちローマ帝國强盛の原因を私無き愛國心、自由を愛する性、軍隊規律の整齊、宗教の尊崇心などとし又衰亡の理由を領土の擴張無限の驕奢、虐主の續立、及び市民の是に

モンテスキュー

屈從したとなどに歸してゐる。文體華麗にして莊重、其史眼亦全く獨創、只其弊は微少なる事實を捉えて普遍の眞理に歸着せしめんとしたとであるといふ。第三の而して其全幅の精神を傾注した大著は『萬法精理』(Esprit des Lois 一七四八)である。此書の中に彼は政府の組織を寡頭政治及民主政治を含める共和政體と君主政體と專制政體とに分てゐる。著者理想の政體は勿論民主共和政治だが併實際に彼が民主共和政體と共に君主政體を選んだのは、英國政體の影響から來たものだらう。此著の失亦前書と同じく事實の蒐集不十分にして觀察淺薄なりと言はれるが、併此失を補つて餘りあるは法律政治を文學の材料として採り來つたことである。文致亦內容と叶つて前の『書簡』(Lettres)の如く輕からず『ローマの盛衰』の如く華かならず、而も崇高と機巧とは前者に勝つてゐる。所詮純文學の見地よりすれば彼の著書は不完全であるが、而も十八世紀の文學は文學者の文學でなく政治家、思想家、革命家の文學たるとを記憶せねばならぬ。

モンテスキューと前後して其周圍に科學的少くも系統的の歷史家がある。——デュボー(Dubos 一六七〇—一七四二)著書——"Histoire Critique de l'Etablissements de la Monarchie Francaise"ブーランギエール(Boulainvilliers 一六五八—一七二二)著書——"Histoire de Mahomet"マブリイ(Mably 一七〇九—一七八五)著書(Observation sur l'Histoire de la France)等は其主なる者。前に一言したチュルゴーは著書少なく其文體亦取立て稱するに足らぬが、併獨創の意見多く例の進步發展の意見を歷史の重要なる原則として承認したのもチュルゴーを以て嚆矢とする。チュルゴーに次で出たのはコンドルセー(Condorcet 一七四三—九四)である。彼は經濟學者と歷史家の所說を綜合して過去に於る人間進步の跡をたどり以て未來に於て人間の完全なるものと成り得べきとを"Esquisse du Progrès de l'Esprit Humain"中に豫言者的に公言した。

後半末期に近く哲學的歷史が多數出たが其目的は常に諷喩の覆面の下にフランス現政府を諷刺し攻擊するに在た。其中の主要なる者はディデロー以下哲學會々員の合作に成る『インド史』(Histoire des Indes)である。此哲學派と並んで他の前者の如く野心多からざる一派の歷史家團があつた。ヴェルトー(Vertot 一六五五—一七三五)は寧ろ十七世紀に屬すべき人であるが其名著"Histoire des Chevaliers de Malte"は"Revolutions Romaines"と共に今世紀になつてから書いたのである。彼は史界の美術家である、文學的歷史家である。同く此派のロラン(Rollin 一六六一—一七四一)も古史を綴て青年を敎へた。其原著や飜譯は長くヨーロッパの史學袖珍であつた。ヴォルテールの"Charles XII""Pierre le Grand"等の歷史的著作亦此階級に屬する。文學上の値のすぐれたとは一段である。併最も好く文學書としての代表著書はリュルリエール(Rullière 一七三五—九一)の"Révolution en Russien 1762"で袖珍史書の傑作だらう。

次には歷史ではないが歷史の材料たる當時の隨筆及書簡類に就て數言を費さねばならぬ。今世紀の初にはサン・シモンのルイ十四世及攝政時代の宮廷の活圖畫なる隨筆がある、隨見隨錄些の修飾なく、順序なく秩序なきも其峻酷暗陰の調子は最も他を驚かせる。政治、社會等の公けの物ではド・スタール(De Staal)ダルジャンソン(D'Argenson)デュクロー(Duclos)ウェーベ(Weber)ジュンリ夫人(Mme de Genlis)ベサンヴァル(Besenval)カムパン夫人(Mme Campan)等の日記、隨筆が有名である。文學及個人の私生涯を記した物ではデビネー夫人の隨筆及ヴォルテール及哲學會に關する無數の記錄が勝れてゐる。書簡でも全くの私信殆ど他には示すべからざる秘密の消息などに著しく文學上の價値ある物がある。エッセ女史(Mlle Aïssé 一六九三—一七三三)の書簡レピナッス女史(Mlle de Lespinasse)ジョッフラン夫人(Mme Geoffrin)の私書等は即ちその好標本だらう。又ローラン夫人(Mme Roland)は其政治熱と確信の充溢せる點で特色がある。ダランベール(D'Alembert)デファン夫人(Mme du Deffand)亦熱烈深刻。

其種類と其價値との點より玆に附記するのは失當の嫌ひがあるかも知れぬが、ルッソーの『懺悔錄』(Confessions)"Reveries"及"Promenades d'un Solitaire"等は今紀の文學史に逸す可らざる物である。是等殊に『懺悔錄』には單に眞摯なる熱情の流るゝ耳ならず又文學上先人未發の特色がある。特色の其一は個人性格の自然なる描寫——僞らず飾らず誇張せず隱蔽せず人間の神性と共に獸性をも、長所と共に弱點をもさながらに寫し出したとであるルッソー出づる迄は性格を取扱ふことは小說家戲曲作家等に限られて其の取扱ひ方も頗ぶる不公平であつた。其二は自然美に對する感情と之を精緻なる筆を以て敍述したとで是は全く『懺悔錄』に因つて初めて見られた嶄新な特色である。ルッソーの後を受けて熱帶地方の自然美を巧みに描いたのは、彼の『ポールとヸルシニィ』の作者ベルナルダン其人である。

五五八　哲學　十八世紀の特徵ともいふべき英國崇拜の最強く現はれてゐるのは哲學的思索の方面である。モンテスキュー、ヴォルテールが英國憲法及英國政治に對して理論的に是を推讚し以て是をフランスに輸入したる如く、又ヴォルテール、ディデロー其同人等はホッブス、ロック及びバークレーの哲學的思索ボーリングブローク、シャフツベリイ及びイギリス自然神敎家の神學的意見を、フランスに流行せしめ、維持したのである。デカルトは自國の大哲學者たり天才たり以て其哲學及び物理學は長く尊重せられたるも、今や他の更に冒險的進取的人士のために全く唾棄されて了つた。此時代ほど哲學といふ語が(思想の混淆及び目的の相違の爲め)廣く不定の意味を有するとはない。故に是を從來の通り形而上學の意味に用ゐれば今紀哲學は殆ど其稱號を値せぬ。彼等は多かれ少なかれ唯物論の黨類であるが而も彼等は純哲學的見地より唯物論を議して滿足しなかつたのである。彼等は常に物理的思量より之を推定して而して是を倫理及び神學の結論に適用せんと努めたのである。併又單に純哲學的議論を好んで嚴に此範圍內にあつた人も無いではなかつた。前者中最も有名なるはラ・メットリ(La Mettrei 一七〇九—一七五一)及びディデローである。ディデローは其初期の著"Lettres sur les Aveugles""Promenade d'un Sceptique""Pensées Philosophiques"などで、其哲學に親昵せるとを表はし、他方面同樣、哲學に於ても頗る博識を示してゐるが、而し其思索も文體も未製品にして圓熟渾成の觀が無い。ラ・メットリは醫者であつた。自らその熱病時の心身の容體を研究して、思索は吾人自體組織の一結果たるに過ぎずと結論した人間は動物よりは巧みに構成された器械である。總ての觀念は其起原を感覺に有す。道德は絕對的のものに非ずして社會と國家とに連關せるものである。神は如何——恐らく存在せるならん、而も吾人が其存在を他の物以上に崇拜する理由何處にか在る。人間の法律は幸福を求むるに至つて社會の法律は他の福祉に吾人の關涉せざるとに存す。斯の如き意見をラ・メットリは其"l'Homme Machine""l'Homme Plante"等で發表してゐる。彼はデカルト

の唯物論に反對しつゝ而も其動物は只器械のみといへる說ではロックよりデカルトに近かつた。

ロックから——變化（モデフアイ）したロックから進んだのは、コンディヤック（Condillac 一七一五—八〇）である。總て觀念は感覺なり變化（モデフアイ）したる感覺なり。人間の五官を賦與せられたる大理石像ありと想像せよ。如何に知解、識覺、記性、觀念、判斷、聯想、快樂、欲望等が發展せらるゝかを見るならん。我（エゴー）は經驗され、變化され而して又追想されたる感覺の把束に過ぎず、而も斯の如き『我』は是決して物質的分子の組織されたる物にあらずと諍ふが如しコンディヤックの敎義は感覺主義にして唯物說ではない。彼は此不完全なる感覺說を"Traité des Sensations""Essai sur l'Origine des Connaissances Humaines"等で述べた。其文章はデカルトやマレブランシュなどの美なしと雖も哲學の論述には恰好のもので、唯物說の諸主義の流布を助けたと少なくない。コンディヤックの學徒にして又醫家なるカバニ（Cabanis 一七五七—一八〇八）は、感覺其物の性質を研究して心理學の生理學的方法を發展せしめんと努めた。

五五九　神學　今紀の神學文學は其實殆ど全く非神學的であるから此項を設ける必要は無いかも知れぬ。前世紀に於て敎會が誇りとした有名なる神學者はマッション（Massillon）と共に今紀の後半期以前に死歿して了つた。其後を繼だ者は誰も無い。此時代ほど正敎の衰退したとは嘗て無い、敎會における文學の撰手は全くジュスート（Jesuits）及びフネロン（Fénelon）デフォンテーヌ（Desfontaine）等のゴロ付文學者である。ジェスートは學問もあり且つ立派な機關誌も有してゐたのであるが、併彼等は第一に常に此派に纏繞せる道學臭に汚されて居り第二、ジャンスニスト（Jansenists）及びプロテスタント（Protestants）を虐待したので評判が惡るかつた。正敎派側に於ては其人も其著書も更に尊重されぬ處へ他方、ペール・ノネット（Père Nonotte）及び其一派の人はヴォルテールの無慘なる嘲罵を受けて、一のギュエネ（Guénée）の外よく武器を提げて彼に對抗する者は無かつたのである。先是一の敵對精神が、單に敎會に對して耳ならず又基督敎及宗敎それ自身に對して生起しつゝあつた。宗敎改革はその自由神學的發展に因て、近世科學の興起は其唯物論的傾向を以て皆此非神學的運動を扶助したのである。ルイ十四世の治世に於てすら既にフランス宮廷には自由思想家の有力なる一派があつたが、ルイ王信仰の鎖りの切り離され、殊に英國自然神敎家の著書が此傾向を强むるに至つて愈其數を增加したのである。所謂ヴォルテールの嘲笑派は基督敎に對して直接に反抗したものか又牧師に對する亂戰であるか決定はできない。ヴォルテールが無神論者でなく又無神論を推讚しなかつたとは確かなる事實である。若し彼の必中に政略的改革的傾向が無かつたなら彼は其行動をボーリングブローク及シャフツベリイの思索的自然神敎（ディイズム）に制限したのであらうが、併事實として彼は更に一步を進めた。而して其"Dictionaire Poiolsophique"は（是れ當代及び次代の代表的文學である）信條、儀式及經典の諸特質を駁擊せる多數の項目より成立てゐる。文學上から見れば此書はヴォルテールの著書中最特色あるもである。其編述の秩序なく連絡なく而も輕快にして生氣ある文體を以て其博引旁證妄りに駁し徒に非するなど最も作家の躍動せるを見るが而も眞摯を缺きて駁擊の深刻ならざる亦作家の特色であらう。併其學徒及び他の青年思想家にヴォルテールと違つて明かに無神論者であつた。ディデローの無神論說には大に評議があ

るがダミラヸユ（Damiraville）ネージョン（Naigeon）ホルバッハ（Holbach）等に就ては疑ふの餘地が無い。無神論的、非基督敎的文學は是等の人に因て作られ廣げられた。其特色の最も明かなる著はホルバッハ（一部はディデロー）の"Système de la Nature"である。內容に就ては記述する必要が無い。此書の文學的效果は敎學方面に影響を及ぼしたとである。扨革命が愈々近づき、「哲學會」の勝利が宣言された時、一時一團の寸鐵作家（?）が起つた。是れは百年前にサン・ヴルモン（St Evermond）が得意とした方面の文學である。此一團中で有名なるは共和黨のシャムフォール（Chamfort）と王黨のリヴロル（Rivarol）とである。併し兩人共に完全なる一冊の書はない、此れがラ・ロシュフコーの如き道德家と差別ある點だ。併其寸鐵殺人的の文句は機智縱橫の點で先輩中の最も優なる者にも劣らぬ。

五六〇　**道德及政治**　道德家としてはエルヴェシュース（Helvétius 一七一五—七一）トマス（Thomas 一七三二—九五 及ヴォーヴナルグ（Vauvenargues 一七一五—四七）の三人を、政治家としてはチュルゴー、モンテスキュー等以外、ヴォーバン（Vauban 一六三三—一七〇七）ダゲッソー（d'Aguesseau 一六六八—一七五一）、デ・ブロッス（Des Brosses 一七〇六—七三）の三人を代表者としてあげる耳に止める。此兩者の間にルッソーを措ても可からう。彼の現社會制度に對する不滿足は、一方個人の道德を改變すると共に文明の罪惡及び腐敗を退けて簡易單純なる生活に歸らんとし、他方政治團體の組織に關する理法を發展せしめんと圖るに至つたのである。彼の所說意見は全然新奇のものではなかつたが敍述の適勁と形式の文學的なるより少からぬ效果を見た『民約論』は斯る意味から見て價値ある書物である。

五六一　**批評及雜誌文學**　批評は十八世紀に於て重要なる文學の一分科となつた。雜誌文學は益々有望となつてきた。既に十七世紀に於て"Journal des Savants"及び"Journal de Trévous"等の發行があつた。革命戰爭の始まる直ぐ前には、"Gazette de France"が出た。併今世紀の中で最も批評に寄與したのは"Feuilles de Grimm"といふ、數年間ディデロー、ルッソーの仲間がドイツ、ロシア、スキッツルの宮廷に寄送した文學美術及び社會に關する通報であらう。此通報にはディデローの秀逸なる文學批評が揭げられた耳ならず又彼の繪畫展覽會の報告や、繪畫批評法の基となつた論文やが含まれてゐる。翰林院（アカデミイ）の懸賞亦文學批評に對する有力の刺激となつた。但性質上斯の如き作物は精細なる研究物より寧ろ美文的の物に傾いてゐた。一般或は特殊の美術に關する著書も少なからず、例ばデュボス（Dubos）の"Réflexions critique sur la Poésie et la Peinture"ディデローの"Essai sur la Peinture"など、其の他ブーウール（Père Bouhours）ツルーブレ僧正（Abbé Trublet）テルラッソン僧正（Abbé Terrasson）等にも各其道の著がある。又古文學の評註書も眞面目なのが此時代に出た。此中ヴォルテールの『コルネーユ』の出版が最注意すべきものである。この世紀の初にはデュフレノイ（Lenglet Dufresnoy）とラ・モンノワイエ（La Monnoye）がラブレー、レニエ・ヴィヨン、マロー等を研究した。バルバザン（Barbazan 一六九六—一七七四）とル・グラン・ドッシイ（Le Grand d'Aussy 一七三七—一八〇〇）は、忘れられたといはんより未だ知られなかつた中古のファブリオーを蒐集して出版した。"Chansons de Gestes"すらカイユー（Comte de Caylus）とトレッソン（Comte de Tresson）の注意を惹いた。トレッソンは又其"Bibliothèque des Romans"